昭和六年二月十日印刷
昭和六年二月十五日發行
昭和十二年六月五日再版

不許複製

國譯一切經　經集部九

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　兩角製本所

索　　引

(頁數は通頁を表す)

—經集部九索引終—

者は、心縛所る。是の如くに法と非法と、應に作すべきと不とを知らざる丈夫は福德少なくして、涅槃を去ること大いに遠し。輕重と眞實とを知り、法を行ひて遺餘なく、法を悕ひ、法の果を悕ふ。是の如き者は樂みを得ん。心の爲に牽かる者は根の馬調はざるが故なり。若し足るを知ることに心牽かれば、勇しく第一の處に到らん。足るを知る繩は心を縛り、心の如くに境界も爾り、勇者は彼れを是の世間の智に住せしめ、天の無量に愛する處にて無量種の樂しみを得せしめん。若し欲に貪著せずんば則ち善き處に到らん。汝は善業を作し已りて、愛すべき境界を得、今夜摩の處を得たり。心に放逸に著すること勿れ。是の如く始めて生まれし天は、億の鉢頭摩の數の天衆、天女の衆と、自らの業にて果報を受く。業の果の繩は解き難く、心より化し出でて衆生を癡誑と爲し、此れに依りて轉行す。十二入の怨家は巧みに能く心を誑惑はし、生死の輪に置在き、世間に於て轉ぜしむ。過去・現・未來に天處の一切は退ぞくとも、天處の山は常爾なり。衆生は流轉して行ふ。毘瑠璃の山峰・園林等は愛すべくして、山等は常に動かざるも、諸天は輪て停まらず。園林は甚だ愛す可くして、地處も亦是の如くに恒爾に住して壞れざるも、諸天は轉じて停まらず。毘瑠璃を莖となし、眞金甚だ愛すべく、此の蓮華は常爾なるも、諸天は轉じて停まらず。河池は愛樂すべくして、多くの諸の鳥にて莊嚴り、常に是の如くに闕かざるも、諸天は轉じて停まらず。堂殿は常に異ならず、拘欄も亦是の如く常爾にして破壞せざるとも、諸天は轉じて停まらず。境界の爲に誑かされて、世間は是の如くに轉るとも、云何にして此處の天は心に厭離を生ぜざるや。

心に生死を行ひて、久しく習ひしを以ての故に堅くして、是の如くに大苦を受くるとも、而も、猶ほ覺知らず。屠兒の羊を縛りて、之れを欄の中に置きて、一一を取りて殺すとも、餘の者は怖れを生ぜざるが如し。

を生じ、彼の天主牟修樓陀の赤色の妙なる寶の優鉢羅の中に向ふに、多くの無量の諸の天女の衆と共にして、彼の諸の天女は歌舞し遊戲し、彼の夜摩地の五欲の功德を具して第一の境界の樂みを受く。牟修樓陀夜摩天王は赤優鉢羅の赤色の光明にて天主牟修樓陀大王の身を照曜すに、亦是の如く赤にして、猶し赤色の【一九】阿舒伽色の如くなるも、天王の身に有る所の赤色の十六分の中に於て其の一にも及ばず。是の如くに具さに無量種の樂しみを受く。爾の時、是くの如く始めて生まれし天子は復更に前に進みて、漸く天主牟修樓陀に近づき、合掌禮拜、低頭して未だ擧げず。牟修樓陀夜摩天王は卽ち偈を說いて言はく。

前に作せし善業にて三種の戒を修め持し、彼の業にて此の報を得て、今快樂を受く。放逸を行ふこと莫かれ。空しく彼の業を受け盡くさん。應に餘の善業をすべし。勤行みて放逸すること勿かれ。善業は則ち應に行ふべく、不善なる業は應に捨つべし。善き行なれば勝れし樂みを受け、不善なる行なれば苦みを受けん。若しは勤めて休息せずして、是の如くに善業を作さば、彼れ則ち常に樂みを受けて、後時に涅槃を得ん。若しは放逸なる行ひを行へば則ち善を轉じ行はずして、彼の善業盡くるが故に則ち地獄の中に到らん。若しは清淨なる業を行ひ、常に勤めて精進する者は則ち第一の處を得て、彼處に苦惱なからん。若しは根の爲に使はれ、復境界の爲に驅られては、一切の縛めに縛られて、常に生死に轉行せん。惡法に汚されざる者は、已に煉りし眞金の如くにて、彼れ曠野にあるを脫れて、一切の處に安隱なり。若し放逸を行ふ者は、此れ不利益の本にて、若し捨つれば吉となり、安樂にて衰惱なからん。汝今旣に始めて生まれ、樂しみを受け、事と相應し、是の如き心意を生ず。愼みて垢染に著すること勿かれ。放逸は能く天を使ふ。婦女の使ふことも亦然り、婦女の火に燒かれて常に苦惱を受けん。是の故に天應當に勤めて婦女を捨離すべし。貪欲にて愚癡なる

【一九】阿舒伽（Aśoka）。又、阿輸伽、阿叔迦と書く。枳橘易土集によれば無憂樹のことなりと。悉多太子は此の樹下に生る。今は無憂樹の花の色の赤きことを指せるならん。

優鉢羅は是の如く赤きが故に、一切の寶の光明をして皆赤からしむ。是の如く勝妙なる赤蓮華寶は、秋の時に初めて出でし日の赤色にて妙なるより過ぎたり。又復彼の赤優鉢羅の葉の中に於て、蜂と共に遊戲し、是の如く具さに、五功德の樂みを受く。

若しは彼の赤色の優鉢羅の中の天子と天女は是の如き心あり。『我れ今に於て、天の酒を飲まんとす』と。卽ち心に念ふ時に、彼の赤色の優鉢羅寶の華葉の中に於て、勝れし善き色香の清冷なる觸の天の酒流れ出でて無量種あり、彼の天主牟修樓陀と共に之れを飲みて、是の如き樂みを受く。

又復彼の天更らに念ずる所ありて、赤色の優鉢羅の中にて歌の音聲を出さしめんと欲するに、卽ち念ずる時に於て卽ち風の吹くことありて、赤色の優鉢羅の[一八]華をして迭互に相ひ觸れて種々の聲を出ださしむ。自餘の種々なる五樂の音聲は此の音聲の十六分の中に於て其の一にも及ばず。彼の聲を聞き已りて、歡喜の心を生じ、既に彼の聲を聞きて百倍に樂しみを受け、彼の天主牟修樓陀と共に、彼の赤色の優鉢羅の葉に在りて快樂を受く。

又復彼の天は心に、若しは遊戲して樂みを受くることを憶念して、是くの如き念ひを作さく。『我れ今此の赤優鉢羅の妙なる寶の葉の中に住みて、是くの如く遊戲す。今此の赤優鉢羅をして虛空を行かしめんと欲す』と。卽ち念ふ時に於て、彼の優鉢羅は鵞鳥の飛ぶが如くに空に在りて行く。天子中に在りて餘處の諸の園林等を下觀すに、餘の諸天ありて、自らの善業の故に遊戲して樂みを受く。時に彼の天子復天主牟修樓陀と共に、優鉢羅の妙へなる寶の葉の中に在りて遊戲して樂みを受け、處々に行く。彼受けし所の樂みを無量に分別す。善く持戒するが故に、彼の持戒の如く相ひ似し果を得て快樂を受く。彼の持戒に下・中・上あるを以て、是の如くに樂みを受くるに下・中・上あり。彼處にて是の如く長久き時に、快樂を受け已り、種々に見已りて、又復行きて心相の地處の千殿山峰に向ふ。時に、彼の是くの如く始めて生まれし天子不可思議を種々に見已りて、心に歡喜

【一八】華の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

て、彼の殿に近づくに、彼の殿の中に於て樂しみを受くる天あり、其の來るを見已はりて歡喜の心を生ず。天あり前みて迎へ、近づきて之れを看るに、彼の天子初始めて生まれしを以つての故に、是の如く歡喜び、手を以て之れを抱きて、是の言を作さく『今我が天の朋は是くの如く增長せり。天衆は是れに由つて則ち大力あり。汝、今に於て多くの諸の天と共に同じく快樂を受けよ。多くの諸天あり。多くの光明あり。牟修樓陀天王の所には多くの天衆・多くの天女の衆ありて、遊戲して樂しみを受く』と。

復、餘天あり、始めて生まれし天を見合掌して供養す。既に供養し已りて之れに語りて言はく『汝今此の山峰の上に到れり。此の中には今、須夜摩天の無量なる天衆ありて、諸の天女の衆に圍遶れて樂しみを受く。復、天王あり、天の善業の故に、今無量の妙なる蓮華の中に於て、迭ひに共に遊戲し、善業の力の故に此處にて樂しみを受く、此れは是れ好き處にして、汝は今此こに來れり。汝始めて生まれし天よ。此こに來至るを得たり』と。

始めて生まれし天子既に是の語を聞き、自ら天女に語りて是の如き言を作さく『夜摩天王は何處にて遊戲し、五欲の功德にて快樂を受くるや』と。天女聞き已はりて、天子に答へて言はく『我れ今共に去りて大天主牟修樓陀の住して樂しみを受くる處に向はん』と。彼の始て生まれし天此の語を聞き已りて卽ち天女と共に去りて、天王の樂しみを受くる處に向ふに、天女の衆と共に歌舞し遊行し、次いで前みて遙かに牟修樓陀夜摩天王を見るに、赤優鉢羅林の中に住み給へり。赤優鉢羅には百千の葉あり、彼の葉々の中には舍ありて宿の如し。內に天女あり第一の妙なる香もて、諸の鳥の衆と共に種々に遊戲す。彼の諸の鳥は是れ水を行く鳥にて、鳥には勝れし聲の種々の妙なる音あり、彼處にて是の如き赤優鉢羅は是の如く莊嚴れり。彼の大天王は婦女の身にて普く種々の妙なる寶の衣服あり。其の寶には多くの種々の光明あり、赤優鉢羅寶の光明の故に同一赤色なり。彼の

く。是の如くに聞き已はりて則ち希有の歡喜の心を生じ、速疾に前みて近づけり。

時に、彼の天子即ち前みて、彼の千殿山と名くるに近づき、到り已はりて則ち種々に具足せる愛すべき勝ぐれし處を見るに、無量種あり、所謂、七寶の諸の妙へなる園林・勝れし蓮華池を以て莊嚴と爲し、心に樂ふ所を見、迭ひに共に樂しみを受け、勝れて淨き水池には水流の聲あり、園林の中に種々の勝れし鳥の上下し來り去りて、種々に間雜るを見る。七寶の堂舍は皆悉く種々に雜々れり。異々たる諸の寶を以て莊嚴となし、彼の堂は是の如くに甚だ愛樂すべし。山谷・崖岸は種々の行林もて莊嚴りて殊勝たり。多くの勝妙なる鵝鴨・鴛鴦ありて、是れ等の水鳥の種々の音聲皆愛樂すべし。種々の旛幢は風の爲に吹かれ莊嚴は愛すべし。見る者皆勝れたり。虛空の中に於て殿舍の行くことありて、若しは來り、若しは去り、若しは合し、若しは離る。光明の寶ありて莊嚴を爲し、復更に彼れと此れと迭ひに共に若しは歌舞する等の勝妙なる音聲のあるを聞き、勝妙なる迭互に遊戲する笑等の音聲のあるを聞く。平かなると平かならざるとの七寶の聚りありて、無量種々に勝妙て莊嚴り、無量種々に勝れし山峰の處に、無量千種の勝妙し好き華・形相・色・香あり。行き、住し走り戲れ、若しは相ひ抱く等、是の如くに種々なり。彼の天處に在る是の如き天子・天女の衆は圍遶を爲し、千殿山と名くる峰の上に在りて虛空の中に住す。彼の殿を下觀し、是の如くに彼の山峰を觀見し已はり、歡喜の心を生じ、天女に告げて言はく『汝等、此の千殿の山峰を看よ。此の殿は是の如くに甚だ愛すべしと爲す。一切は種々に皆悉く愛すべし』と。彼の天女の衆其の語を聞き已りて、彼の天に白して言はく『天よ、今當に知るべし。我れ今已に見たり。我れ已に是の如くに數々見來りて、或は已に百たびに到り、若しは已に千たびに到れり。天未だ曾つて見ず。天今善く此の勝れし處に於て第一の善き觀を看よ』と。

彼の諸の天女は是の如く說き已はりて、是の如き天子諸の天女と共に空從りして下り臨み

婦女の欲を離れ、一切の人に信ぜられ、持戒を現前して、相應し、和集す。是くの如き樂しみを得て、欲を離れ、邪まなる行ひを樂しまず、行はず、思はず、念ぜず。彼の人是くの如く能く欲火を滅し、第一に心を用ひ、第一の樂みを行ふ。彼の善き衆生は身壞はれ、命終りては善道の夜摩天中の心相の地處に生まる。善業の衆生は彼處に生まれ已り、無量なる天の樂みにて樂行を受く。肉・骨・汗を離なれ、自身の光明にて常に勝れし樂みを受け、恒常に五欲の功德を受用て、一切の欲樂を皆悉く成就し、彼こに於て、是くの如き功德を成就して、天の快樂を受く。多饒の百千の諸の天女等に圍遶かるゝは、須彌山の、衆の星に圍遶るゝが如くにて、光明勝妙にして自ら莊嚴れり。善業の化せる所の勝れし光明の輪は圍遶て端嚴なり。無量の光明身より出づ。彼の天女の衆其の數甚だ多くして、娛樂して、樂しみを受け、五樂の音聲は愛すべくして、聲・觸・味・色・香等にて快樂を受く。

彼れ是の如くに念へらく『我れ復更に、其の餘の愛すべき勝妙なる處に行かん』と。即ち念ひし時に、善業の力の故に、彼の諸の天女は其の心を觀察し、既に觀察し已りて、語げて天子に言はく『我れ今、云何にして此處に住するや。此の樂しみの處と異なりて復樂しみの處あり。今相ひ隨ひて行き餘の處に向ふべし。名けて千殿山と爲す。峰の上に、種々の寶もて莊嚴れる所あり、無量百千の天の諸の住處なり。今相ひ隨ひて共に彼處に向ふべし』と。爾の時、彼の天既に天女の是の如き語を聞き已はりて、心に念ひし所の如くに極めて歡喜を生じて、是の如き言を作さく『今汝の意の如くに、我れ是くの如くに行かん』と。

爾の時、彼の天是の如く語り已りて、虛空を飛行し、千殿山と名くる峰の上に向ふに、無量の寶にて莊嚴りし處ありて、無量の天・無量の天女あり。種々の妙へなる聲・歌の聲は遠く五百由旬に聞こえ、虛空に遍ねし。多饒の諸天及び諸の天女路傍に詠歌して此の天子をして歡喜を生ぜしむ。千殿山と名くる峰の上に向つて速疾に上る。適に彼處の天衆、天女の歌舞する聲、莊嚴の具の聲を聞

彼の天是の如く本の前の生を念ひ、既に念ひを生じ已はりて、人中の時を取り用ひて以て喩を爲し、天の時を取りて譬況を爲さず。何を以ての故に、天に晝夜なくして自らの光明を以てせばなり。是の故に常に晝のみ。時に、彼の天是の如く久時く觀察するに、是の如く退かんとする天は已に還へり、天の法の如くに決定して善業の果報を受用す。又彼の天子園林の中に於て、遊戲して樂しみを受け、五樂の音聲は河坎・澗谷・蓮華林の中、或は山峰に在りて、是の如き等の處にて天女の衆と共に、餘の異天と共に諸の快樂を受く。本の善業に依りて、樂しみの果報を受く、乃至作りし所の善業を[一七]受け盡くし、善業盡き已りては、彼の天の處を退く。既に天を退ぞき已はりて、行き來るが如く、行き去るが如くに、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若しは退ぞくことありて、已に人中に生まることを得ば、常に樂しき處に生まれ、隨順して修行し、正法の國土にて聰明くして黠慧し、一切の人に愛せられ、若しは國王と作り、若しは大臣と作り、若しは王者と作るに、其の王の國土は他國、敵陣の軍衆を畏れず、常に快樂を受く。餘業を以ての故なればなり。

又彼の比丘業の果報を知り、復更に夜摩天中に有る所の地處を觀察す。彼れ見聞して知るに、彼の夜摩天に復地處ありて、名けて心相と爲す。衆生何なる業にて彼の地處に生まるゝや。彼れ見聞して知るに、若しは善を行ふ人、善き意にて、心を直し、正見にて邪まならず。心常に諦かに善惡の因果を知り、殺・盜・婬せず。殺さず、盜まざること前に說きし所の如し。邪まの行ひをせずとは、心に念ひを生ぜずして亦隨喜せず。所謂、乃至畫ける婦女を見るとも、念はず、觀ぜず。善からぬことを念ふことなく、心に見るを樂しまず、味はず、著せず。欲愛の心なくして之れを觀察し、亦他人を敎へて他人の作すを遮へしむ。自身作さずして、他をして作さしめず。彼れ能く自ら利し、復他を利益す。彼の持戒の人は熱惱を脫するを得て、常に諸の善を行ひ、恒に自身を念ひ、身の不淨を見、自らの身體に於て常に念ひて迷はず。婦女を貪らず、婦女の羂より解脫するを得、

【一七】受の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

樂みを得ば其れと共に行き、苦みを得ば則ち捨離す。　無量の恩を念はずして、一の過も計りて心に在り。　園林、山中に於て無量の樂しみを成就すとも、既に衰惱を得已れば、婦女は嫌ひて捨て去るのみ。

彼の天既に、天女の是の如くに其の身を捨離するを見、即便ち一切世間の法も皆是の如きを思惟し已りて、此の偈を說く。婦女の心は堅くして、天の死せんとすれば即便ち離れ去りて餘天に依止すること、猶し、冬の時に、蓮華の乾き枯れば、衆蜂之れを見て即便ち捨離て去り、餘處に向ふが如し。爾の時、天女は退かんとせる天を離れて、餘天に向ひて去る。又、五樂の聲にて歌舞し、遊戲して種々に樂を受く。園林に在る蓮華の水池には、種々の鳥の聲あり、[一六]隨念樹と名くるは百千に莊嚴れり。前に常に共に樂みを受けし天子を忘れて、餘の天子と共に諸の樂みを受く。俄爾の間に忘れて、百千たび生れしが如し。前の天の退くを見ては一念の間に於て其の功德を忘る。婦女は是の如く恩を捨てゝ念はず、婦女の性は係戀する所なく、唯だ物に因つての故に愛念する所あり、或は須ふる所あれば、是の故に男に近づく。而も自體の性は、一切の處に於て皆究竟せず、一切の過去・未來・現在に皆能く其の體性を知るもの有ることなし。心動くを以ての故に、火輪の旋るが如く、乾闥婆城及び陽の焰等の、捉持るべからざるが如く、婦女の體性も亦復是の如く執持すべからず。是の如く現前に、退く天子を捨てゝ餘天に向つて去る。彼の退かんとする天は本の業の熏の故に、復偈を說きて曰はく。

若し天、心を搖動し、如しは放逸し欲樂して、退くことに怖れを生ぜずんば、必定して天の處を退ぞかん。　若し天にして天處に生るれば後に必定して退ぞくことあらん。　晝の日の盡くる時必定して夜の至ることあるが如し。　晝の日は則ち命の如く、夜分は則ち退ぞくが如し。既に此の二種を知れば、應に生死せざることを念ふべし。

【一六】隨の字は、明本に依れり。

諸の天女は、天の退ぞかんとするを見て、亦復是の如くに捨離して去り、餘の天子と共に相ひ隨ひて行く。時に、彼の天子は婦女の去らんとする是の如き相たを見已り、心を安んじ忍耐して、偈を說きて言はく。

皆自らの業を以ての故に、是の如き果報を受く。婦女は退ぞかんとするを見ては、捨てゝ遠ざかりて近よらず。自らの業盡きしを以ての故に、無量の樂みを離れたり。天女は退く天を見れば則ち異なる天に向つて去る。此の樂しみは常に定まることなく、心の性も亦た是くの如し。婦女の欲を樂しむの惡、友の相ひ信せざるの惡、此の四種の大なる苦しみは、一切の時に逼る。是の故に應に毒・火等を棄つるが如くに捨離すべし。因業の故に樂みを得、因業の故に苦みを得。業によつての故に破壞し、業の故に是の如くに見る。此くの如く天大樂して、五の功德を受用すれども、後時に、福業盡きては天を退ぞき、自在ならず。是の如く生死は一切是れ業の幻なりと說くは、解脫の道を示し給ふ者にして、眞諦を佛は示し給ふ所なり。若しは擾動き心あらば則ち諸の過を〔一五〕退かしめず。彼れ癡に攝る。是の故に婦女は近づくなり。日は則ち闇の因には非らず、火に由らざるが故に冷たし。婦女は愛心なく、愛の少き心は住まらず。地の住まるが如くに動かず、風の動くが如くに住まらず。婦女の性は恩なし、故に是の如き過あり。丈夫は久き時に於て多く婦女を供養すとも、衰ふるを見れば捨てられて遠ざけらる。鳥の枯れたる池を捨つるが如し。上行の者は墮ちず、石等飛ぶ能はず、山則ち行く能はず。婦女は善き友に無ずして、常に能く妨礙げを爲し、法の義名を破壞し、納藏を儩盔せず、一切の過を出生す。金剛を輭かくすべくんば日も亦熱を離るべし。婦女は誑を捨てず。本性の法は是の如くにして、種々の愛語に非らずんば、供養に非らずんば、物に非らずんば、能く婦女を攝すとも、心は火の如くにして近づきがたし。

〔一五〕退の字は、宮内省圖書寮本に依れり。

の像を見るに、天身の像に非らずして、乃ち何なる道にか生まれんとする身の像を見る。若しは地獄を見、若しは餓鬼を見、若しは畜生を見、若しは人色を見る。是の如き異なるを見て、此こ從り退き已りて地獄等に生まれ、異なる生の相現はる。又退く相現はる。所謂、彼の天は水の中にて身を看、既に身を見已りて則ち怖畏を生ず、怖畏を生じ已りて身の毛皆竪つ。又退く相現はる。所謂、彼の天自らの處の醜にして端嚴ならざるを見る。又退く相現はる。所謂、彼の天は何なる處の毘瑠璃の處・金の處・銀の處・若しは玻瓈の處・若しは靑寶の處に於ても、彼の一切の處の是くの如き處に坐するとも動搖きて安からず。又退く相現はる。所謂、彼の天若しは風に吹かるれば則ち大[三]抖擻し、其の觸は堅[四]硬し。又退く相現はる。彼の天の衣の觸は重くして金剛の如し。是の如く見已りて其の心は則ち愁し。心既に愁み已りては、愛すべき聲・味・觸・色・香に於て心則ち樂まず。既に是くの如くに已りて卽爾に便ち無常の火に近づく。又復更に異なる退く相の現はることあり。謂はく、處々に於て若しは毘瑠璃・石等の壁の中、或は鏡の中に於て、或は異なる處に於て、自の身の像を看るに則ち頭を見ず。又退く相の現はれて、自の頭の乃ち地に在るを見る。是の如き相を見れば、死近くして遠からず。

　彼の諸の天女是の如くに知り已りて、厭惡して棄捨つ。彼の天は憂愁みて離別の意を起し、是くの如き苦みあり。生れ來る苦みは此の苦みの十六分の一にも及ばず。

　又第十二の退く相現はるとは所謂、彼の天の意亂れて定まらず、火輪の旋るが如く、一の處を念はずして、其の心は極めて動く。退く愁しみ苦しみの故に、彼れのこと現はれて命根將さに盡き滅せんとす。燈の油の盡きるが如くに光明微少なり。是の如くに、彼の天は自の身を見ては將に退沒かんとするを知り、常に自らの身に隨ひて行ひし所の天女は、其の是の如きを見皆捨てゝ去る。火の樹を燒くを、鳥は見て則ち離れて觀察せざるが如し。先本しより已に來りて功德を所有する彼の

【三】抖擻はさつぱりとはらひさること。
【四】硬の字は、明本に依れり。

是の如く、第一の欲染にて迭ひに共に樂みを受け、相ひ妨礙げずして心に憶念するが如し。是の如く樂みを受けて、又復彼の天彼の天女と共に意の欲する所の如くに、無量種あつて無量に分別す。天の相ひ似たるが如くに自からの業も相ひ似たり。積負の地處にて長久しき時に於て、無量に種々の五欲の功徳にて遊戲して樂みを受く。多饒の天衆と諸の天女の衆とは次第に巡行て、復異なる林に到るに、嚴風林と名け、樂しみを受けんと欲するが爲に遊行して嬉戲す。餘の天子を見るに、本の業盡きしが故に、天女の衆の中にて時至りて退ぞかんとす。彼の退ぞかんとする天に相の出現することありて、相は病あるが如し、所謂相とは、彼の天の若しは前みて蓮華池に近づくに、華則ち開かず。此れは是れ初めの相なり。又彼の退く天の第二の相は若しは林樹若しは蓮華池に近づくに、蜂は則ち林を離れ、蓮華を離れて去る。此れ第二の相なり。

又、彼の退く天の第三の相とは、若しは彼の天子の諸の天女と共に遊戲する時、其の歌音を聞けば則ち厭離を生ず。此れ第三の相なり。又彼の退く天の第四の相とは、若しは樹林に近づくに、彼の樹の華の一切皆萎む。此れ第四の相なり。又彼の退く天の第五の相とは、戲むるゝ所の殿舍に在りて遊行せんと欲するも、空を行くこと能はず。此れ第五の相なり。是の如きの五種は是れ夜摩天の退かんとするの相なり。彼の第二の三十三天の退ぞかんとする時の如きは、蠅等に著する所の汚を出せば則ち知る。三十三天の退かんとする相の死する狀は是の如し。此の夜摩天は善業盡きしが故に、此の諸の相あれば則ち其の退くを知る。彼れには十二の死の大相ありて、次第に此の死せんとするの相を見る。而も彼の天子は退かんとする時の死相は即ち現はれり。所謂、彼の天は光明を出さんと欲するも、光明を出さずして、還つて身の中に入ること猶し日の沒するが如し。又退く相現はる。所謂、彼の天は華鬘の果を見るとも、心に愛樂せず。又退く相現はる。所謂、彼の天は華に著して頭に在るとも即便ち落つ。又退く相現はる。所謂、彼の天は水中にて身を看て、自身

餘の劣れる天は、萬の天女ありて之れを圍遶き、常に欲樂を受けて未だ厭足ことを知らず、彼の天女は常に樂しみて遊戲し、亦能く欲を以て復無量百千の諸天に供へ、是の如き天女は欲樂を愛樂す。何かなる因緣を以てなりや。彼の天の中にて多くの女、少しの男なり。此の因緣ありて、天世間の中にて欲染は强勝にして、癡なれば則ち【一】中爲り。若し彼の天に生まれ中有に住する時、已に彼處には天女を具足することを見、既に彼れを見已りて欲心を增長して、彼の天女に著す。即便ち心を迴して天女の身を取る。彼の中有の者は樂みを悕望むが故に、心を以て取るが故に、即便ち彼の天女の身を受く。此の因緣を以て、諸の天の中に於て天女は則ち多く、男天は則ち少なきなり。是の如く、天に一萬の天女あり、復餘天に二萬の天女あり、復餘天に三萬の天女あり、復餘天に四萬の天女あり、復餘天に五萬の天女あり、復餘天に六萬の天女あり、是の如く次第に、乃至百千萬の天女は或は强き者あり、天女も是の如く多少差別す。

彼の地天の欲を行ずる法に依れば人の如くにて異ならず。四天王の欲は此の人中の男女の二身の迭互ひに交合し、迭ひに相ひ觸れて逼まるが如きも、不淨あることなし。三十三天の欲を行ふ時は、彼れと此れと相ひ抱くとも、根は相ひ觸れず。夜摩の諸天の欲を行ずる時は、語り笑へば則ち成る。兜率陀天は相ひ視て欲を成し、彼の化樂天は語說して聲を聞き、香を聞けば欲を成す。【二】若しは遠き處の者は、若しは其の香を聞き、若しは語の聲を聞けば欲は則ち究竟して具足し成就す。是の如き他化自在の諸天は化樂天と一法も異ならず。若しは一天子は一切の天女に愛念せられて大に敬重を生じ、心に疲倦れず亦病の患ひなく、肉や骨を離れ、蟲、汗等皆離なる。天と天の中には增上の力ありて和合し相應す。彼の一切の時に力は常に壞へず、勢力光明皆悉く具足す。是の因緣を以て唯だ一の天子にても多くの天女と共に無量百千に極めて相ひ愛樂し、常に欲事を行ふ。彼の天の心は一女を守らずして、一切の女に於て心に皆見るを樂しみて、意の行ふ所に隨ふ。一切の天女も又復

【一】中。中有のこと。又、中蔭の有のこと。此の界にて死、彼の界に生まる間の存在なり。

【二】若の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

彼の池の上に在り。彼の天は是の如く既に觀察し已はりて、歡喜心を生ぜり。爾の時、天衆は一切の處を見るに、間に空處なく、虛空に遍く滿ちて、處として鳥及び天衆の有らざることなし。亦水中に遍く、亦虛空に遍くして、間に空處の微塵ばかりの如きもなし。往時に於て、善業を修さめし力を以て、是の如く見已りて偈を說きて言はく。

[六]此の見の大海は、滿足を得べからず。　舌の味を愛することも亦爾り、滿足の時あることなし。　鼻の貪りて諸の香を齅ぐことも、[七]是くの如くにて滿すべからず。　身の善き觸に著して、足ることを知らざるも亦然り。　耳の貪りて妙なる聲に著すること亦曾つて足ることを知らず。　意種々の法を念ひて、一切を滿たすべからず。　六境界の中に動きて、足ることを知るの光明を離れ、患ひ渴きて常に行轉し、欲地は無量種なり。　厭足することを知らざる天は、猶ほし火に薪を投ずるが如く。　若し厭足ことを知らずんば、自らの體處住なからん。是の如く六火の惡起り、念ひの風の吹く所、此れ常に世間を燒くとも、癡者は曾つて覺らず。　此の放逸なる者の地は、法を修行する道には非らず。　放逸は[八]戒を破ら[九]令めて、樂を受くるの境界に入らん。

是の如く彼の天本の善業を念ひて、業を憶念するが故に、偈を說き已竟りて、[一〇]法爾に更に復境界に染著す。多くの愛する聲・觸・味・香・色ありて、無量の種々の功德に相應し、念々に增長き、既に增長し已りて、天女の衆と共に處々に遊行するに、五欲の功德無量種ありて、無量に分別して種々に樂しみを受く。復天女と共に、異處の園林・山谷の中の多くの無量百千の衆鳥ありて、妙へなる音聲を出し、七寶にて莊嚴れる甚だ愛樂すべき異なる天の處に到る。彼處の諸の餘天の衆と諸の天女の衆と共に同じく樂みを受けんと欲するが故に、彼處に到り已りて、彼れと此れと迭互ひに美しき聲にて相ひ問ひて、是の如き語を說き、是の如く一心に迭ひに共に遊戲して樂みを受けたり。若しは

【六】原文「此見之大海、不可得滿足」とあり、眼にて好色を何程見るとも滿足なきを云ふ。
【七】是の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。
【八】戒の字は、宋、元、明三本に依る。
【九】令は、元、明二本に依る。
【一〇】法爾。天然、自然と言ふに同じ。他の造作をからず、法の持ち前として自ら然るなり。火の熱きが如く、水の濕ひの如きなり。

妙なる色の境界を具足して、甚だ愛樂すべし。是くの如く無量の愛すべき味は種々の勝れし味にて、是の如く無量に愛すべき香・是の如く無量に愛すべき觸あり、其の地は柔輭なるが故に此の觸あり、縷にて成ぜし所に非らざる種々の天衣は其の觸輭滑なり。是の如く種々に皆甚だ愛すべし。種々の鳥ありて、妙好なる音聲・種々の歌音甚だ愛樂すべし。無量種の聲にて、是の如き等の五境界の樂みを受け、諸の天女と共に種々に莊嚴り、美妙なる〔三〕音を以て無量〔四〕種々に諸の快樂を受く。

爾の時、彼の林には是の如き等の功德ありて具足し、無量の天衆と諸の天女の衆とは彼の林の中に滿てり。彼の天は見已りて、則ち第一の希有なる心を生ず。種々に見已りては處々に遍く行き、彼の處々の園林の中は、皆是れ硨磲及び靑寶等にて地處を莊嚴れり。復綠地ありて、鳥は中に在りて行ず。鳥には種々なる七寶の色ありて其の身に間錯り、彼の鳥迭互ひに〔五〕遊戲して樂みを受け、跋求の聲を出して彼の雌鳥と共に其の綠地に在り。是の如くに綠地を見、見已りては復水の中に於て、種々の鳥を見る。多くの鴛鴦・諸の鵝鴨等ありて、種々の異色間錯りて莊嚴れり。彼の鳥に普く第一なる音聲あり。是くの如く見已りて、復天子を見るに諸の天女と共に園林の中に在り。彼の園の樹林には六時の華ありて、一時に倶に坐じ、彼の樹は各々爭ひて勝れし華を出せり。彼の樹は光明を或は擧め、或は放つこと、眼を開合するが如し。彼の諸の天子と諸の天女の衆とは見已りて歡喜べり。復異處を見るに、靑き林ありて行じ、種々の雜色を見已りて心動き、心旣に動くが故に樂しみを欲す。上りて虛空を看るに、無量百千の天女ありて虛空の中に滿ち、第一の衣服にて自らを莊嚴り、遍く虛空に滿ちて、種々に間雜れり。譬へば壁上の種々の畫の色の如く、或は絹の上、或は氎等の上に在りて、種々に異るを見て歌舞し、喜咲し、種々に遊戲す。彼の天見已りて、心則ち轉動き、種々に分別せり。空中を見已りて復面を廻らせば、卽時に、蓮華の池林あるを見る。種々の蓮華は彼の池中に滿ちて、種々の形相・種々の妙色あり、謂く青・黄・赤なり。種々の鳥ありて、

【三】香の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【四】種々は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【五】遊の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

ての故に、善く戒を修學て毀らず、缺かさず、孔をせず、穿たずして垢を離れ清淨なれば、汝此に生まることを得しなり』と。是の如き語を說く。始めて生まれし天の爲に、是の如く說き已りて、放逸の爲の故に、次に彼の山に上り、空を飛んで去る。虛空中に在りて、種々なる樂音にて心に歡喜を生じ、迭ひに共に樂みを受く。彼の時、是の如く始めて生まれし天子既に是の如く見、卽便ち思念はく。『我れ今獨り自ら步行して去り、積負山に上らん』と。既に思念し已りて、卽ち爾く步行して彼の山の所に入るに、大衆のあるを見る。諸の天女等無量の衣服にて其の身を莊嚴り、無量種の樂みの聲ありて歌ふ。彼の諸の天女、始めて生まれし天を見て各々歡喜て、共に前に走りて始めて生まれし天に向ふ。既にして其の眼を見、希有なる心を生ず。之れを觀察して、復是の心を生ぜり。『我れ應に供養すべし。其の婦と爲るべし』と。復更に之れに近くに、本より未だ見ざりしを以て、初始て之れを見て希有なる心を生じ、天子に白して言さく『我れ今に於て、天子を見るを樂しみ、天子の爲に來れり。天子は今自らの業果の故に我と共に樂しみを受けん。園林の中に於て種々の林あり、種々の林の中に種々の山・高き峰・澗谷あり。復種々の異異たる天處に七寶の莊嚴ありて、光明圍遶り。諸の樹の華果山の中に遍く滿てり。處々に皆樹の枝の堂舍あり、彼の堂舍の中に多く種々の歌樂の音聲あり、其の地處の色、火洋金の如くにて、是くの如き妙なる色の地處にて樂みを受く。復異なる處ありて、流水・河池・種々の蓮華其處を莊嚴れり。又虛空の中に百千の堂ありて、種々に莊嚴り、第一に愛すべし。我れ天子と共に是くの如き處に在りて諸の快樂を受けん』と。爾の時、是の如く始めて生まれし天子、本の善業の力にて、彼の天女と語りて是の如き言を作さく『我れ今是の如くに、汝と共に樂みを受けん。此の天の地處の一切にて欲樂み厭足べからず』と。爾の時、彼處の諸の天女の衆共に異なる林の雜殿林と名くるに向ふ。彼の林の中に於て、種々の樂の聲あり、彼の樂音を聞きて心に歡喜を生ず。善業を成就して樂しみの果報を受く。彼の林は

衆ありて無量百千彼の城中を滿たせり。須夜摩天牟修樓陀は往きて彼の城に到り、彼の城中に於て五欲の功德もて天の快樂を受く。愛すべき聲・味・色・香和合して愛火を增長す。是の如く彼の天は積負山上に種々に樂みを受け、遊行し、嬉戲して、種々なる境界に種々に樂みを受け、因果差別す。爾の時、是の如く始めて生けれし天子、心に境界の樂しみを悕望ふを以ての故に、彼の山の上に向ふに、獨一にして侶なし。一の舊天ありて、既に是くの如く始めて生まれし天子を見、心に歡喜を生じ、卽ち前みて之れに近づき、餘の舊天に語げて是くの如き言を作さく『此の天子は是れ始めて生まれし天なり』と。餘の舊天言はく『天今云何して其の始めて生まれしを知りしや』と。時に、彼の大天餘天に答へて言はく『此の始めて生まれし天に五種の相あり。所謂、一に光明身を覆ひ、身に衣服無し。心に是の念ひを作さく「他天をして我が裸露を見せしむること勿かれ」と。卽ち念ふ時に於て、他の衣あること見るとも、實には衣は無し。此れは是れ初めの相なり。始めて生まれし天子には又復更に第二の相あり。所謂、物を見ては希有の心を生ず。園林等に於て未だ曾つて見來らざるを見れば則ち遍く看る。此れ第二の相なり。始めて生まれし天子に又復更に第三の相あり、謂く、天女を見るに弱顏にて羞慚て、心に疑慮を生じ、未だ敢へて正しく看ず。是れ第三の相なり。始めて生まれし天子に又復更に第四の相あり。若しは餘天を見前みて之れに近づくと雖も、心に疑慮を生じ、意志定まらず。此れ第四の相なり。始めて生まれし天子に又復更に第五の相あり。虛空に昇らんと欲して心に怖畏れを生ず。設ひ飛ぶとも高からず。安詳として速からず、去るとも則ち遠からず、地に近くして遊び、或は城の壁に傍り、或は[二]地に依附す。此れ第五の相なり。始めて生まれし天子に具さに此の相あり。我れ汝等と共に相ひ與に往きて始めて生まれし天子に詣たらん』と。彼の時、天衆大天を圍遶て、一切皆始めて生まれし天子に詣たる。到り已りて語げて言はく『大僊。當に知るべし。我等諸天は汝の始めて生まれしを見て、相ひ與共に來れり。善業を以

【二】地の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

くの妙なる池には種々の蓮華ありて莊嚴を爲せり。蜂の衆は煙の如くにて、是の如くに群出り、莊嚴は端正なり。是の如く諸の事は本とより皆未だ見ずして、異相の似るもの無し。夜摩天の處にて、是の如くに觀已り、見聞せし所の如くに、是の如く歡喜び、既に歡喜び已りて、樹の下より起つ。是の如く起ち已りて、自の身を觀察す。自の身を觀已るに、自の身に有する所の威德の光明種々無量なり。身の威德諸の光明を見已りて、即ち色の慢を生ず。次に復更に第二の慢心を生ず。是の如きの念ひを謂ふ。『我れに更に比るもの無し。憶念する所に隨ひて、一切を皆得たり』と。此れ第二の慢なり。次に復更に餘の五の慢心を生ず。所謂、五根の五境界に著するなり。是の如き等の七種の慢を生ずるが故に、心をして破壞せしめ、本と作せし法は相續することを得ず。一切を念はず、心を動ずるを以ての故に、多く放逸なるが故に、彼の心放逸にして、放逸を行ひ、五境界の羂愛の頸を繫縛り、即便ち彼の積負山の上に上る。樂みを受くるが爲の故に。彼の山の三地は所謂、下地・中地・上地にて、彼の下地には五の園林あり、一を香漂と名け、二を焰勝と名け、三を光明と名け、四を常樂と名け、五を高聚と名く。彼の香漂林は、若しは物ありて生じ、一切の香は勝れ、彼の香普く五千由旬に熏る。彼の焰勝林は無量種の焰にて、諸の光明一切皆勝れて、百千の日の有する所の光明より過たり。彼の光明林の天身の光明は其の中に在りて、五欲を行ふ功德皆悉く具足す。彼の常樂林の流水・河池は無量百千の香・味・色皆悉く具足す。彼の高聚林は第一の高峰にして七寶の光明あり。是の如きは已に下地の園林を說けるなり。第二の中地は百千の曠野にて無量の七寶の蓮華の水池あり、無量百千の衆鳥愛すべく種々の異聲(あり)、觸・味・色・香は甚だ愛樂すべく清淨無垢して彼の地中に滿ちたり。第三の上地は山頂の巓きにて、彼處に城有り、百由旬の量にて、諸天中に滿つ。城を寶林と名け種々の河あり、河中の水流には中に飲食を滿たせり。多くの天の樹、妙なる蓮華の池あり、樹に華果ありて無量百千莊嚴を具足す。多くの歡喜る諸の天女の

が如く、灰土の火を覆ふが如く、色は是くの如くに心を覆ふ。　婦女も亦是の如し。　猶ほし毒樹を見るが如くにて、眼を悦ばすも不善なり。　婦女は毒の華の如くにて、智者は應に捨離つべし。　婦女を見ることを悕望みて、復境界を樂しめば、彼れは恒に樂しみを得ずして、此世・他の世にも非らじ。　若しは普く放逸を樂み、懈怠て動き、諂誑りて惡友に近づき、貪りて食すれば、彼れ則ち賢きことを見ず。　精勤み、大力勇にて福德して婦女を捨て、恭敬して因果を信ずれば、此の人は自ら善を得ん。　諸の過は婦女を網し、世間に在つて行はる。　若し能く婦女を離るれば則ち夜摩天に生まれん。

是の如く彼の天彼の鳥の聲を聞くに、夢に聞く所の如し。無量種々の勝妙し功德を皆悉く具足せり。是の如き偈を說きて、能く兩朋を利益して善き事を作さしむ。始めて生まれし天子は是の如き聲を聞き、是の如く聞き已りし因緣にて智を生ず。彼れ智にて能く何處より生まれ來りしかを念ふに、善く三種の愛すべき戒を持ち來れり。來りし處を憶念し、既に憶念し已りて偈を說きて言はく。

持戒して、此こに來り生まれ。　婦女は捨つべからざるとも、勇者は婦女を離れて、則ち涅槃の城に到る。　火に非らず、亦刀に非らず、火刀に非らず、鋸に非らず。　能く婦女の縛めを割るは、更に異たる方便なし。　我れ本とより已に常に捨て、勤心て毀し、厭ひ來りて、捨てしが故に、此の樂しみを得たり。　夜摩天は勝れし處なるも、此の樂しみと異なりて外に更に復大なる樂みあり。　當に不退の處を得て、必らず涅槃に到るべし。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子は既に鳥の語を聞き、鳥の色を見已りて、心に歡喜を生ず。彼の天の處を觀じて、積負山を見るに、多くの無量百千の諸の樹ありて、光明にて圍遶けり。復流水を見るに百千に莊嚴り、天の鳥の衆の種々の音聲を聞く。彼の鳥に則ち種々の寶の翅あり。多

出づる日の有する所の光明に勝り、彼の日の光明は則ち如かずと爲す。少分し相ひ似たるのみにて、天の光明は勝れたり。彼の天子は忽然として覺め已はり、善業の力の故に、彼の鳥をして爲に善業に相應しき偈を說かしめて言はく。

筋に離ねられ、羂に縛られ、屎・尿・唾等の處、是の如きは婦人の身にて、故に此の中に來りて生まる。諂曲を閃かして、直からず、男を見ては心に歡喜び、心迷ひて定住せず。汝識らざるが故に來れり。實を語らずして他を誑らかし、莊嚴は人をして樂しましめ、彼れ巧みに婦女を誑らかし、善能く男子を誑らかす。婦女は猶ほし蜂の種々の華の中にて樂しむが如く、種々の男子の處にて是の如くに愛樂を生ず。蜂の華を嗽ひ已りて、然る後に異なる處に去るが如く、婦女も亦是くの如くに、男を嗽ひては異なる處に行く。物を得ては賢善なるが如きも、常に瞋りて調ふべからず、男子を誑惑し已りては復異なる處に行く。[一]諂ふに、幻の器仗の、惡毒の如くにて異らなざるを以てし、此の婦女は男を殺して、能く不利益を作す。猶ほし風・空・火の執持して取るべからざるが如く、種々に多く方便して婦女を護るべからず。利益せずして病死し、不善の業等を作すは、女は第一の因緣にて、能く涅槃の行ひを壞はす。若しは種々なる處の隘迮き怖畏ろしき處に在りて、世間の男の苦みを得るは、皆婦女に因りてなり。少きに非らず、中年に非らず、未だ老ひしには非らず、寂靜ならず、婦女の性は心動きて日の光明の如し。婦女の常の友に非らざることは、燈の焰の停まらざるが如し。彼れ則ち是く常に怨むこと、猶ほし畫石の文の如し。唯だ富者のみに親近みて、物なくんば則ち人を厭ひ、物あれば婦女は近づき、物なければ婦女に捨らる。物を與へ、供養を與へ、種々の功德を作すとも、其の心火焰の如くにて秉執るべからず。男是の如くに隨順し、心の欲する所の如し。彼れ是くの如くんば婦女は恒常に男子を誑らかさん。蛇の華に覆はれる

【一】諂の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

卷の第三十九

觀天品第六之十八

夜摩天之四

又、彼の比丘業の果報を知りて、夜摩天の有する所の地處を觀ず。彼れ見聞して知るに、夜摩天の中に復地處あり、名けて積負と爲す。衆生は何なる業にて彼の地處に生まるるや。彼れ見聞して知るに、若しは善業を行ひて精勤め、持戒して常に他を惱まさず。持戒、和合を成就して缺さず、孔せず、穿たず、堅固にして壞はれず。能く一切の惡道の門を閉ぢ、一切の惡道の熱惱を清涼にし、能く歸依を作すこと父母の如し。未來世に於ても順順して行ひ、三種の功德を具足して相應す。何等をか三種と爲すや。所謂、殺さず、盜まず、淫せざるなり。殺さずと盜まざることは前に說きし所の如し。邪まなる行ひをせずとは、若しは道邊を行くに、若しは四出の巷、巷巷に行き、或は乞食して行き、或は時に餘を行くに、若しは婦女の種々なる歌舞・莊嚴・音聲を見るとも、愛念を生ぜず、心に樂みを願はず。他の作す所を見るとも、心に隨喜ばず。他の善を作すことを慶び、他を敎へて懺悔せしめ、其の過失なることを說きて言はく『此の婦女は第一の過ちの因にて、所謂邪まなる行ひは此の因緣を以て能く衆生をして地獄に墮せしむ』と。是くの如く持戒し、梵行清淨なり。身壞はれ、命終はりては夜摩天の積負の地處に生まれ、既に彼こに生まれ已りて善業の力の故に、中に樂みを受く。謂る積負山は五百由旬、中に諸の鳥を滿たし、音聲愛すべし。跂き求むる聲は山の中に甚だ饒く、彼の山中に響き音聲は愛すべし。然るに彼の天子の初めて生まれし時七寶の樹の下に、是の如くして生まる。閻浮提の睡眠せる人の他人の拍手する聲を聞きて覺むる者の如く、彼の天是の如く鳥の音聲を聞き・愛す可きが故に覺む。彼の天の身に有する所の光明は、秋時の山頭に

る天は覺知らず、放逸の行ひを癡愛し、是くの如くに樂みを喜樂ぶ。天衆愚癡なるが故に【一】當に生死に輪轉すべし。先に無くとも後時にあり、已に有りて後に還りてはなからん。天當に必定して退ぞくべし。世間の法も是くの如し。唯だ智慧ある者は世間の樂みに著せざるなり。

是の如く彼の鳥は彼の山中に行きて、是くの如きの說を作し、種々の法と和合し相應す。若し天の先きに曾つて已に多くの世に於て、善業を行ひ來りしものは、彼の鳥の語を聞きて、心に念ひて攝受す。若しは未だ多くの世ならずして一兩世のみ善法を行ひ來りし者は、鳥の語を聞くと雖も、乃至一句をも覺知らず。是の故に應當に勤行精進みて常に利益を作し、修行して智明らかなるべし。此れを除きて已外に是の如き救ひ無く、是の如きの藥無し。此の智は能く一切の惡道を遮へ乃ち是れ第一の樂みの種子なり。智者は應當に心に正法を樂しみ、正念し、思惟して心意を修さむべし。若し意を修めし者は是れ則ち具さに是の如き功德ありて、和合し、相應して次第に、乃至涅槃に到らん。若し天にして彼の鳥の音聲を聞き已れば、須臾の間に放逸を暫息まん。

又復、彼の天山の園林の無量なる衆寶の光明の峰の上に於て、彼の天の山中の五欲の功德種々に和集して、嬉戲れ、遊行びて、多種に樂みを受け、乃至、愛すべく善業和集し、一切盡き已りて、彼處より復た退ぞき、業の如くに行ひて、地獄・餓鬼・畜生に生まれん。人中に生まるもの有れば、彼れ一生に於て常に快樂を受け、身には自在を得て他に屬せず。第一の大富にて、心常に智を愛し、第一の勝れし色・端正を具足し、一切の人の樂しみ見る所と爲り、一切の人の爲に敬重せらる。愛すべき富樂なる國土に生まれて、或は城の內、或は多くの人の處に在り、親舊・兄弟に供養せられ、若しは王・大臣となり、其の心正直にして法行に隨順し、正見にして邪まならず。彼の餘業の故なればなり。

【一】當の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

は、自身則ち怨むが如し。　身の善きは善友の如くにて、是の如くに身自ら行ふ。　河の流れの速かなるが如くに、身の轉變することも亦た爾り。　是の故に應さに福を作し、垢なく淨く戒を持つべし。　若し意不善を樂しみ、常に境界の樂しみを喜ばば、猶ほし大闇處の如くにて、不饒益の行ひを作さん。　境界を喜樂びて動き、常に欲に隨順して行ひ、此の法に非らざる意あれば、彼れ則ち苦惱を受けん。　諸の苦しみは是れ魔の業にて、法の樂しみは普く周遍る。　是の如き苦樂の相を智者は是くの如くに知れり。　若し心に樂しみを求むる者は、正法に隨順して行ひ。　若し苦みを悕望まば、彼れ心に非法を行ずるなり。　因非らずば樂みを得ず、種々の苦も皆然り。　苦みと樂みの因差別し爾く、自ら利する行ひを知れ。　若しは無量に分別せば則ち無量種ありて、彼の一切の業果にて、是の如く生死を得ん。　若し法を愛樂まずんば一生の身は空しく過ぎん。　法は能く將さに天に到るべし。　法を行ふ者は樂みを得ん。　若し法にて救護する者は、此れ是の如く善く足る。　法を離る者は善に非らずして必定して地獄に入らん。　好人は寧ろ身死すとも而も非法を行はず、若し法を捨離する者は生死に常に轉行せん。　法の眼を離る者は癡の爲に心を覆はれ、樂しみは虛妄にて利することなけん。　病める眼にて看て樂むが如し。　法は芽にて意は田の如く、心無くんば則ち生まれず。　若しは戒を持つも意鈍なれば、專ら非法を行ふ。　非法の道に依り已れば不善をして行はしめ、久しく生死に轉行し、心の爲に疲倦せしめらる。　此の心は念々の中に、無量種に轉じ行ひ、其の體甚だ輕動にして、幻の乾闥婆の如し。　彼の心に繫縛あれば、智慧・持戒と謂ふも縛して大力有らず。　無量種々に轉じ境界の欲樂多くして、愛の爲めに行はしめらるる。　是の故に天を誑惑して、放逸の行ひを行はしむ、覺知せずして終に退き命終りては必らず破壞せん。　一切は無常にして動ごき、盡くる時必ず樂みを失なはん。　一切の天上の樂みは、癡な

山有り名づけて一切布施と爲し、希有にて殊勝れたり。彼の山に到り已り、次で彼の林に到るに、彼の雲處遊行の地處の如し。是の如く、天子、天女の衆と共に天の五欲の功德の樂しみを受く。彼の樹林は第一に愛すべくして、彼の中の一林にても皆是れ閻浮那提の金寶にて、其の葉は皆是れ毘瑠璃寶・妙なる蓮華の寶にて、硨磲色の花なり。

復次に、第二の林は是れ白銀の林、眞金色の葉、彼の林の華には無量種、第一の善き香有り、熏ること百由旬彼の天之れを齅ぎ、旣に香を齅ぎ已りて勝れて心に歡喜ぶ。彼の第三の林は是れ毘瑠璃にて、其の葉是れ銀なり。其の華則ち種々の雜色ありて、種々の香あり。彼の第四の林は種雜林と名く、無量の雜色なり。無量の河池に妙へなる蓮華ありて、種々の諸の鳥種々の音聲、百千の功德を具足へてあり。彼の林の中に於ける種々の音聲は、彼の第二の三十三天の帝釋の王の如し。是の如くに彼處の〔一〇〕須夜摩天は光明の威力・功德を具足し、多くの無量の諸の善業ある者は彼の山の中に於て、無量百千の天衆ありて、圍遶れて快樂を受け、種々の境界の功德を具足す。彼の須夜摩大福德天は第一の神通・第一の光明・第一の勢力は自業の化する所にて、五欲の功德皆悉く具足し、五欲の境界は皆な悉く愛す可く、六根にて樂しみを受く。彼處は是の如し須夜摩天は彼の天中に勝ぐれたり、善業を以ての故に。彼の山は是くの如く具足して愛すべし。彼の中に鳥ありて、一切の時常に歡喜するの鳥と名く。彼の鳥是くの如く自らの業にて、口にて語り、悕望に相應して偈を說いて言く。

智慧の心念に非らず、　亦復悕望にも非らず。　唯だ業能く樂しみを與へ。　樂みは作業に由つて得るなり。　勝ぐれし中にも復勝ぐれ、　愛すべき中にも愛すべきは、　持戒の善き果報にして、丈夫の作せしに從つて得るなり。　境界の門は搖ぎ動きて、　曲りし河の流れを下るが如し。　若し能く心を調御せば、　彼の天は是れ樂みの器なり。　自ら福德の業を作り、　自身にて修行し或は苦みを受け、　樂しみを受け、自らの身に是くの如く受くるなり。　惡業を造作る者

【一〇】須夜摩天（Suyāma）。又、須炎、須炎摩とも書く。天の名にして、妙善、妙時分と譯す。夜摩天王の名。

なくんば則ち天なけん。 智を離れなば解脫することなけん。 若し解脫を得んとする者は則ち悕望む所なく。 若し欲愛を離るゝ者は、慧則ち我所に非らず。 若し業の得し所の樂みは一切是れ垢濁れにて、若し盡滅を得し樂みは一切垢濁れず。 盡滅を得ざる樂みは垢濁れなることは則ち疑はず。 彼れは百劫を經るとも境界に足ることを知らざらん。 境界の樂みを受〔八〕くるが故に、樂に於て足ることを知らず。 若し常に欲に近づけば、數々更に增長せん。 彼の增長こと毒の如く、後時には苦惱を與へん。 欲は能く破壞を爲し、恒常に是れは退ぞくの因なり。 若し欲を捨つること能はずば、彼の天は甚だ懈怠なり。 若し功德の過を知らば、此れは是れ智慧の相なり。 功德の過を知らずんば則ち愚癡の相爲り。 若し功德の相を知れば、過をも亦是の如くに知らん。 眞に功德の過を知れば、恒常に樂みを離れざらん。 善人は此の欲、境界の過の功德を知る。 天は云何にして智を捨てて境界にて行樂みを受けんや。 彼の是の如きの鳥眞珠の網の中にて天を利益するが故に、已に此の偈を說けり。 又復彼の山は普く光明の輪に圍遶かれ、山上の種々なる諸の寶は輪旋て之れを纒遶れり。 種々の光明は閻浮提の虹の色の如くにて相ひ似たり。 若しは諸の天等彼の輪旋るを見、心に歡喜を生ずれば則ち輪旋ことありて身を遶りて生ず。 彼の一切の天は一一の廂を見て希有の心を生じ、無量の寶ありて天身を莊嚴れり。〔九〕山の一一の廂にて遊戲して樂みを受く。 種々勝れたる善業を修さめしを以ての故に、是の如くに樂みを受く。

又彼の山の中に有る所の諸殿に、四の園林ありて須彌樓の如し。 何等を四と爲すや。 一を端正莊嚴と名け、二を峰林と名づけ、三を甘露端嚴と名け、四を種雜と名く。 此等を名けて四種の園林と爲す。 流水・河池には妙へなる蓮華等あり、種々なる澗谷には種々の鳥ありて、音聲微妙なり。 諸の樹には華敷き、樹の鳥の音聲は皆悉く愛すべし。 构欄の重樓・種々なる堂殿ありて行々相應せり。

〔八〕受の字は、宋、元、明三本に依る。

〔九〕山の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

く更に勝れ、種々の衣に隨ひて其の色は轉勝れたり。

是の如く勝妙なる聚積崖山の威德普く勝れ、若しは須彌樓の妙寶山王の此の聚積崖山の光明の愛すべきに比べんと欲するも、妙寶の光明を百倍にするも及ばず、千倍するも及ばず、百千倍に至るも亦及ばざる所なり。彼の勝妙なる山は是の如き威德なり。何を以ての故に、善業の勝れしが故に、彼の山の光明も亦是の如く勝れたり。彼の夜摩天は淨戒勝るが故に、善業勝るが故に、是の勝因を以て、是の故に彼の山は普く勝れて愛すべし。又復彼の山普く眞珠の網もて周匝、遍く覆ひ、第一の善淨第一の光明なり。一切の天見るに皆利益を得。彼の眞珠の網は是の如く山を覆ひて、甚だ端嚴なり。大光明有り、彼に大城ありて如意念と名く眞珠の瓔珞もて莊嚴殊妙なり。是の如きの光明甚だ廣博爲り、多くの無量なる種々の諸鳥あり、雜瓔珞と名け、彼の網の中に住あり。若し天の放逸にして、放逸を行ふ時、彼の鳥は偈を說いて之れを教誡して言く。

種々の業の因の故に、今此の天身を生ぜり。　天を得るとも法を知らずんば後則ち心悔ひを生ぜん。　此の園林は樂むべく枝枸欄もて莊嚴り、身の此處に生まれし者の一切は是れ善果なり。　何かなる人の何かなる業を作すとも、業を作るに善業を作れば、彼々是の如く成じて、果も亦是の如くに得ん。　汝等天現に下・中・上等の樂を見たり。　何なる人も業の如く行はば、彼彼の是の如き果ならん。　癡にも種々に莊嚴り、癡に隨遂ひて行ふ人は、彼れは癡の爲に迷はされて、大なる怖畏れを見ず。　若しは癡かにて放逸なる者は、自らの利益を作さずして、種々の欲を喜樂び、種々なる果を悕求む。　天癡の爲に覆はるるが故に、諸の業を造作せず。　若し天雜果を愛せば、彼の天は持戒せず。　譬へば燈を捨離て唯だ光明のみを取らんと欲するが如く、彼の天も亦是の如く、因を離れて異なる果を求む。　若し因を以て果を求めなば、彼れ則ち常に樂みを受けん。　子なければ果得叵く、燈なくんば豈光あらんや。　戒

々に諸の寶にて莊嚴すれども色の光あることなくして、山と同色にて皆青色及び青の光明を作し、山と平等なる青き色・青き光にて皆悉く第一なり。聚積崖山の一廟は是くの如き青寶の色なり。又復是くの如き聚積崖山の第二廟の處は皆是れ玻瓈にて、若しは天種々に其の身を莊嚴り、種々に間錯らせて彼の廟に行くに、空に乘りて去る。身を擧げて種々に諸の寶にて莊嚴れども、光色あることなく、山と同じ色にて、謂く玻瓈色の光明なることも亦爾く、山と平等き彼の天の身の光は水池に入りしが如し。

又復、是くの如き聚積崖山の第三の廟の處は悉く皆是れ銀にて色及び光明の遍く至る處は五百由旬にて第一の白光なり。見る者は甚だ樂しく、若しは何かなる天も彼の廟に行くに空に乘つて去る。其の身の種々の莊嚴の色も皆同じく白色なり。彼の山の廟の光明の力を以ての故なり。

又復是くの如く聚積崖山の第四の廟の處の一切皆是れ閻浮那提眞金を體と爲し、光色日の如く、彼の廟の光明、其の焔の圓輪は千由旬を滿たす。若し何かなる天も彼の廟に行くに空に乘つて去れば、身も亦た同色なること又復是くの如し。聚積崖山の第五の廟の處は皆鉢頭摩眞寶の色にて、一切普く赤く、光明の遍く至ること二千由旬なり。若し何なる天も彼の廟に行くに空に乘つて去れば、身は同く赤色なり。彼の天若し赤寶の莊嚴を著せば、本の赤色滅して、百倍して更に赤し。彼の寶の廟の光明の力を以ての故なり。

又復、是の如く聚積崖山の第六の廟の處は皆是れ金剛眞寶の色にて、其の光遍く五千由旬に至り、楞の間の色は天の虹色の如きを出せり。若しは何なる天にても彼の廟に行くに、空に乘つて去れば、身も亦同色なり。是れ彼の山の光明の力を以ての故なり。

又復是の如く聚積崖山の第七廟の處は皆是れ七寶の種々なる雜色の光明にて、遍く百千由旬に至る。若しは何かなる天にても彼の廟に行くに空に乘りて去る。天の身に隨ひて諸の莊嚴る色は皆悉

夜摩天に復た地處ありて名けて積負と爲す。衆生は何なる業にて彼の地處に生まるるや。彼れ見聞して知るに、若しは善き丈夫は常に業の果を畏それ、心の性は正直にて、正見なり。邪まならずして正業を修行し、惡知識を捨てて、常に一切の時に佛・法・僧を念じ、微少なる惡業にも深く怖畏を生じ、殺、盜、婬をせず、乃至、道を行きて若しは婦女を見るとも、若しは歌、若しは舞の莊嚴を具し、聲を聞き已るとも著せず、心に愛念せず、心に善く觀察し、善からぬ心なく、亦喜樂ず。其の過を見已はりて心に分別せず。彼れ若しは是の如くんば邪の行ひを起さずして、身壞はれ命ち終りては、善道の夜摩天の中の積負の地處に生まれん。此の善業の人彼處に生まれ已はりて、樂しみを受けて斷たず。恒常に自身の光明を成就し、五欲の境界にて快樂を受けん。彼處に山ありて聚積崖と名け、七寶の諸の樹を以て莊嚴と爲し此の山の中に滿てり。無量百千の種々の鳥の衆あり、鳥には無量なる種々の妙なる色ありて彼の山を莊嚴り、彼の山の處に在り、種々の聲を出し、種々の處にて行ひ、見れば則ち愛すべく、多くの無量なる種々の妙へなる色ありて、種々の處にて行ひ、無量なる形相にて彼の山の中に滿てり。又復更に流水・河池には種々の蓮華あり、諸の澗谷の中には多くの種々の憶念と名くる樹あり、以て莊嚴を爲し、枝を交へて舍を爲し、種々の華果を皆悉く具足せり。其の山の量は三百由旬なり。諸の天子の衆・諸の天女の衆は處々に多饒く彼の山中に普くして皆愛樂すべし。第一の天衆の所住む處は是の如き山中の分の分地の處にて、一切は善分の分地なり。七の楞・七の廂に皆園林ありて、種々に間雜りて、彼の善分の處には七種の寶あり、彼の七種の寶には各一の廂を爲せり。

一の廂には青寶の光明遍くして六萬由旬に至り、是くの如きの光明一切の虛空に善遍くして青色なり。若しは天の憶念して山に上らんと欲する時は、天自ら普く身に種々なる寶を以て間錯へて莊嚴り、彼の是の如き聚積崖山に在りて、是の如き青寶の廂に行くに、空に乘つて去る。自らの身は種

ざりしや[七]。向に來りしかども乃ち是の我が神通力に障礙せられしが故に、汝等をして互ひに相見ざらしめき。汝今に於て還りて復迭ひに共に相ひ見ること本の如からん。彼の能く破壞する大力なる死王の、若し來至せば、百千億劫にも永く相ひ見ずして、汝等をして退ぞかしめ、生まれては地獄・餓鬼・畜生に在らしめて、更に是の如くに相ひ見ること得べからず。是の故に應さに放逸を行はざることを念ふべし。異心を起さざれ、常に當さに意を攝むべし、境界を樂しむこと勿れ』と。爾の時、多くの天是の如く聞き已はりて極めて厭離を生じ、心に厭離するが故に須陀洹を得たり。爾の時、天王牟修樓陀是の如きを知り已りて、甚だ大歡喜し、是の如き心を生ぜり。『我れ今作す所已に辨じ、自からの意は滿足せり。此處を捨離て嬉戲する處に向はん』と。雲處の遊行の諸の天衆等第一の善心もて、若しは已に須陀洹を得し者あれば放逸なる行ひをせず。若しは得ざる者は其の心則ち輕くして猶ほ放逸を行ひて、放逸なる行ひを樂しみ、放逸なる樂みを樂しむ。是の如き園林・流水・河池・山峰・澗谷にて諸の天女と共に種々なる樂しみを受けて死の畏れを慮はず。乃至、彼處にて樂しみを受けて遊戲し、歌舞し、喜笑し。愛すべき善業の和集せしも皆盡き、善業も盡き已はりて、應さに作すべきを悉く皆作さずして、復地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し餘業あれば人中に生まれて、常に一切の時に第一の富樂にて、第一の端正、第一の財物を具足して有す。一切の人に愛せられ、本性の心にて喜び、法行に隨順して嬉戲れ、歌舞し、諸の樂しみを受け、樂しみを寺舍の蓮華のある處の流水・河池にて行ふ。若しは王・大臣・王に等しき富者・一切の知識も皆共に善き友にて、諸の親・兄弟は心に皆愛樂す。常に妄語せずして、心常に正直にして、一切の善人と常に樂しみ共に行ひて、威儀を壞はさず。無量の功德を皆悉く具足し、是の如くに彼の人の身の聚りを具足して、是くの如き身を得たり。餘業を以ての故なればなり。

又、彼の比丘は業の果報を知りて、夜摩天の有する所の地處を觀ず。彼れ見聞して知るに、彼の

【七】やの字は耶にて宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

天女は常に少くして老ひず。我れ此の天女と常に共に相ひ隨ひて終るとも別るゝこと能はず』と。是くの如く常に諸の境界の樂しみの爲に誑惑され、第一の大力は能く破壞を爲し、死王の既に至れば諸の天女も能く遮へ、能く救ふこと非じ。彼の思量する心も亦た救ふこと能はず、常に別れざる心も亦た救ふこと能はず。彼の思惟する所の一切皆空なり。一切は無常にて、堅からず、牢からずして、既に放逸の爲めに破壞せられ已はりて、地獄・餓鬼・畜生に生まれん。癡なる爲に壞はされて此の大なる苦しみを致さん。又復彼の天は無始の時より輪轉して生まれ、退ぞき、數々懊惱せるも、常に誑惑せられ、愚癡にて覺らず』と。

爾の時、天王牟修樓陀は法に相應せる語、義に相應せる語もて是の如く說き已れり。若しは彼處の天の智慧ある者は則ち彼れの語に於て、猶ほし甘露の如き垢なき清淨きを攝取りて心に在り、放逸を捨離て、欲に深く厭きたり。彼の天は是の如く心に正しく念ひ已はりて、即ち天王牟修樓陀に向ひて偈を說きて言はく。

若しは利益し及び實にて、如しは相應して異ならず。天は是の如き語を作し給ふ。是れ利益の因にて、能く心に寂靜を攝む。是の如き者は樂しみを得、樂しみにより樂しみの處に至り、必らず樂しみを得んこと疑ふことなけん。若しは此こに於て顚倒し、放逸し、破壞する天、是くの如き癡なる心の者は必らず當さに地獄に墮ちん。

是の如く天子既に天王に向ひて、是の如く說き已はりて厭離の心を生ぜり。汝の諸の天子又復重ねて爾く天王に問ふて言はく『我れ今疑あり。此の殿舍の一切の天衆は何處に去りしや』と。爾の時、天王牟修樓陀其の調伏して、心に厭離を生ず、已に放逸を捨てしを見、即ち神通を攝むるに、彼の諸の天衆迭互ひに相ひ見、既に相見已はりて、彼れ此れ迭ひに共に歡喜の心を生ぜり。彼の諸の天衆心に歡喜び已はり、牟修樓陀夜摩天王之れに告げて言はく『汝等は各各迭ひに相ひ見

隨逐ひて行き暫くも離れず。若しは畏れざる者は、彼れ則ち後死せんとする時に臨みては、口・面破壞し、眼目轉じ動き、諸根乾燥し、一切の諸の親・兄弟・妻子眷屬に捨てらる。爾の時則ち退きて愛別離の火の爲めに燒かれ、極めて大苦して死せん。彼の一切の天は一切の時に於て、無量に分別し、五欲現前れ、歌舞し戲笑し、歡喜て園林の中に於て遊行せん。是の如くに樂しみを受け境界に放逸することは、善友・知識の面を見るが如くにて其の果を知らず。彼れ後時に於て悔ひの火に燒かれ、我が身は云何にして善業を作さざりしや、何かにして布施せざりしや、何かにして持戒せざりしや、何かにして智を修さめざりしや。是の如く三種を我れ何かにして作さざりしや。放逸に由るが故に、我れ今孤獨にして死せん。諸の親及び兄弟等を捨離し、死の爲めに攝められ、是の如くにして將さに去りて、此の世間の第一の愛する處、無量の境界に樂しみを受くる處を離れんとす。是くの如く後時に心に悔ひの惱みを生じ、乃至、是くの如くに能く天を破壞す。大力の死王の未だ來らざる間に、汝等、畢竟して放逸を行ふこと莫かれ。放逸を捨つるが故に必らず安隱を得て彼の死する時に於て悔の火に燒然れる所とならず。此くの如きの道は第一の安隱にて、凡ての諸の一切の衰惱せし者は、施・戒・智を修むるを樂しみて多く作せば、彼の時此れに依つて救ひを蒙りて脫れることを得ん。是の依ること、是の救ひ、是の大力は伴ふ。若しは死の至りし時必定して免かれず、必らず能く破壞し、彼の來りて至る時は禁制すべからず、免かれて離るべからずして、能く一切の衆生の命を奪はん。是の如き惡るき死に何かにして方便せざるや。精進し勤修て來らざりしめよ。一切の放逸の惡の未だ至らざる時は甚だ賢善なり。大毒は火の如し、放逸も亦爾り。汝等諸天は是の放逸に使はれ、又復諸天は皆放逸に屬せん。彼の放逸の怨は隨逐ひ捨てられずして、園林の中、山峰の上に於て遊戲して行はん。一切の諸法は皆悉く無常なりとも、是れを常と謂ひて、是の如き心を生ぜん。『我れ常に彼の諸の天女の衆と共に相ひ隨ひて樂しみを受けん。是の如く

ん。常に業の羂の爲に縛られ牽挽れる者は、一切の能く救ふて此の苦しみを脫せしむる者なけん。去來の法を見るに、業に由つて生死あり、去來するは皆業の因にて得る所なり。愚癡なるが故に貪欲なり、乃至終りて退く時生死の大苦を受けんも、而も覺知とること能はず。愚癡に覆はれしを以つての故に、樂しみを受くるも厭足くことなく、足ることを知らざるを以ての故に、是の如く常に破壞す。初めにも非らず、中、後にも非らず、今にも非らず、後世にも非らず、常に欲を修習する者は無明の故に流轉す。善業の盡きしを以ての故に、此處より必らず退かん、放逸の毒を食ひし者は癡なるが故に、覺知らず。此の身は念念に變ずるとも、癡かなるを以ての故に覺とらずして、後に退ぞかんと欲する時乃ち苦惱を覺知らんのみ。若し苦しみを怖畏れ、及び死を怖畏るる者は應さに正法を念ふべし。是の如くんば必らず樂しみを得ん。

爾の時、彼の天は既に天王牟修樓陀の是の如くに說くを聞き已はりて、放逸なる行ひより少時心離れたり。復天王牟修樓陀に白して是の言を作さく。『天主なる大王よ、此の一切の天は皆悉く見ず。豈に一念の間に皆破壞し一切を失はんや。願くば王よ實に說き給へ』と。爾の時、天王牟修樓陀即ち之れに告げて言はく『如來は善業にて還へりて是の如く去り給へり。業盡くるを以ての故なり。一切は業法にて決定すること是の如し。一切の衆生は迭ひに相ひ別離して、心に懊惱を生ず。老・病・死等の是くの如き三種に相ひ對する法の命と、少と、病なきとあり。若し何なる丈夫、或は人、或は天なるも、心に放逸せず、放逸なる行ひをなさずんば、彼れ是くの如く三種の畏るべきに於て則ち能く覺知らん。此くの如く三種の命と少と無病とは放逸なるを以ての故に能く皆失はしむ。一切の諸天は畢竟して是の如し。死の未だ來らざる間に勤行め、精進みて諸の方便を作せ。三種の精進とは謂く施と戒と智なり。此の三は能く此の三の大なる畏れを除き、無量に分別し常に

は一切の過の中最も勝上れたり。何を以ての故に、放逸の過の爲めに破壞せられし者は一切の諸の善法を散失ふが故なり。彼の是の如き天は自らの心を自ら誑かす。是の如き癡なる天は後時に心に悔ひん』と。爾の時、彼處の一切の諸天既に天王牟修樓陀より是の如く聞き已りて、一一の心の中に皆厭離を生じ、皆怖畏れを生じて、各天王牟修樓陀に白して是の言を作さく『天主なる大王よ。云何にして是の如く一念の頃に一切の天は退ぞきしや。此は未だ曾つてあらず。一切の諸天は一念の頃に是の如く皆退ぞきて、雲雲の遊行する地處は盡く空し。此れ甚だ苦なり。何なる方便を以て我れをして退ぞかざらしめ、苦惱を受けざらしめ、愛するものと別離せざらしめ。我れをして別離の苦しみを受けざらしめ、我れをして地獄・餓鬼・畜生等の中に墮せしめざるや』と。爾の時、天王牟修樓陀即ち彼の天の爲に偈を說きて言はく。

放逸なる道を行ふ者は賢善を見ざること猶ほし氷を鑚む者の火を則ち得べからざるが如し。因を離るれば則ち果なく、因なくんば果を得ることなし、放逸にて功德を求むるとも究竟して獲べからず。　放逸は生を破壞す、是の如く轉じて行ふ天は、彼れ癡にて善業を失ひて惡道の處に墮ちん。　若し是の癡なる心あれば愛欲に於て樂しみを受け、　後に衰惱を得已はりて、其の心則ち悔ひを生ぜん。　欲の火に燒かれし者は境界の爲に誑らかされて、寂靜なる道の一切の上樂なる處を得じ。　若しは世間の欲樂・若しは愛の生ずる所の樂しみは、一の內の樂しみの十六分の一にも及ばず。　猶かなる生は第一となし、白法は生死を離れ、愛の盡くるは第一の樂にて、畢竟しては不退の樂しみなり。　怖畏ずして足るを知る、此れを修むる者は求めず。　是くの如き禪定の樂しみは更に樂みの比ぶべきものなし。　若しは愛の爲に縛られず、癡[六]に壞されざる者は、彼れ則ち有の海を渡りて、常に一切の樂しみを受けん。　若し心の欲に住む者は、彼れ則ち樂しみを受けず。　是れ一切の苦しみの器にて、地獄の處に入ら

【六】癡の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

り勝さること、譬へば日殿に一切の餘殿少分も及ばざるが如し。是の如くに彼の殿を最も殊勝と爲して、餘天の殿少分も及ばず。彼れ是の如き殿にて自分の功德を皆悉く具足し、虛空の中を行き、彼の地處の雲雲の遊行し樂みを受くる地處に向ふに、須陀洹の天相ひ隨ひて共に往く。須陀洹の聖人の天は放逸を行ふこと少きを以ての故に與に相ひ隨ひて彼の地處に向ふ。

爾の時、彼處にて放逸を行ひし天は既に天王牟修樓陀を見て敬重心を生じ速爾に前に進み、一切皆牟修樓陀夜摩天王に向ひ、相ひ與に奉迎す、或は百、或は千、百百千千なり。是の如くに一切は天王を奉迎す。爾の時、天王牟修樓陀既に彼の殿に到りて卽ち神變を作し、變化力の故に彼れを迎へし天をして忽爾の中に各相ひ見ざらしめ、唯自身を見て獨り天王を[四]迎ふ。其の樂音に於て一切聞えず、種々の妙へなる色も皆悉く見えず。王の神通を以ての故に、爾く彼の天をして各各是くの如く心をあら令使む。『唯我れのみ此こに在りて、自餘の諸天何かに所在を爲すや。恒常に我と共に此の殿の中に坐せしに、今何處に去りしや。一切見えず』と。是の如く念ひ已はりて、天王牟修樓陀に向ふに、唯だ天王及び須陀洹のものを見るのみにて餘の者を見ず。彼の一切の天は各々皆希有なる心を生じ、心に怖畏を生じて、皆天王牟修樓陀に白して是の如き言を作さく。『我が此の殿の中にて共に住みし諸の天は今何處に向ひて去りしやを知らず』と。爾の時、天王牟修樓陀彼の天に告げて言く『是の如き等の天の一切は放逸にて、放逸なる行ひを行ひ、業の盡きしを以ての故に地獄・餓鬼・畜生に退墮き、或は人中に生まる。若しは放逸なる天放逸なる行ひを行ひて、放逸に壞はされ、境界の愛の爲めに破壞され、心五欲の諸の功德を樂しむが故に、境界の火に於て心念分別して自ら焰然として自らの心の燧により此の熾火を生ず。業風に吹かれ、[五]若しは廣殿の中にて心に未だ厭足くことなく、五つの焰火の爲に燒然かれ已はり、復た地獄の大火の爲めに燒かれて種々なる苦みを受く。自ら心誑らかされ、身壞はれ命終りては地獄の中に生まる。此の放逸の過

【四】迎の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【五】若の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

ち念ひし時に於て、彼の天發し行くに、鵝に乘る者・孔雀に乘る者あり、復他の養ひし鳥に乘る者あり、華に乘る者あり、鴨に乘る者あり。復た異なる天の鴛鴦に乘る者あり、復命命鳥に乘る者あり、樹に乘る者あり、是くの如く異異れる種々のものに乘りて、勝れて心に歡喜し、樂童にて遊戲す。復種々なる形服にて莊嚴れる諸の天女等と共に喜笑し、歌舞し、蓮華の妙なる鬘を用[三]ひて其の體に絡ひ、第一の樂みを受け、勝れし歡喜の心にて天女は讃歎し、空に乘りて行き、天の遊戲する殿舍の中に向ふ。既に行き、到り已りて彼れ此れ迭ひに共に種々に樂みを受く。是くの如くに遊戲し放逸を行ふが故に其の心定まらず。牟修樓陀夜摩天王其の放逸なるを見て之れを觀察し、放逸なる天の如くに放逸なる行ひを觀じて、是の如き心を生ぜり。『我れ今、何なる方便を以て能く是くの如き放逸なる天を利益し安樂ならしめんや』と。爾の時、天王牟修樓陀は復微細なる意にて、深く思惟して曰く『今餘天の須陀洹の者をして我と共に相ひ隨はしめ、籌量り語論ぜしめん。彼の地の處の如くに雲雲の遊行の地處の中にて種々に樂みを受けて放逸を行ふ。云何にして善法は彼の天を攝取し、自他を利益し、彼や此を皆作し、我れ及び彼をして皆過罪を離れしむるや。我れは善友を爲りて彼をして利益せしめ、法を說きて他を利せん。是の善知識若しは惡業を敎へば則ち是れ怨家にて、能く地獄の惡業を和集しめむ』と。爾の時、天王牟修樓陀は須陀洹のものと共に既に籌量り已はりて、自ら神通力もて妙へなる殿を化作し、共に彼の殿に昇り彼れに向ひて去るに、第一の河池・流水を具足し、園林の諸の樹皆悉く備はりて有り。無量の種々のもの皆悉く愛す可く、是の如き等の勝妙たる事ありて、共に彼處の雲雲の遊行する地處の殿に向へば則ち下劣となりて、百倍に如かず、千倍にも如かず。何を以ての故に、善業の力の故なり。夜摩天の中の一切の諸天の有する所の善業(の中)、牟修樓陀夜摩天王の善業最も勝れたり。善業の勝れし者は神通亦勝ぐれたり。此の因緣を以て、其の殿則ち勝れて妙へなる光明めり。一切の夜摩の諸天の有する所の殿舍よ

【三】用の字は、明本に依る。

らの眷屬と共に是の如く歌舞し、種々に嬉戲し、五欲の功德を皆悉く具さに有せる境界に、樂みを受けて和集り、還へり去りぬ。來し時の道に著して自らの所止に到り、雲の處にて遊行す。本の所住みし處に既に還へり、到り已はりて、復餘天と共に種々に樂みを受け、嬉戲し遊行して、廣殿と名くるに向ふ。彼の殿の愛すべきことを今具足して說かんに、內には二十那由他の舍ありて、種々色の異異れる形相の寶の光明ありて集まり、多くの天衆・諸の天女の衆ありて、是の如き妙なる殿にて、天の念ふ所に隨ひて一切を皆得彼の天子の心に念ふ所の如くに一切を皆得。是の如き色・是の如き形相の園林・華池には多く無量百千の鳥の衆らあつて、以て莊嚴を爲し、七寶の山峰あり。彼の殿の是の如きは天の善業の故なり。若しは天の憶念して遊行を欲する時は殿幷びに園林・蓮華・河池・種々の天樹の虛空を飛行すること、鳥の如くして、異なることなし。若し天憶念すれば此の殿動き去りて、我れは則ち樂みを受く。卽ち念ふ時に飛行して去る。若しは天の憶念して是くの如き心を起せば、我が須ふる所に隨ひて飲食を具足す。則ち河流ありて皆是の天食を無量種々に皆悉く具足す。念ふに隨ひて色・香・味あり、具さに河を滿たして流出す。彼の天子の本の善業を以ての故なり。若し善業なくんば此の境界も無けん。

又復此の天、是くの如き念ひを生ずらく。『我が此の殿の內は轉じて更に寬博め、廣さ百由旬ならん。』と。卽ち念ふ時に於いて、多くの無量種々の愛すべき諸の流水の河・妙なる蓮華池幷びに諸の澗谷ありて房舍を具足し、種々なる園林・妙なる蓮華等を皆悉く具足す。是の如く寬博きを彼の天見已はりて、轉じて更に歡喜び、是の如き心を生ぜり。『我れ此處に於て遊行し、戲樂びて、我れ心に歡喜せり。更に餘天と共に此の中にて樂みを受けたり。復餘天をして此の殿中に於て我れと共に戲樂せしめん。若しは夜摩王の天衆をして此こに來りて我と共に樂みを受けしめん』と。卽ち彼の天子心に念ひを生ぜし時、牟修樓陀夜摩天王の所有る天衆は其の殿の內に向ひて共に遊戲す。卽

る業にて生死の縛めを造作す。乃至卽ち生まる時には必定して已に死に屬す。種々なる癡は心を覆ひて、此こに於て怖ることを知らず。若しは退ぞく時の已に到りて能く第一の有を破るとも、彼の癡は心を覺らず。死の苦みは畏る可きも、歡喜は放逸を生じ、數々に生死を受くるとも、癡者は覺知せず。境界は能く天を誑らかし、境界の蛇は能く齧り、境界の愛は癡を生ずるとも、天は常に覺知せず。退く時は大いに怖畏るとも、生まるる苦しみを最も大なりとし、退ぞくには是くの如き苦み無し、是くの如く大なるは生まるゝ苦みなり。唯だ天中にて成就せる業風に吹かれ、輪轉して大苦を受く。丈夫は死なんとするに、心は誑らかされて自在ならず、父にも非らず、亦た母にも非らず。知識にも非らず、親にも非らず。若し死する時既に至れば、同伴するものあることなく、本性は是くの如くに誑かされて、一切は伴侶なし。唯だ意是の如くに惡くして、各各迭ひに相ひ誑らかされ、餘には非らず、亦親に非らず、能く救ひを爲す者も死する時既に到り已れば、親も亦親に非らざるが如し。汝若し親に非らざるを見ば亦大快樂を受けん。死王の力自在にして、公けに大樂を奪ひ去る。境界は心をして迷はしめ、常に欲の爲めに使はれ、未だ苦惱を覺らずと雖も、必定ず得んことを疑はざれ。

牟修樓陀夜摩天王は是の如き等の眞實の法を以て、彼の是の如く始めて生まれし天子を敎へぬ。時に彼の天子聞くことを得已はりて、心に厭離を生じ、須臾の間に於て還へりて、復歌舞し戯樂して喜笑し。更に復一切の世間に染著せり。愚癡なる凡夫の心、無常なるが故に、心定まらざるが故に、樂しみの力の勝れしを以て其の心を覆ふが故に、愛の爲て使はるが故に、心百倍に動く此の因緣を以て天は放逸を行ふ。是の如きを以ての故に、乃至少法も心の中に在らず。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子彼の天王牟修樓陀の堂殿の所に於て、種々に戯樂し、自の

於て皆悉く普ねく識れり。牟修樓陀は始めて生まれし天を見るに、眼則ち轉ぜずして自ら餘の舊天即便ち彼れと語る。始めて生まれし天子に是の如き言を作さく。『大王は今是の如くに汝を看給ふ。何を以て跪づかざるや』と。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子、聞き已はりて卽ち跪づきぬ。爾の時、天王牟修樓陀其の跪きしを見已はりて、告げて言はく『大僊よ。汝今始めて夜摩天の地に生れたり。汝今夜摩天の地の第一の樂しき處にあるべし。中に於て樂みを受けん、汝三種の善業を修行せしを以て此處に生まることを得たり。汝、今善くぞ來たれり。善業の故に、此の中にて樂みを受け、此の天の處に於て久しく住し、多くの時に放逸なる行ひをする勿れ』と。牟修樓陀夜摩天王始めて生まれし天の爲に、偈を說いて言はく。

始めて生まれし天子。　若しは此こに　生まれしを樂しみ愛せば、　彼の退ぞき苦しむの十六分の中の一にも及ばず。　味は少く、　怖畏は多し。　常に丈夫を誑惑すること乾闥婆城の如し。　欲樂の味も亦た爾かり。　此の欲は極めて惡と爲し、　能く衆生を破壞す。　是の故に智ある者、　心に常に欲を信ぜず。

牟修樓陀夜摩天王、是くの如くに彼の始めて生まれし天子を敎ふ。始めて生まれし天子是くの如くにして牟修樓陀夜摩天王に啓白して、是の言を作さく『實に爾り。天王。我れ初め此の天の中に是くの如き過あるを知らざりき。天中に云何なる法を行ふやを知らず、他の餘天の行作す所の如くに、我れ是の如く作して、我れ自らは知らざりき』と。爾の時、天王牟修樓陀は復た偈を說いて言はく。

若しは死の到る時に至れば、　更に餘の同伴するもの無く、　死後に異なる處に去るに、　共に行く者あること無し。　衆生の心は種々にて、　若しは千心の性欲ありて、　是くの如き異異

下劣なる威德も猶ほ帝釋よりも勝れり。何かに況んや、天王牟修樓陀の有する所の威德の內外淸淨なるに於てをや。彼れは旣に是の如し。云何がして喩ふべけんや。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子、卽ち遙に牟修樓陀天王を見し時に、色・樂・威德の一切微劣なり。旣に天王を見、自身を觀已はりて、是の如く思惟すらく。『我が身は彼の天王の身より億百千倍、百千千倍に微劣れり。第一に勝れし善業を行ひしを以ての故に、此の天王牟修樓陀の上妙なる身を得んには如かず。此れにも是の如き殊勝なる威德あり、何かに況はんや、聞きし所の名けて寂靜と爲すは此の王より勝ぐれしに於てをや。牟修樓陀の有する所の威德は皆悉く具足し、上上なる天業にて次第に勝れ勝れて、轉々として微妙なり』と。是の如く少時に思惟し已りて復た專ら歌等の音聲を聽きぬ。爾の時、是の如く始めて生まれし天子、更に復前に進み、安詳に徐ろに牟修樓陀夜摩天王の所住む處に詣たる。牟修樓陀夜摩天王の周匝には多く勝妙なる身の色あり　、第一に莊嚴り、容貌端正にして殊勝なる威德・好き身・妙なる音あり、七千の天女身に近づきて、歌舞し喜笑して遊行せり。自餘の天女の[三]少しく身より遠き者は數を計ふべからず。嬉戲し娛樂して皆天酒を飮む。彼れ此れ共に迭ひに意念は同心にして、彼の諸の天女は各天王牟修樓陀と共に欲樂を受くることを得て、心に是の知を作せり。『王は唯だ我れのみを愛し、更に餘を愛せず。我れに於て樂しみを得、餘女に於てせず。唯だ我が欲のみ勝れて餘は則ち爾らず』と。夜摩天の欲は口にて說けば則ち成りて、身にて交合せず。彼の諸の天女皆是の意ありて、一一皆謂はく『牟修樓陀夜摩天王は唯だ獨り之れのみを愛し給ふ』と。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子、更に復前みて牟修樓陀夜摩天王に近づき、無量百千の天衆に圍遶ることあるを見るに、無量種に勝妙なる功德を具足することありて、舌にて語りては天衆を調伏せり。牟修樓陀夜摩天王は一切の天若しは舊くに生まれし者、若しは始めて生まれし者に

【三】少の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

卷の第三十八

觀天品第六之十七

夜摩天之三

爾の時、是の如く初めて生まれし天子、是の如き念ひを作さく。『彼の天には大樂ありて、此の間の夜摩天王より勝れたり』と。是の如く思惟して須臾の間に於て心動きて定まらず。境界の樂みに於て、心に愛樂を生じ、復た更に〔一〕染著して諸の樂しき處を觀、普く天衆の何なる者、何なる者に於て、樂みを受くるやの事を一切皆見る。次第に安詳に彼處を遊歷し、是の如くして次に牟修樓陀夜摩天王の所住む處に近づきぬ。王彼處に於て、無量百千多億の天衆に圍遶れて樂みを受く。多くの無量の諸の天女の衆ありて手に蓮華を執り、圍遶きて供養せり。彼の天王の色は比類すべからずして、與等き色なく、威德の光明功德を具足し、彼の王の出すは一切の天衆の有する所の光明より勝ぐれ、日の一切の星等より勝れて衆星に圍遶るるが如くにして夜摩天王も亦復是の如く威德殊勝たり。師子座に在りて、其の座は輭き觸にて、綵等より成るに非らず、純に是れ妙なる寶の希有の色にて、形服の莊嚴威德を具足し、無量種の聲の歌樂の音は異異なり、嬉戲して聞く。欲の功德は勝れ、心に樂みを受く。夜摩天の中に是の如き境界より更に勝れし者なく、帝釋王の有する所の功德より勝ぐれたり。牟修樓陀夜摩天王に五十の聚りし勝妙なる光明ありて、身より出し皆焰を起すことあり。彼の帝釋王、兩肩の上に於て二處より光を出すとも、彼の光明の聚りは此れよりも則ち劣れり。牟修樓陀夜摩天王の大根の門の衆は善業を以ての故に、是の如く和合して、帝釋王の有する所の功德より百倍して勝れたり。是の如く勝ぐれしが故に比類すべからず。彼の色は是くの如く譬喩すべきものなく、樂しみ及び境界も亦た是くの如く勝れて譬喩すべからず。彼の王の眷屬の

〔一〕染の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

ぐ。我が有する所の受用の樂しみ、一切の業の果皆悉く殊勝なり。彼れは此處の夜摩天王より威徳の勢力・及びの一切の種々皆勝ぐれて我が上に在りて住めり。一切の凡[一五]夫は皆往くこと能はず、其の境界に非らず。彼の天の一切は我れより。皆勝ぐれたり若し天具に福徳の力・大神通力を有すれば則ち能く往きて到らん。一切の天皆能く彼に到ること非けん』と。

【一五】夫の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

心に歡喜を生じて亦た爾く上に去りぬ。復餘天ありて、虛空中に於て諸の天の華を雨ふらし。諸の天女と共に歌舞し、嬉戲して亦復彼の牟修樓陀夜摩天王の住む所の殿舍に向ひ、亦爾く上に去りぬ。彼の始めて生まれし天は是の如く無量種々に差別せる無量の遊戲を皆悉く具さに見、亦共に同じく行きて天女の前に在り。是の如くにして行くに、彼の無量の天は皆美しき語を以て其れと共に言說せり。

爾の時、是の如く始めて生まれし天遙かに遠き處を見るに、勝れし光明ありて百千の日より過ぎて、自ら餘の凡夫の眼に觀ること能はず。復彼處に無量の音聲を聞くに、聲に四種あり。一は相應、二は眞正、三は和合、四は平等なり。是の如き音聲を彼の天聞き已はりて心に歡喜を生じ、天女に問ふて言はく『今彼處を見るに、勝妙て愛すべき大光明ありて彼處に在り。是の如く遙かに彼處を見るに、是の如き勝上し音聲は美妙にして平等、和合せる歌の聲なり。復舞戲することあり。云何にして是の如きや』と。爾の時、天女卽便ち彼の始めて生まれし天子に語りて、是の如き言を作さく『夜摩天王は彼處にて樂しみを受け、多く無量百千の天衆あり。復無量の諸の天女の衆ありて、一切の天衆に讚歎せらること、猶し[一四]兜率の寂靜天王の天の樂しみを受くるが如し』と。

爾の時、是の如く始めに生まれし天子既に是の語を聞きて、則ち第一の希有の心を生じ、是くの如く念言すらく『寂靜王を除き、是の如きの樂みを受く、更に何處にありて是の如きの樂みを受けんや』と。時に、彼の是の如く初めに生まれし天子、既に思念し已はりて、天女に語げて言はく『誰を寂靜と名づけ、何處に於て住するや我れ此れを見已はりて、當に往きて之れを見るべし』と。時に彼の天女、其の語を聞き已はりて、心に則ち思惟して是の如き念ひを作さく、『此れ始めて生まれしが故に、更に大勢力あるを知らず。故に是の如き言を作すならん。我れ寂靜を見し時に、彼の天女も復之を語りて言へり。兜率陀天は我が上に在りて、我より勝れたること百千倍を過

【一四】兜率陀天（Tuṣita-deva）。略して兜率と云ふ。欲界の第四天にして夜摩天の上に在り。知足、喜足と譯す。五欲の樂を滿足に受けて樂むに由る。內、外二院に分れて、內院は後身の菩薩の淨土にして、現に彌勒菩薩の修行處と云はれ、外院は普通の天衆の欲樂處なり。

りて地の處々に在り。池の莊嚴ありて、是の如きの功德を悉く皆具足す。我れ天子と共に倶に行き、遊戲して諸の欲樂を受けん』と。爾の時、是の如く始めて生まれし天子、彼の天女より是の語を聞き已りて、天女に語げて言はく『我れ汝が意に隨ひて、皆是くの如く作さん』と。是の如く說き已りて、彼の坐せる處より起ちて、樂しみを受けんが爲めの故に、一切の天女彼の天子と共に、園林の中に行き、種々の音聲の天寶の樂器手に在りて執持ち、彼の天子と共に遊行して放逸せり。

爾の時、天子彼の天女と共に遊行して放逸す。復た其の餘の天子、天女ありて共に遊戲を行ひ、合ひ會ひ相ひ逢ふ。時に、二天子見れば則ち相ひ愛し、迭ひに共に語說る。彼此の天女も亦復是の如く心に迭ひに相ひ愛し、一切和合す。復異なる林に向ふに、是の如き林を戲樂林と名け、彼の林の量は三千由旬、彼の林は無量百千億那由他の數あり。諸の天子の衆彼の林の中に滿ち。歡喜林の曠野の如くにて異なることなし。是くの如く種々の功德を具足して戲樂林と名く、天の遊行する處を種々に具足し、彼の兩朋の天は共に彼處を見るに、皆悉く本より來かた未だ是の如きを見ず、亦未だ曾つて聞かざるところにて、譬喩すべからず。彼の林を見已りて歡喜心を生じて、面、眼目等皆喜びの狀を有す。時に、始めて生まれし天及び天女、即ち彼の天に語げて、是くの如きの言を作さく『此の是くの如き等は昔より來かた未だ見ず』と。

是の如く說き已はりて兩朋の天子、兩朋の天女は頭に天鬘を著け、身に栴檀を塗り、天堂殿に坐して虛空に上昇り、歌舞し喜笑して迭ひに共に遊戲し、相ひ與共に牟修樓陀夜摩天王に詣れり。是くの如くに上に去るに、復餘天幷びに其の天女ありて、手に蓮華を執り天處に坐して虛空に上昇り、歌舞し喜笑し、迭ひに共に戲樂し、相ひ與共に牟修樓陀夜摩天王に詣りて、亦爾かく上に去れり。復餘天ありて、能く微細に行ひ、手には箜篌を執りて、能く無量百千の山を穿ち過ぎ行きても障礙せず。諸の天女と共に歌舞し嬉戲して、亦復彼の牟修樓陀夜摩天王の住む所の殿舍に向ひ、

なり。心の戒の清淨にして垢に染むこと無きが故なり。此の夜摩天の是くの如き天女は比類すべからざる一切を具足す。彼の是の如き處には二種の過あり。謂はく、無常なる欲なり。唯だ少分に微かなる樂みの說く可きことあり。若しは愚癡なる人禁戒を受持しても、有るよりも悕望て是の如き心を作さく『願くは我れ戒を持して、天の中に生まるゝことか得ん』と。彼の心を迴んが爲め我れ無常にて退き、及び愛するものと離ると說く。是の如き等の過なり。何を以ての故に、若し少しにても心に有るよりも悕望を起せば、一切の善法は皆悉く散失せん。一切の有の中に、處の常なる者なし。下・上・傍ら、廂し、の若しは常に動かず、破壞せざる者は是の處にあることなし。一切を分別し、分別せざることなし。此の因緣を以て、彼の天の報を說きて『愛すべき處に非らずと』す。

爾の時、彼處の諸の天女等は是の如き始めて生まれし天子を圍遶き、歌舞し、遊戲して種々に娛樂す。爾の時、天子は本より未だ曾つて見ず、心に自から思惟す。『此れは誰れにか屬し、來りて我れに近くや』と。彼の天子の心に念ふに隨ひ、即ち心に念ふ時に、善業を以ての故に、彼の天女は言へり。『天は我が主たり。何を以て我等と共に語を說かざるや。天は是れ我が夫なり。天の須る所の隨に我れ、給使を爲し、天をして樂しみを受けしめん』と。時に、彼の天子既に聞くことを得已りて、是の如き言を作さく。『汝若し我れに屬せば、今來り近づきて此の林の中に在るべし。何を以ての故に、此の天の處は是れ樂しみを受くる地にて、此の天に生まれし者は此處に樂みを受くればなり』と。時に彼の天女、即ち天子を抱きて、無量種々に快樂を受け已り、天女復起つて是の如き言を作さく。『我れ天子と共に園林の中に在りて處々に遊行せん。此の園林の中にて、多饒の無量種々なる天衆の眼に見る所に隨ひて種々に愛す可し。種々なる諸の鳥の音聲は樂しむべく、多くの種種の流水・河池・蓮華の莊嚴あり、多くの百千の種々の山峰ありて、其の峰高峻にして種々の七寶に多く光明ありて、山峰を莊嚴せり。種々の山谷の處々の嚴りは好く、多くの種々の諸の鳥の音聲あ

子身壞はれ命終りて夜摩天に生まれ、彼の雲處遊行の處に在り。彼處に生まれ已りて、身の光明は日と異ならずして、善業の樂みを受け、比ひなき樂みを受け、無量なる境界にて諸の快樂を受く。卽ち初めて生まれし時に甚だ大歡喜して、心に思惟を生ずらく。『我れ今云何して獨り此處に在るや』と。卽ち念ひを生ぜし時に、諸の天女を見るに樹林の中に在りて、樹の種々の枝には寶鈴を具足し、鈴には妙なる聲あり、地の色は猶し火洋の眞金の如し。地處に銀、玻璨の色の如きあり。多く百千の妙なる蓮華池ありて以て莊嚴と爲し、彼の地分の處の林樹は柔輭にして百千の鳥ありて美しき妙なる聲を出せり。彼の諸の天女是の如き林の中に遊戲して樂しみを受く。卽ち彼の天子の心に念ふ時に、林の間にて速に妙なる莊嚴の具を出して自ら莊嚴り、蓮華の鬘を以て其の頭を莊嚴り、其の身には皆種々なる色の衣を著けて、天子の所に到たる。既に到り近き已り、種々に莊嚴りて之れを圍遶き、種々の歌を微妙なる音聲にて詠じ、心に極めて愛染し、天子を娛樂せしめ、無量なる樂しみを具さに具足して有せり。彼の諸の天女は是の如く種々に天子を娛樂せしむ。是の如き天子は彼の天女を本より未だ曾つて見ず。既に見ることを得已はりて、是の如く思惟す。『此れは是れ何かなる人にて、何處より來りて、誰にか繫屬し、誰れの爲に來りしや』と。

既に來りて見已はり、其の具するものを見るに、種々なる色の衣あり、種々なる寶ありて其の身を莊嚴り、其の手には無量なる樂器を執持る、且く少分を喩んに、何處、何處の三十三天にある所の天女の歌樂の聲も比を爲すことを得ず。何かに況んや、三種の功德具足し、無量なる善業にて得し所の果に於いてをや。夜摩の天女は三十三天の天女の歌を詠ずる音聲より甚だ殊勝たり。色少き勢力、身の形量、歌の聲にて樂みを受くること、園林の諸の樹・流水河池・須陀の食・勝妙なる堂舍・戲樂の處一切皆な勝れ、上上にて次第に、乃至、他化自在天の中の色少き勢力、身の形量、歌の聲にて樂みを受くること、是の如き等の事の一切は皆勝ぐれたり。何を以ての故に、業の果重きが故

酒を飲み、天女の衆と共に歌舞し、遊戲して種々の樂みを受く。復た銀の葉を摘り、用つて赤き酒を飲む。酒の色は猶し蓮華の色の如く、香味淸冷にして一切を具足し、諸の天女と共に歌戲して樂みを受く。自らの善業の力の感じ致す所なり。復異なる天ありて、亦彼處の蓮華林の中の極めて愛すべき處に在り。是の如き諸天は五欲の境界に諸の快樂を受け、靑寶色の蓮華の葉を摘みて、諸の天女と共に用つて天酒を飲む。復異なる天ありて、彼の樹の下に入り、天の華に覆はれ、旣に天の酒を飲みて怡然として快樂す。園林の中に於て諸の天女と共に遊行して放逸す。色香味ある天の果の美汁を飲み、歡喜て、歌笑す。復異なる天ありて金銀・玻瓈・靑寶の樹の枝もて覆はれし蔭にて舍を爲し。諸の天女と共に歌ひ笑つて嬉戲して、天の快樂を受く。復異なる天ありて河の岸に依止り、鳥の音聲の處は柔軟き地の妙なる觸の地に在り。其處には華を生じ、彼の華を摘み取るに、共の華は五色の別あるもの、合せ有するものにして、諸の天女と共に取り已はりて之れを嗅ぐ。彼の諸の天女は天子に近づき歌舞し戲笑す。復異なる天ありて種々なる寶石の地の上に在り。所謂、靑寶・玻瓈・金銀なり。是の如き地處にて嬉戲れ、遊行て諸の快樂を受く。乃至、集め作せし善業を受け盡くし、善業盡き已はりて彼處より退ぞく。彼處より退き已りて惡道に墮ち、生まれて地獄・餓鬼・畜生に在り。若し餘業あれば、人の中に生まることを得。常に樂しき處に生まれて則ち第一の端正の色あり、大心・大富にて、國主と爲るを得。餘業を以ての故なればなり。

又彼の比丘は業の果報を知りて、次に復夜摩天の中にある所の地處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復地處あり、彼處を名けて雲處遊行と爲す。衆生何かなる業にて彼の地處に生まるゝや。彼れ見聞して知るに、若しは人直心にして本性は正直なり。三寶を信じて殺さず、盜まず、一切の不善なる邪行を行はず、樂まず、行はず、亦た多く作さず。諸の婦女を見るとも、乃至、欲意の心を生ぜず、婬欲を念はず。婬欲の心を捨てゝ、亦た分別せざること猶し毒を捨つるが如し。此の善男

欲の功德にて供養を爲す。牟修樓陀夜摩天王は是くの如く樂みを受く。夜摩天王牟修樓陀は天子を必ず見る。何を以ての故に、此處の境界は牟修樓陀夜摩天王則ち是れ其の主なればなり。此一切の天は皆彼の王に屬せり。我等は之れに依り、猶し父母の如くに、此の一切の夜摩天の中にある所の地處に在り』と。彼の始めて生まれし天は既に此れを聞き已りて、諸の天女等に圍遶れて彼の林の中に入る。既に林に入り已はりて下、中の色を見るに、種々の形服にて莊嚴れる諸天は一切皆な五欲の功德を受け、行食して倶に樂み、一切に皆な五功德の食あり。彼の遊戯を見るに、多くの無量なる諸の天女の衆より、其の餘の諸天は美聲なる語ばにて說き、無量百千の種々なる功德にて莊嚴を爲せり。復七寶の妙なる樹の莊嚴あり、復た種々なる行樹の莊嚴あり。彼處には多く憶念に隨ふ樹ありて、天の念ふ所あれば彼の樹より得。是くの如く功德の寶樹を具足す。彼の始めて生まれし天に無量種の勝妙たる功德ありて皆悉く具足し、五境界の樂しみも亦た皆具足す。彼の天は見已はりて眼著して甚だ樂み、勝れし愛樂を生じ、處々を遍く見ん。是くの如く見已はりて、諸の天女と共に彼の大林に入り大林に入り已れば、豐かなる飲食の河ありて百千に莊嚴り、種々なる色の鳥には種々なる音聲あり。彼の諸の天女の歌聲は普遍く耳に其の樂を聞き、鳥の聲と合す。

彼の始めて生まれし天復異なる處に於て、蓮華の林を見るに、希有にして殊に勝れ、長さ三由旬、廣さ二由旬なり。彼の大林を見るに、金の蓮華あり、無量なる形相にて、無量なる色ありて以て莊嚴と爲す。譬へば、秋の時の虛空の中の諸の曜きの莊嚴の如し。是の如くに、是の如き百千の天女多饒具足して、歌舞し、遊戯し、五樂の音聲にて諸の快樂を受け、迭相に心に念ひ、迭相に附近きて一念も離れず。恒常に一に迭相に愛樂しむ。是くの如く天等は遊戯して樂みを受け、鳥も亦た是くの如く、鵝鴨・鴛鴦の是くの如き等の鳥に無量種ありて、無量の羣衆は蓮華の林に在りて、清淨なる水の中にて處々に遊戯す。彼の河岸に於て其處に天あり、金の葉を摘み取り、用つて天の

に生まるや。彼れ見聞して知るに、若しは人善き心にて、善き深き直心なり。殺・盜・婬をせず。彼の人善業にて身壞れ命終りては彼の地處に生まる。始めて彼こに生まれし時に、即ち天中にて種々の樹林・清流・水河・蓮華池等を見るに、勝妙殊異にして甚だ愛樂すべし。衆の鳥の音聲あり、香を聞き、味を知り、觸等皆勝れて愛すべく、樂しむべし。彼の妙なる色を見、妙なる聲等を聞きて、是くの如き言を作さく『今此こに見る所の種々の樹林・種々の愛すべき清流・水河・蓮華池等の種々の妙なる色は、昔未だ有らざる所にして、甚だ愛すべしと爲し、甚だ樂むべしと爲す。無量種あるも、更に相ひ似ること無く、心に厭足ず。今此こに聞く所の種々の歌聲、衆の鳥の音等で悉く皆勝妙にて、昔より未だあらざる所なり。甚だ愛すべしと爲し、甚だ樂むべしと爲す。無量種あるも更に相ひ似るもの無く、心に厭足ず。今聞く所の香は昔より未だあらざる所にして、亦甚だ愛すべく、亦た甚だ樂しむ可し。無量種あるも、更に相ひ似たるもの無く、心に厭足ず。此の味も亦爾く、昔より未だあらざる所にして、亦甚だ愛すべく、亦た甚だ樂しむべし。無量種あるも更に相ひ似たるもの無く、心に厭足ず。此の觸も亦た爾く、昔より未だ曾つてあらざるところにして、亦甚だ愛すべく、亦た甚だ樂しむべし。無量種あるも更に相ひ似たるもの無く、心に厭足ず。彼の天は是くの如くに、內心に五欲の境界を思惟し、常に是くの如き勝妙なる五境界に、樂しみ嬉戲し、遊行せんことを念じ欲して、心に厭足ことなし』と。彼處に有る所の一切の天女は聞き已りて語げて言く『此の天世間の法は常に是くの如し。一切の境界にて一切は常に爾り。樂しまざる處なく。樂しまざる時なし。此くの如き勝れし相を處々に普遍く具足して、皆五欲の功德あり、無量種ありて念ふに隨ひて皆な得。常に天の樂しみを受けて更らに與等ものなし。天此の林を見已はりて、是くの如き希有の心を生ぜり。何に況んや中に入るに於いてをや。牟修樓陀天王の前は復是より過ぎたり。彼處は九億那由他【二】百千の種々に莊嚴り、【三】妙なる色の天女は歌舞を具足し、歡喜せる心面なり。五

【二】百の字は、元、明二本に依れり。
【三】妙の字は、元、明二本に依れり。

に。牟修樓陀よ。彼の大僊の迦那迦牟尼世尊と名くる如きは、是の如くに彼の夜摩天王樂見の爲に法を說けり。彼の是くの如き法は一切如來の法にて、皆是くの如く異なる法ならず。汝の如きは前に舊天の所に於いて聞きしなり。此れを偈ありて言はく。

深信して三寶を信じ、無量數に勤修めば、先きに於て天に生まることを得、終に涅槃の果を得ん。

此等は則ち是れ十二の天道にて恒常に修行すること是くの如くんば、必定して果を得ること疑はじ』と。爾の時、天王牟修牟陀、幷に八萬の天、佛世尊より此の法門を聞き、聞き已りては皆須陀洹果を得たり。爾の時、天王牟修樓陀は世尊の足に禮し、偈を說いて言はく。

我れ惡道を脫るゝことを得しは、佛世尊に依りてなり。　一切の天孤獨にして、如來の法は救度ひ給ふ。　我れ[一]朝日に果を得て、佛法中に入りぬ。　天と共に是の如く入りて、生死の畏の處を過ぐ。

牟修樓陀は是の如く說き已はりて虛空に飛昇し、幷に諸の天衆と夜摩天の居る所の地處に向へり。彼の天の一切は是の如くに皆到れり。旣に天中に到りて猶ほ故らに樂みを受けて遊行し、嬉戲ぶ。一生の命の業は盡き已りて則ち退く。惡道閉塞して人中に生まれ、第一の富樂にて、第一に端正なり。勝大なる心あり、一切は國土の中に於いて皆勝れたり。若しは是の須陀洹に非らざる者あれば、彼の天退き已はりて、其の業の如く行ひて、或は地獄・餓鬼・畜生に生まれ、若しは餘業の故に人中に生まるを得。彼も亦た是くの如く大富樂を得て、種々に莊嚴れり。餘業を以ての故なればなり。

又彼の比丘、業の果報を知り、次に復、夜摩天の中に有る所の地處を觀察す。彼れ見聞して知るに、夜摩天の中に復地處ありて、彼處を名けて乘處遊行と爲す。衆生は何かなる業にて彼の地處

【一】朝日に。朝に日ののぼるに闇を破るがごとくすみやかに迷の世間より佛法に入りて果報を得ることならん。

未だ聞かざる者は聞くことを得、已に聞きし者は堅固にして諸の惡業を捨離し、身壞はれては天に生まることを得ん。

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ第十の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るやと。謂はく柔輭の心なり。牟修樓陀よ。彼の柔輭なる心に四功德あり。一は他に於て怨嫉を生ぜず。二は作すと雖も堅固ならず。三は瞋恚の爲に惱まさる所とならず。四は身壞はれ、命終りて天に生まれん。此れをありて言はく。

若し善淨して垢なければ、諸の過は心に著せず。瞋り、垢も汚すこと能はずして、死後天に生まることを得ん。

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ十一の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るや。謂く、業の果を信ずるなり。業の果を信ずとは、一切の惡業を皆悉く捨離し。乃至、微塵等の惡をも起さず、唯だ惡業を見るのみにても則ち怖畏る。彼の人は善業、不善業の果をも一切皆な知る。彼の人は知り已はりて善業を造作して、不善業を捨つ。彼の人恒常に習ひて善業を作し、身壞はれ命終りては天上に生まることを得ん。之れを偈ありて言はく。

若し業の果を知る者は、常に微細の義を見ん。彼れの惡に染まらざる所は、空の泥に汚されざるが如し。

牟修樓陀よ。何なるは復是れ十二の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るや。謂く。三寶を深く心に信じ敬ふなり。顚倒せざる信にて、彼れは三寶を深く心に信じ敬ふ。顚倒ならざるが故に、無量なる功德にて多くの無量なる百百の功德あり。此の一功德は則ち一切の諸の餘の功德より勝れり。謂はく、此の丈夫は先に人の樂みを受けて終に涅槃に到れり。謂く天と天女とは放逸なる行ひをせず。若し放逸なる天は世間の樂みに非らず、出世の樂に非らず。是の義を以ての故

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ第六の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るや。所謂、正しき心なり。正しき心の者は能く善業を作し、善く思惟する者は善く言說を語る。總じて略して此の正しき心の功德を說けり。此れを偈ありて言はく。

若し善き正しき心の者は、常に法に順つて觀察し、過の爲に使はざること、日の光りの闇を除くが如し。

牟修樓陀よ。凡そ一切法の根本を爲すは、謂はく善き正しき心なり。牟修樓陀よ。何かなるは復た是れ第七の天道にて、彼の道に著せんに天上に到るを得るや。所謂、正見なり。正見の丈夫は能く涅槃に到る。何かに況んや天に於てをや。彼れ若し少しく身口意の業あれば、一切は是くの如くに衆生を利益して、天の中に生まることを得、乃至涅槃せん。此れを偈ありて言はく。

唯だ正見のみ勝れりと爲す。　何かなる人にも隨ひて心にあり、俗人も亦た是くの如くんば、生死の縛を脫ることを得ん。

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ第八の天道にて彼の道に著して天上に到るを得るや。所謂、善からざる知識を遠離するなり。三種の過りなく、善人を捨てず、戒を同ふするが爲めの故なり。諸の惡の因緣の一切生ぜず。餘の勝大なる過をも亦更に得ず。此れを偈ありて言はく。

惡知識に近づく者は、彼れ則ち樂みを得じ。　惡知識に近づき巳りては廣く不饒益を得ん。

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ第九の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るや。謂く、正法を聞くなり。略して說くに法を聞けば、七の功德を攝す。一は聞くことを得て、未だ異る法を聞かず。二は聞く所堅固にして失なはず。三は一切の惡業を捨離す。四は諸の聖りの見ることを樂む所なり。五は深き心にて如來を信じ敬まふなり。六は則ち壽命を增長することを得。七は身壞はれ、命終りては天に生れん。此れを偈ありて言はく。

れ命終りては天上に生まれん。此の第二の道は天世間に至るなり。此れを偈ありて言はく。

　布施して人に愛せられ、〔一〇〕思を増長し、後時には天に生まれて富む。　布施の果は是くの如し。

牟修樓陀よ。何なるを復是れ第三の天道にて、彼の道に著せんに天上に到ることを得るや。所謂、忍辱にて、能く忍ぶ人には五功德あり。所謂、五とは諍はず懟ず、此れ初めの功德なり。一切に能く其の物を偸盜むこと無し。此れ二の功德なり。一切の人に愛せらる。此れ三の功德なり。多く悲心あり。此れ四の功德なり。身壞はれ、命終はりて善道の天世界の中に生まることを得。此れ五の功德なり。此れを偈ありて言はく。

　忍辱に相應して行ひ、悲心にて亦た怖れず。　一切の人に愛せられて、身壞はれては天に生まることを得ん。

牟修樓陀よ。何かなるは復是れ第四の天道にて、彼の道に著して天上に到ることを得るや。所謂、美しき語なり。牟修樓陀よ。是の如き美しき語に六つの功德あり。一に一切人に愛せらる。二に怖畏の處なし。三に面は常に淸淨なり。四に善き名稱を得。五に行ひて則ち慮らず、六に身壞はれ命終はりては天上に生まれん。牟修樓陀よ。此れは是れ美しき語の六種の功德なり。此れを偈ありて言はく。

　一切の人に愛せられ、增長て善き名稱あり。　普く面は甚だ端嚴にて、身壞はれば則ち天に生まるなり。

牟修樓陀よ。何かなるは復た是れ第五の天道にして、彼の道に著して天上に到ることを得るや。所謂、一切衆生を憐愍なり。此の善男子は乃至、終りては涅槃に到るを得ん。我れは彼の人と等しき功德のもの無しと說く。此れを偈ありて言はく。

　一切の衆生に於いて、悲心は父母の如し。　彼の人には憐愍の實常に心の中に在りて住めり。

【一〇】思(Cint)。指底と音譯す。心をして造作せしむる作用に名く。

を禮し已はりて住して一面に在りき。

爾の時、世尊、是の如く告げて言はく『牟修樓陀よ。今に於て、汝の爲に法を說かん。初も中も後も善く、義も善く、語も善く。獨り法を具足し、鮮白にして清淨なり。此の法門を天乘樂と名く。汝、當に諦に聽き、善く之れを思念すべし。我れ汝の爲めに說かん』と。牟修樓陀夜摩天王は敎を受けて言はく『是の如し。世尊、我れ今聞かんことを樂ふ』と。

爾の時、世尊是の如く說きて言はく『何なる法門をば天乘の樂と名くるや。此れに十二あり。牟修樓陀よ。何等を名けて十二の天道と爲すや。若しは善男子の彼の道に住する者は、彼れは正に丈夫にて能く天道に上らんこと、猶ほし世間の官道に著く者は則ち城に入るを得るが如し。怖畏を離れ、疑慮を離れ、是くの如くにて身口意等を壞はさずして十二道を行へば則ち天に至ることを得ん。是くの如きの丈夫は天中に入らん。何等をか十二とするや。一を實道と名く。若し彼の道に著すれば天上に到ることを得ん。牟修樓陀よ。彼の實道に五功德あり。何等を五と爲すや。一に實語なり。實を說いて丈夫は一切の人に信ぜらる。二に壞はされず。常に一切の時にて、人に能く壞はされず。三に清淨なり。常に一切の時に色の清淨なるに名く。四に重んずべし。常に一切の時に天に貴重せらる。五に上生す。身壞はれ、命終りては天上に生まる。此れを偈ありて言ふ。

實語り、常に調御ふ。　恒に天の爲に供養し、一切の世間に愛せられ、　後時には天に生まるを得ん。

牟修樓陀よ。此れは初の天道なり。牟修樓陀よ。何るを復た第二の天道と爲し、彼の道に著せんに天上に到るを得るや。所謂、布施して清淨に、垢なく、破らず、壞さず、果報を悕はず。是の如く熏じて思ふ。此れを則ち名けて第二の天道と爲す。此の善業の人は天の中に至るを得ん。此の第二の道に三の功德あり。所謂一は一切の人に愛せられ、常に自ら熏じて思ひ、心に歡喜を生じ、身壞

【九】天乘。五乘の一。能く十善を修して之れに乘じて六天に生じ、能く禪を修して之れに乘じて色界無色界の諸天に生ずるを天乘と名く。

からずして[六]釋迦牟尼如來の出世し給ふを聞く。是の如くにて彼處にて牟修樓陀夜摩天王は及び釋迦牟尼佛の所とに於て正法を聞くを得たり。牟修樓陀夜摩天王は次第に傳へ聞き、舊天の邊の於て是の如く傳へ聞けり。是の如く一切は聞きし所の事の如し。是の如く一切を皆な悉く具さに有せり。如しは汝、今大蓮華の中に希有の事を見る。我れは今是の如く爲に說かん。又復、釋迦牟尼世尊は今に於て出でて閻浮提の中に在りて衆の爲に法を說き給ふ。汝今應に彼こに到りて法を聽くべし。彼の過去に迦那迦牟尼如來と名けしが如くに、世尊の說く所を得て、必定して疑なければ必らず解脫を得ん。爾の時、彼の牟修樓陀夜摩天王と名くるは宿舊の天より是の如く聞き已りて、心に歡喜を生じ、敬重心を生ず。過去久遠の迦那迦牟尼と名くる佛說を次第に傳へ來りて、今聞くことを得たり。是の如きを以ての故に、我れ心に歡喜し、心に清淨を得、舊天に於て傳へ聞くを得已りしを以ての故に、歡喜を生じ、心に清淨なるを得たり。何かに況んや、現に釋迦牟尼如來世尊を見奉りて、佛より法を聞くに於てをや』と。爾の時、彼の天は是の如く念じ已りて、八萬の天子は相ひ與共に[七]波羅奈國に向ふ。佛世尊の無比なる色を見るに、[八]三十七菩提分法を以て其の身を莊嚴することは猶し金山の如く、威德は焰然として、一切の衆生は皆利益を蒙り、一切皆、無量百千の眷屬に圍遶れ爲に法を說いて四諦と相應せるを見る。爾の時、彼の牟修樓陀夜摩天王と名づくるは八萬の天衆と共に佛の所とに至る。佛の所とに到り已りて頭頂にて足を禮す。爾の時、佛は牟修樓陀夜摩天王に告げて喚言し給はく『善くぞ來れり、牟修樓陀。汝已に曾つて迦那迦牟尼と名づくる佛の法の修多羅を說くを聞き、是の如く聞に已りて、來りて此處に到る』と。

　爾の時、彼の牟修樓陀夜摩天王と名くるは是の如く念ひて曰く『佛は一切智にてましまし、極めて微細なる智、障礙すること無き智にてまします。如しは我れ、過去の天の中の事は盡く皆解知せり』と。牟修樓陀は念ひ已りて、心に喜こび、八萬の天衆の一切は皆共に更に世尊を禮し、世尊

【六】釋迦牟尼(Sakyamuni)。釋迦族の聖者の意。古來之を能仁寂默と譯す。釋迦は能と譯し、牟尼を「瑞應本起經」には儒と譯し、「修行本起經」には仁と譯し、之を合して能儒又は能仁と云ふ。「慧苑音義」には牟尼を寂默と譯せり。其後釋迦牟尼を能仁寂默と義譯して、能仁の慈悲あるが故に涅槃に住せず、寂默の智慧あるが故に生死に住せずと解するに至れり。これ菩薩の不住涅槃の思想を以て、釋尊を見たるものなり。

【七】波羅奈(Vārāṇasī)。又、波羅奈、波羅奈斯とも書く。恆河の流域にあればなり。江繞と譯す。鹿野園は此の中に在り。今の Benares なり。

【八】三十七菩提分法。三十七道品の異名なり。涅槃に到る道路の資糧に三十七種あり、即ち四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道なり。是等の三十七法は菩提を成就する行法の分類なれば菩提分法と名く。

必らず破壞し、常に諸の苦惱を受けん。若し樂みを憶念し、放逸に壞さるる者あらば、彼れは離散の時に於て則ち多く苦惱を受けん。

彼の佛世尊は是の如く、是の如くに無量に分別し、種々に調御したまふ。樂見よ。天王は是の如き因縁にて、一切法に於て皆障礙せず。一切を知見し、天衆に圍遶まれ、種々に調御して、彼の諸天をして放逸を捨離せしむ。若しは、諸天ありて、放逸に縛られ、自在を得ず。乃至、退ぞく時に、夜摩天王の二萬の天衆は佛世尊に從ひ、正法を聞き已りて、一切は皆な須陀洹果を得たり。

爾の時、世尊是の如く思念したまへり『我れは應に作すべき所を是の如く作し已れり。更らに何にを所作して他を利益せん』と。爾の時、世尊は未來世を見て、是の如く思量したまはく『更に何かに所作して如しは未來世に、苦惱の衆生を利益し安樂にせん』と。世尊は是の如くにして又復大蓮華の內の神通の化せし所に於て、更に是くの如き天の妙れたる神通を作し、天の一種と與もに住して滅せず、飛鳥ありて復た爲に偈を說かしむ。彼れは是くの如き天の神通力を以て天を調伏し已りて、是くの如き言を作さく『如しくは未來世にて、樂見よ。天王は彼こに於て退き已らん、復た天王ありて其の王を名けて牟修樓陀夜摩天王と曰はん。未來に當に生まれて放逸なる行ひを行ふべし。當に彼の時に於て、善き衆生ありて、彼れは一時に於て遊戲の處に出で、滑高山中にて彼の山に徐ろに上り、彼の山に上り已りて、次に復た彼の大蓮華に上り已り、亦た是の如き蓮華の台の上に坐せん。彼の大蓮華は是れ我が化せし所なり。彼の天は見已りて希有の心を生じて其の中に入る。彼れは種々に甚だ愛樂すべき大蓮華の中に入り、復彼れより出でて他天に向ひて說く。彼の時、舊天は前に於て次第に先きに曾つて聞き來りて、亦復彼の牟修樓陀夜摩天王に向つて是くの如くに說けり。爾の時に當りて、牟修樓陀夜摩天王は既に聞くことを得已りて、佛世尊を信じ、彼の佛法の善根の種子を信ず。是こに於て、乃至涅槃に到るを得。彼の天は是の如く信心を生じ已り、久し

不善業の故に地獄・餓鬼・畜生に生まる。是の故に樂見よ。若し人身を得んと欲せば、放逸を行ふことと莫かれ。何を以ての故に、身命は無常にして富樂も亦た爾かり。當に是の如く念ふべし。放逸を行ふこと勿れ。何を以ての故に、多くの無量百千の天衆ありて、放逸なる行ひを以て、是の故に退墮けり。是の如く放逸の道を行ふこと勿れ。愚癡なる者は此の道を行ひて、善男子に非らず。一切の生ある者は必らず定んで死に歸せん。死は現に前に在り、老も亦是の如く、病も亦是の如し。愛して離ることも亦爾り。善・不善の業、富樂も亦た爾かり。是の如き一切の饒益せざる過りは常に隨ひて、一切の衆生を離れず。爾の時、世尊は偈を說いて言はく。

放逸の毒樹に三枝は住して上に在り。　謂る老・病・死の物にて、常に其の上に在りて住す。老等も惱ますこと能はざる、丈夫の善く行ふ者は、若しは放逸の行ひをせずして、彼れは涅槃の道を行ふ。　放逸をせざる大なる斧は常に能く諸の過を斫り、過を解脫するが故に、無上なる樂みを得ん。　若し放逸にして樂みを受くれば、彼の樂みも常に怖畏れなり。　若し彼の放逸を離れなば、彼の樂みは常に退かざらん。　是の如く百み百みて[四]到るも、放逸に誑らかされて未だ覺知らざるを以ての故に、今猶ほ四種の顚倒の見を離れざることありて、住して放逸の上に在り。　放逸を捨離するが故に則ち世間の怨みを失ふ。　此く無量に分別し、無量の怖畏に逼られ、生死に轉じて苦みを行ふは、皆彼の放逸に由る。　若し一の放逸を離るれば則ち樂みを得て退かじ。　一切の無漏の法も放逸なるが故に能く失ふ。　天中にて[五]此の放逸は上上に轉じて行ふ。　何かにして放逸にて癡なる天は解脫することを得る能はざるや。　彼れは此れを善く思惟し、種々に分別し已りて、如し自ら利益を作さば、後時には則ち悔ひじ。若しは天、若し樂みを受け、若しは其の餘の少き法は此れは有爲の相の法にて、應に知るべし。皆な無常なることを。　若しは法、有爲の數なれば、彼れは畢竟して失滅して、後時には

【四】到の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。
【五】此の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

の放逸なる行ひの因にて能く放逸を生ず。

是の如く、樂見よ。復第八の放逸なる行ひの因ありて能く放逸を生ず。所謂、衆生若しは種々なる無量なる樂みを得已りて、彼の樂しき事を喜樂び、貪著して、常に動かずと謂ひ、常に安隱なりと謂ひ、破壞せずと謂ひて、彼れは常に是の如きの樂みを憶念し、身口意の業に常に不善を行ひて、應に作すべきこと、應に作すべからざることを知らず、是の法なるを知らず、法に非らざるを知らず、覺らず、知らずして、破壞して苦惱す。地獄・餓鬼・畜生の無量百千に分別せる苦惱を念はず、一切を念はずして、應に念ふべからざる者を而も便ち之れを念ふ。是の如くに死滅の法を念はず、一切世間の生死の中に、死し能く亂を作して而も念ふことを知らず。是の如きの衆生は樂みの爲に誑らかされ、是の如く惡に貪著して樂む衆生は後時に死に至らんのみ。乃ち悔ひを生ずるも、悔ひの火は自ら身を燒き壞はし、命終りては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ第八の放逸なる行ひの因にて、能く放逸を生ず。

是の如く、樂見よ。復第九の放逸なる行ひの因ありて能く放逸を生ず。所謂、種々に樂み、樂みの心は天人の中にて愛の爲に誑らかされて佛・法・衆僧に歸依することを知らず、禁戒を持たず、佛の法を聽かず、聖律に住せず、應に作すべき所の法を作すことを知らず、而かも常に應に作すべからざる法を聞くことを喜びて、正法に入らずして未來世の罪を畏れず、後世死後の苦しみを見ず、自らを利益することを失ひ、怨みに心誑らかされて、身壞はれ命終りては惡道に墮ちて、地獄の中に生まる。此れは是れ第九の放逸の行ひの因にて能く放逸を生ずるなり。樂見よ、當に知るべし。此の富樂も常に非らず、恒に非らず、破壞せざるに非らず。是くの如く樂見よ。夜摩天王は過去無量に、此こに於て已に退きて彼れは何處にか去らん。彼れは自らの業の果成就せるが故のみ。彼れは善業・不善業の羂に繫縛れしを以ての故に、生死に輪轉す。善業を以ての故に天人の中に生まれ、

の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。是の如し、樂見よ。惡しき知識に近づき、與共に和合して淨よき戒を毀破ち、惡しき行ひを行ひ、不善を思惟し、惡行を造作す。是の如き衆生は惡しき知識に近づき、放逸なる行ひを行ひて、身を壞はして命終りては、惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ第五の放逸なる行ひの因にて、能く放逸を生ず。復た次に、樂見よ。復第五の逸逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。所謂、衆生は無量種に行ひ、無量種の意にて、決定せし意にて善業を造作することなし。是の如き衆生は一定の業なく、是の如き衆生は定まらずして業を作り、一切の業を作るとも悉く皆散失す。世間の業、出世間の業に於て、彼の一切の業を究竟まで作さず、布施すること能はず、福業を作さず、善を思惟せず、放逸を以て過る。是の故に戒を犯かして、身を壞はし、命終りては惡道に墮ち地獄の中に生まる。此れは是れ第五の放逸なる行ひの因にて、能く放逸を生ず。

復、第六の放逸なる行ひの因ありて能く放逸を生ず。所謂、衆生は正法を捨離し、聖諦を捨離し、乃至、八聖道分を捨離して行作する所ありて、不善を觀察す。是の如し、樂見よ。是の如き衆生は放逸なる行ひを以て其の心を亂すが故に、身壞はれ命終はりては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ第六の放逸なる行ひの因にて能く放逸を生ず。

復、第七の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。所謂味を貪るなり。何處、何處にて彼の諸の味に著するや。彼處、彼處にて心に樂みて常に念ひ、彼れの心に隨ひて作す。是の如き衆生は更に異りたる念ひなく、善業を作さず、正しき戒を持たず、心は常に他に請ひ喚めきて食を與へらるるを樂しみ、常に味を貪るが故に、味の爲に誑らかされて善業を作さず。苦・無常・空・無我等の此の四種の中に於いて、一も亦念はずして、唯不善なる顚倒の法を念ふ。一切の作す所は自らを利益せず。是くの如き衆生は身壞はれ、命終りては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ第七

を壞る。所謂、擧動しき心にて審諦せず。彼の眼は見已りて則ち分別を生じ、數々是の如くに憶念し思惟して、[三]放逸を樂みて更らに異たるを緣ぜず、常に是くの如くに不善なる行ひを作す。是れ善念に非らずして心意は錯亂たり。彼の放逸をする者は放逸を以ての故に身壞はれ、命終りては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ、第二の放逸なる行ひの因にて、能く放逸を生ず。

復第三の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。所謂、實ならず、未だ見ず、未だ聞かず、本とより未だ曾つて有らざるに、唯だ心に念ずるのみありて、心に分別を生じ或は欲に依止し、或は癡に依止す。彼れは是の如く念ひ、是の如く思惟し、心は常に彼れを緣じ、心に常に彼れを念ふ。第一の法を善く思惟せずして、以て自ら心を亂す。此れは是れ第三の放逸なる行ひの因にして、能く放逸を生じ、諸の衆生を縛り、能く衆生を誑かし、身・口・意をして不善なる行ひを行はしむ。身壞はれ、命終りては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。

復、第四の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。能く一切の放逸なる衆生をして、身を壞はし、命終りては惡道に墮ちて地獄の中に生まれしむ。是くの如し、樂見よ。何なるは、第四の放逸の因なりや。所謂、恒常に婦女ヲ見るを樂み、莊嚴の實ならざる色を見るを樂み、實ならざる色に於いて、心に愛樂を生じ、其の歌舞するを見ては心に分別を生じ、彼れは則ち心に歡び、是の如く分別して、身口意に善業を作さず。彼の放逸なる者は身壞はれ、命終はりては惡道に墮ちて地獄の中に生まる。此れは是れ第四の放逸なる行ひの因にて、能く放逸を生ず。復た、第四の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を生ず。所謂、喜びで種々の園林を樂み、蓮華の池を樂み、或は種々なる諸の華の樹林ヲ樂み、見已りて心に樂み、中に在りて戲むれ樂み、中に在りて遊行して善事を念はず、心意を正しくせず、彼は放逸を行ひて、放逸に誑らかせられ、身壞はれ命終はりては惡道に墮ち地獄の中に生まる。此れは是れ第四の放逸なる行ひの因にて能く放逸を生ず。復た、第五

【三】放逸の二字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

四千の小王に圍遶れるが如く、又亦日の光明に圍遶れるが如し。諸の聲聞の衆は是の如く圍遶けり。如來世尊は第一に勝妙て稱量べからず。威德の光明にて、大蓮華の台の上に於て坐し給ふ。

爾の時、樂見夜摩天王は身に法衣を著し、服の一厢を整へ合掌して佛に向ひ、正しく一面に住せり。世尊は告げて言はく『汝をして今放逸を捨離せしめん』と。爾の時、樂見は一處に坐し已れり。彼の迦那迦牟尼世尊は卽ち勇勝き畏れざる音聲を出し、一の夜摩に皆な悉く遍滿し。樂見に告げて言はく『我れ今法を說かん。初・中・後は善く、義は善く、語は善く、獨り法を具足し、鮮白にて梵行す。是の如くに說かん。汝よ、今諦かに聽け、正念にて善思せよ。我れ今まに於いて善く汝の爲に說かん』と。時に、樂見は是の如く言はく。『世尊よ。願樂は、聞かんと欲す』と。爾の時、世尊は樂見等の天衆の爲めに說きて言へり。『九種の因ありて能く放逸を生ず。彼の放逸に於いて樂しき行ひを多く作し、能く世間を壞はし、愚癡なる凡夫は身壞はれて命終はれば、惡道に墮ち、地獄・餓鬼・畜生の中にて、生まれし因緣を以て大苦惱を受け、生死に繫縛れて涅槃の安隱なる樂みを得ず、利益を得ず。何等を九の因とするや。一者は所謂、放逸を樂みて放逸を行ひ、常に放逸を行ひて聖人に近よらず。身口意の業を調攝こと能はず、根の行ひを攝めず、自ら身・口・意等を正すこと能はずして、不善を境界に行はしめて、常に喜び樂しみ、不善の法を聞き、佛の正法を樂しまず。此れは是れ放逸の行ひの初めの因にて能く放逸を生ず。若し放逸を行へば、愚癡なる衆生は身に善行をせず、口に善行をせず、意に善行をせず。身・口・意に善行せざるを以ての故に、身・口・意等は不善の業に和集せられ、癡人は放逸に誑らかせられ、身壞はれ命終りなば惡道に墮ち、生まれて地獄・餓鬼・畜生に在り。若し放逸を捨つれば、是れ善き丈夫にて常に放逸を捨つ。若し善を求るむ者は應さに放逸を捨つべし。此れは是れ、初めの因の能く放逸を生ずるなり。

復次に、樂見よ。第二の放逸なる行ひの因ありて、能く放逸を起し已りて能く善根

巻の第三十七

觀天品第六之十六

夜摩天之二

爾の時、世尊は彼の心を調伏て、淳熟せるを知り已はりて、即ち聲聞をして[1]天眼力を以て之れを調伏せしむ。爾の時、聲聞は樂見に告げて言はく『樂見よ。當に知るべし。此れは佛世尊幷びに諸の天人・魔・及び沙門・若しは婆羅門・一切世間の諸天及び人、阿修羅の師にてましませり。此の佛世尊は一切を悉く知り給へり、一切を悉く見、常に一切世間の爲に法を說き給へり。初・中・後は善く、義善く、語善く、獨り法を具足し、鮮白く清淨くして、出世の法を說きて寂靜なり、乃至、涅槃に到る。所謂、此の色は[2]苦なり、此の色は集なり。此の色は滅なり、此の色は滅道なり。今、汝ぢ夜摩天衆の爲に法を說かんが爲の故に來り、利益し、安樂にし、饒益せんが故に來りぬ』と。

時に、彼の樂見夜摩天王は聲聞の所に於て、是の如く聞き已りて喚んで言はく『大僊よ。我れ今往きて佛世尊の所に至らん。世尊をいかに供養するかを知らず。我れ今に於ては儀式を解せず。云何にして供養するや』と。時に、彼の聲聞は聞き已りて答へて言はく『樂見天王よ。來りて世尊に近けよ』と。樂見は聞き已りて、冠の莊嚴を捨て、心を善く調伏て、諸根を寂靜にし、一心正念に服の左肩を整へ、右膝を地に著し、頭面にて敬禮し、合掌して佛に向ふ。一切の天衆は皆な聲聞より是の如く聞き已りて、莊嚴の具を捨て、一念正念に諸根を寂靜にし、一切は皆詣りて蓮華の台に坐せり。如來世尊は諸の聲聞衆に圍遶れて、月の悉く衆の星の爲に遶れるが如く、又た亦彼の須彌山王を衆山の圍遶が如く、又た亦海の諸の大河の爲めに圍遶られるが如く、轉輪王の八萬

【一】天眼力。佛所得十力の一。佛所得の天眼なり。了了分明能く壞するものなく、能く勝つものなければ力と云ふ。

【二】苦の字は、宋、元、明三本に依る。

遊戲して樂みを受けしが如し。

時に、彼の世尊は大蓮華の中にて神通を示現し、然る後に復夜摩天等と語りて、是の如き言を作さく『汝の今見る所の一切は皆是れ樂見の感ずる所なり。世尊は化を爲して慢を離れしむ。汝よ。其の內の遊戲の處を見よ。園林・蓮華・河池・山谷・幷びに妙れし堂等、境界・行處を無量に見ん』と。彼の樂見王は慢心を捨離せり。時に、彼の世尊は大蓮華に入りて一切を化作す。復樂見夜摩天王の住處の前に於て、蓮華ありて億百千の葉を生ず。如來は彼の蓮華の台の上に坐し、聲聞弟子は其の葉の上に坐して、種々の勝妙し神通を現はせり。或は飛びて虛空中に至り已り、然る後に還へりて蓮華の中に至る者あり、復種々の異々たる神通を現す。時に、彼の樂見夜摩天王は是の如き念ひを作さく『此れは是れ、何かなる人の、何かなる善業ありて、何かなる勢力を以て、能く是の如き奇特き事を作すや。我が有する所の若しは多き、若しは少き色の光明等は甚だ微劣なり。彼れ則ち勝れたり』と。

給ひ、無量種の色を無量種に作り、無量なる形服に無量種の諸の功德の色ありて、大力勢を現はして、彼の天衆をして種々に異なりて見せしむ。或は如來の山中に在すを見、或は如來の園林の中に在すを見、或は如來の蓮華林に在すを見、或は如來の堂の中に在して行じ給へるを見、或は如來の樹下に在すを見、或は如來の河池の中に在すを見、或は如來の遊戯する處の園林の中に在すを見、或は如來の一切の禪處を見、或は如來の一切の虛空の中に遍滿して坐禪して住し給へるを見、或は如來の虛空中に於て敷具の上に坐し、復虛空中にて若しは坐し若しは行き、若しは復經行り、還へりて復坐禪し給へるを見る。

世尊は又復神通を示現せり。是の如くに、是の如き音聲にて說法し、五樂の音聲は夜摩天より勝さり、夜摩天の有する所の音聲を形し、閻浮提の鳥鳥の聲の如し。彼の一切の天は是くの如く劣減れり。彼の天は是くの如き聲を聞き已りて、皆悉く能く歌ふ慢心を捨離せり。

世尊は又復異なりたる神通を現はす。所謂、彼の虛空の中に在りて諸の天衆を作り、天女を化作し、勝妙て殊絕なる形の夜摩天・夜摩天女は螢火の蟲の如き光明にて、色量も是の如し。形相は服飾にて莊嚴り、園林の樂む處は皆悉く勝妙れり。彼の大天王幷びに諸の天衆は化の天を見已りて心に恥愧を生じ、皆自身を見るに、色〔一七〕少く欲樂は艸の如くにて異ることなし。彼の夜摩天は是の如き見を生ぜり。

爾の時、世尊は其の〔一八〕根の熟せるを知り、其の深き心を知り、因・果・報を知り、障礙の見なく、一切の世間を利益せんと欲するが爲に、極大の悲心あり。如來世尊は爾の時、卽ち夜摩天王樂見王の所に向ひ、異なる神通を現はし、向に現はせし所の如くに一切の神通を盡し、樂見の爲に悉く皆之れを現はし、百倍に前より勝れり。爾の時、樂見夜摩天王は一切の慢心を皆悉く捨離せり。

彼の時、樂見夜摩天王も亦復彼の大蓮華の中に坐し、亦向者牟修樓陀夜摩天王の大蓮華の中にて

〔一七〕少の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

〔一八〕根。根性、根機のこと。根性は性質なり。根機は能力なり。

て多く放逸し、放逸なる行を行へり。彼の迦那迦牟尼世尊は之れを憐愍むを以て、是の故に來りて此の夜摩の處に上れり。天世間中にて天々利益して其の苦みを盡くさんが爲の故に、彼の諸天の爲に放逸を除かんが故なり。盡漏の比丘五千人あり圍遶て共に夜摩天の處に到り、更らに勝れし光明は處々に普遍し。彼の時に諸天は佛世尊、若しは諸天のあるを見る。本より已に來りて未だ佛を見ざりし者は佛を謂ひて是の天は天中に於て勝れりと。彼の天は佛に於て希有の心を生じ、是の佛にてましますを知らず。而も此の佛の色は諸の天衆より最も殊勝たり。一切の功德を皆悉く具足し、異に相ひ似たるもの無く、光は一切の天の世間に遍し。彼の天は旣に佛世尊に相ひ隨ふ聲聞を見て、亦勝上たる希有の心を生じて、是の如き念ひを作せり。『彼れは是れ何人なるか。是くの如く形[一六]勝れて、此の天と共に相ひ隨ひて離れずに、圍遶りて行く』と。

一時に、彼の天子は卽ち種々なる勝妙し蓮華を取り迦那迦牟尼世尊に向ふ。爾の時、世尊は天子の來りしを見て虛空に上昇り、種々なる勝妙れし神通を示現し、念ひに隨ひて無量なる功德を分別し、身の上より水を出し、色・香・味・觸を具足して有せり。彼處の天の水は十六分に於て其の一にも及ばず。其の身の頂上より火を出し、焰然として無量種の無量なる色の光ありて、虛空に遍滿し、所謂、青・黃・赤・紫の色等なり。復異異れる勝妙し神通を現はし、所謂、一身を以て多身と爲し、或は千身或は百千身と爲し、或億身と爲せり。有する所の光明は一切の天處の世間に遍滿し、復多身をして以て一身にならしむ。世尊は是の如く復神通を現はす。夜摩天中の一切の地處を一一の手に捉りて掌中に擧げ置き、幷びに諸の園林・流水・河池を虛空に擲在て、眼の境界を過ぎたり。復還りて本との所住の處に安置す。世尊は又復大神通を現はす。彼處の大山を手を以て撮取て虛空の中に擲ち、幷びに諸の園林・河池・澗谷・及び天女の衆は在る所を知らず。復還へりて本の所住し處に安置す。其の中の諸天は動轉を覺えずして、本の如くにて異ならず。世尊は又復異なる神通を現し

【一六】勝の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

一に尊重せり。爾の時、天主牟修樓陀夜摩天王は天衆に答へて言はく『我れ向きに彼の蓮華の臺中に於て希有の事を見たり。我れ向に蓮華の臺中に入り、一切の諸天及び諸の天女と倶共に入り已りて一切を見たり』と。時に、彼の天王は其の見し所の希有なる事の如くに、悉く舊天の爲に盡く皆具さに說けり。蓮華中の種々の功德の如く、悉く舊天の爲に具足して說きつくせり。時に、彼の舊天は先に、已に曾つて勝れ、勝れたることを見來り、聞き已りても希有の心を生ぜず。彼の蓮華の中の種々の勝れし事は、先きに已に曾つて善く見來りしが故なり。時に、彼の舊天は是に於て、乃ち牟修樓陀夜摩天王の爲に舊法を說きて是くの如き言を作さく『願くは天王よ聽き給へ。我れ先きに曾つて此の大蓮華に大勢力あるを聞けり。此の蓮華の內の大勢力の者は心の憶念に隨ひて、種々の功德・莊嚴を具足す。此の夜摩天の一切の處の中にて、此れを除きては更らに是くの如き樂しき處の蓮華の中の如きはなしと。是くの如く先きに聞けり。[一四]迦那迦牟尼、世尊・無上士・調御丈夫・天人師ありて世に出現しましませり。彼の說き給へし所の法は初・中・後善く、義善く、語善く、獨り法を具足し、清淨にして鮮白なり。正法を演說し、所謂此の色は[一五]苦なり、此の色は集なり、此の色は滅なり、此の色は滅道なり。是の如くに此の法は初・中・後等し。是の如く說き已りて、彼の佛の法の中にて、多く百千の已に見て諦かなる者あり、果を得し者あり。是くの如く次第に阿那含を得し者、斯陀洹の者、須陀洹の者あり、是の如くして復四禪を得る者、三禪を得る者、二禪を得る者、初禪を得る者あり。彼の佛は是くの如き人を安住せしめ已りて、復餘人をして十善の法に住せしめ、法行に隨順せしむ。多くの人、乃至無量なる百千億人をして善業を行はしめ已はれり。然る後に何等の人あるやを觀察す。我れ今調御して彼の清淨なること人を過ぎたる天眼を以て、夜摩天を見る。我れ應に調御すべし。彼の時に、此處の夜摩天王を名けて樂見と曰ふ。彼の王は內に善の種子ありて藏せりとも、身に放逸を行ふ。彼の王の身の近くに多く無量なる諸の天の衆ありて、善根は淳熟し

【一四】迦那迦牟尼（Kanakamuni）。又、羯諾迦牟尼とも書く、佛の名なり。金、寂金仙人とも譯す。過去七佛中の第五にして、人壽三萬歲の時、清淨城に生る。賢劫中の第二佛なり。

【一五】苦の字は、宋、元、明三本に依る。

ても、上の高樓に在りて、多くの數を重ることあり。復諸天ありて心に歡喜を生じ、無量なる飲食・衣服・牀敷あり、迭ひに相ひ愛敬して心に妨礙げず。常に遊びて樂みを受け、欲食は恒に豐にして、一切の時に五樂の音聲あり。彼處の一切の天女と天衆は是の如くに樂みを受く。牟修樓陀夜摩天王は蓮華の臺に坐せる一切の天衆を皆共に相ひ隨ひて、彼の廣池に向ふに、忽然として至る。既に彼こに到り已れば、彼の舊より住せる天は既に王の至りしを見て、一切は樓より下る。復蓮華の處を離る者あり、堂を出づる者・鉤欄を離る者あり、一切は皆な住處より出でて歡喜の心を生じ、盡く共に牟修樓陀夜摩天王を奉迎す。皆王に向ひて走り、敬重心を生じ、歡喜心を生ず。既にして天王を見るに、虚空中に在り、合掌して頂に在り、王を禮敬し已る。牟修樓陀夜摩天王は天衆の前に在り、一切の天衆は皆悉く後に在り。若しは歌ひ、若しは舞ひて彼の廣池に近かづく。彼處の一切は功德を具足し、無量の妙れたる堂を皆悉く作行て、種々に莊嚴れり。種々の鳥には種々の音聲あり、無量百千の諸の樹にて莊嚴り、有る所の光明は百千の日より勝る。彼處の多饒の無量の天衆は常に快樂を受けて、夜摩天の勝妙たる地上に在り。夜摩天王は到り已れば則ち入る。彼の一切の天は心に歡喜を生じ、天主牟修樓陀を讃歎し、牟修樓陀夜摩天王は善妙なる語を以て先づ之れを安慰む。乃ち廣池に臨ぞみ、到り已りて次に見心樂勝妙堂と名くる上に昇るに、彼の堂の珍しき寶の光明は照曜きて彼處を周匝り、種々に間雜り、多くの無量に勝れたる相の功德あり。[三]百千の莊嚴れる一切の天衆に圍遶れし夜摩天王は彼の堂に昇り已る。第一に勝れし相たにて、微妙なる光明あり。師子の座は七寶にて莊嚴れり。是くの如き妙ぐれし座は一切の樂しき觸を具足してあり、天王は上に坐せり。彼こに第一の宿舊の天衆ありて圍遶て現前る。多く無量なる諸の天女の衆あり、先に歌舞し、然る後に次第に彼の宿舊の天は天王に問ふて言はく。『王よ。何處に於て蓮華の座に乘れりや。今此こに來り至り已りて、久時くして曾つて王を見ず』と。時に、宿舊の天は彼の天王を第

【三】百の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

る心を以て常に諸の苦惱を受けん。若し是の苦を知らず、觀察するを知らざる者は、彼れは則ち羊と等し。愛樂する天も亦爾かり。飲食の樂み、欲の樂みは、羊も亦此の樂みあり。若し天も亦是くの如くんば羊と則ち異ならざらん。心の力勝れしを以ての故に、業も亦是の如く勝る。業を離れし功徳已に勝れば則ち得べからざるも、天は畏れずして戲はむる。是の故に死の中に住し、死ぬ時既に到り已れば、方に其の果の惡しきを知るのみ。乃至未だ死の來らざるに、意常に錯亂れず、黠慧くて意に法を樂ふは、皆法行に隨順するなり。一切の命を皆失へば、一切の樂みも皆盡き、一切に愛別離せん。汝の死する時至らんと欲す。死は第一の惡なり、曠野の大道に到りて更らに如法に歸へること無からん。故に應に法に隨順すべし。異なる法ありて死と名く。所謂、放逸心なり。放逸は前に破壞し、然る後に死殺を爲さん。法に由つて命と樂みを得る。故に法を第一と說く。法は放逸ならずと爲し、天道の導師なり。益と不益とは異ならず、縛られることと、脫れることも亦是くの如し。放逸と不放逸、功徳と過とは平等なり。彼の癡なる心に由るが故に、天をして知る所なからしめて、怨みを共にし戲樂を聚む。智者は則ち捨離するなり。

是の如く彼處にて諦見鳥と名くるは、諦かに觀察し已りて、彼の天の無量なる過を訶責むとも、天は未だ覺知らず。放逸ありて其の心を覆ふを以ての故に、境界にて五欲の功徳を喜樂び、樂みを受くるを以ての故に、眞諦を覺らざるが故に、退くことを覺らず。是の如くんば天處にて必らず無常に歸せん。一切の世間は悉く當に無常なるべきも、而も彼れは覺らず。

又復彼の天は蓮華の上に坐し、滑高山幷びに蓮華の座に在りて、捨てて出離して去るとも而も身は動かず。廣池と名くるに向ふに、五百の堂ありて、七寶にて周匝の欄楯を莊嚴り、處々を無量に間錯りて莊嚴れり。復異なる天ありて、中に於て樂みを受く。又、彼の堂中に皆却ぞき入ることあり

にて厭足をせずんば諸根も亦是の如し。若し智の燈びの爲に照らされなば則ち樂みて著せし闇を除かん。常に習ひて境界に近けば、無量種に思念し、火の風の爲に吹かれて、熾然として增長が如く、欲樂は甚だ大力にて常に欲の火焰を增さん。智者は諦に思量へるが故に、能く境界を調ふ。若し常に心を迷亂せば、恒に境界を樂まん。皆是れ癡なる力の故なり。

是くの如く戲樂を受け、癡なるが故に樂みて之れに近けば、境界の火は增長き、薪の火と合して、風の爲に吹かるるが如く、欲に屬して未だ厭足をせず、常に欲の爲に使はれん。此の天の退【一】失きて墮ちるは、天の欲に誑らかせられしが故なり。前身にて樂みを受けし時、彼の身に功德を集めしも、念々に命は住せず。彼れは壞はれて何こにか去らん。彼の人の身の壞はるるが如くに、天の命も爾かることは疑はれず、久しく會ひしと雖も當に死すべくして、天身は必らず破壞せん。此の天の境界にて樂み、常に著して心離れずんば、必らず當に此處より退くべきとも、而も苦を覺知らず。此の如き天の受くる所の五欲の功德の樂みも、天と別るる苦みの十六分の一にも及ばず。魚の水中に在りては未だ曾つて渴の苦みあらざるが如くに、受に於て足るを知る者も亦未だ曾つて欲あらず。若し人の心を觀ぜずんば、常に欲樂を愛行し、長夜に久時く睡りて、苦惱は曾つて滅せざらん。癡なる故に樂み、樂みを受けて苦惱を覺知らず。後に衰惱を得し時に乃ち何なる果を得しやを知らんのみ。欲は初め賢善たるに似たれど、而も實は甚だ惡を爲し、此れは地獄の使をり。專ら不饒益を行ひ、盲者は此の欲を信ずるも、智眼の者は則ち離る。猶ほし險しき岸に相ひ似たるがごとくにて、是の如くにして地獄に墮つ。謹愼は第一の友にして、常に能く利益を作す。放逸は第一の怨みなり。故に應に善友に近くべし。欲は一切の身に遍くして、第一の嚴き毒の如し。惡道への第一の【二】道は所謂放逸是れなり。若し放逸を行ひて復境界に染著せば、彼は愚癡な

【一】失の字は、宋、明二本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二】道の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

樂みを受け、第一端正にして、見る見は甚だ樂む。聖き所にて戒を愛し、善淨なる勝れし果は無量種あり、無量に分別し、無量なる境界にて諸の快樂を受く。迭ひに共に一心にて、彼れと此れと更に互ひに心を相ひ妨たけずして、共に相ひ敬重し、迭ひに心を清淨くし、彼の蓮華の中にて久時く樂みを受く。是くの如きの時に、境界の中に於て未だ厭足を知らず。憶念する所に隨ひて、彼の蓮華の臺の門より出でて去る。是の如くに入りしが故に還へりて是の如くに出づ。出でんと欲する時に、彼の滑高山の其の中に鳥ありて、諦見鳥と名く。鳥は彼の天の出で去らんと欲するを見るが故に、即ち彼の天の爲に偈を說いて言はく。

此の天身の色は空なり、年少しとも亦た復た然り。樂みは念々に盡きんとするに向ふとも、愚癡なるが故に覺らず。此くの如き天の一切の無量なる妙れし善き相も、時の輪に劈割かれて、身をして分散せしめて壞さしむ。彼の天身の命の如くに、無量なる百種の相も、其の業盡くるを以ての故に死王に殺さる。此の天は樂みを受くること久しく、恒常に心は放逸にて、自らの羂みに繫がれて、將に其の樂みを壞はさんとし、樂み及び安かなる力命をも能く愛別離せしむ。死王の力は甚だ大にして、近くに在りて臨んでは至らんと欲す。若し多く放逸する者を、天の羂の臨みて到らんと欲せは、必らず來りて樂しき命を奪ひ、速疾に壞して盡きせしむ。此く久時く破壞するも、常に放逸を行ふ天は勝れし樂みに著して、未だ覺らず。樂みの爲に誑かせられて、此の天は光明を失へ、諸の根心は劣り滅じて閻羅の處に墮つ。彼の時に則ち果を知るのみなり。此の身は念々に變じ、樂みも念々に無常なり。猶ほ故らに心を染めし天は、眼なきが故に見ざるがごとし。愛より、勝れし愛に至りて恒常に行樂を受け、若し死王の來り至れば、樂しき處に到ること能はず。生・死・老を知らず、心に見ても怖れを生ぜず。彼れ後に死せんと欲する時に、自らの業に於て悔みを生ぜん。境界

と此れは更に互ひに歡喜の心にて往き、希有の心を生ず。彼の園林に入るに多くの種々の衆鳥の音聲あり、七寶にて莊嚴れる其の地は柔輭くして、足を下せば則ち[八]凹み、足を擧ぐれば還へりて起る。一切は普く歡喜の心を生じ、處々にて遍く看るに、轉た[九]復轉たに勝れり。彼の天は心に迭ひに相ひ愛樂し、遊戲して樂みを受く。彼の天は久時く迭ひに相ひ愛樂し、是の如く遊戲して快樂を受け已りて、復異處に向ひ次第に樂みを受く。彼處を行種々寶地と名け、既に彼處に往くに音聲にて娛樂し、種々の音聲にて歡喜て樂みを受け、六欲の境界にて心に愛樂して見る。多く欲樂を受けて放逸を行ひ、嬉戲て遊行ぶ。彼の地處に於て異なる功德を見るに、青・黃・赤・白の無量なる諸種は皆悉く愛すべし。

彼の天は是の如く彼の地處に於て、次第に復嬉戲山と名くるに向ひ、境界の樂みを受くるとも、猶ほ未だ厭足ず、彼の嬉戲山は七寶にて莊嚴り、多くの無量なる種々の諸鳥あり、種々なる妙なる色にて、種々の形相あり。無量百千の諸樹にて莊嚴り、流水・河池は蓮華にて莊嚴り、園林は戲れる處にて、山谷の險しき岸の峻極なる處は鹿の衆にて莊嚴れり。天衆は彼の嬉戲の山中に在りて、五欲の功德にて快樂を受け、迭ひに相ひ愛念し、彼の天の身は種々の光明にて莊嚴を爲し、多くの無量種々に莊嚴れる勝妙たる天女ありて共に相ひ娛樂めり。

彼處にて是の如く復久しき時に於て、大快樂を受くるとも未だ厭足を知らずして、次に復往き作行重樓に向ふ。復行堂あり、彼れに向ひて戲れ樂みて未だ厭足ことを知らず。五功德にて樂み亦未だに厭足ずして、無量に分別し、無量種の欲を復更に增長て、大いに愛を增長し、復無量なる種々の快樂を受け、彼の諸の天衆と諸の天女の衆とは、彼れと此れと、迭ひに共に歡喜て樂みを受く。是の如くに復夜摩天王牟修樓陀と共に歡喜て樂みを受く。彼の蓮華の中の光明は照曜きて百千の日より過ぎ、有する所の光明は勝れて熱からず、各其の[一〇]眼に於て迭ひに相ひ愛樂し、五根にて

【八】凹の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。
【九】復の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。
【一〇】眼の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

時に、既に彼の大蓮華の中に入りて歡喜の心を生じ、希有の心を生ず。『何なる因の故に、是の如き光明ありて稱說べからざるや。而も我れ昔よりこのかた未た曾つて覩見ず』と。爾の時、天主牟修樓陀夜摩天王は天衆の前に在り、天衆は後に在りて相ひ隨ひて入る。夜摩天王の心も亦歡喜びて共に入り已りて、無量なる百千の寶珠あるを見る。百千の光明は照曜として顯赫き、多くの無量の遊戲の處あり、園林の莊嚴・無量百千の宮殿の莊嚴ありて、光明は遍滿し、無量なる樹ありて百千に莊嚴れり。復無量の七寶の諸樹の園林にて莊嚴るあり、無量なる色の異異る形相の衆の鳥は、多く無量なる遊戲の妙山にありて、莊嚴は愛すべし。無量なる蓮華の池水の莊嚴・無量百千の妙たる堂の莊嚴、百千の流水・河池・澗谷の莊嚴、說くが如き一切の色量・形相の七寶にて莊嚴ることは、牟修樓陀夜摩天王も猶ほ倘ほ見ず。何かに況んや餘天に於てをや。彼處の是くの如き蓮華臺中の河流は清水にて、彼の河の兩岸は皆是れ玻瓈なり。或は金の岸あり、或は銀の岸あり、或は寶の岸あり、或は青色なる寶珠ありて岸と爲し、或は赤色なる蓮華の寶の岸あり、或は種々に間錯る寶の岸あり。

復、勝れて妙なる蓮華の池水ありて、種々の寶の蓮華の莊嚴あり、或は一色の蓮華の莊嚴あり、種々の色の妙れたる莊嚴あり、所謂、青・黃・赤・白等の色の蓮華にて莊嚴れり。彼れが若し青き葉なれば、彼の葉を青色寶の葉と爲し、若し黃色なれば則ち名けて金と爲し、若し白色なれば則ち名けて銀と爲し、若し赤色なれば則ち赤寶と名く。是くの如き無量なる種々の蓮華は是の如き大蓮華の中に在り。是の如く、是の如くに彼の天は迭ひに共に心に歡喜を生ず。彼の蓮華を見るに、無量百千・種々の蜂は中に滿ちて莊嚴れり。

諸天は見已りて復異なる處に向ふに、極めて大きく、愛すべき園林の中に遊戲する處ありて、彼處には多くの種々の樂音あり。既に樂音を聞けば、意甚だ愛樂みて歡喜の心を生ず。天衆・天女彼れ

あり。是の如きは此れ夜摩天中にて大快樂を受くるを說く。悕望あるが故なり。

又復是くの如くに、牟修樓陀夜摩天王は種種百千に分別し憶念して、無量なる種々の功德を成就し、譬喩すべからざる諸の快樂を受く。牟修樓陀夜摩天王は滑高山上にて彼の蓮華の中の勝妙し七寶にて快樂を受け已りて、復蓮華を見て是くの如く思念す。『我れ當に彼の大蓮華の內に入るべし。旣に彼こに入り已りて、一切の天衆と共に快樂を受けん』と。卽ち念ふ時に於て、彼の蓮華の臺は增長て寬大なり。善業を以ての故に、多く是の如き大蓮華の臺ありて、皆其の中に入る。彼の華臺の內に多く孔穴ありて、彼の孔穴の中に大光明を出す。彼の蓮華の內に復異なる天ありて、昔より未だ曾つて見ざる光明を出過し、百由旬に普く、其の光は無量種の色ありて備ふ。夜摩天王牟修樓陀及び諸の天衆は光明を見已りて、希有の心を生ぜり。『是れは何かなる光明にて、此の蓮華の臺中に於て出づるや』と。

爾の時、天王牟修樓陀は天衆に告げて言く『汝よ。是の如き勢力ある光明の、是の如くに出づるを見るや。不や』と。天衆は答へて言さく『唯た然り、已に見て、是の如き光明を甚だ希有なりと爲す』と。爾の時、是くの如き夜摩天主は又復告げて言く『一切の天衆よ。今ま皆我れと共に蓮華の門從り蓮華のの臺に入り、入り已りて觀察せよ』と。爾の時、是くの如き一切の天衆は一心に白して言さく『我等は皆夜摩天王の意に悕樂ふ所の如し。我等の意の願も亦復是くの如し。我も亦大蓮華の中に入らんと欲す。幷びに天女も相ひ與共に入らん』と。

爾の時、天主牟修樓陀夜摩天王と幷びに諸の天衆、諸の天女の衆は皆共に彼の蓮華の臺の中に入りて、皆悉く希有なる事を見んと欲す。爾の時、相ひ與に孔より入らんと欲するに、則ち光明ありて日光の照すが如し。火洋金の聚りて、更に日光を生じ、諸の天身を照らして、虛空に遍滿し。彼の大蓮華臺の中の光明は是くの如くに照曜き、天は皆見るが故に一切を眼に攝りて光明に耐へず。

行くべし』と。卽ち心に生ぜし時に、牟修樓陀夜摩天王は諸の天衆と共に、虛空中に於て飛行して去りぬ。一切の天衆も是の如く飛行しても身は微動だにせず。時に、一切の天は蓮華の中に坐し、虛空に在りて五樂の音聲にて歌舞し喜笑す。是の如く遊行して天の樂みを受く。五欲の功德にて彼の天は是の如くに蓮華の中に坐し、行きて天の樂みを受け、日の出でんと欲し、初めて沒せんとする時に、人世間に於て、虛空は端嚴にて一切は皆赤きが如くに、彼の天の蓮華の光明の端嚴なることも亦復是くの如し。

彼の一切の天極めて快樂を受け已りて、次に復往きて拘鞞羅林と名くる中に向ふ。滑高山と名くる彼の頂上に向ふ。樂みを受けんが爲の故なり。若し彼の天衆の山の頂きに到り已れば、彼こに無量なる七寶にて莊嚴れる流水・河池ありて、有する所の光明は百千の日より勝ぐれ、多くの端正なる天子・天女あり、無量なる七寶の光明は日の如くにて、諸の樹にて彼の天を莊嚴り、旣にして滑高山に到り已りては、彼の勝れたる山に於て嬉戲れて樂みを受け迭ひに共に遊行す。

彼の蓮華を下りて、次に復更に白峰山と名くるに上る。戲むれて樂まんが爲の故なり。然る後に、方に牟修樓陀夜摩天王と及に天衆の所に向ふに、諸の天女と共に相ひ隨ひて圍遶けり。彼の諸の天衆は見已りて奉迎して、心に歡喜を生じ、歌舞し遊戲して相ひ與に住きて牟修樓陀夜摩天王に向ふ。自らの業にて果を得、彼の善業に下・中・上あるを以て、天の樂みにも亦爾かく下・中・上ありて、勝れし色も亦爾かく下・中・上あり、食も亦是くの如く下・中・上あり、樂みも亦是くの如く下・中・上あり。是の如くにして乃至、一切の極めて劣下なる夜摩天の受くる所の樂みの十六に分ちし中にて、帝釋天王の受くる所の樂みは其の一にも及ばず。彼の帝釋王の受くる所の樂みも尙ほ說くべからず。況んや三倍に功德の業を作すに於てをや。百業にて行樂するも、而も當に說く可し。彼れ天は是くの如くに唯だ善業のみ多く、是の如き善業にて持戒せる人は心に常に歡喜して無量種

【七】拘鞞羅。具さには拘鞞陀羅(Kovidāra)、倶毘陀羅にして、樹の名なり。

愛すべし。然れども彼の天子は是の如く見已りて、次に復往きて無量の欲を具足すと名くる林の中に向ふ。流水・河池は多くして、種々なる蓮華にて莊嚴れる無量百千の衆鳥の音聲あり。彼の林に到り已るに、彼の林中に於て本とより未だ曾つて見ざることを種々に具足し、諸の天女と共に既に彼こに到り已るに、彼の蓮華の河池の中に眞珠の沙ありて、金銀の鳥餝し。其の翅は皆青寶珠の色を作せり。彼の河岸に在る種々の妙なる樹は河岸を莊嚴り、天子は中にありて遊戯して樂みを受く。天子は是の如く既に樂みを受け已りて、次に復往きて寶岸林と名くるに向ふ。多くの天衆有りて天女に圍遶れ、彼の勝れたる林を見るに、殊妙なる七寶の光明の地分にて、何處の寶山の峰なるかに隨ひて、流水・河池の蓮華は愛す可く、百千萬の峰は山谷を莊嚴り、彼の地分は妙寶の莊嚴を分ち、善業の力の故に、彼の天子をして諸の天女を見ては共に嬉戯せしむ。遊行して樂みを受くることは善業を以ての故なり。彼の善根の因に、相ひ似たる果を得るに無量種ありて、是の如く無量種々に樂みを受く。然るに彼の天子は五欲の功徳にて勝れたる樂みを受け已りて、次復往きて釋迦の說き給へし地と名くる處の中に向ふ。彼處にて種々に天樂を受け已りて、復愛する所の境界の爲に心牽かれ、分別の勢力に意迷はせられて、彼の見る所の境界に住せず。彼の心の獼猴は天の樂果を食して、果の爲に醉はされ、諸の天女を見ては愛樂を生ずるが故に、常に行きて住せず。何なる風に吹かれ、其をして常に轉ぜしむるや。彼の夜摩天衆の中に在り[六]恨みて境界の樂みに足るを知らず。無量種に極めて甚しく愛すべきことありて、終に他の爲に侵奪せられず、他には則ち分つこと無く、亦他の爲に能く毀さるゝことなし。

又復普く妙なる寶の蓮華を生じて、是の如く、是の如くに種々に遊戯し、是の如く、是の如くに種々に憶念し、彼れと彼れ是の如き寶の蓮華の中にて是の善業を得。若しは彼の天主なる牟修樓陀夜摩天王は是の如くに思念せり。『我れは當に彼の蓮華中に在りて坐し、諸の天衆と共に空に乘りて

【六】恨の字は、宋、元、明三本に依る。

ばず。是の如く次第に善業の勝るが故に、上上の勝れたる善業あるを以ての故に園林は愛す可く、設へ一切衆生中の善き智慧の人をして、一心に意を專らにして更に異なることを作すことなく、方便善巧し、相應しき辯才にても、而かも亦其の一分をも說くこと能はず。何を以ての故なれば、一切の人の境界に非らざるを以ての故なればなり。彼處は是くの如く一切の人の心の境界には非らず。設へ第二の三十三天をして帝釋王と共に百千歲に於てしても、亦彼の夜摩天の一地の樂みを受くる事をも說く能はず。何を以ての故なれば、境界に非らざるを以てなり。三十三天も曾つて見ざるが故に、曾つて聞かざるが故に說くこと能はず。彼の善業に於て且く一分を說かんも、具足には一切を說き盡くすべからず。此の善業は一切を和集め、決定して樂みを受くることは不可思議にして、樂みを受くる事は愛すべきの樂みにて、唯だ一分を說かんに、譬へば一切の善巧なる畫師の如くにて、若しは其の弟子の壁等の處にて、或は畫きて月を爲し、或は畫きて日を爲すとも、然るに彼の畫師は終ひに光明を畫き作すこと能はず、及び其の威德を行はしむる能はず、照らすこと能はず、涼しくせしむること能はず、炙くせしむること能はずして、唯だ能く輪形を畫き可きのみ。夜摩天を說くことも亦復是の如し。唯だ樂みを受くることを說くとも、其の受けし樂みの愛すべきことを說く能はず、其の勢力の實となるを得べからず。若しは彼の光明、若しは彼の園林、若しは彼の勝れたる德、若しは歌、若しは樂、若しは彼の端正なること、若しは境界の樂み、若しは光明の輪、若しは天女に近きて種々の樂みを受くることは、唯だ髣髴として其の少分を說きて比類すべきのみなり。

又彼の天子は彼の天中の戲樂する處に於て、無量なる欲樂を種々に具足し、無量に口を濟ひ、園林にて莊嚴りし是くの如き地分を既に觀察し已り、五欲の境界にて功德に心牽かるとも、境界の力は動きて心をして住せざらしめ、染を分別して轉じ、愛河に漂よはされ、普く眼に見る所は皆悉く

勢力は、若しは彼の天子の憶念する時、彼の夜摩天の一切・地中の一切の勝れし物は皆其の地に在り。彼の樹の力の故に、樹中にて樂みを受け、八分の樂音は稱計べからず。彼の中に樹ありて、香漂樹と名く。彼れに勢力ありて、彼の天子の憶念する香の如し。是くの如き樹中の香は、之れが爲に出せり。彼こに復た樹ありて華香樹と名く。彼の樹の內に在りても、房中に在りて戲樂るが如くにて異なることなし。好き園林に蓮華の池水あり。彼の夜摩天は中にありて樂みを受く。彼の夜摩天は彼の樹中に在りて青・黃・赤・紫の妙なる色の光明を備へ、種々の香色ありて具足す。彼の天、若し入れば一切種の妙なる色ありて皆生ず。彼の天の身も亦是の色の如くにて、彼れの身・衣の色も一切盡く滅して唯だ樹の色のみ現はる。

又復樹ありて虛空行と名く、眼の瞬きする頃に於て虛空中にて行くこと百千由旬にして、念ふに隨ひて去る。彼の樹の光明は日の如くにて異なることなし、然かも彼の天子は彼の無量なる種々の妙なる樹に乘り、空に在りて行く。百千の天女は圍遶て相ひ隨ひ、鬘香を身に塗り、彼の天子の身には勝れたる光明あり。彼の天子の前に諸の天女ありて、種々の妙なる衣にて其の身を莊嚴て、喜笑し、歌舞す。彼の歌の音聲は周匝の無量由旬に遍滿し。彼の天女の中にて天子は端正にして、且く少分を說かんに、善業にて得し所は、星の中の月の如く、天子の端正なることも亦復是くの如し。然るに彼の天子は千の功德勝れ、種々の樂聲にて歌舞し、嬉戲れて香林中に入る。百千種の鳥は彼の林に普遍く、無量なる河池は勝妙たる蓮華を以て莊嚴を爲して甚だ愛樂すべし。百千の日の光明より勝れ、且く現はれし事を以て少分を譬喩せんに、猶し人中の愛すべき園林・流水・河池の蓮華の莊嚴も、彼の四天大王天の處の十六分中に於て其の一にも及ばざるが如く、是くの如き四天大王天の處も、復三十三天の處の園林の愛すべきに於ては十六分の中にて亦一にも及ばず。是の如き三十三天の處の園林は愛すべしとも、夜摩天の園林の愛すべきに於ては十六分の中にても亦一にも及

に生まれ、百千の天女に圍遶れ、纔じて彼こに生るに、彼の諸の天女は卽ち生まれし時に於て、天の音聲にて歌ふ。彼の天は忽ち聞きて睡りより覺めしが如し。彼の樂の音聲の始初て出でし時に、是の如く化生し、樂の音聲に於て是の如く念ずるを得、彼の歌の音聲に備はる八分ありて功德を具足せり。一は語、二は稱、三は甜、四は善合、五は相應、六は善深、七は一切愛樂、八は百萬由旬にても聲は妨礙げず、法句は相應し、清淨にて濁らず。是の如くに八分の功德を具足して、勝妙たる音聲にて善業の人を覺す。

彼は自身より妙なる光明を出し、廣さは五由旬にて靑・黃・赤・白なり。天上の虹の如く、卽ち彼の天子の初めて生まれし時に、光明の旋ことありて、猶し日月の暈輪の端嚴なるが如し。彼れ旣に起き已りては、百千の天女の相ひ隨ひて圍遶くが故に第一の歡喜の心あり。天子・天女は共に相ひ隨從ひ、是くの如くに往きて光明林と名くるに入る。

又、彼處の夜摩天中に華ありて薫まず。彼の華を名けて眼甘露華と爲す、香は華を壞さずして、善き色香の華なり。華の名を聞き已れば、心は則ち樂みを受く。彼の華は則ち此の如き勢力あり。何處・何處に彼の華の名を説くや。彼處・彼處の虛空の中にて彼の香華を出し、月勝華・常轉行華と名く。若し天の念ふ時は、彼の天樹の華は聲を出して生ず。天の行くに隨ひて轉じ、彼の天子の念ずる所の何處なるに隨ひて、彼處に行く。是の如く天子は彼の樹上に在りて虛空に行き、其の華の中に在りて所念ふ處に隨ふ。是くの如くに行くことは、猶し第二の三十三天の堂上に在りて行くが如し。是の如くに彼處の夜摩の天子は華の中に在りて、是の如くに行く。光明は赫焰て、常に下の一切の諸處を觀ずるに、一瞬の頃に一切を遍く見て疲倦まず。

彼處に復樂愛樹と名くるありて、彼の樹は愛すべし。彼の樹の內に於て、何處を愛すべきや。其の內に入り已りては天の快樂を受く。園林の蓮華の池水の中に隨順一切念樹と名くるありて、樹の

けて、妨礙ぐる所なし。後時に猶ほ退くに自在を得ず、況んや人中にて欲多くして諸の過あるにをいてをや。少しの樂み、少しの味にて、動轉きて任せず、常に安隱ならずして能く破壞を爲し、無量の罰・恐怖べき賊等と與なり。

彼れ是の如き等の因緣にて天を說き、我れ復更らに餘の異なる因緣ありて說く。彼の天の外道の人は是くの如き念ひあり。『一切は皆是れ摩醯首羅の造作する所にて、非業の得る所なれば更に人の知ることなし』と。彼の外道を遮るが故に、業の果を實に業の果あると說く。實に因ありて生じ、是れ異の作すには非らず、因無くして有るには非らず。一切の因果は相似して果を得。因果の相ひ似ることとは異る因に從りて異る果を得るには非らず。非善の因にては地獄に生まれ、不善なる業の因緣にては天に生まる丶こと非し。然も彼は是の如き因果・因緣にて施・戒・智を修め、必定の業なるが故に天の中に生まることを得ん。是の如くに天の苦と樂の二種を說くとも、具さには天中の樂みを說くべからず。彼の業の一分をも譬喩すべからず。此れは少分を說きしのみなり。

又、彼の比丘は、業の果報を知り、次に復夜摩天に地を觀察す。彼れ見聞して知るに、彼の夜摩天に地の分處ありて、名けて勢力と爲す。衆生は何かなる業にて彼の地處に生まる丶や。彼れ見聞して知るに、若しは人、持戒して微塵等の惡を見るとも則ち畏れを生じ、其の心は正直にして諂ず、誑かさず、他人を惱まさず。正見にて邪まならず、癡ならず。心に此の世間の一切の無常の苦み・無我等を觀じ、佛・法・僧を念ず。殺さず、盜まざることは前に說きし所の如し。又、邪まなる行ひをせず、心は離れて樂まず、行はず、作さず、乃至、飛鳥の鴿等の行欲するをも亦觀看ず。乃至、欲睡をも心に亦念はず。若しは人是くの如くし、亦た他人を教ふ。彼の人は他の爲に業の果を說きて言はく『汝、是の如きこと勿かれ。汝若し作せば必らず地獄に入らん』と。彼の人是の如く眞に業の果を見、是の如く他の妻婦等を犯さず。業に於て怖れを生ず。彼の人は善業にて彼の地處

の一切の山の高さは萬由旬なり。何等を名けて四大山と爲すや。一を清淨と名け、二を無垢と名け、三を大清淨と名け、四を內像と名く。是れ等を名けて四大山と爲す。復た其の餘の種々の異る山ありて、無量種あり、無量の色・無量の形相・無量の功德あり。是の如くに具さに多く千の異山ありて、多饒の天華の莊嚴を具足し、夜摩天中にて是くの如く莊嚴れる三十二地に種々の山ありて、種々に莊嚴り、種々の河は饒く、蓮華の水池・百千の園林は周匝り圍遶る。一種の形相は香・色・味を具へ、諸樹の蓮華には種々の味ありて、彼の帝釋の三十三天の有する所の山河・蓮華の水池・諸の園林等の勝妙しことは、人中に有する所の山河・樹林・蓮華の水池の及ぶこと能はざる所なるが如く、彼の夜摩天の勝妙なる事は三十三天も及ぶこと能はざる所なるは亦復是の如し。何を以ての故なれば、因果多きが故なり。彼には無量なる善業・福德・百種の功德の業の因緣果ありて、善業の化せる所は具さに說くべからず。何かなる因緣を以て說くを得べからざるや。種々なる業力は動轉すること多きが故なり。是の如き業の果は一切の衆生の說くこと能はざる所にして、一切の善業は天に化生することを得。夜摩天中にては是の如く種々に具さに說くべからず。彼の天の果報の千分の中にて此こには一を說くべし。何を以ての故なれば、若し持戒の者は必定して果を得ん。今此こに實に說かん。若しは持戒の人は聞き已れば心に進み、若しは智を修さめし人は十倍に力を進む。何かなる因緣を以てなれば、彼の持戒の是くの如き差別を知れば、持戒の人は天中に生まれ、智を修めし人は涅槃を得ればなり。是くの如き智・戒の功德は已に說けり。若し彼れ已に是の如き戒の果・是くの如き智の果を知れば、是くの如き心を生ぜん。持戒倘ほ爾り、何かに況んや智を修むるに於てをや。『我れ是くの如く彼の人より聞くを得已りて、勤行み、精進ん』と。是の如くに說けば中業の果あり。

復因緣の異なるを以て、法あるを說く。彼の天は是の如く久しく天の中に住して第一の樂みを受

聞して知るに、彼の一切の地に三十二ありて、高さは五千由旬なり。彼の夜摩天は虚空に住して、虚空中に有る所の雲の聚りの如し。風の爲に持され、此の如き地の根の下に水ありて持し、水は風の爲に持さる。[二]閻婆風と名けて夜摩天を持することは雲の聚りを持するが如し。何等をか名けて三十二地と爲すや。一を勢力と名け、二を乘處遊行と名け、三を雲處遊行と名け、四を積負と名け、五を心相と名け、六を山樹具足と名け、七を廣博行と名け、八を成就と名け、九を勝光明園と名け、十を正行と名け、十一を常樂と名け、十二を增長法と名け、十三を一向樂と名け、十四を樂行と名け、十五を種々雜と名け、十六を心莊嚴と名け、十七を風吹と名け、十八を崇高と名け、十九を沫施行と名け、二十を百光明岸と名け、二十一を山聚行と名け、二十二を月鏡と名け、二十三を憶念量と名け、二十四を遮尸迦と名け、二十五を解脫禪と名け、二十六を慢上慢と名け、二十七を下入と名け、二十八を階行と名け、二十九を自身鏡と名け、三十を慢身光明と名け、三十一を上行と名け、三十二を林光明と名く。此等は是れ、彼の夜摩天の地にして、夜摩天王を[三]牟修樓陀と名け、彼の三十三天の主の帝釋天王を[四]憍尸迦と名くるが如く、是の如き彼處の夜摩天王を牟修樓陀と名く。夜摩天王は法行に隨順し、帝釋王の法の神通の樂みよりも、其の量多く千倍勝れたり。牟修樓陀天王の身は五由旬の量にて、光明は勝妙たり。帝釋王の身は[五]一居賒の量にて、是の如き夜摩天王の牟修樓陀の身の量、夜摩天王の牟修樓陀の一身分の力は、彼の帝釋王を百千に和合するも及ぶ能はざる所なり。彼の業の因果も亦復是の如し。是の如く比丘は既に觀察し已りて偈を說きて言はく。

少しの物を負ふ者は水を度るも則ち沒せざるが如く、少惡の業の人も上昇りて下沈まず。鳥の翅の堅牢なれば、空を行きても障礙すること無きが如く、持戒堅固なる者は則ち天中に生まれん。

彼の比丘は是の如く、彼の夜摩天の樂みの果・業・因を觀察せり。彼の夜摩天に四大山ありて、彼

【二】閻婆風。不明。

【三】牟修樓陀。夜摩天主なり。

【四】憍尸迦(Kauśika)。又、憍支迦とも書く。帝釋の姓なり。

【五】居賒。居賒耶舍の畧なり。大樹の名、金翅鳥の棲む所にて木の本は七由旬、其の高さは百由旬、枝葉は五十由旬を覆ふと云ふ。

巻の第三十六

觀天品第六之十五

夜摩天之初

又、彼の比丘は業の果報を知り精進みて壞せず。三十三天の已上に復何かなる天あるやを觀察するに、彼の三十三天の上に在りて住し、光明は勝妙れて、力・命は自在なり。彼の三十三天の果報より勝れり。彼れ見聞して知るに、彼の三十三天の已上に於て復一切法勝の堂あり。法の果報は勝れ、光明は勝妙なり。夜摩天と名く。三種の戒に因つての故に、彼の夜摩天の中に生まることを得。三とは所謂殺さず、盜まず、邪の行をせざる等にして、善く修めて缺かず、孔せず、穿たず、堅固にして犯さず。一切の聖人に愛され、戒を讃へ、報ひは常に清涼にして次第に、乃至、涅槃に到るを得る。猶し善き親の如くにて、生死の海中にて能く渡すことは橋の如し。若し彼の持戒の橋に上る者あれば、是れ則ち能く生死の大海を渡りて彼岸に到る。彼の修行する者も復諦かに思惟して彼の比丘を見るに、七種の戒を觀じ、果報の業報に下・中・上あることは、前に説きし所の如し。正しく觀察し已りて又た復た彼の夜摩天を觀察するに、須彌山上の夜摩天處は何を以て處と爲し、何かなる光明ありや、高さは幾許にて住するや。是の如く觀察するに、彼れ見聞して知るに、殺生せず、及び偸盜せず、邪の行ひをせざる等の如きを、樂みて修め、多く作し、自から能く戒を持し、他を敎へて戒を持たせしめて自他を利益す。是くの如き衆生は彼の天に生まることを得。

彼の夜摩天は高さ幾許なりや。彼れ見聞して知るに、高さ六十八百千由旬にして、彼の夜摩天は須彌樓の上に兩倍の高遠なり。

彼の夜摩天には凡そ幾くの地ありて、擧高さは幾許なりや。何かなる物を地と爲すや。彼れ見

【一】夜摩天（Yama, Puyāma deva）。欲界の第三天にして又、焔天と云ひ、時分と譯す。能く時分を知つて五欲の樂を受くるに由る。

處に到らん。海に大險難あるとも、此の[一四]三つは堅牢なる筏にして、若し無垢の心を得ば則ち能く彼岸に到らん。

是の如くに比丘は布施・持戒・智慧の果報を觀じ、如實に之れを見て實諦に至らんと欲し、三種を觀じ已りて十八地を得る。一切の生死の中に於て心に厭離を得、修行と精進とを以て涅槃を求めて、魔境に住せず。地行夜叉は此の事を知り已りて虛空夜叉に告ぐ、虛空夜叉は四護世に告げ、護世天王は三十三天に告ぐ。三十三天は夜摩天に告げて、是の如く展轉して[一五]光音天に至ることは上に說きし所の如し。

【一四】三とは、布施・持戒・智慧を指す。

【一五】光音天(Ābhāsvara)。又、極光淨天とも云ふ。色界の第二禪天の終天なり。此の天音聲を絕ち、語らんと欲する時は口より淨光を發して言語の要をなす故に光音と名く。

の如く第二の天衆の因果の相似し、相續して生ずるを觀じ、業の果の鏡は皆な悉く相應く、一一の諸地は各々差別せることは具さに觀察し已れり。無量なる生死の怖畏に於て、厭離ふ心を生じ、生死の險しき處は愛別離苦[二二]・怨憎會苦[二三]・老・病・死・苦の逼迫れる處にて、無量の苦みを見、暴河に漂はせられ、心に厭離を生ず。嗚呼、世間は甚だ大苦なり。生・老・病・死の大險難の處に於て、其の中に沒在ふて覺知らず、出づることを求むるを知らず。是くの如き生死は少しの樂みもあること無く、無常にして、敗壞れ、變易する法を衆生は愚癡にして知らず、覺らず。身の因緣を以て、多くの衆の惡を作し、身は破壞ると雖も業に縛られて亡ばず。爾の時、比丘は是の事を觀じ已りて頌を說いて曰はく。

種々の內の供養、壯褥及び臥具は此の身に要るものなるも、當さに壞るべくして、人の能く自ら護ることとなし。恩惠を念はずして便を得ば則ち傷害ふ。智者は身の怨となれば則ち惡業を造らず。衰病の住する處にして、種々の衆の苦み集り、不淨なる穢惡聚まる、是の故に名けて身と爲す。智者の觀察する所は死相常に現前れ、命は念々に住せずして、須臾にして磨滅に歸す。此の身は念々に老ひて、終ひには增長あること無し。愚癡の爲めに迷はされて、少きを恃みては憍慢を生じ、財を恃みては憍慢を生ずとも、自身を益せずして、財物は皆な亡失び、惡業は還へりて自らを燒く。若し布施を行はずんば則ち樂みの報ゐを受くること無く、財物は會しては盡くることに歸すとも、貪り狂ひしが故に守護す。若し愛する所の財物を師長に布施すれば、是の財は則ち堅牢し。慳者の財は、艸の如く、淨よき心にて布施する者は猶し盲者を導くが如くにて、此の世、未來世にて能く怯弱なる者を護らん。持戒するは七種の福ありて、破壞すべからざる句なり。戒は能く丈夫を護りて天中に上生せしむ。第一の勝れたる智者は常に煩惱を殺さんと欲す。是の人は衆の縛めを脫れば則ち不退の

【二二】愛別離苦。親愛する者と離別する苦。五苦の第二。
【二三】怨憎會苦。憎惡する者と會合する苦。五苦の第三。
【二四】生老病死苦。是れを五苦の第一とす。以上の外に五苦とは第四苦に求不得苦（求欲する者を得ざる苦）、第五苦に五盛陰苦（五陰盛苦）（五陰とは身心の總體なり、心身の熾盛生長なるに就ての諸苦、又心身に一切諸苦を盛受すること）を加ふ。

愛の因緣を以ての故に、欲心にて厭足こと無し。　多欲は愛より生じ、心意は滿たすべからず。　一切の衆生の類には死法常に現前れ、設ひ諸の方便を以てするとも、此の法を遮ふること能はず。　久しく無量の樂みを受けなば、必定して當に退沒くべし。　是の故に諸の天子よ。應に法行に隨順すべし。　唯だ法ありて能く救ひ、能く善道を得せしめ、法を以て壽命を得、法なければ壽なけん。　若し能く法を愛樂み、法行に隨順せば、樂によつて樂處を得て、則ち衆の苦を見ざらん。　若し法を愛樂まずして、非法を樂み行ひば、則ち地獄に墮ちて常に諸の苦惱を受けん。　是の如き天王界の說きし所の地處も斯のことの除かるは、更らにあることなし。　其の餘の諸地の住、此の三十三天、更らに微少の處も而も能く死地を脫ること無きは、無常なる業を以ての故なり。　應に此の因緣を知るべし。　種々の無常の法に帝釋の說き給へし所の法にして、而も天も受くること能はず。　善智なる憍尸迦は其の身妙たる藏の如くにて、[一〇]倶睒華を愛し、惡衆を捨離し、諸天の父母となりて善く正法を說くとも、愚かる天は敎を受けず。　放逸なる亂心の故なり。

是の如き天鳥は、諸の天子の爲に是の偈を說き已れり。　時に、諸の天子の性は放逸なるが故に、厭心を生ぜず。　放逸は心を覆ふて其の敎を受けず。　還へりて欲樂に著し。但だ現在を觀じて未來を觀ぜず。　此の天中に於いて五欲の樂みを受け、乃至善業を受け盡くし、命終りて還退き、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ。　若し餘業あれば人中に生まれて常に快樂を受け、好んで善法を行ひ、端正は第一にして、一切人の爲めに愛樂せらる。　餘業を以ての故なればなり。

復次に、彼の比丘は業の果報を知りて三十三天の住する所の地處を觀ずるに、此の三十三地を除いては更らに餘地なし。　彼れ是の念を作さく『但だ是の如き三十三天ありて更らに餘地なし』と。　此れは是れ釋迦天王の地にして、天王は福力あり、天王は自在にして更らに餘あること無し。是く

【一〇】倶睒華。倶睒耶舍華と同じ。

らず。偸盜を犯すを恐ればなり、是の如きの人は盜心を捨てて戒を持し、垢を離れ、雜はらず、濁らず、【九】穬秸を離る。是の持戒の人は身壞れ、命終れば、善道の清淨地と名くるに生まる。是くの如き天子は此の天に生まれ已りて第一の樂みを受け、其の身の光明は日光より勝れ、威德は熾盛にして、無量なる天の快樂を受く。善業を以ての故に是の如き樂みを受く。諸の天女の衆は百千に圍遶きて、天鬘・天衣にて其の身を莊嚴り、七寶の林の中にて諸の天女と遊戲して第一の樂みを受く。復往きて樂鹿頂林に詣りて、此の園林の愛すべき奇特を見ては大いに歡喜を生ず。諸天に問ふて曰はく『何る因を以ての故に、此の如き園林は諸の園林より勝るるや』と。華果は山窟・溪谷・崖岸・河泉を莊嚴り、華池・流水の無量なる衆鳥は妙へなる音聲を出し、其の山中に於いて處々に多くの衆寶の鹿ありて、種々に莊嚴りて第一に殊勝たり。爾の時、先きに生れし諸の舊天等は初めて生まれし天子に告げて曰はく『天子よ。當さに知るべし。如し、我れ往昔に、次第に曾て先世の天子の是の如き說を作すを聞けり。轉輪聖王ありて名けて頂生と曰ひ、四天下に主たり。無量百千の樂みを受け、欲に厭足こと無し。自在なる力を以て此の天に來り至り、四天王天より次いで此の天に至れり。人中の數の無量百千歲に於て、此の天中に在りて欲樂を受けて厭足こと無し。既に此の天に至りて天帝釋と座を分つて坐せり。帝釋天と共に出でて遊戲す。此の林中の無量なる功德を知りて、此の林中に至り、遊戲して樂みを受く。此の因緣を以て此の林は殊勝たり。乃至、今に於ても餘林より勝れり。時に、頂生王は此の天中に於て、天帝釋と同處にて坐し、自らの業盡くるが故に天より還退く。我れ昔し曾つて先きの舊き諸の天より斯の事を傳へ聞けり。我れ自ら此の林に具足せるを見しには非らず。乃至』と。今の時に於て新に生まれし天子は聞き已りて歡喜び、疑惑を遠離れ、五樂の音聲を以て、無量なり五欲の樂みを受く。林中に鳥ありて名けて希樂と曰ふ。善業を以ての故に、諸の天子の爲めに頌を說いて曰はく。

【九】穬はもみがら、秸はわらのしべなり。

り。諸の天衆と無量の樂みを受け、放逸は心を覆ひ、欲心に愛著せば欲火に燒かれ、五根より五種の焰を生ず。心窟の住處に自ら燒くを覺らず、諸の天女と放逸して遊戲せり。怨賊を覆藏うて謂ひては親友と爲す。是くの如く樂みを受け、乃至善業を受け盡くし、業に隨ひ流轉して地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し善業あれば人中に生まれて、常に安樂を受け、第一の端正にて無量の功德あり。大種姓に生まれて一切の人の爲に愛念せられ、或は人王と爲り、或は大臣と爲り、生まれし處は長壽にして、乃至命終りても樂みを受けて壞れず、餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀るに、彼れ聞慧を以て三十三天の第三十三地の名けて清淨と曰ふを見る。衆生は何なる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善心を以ての故に因果を信じ、七種の戒を持し、一切の衆生に於て慈悲心を起し、惡友に近づかず、惡人と言語・談論せず、常に三寶を信じ、其の心は寂靜にして心に障礙なく、意に散亂なく、惡法を行はず。下賤き惡人と交友せず。一切衆生に於ては常に愛語し、利益なる時語を說き、法師を供養し、常に正法を聽き、力に隨ひて布施す。若しは行路に於て、乃至盜心を以ては他の草葉をも取らず。是れを盜まずと名く。云何にして殺生せざるや。若しは蝦蟆、若しは屯頭迦を「兩頭の蛇なり」、乃至目に見るとも殺心を起さず。何を以ての故なれば、一切の衆生は皆自ら命を愛すればなり。此の因緣を以て一心に係念し、諦かに視て行ひて、衆生を傷けず。云何して殺生せざるや。若しは疾病ありて其の命を喪はんことを恐れて、肉を買ひて病を療ふに、若しは熱時に於て、或は多時を經て肉中に蟲を生ぜり。若し此の蟲を去れば則ち蟲の命を斷つ。寧ろ自ら命を喪ふとも此の蟲を去らず。蟲の命を護るが故なり。是の如き善人は乃至微細なる小罪をも、之れを見ては怖れを生ず。云何にして盜まざるや。是の如き善人は一切の衆生を安樂にし利益し、若しは田澤・園林に乾きたる牛糞あるとも、他の攝むる所なるを知りて、終ひに故らに取

愛網に縛らるることを爲さざらん。　若し人、心を無相にして愛欲を厭離し、垢及び曠野を離れなば、安樂なる彼岸に到らん。　若し人、苦みを厭はず、樂みを得るとも亦た欣ばずんば、是の人は苦樂を脫して能く涅槃の城に到らん。　若し人ありて修行して常に慈悲心を起せば、是の人は因果を知りて則ち能く苦みの網を脫れん。　若し人、分別をせず、意に分別の過りを離れなば、是の人は衆の過りを離れて、能く無上道を得ん。　和合すれば則ち離ることあり、盛んなる色も必らず衰ふることあり、命あるものは皆死に歸せん。　一切の法も是の如し。　諸天も將に退沒くべし。　念々に欲現前る。　當に是の如き法を知りて放逸を行ふこと莫かれ。　愚人は方便なくして、常に欲樂を求むることは沙中に油を求むるが如くなるも、則ち是れを得べからず。　若し人放逸を樂めば則ち安樂を得ずして、放逸なれば大苦を受けん。

樹の根の堅牢なるが如くに、我れ汝の爲に法・非法の義を說かん。　汝よ、當に善く思惟して後に於いて悔ゆを生ずること勿かれ。　若し愚癡なる人ありて、善き師の敎へを受けずんば、臨終の衰惱至れば心に必らず悔ゆの熱を生ぜん。　億千那由他、無數の億兆載、阿僧祇の諸天も皆放逸の爲に誑せらる。　無常なる大劫の火は尙ほ此の山王を燒く。　何かに況んや諸天の身の水沫の芭蕉の如きに於てをや。　諸行は皆な遷動り、生ける法は悉く無常なり。　是くの如き諸法中にて、樂みを求むとも得べからず。

是の如く天帝釋は新に生まれし天子の爲めに、方便して利益の法を說く、時に新に生まれし天子は放逸を以ての故に、一言をも受けず。爾の時、帝釋は其の受けざるを知りて、默然として住せり。時に、初めて生まれし天子は頂上にて合掌し、帝釋を禮し已りて、諸の天衆と歌舞して遊戲せり。百衆・千衆は自の地に還歸り、園林・華池の處々にて遊戲す。遍く住處を觀ずるに流泉・華池にて莊嚴れる處には種々の衆鳥ありて、其の聲は愛すべし。種々の山谷には、寶の光り、焰の輪あ

【七】無上道。如來の悟る道は更らに過上のものなし、故に無上道といふ。

【八】阿僧祇(Asaṃkhyeya)。無數と譯す。

說きて曰はく。

善業の果報を以て、今此の地に生まれたり。　此の天世間に於いて、命終れば當さに墮落すべし。　業盡き還へりて墮落するは、業の生ぜし所に隨ふなり。　今若し善業を修めば後に悔心を生ぜざらん。　放逸にて欲樂に著せば、善業を消盡し、時は自在なるを以ての故に業盡きて惡道に墮せん。　餘天の退歿を見るに、云何に厭ふことを生ぜざる。　我れも亦當に墮落すべきことは決定して疑あること無けん。　若し未來を畏ることあれば法行に隨順せよ。　其の人は命終る時も則ち惡道の畏れ無けん。　放逸なれば怖畏ことなく、其の心は不善を行ひ、後には大なる憂惱を得て、臨終には悔みの熱を生ぜん。　一切の諸の天衆も必らず當に退歿くことあるべし。　既に欲の無常なることを知れば放逸を行ふこと莫かれ、五欲は衆生を誑かし、欲の爲めに迷はされ、欲網に繋縛られて、常に地獄に墮せん。　此の衰惱を知り已れば當さに自ら利益を作すべし。　心を調伏ふるを以ての故に、命終りても心は悔いざらん。　欲蛇の爲に螫され、欲は海潮の波の如くにて、癡人を死路に趣かしむ。　欲火の爲に燒かるれば、親愛及び兄弟・親友も皆な別離せん。　死時の衆の苦みの集りは、具さに說くを得べからず。

死時の既に至り已れば、猶し山の巖の墜つるが如く、大力なるも避くべからずして、將さに人をして惡道に入らしめん。　大力は人を執持して能く世間を壞はさん。　天衆既に知り已れば當さに放逸を捨つべし。　諸根は貪著を生じて厭足ことを知らず、愛心は常に增長きて酥油を火に投げるが如し。　是の如き種々の門は、愛に因つて世間ありて、地獄・餓鬼及び畜生に輪轉す。　生死に擾動せられ、苦惱して自らの心を迷はす。　既に知りて能く愛を離れなば則ち第一道に到らん。　勇健なる者は愛を斷ち、憂へを離なれて苦惱なければ則ち安隱なる眠りを得ん。　能く愛を離るるを以ての故なり。　若し人、心に常に樂みて智慧を修行せば、生死の

の處に詣たり五欲の功德にて勝れし樂みを受くべし』と。爾の時、天子は未だ曾つて此の奇特しき園林を見ず。徐に行き往きて歡喜園林に詣るに、其の林の晃曜ける光明は普く照らして猶し日輪の如し。初めて生れし天子は此の園林を見て、復た歡喜を生じ、此の林中に入りて此の林樹を見るに、無量種に甚だ愛樂すべきものあり。一林の中に四威德を具し、無量百千の衆鳥の音聲は或は微妙なる音聲を出すものあり、或は命言ありて『善く來りしかな天子』と。或は圍遶て歡喜し踊躍することあり。是くの如くに天鳥は園林を莊嚴れり。復た異處ありて、山谷中の河水の聲に於て衆の妙なる音を出し、眞金を岸と爲し、其の水中に於て多くの種々の鵝鴨・衆鳥ありて、妙なる音聲を出せり。既に此の河を見るに、無量の天女と河岸に在りて遊戲して樂みを受け、五樂の音聲にて歡娛て樂みを受く。既に樂みを受け已りて復往きて如意樹林に詣る。是くの如き樹を見るに、光明は月の如く、或は日の如きを見る。新に生まれし天子は此の樹下に於て五欲の樂みを受くることは、具さに說くべからず。既に是の如き無量の樂みを受け已りて、蓮華池に向ふ。蓮華池に至るに、天衆は圍遶て帝釋を奉ずるが如く、皆な歡喜を生ぜり。蓮華池に於て既に樂みを受け已りて、復往きて高聚山頂に詣りて歌舞し遊戲せり。天子、天女は互ひに相ひ娛樂して五欲の樂みを受く。高聚の頂きに至りて、上頂の上を見るに蓮華池ありて、無量の衆鳥は諸の天衆と共に第一の樂みを受け、善業を以ての故に第一の威德あり。諸の天衆と共に園林の中、如意林の中、上味林の中に於いて、多くの衆鳥ありて其の林を莊嚴り、此の林中に於いて遊戲して樂みを受く。是の時、天子は高聚の峰に於て、諸の天衆と久しく樂みを受け已りて、復た自地の新に生まれし天子を觀て希有の心を生じ、百千の天衆は皆な共に圍遶けり。復天衆と善法堂に詣りて天帝釋に見ゆ。

爾の時、新に生まれし天子は善法堂に至りて、善法堂を見るに、種々の衆寶を以て莊嚴と爲し、衆寶の欄楯は前に說きし所の如し。爾の時、[六]釋迦提婆は此の天子を見て心に歡喜を生じて頌を

【六】釋迦提婆 (Śakra devānām indra)。又釋提桓因、釋迦提婆因陀羅とも云ふ。須彌山の頂上に住して忉利天卽ち三十三天の主なり。略して釋帝とも、帝釋とも稱す。

知り、生滅の法を觀ず。是れを殺生せざると名く。是の持戒の人は身壞れ、命終りては、善道の三十三天の威德熖輪の住する所の地に生まる。彼の天に生まれ已りては、第一の善業にて其の威德の輪は周匝を莊嚴て快樂を受く。具には說くべからざるも、今少分を說かんに、其の身の周遍の威德の[五]熖光は、日の照らすが如くにて目を曜かせず。善業を故ての故に、百千の天女は其の人を圍遶きて快樂を受く。金・毘瑠璃・靑因陀寶を以て宮殿を爲し、遊戲し歌舞せり。復た園林ありて、華は常に開敷き、多くの衆鳥ありて妙へなる音聲を出だし、色を見、聲を聞くも皆愛樂すべきなり。

復一林ありて名けて開合と曰ふ。處處の諸の林は目を開き、目を閉づて常に光明を見る。此の林中に於いて、諸の天女と共に遊戲して樂みを受け、希有の心を生ぜり。復た往きて祇多の林に詣りて、無量なる百千の天女と歌舞の音聲にて、山峰に遊戲す。歌音を以ての故に、衆の響聲を出すとも、猶し歌音の如し。若しは異天ありて、諸の林中に於いて遊戲して樂みを受け、此の歌音を聞けば卽ち其の林を出で、自ら相ひ謂ひて言はく『是れは何等の聲なりや。猶し第二の釋迦天王の如し』と。出で已りて卽ち初めて生まれし天子を見る。天衆は之れを見て歡喜の心を生じて、出でて天子を迎へて希有の心を發せり。既に天子を見ては皆歡喜を生ず。天子に命て言はく『善く來りしかな天子よ。汝は我が所に來りぬ。汝は天衆に於いて最も殊勝たり。此の天中に於いて猶し第二の釋迦天王の如し』と。

爾の時、餘天は皆悉く速かに往きて天子の所に至れり。到り已りて圍遶れり。時に、諸の天子は歌舞し戲笑して心に歡喜を生じ、天子を圍遶きて、皆共に往きて歡喜園に詣りて遊戲して樂みを受く。諸の天女等は天子を圍遶きて歌舞し遊戲せり。爾の時、天子は須臾に迴顧して諸の天衆を見るに、皆其の後に隨ひて心に歡喜を生ぜり。天衆に問ふて言はく『何この所に至らんと欲するや』と。時に、諸の天衆は初めて生まれし天子に語る『今當さに往きて歡喜園林の愛すべき

【五】熖の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

二倍に轉た勝る。時に、諸の天衆は若しは見、若しは聞きて皆な快樂を受け、大欲を成就せり。諸の天女と共に遊戲して樂みを受け、種々に莊嚴り、妙なる色を具足し、遊戲し歌舞して天の樂みを受く。乃至、善業を受け盡くし命終りて還退く。業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮ち、餘の善業あれば、若しは人中に生まれて第一の樂みを受け、心は常に歡喜び、顏貌は端正にして、一切の人に愛敬せらるる所となる。或は王者となり、或は大臣となる。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀るに、彼れ聞慧を以て、天處の第三十二地あるを見るに、威德焰輪と名く。衆生は何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善心にて福を修め、諂はらず、幻しならず、正法を觀じ、正見の心を以て一切の衆生を利益し、佛・法・僧を信じ、其の心は柔軟くして福業を修行す。若しは僧寺に於いて、或は佛塔の破壞せる者あるを見れば、之れが爲に修治む。或は時に、塔寺の火の爲に燒かるれば、力を竭くして救護し、身命を惜まず。或は大火の佛法・衆僧・珍寶・財物を焚くを見れば、身を喪ふとも之れを救ふ。或は人ありて火の爲に燒かるれば、火に入りて之れを救ふ。悲心を以ての故に能く是くの如きの爲し難き福德を作す。云何して殺さず、及び偸盜まざるや。若しは道の邊に遺落せし物を見れば、若しは金、若しは銀及び餘の財寶を取り已りて唱へせしむ。『此れは是れ誰れの物なりや』と。若し人ありて言ふ。『此れは是れ我が物なり』と。當さに其の相を問ふべし。實なる者には當さに還へすべし。若し人の認めるもの無ければ、七日持つ行きて、日々之れを唱へ、若し主の認むるもの無ければ、此の寶物を以て王・大臣・州郡の令長に付し、若し王・大臣・州郡の令長の福德の人を見て、此の物を取らざれば、後に持つて佛・法・衆僧に與ふべし。是れを偸盜せざると名く。云何にして殺さざるや。若しは道路を行きて、諸の蟲蟻・蚒蛾・蝦蟇・及び餘の小蟲を見るとも、諸の蟲を捨て避けて、遠道を行く。慈悲心を以て衆生を護るが故なり。業の果報を信じ、生死の過ちを

ん。其の業の勝れしを以ての故に、生を受けて法も亦た勝る。若し惡法に入れば、善き處に生まることを得ざらん。若し生死を覺らずんば、一切は皆な無常なり。天衆若し是の如くんば愚癡にして畜生の如し。生苦及び老苦、死苦も亦た是の如し。恩愛及び別離にて次第に衆苦を受けん。若し人智慧ありて、垢れなき法を視れば、彼れは世間より勝りて、汝の放逸の行を非とせん。若し人苦惱を覺とりて淨き智慧を生ずれば、是の人を名づけて天と爲す。汝の欲に著する者には非らず。親友及び兄弟と數數愛別離するとも、若し生死を厭はずんば、鳥と等しくして異なること無けん。酒を飲み過ぎて重しと雖も、酒の醉は尙ほ醒ます可し。放逸なるば悟るべからず。是の故に應に遠離すべし。放逸は人を破壞し、五道に輪轉せしむ。是の故に放逸を離れ、第一に勝れし方便せよ。酒の醉は但だ一日人をして、醒悟せしめざるも、放逸なれば人を惛醉しめ、百千劫に流轉せしむ。若し放逸を離れば則ち不滅の處を得ん。若し人放逸を樂めば、常に生死を受けん。若し人利益を求めなば、當に放逸を捨つべし。放逸の煩惱を生ずることは、大聖を說き給ひし所なり。鳥の放逸を行ふは、畜生の輕き心の故なり。天は何が故に放逸して捨離すること能はざるや。

是の如くに天鳥は善業を以ての故に、一切の諸天を敎化し利益す。是の如き天鳥は猶ほし父母の如くにて、利益し敎示す。此の諸の天衆は放逸心の故に、天鳥の利益の法を說くを覺らず。

爾の時、諸天は復た往きて摩多羅林に詣きて、種々の音聲にて互ひに相ひ愛敬す。摩多羅林に至りて遊戲して樂みを受く。其の林は皆是れ七寶の樹にて、枝葉は相ひ接し、無量の衆蜂は遊戲して、林樹の上の天寶の華中に在り。天衆は之れを見て皆歡喜を生じ、天女の衆と共に遊戲して歌舞せり。天女の歌音は園林中に遍くして、園林中に於て響音を出すとも、皆歌の聲の如し。鳥の音、蜂の音は其の音齊等くして、須彌山に遍し。其の須彌山の本性は愛すべくして、既に此の音ありて

て莊嚴なり。我れ今常に五樂の音聲を樂みて、天の五欲の功德の樂みを受けん」と。諸の天女の衆は心に歡喜を生じて、一山峰より一山峰に至り、一山谷より一山谷に至り、皆な其の中に於いて遊戲して樂みを受く。愛毒に醉されて狂ひし病人の如くにて、心行は正からず。是の如く、天衆は放逸に壞はされても亦復是の如く諸の天女と共に山頂に遊びて、種々の飲食・須陀の味、種々の鳥音にて園林の中に於いて、無量の樂みを受け、互に相ひ愛樂して一心に共に遊そび、一心に係念せり。是の如くに遊戲し、天の衣鬘・瓔珞を以て莊嚴て、皆共に往き如意園林に詣たり、或は往きて酒水の河池に詣たる。此の河中に於いて赤優鉢羅華は遍く其の上を覆ひて、鵝鴨・鴛鴦を以て莊嚴と爲せり。時に、諸の天衆は河岸の上に於いて華の汁を食し、或は上味なる天の美飲を飲みて、諸の天鳥と遊戲して樂みを受け、之れを見ては目を悅しましむ。

爾の時、諸の天は愛毒に醉はされ、復天酒を飲みて百倍に增長し、愛火は五欲の薪を燒き、愛欲に渴せられて厭足ことを知らず。一切は皆な欲網の爲めに縛られ、譬へば人ありて官の禁法を犯かし、王の爲めに縛られしが如し。一切の天衆は無量なる百千の愛欲を見、之れを見ては往き趣むき、其の中にて遊戲す。飲河の岸に於いて既に遊戲し已れば、河中に蓮華・鉢頭摩華・優鉢羅華・拘物陀華あり、衆鳥は中に在りて歡喜て樂みを受く。池中に鳥あり名けて赤水と曰ふ。七寶を身及以び兩翅と爲し、其の身の光明にて、諸の天衆の放逸なる行ひを樂むを見れば、卽ち天子の爲めに頌を說いて曰はく。

天衆常に放逸なれば、天鳥も亦復然り。天衆及び飛鳥は彼れと此れと勝劣なし。非法を樂みて行ひ、解脫の樂みを求めず、天衆若し是の如くんば、鳥と差別すること無けん。若し放逸を離なれ、法に順じて修行すれば則ち世間の勝れしことを爲さん。放逸せざるが故なり。

若し天樂みて遊戲せば、禽鳥も亦た是くの如くにて、天衆は則ち鳥と平等にして差別なけ

【四】拘物陀華。拘物頭華を見よ。

て、衆生あるを見るに、第一の淨き心にて布施し、福を修さめ、七種の戒を持し、惡友に近よらず、持戒して濁らず、福德を護持し、常に勤めて精進み、一心・直心にして煉りし眞金の如し。幾種の戒を護るや。所謂、殺さず及び偸盗まず。云何にして殺さざるや。若しは國土の荒れ亂れて互に相ひ殺害ふとも、是の持戒の人は破戒することを畏れるが故に、寧ろ自から命を捨てて、他人を害せず、他を敎へて殺さしめず。是れを不殺生と名く。云何して盗まざるや。若しは國土荒れ壞亂れ、一切の衆生は競うて他の物を取るとも、是の持戒の人は破戒することを畏るるが故に、飢渴して死なんとせるも、寧ろ自から命を捨てて他の物を取らず。

云何して布施し、何かなる福田に施すや。若しは佛を供養し、若しは說法の處にて之れに施與し、第一に心を修さめ、其の意は正見なり。是の人命終りては天上の威德顏地に生まる。此の天に生まれ已りて、威德の光輪は周遍を圍遶きて第一の勝れし色なり。相似の因果を受くるは善業を以ての故なり。五樂の音聲を以て其の耳を悅しめ、常に曼陀羅の香、俱睒耶舍の香、靑蓮華の香、七寶華の香を聞きて以て其の鼻を悅しめ、舌には種々の上妙なる須陀天の上味の飲を得、目には種種なる七寶の山谷の上妙の色を見、身には種々なる勝妙の天衣を得て經緯あること無く、優鉢羅華の香を以て其の身を塗る。是の如くに天子は善業を以ての故に善果を成就し、千の天女の衆を以て圍遶を爲して、園林を莊嚴り、其の林の勝妙なることは融けたる金の色の如く、金銀の枝の中に懸くるに寶鈴を以てせり。微風に吹動いて妙なる音聲を出し、以て娛樂を爲す。又た種々なる歌頌、讃歎の音を聞きて、第一の樂みを受く。天鬘・天衣を以て莊嚴を爲し、山谷に遊戯しては無量なる種々の衆色・毘瑠璃寶・金銀靑寶・大靑寶王を見、玻瓈山峰に於いて自から其の身を見るに、猶し明鏡の如し。時に、初めて生まれし天子は天女に圍遶れ、寶の山峰に入りて百千の身を見、百倍に歡喜せり。諸の天女の衆も亦復歡喜て、嗚呼と歎じて言はく『我が身は是くの如く端正にし

り。天子・天女は園林中に於いて互ひに相ひ映發して轉た妙好を増せり。林中に山あり名けて遊戲と曰ふ。七寶にて成す所にして、無量種の衆の色の寶鹿ありて端正なる莊嚴なり。赤蓮華寶を以て其の脇を爲し、眞金を背と爲し、白銀を腹と爲し、眞金を頂きと爲し、珊瑚を足と爲し、玻瓈を角と爲せり。一色なるありて所謂、金色なり。或は二色なるありて金色・銀色なり。一切の衆の色を以て莊嚴と爲せる一切の諸の鹿は、林樹の間に於いて、天衆の行に隨ひて衆の妙へなる音を出して、天女の歌の如し。是の如き衆の鹿は衆の妙へなる聲にて歌ふ。此の諸の天衆は既に是の如き無量の樂みを受け已りて、復往きて須彌の山峰に詣たれり。山峰中に於いて一大河ありて名けて山谷と曰ふ。種々の殿に乘りて種々に伎樂し、五樂の音聲ありて勝れし欲を具足し、第一に歡喜て威德を具足せり。往きて須彌山峰の山谷・河所に詣たるに、此の種々の河岸の間に於いて遊戲して樂みを受く。流水の岸中、蓮華林の中、園林の中の歌音にて耳を悅ませて欲業を受け、皆を歡喜を生じて、互ひに相ひ愛敬す。多くの天子及び天女の衆ありて、華香を身に塗り、華鬘にて頂きを貫く。善業を以ての故に天の快樂を受け、業力を以ての故に隨順して遊戲し、天に所應き如くに天の樂みを受くることは、譬喩すべからず。今少分を說かんも、一切の世人は具さに說く能はず。何を以ての故なれば、譬喩すべからざればなり。是の如き天樂は相ひ似たるもの無きが故に、人中にて持戒せし善業の因なるが故に、是くの如き樂みを受けて、此の天中に於いて五欲の樂みを受く。乃至、愛す可き善業は破壞れ朽ち盡き、命終りて還退けり。業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ、若し人中に生まれなば第一安樂にて山澤に近く、多くの河林の國土の中にあり。或は大王と爲り、或は大臣となりて、第一の威德あり。餘業を以ての故なり。

　復次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、三十三天の第三十一地の威德顔と名くるを見る。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以

と。爾の時、諸天は天帝釋を禮して其の所止に還へれり。本地に到り已りては五欲の樂みを受け、五樂の音聲にて種々に莊嚴れる園林の中にて天の樂みを受く。乃至、善業を受け盡くして命終り、還退きて業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮せり。若し人中に生まれなば安樂の處に生まれ、或は大人と作り、一切の人に愛念せらるる所と爲り、病の惱有ること無し。大種姓、大長者の家に生まれて常に安樂を受く。乃至、老死す。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘に業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、三十三天の第三十處の名けて上行と曰ふを見るなり。衆生は何かなる業にて此の天に生まるるや。彼れ聞慧を以て衆生あるを見るに、法に順じて修行し、業の果報を信じて正見を行ひ、布施して福を修さめて一分の戒を持せり。初めは多分を持し、後に一切を持せり。道を行く僧に靴鞋を布施し及び澡瓶を施して殺さず、盗まず。或は邊地に夷人ありて、人を捉へて殺さんと欲するとも、是の持戒の人は救ひ贖うて脫れせしむ。若しは是の王者、或は曠野にて征伐し、財を得しを見るとも、偸盗を犯すを恐れて其の分を受けず。是れを不盜と名く。云何にして殺生せざるや。是の持戒の人、或は是の王者、惡人ありて來りて已れを害せんと欲するを見るとも、持戒を以ての故に其の命を斷ず。是の如きの人は業の果報を畏る。命終りては三十三天の上行地と名くるに生まる。此の天に生まれ已りて、善業を以ての故に三千の天女を以て給侍を爲せり。諸の天女の衆は種々の瓔珞にて其の身を莊嚴り、手には種種の伎樂の琴瑟及び種々の香を執り、種々の歌頌にて天子を讚歎せり。天子の所に向ひ、欲心にて親近しむ。天子も之れを見て亦天女に向ふ。各々は歡喜の心を生じて、皆な共に往きて常歡喜園に詣たれり。其の林の一切は毘瑠璃寶・金銀の樹を以て莊嚴と爲し、種々の流泉・蓮華の林池にて其の園を莊嚴れり。無量の河ありて莊嚴を爲し、種々の鈴網は其の上を彌覆ひ、無量種の鳥は周遍を莊嚴り、無量の種々の美妙なる和雅の音を出せり。其の林は是の如く種々に莊嚴れ

尸迦よ。三十三天は夜摩の天光を視ること能ざるは、夜摩の天衆は三種の業の故なるも、三十三天は但だ二業のみを說くなり』と。我れ世尊より、是くの如く說き給ふを聞きたりき。汝の今見し所も亦た是くの如し。今汝の爲めに說かん』と。時に、諸の天衆は是の語を聞き已りて、五欲中に於て厭離心を生ぜり。『此れは是れ夜摩の諸天の命終りしの時に退歿く相なり。其の光りは此こを去ること無量百千由旬の空よりして下る。汝よ怖ること勿かれ』と。爾の時、釋迦天王は諸の天衆の爲めに頌を說いて曰はく。

是くの如き大樂に隨へば、富樂も亦た是くの如く決定して、當に墮落して是の如き大苦を受くべし。「業は相似の果を得る」と。世尊は是くの如く說き給ひき。其の業の勝れしを以ての故に、其の果も亦た是くの如く、上上に法を相續せり。業の所得の如く、上上に縛を相續せば、其の果も亦是の如し。此れ威德の上なるが故に、業決定して勝れしを知る。業の上勝しを以ての故に、勝れたる命と色力を得しなり。一切の諸の天衆は、業盡きしが故に還退く。譬へば焦敗たる種の、之れを種くとも復生ぜざるが如し。心の性の相續することを觀ぜば、念々に燈の焰えるが如し。心の因は念々に滅し、諸の業も亦た是くの如し。

無常なる業因の故に、終には必ず破壞れることあらん。有常なる者を樂むと謂ふとも、是れは則ち得べからず。若、無常に非らずして、生ぜず亦た滅せざることを樂しめよ。若し智慧ある者は、應に愛境界を離るべし。愛欲を厭離せし人は、則ち樂を愛することを離るを得ん。一切の有漏の法は無常にして、苦、不實なり。若し無漏の法を得ば、乃ち不動の樂みと名づく。

是の如く天帝釋は曼陀羅の諸天の爲めに、實の如く說き已れり。復更らに曼陀羅天を安慰めて、自からの地に歸らしむ。諸の天衆に告ぐ、『汝等諸天、一切の時に於いて放逸を得ること莫かれ』

恭敬ひて住せり。爾の時、釋迦天王は天衆に近く住して歌舞し遊戲し、種々の蓮華を以て莊嚴を爲して歡喜し戲笑せり。一切の天衆は、帝釋の前に於いて歌舞し遊戲せり。曼陀羅地の諸の天衆等は歌はず、舞はず、亦た遊戲もせず、亦た歌頌して帝釋を讚歎もせず、餘天と言談、語論もせず。爾の時、帝釋は曼陀羅に住する所の天衆に告ぐ『諸の天子よ。汝等は何が故に歌はず、舞はず、遊戲せざるや』と。爾の時、曼陀羅に住する所の天衆は天王に白して言さく『我れ住處に於いて未曾有を見たり。本より未だ聞かざる所の奇特の事なり』と。爾の時、天王は曼陀羅に住する所の諸天に告ぐ『汝、何等の希有の事を見しや。自から昔より來未だ見ず、未だ聞かずと言ふや』と。時に、曼陀羅の諸天は帝釋に白して言さく『天王よ。我等は摩多の山峰に遊戲して、彼の山上に昇りしに大光明の上より下りしを見たり。一切の山峰に皆な大いなる焰起れり。我れ此の事を見て未曾有と怪めり。未だ知らざるところなり。當に何等かの因緣あるべし』と。帝釋之れを聞きて少しく思惟し已り、諸の天衆に告ぐ『斯くの如き事ありき。我れ已に先きに是くの如きの事を聞きたりき。我れ爾の時に於いて、此の事を聞き已りて卽ち世尊に問へり。『何かなる因緣を以て此の奇特なる希有の事ありや』と。爾の時、世尊は我れに告げて言へり『憍尸迦、汝は已に惡道の門を閉たり。怖畏を生ずること勿かれ。一切の有爲は生死の攝るところにして所謂無常なり。汝よ今諦に聽け。當さに汝の爲めに說くべし。此れは是れ夜摩天上の諸天の命終りしなり。夜摩の諸天の色量・形貌及以び樂みを受くることは、三十三天より勝れ、百千倍に過ぎたり、業盡きしを以ての故に命終りて還退きしなり。此こを去ること無量百千由旬の上よりして墮ちたり。其の光りは薄少にして燈の滅せんと欲するが如くにて、光明は微少なり。是くの如く夜摩の天子の虛空中より退く時は、墮落して光明は微少なるも猶尙是の如し。況んや夜摩天の大光明の相に於いてをや。具さに說くべからず。夜摩の天光は三十三天の視る能はざる所なり。何を以ての故なれば、境界に非らざるが故なり。憍

足を知らず、五欲の樂みに於いて嫉妬あること無く、互に相愛敬して遊戲し歌舞し、娛樂して樂みを受く。既に池中を出でて、復往きて　尼單多林[二]に詣たるに、其の林中に於いて多くの衆鳥あり、蓮華林池には莊嚴を具足せり。無量の衆鳥は、妙へなる音聲を出して林中に遍く滿せり。其の樹には常に種々の光明あり、其の林には種々の功德を具足せり。衆　の蓮華池を以て莊嚴と爲し、諸の天衆等は其の身に光明、種々の功德を具足して、境界にて天の快樂を受く、愚癡なる凡夫の第一の樂みは所謂、天子天女と娛樂して樂みを受く、愚癡なる凡夫は婇女の羅網の爲めに纒縛られて、生死に流轉す。互ひに相ひ娛樂して、久しく樂みを受け已りて、復往きて摩多山峰の宮殿の處に詣たりて須彌峰に昇る。諸　の天女と共に山峰に昇るに、微風は衣を吹き　翻[三]然として風に隨ふ。皆な共に摩多山峰に上昇せり。爾の時、天子は此の宮殿の殊特て妙好なるを見るに、蓮華にて莊嚴て、七寶の光明は山峰を嚴好り、山の功德の如く摩多山峰に具足し相應せり。其の處は高峻、奇特にて嚴好れることは譬喩すべからず。此の峰中に於いて遊戲し、歌舞し、娛樂して樂みを受く。既に樂みを受け已りて大光明を見るに、其の本の相より過ぎたり。其の山峰中にて先きに見せる光明は猶ほし日光の如し。時に異る光ありて、來つて山峰を照らすに、其の光照は已に百千倍を過ぎたり。天子之れを見て、未曾有と怪しみて卽ち兩目を閉ぢ、低頭して住せり。何を以ての故なれば、先きに未だ曾つて此の光明を見ざるが故なり。其の光りは之れを照らすこと久しからずして還へり滅せり。閻浮提にて天火の下るを見ては、衆生之れを見て皆な大いに怖畏るるが如く、時に諸　の天子は此の光明を見ては、亦復是の如く怖畏れり。未だ久しからずして、心は安隱に還へり、怖畏は滅し已れり。一切は皆な共に此の事を籌量へり。『何が故に此の希有の相ありて、我等天をして皆な怖畏を生ぜしめ、未だ久しからずして還滅びしや』と。時に諸　の天衆は未曾有と怪しみ、善法堂に詣りて　諸　の天女と帝釋の所とに至り、天帝釋を見、頂禮して供養せり。皆　悉く圍遶きて、

【二】　尼單多林。不明。

【三】　翻の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

因陀青寶あり。是の如き種々の衆鳥は妙へなる音聲を出し、是の如き衆の鳥は七寶を翅と爲し以て莊嚴とせり。種々の音聲は之れを聞けば悅樂む。一切の天衆は互に相ひ隨順し、無量なる美音は園林の中に遍し。其の林中に於て愛す可き飮食は河より流る。若し天之れを見れば大いに歡喜を生じて、未曾有と歎ず。是の如く林中にて種々の衆色、種々の莊嚴にて其の身を莊嚴り、諸の玉女の百千の同衆と遊戲して樂みを受く。天中に於いて種々の快樂を受け、其の身の光明、威德は第一なり。是の如くに天子は業の果報を受け、諸の天女に圍遶れて樂みを受けて、心に歡喜を生ず。旣に樂みを受け已れば、是の如く思惟せり。『我れ當さに往きて毘瑠璃寶にて莊嚴れる欄楯の圍遶れる林中に詣たるべし』と。衆の寶にて莊嚴れる種々の衆鳥は妙へなる音聲を出して林中に充滿てり。一切の天衆は心に皆な歡喜し、五樂の音聲にて遊戲して樂みを受け、諸の天衆及び諸の天女と林中にて遊戲せり。林中に池ありて、名けて清水と曰ふ。清淨にして愛す可く、諸の天衆等は蓮華池に於いて遊戲して樂みを受く。爾の時、初めて生まれし天子は天女衆と此の林に至らんと欲す。爾の時、諸天は遙かに天子の歌舞し戲笑するを見、徐歩して行き往きて、天子を迎ふ。清水池に詣り、此の池の邊に於いて歡娛して樂みを受く。池の力を以ての故に、諸の天子の心に念ずる所に隨ひ一切は皆な現はる。若し色香を念ずれば衆蜂を具足す。若し天飮を念ずれば、天飮は卽ち生ず。若し須陀の色香味の具ふることを念ずれば、亦た復た是くの如し。柔軟く淨潔き色は滿月の如し。若し林樹を念ずれば卽ち、第一の功德を具足せる種々の樹林を生ず。鈴網は彌覆ひ、微風は吹き動かして妙へなる音聲を出し、乾闥婆音の如し。復次に天衆は是くの如き念を作せり。『我れ當に池に入るべし』と。是の念を作し已りて卽ち池中に入り、身を沒して深く入る。池中を見るに、種々の寶珠を以て欄楯を爲して寶殿を莊嚴れり。或は眞金・白銀・毘瑠璃寶・青寶・玻瓈雜寶を牀と爲し、敷くに天衣を以てせり。天子、天女は遊戲して樂みを受け、其の池中に於いて無量種に[一]樂しみて、厭

【一】樂の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

卷の第三十五

觀天品第六之十四

三十三天之十一

復次に比丘業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀るに、彼れ聞慧を以て三十三天の二十九地の曼陀羅と名くを見る。衆生は、何かなる業にて此の天中に生まるるや。彼れ聞慧を以て、善人の法に順じて修行するもの有るを見る。正直の心を以て、衆生を惱まさず。實に業果を見、清淨に持戒し、常に持戒を樂しみて諂曲を離なれ、煉れる眞金の如くに清淨にして無垢なり。正見にて修行し、善戒を受持ちて未來世を畏る。布施しては福を修さむ。所謂、修禪の比丘ありて、魔に縛られしを斷たんと欲して、盛夏の熱時に汗を流し熱渇けるを見ては、石蜜漿を施し、或は拂扇を施す。是の如き善人は、衆生を殺さず、或は獵師の孔雀・山雞・種々の衆鳥を羅捕するを見、獵師の捕得して或は養ひ、或は殺さんとし、或は衆鳥を以て遊戲の具を作らんとせば、是の人之れを見て、其れの殺害せらるるを恐れて、此の生命を贖ひて、之れを本の處に放つて、安樂を得せしむる。是れを殺さずして衆生を利益すと名く。云何して盜まざるや。云何して盜を捨つるや。微細なる業の果報を見るとも怖畏れず。是の持戒の人、若しは河池の岸邊或は異る處に於いて楊枝あるを見るも、或は蜜漿ありても、行人に施す爲めに是の人は渇乏しくとも取らず飲まず。慈心を以ての故なり。是れを不盜と名く。是くの如きの人は命終りては三十三天に生まる。既に天に生まれ已りて、一切の諸欲は皆な悉く具足す。五樂の音聲にて園林に遊戲し、種々の衆鳥は妙へなる音聲を出し、蓮華中に於ては、衆蜂の音聲、鴻鳥の音あり、林中の衆の樹は七寶の莊嚴なり。諸の蓮華池には香水充滿て毘瑠璃の如く、中に在りて遊戲す。其の山峰中には、七寶の焰光、七寶の石窟・金銀・玻瓈・

釋は諸天を調伏して、諸の天子の爲に、一切の天樂も皆悉く無常にして變壞し、無我なることを示して、所化を除滅きぬ。時に、諸の天衆は皆厭心を生じて本宮に還歸せり。天の樂みを受け、乃至愛して樂みを集め、業既に盡きては命終りて、還退くとも惡道に墮ちず。人中に生まれば、第一に法に順ふ。自からの修行を以て、林野に樂遊し、未來世を畏れて法を聞くを得已りて出家し、道を學びては、或は須陀洹を得、或は斯陀含を得、或ひは阿那含を得、或は阿羅漢を得。前に法を聞きし因緣力を以ての故なればなり。

別す。

復次に諸の天子よ。復十八界あり。所謂、眼界・色界・眼識界・耳界・聲界・耳識界・鼻界・香界・鼻識界・舌界・味界・舌識界・身界・觸界・身識界・意界・法界・意識界なり。是くの如きを、諸の天子よ。是れを十八界と名く。若しは天、若しは人にして是の如き十八界を思惟する者は、能く境界に於て放逸の行を護る。此れは是れ一切の愚癡なる凡夫の癡の因緣なり。

復次に諸の天子よ。放逸の人に十九處あり。二種に攝めらる。所謂、四禪處にて淨居天を除きて十六處あり、欲界の三處と地獄・畜生・餓鬼となり。人の苦を受くること多き者は、地獄に攝めらる。是れを十九と爲す。

復次に諸の天子よ。前きに說きし所の如くに、四禪・十六處・人及び地獄・餓鬼・畜生、是れを二十と爲す。是の如き生死は調伏せざるが故に各々差別し、或は十種の掉悔を說く。爾の時、諸の天衆は天帝釋の是の法を說くを聞き已りて卽ち偈頌を以て帝釋を讚へて曰く。

天王は此の法を說きて、寂靜なること第一なり。我れ今ま此の法を受けたり、怖畏るが故に修行す。若し人能く法を說けば他人を利益す。其の人は父母の如くにて示すに涅槃の城を以てせり。若し他人の爲に一句の善法を說けば、則ち善き導師と爲して、衆生の尊ぶ所と爲る。天王の說き給ふ所は善法にて、價は無量なり。此の法は寂靜なることを得。餘を寶物と爲さ非れ。寶物は無常に歸せんも、善法は智慧を增す。世間の物は破壞するとも、善法は常に堅固なり。若し法に順じて行ふことあれば、百千の世にも人に隨ふなり。種々の寶物と雖も、後世に至ること能はず。種々の財寶の物は則ち强いて劫奪せらるべし、王、賊及び水火も法財を劫すこと能はず。

爾の時、諸の天子は天帝釋を讚歎し倶養し已りて、帝釋の前に於て恭敬して住せり。爾の時、帝

れを第十一の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十二の心性界なりや。所謂、常恣意天なり。欲性は則ち多くして、瞋恚の性は少なし。不善にて鬪諍し、諸天を行使して、多瞋にして少欲なり。是れを[二五]第十二の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十三の心性界なりや。所謂、一切の三十三天は欲性則ち多くして瞋恚は薄少なり。是れを第十三の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十四の心性界なりや。謂はく、鬱單越人は瞋恚の心薄くして、欲性界多し。是れを第十四の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十五の心性界なりや。謂はく、瞿陀尼人は一切の瞋恚の心多くして、欲心も亦多し。二性は同等なり。是れを第十五の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十六の心性界なりや。弗婆提の人は欲心も瞋心も二倶に雜へ有す。是れを第十六の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十七の心性界なりや。謂はく、閻浮提の人は種々の性、種々の行、種々の信解あり。是れを第十七心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十八の心性界なりや。一切の餘天及び地獄にて人、苦惱を受くると雖も、業幻の女人を見て猶ほし欲心を生ず。業を作せしを以ての故に、是くの如く地獄にても欲心亦多し。四天王天の衆生の心性は、是くの如き界に、是の如く依止し、是くの如く信解す。是れを總說の一切の十八界の性と名く。是くの如き一切は、欲あり、瞋あれば則ち癡心あり、癡の因緣を以て貪瞋あり。若し癡なる心を離れば則ち貪瞋なし。癡心を以ての故に或は貪り、或は瞋る。是の如くんば、諸の天子よ。是れを三種の過を分別すと名く。過に依るを以ての故に、無量に分

【二五】第の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

て、具さに說くべからず、數を知るべからず。

復次に諸の天子よ。云何して第四の心性界なりや。畜生中に於て、何等の畜生は瞋心偏多にして欲心多からざるや。此の第四界は所謂、師子・虎・狼・狗・蛇・黃狖・兕・豹・熊羆・角鵄・烏鵰・失收摩羅[二二]及び野猪等なり。是の如き衆生は瞋心偏へに多し。是れを第四の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第五の心性界なりや。畜生中に於て、何等の畜生を名けて中瞋と爲すや。所謂、牛・馬・水牛・迦陵頻伽鳥・[二三]婆林陀鳥・[二三]迦盧陀鳥・孔雀・鷄・雉及び猫・鼠等は中の瞋恚の性なり。是れを第五の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第六の心性界なりや。謂はく下の瞋性なり。所謂下の瞋の者とは、鵝鴨・鴛鴦・食魚・白鳥・倶翅羅鳥・雀・娑羅鳥・驢・鹿・龜鼈・兎・[二四]蛸山鳥・鴈鳥・蝦蟇なり。是くの如きを等比く名けて下の瞋と爲して、是れを第六の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第七の心性界なりや。鬼神中に於て、若しは神通ありて欲心を行ふ。阿修羅神・畜生の數にて欲性の增多せるを名けて上欲と爲す。是れを第七の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第八の心性界なりや。若しは食香の餓鬼を名けて中欲と曰ふ。是れを第八の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第九の心性界なりや。若しは悕望鬼・棄食を食ふ鬼なり。是れを下欲と名く。是れを第九の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十の心性界なりや。迦樓足天等を名けて下欲と曰ふ。瞋心は則ち多く、鬪諍を好愛し、常に諸の阿修羅と鬪ふことを欲す。其の瞋るを以ての故に欲心は則ち薄し。是れを第十の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十一の心性界なりや。謂く毫持天なり。中欲・中瞋・中性なり。是

【二二】失收摩羅(Sisumāra)。又、失獸摩羅、室獸摩羅、失守摩羅に作る。鰐魚の類なり。

【二三】婆林陀鳥。不明。

【二三】迦盧陀(Garuḍa)。又、迦留羅、迦婁羅、揭路茶、迦樓羅、蘗嚕拏と作る。鳥の名なり。舊譯には金翅鳥、新譯には妙翅鳥、頂癭鳥、食吐悲苦聲とす。四天下の大樹に居り、龍を取て食とす。大部衆の一なり。

【二四】蛸山鳥。鳥の名なり。

は道を相續す。汝等は應に思惟し觀察すべし。既に觀察し已れば則ち實の如くに知り、如實に知り已れば、勤修精進めよ。

復次に諸の天子よ。二十法中に於て、一より漸く增し已れり。汝等の爲に次第に、十七の中陰の有の道を相續せることを宣說たり。今汝等の爲に十八界を說かん。何等を十八とするや。衆生は無量に信解して同からず、無量の種性あり、怖畏の[一四]三過、[一五]三聚の衆生、三種の自在、微細なる信解、種々の所作、種々の性、種々の業、種々の道、種々の苦樂、種々の色、種々の增上は一切衆生の心界の性にして、心界は廣多にして、身體は各異る。是くの如き無量の衆生の心界は、總略の麁の數は十八の惡あり。心の過りに使はれ、廣き心界を以ての故に、地獄・餓鬼・畜生・天・人に輪轉ること有り。總じて諸法を說けば、十八に攝らる。初界の性中は欲を增上と爲し、天は之れを人に與へて欲心を增上さす。一一切の鬼女及び畜生の女、能變化の者は慢心增上す。瞋恚增上とは、瞋心を以ての故に欲心は薄少なり。是れを則ち名けて畜生と曰ひ、非人の初界の性なり。畜生中に於て復多欲のものありて、欲心を增上す。謂はく孔雀鳥・倶翅羅鳥・鳩鴿・雞・雀・鵝鴨・鴛鴦・衆蜂・魚等・[一六]迦陵頻伽鳥にして、其の性は多欲なり。是れを上欲と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第二の心性界なりや。畜生中に於て、何等の畜生を名けて中欲と爲すや。所謂、猫・狗・猪・牛・水牛・駱駝・象・馬・騾・驢・鳥・鵄・鵰・鷲・鸜鵒鳥等なり。是れを中欲と名く。是れを第二の心性界と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第三の心性界なりや。畜生中に於て、何等の畜生を下の欲心と名くるや。所謂、師子・虎・兕・狼・狗・熊羆・豺豹・狐狸・[一七]摩伽羅魚・[一八]倶賖耶魚・[一九]吉利斯摩羅魚・摩伽羅魚・[二〇]屯頭摩羅魚なり。是の如き等の類は、時節に行欲して、非時には行はず。是れを下欲と名け、是れを第三の心性界と名く。諸の天子よ。畜生中に於て、無量の種・無量の生まる處・無量の名字あり

[一四] 三過。身・口・意の過なり。

[一五] 三聚。一切衆生を三聚に該收す。一に正定聚（必ず證悟するに定ありしもの）。二に邪定聚（畢竟證悟することなきもの）。三に不定聚（二者の中間に在て緣あれば證悟し、緣なければ證悟せざるもの）。小乘にては預流向已上の聖者を正定聚とし、五無間業を作るものを邪定聚とし、此の二者の中間に在りて、七六使の行を修する者を不定聚とす。大乘の三聚は多義あれば今略す。

[一六] 迦陵頻伽（Kalaviṅka）。鳥の名。譯して、好聲、和雅と云ふ。

[一七] 摩伽羅（Makara）。又、摩竭、摩迦羅と作る。海中の大魚なり。譯して、鯨魚、巨鼇とす。

[一八] 倶賖耶魚。不明。

[一九] 吉利斯摩羅魚。不明。

[二〇] 屯頭摩羅魚。不明。

を境界に具足せるを見るは、本未だ見ざる所にして、嗚呼と歎じて言はく『是の如き希有なること は昔より未だ見ざる所なり。我れ當に往きて是の如きの處に至るべし』と。念じ已りて即ち往きて天中に生まる。是れを第十五の中陰の有の道を相續すと名く。

復次に諸の天子よ。云何して名けて第十六の中陰の有の道を相續すと曰ふや。云何して有るや。若し上天より退きて下天に生まれ、衆の蓮華の園林・流池を見るに、皆亦た如かず。既に此れを見已りては、飢渇に渇仰き得んと欲しては即ち彼こに往きて生まる。是くの如く同じく天に生まると雖も、二種の陰有、二種の相を生ず。是れを第十六の中陰の有の道を相續すと名く。

復次に諸の天子よ。云何して名けて第十七の中陰の有の道を相續すると曰ふや。若しは弗婆提の人、瞿陀尼に生まるに何等の相ありや。瞿陀尼の人、弗婆提に生まるに復何かなる相ありや。諸の天子よ。是の如き二天下の人は、彼此互ひに生まるに皆一相を以てす。命の終らんとせる時に臨みては、黒闇の窟を見、此の窟中に於て赤き電光ありて下垂る旛の如く、或は赤、或は白なり。其の人、之れを見ては手を以て攬捉ふ。是の人は爾の時に、陰を現しては即ち滅す。手を以て旛に接し、次第に旛を縁として此の窟中に入りて、中陰の身を受け、生陰に近づく。生を受くる法を見るに亦た前きに說きしが如し。或は二牛を見、或は二馬を見るに、愛染して交會すれば即ち欲心を生ず。既に欲心を生ずれば即ち生陰を受く。是の如くんば、諸の天子よ是れを第十七の中陰の有と名く。

汝等よ。當に知るべし。既に此の法を知りては、放逸を得ること勿れ。何を以ての故なれば、放逸の人は生・老・病・死を脫することを得ずして、世間の法に於ては利益を得ず。是の如くに放逸は永く安樂無し。若し苦みを脫れんと欲せば、當に自から勉力みて放逸を捨つべし。若しは天、若しは人の智慧ある者は應に放逸を捨つべし。天子よ當に知るべし。是れを十七種の中陰の有の道を相續して斷たずと名く。汝等よ。應に諸の放逸を捨つべし。諸の天子よ。是くの如き十七の中陰の有

て、臨終の時に於て是の如き相を見るに、大石山を見る。猶影相の其の身の上に在るが如し。爾の時、其の人は是の如き念を作さく『此の山、或は當さに我が身の上に墮つべし』と。是の故に手を動かして、此の山を遮らんと欲す。兄弟・親里は之れを見て謂く『虚空に觸ることを爲す』と。既に此れを見已りて、又た此の山を見るに猶し白氎の如し。卽ち此の氎に昇れば乃ち赤氎を見る。次第に臨終には復た光明を見る。少しく習ふを以ての故に、臨終に迷亂して一切の色を見るとも、夢に見し所の如し。心の迷ひしを以ての故に、其の父母の愛欲して和合するを見ては、之れを見て念を生じて顚倒を起す。若し男子に生まれなば、自から其の身を見るに、母と交會して謂く、父妨礙ぐと。若し女人に生まれば、自から其の身を見るに父と交會して謂く、母妨礙ぐと。當に爾の時に於て中陰は則ち壞れ、陰生じ識起り、次第に生を緣ずることは、印に印せらるが如くにて、印壞れては文成るなり。是れを人中にて命終り、還へりて人中に生まると名く。是れを十四の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第十五の中陰の有の道を相續すると名くや。天中にて命終りて還へりて天上に生るれば則ち苦惱なし。餘の天子の如きは、命終らんとする時には愛別離苦して、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。此の如きの天子は己の身の莊嚴の具を失はず、亦た餘天は其の本の處に坐すること無し。種々の苦惱の相を見ず。坐する所處に餘天は生まること無し。此の天命終れば、勝ぐれし天に生まる。若しは四天の處にて、命終りしの後は三十三天に生まれ、愛す可き勝れし相たなり。衆の歌音を聞くに、先きに未だ聞かざる所なり。五欲の境を見るに、皆悉く勝妙なり。次第に命終りて中陰の有を見るに、第一の天女は種々の音聲にて、手に蓮華を執りて、色相は殊勝たり。河池・流水・園林は勝妙にして、昔より未だ覩ざる所にして、夢に見し所の如し。是の中陰の有は、是くの如き事を見る。若し生有に近づけば、眠より覺めしが如くにて正しき色を見る。五欲の功德

は世間に流轉す。若し人、智慧あれば、業の爲めに縛られず、諸の業も縛る能はずして、生死に流轉せず。藕根の絲を以て須彌山を繫がんと欲するが如くにて、其の人曠野を渡るとも憂ひ及び衰惱なし。智者の流轉せざることは、猶ほし須彌山の如し。

爾の時、天帝釋は諸の天衆の爲めに是の偈を說き已りて、復た地獄の中陰の有の相を說けり。本と見ざる所なるも、忽ち虛空中に於て第一の歌舞して戲笑するを見る。香風は身に觸れて第一の樂みを受け、衆の妙へなる音聲あり、謂く樂器の音、種々の音聲にて、是の如き等を聞きて、風は樂の音を吹き、愛す可き香を聞き、妙へなる色の相を見、園林・華池にて衆の妙音を聞く。自からの身相を見るに、忽ち妙色を生じて威德は第一なり。身を見るに香潔の華鬘にて莊嚴りて、一切に礙ること無し。諸の虛空を見るに、清淨無垢にして星宿は空に滿てり。河流の聲を聞くに、鵝鴨、鴛鴦は種々の音を出し、皆悉く聞知せり。是くの如き中陰にて、當さに生まるべき處にて諸の音樂・琴瑟・箜篌・種々の樂音の有るを聞く。先の無量百千億歲に於ても、未だ嘗て生まること得ざりしなり。是くの如くに歡喜びて、遍く善相を生じ、自ら身を見るが如くに、兄弟・親族・知識在りて、念々の中に大いなる歡喜を生ず。生有に近かんと欲して、或は三十三天に生まれ、或は四天王天に生まれ、此の天に至り已りては、衆の園林を見、及び香氣を聞き、七寶の蓮華あり。天子は端正にして是の如き念を作せり。『我れ今當さに是くの如きの處に至るべし』と。念じ已りて卽ち生まる。是くの如き[一三]有分は因緣有を取るなり。是の如き衆生は惡業旣に盡きて地獄より出でて、不可說の大苦惱の處に於て命終り、大樂の處に生まる。是れを十三の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して名けて第十四の中陰の有の道を相續すると曰ふや。云何して知るや。若しは人中に死して還へりて人中に生まるに、何等の相あり、云何して悕望むや。其の人死する時に、若しは人中に生まれば則ち相の現ずること有り。云何して悕望むや。若しは人中に生まれ

【一三】有分。存在のこと。因緣和合にする流轉の世界のこと。

る時に臨みては則ち相の現ずること有り。云何して中陰の有なりや。天上に生まるるは、業の因縁の故にして、大苦を捨てて第一の樂みを受く。諸の天子よ。地獄の人の惡業は盡るが故に、命の終らんと欲する時に、若しは諸の獄卒によりて、鑊中にて擲置るるとも、猶し水沫の如くにて、滅し已りて生ぜず。若しは棒を以て打つとも、打たるるに隨ひ卽ち死して復た更らに生まれず。若しは鐵函に置かるるとも、置かれ已りて卽ち死して復た更らに生ぜず。若しは灰河に置かるるも、入り已りて消融て復更らに生まれず。若しは鐵棒にて打たるるとも、打たるるに隨ひ卽ち死滅し已りて生まれず。若しは鐵の嘴の鳥・鐵烏に食噉まるるとも食べ已りては生まれず。若しは師子・虎狼の種々の惡獸の之れを取りて食噉るゝとも、食し已りて生まれず。是の地獄の人の惡業は旣に盡きしなり。命終りしの後は復た閻羅の獄卒を見ず。何を以ての故なれば、彼れは是の衆生の數に非らざるを以ての故なり。油[三]炷盡くれば則ち燈のあること無きが如くにて、業の盡くることも亦爾り、復閻羅の獄卒を見ず。閻浮提の日光の旣に現れては、則ち闇冥の無きが如く、惡業の盡くる時は閻羅の獄卒も亦た復た是くの如くにて、惡口・惡眼の衆生の相の畏るべきの色の如きも皆悉く磨滅ぶ。畫壁を破れば、畫も亦た隨ひて滅するが如くにて、惡業の畫壁も亦復是の如し。復閻羅の獄卒の畏る可きの色を見ざるは、如來は閻羅の獄卒は衆生の數に非ずと說き給ひしを以てなり。是れを地獄の衆生の地獄を脫るるを得て、天上に生まると名く。爾の時、天帝釋は偈頌を以て曰く。

人の怨家に値うても脫れることを得て、衆の難なきが如く、多くの知識を得ては一切の方便にて利するが如くに、旣に惡業の大力の獄卒の處を脫るることを得たり。　今巳に善業を得て、天世間に生まれたり。　其の人天上に生まれては、無量の諸の莊嚴にて、常に天樂を受く。乃至、善業盡くれば、其の人は自在ならずして、業盡き還りて退沒くことは、油炷の盡きて燈の光明も亦た隨つて滅するが如し。　業風の吹く所は、上よりして退下り、風力に轉ぜられて

【三】　炷は燈心のことなり。

なるが故に、是の故に希有の心を生ぜしなり。『我れ當に此こに至りて、此の物を盡く攝すべし』と。餘の善業の故に是くの如き心を起し、此の因緣を以て是くの如き意を生ず。此の念を生ずる時に即ち天上に生まる。是れを十二の中陰の有と名く。第一に難有く、第一に希有く、第一に難知し。戲弄の中にて業を最第一とし、種々に業は處し、心は大幻師にて、諸道の生死の處にて遊戲しては衆生を戲弄ぶ。爾の時、諸天は天帝釋の此の語を說くを聞き已りて、心に深信を生じて頌を說きて曰く。

天王は父母の如くにて、天世間を利益し、天王は我等を利し給ふ。此の世及び未來にて、我等の爲めに說法して放逸の心を斷ち給ふ。我等は必らず當に苦を盡くして涅槃道を得べし。現業の果報を以てなり。我等の爲めに宣說するに、生死の法を以てして、世に示して解知らしむ。天王は實諦を見て我等を饒益し給ふ。我が愚癡なるを以ての故に、之れに示すに智慧を以てし給ふ。貪心にて婇女を愛し、常に欲樂を求めしかば、天王は我等に生死の因緣を示して、王の盲者を導くが如し。病者には大良藥にて正法の道を演說し、諸の天衆を利益し給ふ。天王は既に是くの如き說法を以て利益し給ひ、閻羅の獄卒をして悉く滅して、復た現はしめず。

爾の時、諸の天衆は此の偈を說き已れり。爾の時、天帝釋は復諸の天子に告げ給ふ。云何して名けて第十三の中陰の有と曰ふや。地獄に[二]墮ちし衆生は、希有にして天上に生まることは得難し。餘業の因緣・善因緣の故に、業の如くに第一清涼・第一の利益を成熟す。先に地獄に墮ちしも、善にて出る緣を爲し、無量の苦惱の中より既に脫れることを得已りて、無量の快樂を受くる地に生まる。地獄の衆生とは所謂、活地獄・黑繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱大地獄及び衆の隔處にて、大苦を受くる處、第一の怖る可き毛の豎つ處なり。焰火は熾然として、周匝り圍遶む。是の地獄の人は業の盡きしを以ての故に、將に此の地獄より脫るることを得んと欲す。命終らんとせ

【二】墮字は、宋、元、明三本に依るなり。

轉して窮盡すべからず、思量すべからず。無始よりの邪曲は利益を作さず、衆生を惱害し、輪轉して窮りなし。畜生中に於て無量の種類・無量の種の食・無量の諸道・無量種の身・無量種の地あり、無量種の諸の心の種子ありて無量の業を造る。或は他を敎へて信ぜざらしめて諸の惡業を作さしむ。報を受くること既に盡くれば、猶し大海の水を滴して海を枯竭せしむるが如く、業海の滴を生じて畜生の業を盡くす。餘の善業を以て、畜生中に死しては二の天處に生まる。或は四天王天に生まれ、或は三十三天に生まる。畜生の惡道に於て、苦報盡きんとし、將さに身を脫することを得んとすれば則ち相の現ずることあり。其の相の所緣は無量種ありて、具さに說くべからず。畜生中に死して天上に生るは、甚だ希有と爲し、餓鬼、地獄中にては謂れ非し。何を以ての故なれば、癡心を以ての故に多く惡業を作して畜生中に墮ち、一世の中に作せし所の惡業に於て、百千億の生れを受けて盡きず。或は一劫より百千劫に至るとも、生死に流轉して生より生に至りて、業鎖に繫がれ、世間に流轉して畜生身を受く。是の故に寧ろ地獄、餓鬼に墮ちて愚癡なる畜生の身を受けざれ。是の因緣を以て、畜生の中にて命終りて天に生まるは甚だ有り難し。地獄には非らず。是くの如き畜生の苦しき處にて、臨終に光明の現はるるを見るは餘の善業を以てなり。癡心は薄少となり、本の智は少しく增し、智心は漸く利くなりて、命の終らんとする時に臨みては光明の相を見る。若しは山谷を見、諸の樹林を見るに種々の流水・種々の河池及び飮食を見る。若しは憶念して世間智を見るが故に、樂處あるを見る。或は山中に在り、或は林間に在りて、或は飮食を憶ひ、或は樂しき處を見れば即ち走り往き趣くとも、夢に見し所の如し。走り往きて之れに趣くことは是の如し。是の如く近くに生る處を受け、即ち天身を受くるは夢より覺むるが如し。衆の色相を見るに百千億の生を受けし處に於ても悉く皆未だ曾て是くの如き色を見ず。見已りて歡喜て希有の心を發す。此れは何等の物なりや。云何して此れありや。何かなる因にて此れありや。習はざるを以ての故に、諸識は鈍

我が入りしを知ることは猶し睡の覺めしが如し。卽ち天上に生まる。是れを第十の中陰の有と名く。是れを四天下の中陰の有と名く。是くの如くして光明の中陰の有生まる。我れは微細に知れり。餘は了ること能はず。諸の餘の外道も能く知る者莫し。世間の法と雖も、人の能く見るもの無し。
復次に、諸の天子よ。云何して名づけて第十一の中陰の有と曰ふや。諸の餓鬼等は不善なる業を以て餓鬼の中に生まれ、惡業既に盡きて餘の善業を受く。本と餘道に於て作せし所の善業、愛すべきの業は猶し父母の如くにて、天中に生まれんと欲すれば則ち相の現ずることあり。云何して有を盡くして心に相を現ずるや。諸の天子よ。若しは餓鬼中にて死して天上に生まれんと欲するに、餓鬼中に於て飢渴にて身を燒き、嫉妬して破壞り、常に飮食を貪り、常に漿水を念ふ。但だ飮食を念ずるのみにて餘に知る所なし。命の終らんと欲する時に、復念を起さずんば、本の念に皆滅び、其の身には熱なく、柔軟にして清涼き身なり。長毛ありて遍まねし。身の惡蟲は皆悉く墮落ち、面の色は淸涼なり。涼風は身に觸れ、命の終らんとするに臨至みては悉く飢渴なく、諸根は淨潔し。鵰鷲・烏鴉の諸の惡禽獸は常に其の眼を啄むとも、臨終の時に至りては皆悉く近よらず。飮食の河を見れば盈溢れて充滿つ。中陰の有に入れば、前に習ひしを以ての故に飮食を見ると雖も、飮まず食せずして、唯だ目を以て視るのみにて、人の夢中に食を見るが如し。飮まず、食せず、或は夢の如く食し、食すと雖も飽かず。是の如く見ると雖も未だ飽滿ずして、唯だ歡喜を生ずるのみ。天の愛すべきものを見ることは覺めて色を見るが如し。心に卽ち念を生じ、走り往きて之れに趣むき、悕望み往きて彼處に至らんと欲す。念じ已れば卽ち趣きて天上に生まる。是れを十一の中陰の有と名く。
復次に、諸の天子よ。云何して名けて第十二の中陰の有と曰ふや。希有き業は、愚癡を以ての故に畜生身を受け、無量の種類あり。多くの癡の因緣にて業成就するが故に、餘業にて無量百千億の生死の身を受く。業成就するが故に地獄・餓鬼・畜生に墮ち、無量劫に作せし所の業に於て世間に輪

復次に諸の天子よ。云何して第九の中陰の有とするや。若しは瞿陀尼人の命終りて天に生るに二種の業あり。何等を二と爲すや。一は餘業、二は生業なり。天上に生まれて其の人は云何して中陰の受生をなすや。命終らんとする時に臨めば則ち相の生ずることありて、現報は將さに盡きんとせり。或は中陰の有なれば則ち相の生ずることありて、動亂することは夢の如し。諸の天子よ。瞿陀尼の人は命の終らんとする時に臨みて、善業を以ての故に、命を捨てんとする時に垂とせるも、氣は咽濁ぜず、脉は斷壞せずして諸根は清淨なり。時に於いて次第に大池水を見るに、毘瑠璃の如し。池に入りて渡らんと欲するに、其の水は調適くして、冷ならず、熱からず、洋々として、流れ浮きて彼岸に至ることは、是の如し。是の如くに、生を受けし處に近くして既に彼岸に至る。諸の天女を見るに、第一端正にして種々に莊嚴り戯笑して歌舞せり。其の人は見已りて、欲心にて親近み、前づ女人を抱だけば即時に天に生まれて天の快樂を受く。夢の中陰の如く即時に滅壞れ、無量に亂心して生れ已れば即ち覺る。衆の妙へなる色を見て勝れたる妙身を受く。是れを第九の中陰の有と名く。瞿陀尼の人は生れて三品の上・中・下の業あるも、同一の光明、等一き中陰、等同一の見、同一の生る行にて一切は相似することは、鬱單越の人の三種の生を受くる差別の相の如からず。

復次に諸の天子よ。云何して名けて第十の中陰の有と曰ふや。若しは弗婆提の人命終らんとする時に臨みて、死相を見、自業の相を見、或は他業を見、或は殿堂の殊勝し幢旛、欄楯の莊嚴を見て、中陰の有に於て心に歡喜を生ず。周遍に遊戯して、近く生を受けんと欲し、殿堂の外に於て業の相似を見る。衆の婇女を見るに、諸の丈夫と歌頌して娛樂し、第一の莊嚴にて歌舞して戯笑せり。中陰の有に於て、是の如き念を作せり。『我れ當に殿を出でて諸の婇女及び諸の丈夫を見て、共れと共に遊戯し歌舞し戯笑すべし。何を以ての故なれば、諸の婇女は諸の丈夫と第一の遊戯し歌舞し戯笑するを以てなり』と。念じ已りて即ち出でて遊戯の衆に入る。爾の時、其の人は自から

復次に諸の天子よ。云何して第七の中陰の有なりや。鬱單越人は勝業を以ての故に、三十三天の善法堂等の三十三處に生まる。鬱單越より命終らんとする時に臨みて、勝妙堂を見るに莊嚴は殊妙なり。其の人、爾の時卽ち勝殿に昇るも、實に殿に昇るに非らずして乃ち虛空に昇りて、天世界に至る。其の宮殿を見て心に念ずれば卽ち往きて此の殿中に生まれ、以て天子と爲る。是れを鬱單越の人命終りし後に天上に生まれて、上品の生を受くと名く。是れを第七の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して名けて第八の中陰有の道を相續すると曰ふや。若しは鬱單越の人命の終らんとする時に臨めば則ち相の現ずることあり。諸の天子よ。其の人は園林に行列る遊戲の處を見るに、香潔は愛す可く、之れを聞きて悅樂び、多く苦惱せずして苦惱なし。故に其の心は濁らず清淨心を以て、其の壽命を捨て中陰の身を受け、天の宮殿を見て是の如き念を作さく『我れ當に此の宮殿に昇りて遊戲すべし』と。是の念を作し已りて卽ち宮殿に昇りて諸の天衆の空に遊び行くを見るに、或は走り、或は山峰の中に住し、或は身を相ひ觸れ處々に遊戲して中陰に住す。自から其の身を見るに、天上に昇るも猶ほし夢中の如し。三十三天は勝妙にして、愛す可き一切の五欲は皆悉く具足せり。是の如き念を作さく『我れ今當に是の如きの處に至るべし』と。是の念を作し已りて卽ち天上に生まれし因緣の有を取り、是の如き有を分ちて上・中・下あり。天上に生まれ已りて種々なる殊勝し園林を見、悕望て得んと欲す。鬱單越より死して此の天中に生まる。是の如き一切の鬱單越人は此の天に生まれ已りて、餘業の意生じては、欲樂を樂みて五欲の境を貪り、歌舞し遊戲して愛欲の樂みを受く。喜遊山峰にて、多く欲樂を受けて、一切の欲を愛す。何を以ての故なれば、前きに習ひしに由るが故に、愛を習ひて增長ことは是の如し。諸の天子よ。是れを鬱單越人の命終りて天に生まれ、此の天處に生まれて遊戲し、及び死時の相を熏習すと名く。是れを第八の中陰の有と名く。

以ての故に我れと共に和合せざるや』と。是の念を作し已りて卽ち女身を受く。是れを第四の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第五の中陰の有なりや。若しは鬱單越の人命終らんとする時に臨みて上の行相を見るに、諸の天子は若しは大業、大心にて心業自在にして天上に生まる。命の終らんとする時に臨みて、手を以て空を攬るに一夢心の如し。夢中に見し所の種々の好華を、之れを見て歡喜ぶ。又た第一上妙の香を聞き、第一の妙色を皆な悉く具足し、第一の莊嚴りは青・黃・赤・白なり。第一の香氣は其の手中に在り。是の人華を見て貪心を生じて是の如き念を作さく『今此の樹を見て、我れ當に之れに昇るべし』と。是の念を作し已りて臨終し、中陰の有の中に生まれて、蓮華樹を見るに青・黃・赤・白にして無量種あり。復是の念を作さく『我れ當に樹に昇るべし』と。是の念を作し已りて卽ち大樹に上るに、乃ち是れ須彌寶山に昇る。此の山に昇り、已でに天世界の華果の莊嚴を見て、是の如き念を作さく『我れ當に是の如きの處に遊行すべし。我れ今此の華果の林に至りて處々に具足せり』と。是れを鬱單越人の下品の生を受くと名く。是れを第五の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第六の中陰の有なりや。若しは鬱單越の人中業を以ての故に、命終らんとする時に臨みて、天上に生まれんと欲すれば則ち相たの現ずることあり。命終らんとする時に臨みて蓮華池を見るに、甚だ愛樂すべき衆蜂にて莊嚴り、一切は皆香なり。此の蓮華に昇り、已りて須臾にして空に乘りて飛ぶことは、猶ほし夢中の如し。天上に生まれて妙へなる蓮華を見るに、愛す可く勝妙にして最第一なり。是の如き念を作さく『我れ今當に勝れし蓮華池に至りて此の蓮華を揷むべし』と。是れを鬱單越の人の中品の生を受くと名く。是れを第六の中陰の有と名く。

て其の父身を見るに、乃ち是れ雄鷄なり。母を雌鷄と爲す。若し男子に生まれなば自ら其の身を見るに雄鷄身と作り、若し女人に生まれなば自から其の身を見て雌鷄身を作す。若し男子に生まれば父に於て礙を生じ、母に於て愛染して鬱單越を生まる。是れを第二の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第三の中陰の有なりや。若し閻浮提中にて死して瞿陀尼に生まれなば則ち相の現ずることあり。若し臨終の時に屋宅あるを見れば、盡く黄色を作し、猶ほし金色の如くにて、遍く覆して雲の如し。虚空中を見るに黄氎の相あり、手を擧げて之れを攬れば、親族兄弟は說きて言はく『病人の兩手にて空を攬る』と。是の人は爾の時善く有を將さに盡くさんとせり。身を見るに牛の如く、諸の牛羣を見るに夢に見し所の如し。若し男子にして生を受くれば、其の父母の染愛和合して不淨を行ふを見、自から人身を見るに多く宅舍ありて、其の父相を見ることは猶し特牛の如し。其の父を除去して母と和合す。瞿陀尼人の男子に生まれし者は、是の如き相あり。若し女人にて瞿陀尼界に生まれなば、目に其の身を見るに猶ほし乳牛の若とし。是くの如き念を作さく『何が故に特牛は彼と和合して我と對せざるや』と。是の如く念じ已れば女人の身を受く。是れを瞿陀尼國の女人の生を受くと名く。是れを第三の中陰の有と名く。

復次に諸の天子よ。云何がして第四の中陰の有ありや。若し閻浮提の人、命終りて弗婆提界に生まれば則ち相の現ずることありて、青の氎を見る。一切は皆青くして遍まねく虚空を覆ふ。其の屋宅を見るに悉く虚空の如くにして、青氎の墮ちることを恐れ手を以て之れを遮ぎるに、親族兄弟は說きて言はく『空を遮る』と。命終りて弗婆提國に生まれて中陰の身を見るに、猶ほし馬形の如し。自ら其の父を見るに猶ほし父馬の如くにて、母は草馬の如し。父母交會して愛染和合す。若し男子の生を受くれば、是の如き念を作さく『我れ當に此の草馬と和合すべし』と。若し女人の生を受くれば、自から己が身を見るに草馬の形の如し。是の如き念を作さく『是の如き父馬は何を

亦皆愛すべし。河も亦愛すべく、林も亦愛すべく、次第に諸の歌舞の戲笑を聞き、次に諸の香を聞き、一切に愛樂し、無量種の物は和合して細觸す。是くの如く次第に卽ち天上に生まれて、善業を以ての故に現に天樂を得。此の樂みを得已りて笑を含み、怡悅として顏色は淸淨し。親族、兄弟は悲啼て號泣とも、善相を以ての故に聞かず見ずして、心も亦念ぜず。善業を以ての故に、命終らんとする時に臨みては中陰の有に於て大樂を成就す。初めて樂しき處に生まるに、天身は相似し、天衆は相似す。是の如きの相にて生れし處も相ひ似ることは、印に印せらるる所の如くにて、一切天衆の色相の如く、亦欲界の六天の樂みを受くるが如く、亦遊行の境界も相似するが如くに、觸も亦相似し、天色も相似す。又中陰に住して、諸天中に生まれし處の勝れしを見るが故に、卽ち心に取を生じ、境界を愛するが故に卽ち天身を受く。是れを則ち名けて初の中陰の有と曰ふ』。『復次に諸の天子よ。云何して第二の中陰の有なりや。若し閻浮提の人中にて命終りて鬱單越に生まれなば則ち細輭なる赤氎の愛すべきの色を見る。之れを見て愛樂すれば卽ち貪心を生じ、手を以て捉持へ、手を擧げて之れを攬るに、虛空を攬るが如し。親族は之れを兩手空に摸すと謂ふ。復風ありて吹くに、若し此の病人の冬寒の時には暖風來り吹き、若し暑熱の時には涼風來り吹きて其の鬱蒸きを除きて、心をして喜樂せしむ。心に緣ずるを以ての故に、哀泣、悲啼の聲を聞かず。若し其の業動けば、其の心も亦動く。其の悲啼、哭泣ぶ聲を聞けば、業風は吹きて異處に生れしむ。是の故に親族兄弟の命終らんとする時に臨みて、悲泣、啼哭は甚だ障礙を爲す。妨礙をせずんば鬱單越に生まれ、中間に次第に善の相の出ずることあり。靑蓮華池を見るに鵝鴨・鴛鴦は池中に充滿て周遍に具足せり。其の人、之れを見れば卽ち走り往きて趣むく。是の如くに中間に善心を生じて、命終れば卽ち靑蓮華池を見て、中に入りて遊戲す。若し鬱單越に於て、母胎に入らんと欲すれば、華池より出でて陸地に往き、父母を見るに染欲にて和合し、不淨を因として顚倒の見を以

のこと。四善根の第四位なり。上忍の後念に生ずる善根を云ふ。是れ一刹那なれば下・中・上の三品なし。上忍と同く苦諦の苦の一行相を觀ずるなり。世とは有漏法に名け、有漏法中に於て此觀智に超ゆる者なく、之を以て景勝の法となせば世第一法と名く。此位は亦た一刹那にして、此位の無間に必らず無漏智を生じて見道に入り、眞正に勝諦を證悟し、聖者となりて凡夫の生と離るるなり。

【八】三結。結とは結集、繫縛の義で煩惱の異名なり。一に見結、我見なり。二に戒取結、邪戒を行ふなり。三に疑結、正理を疑ふなり。見惑の中に此三の過最も重きが故に此三結を以て見惑の總稱となし、此三結を斷ずるを預流果とす。

【九】須陀洹(Srota-āpanna)。小乘四果の初果なり。

【一〇】氎は毛おりものなり。

は前に觀ぜしより過ぎたり。是の如き行者は云何して觀察するや。頂法道と名けて山の頂上の如し。頂法增長きて次第に[6]忍法の善根を得生し、忍を得しを以ての故に第三處に住するを、生現前と名く。非現法の忍は現忍の法を以ての故に忍法と名く。忍增長するが故に、[7]世間の第一法と名け、一念の時に於て心心に法を數ふるを、世間の第一法を得ると名く。次第に須陀洹(初果)を成ずることを得。是の如きの法は、我れ自ら之れを證せり。若し人、能く是の如きの法を證せば、閻羅の畏るべき使者を見ずして、亦怖畏れず、是の如くに諸の天子は放逸せざるを以ての故に、是の如き法を得。是の故に諸の天子よ。放逸を得ること莫かれ。爾の時、釋迦天王は頌を說いて曰はく。

若し出入の息に於いて、善く十六斷を知りて、暖法及び頂相、忍法の逆順觀にて世第一法を知る。次第に眞諦を知り、次第に正法を知りて善道を失はざれば、[8]三結を解脫し、八種の有を破壞して勇猛に惡道を斷ず。故に[9]須陀洹と名く。有漏の不善法は、決定して惡道に行く。涅槃に流れ趣くが故に須陀洹と名づく。

爾の時、天帝釋は此の偈を說き已りて、諸の天衆に告ぐ『是の如き十六種は阿那般那(入出息法)を念ず。我れ已に具さに說けり。汝當に思惟すべし。此の道は寂滅にして涅槃の城に入り、怖畏所なくして、一切の聖人に愛念せらるる所なり。是の故に、汝等は應に決定して此の道を修行すべし。若し汝閻羅の使者を畏れなば、應に次第に是の如き阿那般那の十六の行を憶念すべし』と。

『復次に諸の天子よ。十七種の中陰の有の法あり。汝よ當に係念して寂滅道を行ふべし。若しは天、若しは人、此の道を念ずる者は終ひに閻羅の使者に加害せらるるを畏れず。何等を十七の中陰の有とするや。所謂、死時に色相を見て、若しは人中に死して天上に生まれば則ち樂相を見る。中陰の有を見るに、猶し白[10]鬣の如くにて、垂々として墮せんとし、細輭く白淨なり。見已りて歡喜ひ、顏色は怡悅なり。命終らんとする時に臨みて、復園林を見るに甚だ愛樂すべし。蓮華の池水も

て、或は進んで忍位に上る者あり、忍に上れば畢竟退墮することなく、愈進んで見道に入るなり、或は退て暖位に下り、或は無間の業を造りて地獄に墮するものあり、是の如く進退の中間に在れば山頂に譬へて頂法と名く、又頂は人の頂なり。人身中最高勝なる如く、此頂位は退位中最高處なればなり。功德はたとひ退墮して暖位又は無間に墮するも、畢竟暖法の人の如く善根を斷ずることなし。

【六】忍法。四善根の第三位なり。頂法の後念に生ずる善根を忍法と名く、亦三品あり、四聖諦を忍可し決定すること最も殊勝なる位なれば忍と名く。其の下忍は具さに四諦を觀じ十六行相を修すること前の如し、此位に至れば畢竟三惡趣に墮することなし。其の中忍は是より漸く所緣の諦を減し、能緣を減し、其極欲界に屈ずる苦諦下の苦の一行相を殘すに至る、之を減緣減行と云ふ。其の上忍の位は前に殘りし苦諦下の苦の一行相を觀ずるなり。故に上忍の位は僅に一剎那の間なり。此の忍位に至れば必らず忍法を退墮することなく、又惡趣に墮することなきなり。

【七】世間第一法。世第一法

法には術法觀にして、善・不善・無記なること自相の如し。是れを〔二〕四念處と名く。是れを修行する者は、是くの如き法に入りて一心に一切の有爲を觀察し、自相は寂滅にて四念處を觀ず。是の四聖諦の相は是の如く處を念じて一切處に遍く、所謂次第の行相は常に無常にして、合和し聚散し、空にして作者なく、空にして我者なく、破壞れ衰惱す。是の如くに苦なる無常を觀じて、四念處を見已りて四聖諦の自相を觀ず。如實に觀察して暖法を生じ、暖法從り智慧を生ず、譬へば火を鑽するが如し。先づ烟相を見て後ち乃ち火を見る。鑽の如く、燧の如く先づ熱氣を生じ後ち乃ち火を生ず。信樂を以ての故に、一切の煩惱の無知の法中に於て、未來に能く聖法の〔三〕毘尼を生ず。亦復是の如くに十六種を以て四聖諦を觀ず。是の如き暖法は云何して生ずるや。云何して四聖諦を觀ずるや。諸の天子よ。所謂、是の苦聖諦とは因緣あるが故に無常にして、敗壞るが故に苦なり。人を離るるが故に空なり。自在ならざるが故に無我なり。是の如く四種に分別して苦聖諦を觀ず。行者は苦聖諦を觀じ已りて、集聖諦を觀ずるに四種に分別せり。云何して分別するや。所謂、行ひ相續して轉ずるが故に、相似の果集まりて諸有に流轉するが故に、一切の性に因つて流轉すること有るが故に、勢力は相ひ似ざれども相續の緣あるが故なり。行者は復た苦・滅聖諦を觀ずるに四種に分別せり。諸の天子よ。云何して行者は苦・滅聖諦を分別して修行するや。一切の衰惱を捨つるが故に、煩惱の火を滅して離るるが故に、一切の法は第一寂滅なるが故に、淸淨なる法は生死を出づるが故なり。行者は復た道聖諦を觀ずるに、四種に分別せり。諸の天子よ。云何して行者は分別して觀察するや。所謂、不退の處を得るが故に、顚倒ならざるが故に、一切の聖人の住する所の法なるが故に、無礙を以て生死の衰惱を斷除き、世間を出ずるが故なり。是れを十六種の修行の法と名く。我れ已に之れを說けり。汝等天衆よ。勤修精進みて、現に暖法を觀じて展轉して相ひ敎へよ。出入の息より〔四〕暖法を生じ、暖法より〔五〕頂法を生ず。信を以て三寶の功德聚等を係念して、勝ぐれしこと

【二】四念處(Catur-smrti-upasthāna)。身(Kāya)に對しては不淨の觀念、受(Vedanā)に對しては苦の觀念、心(Citta)に對しては無常の觀念、法(Dharma)に對しては無我の觀念を修すべき、修行上の德目なり。

【三】毘尼(Vinaya)。律のこと。

【四】暖法。四善根(Kuśala-mūla)の第一位なり。總相念住の後念に生ずる善根を暖法と名く。下・中・上の三品あり、共に具さに苦集等の四聖諦を觀じて苦空等の十六行相を修する位なり。暖とは聖火の前相なり。聖火とは見道の無漏智に譬ふ。其の聖火が將に生ぜんとする前相として、聊か「あたたまり」を兆する位なり。此の位に入れば所得の暖法を退墮し、或は善を斷じ、無間の業を造りて惡道に墮するも、久しく流轉することなく、必ず涅槃に到るなり。

【五】頂法。四善根(Kuśala-mūla)の第二位なり。(四)の暖法の上品の後念に生ずる善根を頂法と名く。亦下・中・上の三品あり、共に具さに四諦を觀じて十六行相を修するなり。頂とは山頂に譬ふ。山頂は進退の兩際に在るが如く、此の頂位は進退の中間に在り

巻の第三十四

観天品第六之十三

三十三天之十

時に、諸の天衆は心に敬重を生じて、復帝釋の說く所の法の要を聽き、頂上に合掌し帝釋に白して言さく『我れ今現に此の法の勢力を見たり。天王は法を說きて、我等の心に隨ひて信淸淨を得せしめたり、閻羅の使者も亦隨つて漸く滅せり。如來の說き給ふ所の法力を聞くに隨ひて、卽ち皆消滅せり。何かに況んや修行するに於てをや。若し修行すれば不滅の處に至らん』と。爾の時、帝釋は心に歡喜を生じて是の如き言を作さく『我れ今や已に所作を辨ぜり。我れ是の如き放逸の諸天の爲に放逸を除斷し、不放逸を得さしめ、其れをして歡喜せしめん。我れ今當に此の諸の天衆の爲に深妙の法を說くべし。如は、我れ往昔大師の所に於て正しき法要を聞きたり。解脫の城門にては出入の息（安那波那）を念ぜり。昔舊き天より次第に所聞を聞くを得已りて、復世尊を見たてまつるに、我が爲に宣說し給へり。是の故に我れ今諸天の爲に雜四聖諦の法を說かん。一諦中に於て四種に分別して、我れ今當に說きて、是の如き一切の天衆を利益し、亦た自らを利益し、亦他の生死行の衆生をも利益すべし。種々に方便して之が爲に法を說き、諸の衆生をして心に淳熟を得せしめん。我れ已に是くの如き十五法を說けり。我れ今次に諸の天衆等の爲に十六法の安那般那の出入の息法を說かん。四聖諦を分別して自因の相を方便せん。云何して名けて次第に說くと爲すや。是れを修行する者は、自身の心の[一]獼猴を縛るを觀ず。諸の天子よ云何して覺觀せる心の獼猴を縛り、何等の心を縛るや。所謂、識を縛り、是の如き一心にて次第に身相を觀ず。身を觀ずるに循身觀・染・不染・無記觀にて、受には善受・循受觀、苦受・樂受・不苦不樂受觀・受自相觀、

【一】獼猴(Markata)。摩迦羅と音譯す。凡夫の妄心に譬ふなり。

らんとする時に臨めば、則ち閻羅の使者の爲に自在に縛らるる所とならず、醜惡き大怖畏の相を見ずして心に怖畏れず。爾の時、釋迦天王は即ち偈を說きて言はく。

少欲知足の法を出家は應さに修行すべし。　是の如き持戒の人は則ち涅槃道に近かん。　作す所を悕望まずして、涅槃道を勤求むれば、魔境に縛せらるるを爲さず、魔の境界に至らず。　若し人常に修行して悕望む心を生ぜず、　修行し勤めて精進すれば則ち衆の苦あること無けん。　念じ已りて怖畏を作し、現在を思惟して亦た未來を知れば則ち煩惱の縛を脫れん。　常に不放逸を樂みて、不信の法を畏れ、無垢なる淨智を修むれば則ち涅槃に住むことに近からん。　諸天は快樂を受けて、猶ほ放逸の行を起す。　何かに況んや愚癡なる人に於てをや。　放逸の爲に使はれる所となる。　若し人、放逸を行へば是れを已に死せる人と爲す。　若し人、放逸の行なさずんば、常に智慧に住する人にて、放逸なる懈怠の心を、精勤みて能く斷除くなり。　放逸は衆の苦の本にして之れを捨つることを死を棄つるが如くせよ。

是の如くに釋迦天王は諸の天衆の爲に閻羅の使を化して、諸の天子を怖れしめ、之れが爲に法を說きぬ。爾の時、帝釋は諸の天子の正法中に於て心に信樂を生ぜしを知りて、閻羅の使を見ることも漸く消滅させんと欲す。既に此の事を見て、復た往きて釋迦天王に詣る。復諸天ありて、恐怖して園林中に隱藏れしも、一切皆な往きて帝釋の所に詣る。爾の時、帝釋は此の諸天の心に念ずる所を知りて、諸の天衆の心の漸く清淨なるに隨ひて漸漸に化を滅したり。

壞す。是れを沙門の第十法と名く。
復次に諸の天子よ。云何して沙門は第十一法を知るや。若しは比丘ありて佛舍利を持して、城より城に至り、村より村に至り、邑より邑に至り、鄕より鄕に至りて實の神力を以て世間に示せり。是の如き舍利は是れ大福田にして當に供養を設くべし。是の如き比丘は少聞にて無智なり。少欲の比丘を稱美し讃歎して言く『此の比丘は多聞にして智慧なり。能く汝等の爲に正法を演說せん』と。施主は聞き已りて、舍利及び多聞の比丘を敬重して廣く供養を設く。若し此の比丘にして此の供養を受けなば、少欲の法に非らず。少欲の比丘は應さに此の遊行の比丘と共に行き、共に住すべからず。何を以ての故なれば、諸の施主等は此の比丘の禁戒を持せざるを見て謂く『少欲の者も亦た禁戒を破る』と。是の故に應に破戒の者と與に行住坐臥すべからず。閻羅の使の獄卒に縛らるるを恐るが故に、放逸を恐るが故なり。是れを沙門の第十一法と名く。
復次に諸の天子よ。云何して沙門は第十二法を知るや。乞食の法を受け〔三六〕頭陀の功德にて、無知識の處に遊行し、乞食して放逸を行はず、味に著することを捨つ。是れを沙門の第十二法と名く。
復次に諸の天子よ。云何して沙門は第十三法を知るや。足るを知りし比丘の〔三七〕糞掃衣を受くるも足るを知りて衣を受け、陳故衣を畜ふるとも物に於て足るを知る。是れを沙門の第十三と名く。
復次に諸の天子よ。云何して沙門の少欲の比丘は第十四法を知るや。足ることを知りし比丘は能く魔衆を破す。是れを沙門の第十四法と名く。
復次に諸の天子よ。云何して沙門は第十五法を知るや。少欲の比丘は獨り行きて侶なく、惡知識を捨てて、無始よりの煩惱の堅き山を摧破く。是くの如き足るを知りて、第一の樂みを得て命終

【三六】頭陀(Dhūta)。抖擻と譯す。拂ひ擧ぐる義にして、衣食住の貪著を離れ去るを云ふ。卽ち最極限の簡易生活にして、其の行法としては、普通十二を擧げ之れを十二頭陀と稱す。卽ち一、糞掃衣を著く。二、三衣を有するのみ。三、自ら行いて食を乞ふ。四、午前中、唯一度定食を爲す。但し少許の間食を許す。五、一度の定食の外、一切間食せず。六、食量は一握の少量に限る。七、人家を離れたる空閑處に住す。八、塚墓の有る處に住す。九、樹下に坐す。十、露天の地に坐す。十一、草地に坐す。十二、常に坐して臥せず。

【三七】糞掃衣(Pāmsukūla)。火に燒かれ牛鼠などに嚙まれたる物、又は死人の衣、月水女の衣などにて、原野に棄てゝ顧みられざること汚物を清めたる布片と同様なれば、之れを糞掃衣と名く。又、其の布片を洗濯・補綴して著用するに由り、納(又は衲)衣とも云ふ。

自から説かず。所謂醫方・工巧・技樂・刀[三三]稍、是くの如き種々の技術を自ら談說す。何を以ての故なれば、諸の施主の我が技術を知りて多く供養を致し、沙門の法を妨ぐるを恐ればなり。或は是くの如き世俗の技術を以て、心に樂みて習行せば善法を毀壞し、一心を得ず、心は清淨ならず。沙門の法を妨げ、自ら利し他を利することをも亦た皆損滅ひて、弟子を利益し調伏すること能はず。是の故に應に捨てて技術を説くべからず。是れを沙門の第八法と名く。

復次に諸の天子よ。云何して沙門は第九法を知るや。少欲の比丘、智慧の人は供養を遠離す。塔寺中、若しは城邑の內、若しは聚落中、若しは近き聚落、若しは柵邑の中、若しは近き柵邑を見て、僧寺あるを見、若しは衆多の破戒の比丘ありて、多欲にして厭くこと無く、多く飲食を畜へ、不淨の食を食し、飲酒して放逸し、生を治して不淨の物を販賣し、財產を出入し、俗人に親近みて以て知識と爲し、寺に住するを樂まずして、多く施主の家に住するを樂む。少欲の比丘は此の多欲の比丘と共に一寺に住すべからず。若し寂靜の心を得んと欲し、魔の縛を離れんと欲することあれば、應に、是くの如きの處に住すべからず。何を以ての故なれば、城中の人、若しは聚落の人、柵邑中の人の諸の比丘の破戒の行の惡しきを知らんことを恐る。謂く『我れ一人持戒して第一なりとて多く供養を施せり。若し我れ此の供養の物を受くれば少欲と名けず。若し我れ是くの如き利養を受くれば、衆人は嫌恨い、亦た多くの人をして施主を瞋恨しめん。何なる故なれば、物を以て乃ち一人に施せば多人に施さざればなり』と。此の過を知り已りて少欲の比丘は、應に不淨の比丘と共に同處に住すべからず。是れを沙門の第九法と名く。

復次に諸の天子よ。云何沙門は第十法を知るや。若しは比丘ありて世俗の通を得て、能く異相を示すとも、少欲の比丘は應さに宣説すべからず。何を以ての故なれば、諸の聞く者の我れ當に是の阿羅漢の人に多く供養を設けんと謂ふを恐る。沙門の法を妨げ、或は神通を失ひ、少欲の法を

【三三】稍はほこなり。周尺にて一丈八尺ありて騎兵のもつ武器なり。

へて宣說せしめず。若しは受法の弟子、若しは出家の弟子に敎へて說かさらしむ。諸の施主の多く供養の臥具・衣服・飲食・醫藥を設くるを恐る。若し我れ受け取れば、善法を妨げん。若し我れ受けずんば、弟子の心を壞さしめん。若し瞋恚を生ずれば、其の善法を妨げ、未來世に於て不饒益を得ん。是の如き人は足るを知りて施を受くるとも愛攝を爲さず。心散亂せず、正法中に於て正念の心を生じ、樂みて林中にて學を修め禪觀して、身を觀ずるに循身觀、心を觀ずるに循心觀、受を觀ずるに循受觀、法を觀ずるに循法觀にして、是くの如き比丘は有爲の獄に於て則ち能く超越す。少欲知足の行を行ふを以ての故なればなり。是れを沙門の第六法と名く。

復次に諸の天子よ。云何沙門を第七法を知るや。少欲知足にて大利養を畏る。利養を捨て已りて、何等の法を知るや。若しは比丘ありて多くの知識あり、多くの事務を樂み、多くの弟子を樂みて多く利し供養す。樂みを貪り食を請けては數ば親舊を見る。是くの如き比丘と修行する人は、之と共に行伴を爲して聚落の中に至るべからず。何なる故なれば其れと相ひ隨ふことを得ずとは、放逸を恐るが故なり。是くの如き比丘は利養を樂みて、衆人に知られ、同じ處に行くが故なり。亦た謂く此の人は多く貪りて厭ふこと無し。供養を以ての故に其の人を敬重すればなり。二倶に妨礙ぐなり。若しは多事の比丘の他の利養を受け、若しは此の行人其の物を受けざれば、多事の者をして其の心を忿恚らしむ。言く『此の比丘は諂曲にして實ならず、聚落の諸の施主等を誑す』と。謂く『是の比丘の內心は貪濁なり』と。是の因緣を以て、他の見る者をして內に自ら毀傷せしむ。是の故に少欲知足なる比丘は、彼の多事の比丘と同じく止り、共に住し、行き、來り、出でて入るべからず。過を生ずるを以ての故なればなり。是れを沙門の第七法と名く。

復次に諸の天子よ。云何して沙門は第八法を知るや。少欲の比丘は生死を怖畏れて利養を遠ざけ、當に一心を念ず。云何して法を知るや。若しは在家の時、種々の技術をし、旣に出家し已りては復

を害なふ。是くの如きの人は猶し癡なる狗の還へり自ら吐けるを食ふが如し。是れを沙門の第三法と名く。

復次に諸の天子よ。云何が沙門は第四法を知るや。讀みし所の經典を多讀せしと言はず、施主の多くの供養の飮食・衣服・臥具・醫藥を設くるを恐れ、其の消し難くして出家の法を妨げ、我れに應しき所に非らざるを恐れて、自ら止足るを知るなり。是れを沙門の第四法を知ると名く。復第四の少欲の法あり。若しは比丘ありて、少欲にて足るを知る。何等の法に於て放逸の行をせざるや。是くの如き沙門は或は僧の使となり、或は病人の爲に施主の家に至りて、財物を乞求むるに、施主の家に於て若しは一水を飮むとも善法を妨ぐ。唐く行使を勞し、虚しく勤勞を作して福德なし。何を以ての故なれば、味を貪るを以ての故に施主の家に至りて、諸の施主の心をして輕賤を生ぜしむればなり。是くの如き比丘は自ら利益するに非らず、病人を利せず、衆僧を利せず、此れは是れ第一の輕慢の因緣なり。所謂、檀越の家に至りて食味を貪り、輕躁みにて正語せず。此の三種の法は世間、出世間に輕賤めらる。是の故に足るを知り、不放逸なる行は此の法を捨つ。是れを沙門の第四の法と名く。

復次に諸の天子よ。云何して第五の法を知るや。少欲にて足るを知り、乞食に依止して出家の法を受け、唯だ一食を受けて宿食を擧げず。若し宿食を擧ぐれば心則ち貪著して禪誦を樂まず、食味に貪著して後に得ざるべきを恐る。是の如き少しの食も沙門の法を妨ぐ。何に況んや比丘の多く供養を貪るに於てをや。若し此の法を畜へば、愛網の爲に堅牢く繫縛られん。是れを沙門の第五の法と名く。

復次に諸の天子よ。云何沙門は第六法を知るや。若し沙門の大姓の出家なりとも少欲にして足るを知り、我れ既に出家し已りて、自ら說きて我れは是れ某甲の大姓の出家と言はず。亦弟子を敎

人天の中に至らしめて、涅槃の門を開き後に涅槃を得ん。是の故に諸の天子よ。汝等は應に善く其の心を調伏すべし。心を調伏せしが故に尙閻維の使者を見ず。何かに況んや將き去られんとするに於いてをや。時に、天帝釋は諸の天衆の爲に、惡道の畏れを說く。『閻羅王の使者の怖畏を見て、我れ已に是くの如く一一に漸く增して、次第に汝の爲に十四の法を說けり。今當に汝の爲に十五法を說くべし。我れ往昔に佛從り聞きし所の如くに、我れ今當に說くべし』と。何等を十五とするや。若しは出家、沙門の法式を毀ち、亦は他をして作さしめ、袈裟の法を被りては、著する所の袈裟にて他をして愛欲せしむ。袈裟を樂好みて、以て自ら莊嚴るも、其の音は麁惡にして、猶し驢の聲の如し。細步し、徐行して、端嚴き威儀なるも、愛欲の爲の故に其の身を莊嚴れり。是の如き沙門は懃に精進せずして、女人を見るを樂み、憍慢にて自ら大とす。其の心は輕躁にして、心に放逸を欲す。是の故に、著する所の衣服は寒熱を遮ぎる爲に、纔かに身を覆ふることを得るのみにて、貪著を生ぜず、愛著して放逸の爲に誑せられずんば、命終らんとする時に臨みても悔ゆる心を生ぜず。是れを初法と名く。

復次に諸の天子よ。云何沙門は第二の法を知るや。知足を知るに何等の戒を持するや。出家して修行し、智慧を修めて既に自ら知り已りて、施主の所に於て臥具、醫藥を施さるとも、足るを知り、畜を受くるに相應しき施を受け、法の如くに施を受く。是の如くに施を受くるは、出家、沙門の法を妨げず。是れを第二法を知ると名く。

復次に諸の天子よ。云何沙門は第三法を知るや。貪心を以て臥具を念ぜず、若しは聚落、城邑の功德に非らざる處にて、飮食、衣服を爲す故に、阿蘭若の處を捨てて聚落、城邑に入るは、善法を修むるを妨げ、足るを知ることを失ふ。沙門の法中にて第一に勝れし者は所謂足るを知ることと及び不放逸となり。若し人樂みて貪り、足るを知ることを樂まずんば、貪の爲に誑せられて善法

復次に、第十一の一心の係念とは分別を生ぜず。此れは是れ精進、此れは是れ懈怠と、若し是の念を生ずれば、則ち自から毀傷へ、他人を惱まさずして其の心は清淨なり。係念して調伏し、衆生を惱まさずんば是れを第十一の一心の係念と名く。

復次に、第十二の一心の係念とは常に正法を聽き、聞き已りて受持し、既に受持し已りて堅く持して忘れざれば、是の人は善法及び不善法を知る。是の如きの人は大闇中の大燈明の如し。善、不善の法を佛法中に於て、皆な能く了知ることは、猶し明燈の如し。是れを一心の係念と名く。是の如く一心に係念して愛、怒を爲さず、魔の爲めに使はれずんば、是れを第十二の一心の係念と名く。

復次に第十三の一心の係念とは、身に[三三]心法を受くるを念じ、是くの如き處を念じ、自相を知り、心を正しくして係念し放逸の行を離る。既に放逸せずんば閻羅の使者の爲めに自在に將き去られず。自在なるを以ての故に憶念を失はず、非時の行なく、非處に行はず、惡境に行はずして、一切に係念す。是れを第十三の一心の係念と名く。

復次に諸の天子よ。十四種の善く其の心を修むることありて、善く心を調伏し、善く心を清淨にして、放逸を離る。何等を十四とするや。一は知足、二は精進、三は寂靜、四は善き師に親近む。五は惡知識を離る。六は佛法を修習す。七は善く觀じて修習す。八は憍慢を捨つ。九は因果の法及び非法を信ず。十は善き欲を念ず。十一は女色を觀ず。十二は親族に近よらず。十三は正しく一切の境界に住す。十四は生死を畏る。是れを十四の法は善く其の心を修むると名く。此の因緣を以て其の心を調伏し、命終らんとする時に臨みても、惡道の閻羅の獄卒を畏れず、惡道の門を開かず、正法を斷たず、閻羅の使者の爲に繫縛られて意の隨に將き去られず。惡業を作さずして、能く一切の善法を得し者は、所謂善く心を調伏して善業を修めんことを[三四]念じ、能く衆生をして

【三三】心法は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【三四】念の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依るなり。

ら利益することを得ん。遠く衆人を避くるを、是れを第六の一心の係念と名く。

復次に第七の一心の係念とは、天の報を說くを聞くとも、心に愛樂せずして厭離を生じ、地獄の苦果を說くを聞きて樂しみて其の心に厭くこと無し。是くの如き念を作さく『天より退きて衰歿して、閻羅の使の爲に自在に將さにひき去られんとするとも、我れ今復た地獄の業を作さず、亦隨喜ばず、作す者あるを見れば敎へて捨離せしめしなり』と。是の如く比丘は天を聞くとも喜ばず、地獄の苦を聞くとも怖畏を生ぜずして、憂を離れ、喜びを離れて、常に善法を念ず。是れを第七の一心の係念と名く。

復次に第八の一心の係念とは、我れ善念を起して不善の法を捨てて、悉く盡き壞せしめ、餘氣を離れて餘の善法を生ぜしめ、善法に係念す。若し不善を念ずれば善念を妨ぐ。『我れ已に不善の念を斷てり』と。是の如く攀緣して次第に數を想念し、一心に係念して其の心を調伏へり。是の人は能く、洄澓きて涌波つ怨家の心を境界に住せしむ。是れを第八の一心の係念と名く。

復次に第九の一心の係念とは、佛の功德を念じ、法を敬重せんことを念じ、師を敬信せんことを念じ、善なる師行に隨ひて意を正し、修行し、直視し、一尋して、一切の衆生を利益し、心に度脫せんことを念ず。是の如くに係念すれば、果を得んことは空しからずして乃至涅槃せん。是れを第九の一心の係念と名く。

復次に第十の一心の係念とは善く正行を修むるなり。如四種の大怖畏の至る有り、謂く衰・老・病、死なり。死怨を怖畏て憶念を喜ばず。四種の法を見るに、流動して無常なり。壽命の安隱なる少壯に於ても、是の如き四種を具足することは前に說きし所の如し。常に怖畏ること有りて、是の如くに無常の想を修めて、五欲を樂まず、愛怒の爲めに使はれず。常に正行を念ずれば則ち能く煩惱の大山を碎くなり。是れを第十の一心の係念と名く。

復次に第二の係念とは思惟して、外の境界の愛すべき園林及び蓮華池、愛すべき河泉、遊戯の處を觀ず。見已りて是くの如き念を作さく『是の如き愛すべき遊戯の處は、愚癡心を以て貪著を生ずれば必らず當に衰壞すべし。樹の葉は萎黄となりて其の本の相を失ひて彫零し墮落し、狀は枯死せるに似、蔭影は希疎なり。是の如くにて有爲の一切は無常・空・無所有なり。何かに況んや愛法に於てをや』と。是の如くに心に係念を作せり。是の念を作し已りて、心に內外の境界を貪著せずんば、魔も亂すこと能はず。是れを第二の一心の係念と名く。

復次に第三の一心の係念は利益し安樂するなり。云何して係念するや。何等の法を緣ずるや。若しは食し、若しは眠りても、曾て美色を見しと念じて分別せず、心に係念せず。是の如き念を作せば、愚癡なる凡夫の諸根は貪著して厭足するを知らず。是の如く係念するを、是れを第三の一心の係念と名く。

復次に第四の一心の係念とは何等の處に隨ふや。供養の利・衣服・牀褥・臥具・醫藥を得るとも、心に歡喜せず、喜ばず。樂まず。何を以ての故なれば、供養の利は瘡を利養して深く皮を割り、肉を壞す。肉を壞せば筋を斷つ、筋を斷てば骨を破る、骨を破れば髓を傷く。利養の因緣は能く善法を壞すことは亦復是くの如し。是れを第四の一心の係念と名く。

復次に第五の一心の係念とは、若しは城邑・聚落・村營に遊ぶとも城邑に住せず。若しは衆人ありて往きて其の所に至るとも與に多言せず、多語を樂まず。何を以ての故なれば、若し人城邑・聚落に遊行すれば、心則ち散亂れて自利するを能はず。是くの如く一心に係念して、如實に之れを觀ずれば、是れを第五の一心の係念と名く。

復次に第六の一心の係念とは、是の如き過を見て、塚間の樹下、若しは草積の邊、若しは山澗の邊に於て、空舍に住し、愛著する所なく、亦た親愛なく他に親近まずんば、善法は增長して自か

復次に諸の天子よ。若し比丘ありて第八の行法の相を修め、平等の相にて自相の法に住して、顚倒ならず。一切諸法の性は無垢なるが故なり。是の如くに比丘は復自ら觀察せり。『我れ既に生あり、畢定ず當に死すべし。有爲の法は[三]三相に非ざるなし』と。是の如くに一切の諸法は皆悉く無常なることを修行す。是れを則ち名けて第八修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。云何なるを名けて第九修と爲すや。三煩惱の根を三種に對治す。所謂、貪欲・瞋恚・愚癡なり。貪欲の人には不淨觀を敎へ、瞋恚の人には敎へるに慈心を以てし、愚癡の人には因緣を觀ずることを敎ふ。是れを對治と名く。是の如くに觀を修めて、心に常に思念す。是れを則ち名けて第九修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。云何なるを名けて第十修と爲すや。佛の功德を念じ、世間を安樂にす。是の故に修行して自身を利益す。是れを則ち名けて第十修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。云何なるを名づけて第十一修と爲すや。他より次第に、無常の法を聞きて念々に住せず。胎に處せし從り生滅して住せず、始め胎に處せしが如くに童子、少年乃至老時もなり。是くの如くに比丘及び餘は修習す。既に修習し已れば、命終らんとする時に臨みても閻羅王の使者に自在に所持せらるゝを畏れず、醜惡・怖畏の相を見ず。是れを則ち名けて十一修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。云何なるを名づけて、十三係念は善く修めて利益し安樂乃至涅槃を爲すとするや。何等を十三とするや。不放逸を念じ、生住滅を念じ、不散亂を念ず。是の如く念じ已りて、若しは好色を見、若しは惡色を見、若しは、女人を見るとも、其の身內の膿血の不淨の所住の處、大小の便利の不淨の處を觀ず。是の如く係念して散亂せざらしめ、若しは城邑、聚落に入りて乞求し、色境界に行くとも、行く處に應ぜず。若し係念せずんば則ち色欲に著す。是の因緣を以て心を係けて散ぜず。是れを第一の一心の係念と名く。」

【三】三相。生・住・滅（或は生・異・滅）のこと。

法と名く。

復次に天子よ。云何して名けて十一法を修さむと爲すや。若し比丘ありて自身を觀じ、自から其の身を見て愛せず、心を迷はさず、堅く著せずんば是れを初修と名く。

復次に諸の天子よ、若し比丘ありて先に受けし所の欲を毀呰きて味はず、著せず、念ぜずして厭離心を生ずれば、是れを則ち名けて第二修と曰ふ。

復次に諸の天子よ、比丘ありて常に不放逸にて境界に著せず諸の結使を盡くせば、是れを不放逸の行を修むと名く。是れを則ち名けて第三修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。若し比丘ありて善法を憶念して善法を修行せば、是の如き善法は能く樂報を生ず。樂因・樂緣にて是の如き報を我れ當さに之れを受くべしとて不善の法を斷つ。是れを則ち名けて第四修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。修行し樂みて生を受け、有を受くるは何かなる力なりや。云何して生まれ、何かなる因、何かな緣ありや。云何なる因緣なりや。云何して生まれ、是の如くに生を受けて妨礙げを爲すこと莫し、如實に觀受して、堅からず實ならず、空、無所有なれば、是れを則ち第五修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。若し比丘ありて一切の諸行の無常・苦空・無我・無所有なるを修行し、互ひに相ひ因緣して、生有を得、一力にて生ずるに非らず。是の如く修行して、是の如く修さめ已りて心に愛樂せず。是れを則ち名けて第六修と曰ふ。

復次に諸の天子よ。若し比丘ありて是の如き念を作さく『我れ善念を生じて、善の因緣を生ぜり。既に此の念を生じては異る念に壞されん。我が今緣ずる所は生滅して、不善の念は我が善念を壞し、我が善法を妨たげん』と。是の如くに常に所緣を念ずれば、是れを則ち名けて第七修と曰ふ。

天子曾つて善根を種へ、少しく放逸を行ひしものは、此の法を聞き已りて心に自ら覺悟りて、復放逸せず。諸根は淳熟して皆な能く受行せり。若し諸の天子の根の未だ熟せざる者は生の癰を破るが如くにて、之れを破捺する時、捺し已りて洗治するも利益する所なきことは亦復是の如し。

復次に帝釋天王は一より漸く增して次第に十二入の法を說けり。十二入の相已りて、諸天の大衆の中に於いて神通力を作し希有の事を示し、次第に入らしめて心を正念に繫け、因緣の相を覺らしめ、放逸を離れしめて、其れをして利益せしむ。此の變化を見て心に厭離を生ぜり。時に、天帝釋は方便もて利益し、諸の天衆の爲めに廣く妙法を說けり。諸の天子よ。云何諂曲れるや。心は正直ならずして生死に堅著するが故に諂曲と名く。云何が妬と名くや。他に於いて熱惱するが故に名けて妬と爲す。云何が慳と名くるや。己が物の盡くるを懼れて貪惜を生ずるが故に慳と名く。是れを三界の染地の法と名く。分別すれば則ち三界に攝められる所なり、瞋・恨・慳・妬・幻は欲界に繫ながれ、諂曲の法は欲界及び梵天[三〇]に遍まねく、憍慢、大慢は三界に遍まねし。諸の天子よ、是れを十種の不善の大地法と名く。復十種の善の大地の法あり。何等を十と爲すや。所謂、不貪・不癡・有慚・有愧・有信・調伏・不放逸・精進・捨離・不生侵惱、是れを十種の善の大地法と名く。是くの如き十法は各々相を異にせり。謂はく、不貪は一切善法の根本なり。猶し梁柱の如し。不癡の善根も亦復是の如し。慚とは自ら正直を守り、愧とは他人に愧るなり。信とは一切法に於いて其の心清淨なり。調伏とは身心を調へて善く惡法を離れ、淸涼法に依るなり。不放逸とは善法を勤修し、捨とは作・不作の因緣の中に於いて其の心を捨離するなり。不侵惱とは衆生を惱まさざるなり。是れを十種の善法の大地と名く。若し心に是の如き法を念ずるもの有れば、命終らんとする時に於いても死怖を畏れず。閻羅の使者に縛らるゝを畏れず。何を以ての故なれば善法に攝めらるゝが故なり。向きに說きし所の如く、心・心數法[三一]・善の大地法・染の大地法の自相を總じて說けり。是れを十

【三〇】梵天(Brahma)。總じて色界の諸天を稱し、別しては初禪天主を稱す。梵に清淨の義、離欲の義、寂靜の義等あり。

【三一】心・心數。心と心所なり。心とは身識等の心王なり。心數とは新譯には心所と云ふ。心王が有する所の貪瞋等の數多の別作用なり。

復次に天子よ。十二入を觀ぜよ。無常・苦空・無我は其の依止する因緣にて生ずるを觀ぜよ。是の如くに觀じ已れば放逸を離る。眼識の生ぜるを觀るに猶し幻法の如くにて、空無にして有する所は堅からず、實に非ずして破壞するの法なり。眼識滅し已りて耳識生ずるに、空無にして有する所は堅からずして破壞す。是の如く、內の六入・外の六入を觀ずるに或は生じ、或は滅び、鬪諍ひ、愛味し、衰變ひ無常にして、因緣に從つて生ず。如實に之れを知りて、是の如くに見已れば、色を貪らず。若しは愛色を見るとも染著を生ぜず。不放逸なる者は諸天の五欲にも尙ほ貪を生ぜず。何に況んや人欲に於いてをや。爾の時、釋迦天王は頌を說きて曰はく。

界入に迷惑へば、涅槃道を妨げん。―此の放逸を以ての故に、一切の善法を失ふなり。若し三種の過あれば、是れ大惡道の使にして、癡を第一惡と爲し、放逸の故に流轉し、愚癡にして放逸を行へば、死は常に手中に在らん。若し樂みありて放逸なれば、一切は盡く破壞せん。

若し人、一法を過ぎて、二法を思惟し、三處の相を知れば、是の人則ち樂みを受けん。若し天の福德盡きれば放逸に破壞せられて、墮落し、癡に誑せられ、人能く救護すること無けん。一法は常に最も勝れ、能く忍んで修行し、若しは忍と相應して諸の衆生を悲念めば、命終る怖畏の時も是の如き大力を得ん。是の故に放逸を離れて、精進め、諸行を修さめよ。

若し能く無明を捨てゝ、常に明智を守護せば、以て明と無明とを知りて、放逸も壞すこと能はざらん。若し人、放逸を捨つれば決定して大利を得ん。是の如く放逸せざれば則ち能く自から利益せん。放逸の網は自からを縛り、勤めて修めば則ち解脫せん。是の如き縛り解く相は我れ今總じて略說せり。天子は既に已に知れり。若し放逸を行ふものあれば、臨終の時に至りて乃ち其の果報を知らん。

是の如くに天帝釋は廣く十二入の相を說きて、放逸せる諸の天子等を調伏せり。若し、諸の

相を有す。云何が當に自體の相を知るべきや。自體と言ふは不顚倒に名く。五の因縁を以て眼識を生ず。何等を五と爲すや。眼あり、色あり、明あり、空あり、憶念あるが故に眼識生ずることを得。耳は則ち爾らずして、耳識の生ずれば明闇を倶に知るも、明を因とせず。鼻・舌・身・意も亦た是くの如し。意識は明に於いて、或る時は用あり、或る時は用ならず。云何が用ありや。云何が用なきや。若し眼識の色を見れば意識は決了す。是れを名けて用と爲す。云何或は用、或は不用ありや。眼識の色を觀ずるに、若し光明なければ則ち所見なく、餘根の所知は光明を因とせず。是れを識大と名く。諸の天子よ。復四大の因縁ありて各々相ひ依れり。云何して四大互に共に相ひ依りて或は増し、或は減ずるや。眼は火大を増し、鼻は地大を増し、身は風大を増し、舌は水大を増し、耳は空大を増し、此の法は耳中に空界を増勝し、意は聲を得取す。是の故に當に知るべし、故に増減あることを、復た次に觀入とは、何者を近縁とし、何かなる入を遠縁とするかなり。鼻・舌及び身の是の如き三根は對觸れて乃ち知る。眼に見られる所は近く非らず、遠く非らず、耳の聞く所遠ければ則ち了ならず、近かれば則ち能く知る。內にも亦自ら聞き、鼻に聞かれる所近かければ則ち能く知りて、內も亦自ら了る。鼻の內に病あれば亦自ら臭を聞くが如く、耳中の風聲の如く、亦皆自ら是くの如き識を聞くなり。二種に攝せられる所の眼識・意識も是くの如く盡く攝す。譬へば一火の如し。然に隨ひて名を得、或ひは木の火と名づけ、或は草の火と名く。一切の諸識も亦復是の如く、意識に因りて各々差別す。天子よ、當に知るべし。是の如き諸の入は既に知ることを得已りて、放逸を得ること莫かれ。不放逸の行は不貪・不瞋・不癡なり。是の如き善人は命終る時も、閻羅王の使者に縛らるゝを畏れず、畏るべき獄卒の惡相をも見ず、閻羅王の惡の境界をも見ず。地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、常に安樂乃至涅槃を受け、無量の歡喜・安樂を成就せり。不放逸の故なればなり。

放逸なり。是れを十法の煩惱の大地と名づく。染り生ぜし法あれば、閻羅王の使者に縛られる因縁と爲る。諸の天子よ、我が說きし所の如し。云何なるは十種の不善の大地なりや。云何に信ぜざるや。解脫を信ぜず、若しは解脫の法を信ぜず。故に不信と名く。云何懈怠なりや。精進を捨離するが故に懈怠と名く。云何不念なりや。忘れ失ひし法を以ての故に不念と名く。云何が亂心なりや。其の心正しからざるが故に亂心と名く。云何が愚癡なりや。方便心無きが故に愚癡と名く。云何不善觀なりや。正しく觀察せずして非法を思惟す。正道を行はじ、不淨を淨と見るが故に不善觀と名く。云何して邪見なりや。顚倒の法を取り、堅く著して捨てざるが故に邪見と名く。云何心を調伏せざるや。寂靜ならざるが故に不調伏と名く。云何が無明なりや。三界に迷ふが故に無明と名く。云何が放逸なりや。善業を作さざるが故に放逸と名く。是れを十種の煩惱の大地と名く。甚だ鄙惡とす可きなり。

　諸の天子よ、復十種の染地の法あり。何等を十と爲すや。一は瞋、二は恨、三は不悔、四は堅、五は幻、六は諂曲、七は嫉妬、八は慳、九は憍慢、十は大慢なり。是れを十種の染地の法と名く。何が故に名づけて染地の法と曰ふや。大地[三七]に攝せらるが故に染地と名く。云何瞋と名くるや。其の心麁惡なるが故に名けて瞋と爲す。云何が恨と名くるや。其の心結縛して轉た怨結を成すが故に恨と爲す。云何不悔なりや。樂みて衆惡を作し、作し已りて歡喜ぶが故に不悔と名く。云何が堅と名くるや。諸の惡業を作し、執著して捨てず。是れを名けて堅と爲す。云何幻と名くるや。衆生を誑かすが故に、十二入[三八]に誑惑せらるゝが爲めの故に名けて幻と爲す。天子當さに知るべし。云何して十二入なりや。所謂內に眼・耳・鼻・舌・身・意あり、是れを內入と名く。外に色・聲・香・味・觸・法あり、是れを外入と名く。二種に分別せり。一は相、二は自體大なり。言ふ所の相とは　四大[三九]の因緣にて眼識を生ず。是れを名けて眼と爲す。當に知るべし。耳・鼻・舌・身・意は境界を分別して　各　自

【三七】 大地。善惡一切の心を大地と名づく。

【三八】 十二入。十二處とも云ふ。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根と、色・聲・香・味・觸・法の六境を云ふ。是れ凡夫の個に物質に迷ふこと深き者のために、其の實有の執著を破らんとて立てたる法なり。

【三九】 四大。地・水・火・風の物質界を成す本質を云ふ。

れず、失ず是れを正念と名く。云何して正定なるや。是の如き法義に於いて、實念の心を以て一心に憶念し、一相を決定す。是れを正定と名くなり。是れを賢聖なる八聖道分と名く。若し能く憶念すれば則ち閻羅王の使を畏れず、復九種の衆生の居る處を觀ず。

諸の天子よ。又十種の大地を觀ぜよ。何等を十と爲すや。一は受、二は想、三は思、四は觸、五は作意、六は欲、七は解脫、八は念、九は三昧、十は慧なり。是れを[二六]十大地法と名く。心を共にして生じ各々相を異にせり。汝等よ。當に知るべし。何等の相なるや。是の如き法は一緣にして生ずることは猶日光の如し。是の如きの法は心を共にして生じて、增減に相應する相あり。云何して想と名くるや。差別に相應するを知るが故に名けて想と爲す。云何がして思と名くるや。意に三種の善・不善・無記を緣じ、復三種あり、謂く身・口・意思にして、依止する所にして相貌なし。云何がして觸と名くるや。三種和合して觸を生じ、三種の受より起るが故に名けて觸と爲す。天子よ。當に知るべし。云何して三觸して三種の受を生ずるや。謂く苦受、樂受、不苦不樂受なり。云何がして作意と名くるや。法を攝取するが故に作意と名く。云何して欲と名くるや。作す所を憶念するが故に名けて欲と爲す。

云何して解脫するや。能く辯るるが故に亦名けて信と爲す、能く信ずるを以ての故に亦名けて力と爲す。能く持するを以ての故なり。云何がして念と名くるや。若しは處を攀緣しても心は迷亂はず。是れを名けて念と爲す。云何して三昧と名くるや。若しは心に一を緣ず、是れを三昧と名く云何して慧と名くるや。分別して法を觀ず。是れを名けて慧と爲す。

諸の天子は復、十種の煩惱の大地ありて、若し此くの如き法を受行するものあらば、命終らんとする時に臨ぞみて、閻羅の使の爲めに自在に繫縛られん。何等を十と爲すや。一は不信、二は懈怠、三は不念、四は亂心、五は愚癡、六は不善觀、七は邪見の解脫、八は不調伏、九は無明、十は

【二六】十大地法。俱舍宗所立の心所法四十六の中、受想等の十箇の心所あり、一切の心と相應して起れば之を大地法と名く。善惡一切の心を大地と名け、大地の心が所有する法なれば大地法となす。

提分と名づくなり。何等を七と爲すや。謂く、念覺分[一八]・擇法覺分[一九]・精進覺分[二〇]・喜覺分[二一]・猗覺分[二二]・定覺分[二三]・捨覺分[二四]なり。念覺分とは何等の相ありや。所謂、有爲の過惡を念じ、實諦を念じ、涅槃寂滅の法を念ずるなり。是れを念覺分と名づく。擇法覺分に何等の相ありや。智慧を以て簡擇ぶなり。云何がして簡擇ぶや。如實の相の法を以て、此の法を簡擇び、其の義を思惟し、心に其の義を念じて念念に離れず。既に思念し已りて復精進て修さむ。是れを精進覺分と名づく。此の法を念じ已りて希欲心を生じ、是の如き義を念じて歡喜を生ず。是れを喜覺分と名く。復此の義を心に思惟し已りて、身法・心法を如實に調伏ひ、柔軟く輕樂にて、修行して亂れず。是れを猗覺分と名く。復此の義を心に思惟し已りて、心の住せるを緣じて以て其の心を攝む。是れを定覺分と名く。復定意及以び餘念を捨つ。是れを捨覺分と名く。此の如きの法の若しは果、若しは智、及び煩惱を斷ずるに皆な悉く差別し、其の果も亦別して上上にて轉勝れたり。一緣にて生じ、其の用の各異ることは、是の如し。天子よ。是れを七覺分と名く。若し念ずる者あれば能く放逸を捨てん。

諸の天子よ。云何がして八聖道なるや。能く放逸を離れ、未來を怖畏れて、以て安樂を求め、涅槃道を求む[二五]。正見聖諦(如實見)・正思惟聖諦・正語聖諦・正業聖諦・正命聖諦・正精進聖諦・正念聖諦・正定聖諦なり。云何して正見なりや。如實の見にて義に相應せり。是れを正見と名く。如何して正思惟なるや。如實の見・如實の法・自相・平等相是の如きの法に於いて心に種子を念ず。是れを正思惟と名づく。云何がして正語なるや。四種の口業を思惟して、口の四の過を捨て、禁戒を護持す。是れを正語と名く。云何して正業なりや。三種の身に於いて不善業を捨てゝ禁戒を護持するなり。是れを正業と名く。云何して正命なるや。乃至命ちを失ふとも持戒して捨てず。是れを正命と名く。云何して正精進なるや。是の如き義に於いて、其の心に憶念して精進を起す。是れを正精進と名く。云何して正念なるや。是の如き法義に於いて、憶念し思惟して忘

【一八】念覺分。七覺分の一。常に定慧を明記して忘れず、之れを均等ならしむるなり。
【一九】擇法覺分。智慧を以て法の眞僞を簡擇するなり。
【二〇】精進覺分。勇猛の心を以て邪行を離れ眞法を行ずるなり。
【二一】喜覺分。心に善法を得て歡喜を生ずるなり。
【二二】猗覺分。身心麁重を斷除して身心をして輕利安適ならしむるなり。
【二三】定覺分。心を一境に住して散亂せしめざるなり。
【二四】捨覺分。諸の妄謬を捨て、一切の法を捨て、平心坦懷更らに追憶せざるなり。
【二五】正見聖諦。以下八聖道なり。其の項を參照。

ず。先きに燒香を以て供養し、布施せるも、放逸を以ての故に諸の香を知らず。復放逸なるを以て諸の味を知らず。其の食する所の味の若しは甘・若しは酢・若しは鹹・若しは苦・若しは辛・若しは淡・若しは澀・若しは滑なるかの差別を知らず。心放逸なるが故に、是の如き世間の味を知らず。及以び出世の法味を知らざるは放逸を以ての故なり。復放逸を以て身の觸を知らず、身業を作すを知らず。宅舍を修治さんとするも、作業を修さめず、衆の善を作さず。是の人の宅舍は物を具足せず、世間の應に作すべからざる所を知らず、出世間の應に作すべからざる所を知らず、耆舊に近よらず、亦た恭敬、禮拜、問訊せざるは放逸を以ての故なればなり。

諸の天子よ。復た放逸を以て、心の法の若しは善・不善・若しは無記なるを知らず。命終らんとする時に臨みて、死杖に害せられて大苦惱を受け、閻羅の使の爲めに自在に將き去られんとするを知らず。是の故に天子よ。應さに一法の所謂放逸を斷ずべし。二法とは一は賒摩他、二は毘婆舍那なり。是くの如き二法は涅槃の道を示せり。賒摩他とは能く生法及び未生法を斷じて、能く寂靜ならしむ。毘婆舍那とは、心を見・法を見るなり。二種身の故に毘婆舍那と名く。是くの如き二法を以て善の伴と爲して、能く三の過を斷つ。若し欲に著せる者には不淨觀を教へ、若し瞋恚る者には慈心觀を教へ、若しは愚癡なる者には教へるに智慧を以てせり。是の如き三法にて、三法を對治して、其れをして復た放逸を起らざらしむ。若し終らんとする時に臨みては、復た閻羅の使者を畏れず。云何がして四聖諦なるや。四聖諦とは謂く苦諦・集諦・滅諦・道諦なり。苦諦とは、苦に二種あり。一は身苦、二は心苦なり。集諦とは謂く陰界入なり。滅諦とは所謂寂滅なり。道諦とは謂く八聖道なり。是れを四聖諦と名く。善く五境界を護るとは、所謂、色・聲・香・味・觸等なり。云何が六護なりや。所謂六根にして、眼・耳・鼻・舌・身・意の境界の處に於いて、善く之れを守護するなり。何等を七法とするや。謂く七覺分にて人身の分の如く、亦城分の如く、亦た衆分の如し。是れを菩

ば藏と名く。

【一五】闍多迦(Jātaka)。本生と譯す。佛自身の過去世の因縁を說く經文なり。

【一六】毘佛略(Vaipulya)。方廣と譯す。方正廣大の眞理を說く經文なり。

【一七】阿浮多達摩(Adbhuta-dharma)、阿浮達摩・阿毘達磨とも作る。未曾有と譯す。佛が種々の神力不思議を現じ給ふ事を記せる經文なり。

て、猶し畜生の如くにす。未だ睡らずして睡むるが如くにて、應に作すべきこと、應に作すべからざること、福德・非福德・親友・非親友・福田・非福田・應さに說くべきこと、應さに說くべからざることを知らず、利益を知らず、損減を知らず、功德を知らず、過惡を知らず、是れを初惡と名け、一切に利無くして衰惱の根本なり。應に放逸を斷つべし。一切の諸天は皆な放逸を行へり。云何がして閻羅の使者の爲めに繫縛られざらんや。爾の時、天主釋迦提婆は頌を說きて曰はく。

若し天、人放逸にして樂みて非法を行へば、臨終の時に至りて則ち閻羅の使を見ん。放逸は毒害の如くにして、智者に捨離せられなば、命ちの終らんとする時に臨みて則ち衆の苦惱無けん。放逸なれば死して苦みを受け、不放逸なれば最も樂まん。若し樂みを求めんと欲せば、常に應に放逸を離るべし。

諸の天子よ。一法を斷ずとは謂く放逸を斷ずるなり。則ち六種あり。何等を六と爲すや。眼に色を見已りて放逸心を生じて、如實に見ず。或は好色を見、或は惡色を見、若しは黃・若しは黑・若しは赤・若しは白・若しは長・若しは短・若しは方・若しは圓なり。是の如くに世間は如實に知らず。放逸を以ての故に亦出世の法を知らず。放逸なる意を以て、復色を見ると雖も如實に見ず。已れの身の色に於いても正しく觀る能はず。四眞諦を觀るを樂まず、諸の色中に於いても不實を實と見、心放逸なるが故に世間の法及び出世の法を觀る能はず。耳に聲を聞き已りて其の義を知らず。或は歌・或は語・若しは義・若しは非義、是くの如き世間の義を解せず。若しは[八]修多羅・若しは[九]伽陀・若しは[一〇]祇夜・若しは[一一]毘伽那・若しは[一二]憂陀那・若しは[一三]尼陀那・若しは[一四]毘多迦・若しは[一五]闍多迦・若しは[一六]毘佛略・若しは[一七]阿浮多達摩、是の如き法を聞くとも其の義を解せず。放逸を以ての故に、命ち終りし時に、閻羅の使の爲めに繫縛がれて將き去られんとす。復放逸あり、既に諸の香を聞きて鼻卽ち齅ことを貪り、華の香及以び果の香を知らず。是の如き世間の香を知ら

【七】四眞諦。四諦を見よ。
【八】修多羅(Sūtra)。契經と譯す。經中直ちに法義を說ける所謂長行の文を云ふ。
【九】伽陀(Gāthā)。諷頌、又は孤起頌と譯す。長行を用ひず、偈頌のみの經典なり。
【一〇】祇夜(Geya)。舊譯には、重頌偈、重頌。新譯には、應頌とす。前段に說ける經文の義を更らに偈頌になせしもの、卽ち其の義を重說すれば重頌と云ひ、前段の經義に相應すれば應頌と云ふ。
【一一】毘伽那(Vyākaraṇa)。又、毘伽羅と作る。新譯に毘耶羯剌諵、毘何羯唎拏とす。意譯して擧明記論とす。五明中の聲明卽ち語學に關する俗書の總名なり。
【一二】憂陀那(Udāna)。又、優陀那、烏拕南、鄔陀南、優檀那、鄔馱南、鬱陀那と作る。語言を發する喉中の風を意味し、又、譯して自說と云ふ。卽ち十二部經中の無問自說經なり。人の問ふことなきに佛自ら法を說きしもの。
【一三】尼陀那(Nidāna)。因緣と譯す。經中、見佛聞法の因緣、佛の說法敎化の因緣を說くが如きなり。
【一四】毘多迦(Piṭaka)。藏なり。蘊積、包含の義にして、經典能く文義を包含蘊積すれ

ること無くして、必らず苦みの果を受けけん。是れを八法と名く。是の如きの法にて世間の中に於て生死に流轉し、因緣に從つて生まる。是の如きの法は力を以て之れに、[二]抵捍ふべからず。呪術力にても能く調伏せらるる所に非らず。是くの如く閻羅の使者は力にて敵すること能はず。呪術の力にても能く生死の法を遮ぎる所に非らず。法は皆な是の如くにて、若し人惡を造れば苦惱・無量の楚毒を加へられん。諸天・阿修羅・人・龍・夜叉・毘舍遮等は是の如き閻羅の使者に皆な能く加害せられ、此の衆生をして地獄・餓鬼・畜生に墮ちしめん』と。時に諸の天衆は帝釋に白して言さく『天王よ。我れ是の如き閻羅の使者に於いて自在を得ず。唯だ願はくは天王よ。方便力を以て我をして閻羅の使者より脫るるを得せしめよ。我れ當に天王の敎に隨順すべし』と。爾の時、天王釋迦提婆は諸天に告げて曰はく『大方便を有せり。若し能く修さむる者は閻羅の使者の爲めに害せられざらん』と。云何して方便して能く自在なるを得るや。謂く一法を斷ずるなり。一法と言ふは謂く放逸を斷ずるなり。復た二法を修さむるなり。謂く[三]舍摩他、[四]毘婆舍那なり。復た三過を斷ず。謂く貪・瞋・癡なり。四聖諦を觀ず。苦・集・滅・道なり。五善護を知るとは謂く五境界なり。復六護あり、所謂六根なり。七正智を知るとは、謂く[五]七覺分なり。八聖道を行ふとは謂く正見等を知るなり。九衆生の居を知るなり。十業の得果を知るなり。十一修知、十二入知、十三念隨順係念知、十四禪善く其の心を修むる知、十五法知、十六に於いて[六]阿那波那知なり。十七は中陰の有に道を相續し輪轉して法を行ふ知。十八は界知。十九は中有の知なり。欲界の衆生の居る所に於いて二十處知あり。其の行業を是くの如く知る者は則ち自在を得ん。若しは天、若しは人、能く是の如く知れば能く三惡道を斷ち、能く一切の善法を生じて、諸の善法を攝らん。若しは天、若しは人、能く惡道を斷ちて死せば則ち閻羅の使者に怖畏れしめられず。是の故に應さに放逸の行を捨つべし。放逸は能く一切の善法を斷ぜんことは、猶し怨家の如し。放逸の人は世樂及び出世の樂を得ず。放逸は人を覆ふ

【二】 抵の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【三】 舍摩他(Śamatha)。又、奢摩他、舍摩陀と書く。禪定の七名の一。止、寂靜、能滅等と譯す。心を攝して緣に住し、散亂を離るるなり。

【四】 毘婆舍那(Vipaśyana)。又、毘鉢舍那に書く。觀、見、種々觀察など譯す。事理を觀見するなり。

【五】 七覺分(Saptabodhyaṅga)。又、七菩提分、七覺支と云ふ。覺、卽ち佛敎の最高理想としての涅槃を證悟すべき所以としての睿知、否、或は涅槃そのものたる所に趣向せしめる七要件(支)と云ふ意味なり。

【六】 阿那波那(Ana-āpāna)。安般法ともいふ。入出息觀のこと。

卷の第三十三

観天品第六之十二

三十三天之九

爾の時、天主釋迦提婆は天子に告げて曰はく『此の諸の天子は放逸を行ふを以て、實の如く知らずして正法を行はず。我れは是の如き放逸なる天子の爲めに、憍慢なる放逸を離れしめんと欲して、是の如き化を示せり。此の諸の天子は旣に厭離を生じ、其の心は調伏へり。我れ今法を説けば必らず能く信受せん』と。時に、天帝釋は諸の天衆の心の調伏へるを見已りて、諸の天衆に告ぐ『汝等諦かに聽け。當に汝が爲めに說くべし。此の如き丈夫は第一の大力にして形貌は醜陋しとも能く他人を壞し。以て敵と爲し難し。呪術力にて能く調伏する所に非らず。一切の天衆には之れに如く何にものも無し。復天より勝ることありて、汝等を過ぐるとも亦遮ること能はざらん。【一】況んや復汝等の色力の減少て、自在力の無きにをいてをや。是の丈夫を閻羅の使と名け、死ぬ時の使と名く。煩惱の業を以て諸の衆生を縛り、之れを縛り去り將さに地獄・餓鬼・畜生に至らんとせり。八種の法ありて、一切の生死の衆生を攝む。何等を八と爲すや。一は一切の生きる者は皆な死に歸す。二は強健なるとも病惱せざるものあること無し。三は一切の少壯ものも皆な衰ひて老に歸す。四は財富を具足ずるとも貧窮なることあるべし。五は皆な業に由るが故に、諸の世間の業を得る所あり、業に隨順し、作す所の業に隨ひて或は善、不善なること是の如し。是の如くに業の果報を得ん。六は一切の恩愛も皆な當に別離すべくして、堅固きこと無し。七は自から作りし業は決定して報を受け、他の作せしを、我れ其の果を受くることあること無く、自から作して他其の報を受くることもあること無し。一切の諸法は決定して是の如し。八は世間放逸なれば安隱なることあ

【一】況復は、宋、元、明三本に依る。

修行せず。今諸の天衆は皆な惱亂を被むれり。天王よ。何が故に器仗にて嚴り、伊那大龍象王に乘り、身に鎧鉀を服し、天戰の鼓を撃ちて莊嚴て鬪戰せざるや』と。諸の天衆ありて天主と同業にして、天王釋に向かひて是の如き說を作せり。復諸天ありて、此の希有なる未だ曾つて見ざる事を覩て、心に厭離を生じ、極大に恐怖れて諸根は振動へり。帝釋に歸依して是くの如き言を作さく『唯だ願くは天王よ。我等を救護し給へ』と。此の諸の天衆の住する所の地は、悉く阿修羅に劫奪れる所と爲り、未だ曾つて此の阿修羅等の畏るべきの身にて、是くの如き怖畏を見ず。諸の天子等は皆帝釋に向ひて是の如き說を作せり。復天子あり、是の化を見已りて善法殿に向ひ、速かに疾く馳走せて、諸の器仗・鬪戰の具を取れり。復天子ありて雜殿林に詣たり、諸の鬪具を取りて閻羅の使に向かひ、若しは打ち、若しは捉へるも、害を加ふる能はず。譬へば鏡中に見る所の色像の、捉持ふべからず、打ち害すべからざるが如し。是の如くに天王は斯の如き化を示せり。

是の時、天主釋迦提婆は復た天子に、阿修羅を化して羅睺・勇健阿修羅等に勝つことを示せり。縛られて撾打かれ、斫刺れ、罵詈られ、悲泣きて憂惱むことは、諸の天子の化して苦惱を受けしが如し。時に、諸の天子は阿修羅の大なる劇苦を受くるを見るに、百千萬倍に諸天子より過ぎたり。時に、諸の天子の阿修羅の大苦惱を受くるを見るに、未だ曾て見し所に非らずして大いなる怖畏を生ぜり。復往きて釋迦天王に詣りて、天王に白して言さく『我れ今是れを知らず。何かなる丈夫の斯かる大力ありて皆な能く諸の阿修羅王・羅睺阿修羅王・勇健阿修羅王を繫縛れるや。繫[二〇]縛りて撾打ち斫刺し罵詈るや。云何がして此の未曾有の事ありて、諸の天子をして身毛を皆な竪からしむるや。唯だ願はくは天王よ。我が爲めに之れを說き給へ。我れ今亦此の衰惱を得んことを畏る。天王よ。何かなる者の爲せしやを知れりや。不や。諸天の衆及び阿修羅は皆な悉く破壞せられたり。一切世間は皆摧滅されんことを恐る。天王よ。若し知り給へば願はくば我が爲に說き給へ。釋迦天王よ。若しは知らずや。若し知らずんば願はくは善く思惟し給へ』と。

【二〇】縛撾打は、宋、元、明三本に依れり。

け、惡知識に親近みて、根本に利益すること無く、業の果報を信ぜず、業の果報を識らず、[一八]苦樂を衆生に非ずとせば、是の人は因果に迷ひて、臨終に悔の熱を生ぜん。若し人、當に妄語し、智を恃んで憍慢を生ぜば、後に大いなる衰惱を得て、乃ち其の業の果をば覺らん。若し世間に流轉し、具さに諸の苦惱を受くるは、皆な無明の力に由るなり。[一九]大僊は是くの如く說き給へり。

爾の時、釋迦提婆因陀羅は是の如き閻羅の使者を化作し、諸の天子の中有の爲めに法を說きて、折伏し呵責せり。時に、天帝釋は復た諸の天衆の爲めに變化を示現せり。若し諸の天子に先世の業あれば應さに畜生に墮つべし。無量なる種々の業の相を示すことは、印の泥に印するが如くにて、中陰の相は互に相ひ殘害ひ、共に相ひ食噉みて大なる怖畏を生ぜり。諸の天子をして皆な悉く之れを見せしむ。若し諸の天子に畜生の業なければ、但だ畜生の互に相ひ殘害ことを見て、自身の畜生の形を作すを見ず。時に、天帝釋は復放逸なる天子等の爲めに化の中陰を示せり。若し諸の天子の當さに餓鬼に生るべくんば、飢渴の爲めに其の身を焚燒き、長髮にて面を覆ひて其の形は醜惡し。此の諸の天子、虛空の中を見れば、烏鵄の諸鳥來りて其の眼及び耳・鼻・舌を啄む。是の時、天衆は向きの化せし所の是くの如き惡相を見て大いなる怖畏を生ず。餘天は見已りて帝釋に白して言さく『釋迦天王は何が故に諸の天子を捨てて而も自から止住るや。此の諸の天子は皆な繫縛を被れり。或は阿修羅、或は餘の惡人は之れを將れて去らんと欲して、須彌山の一切の諸地に遍まねし。我れ亦曾つて阿修羅と鬪ひしも、未だ曾つて是の如き惡相を覩ず。又阿修羅及び其の軍衆も未だ曾つて倶に此の天中に至らず。云何がして世間は正法を失ひしや。父母に孝ならざるや。沙門・婆羅門を敬せざるや。耆舊、長宿を敬せざるや。天王よ。今諸の世間は如來及び法僧を供養せず。因果を知らず、眞諦を知らず。護世天王の如きは常に此の法を說くとも、今ま閻浮提は

【一八】苦樂の衆生。衆生は善惡の業を造りて苦樂するものゝ謂ひである。この理を知らざること。

【一九】大僊。如來、世尊のこと。

刀戟を把り、奮目大怒して、互に相ひ告げて曰はく『諸の閻羅の使は速かに是くの如き放逸せる天子を縛れ。我れ當さに之れを戮すべし。將に地獄に入りて、其れをして復た放逸を行ずることを得せしめざらん』と。是くの如く大いに喚けびて、虚空に上昇り、須彌山に上りて遍く諸地を皆な摧壞らしむ。百千萬億那由他數の閻羅の使者伺命の官・醜惡の獄卒は、遍く諸地及以び山側を壞して、虚空に遍まねし。或は上り、或ひは下りて、諸の天子を惱ませり。諸の天子に語る『汝等の受けし所の五欲の樂・種々の音樂は今何こにか在る所なりや。汝等は今閻羅の使者の爲めに將かれ地獄に詣たりて大苦惱を受けんとせり』と。若し諸の天子の將に地獄に墮ちんとすれば、則ち獄火來りて其の身を燒かんとするを見る。若し諸の天子に善業あれば、但だ地獄を見て、自身の火の爲めに燒かる所を見ず。時に、諸の天子は自ら中陰にて大繫縛せらるを見る。爾の時、獄卒・閻羅王の使は此の天子の爲めに頌を說いて曰はく。

汝は欲樂を愛して善業を作さず。是の故に苦果を得んことは、今日已に成熟せり。汝、若し放逸を樂みて非法を行へば、臨終の時に至りて、心に乃ち悔の熱を生ぜん。悔の熱は火の燒くに喩ふ、亦刀戟に喩へて、五根從り生じて而も還りて自らを燒滅く。苦に於いても謂ひて樂みと爲し、貪怨を親友と爲し、放逸を觀ることは是の如し。是の故に應に捨離すべし。

放逸は愛と和合し、欲の縛る所と爲り、[一七]三種の大怨家は能く大樂を破壞せん。憍慢にて惡友に近づき、懈怠及び貪心にて持戒を遠離するは是れ地獄の因緣なり。持戒は清涼の觸にして、報を得ては甚だ清涼なり。愚人は修行せずして臨終に悔の熱を生ぜん。他の妻妾を見ては貪著の心を生じ、酒を飲みては劫盜を行ふ。此れに因つて地獄に墮つ。惡口して惡友に親しみ、邪見にて正信無く、其の心は多く躁擾なれば、此の法は人身を失はん。貪心にて綺語し、妄語して誠信なれば、今世若しは後世に少しの安樂もあること無けん。善友を遠離

【一七】 三種の大怨家。貪・瞋・癡を指す。

を行へば則ち安樂なり。智を修むるも亦是の如し。侵さず、妄語せずんば常に安樂を受けん。若しは世間の功德・出世間の功德・此の一切の功德を天王は悉く具足せり。怖る者には爲に歸を作し、苦む者には善道を示し給ふ。天王は世間・阿修羅を持し、天王は最も殊勝にてましませり。諸の不善なる法を離れ、三惡の垢を洗ひ除けば[一五]三歸の法を受けん。寶の如くに三業を知りて、勝れたる三菩提を行へば、放逸の地に生まると雖も放逸を樂まず。天王は世間を持し、法を行ふて怨敵を離れたり。

爾の時、衆分の地の諸の天子等は勝れたる智慧等にて天王を讃へし時に、爾の時、釋迦提婆・因陀羅は諸の天衆を觀じ、善き言にて慰喩めて、諸天に告げて曰はく『諸の天子よ。放逸を行ふこと莫かれ。若し放逸する者は則ち利益すること無けん』と。時に、諸の天子は帝釋を讃へ已りて、天帝釋と虚空に乘じて衆分の地に向ふ。帝釋を首と爲し諸天は隨從ひ、往きて衆分に詣れり。時に、天帝釋は是くの如き念を作さく『此の諸の天子は心に放逸を行ふて退く苦みを知らず。我れ當に化して退歿く相を示して、厭離を生ぜしむべし』と。時に、天帝釋は遊戲して放逸せる諸の天子等の爲めに、中陰の有を化せり。時に、諸の天子は園林・山峰・華池にて遊戲せり。時に、諸の天子は各々自から一切の衆の具の勝れし相の莊嚴なるを見しも、皆な失壞ひ一切の樂具も亦磨滅せるを見、惶怖れて苦惱み、身に繫縛を被り、怖畏れて涕泣けり。烟と焰と倶に起き來りて其の身を遶り、閻羅王の使に執持せられ、飢渴は自からを燒きて大に怖畏を行ふ。火來れば身を燒き、猶し林を燒くが如し。閻羅の使者は醜惡にして畏る可し。種々の惡色にして、手に刀杖・弓・刀・矛[一六]矟を執り、及び黑繩・赤棒・網羂を捉へて、或は上昇り、或は下行るもの有り。時に、閻羅王の遣はせし所の使者は、須彌山に遍ねし。時に、諸の天子の閻羅の使の天上より諸の天子を縛るを見るに、諸の楚毒を加へて罵詈り撾打ち、遍く身には火起り、其の焰は猛熾なり。時に、閻羅の使は手に

【一五】三歸。又、三歸依、三歸戒とも云ふ。一に歸依佛。(佛寶に歸依して師となすこと)。二に歸依法、(法寶に歸依して藥となすこと)。三に歸依僧(僧寶に歸依して友となすこと)。此の三歸を師より受くるを三歸戒と云ふ。

【一六】矛はほこなり。武器の一。矟はほこにて、周尺で一丈八尺ありて騎兵の持つ武器なり。

たりて、互ひに相娯樂して五欲の樂みを受く。既に樂みを受け已りて、是の如き念を作さく『我れ今、當に一切の天衆と善法殿に詣り、遊戲して樂みを受くべし』と。是の念を作し已りて、諸の天衆と善法殿に詣たるに、或は虛空に遊び、或は鵝鳥に乘り、或ひは孔雀に乘り、或は宮殿に乘り、是の如く種々に善法殿に詣りて、天帝釋に見ゆ。種々の伎樂にて衆の妙音を歌ひて善法堂に至れり。爾の時、釋迦天王は衆の樂音を聞きて、諸の天子に告ぐ。『大僊よ。是の如き音樂は是れ誰れの樂音なりや。何かなる地天の天衆の此の地に來りしや』と。時に、諸の天子は是の語を聞き已りて、皆な出でて之れを觀る。天衆を見て、善法殿に還へりて、帝釋に白して言はく『天王よ。當に知るべし。衆分の地の天衆は今來りて此に至り、天王を奉問せん』と。時に、天帝釋は諸の天子に告ぐ『汝。今應に勝れし歡喜を發すべし。諸の樂器を以て諸の伎樂を作し、出でて衆分より來る所の天子を迎へ、種々に遊戲して共に相ひ娯樂せよ』と。時に諸の天子は帝釋の敕を聞きて、即ち其の敎を奉じて、手に種々の琴瑟・箜篌・種々の樂器を執り、種々の天鬘にて其の身を莊嚴れり。其の身には種々の光明を流出し、身の光りは鮮白なる晃曜にして照明けり。出でて衆分より來る所の天子を迎へ、二衆は相ひ見て和合して遊戲し、諸の神通を作し、種々の伎樂にて衆の妙なる音を歌ひ、善法殿に至る。爾の時、天主釋迦提婆は百千柱の寶殿の上に坐せり。其の師子座を名づけて得勝と曰ふ。天王は上に坐して安隱にて快樂し、威德には光焰あり、百千の天衆は周匝り圍遶みて、善業の果を受け、威德は殊勝れて、和合せる百日の竝び照らすより過ぎたり。天宮に處ると雖も放逸せず。是の如くに天衆は既に天王を見て皆な大に歡喜て、先きより十倍に過ぎたり。即ち頭面を以て天王釋迦提婆を頂禮し、歌舞して遊戲せり。諸の偈頌を以て天王を讚歎す。

　天主憍尸迦は常に世間を護りて、法を行ふて常に寂靜なり。　境界を能く壞すこと莫く、法を以て世間を調へ、非法を以て敎へず、法に順ひて常に安樂なり。　法に違へば苦惱を受け、法

隨ひ、若し復た蓮華の池中にて遊戲すれば亦た復た是くの如し。山峰中に於いて二鳥は雙び遊ぶ。是くの如く、天鳥も亦た愛網に繫縛れしが爲めに、將に異處に至らんとせり。衆の蜂の類も亦復是くの如く、羣鹿・麞[一二]麀も相ひ隨ひて遊戲し、亦麞鹿も欲網の縛る所と爲りて、亦た天子の天女の色に迷ふが如し。譬へば夏時に降雨して池に滿ち、充遍て溢るが如し。是の諸の天子は諸の天女の爲め欲愛を充滿すことも亦復是くの如くにて、愛欲に繫縛られて、復た舒緩しと雖も、甚だ解き難しと爲す。是の如く比丘は此の事を觀じ已りて頌を說いて曰はく。

是の如き女欲の網に繫縛らるゝこと、甚だ堅牢くして、能く諸の衆生をして有の獄に輪轉せしむ。身の縛られしは尙ほ解く可し、心の縛られしは脫るべからず。心旣に欲に縛られしが爲めに、常に諸の苦惱を受く。羂網は尙ほ斷つべし。欲の網は燒くべからず。其の所行の處に隨ひて三惡道を離れざらん。羂網は但だ身を縛るのみなるも、愛網は甚だ廣大にして、是れは色法に非らずと雖も、能く一切人を縛る。羂網は衆生を縛るとも、尙ほ現に覩見る可し、是の如き愛に心を縛られなば、之れを求むとも見るべからず。初め染りて愛著を生ぜば、心は著して甚だ解き難し。人、愛の爲めに縛られなば、生死を脫ること能はざらん。女色は大いなる羂網にして、衆生の六根を縛る。羂は但だ一身を縛るのみにて、或は縛り、或は縛られず。若しは[一三]枷鎖・[一四]杻械も聖說には堅しと爲すに非らず。癡人は愛染の心に繫縛られて、甚だ堅牢し。

是の如く比丘は愛欲を毀呰けり。爾の時、天子は愛の爲めに、天女の一切の愛網に繫縛られて、將に園林に至らんとす。種々の林を見るに甚だ愛樂すべく、以て喩ふべきもの無し。爾の時、天子は華池に遊ぶに、其の池を名づけて白鵝の池と曰ふ。諸の天女と池の邊に至りて、天子天女は遊戲し娛樂して五欲の樂みを受く。種々の樂音は衆妙の聲を出せり。衆分の天子復往きて金山の中に詣

【一二】麀は、めじかなり。

【一三】枷鎖。くびかせとくさりなり。共に罪人をつなぐ刑具なり。

【一四】杻。てかせなり。刑具なり。械。かせなり。罪人の手足首などにはめる刑具なり。

此の諸の天女も亦た是の如く本の事へし所を捨て、馳せ速かに往きて初めて生まれし天子に詣たる。

爾の時、初めて生まれし天子は諸の天女の莊嚴の具の美妙の音を出すを聞きて、卽ち欲心を發す。何かに況んや、色及び其の音聲を見るに於いてをや。爾の時、天子は諸の天女を見、及び樂音を聞きて、恭敬し供養し、心には愛樂を生じて悉く本の生を忘る。猶ほし百千の生死を隔つるが如し。何を以ての故なれば、天中の放逸地に生まれしを以ての故に、性も是くの如きが故なり。爾の時、初めて生まれし天子は諸の天女の爲めに、諸の欲法を以て種々に情態し、善を觀ぜざるが故に欲心を增長す。時に、諸の天女は種々の欲心に相應しき不淨なる語を說き、是の如くに放逸の樂みを受けて、天子天女は互ひに相ひ隨逐す。天女に圍遶れ、一切の諸欲を皆な具足せり。是の如きの樂みは、昔し未だ得ざりし所にて今既に得已り心に歡喜を生じ、欲の爲めに牽かされ、諸の天女に隨ひて自在を得ず。時に、諸の天女は天子に奉給へ、歌舞し戲笑し、種々に吟詠し、鄙褻き調にて話し、此の天子の心意を迷惑はしむ。諸の天女の所至し處に隨ひて、常に其の後に隨ふ。欲網に縛られて、鳥の網に在るが如し。是くの如く天子は愛欲に縛られて亦復是の如くに其の至る處に隨ふ。天子の之れに隨ふ是の如きの地處は七寶にて莊嚴り、昔より未だ見ざる所にして、之れを見て愛樂す。既に此の地を見るに、無量の天衣・天鬘にて莊嚴れる此地處に於いて(彼等は)無量の樂みを受く。復た天の伎樂を作して度曠野林に詣たる。此の天子と共に曠野林に至りて、此の林中を見るに、一切の衆鳥は種々の相貌を以て莊嚴を爲し、其の音は美妙にて種々の聲を出せり。諸の衆鳥と與に遊戲し娛樂せり。諸の鳥も亦た復た雄と雌と相ひ隨ひて、若し華中に至りて摩偸酒を飲めば、雄鳥も之れに隨ふ。若しは諸の華に於いても亦復是の如し。若し鳥の空にて遊ぶときは、雄雌相ひ隨ふことも、亦た復是の如く、其の至る處に隨ふ。若し美果を食せば鳥も亦た之れに

生まれて、嫉妬の大苦の窟宅を破壞せん。種々に布施を行へば、是の人は天中に生まれん。他を觀ずることは已が身の如くにて、悲愍みて衆生を護り、慈心にて常に調伏せば、是の人は天中に生まれん。偸盗を觀るは火の如くにて、一切に布施して以て自ら其の心を修さめば、是の人は天中に生まれん。他の妻を觀ることは母の如くにて、常に眞諦を思惟し、慾泥も汚す能はずんば、是の人は天中に生まれん。火は自らの心より起り、舌の[二]鑚燧に由つて生ず。若し此の妄語を離れなば則ち善道に生まれん。惡口は慈心を破るなり。智者は能く捨離して、常に樂みて軟語を說けば則ち天上に生まれん。綺語を觀ずることは刀の如くにて、一切を常に遠離して常に正語を行へば、是の人は善道に生まれん。若し善を行ふ人ありて、兩舌を行はず、實を說き、諦らかに知る時は、是の人は天中に生まれん。若し人、是くの如く七種の身口の戒を護りて、其の人、諦かに戒を知れば、則ち天中に生まれん。

是の如く、初めて生まれし天子は思惟すること既に訖りて、此の偈を說き已りて、本生の處を觀て、生まれし處を念じ已りて欲の境界に著せり。前に習ひしを以ての故に是くの如き偈を說くなり。爾の時、初めて生まれし天子の威德は殊勝れて一切を皆な集めたり。天女は之れを見て速に疾く馳奔せて、天子の所とに至ることは、猶し衆蜂の蓮華に馳奔るが如し。諸の天女の衆は天子に馳走ることも亦た復た是くの如し。手中に種々の伎樂の琴瑟、箜篌を執り、衆の妙へなる音を鼓せり。是の諸の天女は華鬘にて莊嚴り、散ずるに末香を以てし、手に華鬘を執る。復天女ありて、華を散じて初めて生まれし天子に供養す。是くの如く天女は種々の供養を以て天子を供養することは、譬喩すべからず。勝上し天女は或は百、或は千、此の天子の初めて天中に生まるを見て、心に愛樂を生ず。又、本の奉事せし所の天子に死相已に現はれしを見て、本の天子を捨てゝ馳せて初めて生まれし福德の天子に向ふことあり。譬へば渴たる牛の枯池を捨てゝ走りて清水に趣くが如し。

【二】鑚の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

救ふもの無く、護るもの無く、悕望する所なし。愁悴し憂惱みて塚間に至らんとし、將さに殺す處に至らんとす。是くの如き善人は贖て脫れるを得せしむ。復布施を行ひ、諸の福德を修む。云何して善人は福業を修行するや。若し僧の住む處は曠野にして、水なく渴乏して苦惱す。是くの如き善人は、或は爲めに井を作り、或は爲めに池を造る。若し水池ありて、若しは井の崩壞れ、若しは細蟲多ければ、僧の爲めに修治て、諸の細蟲を以て餘の水中に置く。是の如くに微細なるをも皆な殺害せずして、若しは漉嚢を以て諸の水蟲を漉し還らして水中に置く。是れを不殺生と名く。云何がして偸盜せざるや。盜心を以て他の草葉を取らず。若しは曠野の中の種々なる果菜をも、故村・聚落の他の護る所なるやを疑ひて、亦故らに取らず。是れを不盜と名く。是の人一切の善業を修さめ、身壞れ、命終りては、善道の三十三天の衆分の地に生まる。右門に生まれて眞金を座と爲し、白銀・瑠璃或は玻瓈を以て、或は硨磲寶、或は赤蓮華寶を以て其の座と爲し、靑因陀寶・大靑寶王・眞珠の座あり。是くの如く珍寶にて莊嚴れる座の中に於いて生まる。天に生まれ已りて、自から思惟す『我れ何かなる業を以て來りて此こに生まるや』と。即ち自から念知すらく。『我れ前世に於いて、斯の善業を作して、衆僧を供養せり。是くの如き善業は猶し父母の如く淸涼なる寶なり。天上に生まれて決定して樂みを受く』と。是くの如く天子は是の念を作し已りて、即ち自ら現に業の果報を見るなり。果報を見已りて善業を讚歎して惡業を毀呰る。本生を念じ已りて、人業の地・無量の善業の地を念ずるに、父の如く母の如し。爾の時、天子は本生を念じ已りて頌を說いて曰く。

善を以て人身を得、得已りて放逸ならず、衆の善業を造作れば、是れに因つて天に生ずることを得。　人身は甚だ得ること難し、得已りては放逸を行ふ。　放逸の爲めに迷はされ、命終りて地獄に墮ちん。　三種の善業を作し、七種の戒を修行して、三怨家を殺せば則ち諸の天身を受けん。　若し人、煩惱を伏せば未だ愛心を斷ずとも、是の人は愛の因緣なれば則ち天中に

是の如くに天帝釋は諸天を愍れむが故に、是の偈を說き已りて、伊羅婆那大白象王に乘りて天衆に圍遶かれて諸の音樂を奏し、妙へなる音聲を出して、善法堂に還へれり。阿修羅に勝つことを得しを以ての故に、心に歡喜を生ぜり。諸天は恭敬して善法堂に到るに、摩尼支羅に住する所の諸天は欲を受けて厭ふこと無く、色・聲・香・味・觸等を遊戲の園林にて受く。乃至、愛す可き善業は壞れ盡くして、天より還退き、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれなば、大種姓に生まれて第一の樂みを受く。端正なることは殊妙にして、生まれて中國の正法の行はる處に在り、大富・饒財にして子孫を具足し、壽命は延長し。眷屬は和順にして、世間の有する所の資具は皆な悉く具足せり。一切の衆人に愛敬せられ、或は大王と爲り、或は大臣と作る。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、三十三天の二十八地の名づけて衆分と曰ふを見る。衆生は何なる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞知を以て見るに、衆生ありて善業を修行し、身・口・意を正し、質直にして諂らず、衆生を惱まさず。常に善意を行ひて、其の心は質直なり。惡知識を離れ、善友に親近み、惡友に近かずして、共に言論せず、與に同じく住せず、亦同じく行はず。常に惡人を避け、惡人に友とせらるとも亦親近まず。賢善に親近しみて正法を聽聞し、聞き已りて思惟す。心を法の善・不善・無記に入れ、若し善法あれば則便ち攝取り、不善の法を知れば則便ち捨離す。正念にて觀察して其の心を調伏し、貪らず、欲せずして七種の戒を持し、微細なるも犯さず、乃至小犯をも常に大いに懼を懷く。一切の善業は錬れる眞金の如く、清淨くして垢れなし。是の如きの人は殺さず盜まず、布施して福を修さめ、殺害する者を見れば、救うて脫するを得しむ。云何がして殺害さる衆生を救ふや。若し丈夫ありて、他の婦人を侵かし、官の爲めに收められ、惡聲の鼓を打つて右門より出して、其の命を斷たんとすれども、

以て莊嚴と爲せり。釋迦天王は諸の天衆の天子天女と共に、園中にて遊戲し、惡趣の門を閉ぢて、心に歡喜を生ぜり。〔一〇〕見諦を得ると雖も猶欲樂を受けて、常に衆生の生死を思惟す。既に思惟し已りて恚らず悅ばず。諸の樂みを受くることを觀ずるに、皆な悉く無常にして破壞し離散す。是の如く知り已りて内に自から思惟す。『諸天の退歿くは、自からの業に因り何この所にか至ることを爲して、自らの業果を受けるなり。業風に吹かれて地獄・餓鬼・畜生に墮ち、流轉して苦を受け伴侶無し。一切の諸天及び諸の天女は皆な悉く是くの如くに會しても當に別離すべし。是の如きの業は大いに樂しき具を作りて、一切の愚癡なる凡夫を戲弄ぶ』と。時に、天帝釋は是く思惟し已りて頌を說いて曰はく。

　譬へば虛空の雲の如くにて、風の爲めに吹かれて和合し、須臾くにして散ず。生死も亦た是くの如し。時々の衆の華の如くに、人に生死あるを見る。一切は皆な磨滅して去る如くに來ることも亦た然なり。是くの如く善業熟すれば則ち天樂を受け、善き時既に盡き已り、樂みを受くれば則ち亦た失せんのみ。時節の樹林の如く、生ずる時は甚だ敷榮なるとも、時節既に過ぎ已れば一切は皆な墮落ちん。諸天は樹葉の如く、樹は樂みを受くる處の如きも、樂みを受ければ則ち墮ちること有らん。常に樂しき者あること無し。猶し夏の降る雨の空中に住せざるが如し。諸の樂みも亦た是の如くに、念念に暫くも停どまらず。譬へば、孔雀鳥の風雲なれば則ち聲を出し、風止めば聲も則ち滅せんが如く、天の樂みも亦た是くの如し。

　譬へば、乾きし木を以て火中に置くが如くにて、天の樂みも亦た是くの如し。時に、火に燒かる所と爲りて、生まれ已りて復た滅に歸し、已に百千返を經るとも、愛の爲めに欺むかれて厭心あること無し。癡愛の網に覆はれれば、一切は免る者なく、諸天を戲弄び、諸の不善業を受けん。

【一〇】見諦。眞理を證悟するなり。聲聞の預流果已上の菩薩の初地以上の聖者なり。

ん。　師子の心の勇健なるは一切の獸に勝つ。　知りて足るは悕望むより勝さる。　智者は是の如く說き給ひしなり。　悲愍む者は常に勝ぐれ、　悲なければ減劣を爲さんのみ。　智慧は能く調伏すと、智者は是くの如く說き給ひしなり。　衆惡なる邪見の業は多く諸の妄語を作す。是くの如き外道の中にて、如來は最も殊勝れ給ふ。　天の阿修羅に勝ちしは、其の法の勝れしを以ての故なり。　我れ當さに一切を破るべし。何かに況んや汝の一身に於いてをや。汝、阿修羅に使へせよ。『汝、悕望を生ずること勿かれ。　今此の師子座は智者の應に住すべき所なり』と。

時に、阿修羅は釋迦提婆の是の語を說きしを聞き已りて復た增長せず。實の語の縛めを聞くことを得しを以ての故に、減劣て增さず、色力・勇健も悉く增長せずして其の劣弱きを見る。時に、天子ありて手に其の足を捉へ、曳て下座せしめて、卽時に大歡喜園に驅け出す。時に、天帝釋は心に歡喜を生じて、復往きて摩尼支羅の所住の地に詣たる。伊羅婆那大白象王に乘りて、空に騰りて遊そび、摩尼支羅の林に向ふ。作すべき所は已に辨じて、諸の一切の天子天女と摩尼地に至る。摩尼地天は天王釋を見て、皆な悉く出で迎かひ、頭面にて頂禮す。修め敬すること既に畢りて、皆な往きて彌伽雲林に詣たるに、其の地は一切の衆の欲を具足し、柔軟く廣博し。衆華は遍く覆ひ、蓮華の枝を以て用へて宮室の一切の愛する處と爲せり。釋迦天主は諸の天女と共に種々の樂音にて歌舞し、遊戲し、娛樂して樂みを受く。乾闥婆王は帝釋を圍遶き、衆の妙なる音を歌ひて天王を讚歎し、五樂の音聲を以て娛樂を爲せり。時に、天帝釋は伊羅婆那白象の上に在りき。其の象の端嚴なることは寶山より勝れ、行步の進む趣きは玉山の動くが如し。其の象の鮮白なることは雪山より踰たり。春末の時の、日光の雪山の峰を照曜するが如し。是くの如く天衆の天子天女は帝釋を圍遶きて園林に遊べり。其の諸の園林は毘瑠璃寶・白銀・頗梨・因陀青寶・大因陀寶・赤蓮華寶・眞金・硨磲を

阿練若とも書く。閑靜處、遠離處等の譯あり。人家を遠く離れ、閑靜にして修道に宜しき處なり。

出し歌舞し歡喜して叫呼ぶ。時に、天王釋は柔軟き言を以て諸天を慰問め、伊羅婆那白象の上に在りて、諸天に告げて曰はく『汝は自らの業を以て天樂を受けたり。我れ今ま、歡喜の園に還りて阿修羅の瞋恚りて大力を恃怙る慢心を除ぞかんと欲す』と。時に、諸の天衆は帝釋に白して言さく『天王よ。我れ今ま亦た當さに天王に隨ひて、阿修羅の瞋恚の憍慢を除くべし』と。時に、天帝釋は諸天に告げて曰く『汝よ。急速なること勿かれ。我れ今自から能く阿修羅を破らん』と。時に、天帝釋は諸天に語り已り、歡喜園に入りて阿修羅を見るに、歡喜園に在りて猶し雲の聚まるが如く、漸漸に增長せり。時に、諸の天衆は罵詈り、毀呰して轉た高大に增せり。時に諸の天衆は其の增長することを見て、罵詈りて息まず。倍して更らに增長すれば、顏色は醜惡となる。帝釋之れを見て、諸の天衆に告ぐ「此の阿修羅は汝の瞋りしを以ての故に、身增して轉た大となる。我れ當さに方便して瞋慢を離れしめん」と。時に、天帝釋は頌を說きて曰く。

瞋らずんば能く瞋りを伏し、忍は麤惡心を伏し、法は能く非法を伏せん。光明は闇冥を破り、成實は妄語に勝ち、正語は綺語を伏し、軟語は惡口に勝ちて能く兩舌の過を禁ぜん。慈心は殺害を斷じ、布施は慳貪を除き、正念は邪念に勝たん。善念は惡念を破り、明は能く無明を破り、白日は黑闇を除ぞき、白月は黑月に勝つ。是くの如くんば常に勝つことを得ん。智慧にて眞諦を知り、邪見なる欲に勝つ。賢聖なる[七]八分道は能く諸の惡道を破らん。[八]如來の四無畏は能く諸の怖畏を破り給ひて、憶念は忘失を破り、智は能く愚癡を破らん。若し[九]阿蘭若に住せば則ち能く諸の欲を破らん。須彌は衆山及以び衆の園林より勝れ、大海は涓流及以び諸の河池より勝れたり。日光は衆星より勝れ、亦た餘宿より勝れたり。法式は無法に勝ち、布施は貧窮を破り、質道なるは諂曲に勝り、實なれば能く妄語を破らん。吉は能く不吉を破り、火は能く衆の薪を燒き、水は能く渴を破り、食すれば則ち能く飢を除か

【七】八分道。八正道(Ārya-mārga)のこと。中正にして理に契ひ、涅槃に至る道である。一、正見(Samyagdṛṣṭi)(四諦の理を正しく見ること)。二、正思惟(Samyaksaṃkalpa)(四諦の理を正しく思惟觀察すること)。三、正語(Samyagvāc)(不實の語を離れること)。四、正業(Samyakkarmānta)(身の三過、卽ち殺・盜・婬を離れること)。五、正命(Samyagājīva)(五種邪命を離れること)。六、正精進(Samyagvyāyāma)(戒・定・慧の道に一心に精進すること)。七、正念(Samyaksmṛti)(正法を思念すること)。八、正定(Samyaksamādhi)(身心寂靜にして亂想を離れること)。

【八】如來四無畏。一、一切智無所畏(大衆の中に於て我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心なきを云ふ)。二、漏盡無所畏(大衆の中に於て我れ一切の煩惱を斷じ盡せりと師子吼して些の怖心なきを云ふ)。三、說障道無所畏(大衆の中に於て佛道を障害する法を師子吼して些の怖心なきを云ふ)。四、說盡苦道無所畏(大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心なきを云ふ)。

【九】阿蘭若(Āraṇya)。又、

衆生は癡に使はれて摩偸酒を飲み、現に癡に繫がるるを觀ず。美味に貪著すれば、摩偸は癡の罥網にて、之れを飲めば命の終らんとするに至りて、地獄に退墮かん。諸の龍も亦た是の如し。若し見・觸れ・臭ぎ・嘗めなば人心をして癡醉せしめん。是の故に衆の罥網は智者の捨離する所なり。之れを見れば貪著を生じ、之れに觸れば則ち臭ぎ嘗め、之れを臭げば心に味を貪り、味に著すれば衰惱を爲さん。一切の繫縛の中にて、味を貪嗜に過ぎるもの無し。

名聞・色力を壞すものは、其の味に著するを以ての故なり。味に著すれば迷亂され、目は昏みて常に惛醉し、心は迷ひて癡荒を致して、善惡の法を知らず、女人に輕笑せられ、糞穢に眠臥するも覺知る所なく。自ら動發すること能はず。酒は能く名聞を壞ふことは、死の畏れより踰過たり。猶ほし毒藥を飲むが如く、亦た死の網罥の如し。飲酒するは患を爲して、三十有六の失あり。既に此の過惡を知れば、應に速かに遠離すべし。大姓にして智慧ある人も、酒に汚さるる所と爲れば、衆人に輕忽ぜられん。草の風に隨ひて轉ずるが如し。是の如く天鳥は是れ畜生なりと雖も諸天を毀訾る。何かに況んや餘天に於いてをや。此の諸の天子は天味を飲むに、上・中・下の味、色・香を具足することは、其の善業の願行の種子の如し。飲み已りて復陀羅殿林に詣たる。此の林中に於いて遊戲を行はんことを欲して、種々の音を聞き、心に歡喜を生ぜり。青優鉢羅を以て首鬘と爲し、天子は天女と共に相ひ圍遶り歡喜びて遊戲せり。心は常に欲を念じ、金色の光明の陀羅林殿にて既に樂みを受け已りて、復往きて[六]彌伽雲林に詣たる。既に彌伽雲林の中に至りては百千の殿の天鬘にて莊嚴れることを見る。

爾の時、天主釋迦提婆は伊羅婆那大白象王に乘りて、諸の天子天女と共に眷屬に圍遶かれ、心に喜悅を生じて、放逸なる諸天を利益せんと欲することを爲せり。時に、諸の天衆は帝釋の來るを見て、悉く皆な出でて迎ふ。皆な頭面を以て天主を頂禮せり。天主の前に於いて、衆の妙へなる音を

【六】彌伽(Megha)。譯して雲と名づく。又、能降伏とも云ふ。(慧苑音義下參照)。

でて、往き迎ひ心に歡喜を生ずることは猶し親族・兄弟を見るが如し。安慰め問訊して共に林中に入りて、五樂の音聲にて天の樂みを受く。是の如く天子は種々の樂みを受けて、復た摩尼支羅林中に於いて、無量に歡喜し、目衆の色を視、心喜樂を生ぜり。其の地の園林は皆な七寶を以て莊嚴と爲し、金色の寶衣にて莊嚴れる林樹あり、是の如き種々の寶樹にて其の地を莊嚴れり。柔軟き無量の飲食は河よりして流れ、目に是の如き一切の衆の色を視て、眼は甚だ愛悦めり。

是の如き初めて生まれし天子は、諸の天衆と娛樂して樂みを受く。天子は復毘瑠璃地に詣たりて、天の女衆と共に、次第に摩尼寶衣の樹從りして生ずるを見るに、其の色は明淨にして甚だ愛樂すべし。微風の吹動けば、風に隨ひて上下し、無量の色蜂を以て莊嚴を爲せり。光色は燈の如くにて、諸天は之れを見て希有の心を發し、大いに歡喜を生ぜり。天女の衆と共に往きて此の樹に詣たり、天の伎樂を作して、遊戲して樂みを受く。是の時、諸天は此の林中に於いて、心に希有を生ぜり。卽ち華中より天の摩偸を出し、一切の上妙の味を具足せり。一切の天衆は、昔より未だ見ざる所の色・香・味・觸、之れを見て皆な百倍に悅樂を生ぜり。天の摩偸の上味の酒を飲み、天子之れを飲みて、諸の天女と共に遊戲して樂みを受け、衆の妙なる音を歌ふて天王釋を讚ふ。『天帝釋の因緣力を以ての故に、我れをして此の摩尼支羅園林の中に於いて、五欲の樂を受けしむ。味は摩偸の若くにて色・香は美味なり。樹の華從り出でて最も希有と爲す。我れ今之れを飲みて百倍に樂みを受けたり』と。爾の時、天子は諸の天女と共に毘瑠璃の器を以て摩偸を盛滿り、天の上味を迭に共に相ひ勸めて此の天味を飲めり。此の諸の天衆は人中の時に於いて布施し持戒しぬ。今ま是くの如き勝妙の色香、上味の果報を得たり。其の本の業の上・中・下の報に隨ひて心に愧恥を生ず。樹上に鳥あり飲摩偸と名く。諸の天子を見て心に愧恥を生じ、卽ち天子の爲めに頌を說いて曰はく。「

天の慧行の地に生まる。彼の天に生まれ已りて、善業を以ての故に其の身の光明は日光より勝り、滿足すること十倍なり。一切の天衆に供養せられ、無量百千の天女は圍遶きて供養し恭敬す。皆な是れ、天子の先に親友たる所にして、和悅して笑ひを含くみ、種々に莊嚴りて、其の身は勝妙なる色相の威德にて皆な悉く莊嚴れり。嫉妬を離れ互に相ひ愛敬して、須臾も離れず。皆な歡喜を生じて天子に親近み、手に蓮華を執り、或は金華を執り、或は銀華・毘瑠璃華・頗梨迦華・或は雜寶華あり。若し金の蓮華なれば、白銀を莖と爲し、赤寶を鬚と爲し、毘瑠璃華は眞金を莖と爲せり。靑寶の蓮華は白銀を莖と爲し、硨磲蓮華は靑寶の珠玉を以て其の莖と爲し、赤蓮華寶は金剛を鬚と爲せり。是くの如く天女は天子の所に至り、持つ所の華を以て天子の上に散ずることは、猶ほし盛夏に洪雨を降[四]澍するが如くにて、諸の天女等も諸の寶華を以て、初めて生まれし天子の上に散らすことも亦復是の如し。

爾の時、天子は諸の天女を見て心に歡喜を生じ、欲心卽ち動ごき、惡しき欲心發りて、其の座より起ち未曾有を得んと、諸の天女に詣りて踊躍り歡喜びて、皆な共に和合し、娛樂して樂みを受け、歌舞し戲笑し、遊戲し、娛樂しては此の天子をして欲心を增長せしむ。是の如く天女は周匝り圍遶きて園林に遊べり。天の諸の園林は衆寶の光明・一切の諸の欲を皆な悉く具足せり。此の樹下に於いて遊戲して樂みを受け、種々の衆鳥は衆の妙なる音を歌ふて天女の音と分別すべからず。莊嚴れる欲具・華果を充足せり。種々の流泉・蓮華の河池は百千種ありて園林を圍遶れり。是の如く天子は諸の天女と遊戲し、娛樂して無量の樂しみを受く。善業を以ての故なればなり。

是の時、天子は復天女と更らに異林に詣たりて、伎樂にて自から娛しみ、念ずるに隨ひ具足して天の樂みを受く。聖人の愛する所は持戒の果にして、果報を成就することなり。是の如き天子は天女に圍遶かれて、復往きて[五]摩尼支羅の遊戲の林に詣たるに、先舊き諸天は此の天子を見て皆な出

【四】澍はそゝぐこと、又はうるほすこと。

【五】摩尼支羅(Manicara)。又、摩尼折羅、摩尼遮羅と作る。夜叉の名なり。譯して、珠行、寶行と云ふ。

を以て或は自から受行し、或は他の爲めに說きて、自から地獄に墮ち、亦た他人をして地獄に墮ちしむ。時に、諸の天衆は、一切の閻浮提を觀察し已りて、諸の天鳥に乘りて、三十三天に還へり、天宮に至り、餘の天衆に向ふことは、前に說きしが如し。復た園林に於いて遊戲して樂みを受け、伎樂にて自ら娛しむ。種々の功德は皆な悉く具足し、一切の衆寶にて莊嚴れる處にて遊戲し樂みを受く。乃至、愛すべき善業壞れ盡して、天從り命終り、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれば常に安樂を受け、病の惱みあること無く、諸の衰亂を離れたり。豐樂なる國土の中に生まれ、丈夫の身を受け、諸根を具足せり。或は國王と爲り、或は大臣と爲る。餘業を以ての故なり。

復次に比丘は業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、三十三天の第二十七地の智慧行と名づくるを見る。衆生何かなる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生ありて大心にて持戒し、善業を修行し、實の如くに業の果報を見、心に信樂あり。常に善業を行ひて不善を捨て、其の心は質直にして惡友を遠離せり。乃至與に同じ路を行かず、共に言論せず、與もに同じく住せず。是くの如く善業を悉く遍く修習し、錬眞金の如くに現在の世に於いて、一切の人の愛敬する所と爲る。善を修さめしを以つての故なればなり。

若し比丘ありて常に修めて[一]修多羅・[二]毘尼・[三]阿毘曇を讀誦す。是くの如く比丘は精勤て修習し、若しは晝、若しは夜、心に懈怠らず。若し夜の闇冥なるために其の讀習を廢せんとせば、若しは衆生ありて、佛法及び此の比丘を敬重して、僧に燈明を施す。法を敬重するが故に三寶を敬信す。復た布施を行ひ、讀習の善を增長することを得せしむ。若し盛熱の時は扇を以て布施す。闇冥をなからしめ、亦熱の惱みを無からしむ。諸の比丘の聖法を談論することを聞きて、心に甚だ喜悅ぶ。二種の功德の因緣力の故に、是の善業の人は自ら利して人を利す。身壞れ命ち終れば、善道の三十三

【一】修多羅(Sūtra)。契經と譯す。經中直ちに法義を說ける所謂長行の文を云ふ。三藏の一の經のこと。
【二】毘尼。毘奈耶(Vinaya)のこと。三藏の一の律藏のこと。佛所說の戒律なり。
【三】阿毘曇(Abhidharma)。阿毘達磨とも書く。三藏の一。論部の總名なり。論部は諸法の事理を問答決擇して人の智慧を發達せしむ。

く無量に實の如く見ず、邪論を造作し實の如くに見ず、自らの心を欺誑きて實の如く見ず。是の如くに比丘諸の衆生の心誑惑せられしを觀じ、偈を以て頌して曰はく。

心は惡蛇と爲る。愛の毒は周遍くて、人の五體を螫む。虚く大いなる悔を生む。愛河は廣大にして、五根は津濟なり。此の岸は恐怖なれども、彼の岸は安隱なり。之れを見て妄りに解し、實の如く知らざれば、是の邪見の人は地獄に墮ちん。是の邪見の人は、因に非らざるを因なりと見て、地獄に墮つ。顚倒の見の故なり。愚癡なる人は因果に迷ひて、獄に縛られること有りて、諸の苦惱を受く。業の果報には則ち生死あり、若し實の如く見れば則ち彼岸に到らん。愚人は欲を求め、欲の爲めに惑はされて地獄に墮ちることは、蛾の火に投ずるが如し。人中にて戒を持し、正見を奉修せば、天に生まれることを得ん。苦行に由るには非らず。此の諸の外道は邪見の行ひを行ひ、智を恃みて邪慢なり。他人を誑惑し、愚癡にて黑闇の大海に入り、世間にて苦みを受くるは、邪見を以ての故なり。身を苦しめるを以て解脫を得るに非らず。智者の說き給へる所は、其の心を調伏し、煩惱の山を燒けば則ち解脫を得んとなり。正見を修行し、諸の煩惱を滅して、實諦を見れば則ち解脫を得ん。一切の外道は諸の世間を惑はし、寂滅なる不妄語の處あること無し。世間の外道には虛誑り甚だ多し。百劫に之れを求むるとも、少しの實もあること無けん。出世の法は皆な是れ眞實にして、世間の言說は繫縛となりて毒の如し。愛心にて福を造らんとせば、無常なる樂みを得ん。出世の法は則ち常樂を得ん。不淨なる衆惡にて因緣を和合し、空なる言說ありて、而かも誠實無くんば、是くの如くに妄說する虛誑の人は、黑闇の怖畏るべき處に墮ちん。

是の如く比丘は實諦にて之れを見て、是の如き偈を說けり。云何して衆生は眞實の知を得、眞實の見を得て、邪見・邪見の論を起さざるや。自ら實の見なく、他をして邪見ならしめ、邪見なる論

作して此の邪法を說き、以て業の果を爲す。其の邪見を以て妄りに因果を說く。身壞れ、命ち終れば、惡道の地獄の中に墮つ。是れを邪見と名くなり。

時に、林中に住する邪見の外道・諸の婆羅門は、此の天子の天從り來り下りて閻浮提に向ひ、之れを去るを見るとも、遙かに遠くして、正しき色を見ず。但だ大光を見ては猶ほし火の色の如しと妄に分別を生じて、便ち謂へり。『閻浮提の人火を供養するが故に、身壞れ、命ち終れば善道に生まれて、諸の天身を受けん。何を以ての故なれば、火は是れ一切の諸天の口なり。是の故に火を供養する者は、天上に生まることを得ん』と。是くの如き等を作して、妄りに分別を生じ、實の如く見ずして邪論を造作す。或は自から宗を立て、或は自から因を說き、自ら譬喩を說き、自から邪見を作し、復他人を敎へて邪見に入らしむ。是くの如き邪見なる諸の婆羅門は自から利益すること無く、他をしても衰惱ならしむ。身壞れ、命終れば惡道に墮ちて地獄の中に生ず。復邪見なる外道の諸の婆羅門ありて、住みて林中に在りき。此の天子を見て、妄りに分別を生じ、遙かに天子の飲まず、食せざるを見る。時に、婆羅門は是の如き念を作さく『閻浮提の人、飲まず食せずんば、是の因緣を以て、身壞れ、命終れば、善道に生まれて、諸の天身を受けん。我れ今亦まさに飲まず食せざるべし。復た他人を敎へて其の法を學ばしむ』と。邪論を造作し、或は讚歎を作し、此の邪法を說きて以て業の果を爲せり。是の因緣を以て、身壞れて命終れば、惡道に墮して地獄の中に生まれん。是くの如き外道は實の如く知らずして、惡道の門を開くなり。

若し此の天子或は住すること少時、或は須臾の頃なれども、閻浮提に於いては百歲を過ぐ。外道の邪見なる諸の婆羅門は便ち是の說を作さく『是の如き天子は常住にして、動かず、破らず、壞れずして世界を造作し、能く世間を壞はす』と。外道は之れを見て便ち邪論を作し、或は讚歎を作して邪因を說く。是の因緣を以て、身壞れて命ち終れば惡道に墮ちて地獄の中に生まる。是くの如

卷の第三十二

觀天品第六之十一

三十三天之八

爾の時、天子は其の天宮を念じて天上に還れり。是の時、邪見なる外道の諸の婆羅門は言はく。『此の諸の地は、某天・某天の攝受せし所なり』と。或は諸の論を作し、或は讃歎を作せり。是の如く林中に住する所の邪見なる外道の諸の婆羅門は、之れを見て敬重し頭面にて頂禮せり。但だに其の相を觀て敬信を生ずるのみにて、實の如く知らざるなり。此の第二の天は復た分別を生じ、此の天子の處々に遊行し、身の心の聚りの如きを見て謂はく。『閻浮提の人身を火中に入れば、是の因縁を以て善道に生まれて、諸の天身を受けけん』と。外道の邪見なる諸の婆羅門は即ち邪論を作し、或は自から宗を立て、或は自から因を說き、自から譬喩を說き、或は讃歎を作す。既に自から邪見にして復他の爲めに說いて他をして受け行はせしめ、火を以て身を燒きて、天上に生まれんことを望む。是くの如く如實の見にて知ること能はずして、邪因の果・實ならざる果報を說きて、身壞れ、命ち終りては地獄に墮つ。

復次に、邪見なる外道の諸の婆羅門の林中に住する者は邪見を生じ、此の天子の天從り來り下りて閻浮提に向かふを視るに、遠くより見るを以ての故に、見るとも明了ならず。遙かに、天子の莊嚴なる山峯縱り來り下り閻浮提に至りて後に天上に還へるを見しなり。林中に住する所の諸の婆羅門は是の事を見已りて、自から分別を生じて謂はく『閻浮提の人は高巖より投赴せば、此の因縁を以て善道に生まれて諸の天身を受く』と。是の故に邪見なる諸の婆羅門は自から高巖より墮て、天に生まれんことを欲求す。復此の法を以て他人の爲めに說きて邪論を造作す。或は讃歎を

す。是の如き邪見なる外道の諸の婆羅門は自から分別を生じ、轉じて他の爲めに說く。是の如く外道は實の如く見ざず。爾の時、天子は旣に天宮に至りて、餘の天衆に向ひて、是の如き言を說けり。『我れ閻浮提に至りて其の國界を見るに、其の地は平正にして、園林・華池は柔軟くして愛すべし』と。時に、諸の天子は其の說く所を聞き、或は白象に乘り、或は孔雀に乘り。種々の騎に乘り、或は身は空に乘りて、遍く須彌山を觀察し已りて、次第に下りて閻浮提に至れり。或は河池・山林の靜かなる處に於いては暫く下ることを止めて住せり。[三九]今の諸の外道・婆羅門等は皆な此處を名づけて、福德の地を爲せり。此の地中に在りて苦行し持戒して、福德の處と謂ふなり。是くの如き虛妄を次第に相ひ傳ひ、之れを聞きては心に著して眞實ありと謂ふ。

爾の時、天子の初めて下りし時に婆羅門ありて、此の天子を見て自から分別を生じて或は言ふ。『此れは是れ大梵の天王なり』と。或は言ふ。『此れは是れ摩醯首羅なり』と。或ひは言ふ。『此れは是れ[四〇]八臂天王なり』と。或ひは言ふ。『此れは是れ自在天、鳩摩羅童子天なり』と。各は分別を生じて『此れは是れ梵王の住せし所の地なり』『此れは是れ摩醯首羅自在天王の攝せし所の地なり』『此れは是れ八臂天王の所攝の地なり』『此れは是れ鳩摩羅童子天の所攝の地なり』と。旣に分別し已りて、或は邪の論を作し、或は讚歎を作し、或ひは自ら宗を立て、或は自ら因を說き、自ら譬喩の種々の邪見を說けり。旣に自ら邪見にて、復邪見を以て轉じて他人を敎ふ。餘人は聞き已りて展轉して相ひ敎ふ。是くの如く次第に如實に見るには非らず。

【三九】今の字、宋、元二本に依れり。

【四〇】八臂天。那羅延天のこと。

觀察せり。是くの如き一切の山峰の華池は皆遍く瞻視せり。

爾の時、四大天王の世界を護る者は三十三天に至りて、閻浮提の法以び非法を說かんと欲せり。是の時、天子は虛空中の路に於て、護世の四大天王に逢ひて、之れを問ふて言はく『汝等相ひ隨ひて何この所より來りしや』と。爾の時、護世は天子に答へて曰く『我れは第一善業の愛すべき處從り來りしなり。其の處は多く蓮華の園林、河池を具足し、種々の莊嚴ありて、而かも彼より來りしは、三十三天に詣たり釋迦天王に向ひて、閻浮提の法以び非法を說かんと欲すればなり』と。爾の時、天子は護世の四大天王の是の語を說くを聞き已りて、希有の心を生じ、衆寶の大力の孔雀に乘りて、念が隨に行きて障礙へる所なし。天より來り下りて閻浮提に向ふに、第二の日の如くにて希有の心を以て遍く一切の閻浮提中を觀るに、園林・華池・河流・泉源・村營・城邑を具足せり。之れを觀るに、閻浮提中の諸の婆羅門、邪見の外道、諸の相師等は此の相を見已りて、是くの如きの說を作さく『是の八臂の天は[三六]伽樓羅、金翅鳥王に乘りて天より來り下りて閻浮提に向ひ、世間を觀ず』と。但だに是の如き妄分別の說を作すのみなり。復邪見なる異道の諸の婆羅門ありて、是くの如きの說を作さく『此れは是れ、[三七]摩醯首羅自在天なり。[三八]鳩摩羅童子天と名づく孔雀に乘りて、天より來り下りて閻浮提に向ひ、世間を擁護る』と。復邪見なる異道の諸の婆羅門ありて、是くの如き說を作さく『摩醯首羅は白牛に乘りて、世間を造作し、能く世間を壞す。名けて作者と爲し、能く世間を作る』と。是の如き邪見なる外道の諸の婆羅門は種々に分別して、種々に讚歎す。諸の論を造作し、實に實を見しには非らず。是の如き一切の諸の婆羅門は正法を破壞り、第一の愚癡にして、亦他人を敎へて其れをして邪見ならしむ。

爾の時、天子は既に觀察し已りて、天宮に還へる。是くの如き外道は愚癡の心を以て、不實を實なりと說き、實の如くに見ず。劫初の時に、此の天の來り下るに、外道は見已りて實の如くに知ら

【三六】伽樓羅(garuḍa)。神怪の鳥、金翅鳥と譯せらる。

【三七】摩醯首羅。具さには、莫醯伊濕代羅(Maheśvara)、又は摩醯伊濕代羅と云ひ、略して、摩醯濕伐羅、摩醯首羅と云ふ。摩醯は大、伊濕伐羅は自在なれば譯して、大自在天と云ふ。色界の頂上に位する天神の名なり。

【三八】鳩摩羅天(Kumāraka-deva)。又、拘摩羅天に作る。初禪天の梵王にして、其の顏は童子の如きが故に譯して童子天と名く。常に鷄を擎げ鈴を持、赤幡を捉りて孔雀に乘る。

や。是の善業の人は未來を信じて、業の果報を畏それ、善く思ふて心を直し、衆生を惱まさず。惡知識を離れ、樂みを求むるを以て衆生を殺さず。或は河中に遊び、或は山谷を行くに其の人は影鬼に執られる所と爲るも、寧ろ自身を捨てて影鬼を害せず。毒藥を以て影中に置かず。鬼の命を害するを恐れて、方便を知ると雖も而かも殘害せず。若しは單都鬼を殺す方便を知れりとも、戒を守りて爲さず。或は水を以て照らし、或は鏡を以て照らし、或は日光を以て、其の人、殺すことを知るとも、而かも害を加へず。亦怨みを報ゐず、自から身命を捨てて衆生を殺さず。是の善業の人、身壞れ、命終りては、三十三天の影照の地に生まる。彼の天に生まれ已りて、善業を以ての故に其の身に光明あり、五樂の音聲にて第一の樂みを受け、衆の樂みを具足せり。須彌の地に於て遊戲して娛樂み、千の天女を以て圍遶を爲せり。閻浮檀金を以て其の地と爲し、間錯りて莊嚴れり。閻浮檀金の山峰の中に於て、遊戲して樂みを受け、如意の樹は心の念ずる所に隨ひて悉く樹より生ず。是くの如く久時く諸の眷屬と天樂を受く。復往きて外影の林に詣たるに、閻浮檀金を以て樹林と爲して園苑を莊嚴れり。金樹の銀葉は靑毘瑠璃を以て其の果を爲して、銀樹の金葉は毘瑠璃の果を以て莊嚴と爲せり。外影林中にて旣に遊戲し已りて、復異る處に詣たりて、漸次に遊觀す。孔雀の衆鳥は七寶の雜色にして、種々に廁を塡たし、其の身を莊嚴れり。天子は見已りて、彼の林中に入りて孔雀の諸鳥と互ひに共に遊戲せり。時に、孔雀鳥は天子の來るを見て、種々の美妙なる音を出す。天女の歌音は十六分の中にて其の一にも及ばず。是の時、天子是くの如き念を作さく『我れ今、當さに此の孔雀鳥に乘りて諸の天女と山峰に遊戲し、處々に遊觀すべし』と。善業を以ての故に其の念ずる所に隨ひて、孔雀天鳥は卽ち天子に近づきて、化して大身と爲り大色力あり、端正に莊嚴りて、殊特なることは轉た勝れたり。爾の時、天子諸の天女と此の孔雀に乘りて、須彌山の處々の山峰に於て、心の念ずる所に隨ひ、悉く往きて一一の華池、一一の山峰を

【三五】單都鬼。不明。

らかし、悉く心をして迷惑さしめ、未來世に至りては少しの利益をもする能はず。天人及び夜叉・龍・阿修羅等の羅刹、毘舍遮は皆な女の幻の爲めに誑らかさるなり。是の如き諸の欲樂は境界より生ず。命終らんとするに至る時に臨めば、諸の樂みは皆な亡失はん。一切の諸の天衆は園林にて莊嚴れるも死の繩の縛る所と爲りて、欲に繋がれて將さに去らんとす。欲樂は救ふこと能はず。何んぞ諸の婇女を用いん。〔三二〕溥天の諸の世間は悉く死王に將さに去られんとするなり。

是の如く比丘は諸の天子の退歿く相を觀じ已りて、慈悲心を生じて欲境を厭離せり。是の如き天子は自らの業の資りし所にて、其の至る處に隨ひ、業の繩に牽かれるとも、常に放逸ならず。復た餘天の放逸にして愛樂するものあり、遊戲して樂みを受け、諸の境界に馳せることは、人の馬に乘りて一切の園林の中にて遊戲するが如し。放逸の樂みを受け、乃至善業を受け盡くして、命終りて還退き、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれなば、常に樂しき處に生まれ、第一の富樂にして、財寶は多饒なり。或は國王と爲り、或は大臣と爲り、多くの象馬、駝驢あり、騎乘して行き、歩渉かず。疲倦することあること無し。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、第二十六地の名づけ影照と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるるや。若し衆生あり能く總じて七種の戒を護持して相似の果を得、思を以て心を修め、正見に相應して殺さず、盗まずして善く禁戒を持せば、是の持戒の人は樂みの因を作るが故に世間の戒を持し、乃至微細の物をも盜まずして偸盗を離る。若し其の住止む海の側の他の攝する地に近くして、海潮の出す所の〔三三〕珂貝・魚〔三四〕蜯の是の如き種々なる一切の衆物をも、盗心を以て此の諸の物を取らず。此の善業の人は未來を信じて業の果報を畏る、王法の爲に非らず。是れを盜まさると名く。云何が殺生せさる

〔三二〕溥天は天のおほかぎりなり。あめが下なり。

〔三三〕珂。くつはがひ。螺の屬、其の介は外黃中黑にして内白し、馬勒をかざるに用ひしと。

〔三四〕蜯は蚌なり。蛤（はまぐり）の一種なり。

しなれば、命終らんとする時に臨みて、其の心は迷亂れて正念を失ふ。是くの如き等の二倍の悔の熱に惱亂せらるる所と爲りて、地獄に墮つ。若し先の世に於て殺生せし業あれば、壽命は短促くして速疾に命ち終る。若し先の世に於て邪婬の業あれば、諸の天女を見るとも、皆悉く已れを捨てて餘の天子と共に互ひに相ひ娛樂む。是れを則ち名けて五つの衰相と曰ふなり。其の持戒の五種の缺を以ての故に、業の網に縛られて業の如き報を受く。若し放逸を行へば死王に牽かる。是くの如き一切の缺漏せる持戒にて天に生まれし爲めの故に、禁戒を持すとも無常にして速に壞るなり。爾の時、則ち業の繩に縛らるるが爲めに地獄・餓鬼・畜生に墮つ。是くの如き天の無常の樂みを觀ずるに、目の見る所の如く初めは愛ありと雖も、畢りは磨滅に歸し、動壞して無常なることは電の如くにして住まらず、一切の諸の欲の過惡なることを觀じて、頌を說いて曰く。

放逸の酒を飲みて、諸天癡飲を嗜めば、地獄に退き墮ちて、大猛火に圍遶れん。初め愛欲に染むなれば、瞋恚の熱に心を惱まされ、癡に心は迷惑せられん。但空にして實あること無けれども、伎樂の音聲の虛妄の爲めに誑惑せられなば、退歿く苦を覺らざるとも、畢竟して免かるべからず。諸の天女を見る時は、天心をして轉變せしむ。畢竟して當に捨離すべし。異趣に退き墮ちるは、諸の女人の性を觀じて女人を離れざればなり。富樂なれば則ち親近み、衰變すれば則ち捨離することは野鹿の信じ遊ぶが如し。欲を信ずることも亦た是くの如し。後に若し衰變を得ば、心輕くして之れを捨てて、恩敬の養を念ぜず、亦親友をも念ぜずして、若し衰變の時に遭へば卽ち捨てて復念ぜず。猶ほし衆の蜜蜂の萎變の華を捨つるが如し。女人も亦是の如くにて、衰至れば則ち捨離し、善愛の心を觀ぜずして、輕躁しく愛欲を念ず。女人の性は是の如し。密の毒藥に雜るが如くにして、惑欲は愚癡を致し、巧辭に癡惑を增す。女人を信ずべきことは難し。智者は遠離する所にして、女色は天人を誑

爾の時、天子は此の山峰に上りて、諸の天子の無量百千の光明は悉く等しくして、已れと異なること無きを見る。此の峰中に於て諸の天子は天女と衆の伎樂を作して妙なる音聲を出し、娯樂して樂みを受く。此の諸の天衆は、其の身の光明・色量・受樂を皆悉く具足して諦に視て瞻仰す。衆の蓮華の臺を以て莊嚴と爲し、衆の歌音を聞きては心に愛樂を生ず。皆天衣を服して線縷經緯の別あることなし。是くの如き諸天は其の身に皆悉く光明を具足せり。

爾の時、天子は山峰に昇り已りて諸の地界を見るに、各々差別せり。諸の河流の光明の輪を見るに、善業を以ての故に此の天中に於て、二處の種々の清淨く、莊嚴れる地に住せり。衆の樂みを成就せることとは前に說きし所の如し。何が故に名けて速行地と曰ふや。此の如き天衆は大勢力ありて、若し諸の天衆の阿修羅と鬪ふに、能く人中に於て一眴目の間に阿修羅を打つて、還へりて本の處の三十三天に至る。故に速行と名づくなり。前の業を以ての故に相似の果を得。本と人に速く行く船を施せしを以て、大海を渡りて多くの珍寶を獲て、布施して福を修めしめしなり。是の故に此の速疾き果報を得。是くの如き天子は手に器仗を執ることは甚だ大迅速なり。善業を以ての故に久しく天樂を受く。善業既に盡き、五衰の相現はれ、身體は汗流れ、身の光りは卒に滅し、燈の油の盡くるが如く、一切の諸根も亦た復た是くの如し。五欲の中に於て悉く樂味なく、餘の天衆を見れば卽ち愧恥を生ず。一切の天女は皆悉く背叛く。是の時、天子は其の天女の已れに背むきて他に趣くを見て二種の苦みを生ず。一者は妬嫉の苦、二者は愛別離苦なり。此の二種の苦にて自ら其の心を燒くことは猛火より過ぎたり。若し先きの世に於て偸盜せし業あれば、爾の時に自から諸の天女等を見て、其の著する所の莊嚴の具を奪ふて餘の天子に奉る。若し先きの世に於て妄語せし業あれば、諸の天女等は其の說く所を聞きて顚倒の解を生じて、其の惡罵を謂ふ。若し先の世に於て酒を以て持戒の人に施し、或は禁戒を破りて自から酒を飲み、或は麴釀を作り

色界の頂にありて、三千界の主たり。此の大自在天に二種あり。一を毘舍闍摩醯首羅と云ひ、二を淨居摩醯首羅と云ふ。倘、又欲界六欲天中の第六他化自在天を云ふことあり。

【三二】五衰。天人の死せんとする時は五種の衰相を現ず。經論の所說一ならず。

し。天子既に生まれて其の身に光明あり、第一樂を受く。身に骨も肉も無く、亦た垢、汗もなし。怨敵あること無く、亦た怖畏なし。追求する所なく、嫉妬を離れ、愛樂ならざること無く、病の怖畏無し。唯だ退ぞく時を除くのみ。王の怖れ有ることなし。心に多くの放逸ありて遍く諸の地を見れば、皆愛樂すべし。五欲にて自ら娯み、無量の境界にて遊戲して樂みを受く。毘瑠璃の樓、黄金の欄楯あり、種々の樹林、蓮華林の池は七寶にて成す所なり。鵝鴨、鴛鴦を以て莊嚴と爲し、種々なる微妙の音聲を出せり。山谷の中には多饒の衆鳥あり、須彌山峰は七寶にて莊嚴れり。蓮華池の中は金銀、眞珠を以て底沙と爲し、種々の寶樹は日の光明の如く、金、毘瑠璃を以て樹枝と爲し、衆華にて莊嚴無量の衆の蜂を以て嚴飾と爲し、須彌の山窟は第一の衆寶を以て莊嚴と爲し、其の地柔軟くして七寶の高峰あり、其の高峰中の衆の華の妙なる香は周匝を嚴飾れり。念ずるに隨ひて生ず。復異處ありて燈樹にて莊嚴れり。如意の樹の百千の光明の莊嚴は奇特なり。百千の天女を以て圍遶られ、衆の妙なる音を歌ひて共に相ひ娯樂む。是くの如き天衆は觸見する所に隨ひ皆快樂を受く。耳に衆音を聞けば心は皆愛樂す。若し諸の香を聞けば無量の功德を皆悉く具足す。若し身を以て觸れなば愛樂せざること無し。心の念ずる所に隨ひ、一切皆な得。因緣の能く其の樂みを奪ふものあること無し。是くの如き天子は百千の天女に圍遶れて、餘天の衆と共に往きて山峰に詣たる。其の峰を名づけて一切勢力と曰ふ。一切皆是くの如き如意の樹にて山峰を莊嚴れり。流泉、河池には衆の蓮華生じて以て莊嚴と爲し、無量百千の天衆は圍遶れり。毘瑠璃寶を以て樹枝と爲し、遍く其の上を覆へり。百千の重閣を以て莊嚴と爲し、無量の衆鳥は妙なる音聲を出せり。善業を以ての故に、此の山峰中にて是くの如き種々の諸樂を成就せり。善業を本と爲し、因なくして生ぜしには非らず、亦他の作して此の人報を受けしにも非らず、自在天の歡喜びしが故に與へしにも非らず。

【三〇】 自在天。大自在天(Maheśvara)のこと。音譯して摩醯首羅、又は摩醯濕伐湼と云ふ。自在天外道の主神なり。

諸天の大衆と、善法[二五]殿の閻摩婆羅の住する所に詣れり。諸天は天の樂みを受く。乃至、善業を受け盡くして、命終りて還退き、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれては、第一の樂みを受け、大園林の主となりて、常に安樂を受く。餘業を以ての故に、[二六]摩羅耶國に生まれて、旃檀林の主となり、大富にて豐樂なり。

復次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て三十三天の第二十五地の速行地と名づくるを見る。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるるや。衆生あるを見るに、善業を行ひ、其の心は質直にして諂曲を離れ、衆生を惱ませず、果報を信じて正見の業を行ひ、大いに布施を修さめ大富にして饒財なり。衆生の大海に入り以て財寶を求むるものあるを見れば、大いなる船舫を以て此の商人に施す。諸の商人等は此の船舫を得て、多くの財寶を獲。布施を持用いて諸の福業を修さむ。是くの如き船主に船を以て之れに施して、恩惠を求めず、其の報を受けず。云何がして盜まさるや。若し道路を行くに、諸の賊軍ありて村柵を破壞り、或は官軍を畏れて村柵に逃避る。此の村に入るも、乃至[二七]糠[二八]秸、艸葉も取らず。業の果報を信じて、怖畏を生ず。王法を畏るるには非らず。是れを不盜と名く。云何がして殺生せざるや。乃至濕生の[二九]蚰蜒の類も故さらに殺さず。心に殺すことを念ぜず。若し衆生ありて罝羅、罟網を造作して、機撥、坑陥にて諸の虎狼、禽獸の屬を殺さんとせば、卽ち財物を以て命を贖ひて脫れしむ。其の心に悔ず、亦他人も敎へて善道に住せしむ。是くの如き等の種々の善業を作す。是の持戒の人は殺さず、盜まずして善業を憶念して皆成就することを得たり。若し作す所あれば一切の天衆は皆共に善きことを讚ふ。顏色は淸淨にして諸天は供養す。是れを則ち名けて現業の果報と曰ふ。是の善業の人は此より命終りて、三十三天の上の速行地と名くるに生まる。彼の天上に生まれ、善業を以ての故に、第一の莊嚴にて、一切衆生は分別すること能はず。是くの如き天處は甚だ愛樂すべ

【二五】殿の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。
【二六】摩羅耶(Malaya)。摩羅延とも書く。旃檀香を出だす處なり。光明國と譯す。枳橘易土集に依れば、「其の國、觀音宮殿補陀落山に近し」と。
【二七】糠はもみがらなり。
【二八】秸は禾藁(わら)。わらのしんをも云ふ。
【二九】蚰蜒はげぢ〱蟲を云ふ。

和合すれば別離することあり、苦樂も亦是くの如くにて、因業の轉ずる所なり。是れ因緣無きに非らず。今此の業の化する處を、牟尼[三四]は如實に知り給へり。無量の業の網に化するは、諸の心の種子なり。心の業を集めることは知り難し。唯だ諸の如來を除くのみなり。種々の諸の業に繋れて世間に輪轉す。業網は大力ありて、能く百千萬那由他の劫數に種々の諸の生死を受く。譬へば繩にて鳥を繋ぐが如くにて、遠しと雖も攝れば則ち還へる。業の繩は衆生を繋ぐ、其の事も亦是の如し。

爾の時、天帝釋は諸の天子に希有なる事を示し已れり。衆生の無量の決定の業及び不定の業は、現報の受くる所、生報の受くる所、餘報の受くる所なり。復三種の善、不善の業及び無記の業あり。是くの如き等の無量の業網を示せり。迦葉如來の化せし所の影像を、諸の天衆と禮拜し、既に訖はりて此の閻摩羅婆羅樹の中從りして出づ。天衆も出で已りて、帝釋は還へりて婆羅樹の門を閉づ。帝釋は既に出でて、餘の天衆の放逸にして、遊戲し以て自ら娛樂して五欲の樂みを受くるを見る。爾の時、天王は此の事を見已りて、心に憐愍を生じて頌を說いて曰はく。

畜生の雜形の類は、放逸の爲めに誑らかせられ、若しは食を、若しは愛を欲して、貪心にて常に愛樂す。本と善業を行ひしも、天中にて報を食ひ盡くせり。是くの如き放逸の人は、命終りて何こにか趣く所ならん。放逸の怨は自らを壞る。業風に吹かれては猶ほし樹の傾き倒れるが如く、諸道の中に墮ちて、百千那由他に天中に生死を受くるとも、而も厭離を起さず、憂怖の心を生ぜず。

爾の時、帝釋は此の偈を說き已りて、諸の放逸なる天子の衆中に至る。諸の天子等は心に敬重を生じ、供養し恭敬す。時に、天帝釋は其の心を攝めんが爲に、此の天子と種々の園林の中にて遊戲して、閻摩婆羅樹の間に入らず。諸の園林にて遊戲して樂みを受く。時に、天帝釋は其の眷屬なる

【三四】牟尼(Muni)。聖者、こゝには佛陀のこと。

し、妄語し、飲酒して醉亂せば此の地獄に墮ちて、具さに無量の種々の楚毒を受く。苦みを受くること既に畢りて、地獄より出でて餓鬼の中に生れては、處々に逃走す。大惡鬼ありて其の舌を拔き出す。出し已りて還りて生る。餓鬼の中に死して畜生の中に生まれ[二二]迦頻闍羅雉鳥の身を受く。自らの音聲を以て其の命を喪ふ。其の妄語せし餘業の緣を以ての故に、畜生中に死す。若し人中に生れば、業の果報を受くることは、前に說きしが如し。言說する所あるも、人は信受せず。若し善業ありて天中に生るとも、其の聲嘶は破れ、麁惡にして鄙濁しく、不善の歌を頌す。一切の天衆は其の言を信ぜず。美愛なる正語を宣說することは餘の天衆の如くなる能はず。本の妄語せし餘業を以ての故なり。

時に、天帝釋は復殿の壁に於て、[二三]焦熱地獄の十六隔處を觀ず。是の中にて衆生は具さに種々の無量の苦惱、辛酸して、楚毒なる業の果報を受くることは、前に說きしが如し。罪を受くること既に畢り、地獄より出でて、餓鬼の中に生まれては、不淨を食する餓鬼の身を受け、大苦惱を受くることは前より五倍す。餓鬼の中に死して畜生の中に生れては、大海に在りて[二四]摩竭魚の身を受く。畜生中に死して、若し人中に生まるれば、容貌は醜陋くして、脣口は麁大にて人に惡見せらる。人中にて命終り、若し餘業あれば天中に生まることを得、身の光は減劣れることは前に說きしが如し。一切の天衆に輕賤めらる。

大焦熱地獄、阿鼻地獄の此の二地獄の業の果報は化現を作さず。何を以ての故なれば、天の心は軟くして之れを見ては命を喪はんことを恐れてなり。若し是くの如き二地獄を見る者は則ち大いに怖畏る。是の故に此の生死の報を化せざるなり。時に、天王釋は是れを觀察し已りて、偈を以て頌して曰く。

譬へば諸の微塵の虛空中に在りて、風に吹かれて旋轉するが如く、諸の業も亦た是の如し。

【二二】迦頻闍羅(Kapiñjara)。又、迦賓闍羅に作る。鳥の名なり。雉のことなり。

【二三】焦熱地獄。八大地獄の中の第六なり。

【二四】摩竭魚(Makara)、海の怪物、目は太陽の如く、船を呑み去るといはる。

は、此の地獄に墮ちて具さに無量の種々の楚毒を受く。苦を受くること既に畢りて地獄より出でて餓鬼の中に生まれては、[一九]食吐餓鬼の身を受く。壽命は長遠なるも、若し飮食を得ば餘の餓鬼に劫奪れる。若し眷屬あれば亦た餓鬼の爲めに欺き奪はる。復た異なる鬼ありて、刀を以て斬截られて大苦惱を受け、辛酸して死す。此より命終りて畜生中に生れては、水牛・牛馬の形を受け、壽命は長遠なり。設へ飮食を得るとも、他の爲めに奪はる。畜生中に死して、若し人中に生れなば壽命短促くして、貧窮く下賤し。妻は貞良ならず。是くの如きの業を殿の壁の中に於て、皆悉く具さに見たり。

時に、天帝釋は復業の果を殿の壁の中に於て觀じて、叫喚大地獄の十六隔處を見るに、前に說きし所の如し。殺生し偸盜し、邪婬し妄語せしものは此の地獄に墮して具さに衆苦を受く。種々の楚毒にて無量に辛酸し、地獄より出でて餓鬼の中に生まれ、壽命は長遠にして或ひは[二〇]鑊身の餓鬼の形を受け、或は針頸餓鬼の形を受け、業の受ける所に隨つて常に飢渴に困り、若し眷屬あれば他の爲めに奪はれる。或ひは食毒餓鬼の中に生まれ、毒火に燒かる。餓鬼の中にて死し、畜生の中に生れては大曠野に在りて、互ひに相ひ殘害ひ迭に相ひ食噉む。畜生の中にて死し、若し人中に生れば、身色は憔悴て威德あること無し。若し餘業あれば天中に生ることを得るも、身量、形貌は皆悉く減劣れり。一切の衆の寶にて莊嚴れる具の光明は微少にして、天女の愛敬する所と爲らず。天女は背叛き、捨てて餘天に至る。須陀は味を尠くし、智慧は薄少なり。心は正直ならずして、餘の天子の輕笑する所と爲る。若し諸の天衆の阿修羅と鬪戰するの時は、他の殺す所となる。餘業を以ての故なり。

爾の時、釋迦天王は復諸の天衆と共に寶殿の壁に於て、大叫喚地獄の十六隔處を見る。是の中にて衆生は種々の苦を受くることは、前に說きしが如し。若し衆生ありて殺生し、偸盜し、邪婬

【一九】食吐餓鬼。本經第十六餓鬼品を參照。三十六鬼中の第三なり。

【二〇】鑊身餓鬼。本經第十六餓鬼品を參照せよ。三十六鬼中の第一なり。鑊の字は、元、明兩本に依れり。

聞きて疑悔を遠離せり。

時に、天帝釋は復た諸天の宮殿の壁を示すに、廣さは五由旬なり。此の鏡壁に於て初め觀じて、[一五]活地獄の十六隔處を見る。殺生せし人は此の地獄に墮ちて、具さに無量の種々の楚毒を受くることは、前に說きし所の如し、地獄より出でて餓鬼中に生れては多く瞋恚を起し、妬心を增長す。刀を以て相ひ害し、業網に繫がれて畜生中に生れ、互に相ひ殘害ふ。人の爲めに食はれ、肉の因緣を以て其の命を殺害し、或ひは惡獸、虎豹の形を受け、瞋恚を增し、多く人の爲めに殺さる。畜生の中にて死し、人中に生れては、常に鬪諍を愛し、其の心は鄙惡く兵刃中に死して長壽を得ず。餘の善業あれば天中に生れて、威德、色相は減劣て如かず。壽命は短促し。若し諸の天衆の阿修羅と共に鬪戰する時は、傷を被りて死することは殿の壁中に於て皆な悉く具さに見たり。是くの如き

[一六]黑繩地獄の十六隔處も亦た前に說くが如し。殺生し偸盜せし因緣力の故に此の地獄に墮ちて、具さに無量の種々の楚毒を受く。苦を受くること既に畢りては、地獄より出でて、餓鬼の中に生れては、諸の刀杖を以て互ひに相ひ殺害することは前に說きし所の如し。或ひは屎尿の不淨の物を食し、之れを求むるとも得難し。餘の餓鬼ありて互ひに相ひ劚裂きて身體を破壞る。或ひは身命を喪なひ、餓鬼中に死して、畜生の中に生まれては、曠野の中に於て[一七]遮吒迦餓鳥の身を受けて燋渴して身を燒く。畜生中に死し、若し人中の刀兵の處の、弊惡の國土に生れば、或ひは兵刀に中りて飢餓して死す。勤苦して食を得るとも他の爲めに奪はる。設使へ、食を得るとも、食して消すこと能はず。人中より死して、若し餘業あれば、天中に生まる。色相、顏貌は減劣り、麤惡にして、食せし所の味は餘天に如かず。餘天を見る時は大いに愧恥を生ず。伎樂の音も皆悉く如かず。壽命は短促し。是くの如きの業を此の壁の上に於て、皆悉く之れを見たり。時に、天帝釋は復た殿の壁の中に於て、[一八]衆合地獄の十六隔處を見るに前に說きしが如し。殺生し偸盜し邪婬せし人

【一五】活地獄。等活地獄のこと。八熱地獄の第一なり、第一卷を見よ。

【一六】黑繩地獄。八熱地獄の第二。第一卷を見よ。

【一七】遮吒迦餓鳥(Cātaka)。鳥の名なり。露を呑みて生きるといふ。故にこの鳥を餓鬼の餘業果に擬す。(本經第十六、餓鬼品中第二針口餓鬼の下參照)。

【一八】衆合地獄。八大熱地獄の第三。

し。其の法は清淨くして塵垢を離れしことは、世尊の普く諸の衆生に示し給ひしなり。喜びて放逸を樂めば救ふ者無し。是くの如き衆生を導師は救ひましますなり。生死を渡して彼岸に到り、能く救ふもの無き諸の衆生を度し、一切の諸の世間を饒益するは、唯だ如來無上尊あるのみなり。　能く衆生を利益するを以ての故に、是の故に如來は最も殊勝れ給ふ。是の如く天帝釋は淨き信心を以て佛の影像を歎じ、低頭し合掌して、諸の天衆と頭面にて如來の影像を敬禮せり。復た天衆と低頭し合掌して、如來の化せし所の天衣を禮せり。是くの如き衣は如來の神力の【一四】住持する所なり。時に、諸の天衆は影像を見て已に皆慢を離れ、放逸を離ることを得たり。如來の化し給ふ所の影像の色は、端嚴殊妙にして、千の帝釋天も比を爲すことを得ず。何かに況んや餘天に於てをや。時に、天帝釋は如來の像、神通の化せる影を見、此の影像を以て憍慢なる諸天に示せり。憍慢なる放逸の心を離れしめんとなり。

爾の時、諸の天子は天王に白して言さく『憍尸迦よ、迦葉如來は何かなる因緣を以て、此の閻摩婆羅樹の中に於て業網にて生死の化を示し、何かなる故なれば樹の外に於て化せざるや』と。時に、天帝釋は諸の天子に告ぐ『我れも亦た是くの如く、先に斯の事を疑へり。彼の天は我れに示して憍慢を離れしめき。我れ往昔に於て亦た斯の事を問へり。時に、彼の天子は卽ち我れに答へて言へり。希有なる法は常に見るべからず。常に見ざるが故に見れば則ち深信す。是の因緣を以て、如來は化を留めて外に在らしめず。一切人は皆な悉く見る能はざるなり。若し化して外に在れば、諸天も之れを見ては希有を生ぜずして、或ひは過惡を生ぜん。是の因緣を以て、此の閻摩婆羅樹の内に於て留めて化像を示し、此の二樹の中にて希有の神化あり。樹內の化は第一の希有にして、一切の諸天も見ること能はざる所なり。是の因緣を以て迦葉如來は此の樹の內に於て影像及以び鏡壁に化し留めて生死の業を示せり』と。時に、諸の天衆は天帝釋の是くの如き事を說くを

【一四】住の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

最妙第一の種々の妙なる香なり。五根の得る所は五種の境界に相應しき樂みにして、甚だ愛樂すべし。大德の諸天も之れを聞けば樂みに著す。何かに況んや餘天にをいてをや。時に、天帝釋は諸の天衆に一切園林の愛すべき殊妙し樹を示せり。外の蓮華園林の流池は十六分の中にて其の一にも及ばず。時に、天帝釋は悉く諸天と共に復た往きて毘瑠璃山に詣る。其の山は清淨なること第一にして比なし。其の山頂に於て千柱の殿あり、毘瑠璃にて成就せし所なり。赤蓮華寶を以て欄楯を爲し、黃金を地と爲せり。其の瑠璃殿の長さは五由旬にて廣さは三由旬なり。迦葉如來の化して成就せし所なり。時に、天帝釋は諸の天衆と共に、七寶の階に乘りて瑠璃殿に昇り、迦葉如來の影像を見るに、迦葉佛の殿に在りて說法せし時の如し。天帝釋及び諸の天衆は合掌し恭敬して如來の影に禮し、深く信敬を生ぜり。禮拜すること既に訖りて、偈を以て佛を讚ふ。

　如來は世間の無上尊にましまして、眞解脫と如實諦とを得給へり。其の影の寂靜にして妙なること比なく、能く無上なる解脫道を開き給ふ。若し人、常に如來を禮する者は、淨信にして垢なく、心は寂靜なり。其の人は永く怖畏の〔一三〕有を脫れ、常に安隱にして勝れし樂みの處を得ん。是くの如き寂靜なる奇妙ぎなるこの法句を、寂滅の處にて演說し給ふなり。此の佛、如來の說き給ふ所の法は諸の衆生に涅槃の道を示せり。若し衆生ありて、此の法を念すれば、是れ勇健しき畏なきの人と名づく。則ち能く無上の處に於て、常に樂み惱みなき心にて安隱なり。若し衆生ありて眞諦を念ぜば、則ち渡る者の船栰に昇るが如くにて、三界の海の惡しく洄澓くとも、是くの如きの人は能く超え渡らん。如來・正覺・世間眼は普く諸法を觀じて遍ねからざる無し。此の佛の光明は倫匹も無く、一切の諸の光りも、與に等きもの無し。衆生は自の濁心・愚癡・瞋恚・慾垢等を憶念す。智慧の大水は甚だ清淨くして、一切の衆生の垢を洗ひ除く。一切の衆生は見ること能はず、外道の慢心も能く了ること莫

【一三】有（Bhāva）。存在卽ち世界のこと。

も、須臾にして必らず終りて沒せん。命の臨終ならんとする時は、諸根は皆壞滅れて、方に乃ち苦惱を知らん。忽ち至りて能く免るもの無し。譬へば旋火輪の如く、乾闥婆城の如し。三界は皆な無常にして、亦た水の泡沫の如く、譬へば水の聚沫の如し。愚者は覆護るるに依りて、無常なる法の中に於て、而も心に喜樂を生ず。天に非ず、亦た人に非ず、夜叉・龍・鬼神も臨終の業に繫がれ、人の能く救護する無し。死の時の未だ至らざるを念ひて、當さに善業を修さむべし。死王は甚だ暴惡なり。後に悔を生ずること莫れ。我れ今、汝を教敕せん。愼みて放逸を行ふこと莫かれ。汝よ、愛の爲めに覆はれなば、諸の境界を馳騁けん。境界は汝を繫縛らん。是れ諸の地獄の因なり。是の故に應さに捨離して、以て安隱の處を求むべし。

時に、天帝釋は諸の天衆の爲めに是の法を說けり。時に、諸天は放逸して曾つて念を[三]存せず。唯だ已に業鏡地を見て、厭心を生ぜしものは除かる。帝釋に白して言さく『願はくば、第二の娑羅の樹に入らん』と。此の樹は乃ち是れ迦葉如來の放逸なる諸天を利益せんと欲するが爲めに、化せし所の業網にて、生死の報を業鏡の壁に示して、諸の天衆に示せしなり。時に、天帝釋は放逸なる天の遊戲を樂むことを知りて、異處に詣らしめんとして、不放逸の諸の天子等と第二の樹に至れり。樹に至り已りて、手に金剛を執り、此の大樹を擊てば、其の門は卽ち開けり。釋迦天主及び諸の天衆は心に歡喜を生じて、共に樹中に入れり。天衆は入り已りて諸の園林を見る。昔に未だ覩ざる所にして、甚だ愛樂すべし。一切の須ふべき所は皆悉く具足せり。多くの種々の無量の衆鳥あり、蓮華の池水は衆華にて莊嚴れり。無量の金樹あり、一切愛樂すべし。微風の來り吹けば、皆大に歡喜す。七寶の山峰には衆鳥の妙なる音あり、如意の樹は猶し日光の如く、其の光りは普く照らして日の光りの如し。是の娑羅樹に復た飲食ありて充滿てり、河中には香・味・流溢れて

【三】存の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

切の放逸の諸天を利益し給ひ、生死の諸の業の網を觀ぜり。我れ今汝に示さん』と。釋迦天王は是の語を說き已り、頭面にて迦葉如來を頂禮し、卽ち其の門を出で已りて、還りて閉づ。餘天衆ありて、歌舞し戯笑して衆の伎樂を作して歡娛て樂みを受く。天帝釋を見れば卽ち來りて親近み、頭面にて敬禮し、樂みて歌舞を行ひ、互に相ひ娛樂し、鉢頭摩の諸の蓮華等を以て互に相ひ打擲つ。時に諸の天衆の樹より出でし者は、放逸の天に向ひて、其の見し所の希有の事を說けり。是の時放逸なる諸の天子等は心放逸なるを以て、希有の法をも聽かず、信ぜず。時に、天帝釋は諸の放逸の天子を攝めんが爲めの故に、亦た共に遊戯して蓮華池に於て、種々の音聲、天の諸の伎樂にて互に相ひ娛樂む。天鬘・天衣を以て自から莊嚴りて種々の園林の中に入り、遊戯して樂みを受くるは、善業を以ての故なり。時に、諸の天衆の天帝釋と業鏡に入りて業の報を見し者は皆遊戯せず。無學の人の如くにて、作す所は已に辦じて放逸の行を離れ、安立して住せり。諸の天衆の放逸に耽著るを見ては悲愍の心を生じて、是くの如き言を作さく『此の諸の天子の心は放逸に著れり。當さに退き、業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮し、煩惱の業に順ひ、一切の生死の業行を離れず、業の作す所の或は善、不善なるに隨ひ、是くの如き業にて、是くの如き報を得るを知らず』と。是くの如く天子は放逸の天を觀じて悲愍の心を生ぜり。

時に、善法殿の諸の天子等は帝釋に白して言さく『天王の恩を以て、[二]今我が天衆は五欲の樂みを受けて遊戯す。諸天は種々の園林にて遊戯して樂みを受く。云何して天王よ、我等を攝めざるや』と。爾の時、天帝釋は諸の天衆の爲めに頌を說きて曰く。

天子よ。汝は樂みに著りて、多く放逸を行ふ。　放逸なれば愛著するが故に、眞の實諦を見ず。　若し常に放逸心なれば則ち善き報あること無からん。　善業を離れし者は、則ち地獄に墮せん。　一切の諸の愛著は、皆當さに別離すること有るべし。　汝等は覺知らさると

【二】今の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

毒の命を害するが如くに、放逸も亦た然り。火の焚燒が如く、刀の如く、戟の如くにて、初めは親友の如きも後には怨敵と成らん。魚の鉤を呑むが如く、放逸も亦た然り。天龍・人・鬼及び阿修羅も皆放逸の爲めに大衰惱を得ん。天王よ。當さに知るべし。我等は福祐なり。王をして此に於て生死の獄を示さしむ。

時に、諸の天子は是の偈を說き已りて復た是の言を作さく『天王よ。云何して知るを得るや。誰か天王に是くの如きの法を示せしや』と。時に、天帝釋は諸の天子に告ぐ『汝よ。今諦かに聽け。當さに汝の爲めに說くべし。吾れ此の天に初めて生れし時に於て、宿舊き天子を須摩羅[八]と名づけたり。是れ吾が第一の親友なりき。彼れより次第に是くの如き事を聞きたり。時に[九]、迦葉佛[一〇]は諸天を調はんが爲めに來りて此に至れり。迦葉如來は諸の天子の心の大放逸なるを見て、諸の天子を利益せんと欲すが爲めの故に、神通を憶念し以て、此くの如き業の影を壁に化作して此の樹中に留めたり。我れは爾の時に於て、其の心放逸なりき。須摩天は我れに此の法を示せり。「汝よ。今に於て放逸すること勿れ。何を以ての故なれば、一切の有爲は無常にして破壞するなり」と。汝等天子よ。若し放逸なれば當さに此の樹に入るべし。自から己のが身の上・中・下の色を觀ぜば則ち自から愧恥ぢん。若し天子ありて不放逸を信ぜば、當さに此の法を示すべし。何を以ての故なれば、此是、如來は衆生を利せんが爲めに、是くの如き事を示して、諸天を業鏡地にて調伏し、善道に住し、閻浮提に還へらしむ。我れ是くの如き大德の天より、此の希有にして見難きの事を聞けり。我れ時に聞き已りて、放逸を離れんが爲めに、諸の天衆と來りて此に至り、諸の天衆をして皆慚愧を得せしむ。是の故に我れ今汝等に業鏡の壁に上・中・下の業を示せり。汝等天子よ。愼みて放逸すること勿れ』と。爾の時、天帝釋は復た天衆に告ぐ『當さに汝等と共に第二樹に詣りて、諸の業を鏡に觀ぜんとすべし。往昔の時に、迦葉如來は此の樹中に於いて、變化を示現し、一

【八】須摩羅。不明。
【九】時の字明註に依れり。
【一〇】迦葉(佛)(Kāśyapa)。過去七佛中の第六佛なり。即ち釋迦佛の前佛なり。

れを則ち名けて中の法施と曰ふ。云何して名けて上の法施と爲すや。智の功德を說きて思心を修め、恩惠を求めずして唯だ他を利する爲めのみに法を演說し、過惡を欲し、味を欲する繫縛を出離せしむるを樂みと爲すを說き、邪見の者をして正法に住せしめんがために淸淨なる離垢の法を說く。是の上の法施にて、無上菩提、等正覺の果、明行足、無上の調御、天人の師、無上の正法、調伏の法を得て、初、中、後の善を無上に成就せり。一切の[四]智見にて諸の衆生の爲めに廣く法要を說く。是れを則ち名けて上の法施と曰ふ。

爾の時、天主釋迦提婆は復鏡中に於いて業の果報を觀ず。時に、天帝釋は諸の天衆に示せしに、諸天は之れを見て皆な愧恥を生ず。時に、天帝釋は諸の天衆に告ぐ『汝等天子よ。放逸を得ること莫かれ。何を以ての故なれば、其の因を造るを以て生生の處に相ひ似たる果を得。汝等天子よ。應に我が所に至りて、汝が業報を視るべし。汝は是の業の上・中・下の業を觀ん。汝よ今應さに不放逸の行を修さむべし』と。時に、諸の天衆は此の業報の希有の事を見て生死の中に於いて皆な厭心を生じて頌を說いて曰く。

欲樂は虛妄にして、その本性は羸劣れり。欲樂に迷はさるれば怖畏を見ざらん。若し欲情を信ぜば利益する所無からん。善業は既に盡きて[五]臨終に乃ち覺らん。勝れし樂みは充滿せるとも、必らず衰變あらん。是くの如く樂みに著せば、是れを失ひては惱みを增すのみなり。若し天世間より地獄に墮せば、身心大に苦み、一切は惱みに逼られん。此の苦は量り難く、第一の辛酸にして、愛別離苦あり、復た是れより過ぐることあり、愛するものと現前に離るることあり。諸天に常にあるとも愚者は見ず、愛心に誑せられば、初の美も虛誑にて、欲の爲めに欺かるれば、百千萬億、[六]京[七]姟兆載なるも欲を得て還りて失ひ、常に保つべからず。善業を因と爲せば、樂みの果報を得ん。因なければ果もなく、亦た樹なきが如し。

【四】智の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【五】臨終乃覺。臨終に至つて初めて知るといふ。取り返しのつかぬこと。

【六】京は兆の十倍なり。

【七】姟は十經なり。十兆を經と云ふ。

財利の爲めなれば、自身は說きし如くには修行すること能はず。是れを下施と名く。若し說法を以て財物を得、或は用ゐて酒を飮み、或ひは女人と共に飮み共に食ひ、伎兒の法の如くに自ら賣りて財を求めなば、是くの如き法施は其の果甚だ少し。鏡の壁の中に於いて、是くの如き法施の人を見るに、天上に生れて智慧鳥と作りて能く偈頌を說く。是れを則ち名づけて下の法施と曰ふ。

云何して名けて中の法施を爲すや。名聞の爲めの故に、他より勝れんが爲めの故に、餘の大法師より勝れんと欲するが爲めの故に、人の爲めに說法し、或ひは妬心を以て人の爲めに說法す。是くの如き法施は報を得ることも亦た少し。天中に生れて中の果報を受け、或は人中に生まる。是くの如くに帝釋天王は鏡の壁中に於いて皆な悉く之れを示せり。是れを則ち名けて中の法施と曰ふ。

云何して上の法施と爲すや。清淨き心を以て、衆生の智慧を增さんと欲するが爲めに說法を爲し、財利の爲ならず。邪見の諸の衆生等を正法に住せしめんが爲めなり。是くの如き法師は自ら利し、人を利し無上最勝乃至涅槃にして其の福は盡きず。是れを則ち名けて上の法施と曰ふ。復た法施あり。時に、天帝釋は復た諸天に餘の法施の報を示し下の法施を知らしめ、布施の法を說きて智慧を說かず。中の法施の者には持戒を說き、上の法施の者には智慧の解脫を說く。下の智慧の者は人の爲めに說法するも少しく人を解悟せしめ、布施の法を說くも唯だ布施を說きて餘法を說かず。說法せし因緣にて持戒を知らしめ、後に智慧を得て其の人は信順して阿羅漢を得て、諸の結、漏を盡くして二解脫を得るなり。是れを則ち名けて下の法施と曰ふ。何を以ての故なれば布施に相應しき法を說くが故なり。

云何して名けて中の法施と曰ふや。持戒に相應き法を說きて、以て其の心を修さむ。是れ中の智慧にて、鏡の壁中に於いて是くの如き等の業の果報を見るに、智慧に順じて阿羅漢を得、速かに諸の漏を盡し、或ひは緣覺を得る。是れ中の法施にて、鏡の壁中に於いて是くの如き相を見る。是

卷の第三十一

観天品第六之十

三十三天之七

時に、天帝釋は復た諸天に上の布施の果を示せり。思心を具足し、福田を具足し、財物を具足し、思心の功徳を皆な具足せり。福田の勝りし者は諸の如來と等し。物を具足するとは謂く飲食の財物なり、思を具足すとは深心にして信ずるに等しく、供養を修むるなり。是くの如く布施せば人天中に於いて大果報を得、或は天上に生まれて大威德あり、或は人中に生まれて轉輪王と爲り、七寶を具足して四天下に[一]王となりて、七種の[二]七寶あり。是の轉輪王は正法に順じ行ひて、一切を具足し、戒を持し、智を修めて涅槃に入る。是れを上施と名づく。是くの如き等の施は鏡の壁中に於いて其の果報を見たり。

時に、天帝釋は復清淨き毘瑠璃の壁に於いて、三種の布施の果を示せり。鏡の壁中にて現はせしは、所謂資生の布施にて大富の果報を得ることは、前に說きし所の如し。無畏の布施は大國に生れて王領の主と爲り、兵刀の災險、疾疫にて横死すること有ること無く、怨敵を畏れずして無病、安隱なり。火の畏れ及以水の畏れを離れ、疾疫の畏れも無し。或は王者と爲り、或は大臣と爲りて久しく世に住す。是れを無畏施の果報と爲す。鏡の壁中に於いて是くの如き業を見るなり。

又た鏡の壁に於いて勝れたる布施を見る。所謂法施を最も無上と爲して、能く一切の有爲の生死の種子を出でたり。此の無上施は無上果を得て、[三]三菩提の中にて心に隨ひて成就せり。鏡の壁の中に於いて復た業の果を見る。若し財物の爲めの故に人に說法し、悲心を以て衆生を利益せずして財物を取るは、是れを下品の法施と名く。是の下の法施は善心を以て人の爲めに說法せずして、唯に

【一】王の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二】七の字は、宋、元、明三本に依る。

【三】三菩提(Saṃbuddha)。又、糝帽地とも作る。譯して正等覺と云ふ。菩提を見よ。

天帝釋は復た天衆に示せり。『汝等天衆よ。當さに是くの如くに持戒の修行を觀ずべし。諸道の中に於いて衆生を守護することは猶ほし父母の如くにして、如實にて虚しからざることは、清淨なる[三八]池の如く、好き珍寶の如くにて諸天の種子なり。若し人此の七種の戒を護れば、其の生まるゝ處に隨ひ、天人の中にて持戒の果を受けん』と。時に天帝釋は復た諸天に業の鏡に於ける影を示して、諸天に告げて曰く『汝等よ。[三九]是の一切の業報を觀ぜよ。若し丈夫ありて、諸の善業を作りて智慧・正見の燈を集めなば、能く是くの如き上・中・下の智・[四〇]漏・[四一]無漏の果を知らん』と。時に、天帝釋は復た天衆に九種の布施・持戒の智を示せり。『布施中に於いて上・中・下あり。善道の果報は皆な成就するを得て、福田を思修し、功德を具足し、九種を具足せり。天子よ。若し施を決定せず、相應しき相ならずんば是れを少果と名づく。復た少果あり、謂く[四二]餓鬼神通なり。或ひは畜生ありて樂果を受く。是れを下施と名づく。天子よ汝等は是の業の鏡にをける影を觀ぜよ。種々の業の果の中に布施の果あり。心を修思せず、心に功德を具足せずんば、財物も亦た具足せざるなり。好き福田を施して功德を具せる者は中果の報を得ん。人中の[四三]弗婆提國・[四四]瞿陀尼國に生まれ、若しは畜生・若しは阿修羅・若しは夜叉中に處せん。是れを中果と名づく』と。鏡殿の壁に於いて是くの如き相を見る。時に、天帝釋は復た天衆に業の果報を示し、告げて言はく『天子よ。汝等は當さに上・中・下の業を觀ずべし。思心を修めずして福田を具足す。云何して名けて思心を修めずして果報を得ると爲すや。若し施主ありて、時を以て施すに人をして布施せしめ、心に深信無く、身自らの施に非ず。之れを見るも起たず、恭敬の禮をせずんば、福田を具足し、財物を具足するも、思に布施を具足し決定せず。邊地に生まれて正法の律無く、禮儀の處無し。或は[四五]主領と爲り、或は臣佐と爲るも人の禮あること無し。諸の天子よ。汝當さに此の業の鏡の壁を觀ずべし。悉く皆な見ることを得ん』と。時に、天帝釋は是くの如くに之れを示せり。

【三八】池の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【三九】是の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【四〇】漏（Āśrava）。次を見よ。

【四一】無漏（Anāśrava）。漏（Āśrava）は煩惱の異名なり。有情の煩惱は、日夜身心より漏泄流出して止まざるに由つて名く。故に煩惱の有るを有漏と名け、無きを無漏と稱し、無漏は即ち涅槃の德名なり。

【四二】餓鬼。本經第十六、餓鬼品三十六、餓鬼中第十八の餓鬼なり。

【四三】弗婆提（Pūrva-videha）。須彌四州の一。須彌山の東方に於ける人間世界。

【四四】瞿陀尼（Godhanya）。須彌四洲の一。須彌山の西方の人間世界を云ふ。

【四五】主の字は、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

は此の樹を圍遶りて摩偸の天の上味を飲みつ。時に、釋迦天王は諸天に告げて曰く『汝よ。是くの如き閻摩娑羅樹を見よ。一切の天中にて唯だ波利耶多・倶毘陀羅樹を除きて餘の一切の樹は與に等しき者無し』と。諸天は白して言さく『唯然り、已に見る』と。帝釋は告げて言はく『汝等諸天は未だ是くの如き閻摩娑羅樹の功德を知らず。唯だ其の色を見るのみ。汝よ當に此の二樹の勢力を觀ずべし』と。時に、天帝釋は殿より下りて、手に金剛を執りて、此の大樹を擊つに、其の門は卽ち開きて、其の樹中に於いて無量の園林・華池・流水あり、蓮華にて莊嚴れり。摩尼の山峰・白銀の山峰・玻瓈の山峰・毘瑠璃の山峰ありて、種々の流水・河池にて莊嚴れり。復天華・七寶の蓮華池は百千の衆蜂を以て圍遶せらるゝを見る。復た園林には、黃金・白銀・毘瑠璃寶・靑寶の王樹を見る。復た衆の鳥あり、七寶を翅と爲し、無量種の美妙なる音聲を出し、諸天は之れを聞きて未曾有の歡喜を得て樂みを受く。時に、天帝釋は諸の天衆と前後を圍遶りて、閻摩娑羅樹中にて行列る殿に入りて、行列せる殿の種々の寶柱を見るに、七寶にて莊嚴れり。謂く靑寶[三六]玉・毘瑠璃寶・白銀衆寶・玻瓈・硨磲にて其の柱を莊嚴れり。復た種々の牀褥ありて、繒褥は婉綖として其の牀を莊嚴り、其の牀の四足は衆寶にて莊嚴れり。謂く金剛寶・靑寶・玻瓈・毘瑠璃寶なり。復た樹の內を見るに、山峰の中に種々の衆鳥の無量の音聲あり。時に、天帝釋は諸の天衆に告ぐ。『汝等此の雙樹の內にて奇特き事を見るや。不や』と。諸天白して言さく『唯然り、已に見たり』と。時に、天帝釋は自から天衆の放逸にて樂みに著するを觀じて、諸の天衆を將れて業の果報を示す殿に入る。其の殿の淸淨きことは猶ほし明鏡の如くにして、其の明は普く照らす。時に、天帝釋は諸天に[三七]告示す。『汝等よ。寶殿の壁上に於いて業の果報を觀ずべし』と。其の因緣に隨ひて、作す所の業は、若しは福田に於いて施すに財寶を以てし、信心にて奉施し、心の隨まに施し、時を以て施し意ろの如の報を得。其の生る處に隨ひて則ち果報を受け、其の受けし所の種々の果報に隨ひて、皆な悉く之を見たり。時に、

【三六】玉の字は、宋、元、明三本に依れり。

【三七】告の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

果報を喜ぶなり。因無くしては果を求め難きは、沙の油を出さざるが如し。若し人、善を修行せば嫉妬を遠離せん。不善なる愚癡の人は常に瞋恚を行ふのみなり。

爾の時、天帝釋は是の如く善業の果報を說きて、放逸なる諸の天子等を教へ給ふ。時に、諸の天子は是の語を聞き已り、頂受し奉行し、還へりて閻摩娑羅の地に至る。其の住する處に至りて、天子天女と遊戲し娯樂し、伎樂の音聲にて天の樂みを受く。此の天の地處に二つの娑羅樹ありて、三十三天の諸の園林中に於いて此の樹を最も勝れたり。其の色相・光明・華果を量るに最も殊勝れり。鈴網は彌覆ひ、樹葉の音は五樂の聲の如し。天は其の音を聞き、皆な來り樹に向ひて遊戲して樂みを受く。諸天は既に至りて娑羅樹に昇る。其の樹上に於いて蓮華池ありて、其の蓮華池を名づけて歡喜と曰ふ。蓮華池の中に多くの鵝鴨・鴛鴦ありて、衆の妙へなる音を出し、以て莊嚴と爲せり。無量の蓮華・八功德水の蓮華にて莊嚴り、諸天之れを見て『未曾有』と歎じ『此の二樹を除きては未だ是くの如き蓮華の浴池は有らず。此の娑羅樹は唯だ波利耶多・拘毘陀羅樹を除きて餘は及ぶ者無し』と。是の語を說き已りて、天子は天女と遊戲し歌舞して五欲の樂みを受け、久しく此處に於いて天の樂みを受く。復た往きて常遊戲林に詣たり、首に華鬘を冠り、種々の異色の衣を服し、其の身より種々の光明を流出す。少分の喩を說かんに、譬へば夏日の電光の色の如くにて三種を具足せり。一者は青光、二者は黃光、三者は赤光なり。遊戲の處の諸の天子等は五欲の樂みを受け、山澗の水の涌く波力の如くに、種々の樂みを受く。

爾の時、天帝釋は善法殿の一切の天衆と遊戲して善法堂殿を出づ。諸の天女と與に衆の伎樂を作して妙へなる音聲を出し、閻摩娑羅の住する所の地に向ふ。時に閻摩娑羅の一切の天衆は帝釋の來るを見て、皆な出て奉迎し、合掌して釋迦天王に頂禮せり。善法堂天と閻摩娑羅天とは皆な共に和合し、共に相ひ娯樂し、歌舞し戲笑して往きて雙樹に詣たりぬ。此の樹下に至るに、一切の天衆

の水を以て之れに施せば、然る後に乃ち飲む。若し彼れに施さずんば賀を以て之れを飲む。善く微細なる業の果報を觀じ、佛法を受行し、佛の功德を念じて以て其の心を修さめ、須臾の頃も惡友に近かず、與に言説せず、同じく道を行かず。何の因緣を以て與に同じく行かざるや。一切の善業も惡知識に近づけば則ち妬礙と爲る。是の故に之れと共に語り、去來し同じく住するを得ず。何を以ての故なりや。惡知識は是れ貪・瞋・癡の所住む處にて、有智の人は應さに之れを捨つべきことは猶し毒樹の如きなればなり。其の人は淸淨なること鍊りたる眞金の如く、身壞れ、命ち終れば閻摩婆羅の地に生まる。善業の人は彼の天に生まれ已りて、一切の善人に敬重せられ、業行を決定して、樂果を受く。其の身の光明は、人の數の日日に增長するが如し。何を以ての故なりや。諸天の中には日夜なきが故に、此の天身の光りは是の如く增長す。餘天は之れを見て、天女の前に於いて皆な慚愧を生じ、餘の一切の異地の諸天よりも勝ぐれり。諸天は見已り、皆な往きて釋迦天王に詣りて、此の因緣を問うて白して言さく『天王よ。閻摩婆羅に一天子ありて、初始より光明を出生して一切の天衆より勝れり』と。時に、天帝釋は是の語を聞き已りて頌を說きて曰く。

天子の光明は持戒より生じ、須彌の金光輪の十六もその一にも及ばず。身は常に光明を出して猶ほし融金の聚りの如し。光明の善く和合するは、智者の業を造りしが故なり。上・中・下の業を以て、三種に持戒するが故に、果を得るにも亦た是くの如くに上・中・下の報あり。持戒なれば放逸を離なれ、增長して放逸を無くすれば常に安樂を受くるを得ん。諸法は皆な是くの如くにて、若し持戒して淸淨なれば、光明の身を得せ[三五]しめん。千の日光の和合し、照らさるる所能く及ぶもの莫し。若し勝れし丈夫ありて七種の戒を受持せば、其の人は善果を得んことは、先に佛の說き給ひし所なり。若し人、善業を造れば、樂果報を失はさらん。作さずんば則ち果無く、業を作らば終に失はざらん。癡なる人は因を樂まずして但だに樂

【三五】令むるは、宋、元、明三本に依る。

如し。無量の垢を離れし清淨き光明・善妙なる香は、若し之れを見るものあれば、甚だ愛樂す可く、遊戲することは是の如し。山峰の中にて若し心に念を生ずれば一切を皆な得。無量の功德を皆な悉く具足し、自在に受用して他も奪ふこと能はず淸淨無垢なり。此の地中に於いて天の快樂を受け、遊戲し娛樂して種々の樂みを受く。其の身の光明は無量にして、天女を以て圍遶を爲し、天の五欲を受く。乃至、善業を受け盡くし命ち終りて還退き、業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれば、生まれてより終りに至るまで、常に快樂を受けて、色貌は第一なり。或は王者と爲り、或は大臣と爲り、生まれし所の國土は常に善法あり、正見き衆生の所住む處の中に生まれて、惡知識を離れたり。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て地處の第二十四地の閻摩娑羅と名づくるを見る。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞知にて見るに、若しは衆生ありて禁戒を奉持し、正見心を以て衆生を利益し身・口・意を正しくし、若しは邊險の地・若しは曠野の中にて、若し人の大河に墮ちて沒溺るゝを救ふて脫するを得しむ。若しは曠野に於いて渴乏に逼らるれば、施すに漿水を以てす。若しは險き道に於いて道徑を迷失へば、示すに正路を以てして報恩を求めず。衆生を利益し、衆生を救護して其れに壽命を施す。云何がして殺生せず、偸盜まざるや。或は此の人に於いて、若しは復た餘人に善業を行ひ、衆生を殺さず。若しは住する所の房舍の中に於いて、諸の衆生を生じ、若しは[三四]胎生・濕生にして若しは麁・若しは細に人の資具を壞り、或ひは樑間に在りて數人の上に墮ちて、人をして不安ならしむるとも、慈悲心を以て殺害せず。蝮蝎の毒蟲・種々の毒螫にて中に害を被ると雖も其の命ちを斷たず、是れを不殺生と名づく。云何がして盜まざるや。幾種に盜まざるや。是くの如き善人の曠野を行くに、其の力は自在にして賈客の水及び黑鹽を取り能ふ力あるも、偸盜せずして自から渴乏を守る。若し彼の賈客

【三四】胎生。四生（胎生・卵生・濕生・化生）の一。人類の如く母の胎內に在りて身體を完具して生るるもの。

の第一の勝れし心にて久しく善根を習ひしものを除く。

復次に比丘、此の天鳥の何等の業を以て、清淨にして無垢なる如實の法を說き、放逸なる諸の天子等を敎ふるやを觀ず。彼れ聞知にて見るに、若しは人中の時に於いて放逸の行ひを作せしこと有り、若しは遊戲の人、若しは大力士、若しは諸の伎兒の身に袈裟を著して遊戲し歌舞し、佛の功德を頌して財物を得たり。既に財物を得て、若しは衣・若しは食を沙門・婆羅門に布施し、或は自ら食用す。袈裟を著せし因緣の力を以ての故に、身壞れ、命ち終りては天上に生れて飛鳥の身を受け、第一樂を受く。彼の業を以ての故なればなり。復た次に諸天は歌舞し戲笑し娛樂びて樂みを受く。毘瑠璃の樹は黃金を葉と爲し、玻瓈を枝と爲して四周に彌布せり。復た寶樹ありて種々の珊瑚にて寶樹を嚴飾り、百千の衆蜂を以て莊嚴と爲し、黃金・眞珠を以て樹の枝と爲せり。復た山峰ありて七寶の焰輪を以て莊嚴と爲せり。復た蓮華ありて黃金の蓮華・玻瓈の蓮華・毘瑠璃の華なり。此の華の中に於て遊戲して樂みを受く。復た異天の寶殿・樓閣ありて、諸天は此に於いて諸の天女と遊戲して樂みを受くるも、嫉妬及び諸の恐怖を離れて、心に相ひ愛樂し、互ひに相ひ渇仰して第一の樂みを受く。復た天衆と遊戲し歌舞して如意林に入る。既に此の林に入りて心の念ふ所に隨ひて一切皆な得。是の因緣を以て如意樹と名く。久しく此の林に於いて天樂を受け已りて、復た往きて須彌の金峰に詣たる。其の山峰の中は河池・流泉を以て莊嚴と爲し、諸の天女と與に歌舞し戲笑して、天の伎樂を作して妙へなる音聲を出せり。之れを聞けば悅樂び、目には種々なる上妙の色を視て快樂を受く。自らの業の化せしを以て、諸の天女の衆を以て圍遶を爲し、須彌山の無量の種々の蓮華の池に於いて、皆な悉く之れを見る。復た種々の園林の蓮華ありて、其の香は殊妙て、之れを聞けば悅樂む。復た第一の上妙なる觸ありて、若し身に之れを觸れば猶ほし〔三三〕迦旃隣提「迦旃隣提は海中の鳥にして之に觸れば大樂にて、輪王の出づること有れば此の鳥も則ち現はるなり。」に觸るが

【三三】迦旃隣提。又、迦止栗那、眞隣底迦とも云ふ。慧林音義第十九に『瑞鳥の名なり。身に細栗の毛を有し非常に輕好にして綿の如し』と。

故に戒を持すべし。守護して犯すこと莫かれ。愚人は戒を離る。天に昇ること能はず。
若し天中に於いて五欲の樂みを受くるも、持戒して清淨なるが故に大果を得ん。諸天も欲に著せば放逸癡の毒にて無常なることを覺らずして其の身命を壞らんのみ。無量百千那由他の天は皆な放逸の爲め欲火に燒かる。一切の衆生は放逸のため盲とせられて、後に衰惱を受けて乃ち其の過を知るのみなり。心は常に[二九]攀緣して暫くも住すること無し。愚なるものは覺知らせずして後に大惡を爲さん。心に欲の境を樂みて、憂惱なることを覺らずんば、衰禍既に至りて乃ち悔恨を生ぜんのみ。[三〇]結使の煩惱は憶念に從つて生じ、心王の結使は常に隨逐を行うて、心に隨つて馳騁せ、在在の住する所は常に惛醉を爲し、三界の海に流る。若し[三一]眞諦を知り、世間法の無常にして苦空なるを見れば、永く憂惱を離れん。色に使はれる所と爲りて、常に諸の欲を求むれば、是の人は後生に永く天の樂み無けん。此の珊瑚林は衆寶にて莊嚴り、種々の枝條は蓮華にて嚴飾り、種々の流水にて諸の河を莊嚴るは、業因の得る所なり。虛空に遍き劫火既に起りて須彌を燒き滅す。況んや此の天身は、猶ほし水の沫の如し。生じ已りて復た滅するは、放逸にて自ら欺けばなり。
爾の時、諸の天子の、若しは先きの世に於いて衆の善業を集めたるもの、此の天鳥の說法の音を聞けば、則ち能く解悟り、鳥の所說の如く、必らず當さに無常なるべしと少時く憶念して放逸を離る。復た境界の色・香・味・觸の爲めに誑惑せられて悉く法音を忘すれ、猶ほし世を隔つるが如くにて、應さに作すべき所の業・作すべからざる所の業を皆な悉く忘失たり。現に欲樂を受け、未來を觀ぜず、天鳥の說法の音を念はず。現に五欲を觀じて遊戲し樂みを受け、地獄・餓鬼・畜生にて大苦惱を受くるを念ぜず、天身の甚だ得ることの難きと爲すを念はず、無始よりこのかた苦惱して地獄・餓鬼・畜生に輪轉し、諸の苦しみは、堅き[三二]鞕にても調伏すべきことの難きを念はず。唯だ天子

[二九] 攀緣。心は獨り起らず、必らず所對の境ありて彼に攀ぢ緣りて起ること、恰も老人の杖を攀ぢて起つ如きを攀緣と云ふ。又、心が彼や此やと外界の事物を馳せ廻る樣を猿が木の枝を彼處、此處と攀ぢあるくにも譬へてかく云ふ。

[三〇] 結使。結も使も共に煩惱の異名なり。心身を繫縛し、苦果を結成すれば結と云ひ、衆生に隨逐し、又は衆生を驅使すれば使と云ふ。結に九種あり、使に十使あり。

[三一] 眞諦。俗諦に對する言、眞理を指す。

[三二] 鞕の字は、宋、元、明三本に依る。

一切の天衆は百倍に轉た勝れ、其の身の光明は冷暖を調適ふ。一切の餘天は之れを見て愛樂し、其の光りは餘天の光りに勝さり、其の光りは普く照らして十由旬に滿ちて、一切の珍寶の光りより勝れり。善業を以ての故なり。是くの如きの天子は無量の眷屬を以て圍遶を爲し、衆の伎樂を作して園林の遊戲の處に詣たるに、林を五樂と名づけ、第一勝妙にして、三十三天に於いて最も殊特れ爲り。其の樹に威德あり、樹に善果あり、衆の鳥は勝れて囀く。鉢頭摩伽華の華池に流れあり、空中より香風來りて寶鈴を吹き、無量の微妙なる音聲を出せり。是の時、天子は諸の天衆と衆の伎樂を作し、諸の天女と種々に莊嚴りて五樂林に詣たり、種々の伎樂にて遊戲して樂みを受く。天女の歌頌する五樂の音にて第一の樂を受け、福田に於いて善業を作すを以ての故に此の勝れ香を得たり。其の香は普く熏じて五由旬に滿てり。其の果は空に處りて猶ほし衆星の如し。其の樹の莊嚴は天中にて最も勝ぐれて、明なることは日光の如く、其の光りは熱からずして亦復冷きことも無し。其の果は色香・衆味を具足し、其の香は一切の香氣より勝れて五由旬を熏ぜり。星の空に處するが如く、果の中より常に種々の香飲を流し、諸天は之れを飲みて醉亂を離れ、心の念ずる所に隨つて皆な悉く之れを得。是くの如き等の功德の[一八]利を受く。時に、天鳥ありて敎放逸と名づけ、放逸せる諸の天子等の爲めに頌を說きて曰く。

善業は將さに盡きなんとす、空しく壽命を過さん。當さに速やかに法を修さめて、放逸を行ふこと莫かれ。少壯きとも過ぎ易く、命ちも亦た是くの如し。衆の具は將さに失せんとす、放逸を行ふこと莫かれ。天も常法に非らず、常に具足するに非らず。時の未だ壞れざるに及りて、當さに福德を修さめ、善業を和合し、心に守護することを念ずべし。未だ過患無き處あるを見ず。若し常に亂心して非法を行へば、是の樂みも虛妄にして去り已りて還へらざらん。持戒を樂と貿れば天中に生まれん。若し戒を護らずんば臨終に悔恨せん。

【一七】鉢頭摩伽華(Padma)。鉢頭摩華、日暮に花の閉づる蓮華。

【一八】利の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生れなば安樂なる處に生まれ、大富・饒財にして其の心は廣大なり。樂みて正法を修さめ、智慧を愛し、沙門及び婆羅門を愛樂し、壽命は延長なり。餘業を以ての故なればなり。

　復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て二十三地の處を見るに、名づけて月行と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞知にて見るに、若し衆生ありて清淨き心を以て善業を修行し、善く其の心を修さめ、佛の形像を造り、或は供養を爲し、佛の形像を洗ひて塵垢を除かしめ揩拭きて刷磨く。或は金銀を見ては如來の像と爲し、之れを見て歡喜ぶ。思惟しては福田の功德を愛仰し、心に功德を思ひ、自ら其の心に熏じて善業を行ひ、心に喜悅を生じ、殺さず盜まず。云何がして殺さざるや。是くの如きの人、乃至衆生の命ちを斷つことを念ぜず、亦た他に敎へず。人の作す者を見るとも隨喜を生ぜず、勸めて作さざらしめて善道に任せしめ、自ら利し人を利す。復た殺さざることあり。殺さんとする念ひを生ぜず、乃至牀褥の臥具に[三六]濕生の蟲あるも心に其の命ちを害せんと欲する想ひを起さず。微細なる命ちに於ても乃至、蟻子にも殺意を起さず。是れを不殺生と名づく。云何して盜まざるや。是の如きの善人は善業を修行して厭足ことを知らず、一切處に於いて偸盜を行はず、乃至草木泥土なりとも自から既に取らずして、亦た他に敎へず。設ひ大熱あるとも他の蔭を奪はず。他人をして日中に住せしめて、自から蔭の處を受けず。自から勢力あるとも亦た他より奪はず、他人に敎へず。他の作す者を見れば勸めて作さざらしめ、乃至蔭の涼しきをも亦た偸盜まず、微細の事も皆な偸盜をせず。是を不盜と名く。是くの如きの人は、命ちの終りし後は天中の月行の地に生まれ、彼の天に生まれ已りて、善業を以ての故に樂果報を得。光明は普く照らし、猶ほし十の月の和合して竝び照らすが如し。是くの如き天衆の身相の光明の清淨・無垢なることも亦た復た是くの如し。天子は既に生れなば

【三六】濕生。四生の一。蚊蛇の如く濕氣に依つて生ずるもの。

りあること無けん。　若し人、三寶に歸せば夜の大光明の如くならん。　愚なる夫の放逸を行ふは、醉癡して自ら欺くが如くにして、二の放逸に惑はされて地獄に輪轉す。　一切の諸の世間は、出ること有れば必らず滅に歸するは、生まれば則ち死ある如くにて、畢竟して相ひ離れず。　放逸は自から圍遶て、境界の海を增長し、愛の鎖に縛られて天中に遊戲す。　諸の天の初めて生れし時は、樂生じては念々に滅し、放逸にして自ら心を覆ひ、無常にして轉ずることを知らず。　放逸にして自から迷惑て、常に境界を樂めば、欲に因つて厭足こと無し。　常に諸の苦惱を受け、念々の時あること無く、須臾も自在ならず。　是れ愛は衆生をして天中に樂みを受けしむるものにて、愛地は甚だ暴惡にして、無量に覺觀を雜へ、愛地に遊戲するは欲に使はるるが爲めなり。　譬へば地獄の火の諸の罪人を焚燒が如くにて、愛の火も亦た是くの如く一切の天を焚燒なり。　飢渴の火は熾然として諸の餓鬼を焚燒き、畜生は相ひ殘害し、人中にて苦を追求め、愛火は周遍に起りて一切を皆な圍遶き、火は燒きて常に熾然たるも、世間は能く覺ること莫し。

是くの如き天鳥は諸の放逸なる天子等の爲めに、是の偈を說き已れり。若し諸の天子の已に先の世に於いて善業を行ひし者は此の法音を聞きて、少しく放逸を離れ、天酒を飲まずして色・香・味・觸・上妙なる五欲・放逸の樂みを遠離せり。復た園林に入り伎樂にて自から娛み、心の念ずる所に隨ひて種々の樂みを受け、靑毘瑠璃・硨磲寶の峰あり、園林の中に於いて流泉・河水ありて、衆の蓮華池を以て莊嚴と爲し、種々の色なる蜂は其の中に集りて遊ぶ。其の蓮華林の毘瑠璃の葉は玻瓈を莖と爲して、多くの衆蜂あり、喩へて說く可からず。百千の天女は諸の天子と與に遊戲して樂みを受くるは、善業を以ての故なり。種々の境界にて天女の愛河に[二五]漂沒せらるとも、未だ曾つて覺悟す。是くの如く遊戲して共に相ひ娛樂み、乃至、善業を受け盡くして天より命ち終り、業に隨

【二五】漂の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

常に能く善く身・口・意の業を攝め、自ら利し他を利す。是の人は命ち終りて善道の三十三天の威德輪の地に生る。此の天に生まれ已りて善業を以ての故に、其の身の光明は月の盛滿するが如くにて、其の地の莊嚴は甚だ愛樂すべく、七寶の園林は其の地に充滿り。種々の流泉には諸の蓮華池あり、種々の蓮華の毘瑠璃の莖は黃金を葉と爲して、遍く池水を覆へり。種々の金石を以て崖岸と爲し、旋轉り洄復くことを猶ほし舞戲するが如し。種々の衆鳥は妙へなる音聲を出して、心をして悅豫ばしむ。眞金の山峰は毘瑠璃の峰にて、其の地を莊嚴り、鵝鴨・鴛鴦は衆の妙へなる音を出せり。天子・天女は歡喜びて遊戲せり。蓮華池を遶りて、其の河は流注ぎ、妙へなる音聲を出し、天子・天女は蓮華池を觀て種々の寶を以て其の身を莊嚴れり。光明輪天は久時く樂みを受けて、復た往きて〔二四〕彌難多林に詣りて遊戲して樂みを受け、種々の樂音にて互に相ひ娛樂せり。彼の林中に至るに蓮華林ありと箜篌遊戲と名く。其の蓮華林の縱の廣さは正さに五百由旬に等しく、上味なる色香・美味なる飮は其の中に充滿せり。諸天は之れを飮みて歌舞し戲笑して共に相ひ娛樂せり。時に、天鳥ありて名づけて正行と曰ふ。諸の天子の放逸を行ふを見て、頌を說きて曰く。

恥ること無く、慚愧すること無くして懈怠るは惡知識にして、是れ地獄の種子なれば、智者の捨離する所なり。恥ること無く、慚愧すること無くして、常に不善なる行ひを作さば、人の高き巖より墜るが如くにして、後時に乃ち自ら覺るのみなり。貪癡は誠の信なくして、其の心には怖畏なし。嫉妬の爲めに迷はざれば、天中に生ることを得さらん。酒を飮みて虛妄を語り、心は貪欲に堅く著し、業の果報を信ぜざるは、是れ地獄の因緣なり。心の過惡・瞋恚の惡業を守護れば、衆生は惡業の故に三惡道に墮せん。心に勇しく惡業を造り、常に欲に使はるゝが爲めに、常に妄語を行ふて其の人は樂報なけん。若し人、戒を毀犯ること僞寶の雲母の如くんば、其の人は惡業の故に三惡道に墮せん。若し人、惡心に任せば、其の闇は邊

【二四】彌難多林。不明。

子等と共に相ひ娯樂せんと欲せり。微細行天は既に此の林に至れり。此の林の諸天は還へりて正念を失ひ放逸に入り、種々の伎樂にて歌舞戲笑して微細行(天)に向ふ。諸天の大衆は既に相ひ見已りて、皆な歡喜を生じ、園林中の寶樹・寶枝の園林を彌覆せるところに於いて、互に相ひ娯樂せり。乃至、善業を受け盡くして天より命ち終り、業に隨ひ流轉して地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し三惡道の門を閉ることあれば、還へりて人中の安樂の國土に生まる。園林・流池を皆な悉く具足し、常に善業を行ひ、大富・饒財にして、或は國王と爲り、或は大臣と爲り、一切の人に愛敬せられ、常に布施を樂み、禁戒を護持し樂みて善業を作す。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、地處の第二十二あるを見るに威德輪と名く。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるゝや。彼れ聞慧を以て諸の衆生を見るに、善法を修行し、常に放逸せず、利益心を以て衆生を利益し、業果を信じて善知識に近づき、不殺生にて不偸盜なり。若しは[三二]尸賒婆樹若しは菴羅樹、若しは棗・若しは榛・種々の林樹にて、此の樹上に於いて、諸の鳥の巣有り、巣中に子ありて若しは鳥、若しは蛇の諸の鳥の子を取るに、其の人之れを見ては、慈悲心を以て衆生を利益し、救ふて脱するを得せしむ。云何して盜まざるや。他の林樹に於いて乃至一枝・一葉も取らず。亦た他に教へず。若し道路を行きて地に遺せる果を見るとも、取らず盜まず。人の取る者を見れば勸めて捨離しむ。云何して善を行ひ布施を修むるや。降雨の時に於いて、食を以て僧に施し、若しは饑饉の世に、若しは疾病の人に食を以て之れに施す。自らは禁戒を持し、他をして戒に住せしめ、戒に住する者を見れば、他をして隨喜ことを敎へ、他の衆生の爲めに業の果報を説く。佛・法・僧を念じて布施を行ふ。若しは父母に施し、若しは[三三]優婆塞、或ひは無禁戒の病患の人に飮食・湯藥の須ゐべき所の具を以て此の諸の人に施す。亦た他人に敎へて業の果報を説かしむ。惡友に近かず、與に同じく住せず、共に言説せず。

【三二】尸賒婆樹。枳橘易土集に「翻梵語云、尸舍和、應ㇾ云ニ昇舍波一譯曰ニ寶樹一云云」とあり。今、尸賒婆樹昇舍波樹のことならんか。不明。

【三三】優婆塞(Upāsaka)。淸信士、近時男などと譯す。在家の男子にして三寶に親近し五戒を受けたる者。

の文の頌に曰く。

若し人、崖巖より投ずるも、或は命ちを失はざることあるも、放逸地に墮つる者は苦みを受けざるもの有ること無し。若し人、放逸を行へば一切に所作ありて、是くの如く晝夜に於いて終ひに樂報あること無けん。世間・出世間の一切の諸の樂法を、放逸は能く破壞す。是の故に應さに捨離すべし。不放逸は不死にて、放逸は是れ死句なり。不放逸は最勝にして、當さに諸天に主たるべく、放逸は生死の本にて謹愼は是れ勝れし道なり。是の故に放逸を捨つれば、常に天樂を受くることを得ん。若しは人、樂みを求めんことを欲し、若しは諸の苦みを怖畏れなば應さに放逸の行を捨つべし。放逸は火毒の如く、放逸の睡りは人を覆ひ、放逸の癡は毒害にて、諸の不善業を作す。放逸なれば坑陷に墮ち、不放逸は最勝なり。放逸を不善と爲し、不放逸なれば樂を得、放逸なれば常に苦みを受く。總じて此の偈の句を說けば、苦樂を根本と爲す。既に此の功德を知りて、善く修めて自から利益せよ。

爾の時、帝釋は此の偈を讀誦して恭敬を增長し、淸淨心を以て復た頭面を以て師子座を禮し奉る。久しく此處に於いて不放逸を讚へ、放逸を毀呰ち、還りて此の殿を出で、諸の天衆に向ふ。時に、諸の天衆は天王帝釋を見て皆な恭敬を生じて帝釋の所とに至れり。時に、天帝釋は向の偈頌を以て諸の天衆の爲めに演說を具足し諸天に告げて曰はく『是くの如き偈句は一切の諸の天子を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲めの故に之れを殿の壁に書きしなり』と。一切の天衆は是く說くを聞き已りて、皆な世尊を禮し奉りて是くの如き言を作さく『如來世尊は世間の眼にてましまして、我等の爲めの故に、是くの如き偈を說き給へり』と。時に、諸の天衆は久しく放逸せず。復た種々の伎樂の音を以て、諸の天衆と與もに往きて微細行天に詣たる。微細行天は是の事を聞き已りて、諸の天女と與もに種々に伎樂し、妙へなる音聲を出し來りて此の林に詣り、此の林の諸の天

て、伎人の遊戯するが如く、去來は各差別し、業伎に繋がれて生死に流轉す。無常なる業は流動するとも、智者は應さに信ぜず。放逸は毒害の如し。應さに方便して捨離すべし。若し放逸を離れば、永く三界の海を度らん。

爾の時、迦々村陀如來は九[三〇]那由他の放逸の諸天を調伏して放逸を離れ令め、分別し解說して諸天を利益し給ふ。諸の比丘及び諸の天衆と與に閻浮提に詣たる。時に、天帝釋は諸の天衆の爲に是の語を說き已りて、往きて殿所に詣たり寶殿に昇る。俱吒迦殿は無量の衆寶を以て莊嚴と爲せり。其の諸の珍寶は、一切の天衆の先に未だ曾つて見ず。諸天之を見て皆歡喜を生じ、希有き心を發せり。帝釋は見已りて諸天に告ぐ『汝等よ。此の殊勝し殿を見るや。不や。未だ曾つて此の勝妙の莊嚴はあらず』と。時に、諸の天衆は天王に白して言さく『唯然り、已に見たり』と。帝釋は告げて言はく『此の寶の宮殿は乃ち是れ夜摩天王の奉獻する所にて、淨き信心を以て迦々村陀世尊に施し給ひしなり。此の殿の光明は見るを得べからず。是くの如く彼の天の光明は殊勝れたり。何を以ての故なれば、先の世の天子の放逸を行はざることは汝等の如きが故なり』と。時に、諸の天衆は自から劣弱なるを知り、憍慢心を捨つ。一切の天衆は皆頭面を以て如來の殿を禮し奉り、皆歡喜を發し、顏色は悅樂くして心に厭離を生ぜり。自から其の業の減劣りて尠少きを知りて、[三一]無上菩提心を發せる者あり、緣覺の菩提心を發せる者あり、聲聞の菩提心を發せる者あり、佛の所に於て不壞の信を得しものあり。一切の天衆は皆淨信を生じて、合掌し恭敬して、往きて一面に在り。時に、天帝釋は俱吒殿に入り、如來の師子の座の法を演說し給ひし處に至れり。迦々村陀如來の臥し給へし所の敷具は金剛を牀と爲し種々に具足せり。時に、天帝釋は淸淨き心を以て、身を擧げて地に投じ師子座を禮し、心に自から念言らく『此れは是れ如來の坐し給ひし處なり』と。敬重心を以て如來を念ずるが故に地よりして起ちて、殿の壁に書きしを見るに、偈句の頌あり、其

〔三〇〕那由他(Nayuta)。極めて大なる數目の名。約一億に當れり。

〔三一〕無上菩提心。眞實の證を求むる心を菩提心といふ。菩提(Bodhi)は道、覺と譯す。之れに三種あり、卽ち聲聞・緣覺・佛なり。此の中佛の得る所の菩提は最上にして之れに過ぐるものなければ無上菩提と云ふ。

しく視る能はず。是の殿の威德は譬へば閻浮提中の盛夏の日に、一切の世人は能く久しく觀ること無きが如し。如來の殿も亦た復是くの如し。釋迦天王は諸天に告げて曰はく『汝等よ。是の殿の威德を見るや。不や』と。諸天は白して言さく『唯然り。天王よ。我れ已に之れを見たり』と。帝釋は告げて曰はく『此の殿にて往昔迦々村陀如來・等正覺・調御丈夫・無上大師は百千の沙門と與に皆疑網を離れて[一四]四眞諦を見、[一五]二解脫を得しなり。[一六]六神通・[一七]四如意足を具して此の大殿に昇り給へり。利を以て諸の天人を安樂せしめんが故に、夏四月に於て此處に安居し、三十三天の爲に正法を演說し給へり。所謂、此れは是れ色なり。此の色は集なり。此の色は滅なり。此の色は滅道證にて受・想・行・識の和合して聚集せるなり。過を觀じて捨て出づることも亦た復た是の如し。天子よ。當に知るべし。彼の佛・如來は是くの如く次第に、諸の天衆の放逸・憍慢にして退沒き無常の苦みを覺らずに、但だ欲樂に著し、自相の平等の相を知らざるもの爲に、是くの如きの法を說きて、衆生を利益し給へしなり』と。爾の時、如來は復た放逸せる諸天等の爲に微妙の法を說き給ひて偈を以て訶責し給へり。

放逸は生死の本なり。　諸天の所住む處も、放逸の毒に醉されば、沒して[一八]諸有に在らん。若し放逸を離ることあれば、永く三界の海を脫れん。　放逸は癡を本と爲すも盲冥にして覺る所無し。　[一九]無明の起るは本あり、火の日より生じ、癡なるに因りて放逸は生ず。　大仙は是くの如くに說き給ふ。　放逸の火の熾然なるは心の起す所に由る。　誑惑せる愚癡の人は諸の地獄道に至らん。　天人も放逸を行ひ、女色に使はるゝ所となり、和合して相ひ娛樂み、愛別の苦しみを知らずんば、命の終らんとする時に臨みて、現前に大苦を受けん。　婇女の亦た盡くるに隨ひて、諸の樂みも皆磨滅す。　和合せば必らず離ることあり、一切の樂みも皆な盡き、壯少くとも當に衰變すべく、一切の業は皆盡く。　一切の諸の衆生は善惡の業に繫がれ

【一四】四眞諦。又四聖諦と云ふ。苦集滅道の四諦なり。その理眞正なれば眞諦と云ひ、聖者の所見なれば聖諦と云ふ。

【一五】二解脫。解脫とは梵語の Mukti（木底）、Mokṣa（木叉）の譯なり。縛を離れて自在を得る義なり。二解脫の名稱に就きては種々あり。俱舍論廿五に依れば一は有爲解脫、卽ち阿羅漢の無漏の眞智を云ふ。二は無爲解脫、卽ち涅槃のこと。

【一六】六神通。神は不測の義、通は無礙の義なり。三乘の聖者は六通を成就せり。六通とは左の如し。

一、神境智證通（Ṛddhividhi-jñāna）、二、天眼智證通（Divya-cakṣus）、三、天耳智證通（Divya-śrotra）、四、他心智證通（Paracitta-jñāna）、五、宿命智證通（Pūrvanivāsānus-mṛtijñāna）、六、漏盡智證通（Āsravakṣaya-jñāna）なり。

【一七】四如意足（Catur-ṛddhi-pāda）とは、欲（chanda）、勤（vīrya）、心（citta）、觀（vimaṁsā）の四種の禪定を行ひて、以て神通を得る基礎と爲す德目なり。

【一八】諸有。二十五有界にして、一切の存在の總稱なり。

【一九】無の字は、宋、元、明三本に依る。

ばなり。

爾の時、天鳥は放逸なる諸の天子等の爲に是の偈を說き已れり。時に、釋迦天王は此の林中に於て復た異なる處に詣る。彼の林に到り已るに、其の林の一切は善業の莊嚴にて種々の功德あり、〔一〕學・〔二〕無學の人の所住む處・大仙世尊・迦々村陀如來の住し給ふ處なり。時に、天帝釋は無量の天衆と與に天の伎樂を作して、共に林中に入りて此の林樹を見る。既に林中に入るに、諸天の威德は悉く皆な殊勝れ、須彌山の、六萬山の中に於いて處するが如く、釋迦天主の諸の天中に在ることも亦た復た是くの如し。三十三天の諸の園林の中にて此の林の光明は最勝にして殊特れたり。時に、天帝釋は諸の天衆とゝもに恭敬し、圍遶をなして閻浮林に詣るに、其の閻浮林の一切は金樹を以て莊嚴と爲せり。釋迦天王は此の林中に至りて、諸天に告げて曰はく『汝等天衆よ、此の一切の殊勝し林を見るや。不や。無量の華池・園林を具足せり』と。天衆は白して言はく『唯だ然り、已に見る』と。帝釋は告げて言はく『此の林は是くの如き一切の功德を皆悉く具足せり。我れ今之れを覩て希有の心を生ぜり。今此の林を觀るに迦々村陀如來の等ものなき色身を見るが如くにて、一切智慧大悲の如來の所住給ふ處なり。此の住處に於いて、無量の天衆は法を聞くを以ての故に、樂みに從つて樂みを得るなり。此の佛・如來・無上丈夫は已に涅槃に入り給ひしも遺果は猶ほ存せり』と。爾の時、帝釋は復た往きて〔三〕俱吒迦殿林に詣るに迦々村陀如來も往昔亦た曾つて此の林中に入り給へき。帝釋天王は此の林中に入りて、百千萬殿の此の殿を圍遶れるを見る。七寶にて莊嚴れり。謂く青寶玉・金剛・硨磲・毘瑠璃寶にて種々の衆寶は間錯りて莊嚴れり。種々の幢幡を以て嚴飾と爲し、諸殿の中の如來の坐し給ふ所は殊勝し殿にて、光明は晃曜とし、猶し初夏・秋天の時に、諸の雲翳なくして、衆の星中に於て日月を最勝とするが如し。如來の坐し給ふ所の宮殿の殊勝しことも亦た復た是くの如く、其の明かにして照曜くことは唯だ帝釋を除きて一切の天衆は久

〔一〕學(Saikṣa)。尙、學修を須ゐる境地なり。修道的見地より未だ修行を要する境地にして阿羅漢に至るまでの一切の聖者等に名く。

〔二〕無學(Aśaikṣa)。已に學修の究竟せる所謂、所作已辨の聖者は學ぶべきもの無き位なればかく云ふ。阿羅漢果を指す。

〔三〕俱吒迦殿林。不明。

火の焔に觸れるが如くにて、欲樂も亦た是くの如く後に大苦惱を受く。　火の衆の薪に益して、其の焔は滅すべからずして、自他を倶に能く燒くが如く、欲樂も亦た是の如し。　飛ぶ蛾の火に投じて、燒害れる苦みを見ざるが如く、欲樂も亦た是くの如くなるとも癡なる人は覺知らず。　若し人、欲樂に著せば、常に欲の爲めに燒かれ、蛾の燈火に投ずるが如し。　欲火は此れよりも過ぎたり。　是の故に欲の害を捨て、常に智慧を修むるを樂みて、放逸を行ふこと莫かれ。　放逸は惡道に墮し、一切の欲樂を愛すれば、放逸の爲に誑らかせらる。　樂報を受けて旣に盡きれば、後に地獄の苦みに墮せん。　其の人の善業盡くれば、欲の爲に誑らかせられて、天從り地獄に至らん。　欲癡に誑らかせられしが故に、生より乃至して終る。　常に正思惟を修め、心に戒法を念ずれば、是の人は寂滅を得ん。　諂曲て邪の憶念なれば三[九]毒に味著を生じ、放逸の水は甚だ深くして、女欲は水[一〇]底と爲る。　歌樂にて其の心を動かし、愛水は磐石を銜き、境界の蛇に覆はれ、心の波は駛せ流注れ、愛河の大瀑惡は龍の境界に流注る。　癡人は此の河に入りて天欲の爲めに沒せらる。　畏るべし。　瀑河の如くとも、癡人は沒するを覺らざることは、猶し癡なる密蜂の、毒樹の華に於て飲むが如し。　是くの如き欲毒の害も癡人は樂みて貪著し、蜂は毒を飲みて存亡び、愛欲に沒せざると云ふ事無し。　三毒の水中に生まれ、放逸の風に吹かれ、愛火は天衆を燒くとも而も猶ほ覺知らず。　毒は天中に生じ、放逸を稠林と爲し、癡人の遊戲する所は、愛を以て自から心を誑らかす。放逸は諸の欲を生じ攀緣して暫くも停まらず。　是の欲は夢幻の如くにて、智者の信ぜざる所なり。　諸の欲は夢の如しと雖も、夢は地獄の因に非らず。　是の故に諸の欲を捨てゝ常に淸淨の業を修めよ。　善行を最勝と爲し、不善業を爲さざれ。　是くの如き善業の繫りは則ち勝れし處を得ん。　諸の天も欲樂に著せば寂靜の處を得ず。　智人の寂靜に至るは、不放逸を以ての故なれ

【九】三毒。貪欲・瞋恚・愚癡を云ふ。
【一〇】底の字は、元、明二本に依る。

る。富樂も衰惱あり、少壯も老に壞さる。恩愛も必らず離ることあり、和合するとも久しく停まるべからず。諸法は皆是の如し、正覺の說き給へる所なり。若し人、三界に於て、其の心の迷はざる者は、是の人は寂靜を得て寂なる林中に住すべし。常に欲の爲に諂曲り、憶念して怖畏を懷けば、是の人は則ち林中の寂靜の樂みを得ざらん。若し人、心淸淨くして、林に依つて寂靜を修めば、其の人は林中にて樂まん。是れ欲を行ふ人に非らずして、林中にて淨き心を修むれば衆に入るも心は動かず。是の故に林の中に住して城邑に住すべからず。若し人、城邑に入れば、欲の爲めに心亂だされ、諂曲りて淸淨からず。林に至れば寂靜に還る。是の故に林樹の間は、第一の最寂滅のところにて、行者の應さに住すべきの所なり。能く欲心を離れなば諸の根心は寂靜にして、行者の心は安樂なり。千の帝釋の樂みも此の人の心に及ばず。若し禪定の樂みを得ば、一切は白淨き法にて、夜摩の諸天にても他の樂分に及ばず。樂みは欲從り生ずる所にして、常に衆の苦と合す。若し煩惱の樂みを斷てば、永く破壞あること無し。無始の生死の中、煩惱の怨心を結ぶ。若し此の[七]怨結を斷たば欲樂は能く及ぶこと無けん。欲に從つて樂みを生ずる者は、不淨にして苦みの果報あり。若し解脫の樂みを得ば、是の樂みは與もに等きもの無し。離欲の行に依止まる行者は第一の道にして、愛に從つて欲樂を生ずるは、正しき道に至ること能はず。初めて愛して味に[八]著することを生ぜば、報を得ることは火の毒の如し。欲の生ずる所の樂みに從へば常に地獄に在り。初の愛に善き味を生じ、中の愛も亦た是くの如くにして、後に寂靜・淸淨なれば、能く安樂の處に至らん。若しは行ひて初、中善く莊嚴て慈母の如くんば、云何して正念を捨てんや。欲樂の境界に戲れ、欲の洄澓に轉ぜられなば中、後は常に苦惱なり。云何るは愚癡なる人なりや。欲に於て愛樂を生ずるなり。妙なる色は毒華の如く、猛

【七】怨結。怨恨の心、結びて解けざるなり。

【八】著の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

の樹葉の相ひ映發するを以ての故に、黄赤の光りを出せり。復た大光ありて以て莊嚴を爲せり。宮室・園林は種々の寶を以て莊嚴と爲せり。種々の寶の宮は種々の七寶の園林の華樹を以て莊嚴と爲し甚だ愛樂す可し。帝釋は之を見て希有の心を發せり。其の殿中に於て大華池あり七寶にて成就するところにて、其の水の黄色なることは融金の聚りの如く殊妙れし莊嚴なり。種々の衆寶にて莊嚴り厠塡せり。種々の色鳥を以て莊嚴と爲し、一切の天衆は種々の伎樂にて歌舞し戯笑して共に相ひ娛樂せり。往きて大池に詣たるに、其の池を名づけて一切最勝と曰ひ、池中の諸の鳥は諸の天子を見て心意蕩逸る。卽ち天子の爲めに頌を說いて曰く。

譬へば靈鷲鳥の蓮華中に住せざるが如くにて、是くの如き寂靜の處には惡人は應に住すべからず。是くの如き寂靜の林にて、云何して放逸を行ぜんや。顚倒して法に順ぜざるは、日の冷光を出すが如し。若し愛樂を離るを得ば、解脫して衆の苦を離れん。若し此の二法を離れば、天樂も樂と爲すに非らず。禪を修めて放逸を離れなば、欲の網を解脫せん。解脫は乃ち樂と名く。汝よ愛に誑かせられざれ。世尊は先きに此に住し給へり。及び諸の修行者も(然)り。汝も欲の爲に牽かれなば、此の林に住すべからず。此の殿にて天樂を受くるも、無常にして久しく住せず。若し愛欲を離れなば是れを第一の樂みと爲す。先きに此の林に住せし者は、皆第一の處に入れり。若し第一處を得ば、能く一切の苦みを斷ぜん。貪心にて美食を好めば、貪心の爲に誑せらる。此の寂靜なる林中には斯人は住すべからず。若し寂靜の心を修めば、樂みも清淨にして住すべし。心に欲境を行ぜば、寂靜林には住すべからず。若し心寂靜あれば應さに林中に住すべし。欲心の爲めに亂せられば應さに此の林に住すべからず。[六]五の因緣を怖畏れなば、愛も燒く能はざるところなり。清淨にして愛を離れし人は、終ひに惡道に墮せず。生あれば必らず死あり、强者も病に侵さ

【六】五の因緣。色・聲・香・味・觸の五欲による因緣なり。

卷の第三十

觀天品第六之九

三十三天之六

『復次に是の事あるが故に是の事ありとは、所謂、彼岸あるが故に則ち此岸あり、若し彼岸無ければ則ち此岸無し。是の如くんば天子よ。是の事あるが故に是の事あると爲す。是の事無きが故に是の事無しとは、互に共に生あれば各各の因緣は一切[一]有爲法にして、因緣に從つて生ず。因緣とは所謂無明は行を緣じ、行は識を緣じ乃至死も亦た是くの如し。天子よ當さに知るべし。是くの如き[二]十二因緣は彼の佛・世尊の此の宮殿に於て、人中の數の五千歳中に、此の宮殿に於て此の法を演說し給ひしなり。我れ今汝の爲めに少分を宣說きしなり。恒河沙の如き等の三世の如來[三]應等正覺も同じく此の法を說き給へしなり。正法身の爲に彼の佛・世尊は此の法を說き給ひしなり』と。時に七億の諸天は諸の[四]有漏を盡くして[五]法眼の淨なるを得たりき。

爾の時、世尊は閻浮提に還りて大悲心を以て人の爲に法を說き給ふ。所謂『無明は行を緣じ、乃至生は老死を緣ず』と。時に、諸の衆生は無量無邊に塵垢を遠離し、諸法中に於て漏盡き解脫せり。是の如くに世尊は天人の師にてましまして、諸の天人の爲に斯の法を演說し給ふ。是くの如く帝釋も諸の天衆の爲めに廣く法を說き已りて、往きて摩多隣那の天宮に詣る。其の宮に到り已りて種々の鳥を見るに、七寶の翅羽を以て莊嚴と爲せり。衆の蓮華池ありて、其の諸の池中に七寶の蓮華あり、其の蓮華の色は種々の寶の色にて、種々の衆蜂を以て莊嚴と爲せり。日の初めて出づるが如くに其の華の光明は寶殿を莊嚴れり。其の宮側に於て毘瑠璃樹あり、樹の光明を以て、互に相ひ映發して、此の天宮をして靑光明を出さしむ。其の瑠璃樹は眞金を葉と爲し、此

【一】 有爲法（Saṃskṛta）。爲は作爲の義にして、作爲あるものを有爲と云ふ。卽ち因緣に由つて作り爲さるる者、隨つて生滅變化の有る者を云ふ。

【二】 十二因緣（Dvādaśāṅga-pratītyasamutpāda）。又、十二緣起とも云ふ。古來の說に從へば衆生が三界に輪廻する因果の關係を系列的に說明したる者にして、一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六處、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老死なり。（各項を參照せよ）。

【三】 應等正覺。等正覺を見よ。如來十號の第三なり。

【四】 有漏（Sāsrava）。煩惱は日夜、心身より漏泄するに由り、煩惱を漏と云ふ。斯の煩惱を有する者、卽ち一切世間の事物を有漏と云ふ。

【五】 法眼。因緣生の一切の法を明瞭に觀察する智慧を謂ふ。佛の五眼の一なり。

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるや。所謂父母の精血あり、業あり、藏あり、[二五]中陰の身ありて猶し香氣の如きが故に、身の生ずることあり。是くの如くんば天子よ。是れを是の事あるが故に是の事あると爲す。云何して是の事無きが故に是の事無きや。若し父母無ければ則ち精血なく、決定の業なく、藏なく、中陰なくんば則ち身の生ずること無し。是くの如くんば天子よ。是れを是の事なきが故に是の事無しと爲す』と。

【二五】中陰。又中有と云ふ。此の世に死して彼の世に生ずる中間に存在する身形なり。陰とは五蘊の蘊のこと。

く、憶念なきが故に眼識も亦無し。是くの如くんば天子よ。是れを是の事無きが故に是の事無しと名づく』。

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるや。譬へば陶師の如し。輪・繩・泥・水の衆法和合して瓶を生ずることあり。諸の天子よ。是の事あるが故に是の事ありとのことも亦た復た是の如し』。

『復た次に天子よ。云何して是の事無きが故に是の事無しとするや。譬へば陶師の如し。輪・繩・泥・水の若し和合せずんば則ち亦た瓶も無し。是れを是の事無きが故に是の事無しと爲すことも、亦た復た是の如し』。

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるや。所謂和合すれば必らず別離あり。是れを是の事あるが故に是の事あると爲す。云何して是の事無きが故に是の事無きや。若し和合無ければ則ち別離なし。是くの如くんば天子よ。是れを是の事無きが故に是の事無しと爲す』。

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるや。生あるを以ての故に則便ち死あり、若し生無ければ則ち死あること無し。是くの如くんば天子よ。是れを是の事あるが故に是の事あり、是の事無きが故に是の事無しと名づく』。「天に老無きが故に天の爲めに說法するに老支を言はず。但し死あるを言へり。」

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるや。所謂欲あるが故に決定して燒かれることは、譬へば火あれば則ち必らず燒かることあるが如し。是くの如くんば天子よ。是れを是の事あるが故に是の事あると名く。云何して是の事無きが故に是の事無きや。所謂欲を厭離するが故に欲の燒く能はざることは、猶し火無ければ則ち燒く能はざるが如し。是くの如くんば天子よ。是れを是の事無きが故に是の事無しと名く』。

の爲に說法し給へき。初善・中善・後善・善義・善語純備を具足し、白淨の法、所謂是の事あるが故に是の事あり、是の事滅するが故に是の事滅すと。云何して有と名づくるや。欲あるを以ての故に則ち過失あり、若し欲なければ則ち過失なし。天子よ當に知るべし。是れを是の事あるが故に是の事あると爲す。云何して是の事無きが故に是の事なしとするや。若し欲なければ則ち欲の過なし。是れを是の事無きが故に是の事無しと爲す。云何して是の事滅するが故に是の事滅するや。愛滅するが故に欲滅し、欲滅するが故に欲の過滅するなり。是れを是の事滅するが故に是の事滅すると名くなり。天子よ。當に知るべし。是の事あるが故に是の事あり、是の事なきが故に是の事なし。若し逆覩をもつてすれば、愛の因緣、生欲の本、欲の因緣にして能く欲を生ずるなり。云何して欲と爲すや。心に憶念を求め作す所あらんと欲す。是れを名づけて欲と爲す。癡は求むる所あるが故に無明と名く。無明を以ての故に境に於て厭くこと無し。是れを名けて愛と爲す。諸の天子よ。足るを知ることを求めざるが故に名けて欲と爲す。諸の天子よ。是れを是の事あるが故に是の事あると名く。云何して是の事無きが故に是の事無しとするや。所謂愛貪ありて足ることを知らず。若し愛滅する者は厭足なきことも滅するなり。是れを是の事無きが故に是の事無しと爲し、是れを是の事滅するが故に是の事滅すと名づく』。

『復た次に天子よ。是の事あるが故に是の事あるとは、所謂和合して業を作し、業あるを以ての故に則ち業の報あり。若し業の集まることなければ則ち業の報なし。諸の天子よ。是れを是の事あるが故に是の事あり、是の事無きが故に是の事無しと名づく』。

『復た次に天子よ。云何して是の事あるが故に是の事あるとするや。所謂先に憶念するを以て眼に色を緣じて識を生ず。憶念を先と爲す。是れを是の事あるが故に是の事あると名く。云何して是の事無きが故に是の事無きや。若し色なければ則ち眼なく、眼無ければ則ち憶念無し。色なく、眼な

人若し見れば其の食ふ所を以て之を貿易へて、其れをして脫ることを得せしむ。是くの如きの人は彼此の命ちを護るなり。是れを不盜と名く。自ら偸盜せず亦た人に敎へず、諸の衆生を勸めて善道に住せしめ。未だ戒に住せざる者には敎へて戒に住せしめ、已に持戒する者には其れをして增長せしめ、業の果報を說きて其れをして覺悟らしむ。是れを則ち名けて不殺にして不盜と曰ふ。復た法に順じて行ふ人あり、衆生を利益し、諸の蜜蜂を見るに他の殺さんと欲するを知りて、物を以て救ひ贖ふて其れをして脫ることを得せしめて衆生に命を施す。是れを施命と名づく。復た布施あり、若し法行の人貧窮にして乏短なれども、若しは一食を以て〔三二〕四禪人に施し、若しは惡人の人の命を斷たんとするを見れば、物を以て命を贖ひて其れをして脫ることを得せしむ。命を施し、法を施すは諸の施の中にて最も第一と爲す。是の人は二種の施を行ふ。亦た他人を敎へて二施を行はしめ、作すを見れば隨喜ぶ。是くの如く持戒せば命終りし後は三十三天の歌音喜樂の地に生まれ、善業の化せしを以て勝れし供養を得。其の地の園林は善業を以ての故に種々に莊嚴て、天の所住む處は一跡として善業の化せしものに非らずと云ふこと無く、一天として遊戲せざる者あること無く、一天として樂みを受けざる者あること無く、一天として是より沒せざる者あること無し。善業の盡くるが故に、退く時に自ら知るとも、猶ほ厭足なく、愛の繩に縛られ、愛に欺誑かるる所なり。帝釋天王は是の語を說き已りて、諸の天衆と園林の中に於て遊戲して樂みを受け給ふ。林樹の華果は種々に具足し、飲食の河は衆味を具足せり。諸の天衆と此の河邊に至りて歡娛て樂みを受け、復天女と往きて〔三三〕摩多鄰南の遊戲の處に詣る。時に、天帝釋は其の林樹を見て諸天に告げて曰まはく。『汝等よ。此の遊戲の處を見しや、不や』と。諸の天子の言はく『唯然り、已に見る』と。時に、天帝釋は諸の天子の爲めに本事の法を說き給ふ。『如我れ、昔し宿舊き諸天より是くの如く說くを聞けり。過去に佛有して、〔三四〕迦迦「居伽の反り」村陀如來と號し、此の林中に於て天

〔三二〕四禪人。第四禪定を修行する人。此の禪定を修めて第四禪天に生まる。禪定を見よ。

〔三三〕摩多鄰南。不明。

〔三四〕迦迦村陀。拘留孫佛(Krakucchanda)のこと。又、俱留孫佛、鳩樓孫佛、拘留秦、迦羅鳩飡陀、迦羅鳩村馱、羯洛迦孫馱、羯羅迦寸地、羯句忖那と作る。意譯して所應斷已斷、滅累、成就美妙とす。過去七佛の第四佛に當り現在の賢劫一千佛の最首なり。賢劫の中に、第九の減劫人壽六萬歲の時に出世せり。

り、還退きて地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し餘業あれば人中に生まれて當に安樂を受け、或ひは國王と爲り、或は大臣（又は）第一螺髪と爲り、其の心は審諦にして、人に諮奉せらる。多言をば好まず。衣服は鮮潔にして淨く垢汗なし。妻妾は貞潔にして、心邪曲ならず。好みて布施を行ひ、端直にして諂らず。兄弟、宗親に愛敬せられ、師長を恭敬し、賓客を愛樂し、樂みて布施を行ひ、持戒して自ら守る。性は香鬘を愛し、惡知識を遠ざけ、大姓に生まれて、端正殊妙にして種々に莊嚴れり。餘業を以ての故なればなり。

　復た次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第二十一地の名づけて歡音喜樂と名づくるを見る。衆生は何なる業にて此の地に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生ありて善心にて善業を、善き身・口・意にて善業を行ひ、自ら利し他を利して衆生を饒益す。心に慈悲ありて業を信ず。正見・正語にて二種の戒を持し、心は散亂せず、威儀を失せずして惡友に親まず。父母に孝養し、沙門・婆羅門を供養し、三種の善業を遍く行うて究竟せり。二種の戒を持して、殺さず盜まず。云何して殺さざるや。若し稻穀・黍麥に微細の蟲を生ずるも、擣かず磨せずして、其れに蟲あることを知れば、此の蟲の命を獲りて、轉人に與へず。復た殺生せざることあり。若し牛馬・駝驢の擔負ふところの脊壞れて瘡の中に蟲生まるに、若し漿水を以て此の瘡を洗ふの時に、草藥を以て此の蟲の命ちを斷たずして、鳥の毛羽を以て洗拭して蟲を取り、餘の臭爛せる敗肉の中に置き、其の命を全からしむ。此の驢牛を護りて其の命を害するを恐れ、復た蟲の命ちを護る。乃至蟣子をも亦た故に殺さず、若しは晝若しは夜放逸を行はず、心に殺すことを念ぜず、衆生を想ふことあり。若しは蟣、若しは蟻をも亦た故らに殺さず。是れを不殺と名く。云何して盜まざるや。幾種に盜まざるや。若し衆生ありて、蛇の蟲を食し、蝦蟇の蟲を食し、黃鼬の蟲を食するを見、若しは狗の野にて諸の衆生を取りて自から之れを食はんと欲するに、其の

【二】第一螺髪とは、第一の帝師、婆羅門のことか。

既に信じ已れば、無量の愛の爲に縛られ、忽然として便ち捨離られて猶ほ蛇の脱皮の如し。是くの如きは女人の性なれば、諸の方便にて供養するも、種々に守護するも猶ほ心に從ふべからず。女人の性は是くの如くにて、其の心は誠實なく、虚誑にして奸僞多く、智者の信ぜざる所なり。

時に、諸の天子は天帝釋の是の法を說き給ふを聞き已り、心に厭離を生じて頌を說いて曰く。

是の如し、是の如し。能く天王の說き給ふ所は如實にして、誠に虚ならず。我れは智慧なくして覺知らず。天女の網の爲に自ら心を縛りたり。

時に、天帝釋は此の偈を聞き已り、卽ち往きて鳥音聲林に詣るに、無量の宮殿を以て莊嚴を爲し、蓮華の浴池は林樹を莊嚴り、金色の山峰は融金の聚りの如し。種々の伎樂・歌頌の妙音あり、多くの種々の天女の眷屬あり。帝釋天王は此の林中に入りて天樂を受けんと欲し、諸根の境界にて五欲の樂みを受けぬ。復た往きて乾陀衆山の須彌の峰に詣るに七寶にて莊嚴り、其の河流の注ぐことは端嚴にして奇特たり。眞珠の瓔珞にて山峰を莊嚴るが如く、眞珠を沙と爲して河底に布き、河の兩岸に於ては多くの衆鳥ありて、妙なる音聲を出せり。此の河を見るものは皆愛樂を生ず。釋迦天王は諸の天女及び諸の天衆と種々に莊嚴て遊戲して樂みを受く。此の山峰に於て既に樂みを受け已りて、復た天子及び天女と、復た往きて周羅宮殿の遊戲の處に詣たる。既に此處に至るに、餘地の諸天は天主の至るを聞きて皆亦來りて其の峰に集る。宮殿は須彌頂に居り、高廣・嚴淨にして夜摩天の光りは照らして其の頂きに觸れ、須彌の色の如くに四天下に映ず。夜摩天の光りは此の山頂を照らして亦た復た是くの如し。夜摩天の光明に照らさるるを得るが故に、餘の宮殿於り千倍に殊勝たり。爾の時、天主釋迦提婆は此の宮殿に於て既に遊戲し已りて、諸の天子及び諸の天女と善法堂に還り、此の微細行天にて五欲の樂みを受く。乃至善業を受け盡くして命終

業を作せば三惡道に墮せん。樂みて善・不善を行ふに、欲に著すれば、癡に迷はされて、當に退沒べきことを知らずして、決定して死苦を受けんのみ。今此の善業の報は、樹の相を以て知るなり。　欲を厭離せずんば、　心は樂みの爲に迷はさる。　放逸を味んと欲する人は、心に常に境界を求めて、常に愛の爲に惱まされ、亦た愛の爲に縛らる。　欲は女人と共に生まれ、女人は甚しき惡しきものと爲す、能く熱惱を生じ、火の如くに衆生を害ふ。是くの如き欲は熱惱にして、大猛火より過ぎたり。　色は大熱惱の如くにて、衆生の心を焚燒く。　女人は世間を壞り、みな善を盡滅さしむ。　是れ地獄の因緣なり。　大仙は是の如く說き給へり。　口に善く美しき言を說くも、其の心は毒害の如くにて、誑詐して暫くも停ること無し。　女人の心は實なく、須臾にして愛心を起し、須臾にして心に愛せず。　其の心は暫くも停まらず、電の如くに久しく住せず。　巧智にして虛誑の人は心に貪れば則ち親近み、常に樂みの他人を思ひて、慢惰、恣態を懷くなり。　天人・[10]毘舍遮・羅刹・龍・夜叉は皆女色に縛らるる。　女人は惡毒の如くにて、恩惠を念はず、種姓、伎術に非らず。　女人の性は風の如くにて、其の心は停息らず。　若し大財富を見れば、心は則ち愛樂を生じ、又衰禍の至るを見れば之れを厭ひて捨棄る。　若し人ありて親近めば則ち愛樂の心を生じ、其の憂惱の至るを見れば須臾にして卽ち捨離つ。　蜂の華を樂みて遊び、萎を見れば速やかに、捨棄つるが如くに、女人も亦た是くの如し。　悅ばさせずんば則ち捨離り、惡心にて慈惠なく、躁擾しくして心は定らず。　愚癡人を破らん爲に女人は世に出づるなり。　天中の大なる繫縛は女色に過ぎるもの無く、女人は諸天を縛りて將に三惡道に至る。　若し心に女色を貪れば、是の欲は最も尤甚し。　女色の欲は心を燒きて、後に大苦惱を受く。　現在の作す所の業にて、欲を貪ぼるは自らの心を迷はすなり。　癡心なれば覺ること能はずして、女欲に迷はさる。　丈夫

【一〇】毘舍遮(Piśāca)。又、毘舍闍、辟舍柘、畢舍遮に作る。持國天の領する所の鬼の名なり。

を成就す。若し心に思惟すれば布施を行はんと欲す。是れを決定と名く。若し布施するの時は之を名けて業と爲す。若し施を行ひ已りて心に復た思惟せば是れを究竟と名く。是くの如きの人は一千二百の善業を造作して、命ち終りし後は善道の微細の地處に生まる。善業を行ひし人は彼の天に生れ已り、微細の業を作せし因縁を以ての故に、得る所の天身は其の念ずる所に隨ひ、巨細なることは心の隨なり。其の地の園林は七寶を樹と爲し、第一清淨にして自らの業にて成就す。其の七寶の林の長さ二十由旬にして廣さ十由旬なり。河泉・流水・園林を具足し、見る者は愛樂し、清淨くして無垢なることは猶ほし明鏡の如し。其の樹の枝葉は清淨無垢にして融金色の如く、金銀・瑠璃及び餘の種々の雜色の樹を以て園林と爲せり。天子は林に入り、諸の寶樹の枝葉の中に於て、皆悉く自らの身の色像を見るに、一樹の中にて自ら其の身を見るが如くにて、百千樹の中にて自ら其の身を見ることも亦た復た是くの如し。一一の天子の身の色相も悉く衆の樹に現れ、善業を以ての故に相ひ似たる果を得。其の樹に復た奇特る事あり、其の造作せる上・中・下の業に隨ひて此の天中に生れ、其の本の作りし上・中・下の業に隨ひて悉く樹中の根莖・枝葉に現はれて、皆な悉く覩見らる時に天帝釋は諸の天女と華鬘にて莊嚴り、其の殿の光明は晃曜きて大いに明るし。百日の和合して竝び照らすより勝れたり。微細行天は遙かに帝釋を見て、皆往き出でて迎ふ。到り已れば恭敬して帝釋に頂禮す。天帝釋に隨ひて還へり、林中に入りて五欲の樂みを受く。釋迦天王も亦た美しき言を以て諸天を慰問め、大善業を行ひ給ふ。其の林の衆鳥は美妙なる音を出し、眞金を樹と爲して園林を莊嚴れり。是の時、天王は業報を觀じ已りて頌を説きて曰はく。

　善業にて此の果を得。　種々の業を林は證す。　言說あること無しと雖も、善業を以ての報なることを知る。　種々の諸の果報は、處々に生死を受け、或は善或は不善なり。　故に是くの如き報を得たり。　若し人、善業を修めなば當に天中に生まることを得べし。　若し不善

を受け、互に共に思惟するに法・非法を以てす。此の善業の人は自から惡を作さず、亦た他人に敎へて惡を作さざらしむ。是くの如き人は遍く善業を修め、破戒者をして善道に住せしめ、人に正法を示し、正道に入らしめて善業を種ふ。其の人の心の淨きことは猶し錬金の如し。善業を行ひて現在・未來は安隱・快樂なり。是を不殺と名く。復た不殺あり。諸の衆生ありて邪見を以ての故に、諸の蛇蝎・百足・蚊虻・蚰蜒の類を殺し、是くの如き等を殺して、諸の果樹に熏じて園林の華果を繁茂せしめんと欲するも、持戒の人は則ち是くの如からず。生命を護るを以て、種々の果食に蟲のあるやを疑ひて、終ひに故さらに食せず。若しは水・酪漿の種々の諸飮にて諦觀に視ずんば終ひに之れを飮まず。經宿の水は若し細く觀ずんば細蟲の生ぜんことを恐れて、若し漉治さずんば飮まず、用ゐず。是れを微細に不殺の戒を持すると名づく。云何がして盜まざるや。[一九]盜まざることに復た幾種あるや。若し人、思惟して種々の稻穀・麻麥、種々の黍豆は我れ獨り成就せしめ、世間の人の五穀は登らずして我れ獨り成就せしめんことを欲し、常に是くの如き不善の思惟を作し、復た異時に衆生薄福にして、田稼收らざるに於て、是くの如き惡人は世の饑饉を見て心に歡喜を生ず。我が念ふ所の如くに市肆にて賣ることに於て心を曲げ、巧まく僞りて諸の穀麥を量り、人を誑惑して究意に業を成ず。若し心に思惟せば名けて思業と爲し、若し誑を作す時は名けて誑業と爲し、誑業を作し已れば究竟業と名く。是くの如き衆の過を捨離して作さざる持戒の人は、復た貧窮と雖も非法を爲して他人を誑惑さしめず。他の作す者を見れば心に隨喜ばず。若し饑饉の世には生を治し、利を求め、法の如くに販賣して衆生を誑さず。是れを不盜と名づく。是くの如き善人は云何して布施するや。善心にて善行をし、自らを利し他を利し、自身は貧窮なれども勤苦て財を得、若しは他人より常に財物を乞ひて、得已れば貧苦の疾病、困乏の人に布施す。若し三禪を學べば三禪人より得、他より求索め、勤窮して得已れば而も布施を行ふ。是の人布施の三業

【一九】盜の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮に依る。

して山林の園林を皆な悉く之れを見て、自からの地に還へる。既にして本宮に至りて、園林中に於いて歌舞し、戯笑して種々の樂みを受け、五欲にて自ら娯しむ。欲樂は心を覆ひて、長遠なることを覺らず。復た往きて娑羅摩山に詣たるに、其の山の縱の廣さ五由旬あり、高さ十由旬にて、或は宮殿に乘り、或は飛鳥に乘りて此の山に昇る。種々の寶柱を以て莊嚴と爲し、種々の河池は七寶の莊嚴にして、如意寶樹の光燄は騰赫る。種々の伎樂にて歡喜して相ひ娯しみて、自からの業果を受く。放逸を以つての故に多時を經るとも覺知らず、樂みに迷はせらるる爲めに厭足ことを知らず。復た往きて優鉢羅林に詣るに、此の林中に於いては百千の衆蜂を以つて圍遶る。林中に入りて共に美飲を食し、歌舞して樂みを受けて厭足なし。復た往きて遊戲の處に詣たるに名けて無垢と曰ふ。百々千々の衆樂の音聲にて、共に相ひ娯樂して厭足かず。諸天は放逸にて五欲の樂みを受く。乃至善業を受け盡くし、命ち終れば還退きて地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し餘業あれば、人中に生まれ、顏色に光澤あり、主上に貴重せられ、第一の富樂にして聰慧く明了なり。餘業を以つての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以つて第二十地の微細行と名くるを見る。衆生何かなる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以つて此の衆生を見るに、善法を修行し、自ら利し人を利して衆生を誑らかせず、衆生を惱ませず、質直に修行して善業を行ひて樂しき果報を得る。清涼き業を作して清涼き報を得、善業の樂報にて一切衆生に供養せられ、衆人に愛せられ、現在・未來は安樂にして利益あり。若し此の身を捨てて未來世に至れば、作せし所の善業は猶ほし父母の如くにて、如實の爲めの故に無量の樂みを受け、不殺・不盜にして亦た他人に敎へて不殺を行はしめ、偸盜を行はしめず。若し復た人ありて殺生し、偸盜すれば共に同止せず亦た與に同じく住せず。持戒して善を行ふ人に親近み、其れと事業を同くし、遊戲して樂み

へ、種々の寶幢に衆寶の幡懸かり、金銀・玻瓈・赤寶にて莊嚴れる種々の諸の柱あり。或は鵝鳥あり、或は鳩鴿あり、或ひは命々鳥、或ひは鴻鴈ありて、以て莊嚴を爲せり。是くの如き等の種々の衆鳥ありて其の殿を莊嚴り、天衆は殿に昇り、善業を以つての故に、諸の天女と迦毗羅大林に向ひて飲食の處に詣る。到り已れば卽ち下りて天の甘き饍を食す。食し訖りて園林中にて遊戲し、種々の樂音にて遊戲して樂みを受く。多時を經るも心樂みに著するが故に、長遠なるを覺らず。復た往きて一切見林に詣りて高峰に昇りて衆林を見んと欲す。餘の天衆と共に還りて、化殿に昇りて種々に歌舞し、種々に戲笑して互に相ひ娛樂み、心を同ふして樂みを受く。既にして一切見林に至りて峰上に住す。須彌山王の一面を見るに、多くの園林ありて以つて莊嚴を爲せり。其の華の光色は融金の聚りの如くにて、光明は焰を騰ぐ。種々の河泉・流池・濟處には美飲の河、種々なる食の河あり、無量の天女は種々に莊嚴りて以つて園遶を爲せり。其の須彌山は諸の世間を持し、六萬の衆山の中に處し、六萬の衆山を以て圍遶かれ高峻にして廣大なり。天・龍・夜叉・阿修羅・緊那羅[一七]の所住の處にて、善業の諸天の依止する所なり。種々の善業の果報を得る所にして四寶にて成就し、一一の住處は種々の衆色を以つて莊嚴と爲せり。皆な悉く之れを見て互に相ひ歡娛び、欲心にて放逸し、種々の美言にて共に相ひ調戲れ、上・中・下身にて遊戲し行食す。既でに此れを見已りて是の念を作さく『我れ獨り五欲の樂みを受くるに非らず、亦た復た多く其の餘の諸天ありて諸の天女と遊戲して樂みを受け、是くの如く種々の色、香の如意の樹の園林を莊嚴れるを見るなり』と。爾の時、諸天も復た餘地を見る。一を高聚と名づけ、二を大高聚と名づけ、種々の河流を以つて莊嚴を爲せり。若し日月の此の山頂に行きて彼の二山を觀るに、此の日中に於いて百千身を見ることは羅睺阿修羅[一八]の如くにて、手にて日光を障ることは前の所說の如し。爾の時、天子は復た空中に於いて徘徊ひ旋轉り、山王を觀じ、諸の天女を娛樂して樂みを受け、歌頌の音聲あり。宮殿に住

【一七】緊那羅(Kiṃnara)。緊那羅を見よ。樂神の名にして、八部衆の一なり。

【一八】羅睺阿修羅(Rāhuasu-ra)。具には羅睺羅阿修羅と云ふ。四種阿修羅王の一。羅睺羅は執日と譯す。此阿修羅は帝釋と戰ふとき能く其の手を以て日月を執て其の光を障蔽する故に名く。

何がして布施するや、貧窮して少財なるとも財物を捨てて【一三】三禪の人に施し、自から飢の苦みを忍びて他人に施與するに、慈悲心にて施し、己のが子を愛するが如し。云何がして持戒するや。衆生を殺さず、若し屛廁を治するに衆生を殺害せんとせば敎へて作さざらしめ、其れに水漿を施し、還らして穢なき處に置きて、命を害さざらしむ。是れを不殺と名く。善業の人此の善業を作し、命ち終れば三十三天に生まる。善業の人は彼の天上に生まれて五欲の樂み、天の伎樂の音を受け、種々の天女を以つて圍遶を爲し、比なきの樂みを受く。今此の天の爲めに少分の喩を說かんに、【一四】金輪王の受くる所の樂みの如きは天の樂みに比するに、十六分の中にて其の一にも及ばず。受くる所の天身には骨も肉もあることなく、亦た垢、汗もなし。嫉妬を生ぜず、其の目は、眴かず、衣には塵、垢なく、煩霧あることなく、亦た大小の便利の患も無し。其の身の光明は轉輪聖王も都て此の事なし。己れの妻子に於いても偏りて攝受らずして嫉妬を離れたり。飲食は自在にして睡眠こと有ることなく、亦た疲極も無く、轉輪聖王にも都て此の事なし。是の因緣を以て轉輪王の樂みも十六分の中にて其の一にも及ばず。故に人中を以つて少分の喩を說くのみ。是くの如く次第に五欲の樂みを受く。一園林ありて【一五】迦毗羅と名く。長さ十由旬にして廣さ五由旬なり。皆な金鳥を以て莊嚴り、無量の衆鳥は遍身衆寶を以つて莊嚴と爲し、妙へなる華の光明にて園林を莊嚴れり。七寶を樹と爲し、林には衆鳥ありて光明に殊勝れり。人の種々の莊嚴を著けては轉た勝妙を增すが如くに、種々の衆鳥の天樹を莊嚴ることも亦た復た是くの如し。復た天子ありて此の林中に於いて種々の華を以て遊戲して娛樂む。其の華は皆な毗瑠璃寶を以つて莖、葉及以華の鬚と爲し、赤蓮華寶を以つて華の臺と爲せり。其の華の香氣は十由旬に滿ちて一切の華より勝り、天は此の香を聞きて十倍に樂みを增す。復た天女と迦毗羅に於いて飲食の河に向ふに、念ふに隨ひて卽ち【一六】生ず。高大の殿には種々の欄楯・樓閣・門戶ありて、種々の寶鈴・種々の寶臺は眞珠の羅網を以つて其の上を覆

【一三】三禪(Tritiyadhyāna)。禪定を見よ。此の第三禪定を修して三禪天に生まる。

【一四】金輪王。四種轉輪王の一なり。金輪を有する聖帝。帝王を尊びてかく云ふことあり。

【一五】迦毗羅(Kapila)。地名。

【一六】生の字、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

第十九地の名けて如意と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて此の地に生まるるや。彼れ聞慧を以つて衆生あるを見るに、正見なる心を以つて業の果報を信じて堅く正見に住す。其の心は質直にして、衆生を惱まさず。父母に孝養し、法に順じて修行し懈怠せず。三寶の佛・法・衆僧を恭敬し、殺さず、盗まず、他に作すことを敎へず、亦た隨喜ばず、他の作すものを見れば、勸めて作さざらしむ。諸の衆生の爲めに業の果を說きて善道に住せしめ、不殺・不盗ならしむ。若し衆生の持戒せざる者あれば、敎へて戒に住せしむ。若し人持戒すれば敎へて堅く住せしむ。是くの如き人は自から利し、他を利して、命ち終りしの後は善道の三十三天に生まる。云何がして殺生せざるや。若し是の衆生は他の衆生乃至蟣子・蚊・蟻の類を知れば故さらに命を斷ず。是れを不殺と名づく。諸の衆生ありて[八]瞿陀鼠狖兎等を殺害するに[九]罝羅・[一〇]罟網・機陷を安置するも、勸めて作さざらしむ。復た異る人ありて、惡の方便を以つて諸の[一一]羂弶を作り羅網を張設りて鳥獸を捕獵し、種々の殺具にて衆生を網漉して、其れをして命を斷たしむるに、是の持戒の人は勸めて放捨さしむ。是れを不殺と名づけ、他の衆生をして善道に安住せしむ。云何して盗まざるや。乃至草葉にも盗心を起さず、他の偸盗するを見れば勸めて作さざらしむ。復た衆生ありて非法を行ひ、若しは佛塔に於いて、若しは[一二]精舍に於いて諸の音樂を以て佛塔を供養し、復た異る人ありて亦た其の中に在り、歌舞して自から娯しむ。或は女人と歌舞し戯笑して歡喜を生じ、或は僧寺に於いて若しは客の伎人を作し、或は衆の伎樂を鼓して佛塔を供養するに自からの活命を以つて諸の音樂を作し、此の人をして他の作りし樂をなさしめず。是れを不偸盗と名く。復た偸盗あり。或ひは淫女に於いて初めに多くの直を許し、後に酬ひを少しの價とす。是れを偸盗と名く。復た偸盗あり。酒を酤る居兒の販賣するものあるに、市にて買ふに、價を決めるにも本の直に酬ゐず。是れを偸盗と名く。是くの如き殺生、偸盗を持戒の人は悉く捨てて爲さず。作すを見るとも喜ばず。心にも亦た念ぜず。云

【八】瞿陀。慧琳音義第二十六に依れば「瞿陀身を鮫魚」とす。
【九】罝(シヤ)。あみのこと。獸類特に兎を捕へる網なり。
【一〇】罟(コ)。あみのこと。禽獸及び魚類を捕へる網なり。
【一一】羂(ケン)。わななり。繩又網等を獸類の足にひきからませて捕へるしかけ。
【一二】精舍。寺院の異名なり。此の名は祇園精舍より來ると云ふ。

其の音は美妙なり。天衆は之れを聞きて大歡喜を生ず。其の林に復た行列の莊嚴ありて、種々の色の林を以つて行列を爲せり。青・黄・朱・紫は閻浮提にて電光を觀るが如し。其の林は是くの如き行列にて莊嚴て、河津の華池は林園を莊嚴れり。是くの如き功德具足の林にて天子は之を見て、心に大いに歡喜び、諸の天女と彼の林中に至る。餘天は之れを見初めて生れし天子の我が所に來らんと欲するを知り、皆な起きて往き迎ひ、互に相ひ慰問し、美言にて稱讃し娛樂して樂しみを受く。伎樂の音にて種々の蓮華林中にて遊戯し、久しく一切見林に於いて五欲の樂みを受く。復た此の林を捨て往きて樂行遊戯の處に詣る。其の遊戯の處は種々の欄楯を以つて圍遶らし、長流の美飲あり、七寳の宮殿は行列して林の如し。眞金を地と爲し、種々の衆鳥は妙へなる音聲を出し、舞戯して自から娛しむ。河池の流水は其の音美妙にして、河流を飲食し、色・香・味を具せり。天子は中にて遊び五欲の樂みを受けて自から娛しむ。諸の天女と種々に莊嚴り天の善業を受けて、久き時を經るとも、放逸を以つての故に覺知らず。是くの如くに天子は五欲の樂みを受け、業盡きて還退く。放逸は心を覆ひ退沒ことを觀ぜず、愛に心迷はされ、欲火に焚燒れ、心は欲樂に著して覺知らず。若し衰相現れば怖畏を成就し、無常變を見ては決定して必らず退き、爾乃心覺るのみ。是くの如く天子は樂みて放逸に著す。乃至善業を受け盡くして、命ち終りて還退き、業に隨ひて流轉す。地獄・餓鬼・畜生に墮ち、若し餘業あれば人中に生まれ第一の樂を受け、財寳を具足す。端直にして諂らず、中國に生まれて邪正の行を識り、法・非法を知れり。一切の善人の法に順ずる の處、報恩を知る處の中に生まる。一切の人の爲めに樂見まさる。一切の長幼は皆な愛敬を生じ常に病の惱みなし。端正なること第一にして、大力にて畏れ無く、一切を安慰む。妻子を具足し所有する財物は王・賊・水火も侵し奪ふこと能はず。餘業を以つての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以つて三十三天の

樂を受けんと欲す。是れを第二の生欲の因緣と名く。復た第三の生欲の因緣あり。心諸根に使はれ境界を貪り、心に緣ずることは自在なり。天子は心に諸の天女に觸れんことを欲し、天女は身を以て亦た天子に觸る。是れを第三の生欲の因緣と名く。復第四の生欲の因緣あり。無量にして等しきものの無き香の薫りの氣は譬喩すべからず。天子は之れの何所より來るかを觀ずれば、卽ち此の香の天女より生ずるを知る。便ち欲心を以つて天女を抱持きて、等しきものなき香を齅ぐ。是れを第四の生欲の因緣と名く。四境界に於いて心は樂みに愛染す。時に、諸の天女は種々の飮食、須陀の味を以つて天子に供養す。是れを第五の生欲の因緣と名く。是くの如き譬喩すべからざる生欲の因緣にて、五欲の境界に於いて初めて天樂に著す。是くの如くにして天子は天の樂報を受く。初めて生まれし時、宿命を憶念すれども欲樂に著せしを以て、皆な悉く忘失たり。復た欲心を以つて往きて天女に詣たる。天女も亦た來り天子の所に向ひ、歌舞し戲笑して互ひに相ひ娛樂す。天子の所に至りて調戲れ、愛語し、歡娛びて樂しみを受く。復た往きて園林の華池に向ふに、天女の身に種々の莊嚴を著せり。復た天子と一切觀意樂園林・一切見林の一切地天の遊戲の處に往くに、其の林の諸の樹は意念を具足して無量に莊嚴れり。金樹の銀葉は赤寶を枝と爲し、玻瓈を果と爲し、色・香・味を具せり。是くの如き等の無量の諸の樹ありて園林を莊嚴れり。復た異林ありて以て莊嚴を爲せり。毗瑠璃樹は眞金を枝と爲し、赤寶を葉と爲し、白銀を果と爲して硨磲にて莊嚴れり。復た異る樹ありて一肘量に於いて[七]、七寶の莊嚴ありて、所謂金銀・赤寶・毗瑠璃寶・硨磲にて莊嚴れり。復た樹の枝ありて一肘の量に七寶にて所成る華果を具足し、天華にて莊嚴れり。其の華は種々の色香を具足せり。其の香は周遍りて六由旬に滿つ。種々の色の蜂は諸の華の汁を飮む。是の一切見意樂の林は是の如き諸の樹を以て莊嚴を爲し、種々の白業にて斯の果報を受く。復た蓮華を以つて莊嚴と爲し、毗瑠璃の莖は眞金を葉と爲し、赤寶を鬚と爲し、靑因陀蜂を以て莊嚴と爲して、

【七】七の字は明本に依る。

人に布施す。心に敬重を生じ、諸根は悦豫びて之れを施與す。或は此の物を以つて[五]二禪の人に施し、或ひは貧者に施す。是れを布施と名づく。云何がして殺さざるや。若しは諸の獵師の羅網にて鳥を捕へ、若しは人の魚を捕ふるに、其の人之れを見ては物を以つて命ちを贖ひ、還へらして脫れるを得しむ。思惟して歡喜して諸根は悦豫ぶ。亦た他人に敎へて生命を贖はしめて心に隨喜を生ず。我れは善業を爲して恒に修習するを願ひ、亦た他人をして善法を修行せしむ。是くの如きの善業は不殺・不盜にして自ら利し他を利するなり。是くの如き二種の持戒の利益は自利し他を利して、命ち終れば三十三天に生まれ、種々なる[六]厠塡莊嚴の殿にて中に於いて生まる。善業の人は此の天に生まれ已りて、種々の摩尼の光明は晃曜きて厠塡莊嚴す。其の身には光明、種々の色衣あり。種々の天女は種々の衣服にて其の身を莊嚴り、住して其の後に在り。初めて生まれし天子は是くの如き念ひを作さく『我れ何かなる業を以てして此處に生まれしや』と。自から前生を念ずるに、善業を修めしが故に來りて此の天に生まる。卽ち自から歎じて曰く『奇なるかな善業。我れ修行せるが故に來りて此處に生まれり』と。是くの如く天子は既に思惟し已りて、善業を以つての故に初めて樂音を聞く。天女の歌音は一切處の山峰・宮殿に遍く、美音は充滿てり。禽獸は率に舞ひて、此の歌音を聞き百倍に樂みを受く。初めて此の音を聞けば、心に樂みに著することを生ず。是れを第一の生欲の因緣と名く。既に聲に著し已りて、心に復た念ひを生ず。是の衆色を欲して、卽時に迴顧て諸の天女を見るに、無量の色相は譬喩すべからずして、莊嚴を具足せり。是れは誰れの天女なるか、誰れの所攝なるかを、心に既に念じ已れば欲心は卽ち生ず。是の時天女は頌を說きて曰く。

　種々の欲の因緣には、我れ最も第一なり。　我れ今天子を奉じて遊戲して種々に樂まん。

爾の時、天子は既に歌音を聞きて、又た美しき色を見る。卽時に身を廻らして天女の邊に至りて觸

【五】二禪。色界の禪定に四重あり、是れ第二重の禪定なり。定心微細にして、尋伺の心所なく、三受の中には喜樂の二受を感受するもの（初禪を見よ）。

【六】厠塡莊嚴殿は厠は側にて周圍を塡める莊嚴の殿の意か。

を受け盡くして、命ち終りて還退き地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれば常に安樂を受け、常に華鬘・塗香・末香を愛し、大富・饒財にして、直心・善心にして、一切衆生に樂見され、其の言を信受せられ、衆人に愛せられ、妻子を具足す。善く禮儀を行ひ、儀式を失せず。所有の財物は王・賊・水火も奪ふこと能はざる所にして、王に供養せられ、大種姓に生まる。餘業を以つての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て、第十八地の雜莊嚴と名づくるを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以つて見るに、持戒の人は殺さず、盜まずして、亦た他人を敎へて善道に住せしむ。云何して殺さざるや。衆生を惱まさず、自から殺害せず、他に殺すことを敎へずして亦た隨喜ばず。亦た殺生する人を親友とせず、乃至語言を交接ことを與へず。他人の不淨の語を聽かず、路を同うして行かず。復た殺さざることあり、諸の衆生あり、或は歌音を以てし、或は琴樂の音・箜篌・蕭笛にて諸の禽獸を誑して、網の陷に墮せしむ。此の持戒の人は是くの如き方便にて殺害を作さず、亦た他人を敎へて不殺を行はしむ。他の作す者を見れば贖なひて脫れることを得せしむ。心に殺すことを念はず。是れを不殺と名く。云何がして盜まざるや。或ひは衆生ありて虛妄にして誑詐し、商買して財を求めては非法を行ひて、種々に偸盜す。云何がして誑詐すや。或ひは碎沙・雜餘の財物を以て稱して之れを賣る。其の非を爲すを見ては勸めて作さざらしむ。方便して敎へて言く『妻子、自身の財物、惡友の因緣を以つて偸盜を作すこと莫かれ。若し偸盜を行へば、地獄・餓鬼・畜生に墮し、偸盜の果報にて大苦惱を受けん』と。是くの如く自ら惡を作さず、亦た他人に勸めて惡法を離れしむ。因緣既に至れば能く捨てて取らず。是くの如き人は自からを利し人を利す。云何がして布施するや。或は大海に入り、大曠野を過りて以て財物を求む。或は他人の傭力に從つて財を求めては、貧窮・苦惱の

妄にして堅からず。諸の欲の虚誑なるは、幻の水沫、甄婆迦果「海の渚さに生じて、食へば七日酔ふなり」の如くにて、欲の衰惱と爲るは、火の人を害するが如し。若し欲の過を知りて酔果を貪ずんば、能く實諦を見て、永く愛惱を離れん。諸の欲は毒の如くにて、未だ得ずんば思念し、之れを得ば自から惱みて衆の惡熾然たり。欲は厭足なく、天樂を退失ひて地獄に墮するのみ。欲に由れば誑らかされ、欲は水波の如く、電の如く、燈の如し。女を欲するは毒の如く、魚の〔四〕迴旋るが如くにて、思惟して增長することは火の薪に益すが如くにて、初めも後も安からず。智者の棄つる所にして、若し習近ふものあれば、展轉增長かん。

觸は火餤の如くにて、欲の苦報を受けん。此の欲の過を知りて、智人は厭ひ捨つ。欲を離れし人は、涅槃の樂みを得ん。無數千萬の那由他の天は、欲を習ふて墮落して、地獄の苦しみを受くるなり。欲火は刀毒にして、樂しみを求むるを應さに捨つべし。常に應さに欲を捨つべし。地獄の因を未だ見ざる人あれば、欲の爲めに使はれず。欲を習ふことあること無くんば、苦惱を受けず、是の故に欲を捨てて、心に念ひを生ずること莫かれ。一切の諸の欲は、火の熾然たるが如し。

是くの如く比丘、諸の天子の欲の爲めに使はるるを觀じ、偈を說きて放逸の諸天を訶責む。復た一切意樂の園林に詣りて、衆の伎樂を作し、諸の天女と種々に莊嚴れり。彼の林中に入りて、樂の音聲にて歌ひ歡娛して樂みを受く。無量の河池にて園林を莊嚴り、處々に皆な種々の妙色を見る。是くの如くに眼根には色欲を受け、又た憶念に隨ひて衆の妙音・種々の愛聲を聞き、鼻には種々の上妙の愛香を聞き、舌には種々の殊異し味を得る。心の念ずる所に隨ひて皆な悉く之れを得、心の念ずる所に隨ひて種々の觸を得。身も心も悅樂みて、意の念ずる所に隨ひて樂法を成就す。是くの如く天衆は愛の爲めに覆はれ、放逸に遊戲し、心の念ずる所の如くに五欲の樂みを受く。乃至善業

【四】迴旋は、宋、元、明三本及び宮本に依る。

り歌舞し戲笑し、鼓樂・絃歌・簫笛・箜篌の種々の樂器にて、諸の天子と娛樂して樂みを受く。華池を圍遶りて、久しく天樂を受く。復た華池ありて一切意樂遊戲の處と名づく。天鬘にて莊嚴り、旃檀にて身を塗り、散ずるに末香を以てし、身には光明を出だせり。其の自から作りし上・中・下の業の因緣力を以ての故に、心の樂む所に隨ひ三種の報を得て、業に似て意を生ず。若し人、是くの如きの業を造作れば是くの如き果を得ん。眼識は色を緣じて樂心を生ず。何を以ての故なれば、若し下業を作れば、等き色の中に於いて、下色を作すを見るなり。其の人は是くの如く一緣中に於いて下色を見る。若し中業を作せば則ち中色を見、中樂の心を生ず。若し上業を作せば則ち無量の種々の妙色を見、形相端嚴なり。是くの如き一切の聲・香・味・觸も亦た復た是くの如し。目の緣ずる所の欲界の天中の一切の諸地も皆な亦た是くの如し。若し是くの如からずんば三種の報は則ち成就せず。當に知るべし。是くの如き三種の業は、是の妙色を得て端正に莊嚴て、天女は殊勝れしを。此の諸の天衆は一切意樂の園林の中に於いて、遊戲して樂みを受く。色・聲・香・味・觸等に貪著して厭足ことを知らず。比丘觀じ已りて頌を說きて曰く。

劫の盡くるときは日餤えて、大海を乾し竭くすなり。億百千劫も貪愛は滅せず。諸の水雨等にて海は尙ほ滿す可し。貪欲の海は、愛色にても厭くこと無し。諸樂を憶念しては欲を滿たすべからず。若し憂愛を離れなば、欲は則ち止足まんのみ。樂みは欲に從つて生ずるも、智者は樂しまず。欲を離れし樂みは、樂み中の最勝なり。雜愛の樂みは、雜毒の水の如し。若し愛欲を離れなば、水と乳と合するが如し。欲は癡かなる人を燒き、盲冥にて覺ることなし。摩羅耶の山蟲は木を食するが如く、愛欲を憶念すれば、念は數ふべからず。念ずることは厭足こと無く、死王に縛らるるなり。欲の爲めに使はれず、愛境に任せずんば、是の人は樂みの器にして、如來の說き給ふ所なり。夢に見る所の如くにて乾闥婆城は虛

なれば衆の像を照し、顯はし一毛を析き以て百分と爲すとも、此の鏡中に於いて皆な悉く了見す。此の天の地中に、諸の天子の一切の身分を見ることも亦た復た是の如し。彼の明鏡の清淨くして無垢なるが如くに、其の地の清淨きことも亦た復た是くの如し。其の地に復希有しき事を生ず。若し諸の天女の心に念ずる所ありて、天子をして共れと共に遊戲せしめんと欲すれば、天子は卽ち住する所の地中に於いて自から書字を見て、卽ち天女とともに遊戲して樂みを受く。其の地に復た希有しき事あり。若し天一切の須る所を憶念すれば、皆な地從り生ず。是の如く三十三天は柔軟の地に於いて、天の快樂を受く。復た往きて遊戲の處に詣たる。其の遊戲の處に大園林ありて[一]摩偸迦と名づく。鈴網は彌覆し、無量の寶樹を以て莊嚴と爲す。彼の林中に於いて種々の衆鳥・華果を具足し、五樂の音聲にて遊戲して樂みを受く。五根の境界にて、果報の樂みを受く。其の地中に於いて復た林樹あり名けて[二]婆羅と曰ふ。若し諸の天衆の此の林に入りて、遊戲するの時に、樹は則ち變じて小さくなり、諸の天女をして果を取るに難からしむ。其の林は皆な是れ七寶にて成ぜし所にして、光明は晃曜き日の初めて出でしが如く、以て莊嚴を爲せり。無量種の色の華果にて莊嚴り、種々の色の鳥は妙へなる音聲を出し以て莊嚴と爲せり。是くの如き衆鳥は林中に住して衆の妙聲を出し、此の林中に於いて六欲の樂みを受けて歌舞し戲笑す。此の林を捨て已りて、復た往きて遊戲山峰に詣たる。名けて高聚と曰ふ。往きて彼の峰に至り諸の天女と種々に莊嚴て、歌舞し戲笑す。高聚の峰に昇るに、其の峰の周匝の廣さは十由旬なり。其の山峰の上に大華池あり、名けて光明と曰ふ。七寶華・[三]拘牟陀華・[四]倶迦那陀華・[五]靑優鉢羅華を以て池中に充滿せり。其の水は清淨くして、鵝鴨・鴛鴦は衆妙の音を出して甚だ愛樂すべし。天子・天女は華池を圍遶りて、歌舞し戲笑す。天味を飮むも醉亂あること無し。六味の果は、念ずるに隨ひ之を食す、其の汁は香美にして之れを飮むとも失することなし。天子・天女は皆な共に之を飮む。復た異處に於いて諸の天女あ

【一】摩偸迦(Madhuka)。美飲と譯す。密なり。今は樹の名なり。

【二】婆羅(Bala)。力と譯す。

【三】拘牟陀華。拘物頭華を見よ。

卷の第二十九

觀天品第六之八

三十三天之五

復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て第十七地の名けて柔軟と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼の天中に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、持戒の人は殺さず、盗まずして此の天中に生まる。云何がして殺さざるや。諸　の衆生あり、財利を貪る爲めに恣ままに五欲を足し、毒蛇の命ちを斷つて其の寶珠を取り、以て自らの命に供ふ。持戒の人は此の事を爲さず。是れを不殺と名づく。亦た他人を教へて不殺を行ぜしめ、乃至蚊蟻の微細の衆生をも亦た故　に殺さず。云何がして盗まざるや。盗心を以て人の草土を取らず、乃至微細なるをも亦た故らに取らず、乃至他人の所有の書　記　を盗心を以て書寫し自から用へず。是れを不盗と名く。云何がして布施するや。是の持戒の人、貧窮して乏財なるも、貪心なきを以て身の資分を減らして、初禪人に衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の具を施し、或は一食を施し、或は僧寺に於いて僧地を平治して僧の去來をして安隱無難ならしむ。是くの如く自ら布施を行ひ、亦た他人をして善道に安住せしめ、他人を勸すめて惡業を捨てしむ。是れを持戒の人の不殺・不盗にして、自ら利して他を利するとす。是の因緣を以て命ち終れば三十三天に生まる。此の天に生まれ已りて、天の快樂を受く。其の地は皆な柔軟の天繒を以て敷具と爲して遍く覆ひ、其の地は柔軟滑澤にして、若し天の上を行けば足の上下するに隨ふ。足躡めば則ち偃き、足を擧ぐれば隨ひて平かなり。譬へば大風の水を吹きて波起り高下して定まらざるも、風止まれば則ち平かなるが如し。其の地は清淨くして、猶ほし明鏡の如くにて、若しは工師あり、若しは工師の弟子、善く能く鏡を磨がき、瑩拭して明淨

熾を增す。諸天の色・聲・香・味・觸を愛することも亦た復た是の如く厭足ことを知らず。此の天中に於いて五欲の樂みを受く。乃至善業を受け盡くして、命ち終りて還退く。業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮し、若し餘業あれば人中に生まれて常に快樂を受く。華鬘・塗香を以て莊嚴と爲し、全に末香を以てし、心は常に歡悅ぶ。或は王者と爲り、或は大臣と爲り、大富・饒財にして一切人に愛敬せらるる所と爲る。怨敵あること無く亦た病の惱みも無し。餘業を以ての故なり。

して樂みを受く。復た往きて行列せる宮殿の遊戲の處に詣る。其の諸の宮殿は七寶を柱と爲し、金銀・瑠璃・硨磲・玻瓈を以て莊嚴と爲せり。其の地に多くの種々の天女ありて遊戲して樂みを受く。天寶の莊嚴、天栴檀末を以て、其の身を塗りて共に相ひ娛樂むも嫉心を起さず。互に相ひ愛樂するも妬む心を離れ、自からの業果を受け種々の地中に、種々の業を以て其の中に生まる。自からの業の果を受け遊戲して樂みを受く。復た往きて如意の樹に詣る。其の樹の勢力は、天の念ずる所に隨ひて悉く皆な之れを得。此の林中に於いて、飲食の河流は、第一の色香・衆味を具足せり。歡喜の心を以て河中に遊戲して須陀の味を食す。既に飲食し已りて百倍に悅樂む。復た往きて青蓮華林に詣たるに、其の華は第一の色・香・味を具せり。華葉中に於いて摩偸の美味の飲を流出することは、猶ほし酒糟の如し。酒は流れ出で、其の色は青綠にて〔二四〕分陀利の如し。黃分陀利は黃色の飲を出し、瑠璃色の華は瑠璃色の飲を出し、玻瓈色の華は玻瓈色の飲を出し、硨磲色の華は硨磲色の飲を出し、雜色の華は雜色の飲を出せり。雜色の葉の華は毘瑠璃を莖とし、金剛を鬚と爲せり。是くの如き種々の諸の飲は華より流出して、香・味は第一なり。諸天飲み已り復た往きて一切觀林に詣たる。遊戲し娛樂して此の林中に到り、悉く一切の三十三天の住する所の地を見る。一切觀林は甚だ愛樂すべく、此の林中に於いて蓮華池あり、名けて普流と曰ふ。廣さ三十里にして、淸淨き水は湛然として充滿ち瑠璃色の如し。鵝鴨、鴛鴦は周匝を圍遶て、一切の衆鳥は皆な金色の如し。七寶を背と爲し、珊瑚を足と爲し、赤寶を目と爲して雜寶にて莊嚴れり。其の音は美妙にして遊戲し舞抃ふ。時に、諸の天子は遊戲の處に詣たり、金色の鳥は妙へなる音聲を出せり。天子は金殿の上に昇り、其の殿の光暉は融金の聚りの如し。各相ひ謂ひて曰く『汝、諸天の遊戲の處を見よ。諸の天衆をして其の身の光明を黃色に轉ぜしめ妙なること兩倍に過踰えしめり』と。此の殿中に於いて遊戲して自ら娛しむ。五欲の樂みを受け、境界に貪愛して厭足こと無し。火の薪に益すが如く、轉じて更らに

〔二四〕分陀利(Puṇḍarika)。白蓮華と譯す。

ばず。勸めて善道の中に安住せしむ。是れを不殺生と名づく。云何して盜まざるや。若しは此の善人、淸淨き心を以て心を直し、戒を持するに貪心を以てせず。或は佛の塔廟、或は僧中の燒香の處に於いて香氣を齅がず、方便を以て其の衣をして熏ぜしめず。若しは香の鼻に至るとも、心は貪著せず。是れを微細なる不偸盜の戒と名づく。他の作す者を見れば、勸めて作さざらしめて善道に住せしむ。是くの如き衆生は自ら利し人を利す。何等の心を以て衆生を利益するや。殺生する者を見れば己のが兒の殺さるるが如くにて、諸の蟲蟻を觀るも亦た復た是くの如し。亦た他人を教へて善道に住せしむ。云何がして布施するや。若しは貧窮の人、勤苦して財を得、以て布施に用ふ。持戒の行人、[三]初禪を得る者は、器に在るの食の半分も之れを施す。亦た他人に教へて布施を行はしむ。是くの如きの人は自らを利して他を利す。命ち終りし後に鬘影天に生まる。旣に天に生まれ已りて、樹を鬘影と名づけ、其の光明の輪は園林を周遍れり。其の樹の華の香は一由旬に滿ちて、餘の華香より勝れり。其の華は脩長にして、若しは一華を以て則ち首鬘を成す。其の華は雜色にして、種々に莊嚴り、靑・黃・赤・白は繁茂して鮮榮なり。復た園林に於いて五欲の樂みを受け、伎樂の音聲は欲樂を具足せり。心の念ずる所に隨ひて、皆な悉く成就せり。種々の殊異たるを無量に成就せり。善業を以ての故に一切成就せしなり。復た林中に於いて蓮華池あり、名づけて雜華と曰ふ。大勢力ありて諸の蓮華を生ず。華は常に開敷き、七寶の色の蜂を以て莊嚴と爲し、蓮華池中の種々の衆蜂は妙へなる歌音を出せり。天子・天女は蜂の歌音を聞き、皆な大に歡喜ぶ。共に相ひ謂ひて曰く。『奇なる哉。此の蜂は妙へなる歌聲を出して我が心をして悅こばしむ』と。是くの如くに衆蜂は衆の妙音を歌ふ。復た鵝鳥あり、皆な其の翅を以て蓮華池を扇ぎて、華をして勃起せしめ、黃金色の如く遍く池水を覆へり。鳧鴨は之を見て歡喜びて走り趣きて妙へなる音聲を出す。是くの如き華池に多くの衆鳥あり。天子・天女歡喜の心を以て、衆の樂音を捨てて往きて衆鳥に詣たり、遊戲

【三】初禪。四禪定の第一なり。禪は禪那(Dhyāna)の略にして、定は三昧(Samādhi)の譯なり。心を一境に止めて散動せざるを定と云ひ、一心に思慮を凝すを禪と云へども、今二義を合會して禪定と稱す。此の禪定を修めて初禪天に生まる。

此の三十三天に至りしなり。或は是れ其の身の威徳の力、或は是れ輪力にして、餘天の力にも非らず、亦た人力にも非らず。怖の意を起すこと勿れ。此の人の法に順ずるは轉輪王の爲なり」と。護世の說き已りし時に、頂生王は三十三天に到れり。

爾の時、帝釋は遊戲して一切樂林に在りて娛樂して樂みを受く。遙かに頂生を見て即ち半座を分つて、之に命じて坐せしむ。爾の時、頂生は即ち帝釋と共に一牀に坐せり。二王を久時く五欲の樂みを受け、業盡きて還退く。爾の時、三十三天の遊戲の處は、此の一切樂林に及ぶもの有ること無し。其の林は殊妙れ、無量の衆寶を以て莊嚴と爲せり。光明は日の如し』と。時に、天帝釋は是の語を說き已りて、百千の天女と自ら圍遶て一切樂林に入りぬ。既に林に入り已りて、天子・天女は娛樂して樂みを受く。種々の須陀の味を食し、既に飯食し已りて七寶殿に昇る。其の殿の光明の威徳は端嚴にして、猶ほし日光の如し。種々の樂音にて善法堂に還へりぬ。帝釋は去り已り、舊住し諸天は五欲にて樂みを受く。乃至善業を受け盡くして、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれなば常に善世に値ひ、刀兵に値はず。好き國土に生まれ、園林を具足し、稻・麥・甘蔗の華果を具足す。大富の處にて常に正法に値ひ、或は大王と爲り、或は大臣と爲りて、一切人に愛敬せらるる所と爲る。端正なること第一にして、諸根は成就し、子孫を具足す。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り、三十三天の住する地を觀ず。彼れ聞慧を以て第十六地を見る。名づけて鬘影と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以て、此の衆生の善業を見るに、善心にて、殺さず、盜まず。云何して殺さざるや。云何して盜まざるや。幾種に殺さざるや。幾種に盜まざるや。殺生せずとは、自から殺生せず。若しは種々の魚鱉、若しは珂[三]、若しは貝を取らず、賣らず。殺生する者を見れば敎へて戒に住せしむ。他の作す者を見れば心に隨喜

【三】珂とは、寶石の一種にして、白瑪瑙なり。

す。諸の天衆と倶に其の上に坐せり。天女は圍遶て久時く樂みを受く。種々の色身を、種々に莊嚴りて相ひ娛樂む。時に、天帝釋は復た金殿を出でて一切樂林に詣たる。種々の天衆は百千に圍遶て、種々の伎樂にて衆の妙音を出せり。其の諸の天衆は大光明を出し、天帝釋に隨ひて、林を去ること遠からずして遊戲の處を見る。無量百千の光明にて莊嚴り、金毘瑠璃を以て其の樹と爲し、光明は赫焰として周遍を莊嚴れり。其の遊戲林は種々に莊嚴りて譬喩すべからず。今少分を說かん。譬へば七日(輪)の倶時に竝び出づるが如し。其の林の光明も亦た復た是くの如し。其の諸の光明に種々の色あり、青・黃・朱・紫・白色の諸の光は、其の林を莊嚴れり。遊戲の處の光明は赫焰なり。帝釋は見已りて諸の天衆に告ぐ。『汝等は是の一切の戲樂し、遊戲する處を圍遶る莊嚴を見るや。不や。』と。『唯然として已に見る』と。時に、天帝釋は諸の天衆に語り給ふ。『過去の世に頂生大王は、此の林中に於いて天帝釋と座を分ちて坐し、遊戲して樂みを受く。無量の天女に圍遶れ、四天下に主たり。時に二天王は、無量百千萬億の五欲の樂みを受くるとも、猶ほ足ることを知らずして、天より還退く。時に、頂生王は善業を以ての故に、此の林中に於いて光明の威德は端正にして勢力ありき。我れ今之れを說かん。汝當さに善く聽くべし。過去の世に於いて頂生王ありて四天下に主たりき。刀杖を加へずして亦た刑罰も無し。欲して厭足なし。先世の善業を以て來りて此の天に上れり。其の身の光明は須彌山より勝れ、過踰ること十倍なり。一切の天光は、其の中に至れば皆な滅びて現はれず。時に、四天王は頂生王を見て、卽ち出で奉迎へて頂生に白して言さく。「善く來り給ひしかな大王よ。我れ今故に出でて大王を奉迎ふ。應さに供給を修むべし」と。時に頂生王は其の供を受け已りて復た三十三天に上れり。是の時に、頂生の光明の威德は、猶ほし日光の人中にて最勝なるが如く、此の天中に在りても亦た復た是くの如し。時に四護世天は、自ら光明を見るとも悉く復た現はれず。未曾有に怪て諸天に告げて曰く。『此れ頂生王の

【三】圍遶の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

清淨なれば、善人に愛せられ、如實にして虚しからず。是くの如く持戒せば天中に生まれて必らず涅槃に至らん。心の願ずるに隨ひて[一八]三菩提を成ず。是の持戒の人、若しは曠野を行くに、若しは獨り、若しは伴ひて、若しは道路を行き、若しは非道を行くに、[一九]惡獸の懷妊して子を産みて、飢の爲めに逼られて其の子を噉はんと欲するを見る、是の人は之れを見て、自から其の身を捨てて此の惡獸に與ふなり。己れを殺して其の兒を食はざらしめんと欲す。是の持戒の人は其の命ちを續かしむる爲め、衆生を憐愍みて自から身命を捨て、父母に孝養す。云何がして布施するや。若し持戒の人、貧窮し困乏れども勤苦て物を得、法に順じて持戒す。或ひは沙門あり、滅定を起ちて來り、其の家に至りて其れより乞求む。是の如き貧人は妻子の食するの分を減じ、少しの飯食あれば此の比丘に施す。自らは一日を屈して、其の食し已るを見れば心に歡喜を生ず。復た他人に不殺・不盜を教へて善道に住せしむ。作すを見れば隨喜ぶ。是の持戒の人は自らを利し他を利す。命ち終りし後は三十三天に生まる。猶ほし香氣の金殿に生ずるが如し。是の善業の人は彼の天に生まれ已りて、欲樂の地を受く。黄金を殿と爲し、一切の衆寶を以て莊嚴と爲す。帝釋は見已りて希有の心を生じて、百倍に樂みを受け、偈を以て頌して曰く。

上上の樂は、善業の善果なり。　諸天の受けし所は、先世の業の故なり。　四輪の殿ありて、駕するに象の馬を以てし、　智慧を鈎と爲し、　殿の光りは日の如し。　持戒の善にて天上に遊び、衆生を憐愍むことは母の子を愛するが如し。　慈悲の人は能く天中に至るなり。　慈悲を行ふ者は衆生を饒益して、常に應に供養をうくべし。　後に天中に生まれなば悲愍み調伏して、衆生を利益せん。　是の人は、[二〇]是くの如く諸天に敬仰はれ、慈悲の人は端嚴なることは月の如く、衆生を覆護りて、憂惱を離れたり。　是の故に勤加み、修行して、樂みを求めよ。

時に、天帝釋は此の偈を說き已りて金殿に入る。柔軟き敷に坐し、種々の形相を以て莊嚴と爲

【一八】三菩提(Sambodha)。正等覺、又は正徧知と譯す。さとりのこと。

【一九】惡獸云云。「金光明最勝王經」第二十六捨身品參照。

【二〇】「是の如く」の是の字は、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

中に生まれなば常に安樂を受け、常に澡浴・塗香・末香を樂み、衆の蓮華・優鉢羅華・拘牟頭華・俱迦那陀華を愛す。質直にして聰慧きなり。正法を愛樂し、或は國王と爲り、或は大臣と爲り、或は長者と作り、或は城戍に主たり、或は導師と爲り、生を治め偶に諧ふなり。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て第十五地を見る。名づけて金殿と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ天眼の智慧を以て觀察し、持戒の人の殺さず、盜まざるを見る。云何がして殺さざるや。若しは怨家の來りて己れを害せんと欲するを見、或は他人ありて其の妻の室を侵すを捉へて擒獲にすと雖も、打たず害せずして、放捨して脫れしむ。軟言にて慰め喩す。或は人ありて怨家を害せんと欲するを見れば、財を以て命を贖ひて、其れをして脫れしむ。復た惡人ありて已に捉へられて擒獲れるとも、之を放ち去らしめて害を加へず。是くの如き惡人の復た其の家に至りて侵さんとし、害せんとして、復た擒獲らるるとも、還らしめ卽ち之れを放ちて害を加へず。以て持戒を護り、業の果を畏るるが故なり。怨家に刀を持つて來り人を殺さんと欲るとも、彼の怨家を護りて其れを脫るることを得せしめ、殺戮を被らざらしむ。戒を畏敬するが故に自から身命を捨てて、他人を害せざらしむ。是れを不殺と名づく。云何がして盜まざるや。不盜に幾種あるや。此の持戒の人、乃至小罪にも大いなる恐怖を生じ、業の果報を畏れて、惡業を造らず、善業を修行す。復た盜まざることあり。小罪乃至微塵を見るとも、心に恐怖を生ず。或ひは塔寺に詣たり、或ひは園林の閑靜にて讀誦・經行の處に至るとも、或は水邊に至るとも他物を取らず。種々の鞋屣を悉く故らに取らず。聽さざる所にては亦た受用せず。戒を護るを以ての故に、若しは晝、若しは夜、盜心を起さず。是れを不盜と名づく。是れを不殺にして不盜なりと名づく。云何して戒に住するや。不淨・不愛・不樂・不善の法を捨てて、持戒して

【一六】拘牟頭華(Kumuda)。黃色蓮華なり。
【一七】俱迦那陀華。不明。

行く。所到る處に隨ひて蓮華池を生ず。衆の雜蓮華を以て莊嚴と爲し、毘瑠璃の葉は眞金を莖と爲し、白銀を鬚と爲す。蓮華臺上の諸の天女等は衆の妙音を歌ふ。善業を以ての故に、其の蓮華中に摩偸を流出す。「摩偸は美飲にして俗名を酒と爲すなり」天女は之れを飲みて、蓮華臺の諸の天子等と蓮華臺に住す。天女は圍遶て共に摩偸を飲みて久しく樂みを受く。已りて空よりして下りて鳥と相ひ隨ふ。及び天女の衆は【一四】優鉢羅殿に詣るに、其の殿の縱の廣さは二由旬に滿てり。是くの如き百千の優鉢羅華の一一の天女は一葉の端に住して、歌舞し伎樂す。復た青色の優鉢羅華ありて、華の青光を以て諸の天女をして皆な青色を作さしむ。若し赤色あれば、諸の天女をして赤色に見えしむ。身に莊嚴を具することは、亦た復た是くの如し。天子・天女は蓮華臺に坐し、善業を以ての故に諸の天女と共に圍遶りて、蓮華の鬚に坐して手に種々の雜色の寶旛を擎げ、歌舞して遊戲す。久しく天の樂を受けて華臺より下りて【一五】雞婆羅殿を見る。河を樂見と名け、兩岸に多くの衆寶の樹ありて、枝葉を具足せり。莖幹に種々の衆鳥を成就し、嘴・翅は端正にして、婆求の音ありて河岸を莊嚴れり。天の念ずる所に隨ひ、河從りして出でて其の河を莊嚴る。天女は歌舞して甚だ愛樂すべく、互に相ひ娛樂む。天子來りて是くの如き愛河に詣たるに、天女之れを見て皆な大いに歡喜び、歌舞し戲笑して衆の伎樂を作す。異る天女あり衆の伎樂を作して來り、天子に詣る。是の時、天子は諸の天女の顏色の妙美なるを見て百倍に愛著す。走りて天女に趣き、此の天女及び優鉢華の諸の天女等と河岸にて遊戲す。諸の天女等は、一切同じく集りて、衆の伎樂を作して妙へなる音聲を出せり。其の歌の音聲は、遍く須彌山王の寶峰の中に滿てり。時に、山峰中の一切の天衆は、是の妙へなる音を聞きて皆な來り集會す。心意に天女の歌音を戀著す。天子・天女の大衆は和合し嫉妬を起さずして歌舞し遊戲す。復た往きて遊戲の園林に詣たり、久しく無量の百千種の樂みを受く。乃至、善業を受け盡くして天より命ち終り、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人

【一四】優鉢羅(Utpala)。青蓮華なり。

【一五】雞婆羅。Kevala(孤立)か、もしさうとすれば單殿、孤立殿の意となり亭のやうに立つてゐる建物となる。

受く。乃至、善業を受け盡くして天より還退し、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生まれなば、寶地に住し、一切の衆寶を以て莊嚴と爲す。其の家に生まる。或は大王と爲り、或は大臣と爲りて、常に安樂を受け、衆人に愛せられ、子孫を具足して豐饒の資を具す。餘業を以ての故なり。

復た次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第十四地を見る。名づけて旋行と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼の地に生まるゝや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生ありて殺さず、盜まず、他の作す者を見れば勸めて作さざらしめ、不善業は惡果報を得るを說く。云何して殺さざるや。乃至菜[一三]草に、若しは水中に於いて微細の蟲を見れば、之れを護りて食せず。若しは水を漉さざれば終ひに故さらに飮まず。漉水の蟲を、乾きし地に棄てず還して水中に置き、蟲をして安隱ならしめ其の命ちを失はざらしむ。亦た他人を敎へて善道に住せしむ。云何して盜まざるや。若しは蔗田、若しは果、若しは菜、若しは菴婆羅の、他の攝さめし所の物に盜む心を起さず、亦た他人に敎へて偸盜せしめず。自ら禁戒を持し、他を敎へて持戒せしむ。云何して持戒するや。殺さず、盜まず。乃至、命を失ふとも水の蟲を飮まず、亦た受用せず。亦た他人に敎へて其れを作さざらしむ。是れを不殺生と名づく。云何して盜まざるや。乃至草葉も亦た故に盜まずして布施を行ふ。若し病人を見れば、其れに醫藥を施して安樂を得さしむ。亦た復た殺蟲の藥を以て、他の病を治するに與へず。是れ善の布施乃至涅槃にして、其の福は盡きず。是の人命ち終りて、三十三天の旋行の地に生まる。既に生れし後は善業を以ての故に、一切の衆寶の光明は旋轉して殊勝なり。天女は以て供養を爲し、既に供養し已りて光輪の林に詣る。種々の音樂あり、林中に鳥あり、莊嚴樹と名づけて林中に充滿てり。鳥の勢力を以て、其の心に念ふに隨ひて至る所有らんと欲す。虛空に飛べば、林も亦た隨ひて行き、若し諸の天子樹下に在れば、亦隨ひて林も

【一三】草の字は、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

る所の果報を以て、色香・味觸を皆な悉く具足せり。復た天衆を見るに、七寶樹於り七寶華を採り、以て自ら莊嚴る。復た天衆を見るに華を採り、果を摘み、或は食する者あり或ひは相ひ打擲ち以て戲笑を爲して共に相ひ娯樂す。復た天衆を見るに、天鳥に乘りて衆の雜はりたる七寶を以て莊嚴と爲し、此の鵝鳥に乘り、虛空に遊びて互に共に遊戲す。復た天衆を見るに、衆の樂音を歌ひ、天子の前に於いて諸の天の女衆は舞戲し娯樂し、天の蓮華を以て互に相ひ打撲ちて以て欲心を生ず。言說は調謔にして愛境界を增す。初めて生まれし天子は是くの如き等の種々の天衆の種々の業の化せるを見て、心に自ら思惟す『我れ此れを見ると雖も、眼は足ることを知らず。種々の聲を聞くとも耳は亦た厭くこと無し。衆の香にても鼻は亦た是くの如し。種々の六味にても舌は厭足こと無し。身に細觸を貪り、天衣の妙服にて莊嚴りて身に塗ることも、亦た復た是の如く厭足を知らず。一切の愛法に心は常に隨順ふ。我れ今、愛樂して當さに斯の樂みを受くべし』と。既に思惟し已りて互に相ひ愛樂し、天の應くる所の如くに五欲の樂みを受く。是くの如く天子は〔九〕六愛に心著し、一切の愛火に圍遶られて焚燒く。譬へば人ありて、盛夏の日の極熱の時に於いて曠野を行くに、大火卒に起りて、諸の乾きし草・樹・葉・枝條を燒くが如くにて、山谷の林樹の一切に火起り、慞惶て怖れ走るとも、逃避するに地無し。其の火は熖熾として、四面の圍遶を同く一熖と爲して、一切林を燒き、其の趣く所に隨ひて煙熖倶に起る。火の爲めに燒かるゝ所は能く免れ離れること能はず。世間の一切の愚癡の凡夫も亦た復た是くの如し。乾草・樹枝は愛火に燒かる。將さに天中に至るとも、業を造る人には〔一〇〕結使、〔一一〕癡の風、大愛火を吹く。禪を修め、〔一二〕觀を習ふとも、世俗の禪を得るは乾きし枯樹に喩へて、山谷の草葉の愛火に燒かるゝ所なり。猛熾なる火は六種の愛に喩ふ。處々に走る者は、諸根の境界に染著するに喩ふ。其の熖の熾然たるは境界を憶念することを、猛火に吹かるゝは愛火に燒かるゝを、天人世間を破壞する火は愛火に喩ふ。天の善業の故に、無量百千種の樂みを

〔九〕六愛。色・聲・香・味・觸・法の六境を云ふ。

〔一〇〕結使。結も使も共に煩惱の異名なり。心身を結縛し、衆生を驅使する故なり。

〔一一〕癡(Moha)。又、愚痴、無明とも云ふ。心性闇昧にして事物の眞理に迷妄なるを云ひ、一切の煩惱の由って起る所と爲す。

〔一二〕觀(Vipaśyanā 毘婆舍那)(Vidarśanā)。妄惑を觀察するを云ひ、又眞理を觀達することと。卽ち智の別名なり。

の中にて惡業成熟す。是の故に微少の惡業をも作すべからざる所なり。若し能く七種の戒を奉持して、缺かさず、漏らさずんば則ち餘果あるなり。夜摩の諸天は退沒く相を見れば則ち是くの如からず。未來世の報は略して之れを說きて、復た廣く說かず。諸天の女衆は天鬘にて莊嚴りて、速かに往きて初めて生まれし天子に詣る。諸の天鬘を以て用えて之れに上せて、其をして莊嚴らしむ。華鬘の香氣・色香を具足して萎變あること無し。初めて生まれし天子をして此の華鬘を著せしむ。天子之れを著して心に歡喜を生じ、卽ち相ひ親近しみて共に園林に遊び、互に相ひ娛樂す。此の地處の天衆の住する所に於て淸淨き水を見る。毘瑠璃の華は眞金を葉と爲し、金剛を鬚と爲し、百千の衆蜂を以て圍遶を爲す。其の蜂或は眞金を以て翅と爲せば、毘瑠璃を身とし。白銀を翅と爲せば眞金を身と爲す。赤寶を翅と爲せば、雜色を身と爲す。珊瑚を翅と爲すものあり。常に是くの如き不萎・不變なる蓮華の池中に於て遊戲して娛樂む。其の聲は淸妙にして天女の音の如し。是くの如く衆蜂を以て莊嚴を爲し、天子・天女は蓮華池に入りて遊戲して樂みを受く。歌を詠じ、戲笑して久しく池中に於いて娛樂して樂みを受く。復た往きて金鬘の樹林に詣たるに、二樹彌覆せり。既に林中に至るに、種々の伎樂は妙へなる音聲を出す。須彌峰を見れば融金の聚りの如し。諸の天衆を見るに、山峰に在りて諸の天女と伎樂して自から娛しむ。天鬘・天衣を以て莊嚴と爲し、閻浮檀金を以て瓔珞を爲して其の身を莊嚴れり。蓮華池・優鉢羅池に於いて、種々の香味は皆な悉く具足せり。天子・天女は遊戲して樂みを受け、鵝鴨・鴛鴦・大力の師子は悉く行列を爲し、諸天は中に在りて遊戲して樂みを受く。復た天衆の虛空を行くを見るに、諸の天女と與にして、猶ほし明燈の如し。歌頌するに美音を以てして自から娛樂す。衆の妙へなる華を雨ふらして天の快樂を受け、五樂の音聲にて歌戲して娛樂す。復た天衆の天の美味を飮むを見るに、醉失するもの有ること無く、各愛語を說り以て相ひ娛樂して、心をして喜悅ばしむ。復た天衆を見るに、須陀味を食し、自らの善業にて得

天虹色の如くにて、其の身の光明は百倍に轉た勝れ、莊嚴は殊妙なり。善業を以ての故に、身は電光の如くにして諸の天衆より勝れり。衆の星の中にて月を最第一とするが如く、此の天の身も亦た是くの如く遍く身の光り焰ゆ。自から寶地を觀ずるに、其の地は皆な種々の摩尼を以て莊嚴と爲して、種々に間錯れども分齊ること分明なり。一切の光明は猶ほし百日の一時に同く照らすが如し。天子は之れを見て大歡喜を生ず。復た異處を觀ずるに、諸の天女の妙色を具足するを見る。譬喩すべからざる種々の衆寶を以て莊嚴と爲せり。諸の欲樂を受け、鼓樂・絃歌・笙笛・箜篌にて、是くの如き種々の歌の衆の妙音あり。或は舞戲するもの有りて、天鬘にて莊嚴れり。或は華池に於いて鳥と遊戲するものあり、或は天果を食するものあり。復た意樹に於いて、諸華の果を取り、欲樂の音を歌ひて、衆をして歡喜ばしむ。天子既に至りて諸の天女を見るに、諸の欲境は惡蛇の螫す所と爲り、座に從つて迴顧、諸の天女に向ふ。諸の天女等は天鬘にて莊嚴り、天子之れを見て欲火に心を燒かれ天女を迴顧る。時に、天女は其の丈夫の命ち將に臨終ならんとして、五の死相の現はるゝを見ては、猶ほし衆蜂の萎びたる華を捨てゝ新しく開ける華に赴くが如くに、諸の天女等は本の事る所を捨てゝ、此の天子に趣く。亦た復た是くの如く種々の天鬘、種々の天衣を以て自から莊嚴る。愛欲心を以て天子を娛樂しめ、心をして喜悅しむ。是の退く天子、無始より來た諸の愛欲を習ひしを以て、其の天女の背叛て異に趣くを見ては、心に熱惱を生じて、阿鼻獄の猛火に身を燒くが如し。諸の天女の已れに背き、他に趣くを見ては其の心は熱惱む。亦た復た是くの如く天より命ち終り、嫉妬心を以て自ら其の身を害ふ。報の將さに盡きんとすること有るも、緣を取り心を濁して、更らに見る所無し。地獄・餓鬼・畜生に退き墮つ。何に因緣を以て、諸の天女の已れに叛き他に趣くを見ては、大苦惱を生ずるや。前世の人中の時に於いて、邪行し非禮して他の婦女を犯すを以て、善業を作して天中に生まるとも、他の妻を侵すが故に、斯の惡業を見る。是の如くに善業

人ありて衆生を利益し、不殺・不盗にして、亦た他人を教へて善道に住せしむ。自から殺生せず、乃至酒密の中に濕生の蟲あるを見ては、若し漉治さずんば故に飲まず。他を教へて作さしめず、亦た隨喜ず。不善業を知れば捨てゝ作さず。他の惡を作すを見れば捨てゝ親近まず。勸めて善を修めしむ。是れを不殺生と名づく。云何がして盗まざるや。乃至、塔廟に入るに、若し佛塔を供養する燈明あるも、此の光りを以て衆の事を營作まず。亦た煙を取りて以つて書畫と爲さず。微細の罪も悉く皆な畏懼る。是れを不盗と名づく。復た不殺及び不偸盗あり。不殺生とは乃至、蚊蟻の人を惱觸するも亦た殺害せず。心に殺すことを念はず。若し他の殺すを見れば、勸めて放ち捨てせしむ。其の人に語りて言はく『若し殺生すれば是れ不善業なり。命ち終れば當さに活地獄中に墮すべし』と。是くの如くに他を教へて惡を作さざらしめ、善法に安住せしむ。是くの如き善人は、自から禁戒を持して、他をして戒に住せしむ。若し曠野を行かば、若しは饑饉の世なるも飲食を以て施す。若しは其の飢餓して困逼の時たるも他の食を盗まず。曠野の中に於て、貧窮し飢に困りて乏少の糧食なるも、能く己れの食を減じて諸の貧人に施す。心の福田は二事より勝ることを思ふを以ての故なり。大果報を得るは、時に施すを以ての故なり。何を以ての故なりや。病の大なる者は饑饉に過ぎたるは無し。是の故に食を施して大果報を得るなり。是くの如く二種の持戒の人は自らを利し、他を利し、善心にて直しく行ひ第一善の人なり。乃至小罪なるも常に大いなる懼を懷き、衆の寶珠を以て父母に施し、或は珠瓔を以て如來の像に施す。是の人命ち終りて三十三天の摩尼藏地に生まる。彼の天に生まれ已りて、第一樂を受け、五欲にて自ら娯しむ。是の善業の人の威德の光明は皆な悉く普く五百由旬を照らす。譬へば、日出でて普く衆山を照らすが如くにて、此の天の光明も一切の地を照すことも、亦た復た是くの如し。其の衆寶の地は先の光明を具せり。是くの如き天子の身の光りは既に照らして百倍に轉た勝れたり。其の諸の光明は青・黄・朱・紫にて

空に遊びて翺翔として樂みを受く。天子は復た念ず。『鳥の背上を七寶殿に化せん』と。園林・華池は皆な悉く具足し、種々の衆鳥を以て莊嚴と爲せり。上りて虛空に乘り、諸の天女と種々に莊嚴て、處々に遊戲し種々の樂みを受く。遍く諸天の住する所の處を觀じ、既に觀察し已れば、轉愛著を增し、百千倍に足すも比べることは爲すべからず。是くの如く愛火の六欲熾然として調伏すべからず。妄愛は樂みと爲すも、實は大苦と爲る。鳥に乘りて空に遊び、五樂の音聲・歌頌の音の其の聲は美妙にして譬喩すべからず。遍く一切の天子・天女を見、須彌山に於ては園林・池流・山谷・樹林・蓮華は遍く覆ひて、多くの衆鳥あり。皆な悉く之れを見る。一一の住處の無量百千の諸天の所住の處々は、之れを觀れども猶ほ厭足ず。諸根に愛著し、五欲に貪著し、歡喜して厭くこと無く、愛心增長す。是くの如く多時に鳥に乘りて遊戲し、須彌山王の六萬の諸山の善業の諸天の所住の處を觀ずるに、無量の寶焰は光明にて莊嚴りて甚だ愛樂すべし。須彌の四面に四種の色あり。謂く、毘瑠璃・白銀・黃金・玻瓈の色なり。此の天は遍く行きて須彌山を觀ず。鳥殿に乘りて、其の所止に還へりて其の住處に至るに、天の念ぜし所の如き色相にて莊嚴れり。是の時、天子は復た鳥殿に乘りて、[八]摩時多池に至るに、其の池の周匝の廣さは五由旬なり。靑毘瑠璃の種々の蓮華を以て莊嚴と爲せり。鳥は此の池に至りて諸の天女と五欲の樂みを受く。猶ほし衆蜂の華味を貪嗜するが如くに摩偸を飲み、須陀味を食す。色香・美味は皆な悉く具足し、天の寶衣を服し、諸の天女と遊戲して樂みを受く。乃至、善業を受け盡くして天從り命ち終り、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し善業あれば人中に生まることを得て、常に富樂を受け、多くの騎に乘り、遊戲する處あり。或は王者と爲り、或は大臣と爲りて、人に敬愛せられる。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て第十三地の摩尼藏と名づくるを見る。衆生は何かなる業にて此の天に生まれるや。彼れ聞知にて見るに、若し善

【八】摩時多池。不明。

が如し。　因緣の生ずる所は、蓮華にて莊嚴りしが如し。　是くの如き天の莊嚴は、皆な善業從り生ず。　譬へば淸淨き水の如く、虛空に塵なきが如し。　是くの如き淸淨き心は、能く安樂の處に至る。　[五]三縛を解脫する人は能く[六]五根を護り、[七]一法を遠離する人は、天中にて安樂を受けん。　無慚・無愧の人は、不調にして惡知識なり。　毒の如く亦た火の如し。　智者は應に捨離すべし。　實を語り施を行ふ人は、常に應に樂みに親近むべし。　常に心に衆生を慈むは、此れ天中に生まる道なり。　直しき心にて諂曲はらず、布施して正念を修む。　是の自らの業因を以て來りて、此の天中に生まる。　世間の一切の命ちは、皆な法・非法に由る。　救護すること、法に過ぎるものなし。　是の故に應に法を行ふべし。　若し人、法を捨離し、樂みて不善業を行へば、惡に燒かる所と爲りて、苦みを受けて窮盡ること無からん。　既に天に生まるゝことを得已りて、若し放逸心を縱にせば、其の人の善業は盡きて、退く時に乃ち自覺せん。　究竟樂を勝と爲せば、無生にして亦た無死なり。　死の綱は衆生を縛り、安樂の處有ること無し。　其の樂みを受くる處に隨ひ、愛心增長し、愛火は衆生を燒き、地獄にて苦報を受く。　放逸を行ふことを得る勿かれ。　諸天も應ぜざる所にして、放逸の過に壞せらるる所となれば、天處を退失はん。

是くの如く天鳥の此の法を說く時に、天子の心は亂れ、諸の天女を念じて、利益の法を聽かず、受けず。　五欲を渴愛し、心意は耽著し、蓮華池の遊戲の處に於いて、歡娛して樂みを受く。　復た山峰に往く。　樂遊戲山峰と名づけ、鳥あり、名づけて戲樂と曰ふ。　池中にて遊戲し互に相ひ娛樂す。　時に天鳥を見て、是くの如き念ひを作さく。『奇なる哉。　此の鳥の種々の衆色、種々の音聲は、一切の鳥より勝れり』と。　是の時、天子は復た是の念を作さく。『我れ今鳥に乘りて林池を遊觀せん』と。　天既に念じ已れば、卽時に鳥の身は自ら廣大に變ず。　爾の時、天子は手を以て摩捫で之れに乘り、

【五】　三縛。貪・瞋・痴の煩惱の繫縛を云ふ。
【六】　五根(Pañca-indriyāṇi)。眼・耳・鼻・舌・身・根を云ふ。根とは能生の義にして草木の根の能く幹枝を生ずるが如く五識を生ず。
【七】　一法。無明のことなり。

施し、人を教へて食を施さしむ。施し已りて隨喜び、他を教へて隨喜しむ。是れを布施と名く。殺さず、盜まず。若し人、道を行きて井泉・池流の水を施す處にて、其の瓶罐の飲水の器を施して行路に供給せしむ。復た異人ありて他に教へて盜み取らせしむ。持つて曠野を度るに『汝若し取らずんば、必らず當に渴乏すべし』と。爾の時、その人は渴し死ぬことを知ると雖も、犯罪を畏るゝが故に其の教を受けず、財物を盜まず。亦た隨喜ばず。人に取らざることを勸め、善道に住せしむ。乃至命を失うとも偸盜を犯さず。云何がして殺さざるや。自から行うて殺さず。人に殺さざることを勸め、殺法を毀呰す。若しは屋の牕牖、若しは戶扇の間、若しは屋梁の上に微細の蟲ありて、若しは然火の時にその命ちを傷くを懼れて、戶牖を閉さず。是れを不殺と名づく。復た他人を教へて不殺を行ぜしめ、善道に住せしむ。是くの如きの人、命ち終りて、三十三天の峪崖岸天に生まれて、善業の報を受く。一林樹ありて、隨時低と名づく。其の林には種々の衆寶の光明、靑毘瑠璃の淸淨にして無垢なるものあり、種々の衆鳥は妙へなる音聲を出せり。華は常に開敷き、流泉・河池を以て莊嚴と爲す。靑毘瑠璃を以て蓮華と爲し、莊嚴なる金峰は融金の聚りの如し。雜色の衆鳥は其の中にて遊戲し、或は水中に於いて、或は陸地に於いて、或は山峰の險岸山の窟に於いて衆の妙音を出す。善業の化せる所なり。善業の果を受け、種々の天女に圍遶れ、天鬘・天衣を以て莊嚴を爲し、色相の威德端嚴にして、殊特たり。此の林中に於いて、歌舞し遊戲す。善業を以ての故なり。林中の天鳥は頌を說きて曰く。

　衆生は善業を造り、天中にて快樂を受く。　若し不善業を造らば、地獄にて苦報を受けん。
既に天中に生まれて、能く自ら覺悟らば、樂みに從つて樂果を得て、愛に惑さる所と爲らず。
　業の繩衆生を縛りて、長く　三有[三]の獄に在り。　業力は自在に轉りて、轂の衆の　輻[四]を轉ずるが如くにて、三有に輪轉す。　八方及び上下は業力の風の吹く所にして、塵の虛空に遊ぶ

【三】 三有(Toyobhavāḥ)。欲界・色界・無色界の三界を謂ふ。三界の生死の果報なり。
【四】 輻とは、車の轂（こしき）と輪とをさゝへる木にして、轂にはまる部分を菑、輪の方にはまる部分を蚤と云ふ。

ば將さに天より地獄に至らん。智者の說きし所は、放逸は毒の如しとなり。愚癡にして放逸なれば、現在の樂みに著す。放逸の果熟せば、後に大悔を生ぜん。放逸なれば少しの利益も無きことを觀ぜよ。若し放逸を捨つれば、常に憂惱なからん。放逸は大苦にして、不放逸は樂みなり。要を擧げて之れを言はば、應に放逸を捨つべしとなり。若し人、苦を愛せば、放逸を行ふべし。放逸を行ふを樂めば、終ひに樂報なからん。不放逸を樂めば、不退の處に至らん。放逸を行はずんば、常に苦みの報無し。此の諸の天衆は、鳥と遊戲し、天と畜生とは等しくして、差別なし。界・道・身・意の一切は皆な壞るゝなり。天人・非人・地獄・餓鬼の意は差なり。業は別なり。業別なれば、道を分つなり。諸業を分ち異なれば、道も亦た是の如し。種々の雜業にて、天中に生まれ、樂みて放逸に著せば、退歿を覺らず。死相既に至れり、汝當さに自から知るべし。天中に於いて退きて大苦惱を受くべきを。癡の爲めに害せられ、放逸に誑せられ、諸天は渴愛して、地獄に墮つ。戲樂は自らを誑かして、地獄に墮つ。天の樂みを受け已りて、後に大苦を受けん。心の爲めに惑はせられて、生死を厭はず。愛の爲めに欺かれて、苦より苦に入らん。

比丘、是くの如く是の偈頌を以て放逸を呵責む。諸の天子等、五欲を貪りて厭足ことを知らざるは、火の薪を得るが如し。乃至善業を受け盡くして天從り還退く。業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し善業あれば人中に生まれて、常に安樂を受く。飲食は充足し、國土は豐樂なり。五穀は熟成し、或は王者と爲り、或は大臣と爲る。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て三十三天の第十二地の峪崖岸と名くるを見る。此の諸の衆生は、何かなる業を以て彼の天に生まるゝや。彼れ聞知にて見るに、若し人善心にて福德を修行し、坐禪人に施し、初禪を得る者に自ら其の食を

作さく。『今此の樹中より應に美飯を出すべし』と。善業を以ての故に、其の念ずる所に隨ひて、卽時に種々の美飯を流出す。色・香・味を具し、諸の寶器を以つて用へて之れを飲む。天の上味を飲みて天の快樂を受く。諸の天女の愛火に燒かるる所を見るとも、樂みに覆はるるを以ての故に覺知らず。天子は復た念ひらく『我れ今種々の音聲を聞かんことを欲す』と。善業を以つての故に、其の念ずる所に隨ひて、風あり樹を動かし妙なる音聲を出して、五樂音より勝れり。天子は復た念ひらく『今此の樹上に應に須陀の味を出すべし』と。善業を以ての故に、其の念ふ所に隨ひて、卽ち樹上に於て猶ほ大器の如くに物を盛りて、之れに瀉ぐに、上從り下る。石蜜の味も比を爲すことを得ず。天子は之れを食し、衆の妙音を歌ふ。往きて寶地に詣り、諦觀し、瞻視し、常に樂みて欲を念ふ。寶地中に至りて五欲の樂みを受く。此の地を捨て已りて、復た普林に詣たる。其の普林中に七種の鳥あり。眞金・七寶を以て鵝鳥と爲し、因陀靑寶を以て鸚鵡と爲して翅多し。赤寶を以て鴛鴦を爲し、毗瑠璃寶を以て鳧鴨を爲し、靑寶の硨磲を以て孔雀と爲し、大靑七寶を命々鳥と爲し、珊瑚・銀寶を[一]迦陵頻伽と爲す。其の聲は美妙にして[二]婆求鳥音の如し。衆の樂む所を聞きて空中に翱翔として遊戲して自から娛しむ。其の音の美妙なることは、天女の音の如し。蓮華池に於いては、衆蜂にて莊嚴り其の中に遊戲せり。復た陸地に於いて翱翔として遊戲す。復た金樹あり、種々の葉影は鳥身を映飾す。天は衆鳥を見て歡喜の心を發し、耳に其の音を聞き、心意悅樂む。天子は空を行きて鳥と遊戲す。或は水中に於いて鳥と遊戲し、或は陸地に於いて鳥と共に遊戲す。是くの如くに天衆は鳥と共に遊戲し、天子・天女は互に相ひ娛樂す。天鳥は儔匹く遊戲して樂みを受く。比丘、鳥の天樂を受くるを觀じ已りて、頌を說きて曰く。

　畜生の欲を行ずるは、癡力の作す所なり。　天若し是くの如くんば、畜生と異なること無からん。　人富樂を受くるも、放逸に著せずんば、是れ智慧人にして、愚者と相違す。　放逸なれ

【一】迦陵頻伽(Kalavinka)、鳥の名、妙聲と譯す。俗に極樂鳥ともいふ。
【二】婆求(Baka)。白色の鳥なり。

巻の第二十八

観天品第六之七

三十三天之四

復次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の住する所を觀ず。彼れ聞慧を以て三十三天の第十一地の離險岸と名くるを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まれるや。彼れ聞知して見るに、若し人持戒して衆生を利益し、福德は心に熏じ。或は功德の人持戒して智慧あり、或は復た病人に其の一食を施す。自からは若しくは空、樹の中に、或は蟲蟻、種々の細蟲あるとも殺生せず。若しは種々の放牧の牛・羊・象・馬・駝・驢の人、或は冬の寒き時にて冰雪し霜降るに、曠野中に於いて火を放ちて焚燒せんとす。若し善人あれば或は水土を以て、此の燒火を滅す。作すを見れば止むるを勸めて、自から故らに作さず。設へ作すとも改悔して隨喜を生ぜず。爲めに恐怖を說きて善く法に住せしめ、彼の衆生をして善法に住せしむ。自からは偸盗せず、亦た人に敎へず。是くの如きの人は終りて離險岸天に生まる。其の地は金銀・種々の赤寶を以て厠を爲して塡つ。是くの如きの種々の金銀・雜寶・雜業にて莊嚴れり。種々の衆寶は種々の厠に塡てり。種々の寶樹を以つて莊嚴と爲し、種々の禽獸は其の地を莊嚴る。處々に皆な禽獸の類ありて險岸地に遍し。一切の園林は、無量の七寶を以て莊嚴を爲す。離險岸天は此の林中に住して、莊嚴の具は融金の聚りの如し。百千の天女を以て圍遶を爲して五欲の樂みを受く。其の住む處に隨ひて身に光明を出し、岸の樹の光明も亦た天身の如し。此の林中に終りて遊戲して樂みを受く。諸々の天女と往きて河林に詣るに、其の河の兩岸に諸の金樹多し。黃金を葉と爲し、樹の光明を以て、水をして黃色ならしめて、悉く白色なし。其の流れは駛疾白色を見ず。園林間に於いて、天子・天女は遊戲して樂みを受く。天、是の念を

て樂みを受く。若し天子ありて此より命ち終れば、業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し前業あれば、人中に生まるるを得て、顏貌は端正にして人の樂しむ所を見て、心は常に歡喜す。安樂にして惱み無く、衆人に愛敬せられ、歌舞し戲笑して、常に自から娛樂む。一切女人にして、若し見る者あれば、皆な愛敬を生ず。或は國王と爲り、或は大臣と爲る。餘業を以つての故なればなり。

くにて、衆蜂圍遶り、其の影鮮澤にして、天衆は圍遶り、第二日の如くに[三三]先の威德を見る。其の香は普く一百由旬を熏じ、其の枝は遍く一百由旬を覆ふ。根も亦た是くの如し。一切の天衆は皆大に歡喜す。其の天樹王の光明、香氣も本の如くに具足せり。譬へば六万の衆山の中にて須彌山を最も第一と爲すが如くにて、種々の樹中にて波利耶多樹の光明の莊嚴は、亦た復た是くの如くに最も第一と爲す。勝れし光明の威德は殊勝にして、充滿し具足せるを見る。明淨を顯現して、明燄を具足す。三十三天は之れを見歡喜して共に相ひ謂ひて曰く。『汝等天子。佛の是くの如きの大勢力を見るや。不や。此の天樹の華葉は、光明・香氣を具足せることは本の如くにて異ならず。三十三天の樹の勢力を見るに光明は增勝にして、皆な疑網を離れり。閻浮提の人は法に順じて修行し、法を念じて心勝れるにて、魔軍は損減し、非法の惡龍及び阿修羅は能く破壞すること能はず。如法の人は正法を增長し、天衆は減ぜず、天女中に於ても復た劣弱ならず。魔軍は減少し、天衆は大力なり。樹王の相を以つて、當に知るべし。諸天に大威力有ることを』と。是くの如く、三十三天は各々說き已れり。爾の時[三四]護世は閻浮提より、第二天の波利耶多樹王の園中に詣れり。是の時に護世は三十三天を見て、波利耶多樹の下に於いて、淸淨心を以て如來の身より光明を出し給ふを供養す。到り已りて頭面し、帝釋を頂禮して天王に白して言さく。『諸天の大衆よ。今應に歡喜ぶべし。今閻浮提の一切の人民は、法に隨順して行ひ、父母・沙門・婆羅門を供養し、長宿を恭敬せり』と。時に、諸の天衆は、其の說く所を聞きて皆大いに歡喜し護世を供養して、是くの如きの言を作せり。『汝は我れを喜ばしむ。汝も亦た是くの如くに常に慶悅を得ん』と。閻浮提の人の法行を行ふを說くを以ての故に、是くの如くに天衆は護世天の是くの如き語を聞きて、復た供養を設く。既に供養し已りて、如來の像を持つて善法堂に詣たる。樹王の諸天及び天帝釋は還へりて波利耶多樹園に入り、夏四月中に天の快樂を受け、遊戲して娛樂む。天女は圍遶て、夏四月に於て遊戲し

【三三】先の字、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【三四】護世。護世四天王(Lokapāla)のこと。卽ち多聞(Vaiśravaṇa)・持國(Dhṛtarāṣṭra)・增長(Virūḍhaka)・廣目(Virūpākṣa)の四天は須彌山の中腹に居りて各其の一天下を護れば護世と云ふ。

汝等莊嚴れ。我れ今善心にて、如來の塔・世尊の形像を持して彼の樹下に至り、天の塗香・末香を以つて世尊を供養し奉らんとす』と。爾時、諸天は帝釋の敎を聞き、無量百千の諸天の大衆は帝釋の所に詣る。時に、天帝釋は如來の像を以て、天冠の上に置き、頂戴し行きて波利耶多樹園に往詣る。彼の天衆を見るに、皆な歡悅ぶこと無し。此の波利耶多樹の葉の墮落して本の光明を失ひしを以て、是の故に悅ばず。時に、天帝釋は、如來の像を以て樹下の七寶の地の毘瑠璃座に安置す。一切の天衆は皆な信敬を起して敬重の心を生ず。天の〔三一〕摩盧迦の華・天曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・〔三二〕拘賖耶舍華を以て、是くの如きの衆華を以て供養を爲す。香水にて如來の形像に澡浴ぐ。是くの如く供養し已りて、諸の天衆を敎へて當に信敬を起さしめ、慳み嫉みを離れ、放逸心を離れしむ。此の佛、如來は三界の大師にましまして正法の聖衆なり。諸の天子等は帝釋の敎を聞き、皆な敬信を起し、如來の天尊の像を頂禮し奉る。爾時、帝釋は卽ち偈頌を以て讚歎して曰く。

如來は恩愛の毒を解脫し給へしなり。一切の諸の衆生を親愛し給へて、久しく已でに、生死海を度し給ふなり。一切智に南無・南無し奉る。

爾の時、帝釋は合掌し恭敬し、如來の像に向ひて、諸の天衆と蹋跪して合掌す。復た偈頌を以て如來を讚歎し奉れり。

如來は永く欲・貪・瞋を斷ち給ひ、永く熱惱を離れて、量るべからず。一切の衆生の無上の師にておはします。一切智に南無・南無し奉る。

偈にて佛を讚已りて、一切の天衆は樹の王を圍遶て、如來を敬重し奉り大信根を生ぜり。是くの如くに一切の天衆は、淨き善心を以て正法を增長し、佛像を供養し奉る。時に、波利耶多樹は卽使嘴を生じ、新葉を出さんと欲す。諸天は見已りて皆大いに歡喜す。其の樹は久しからずして次第に華葉は本の如くになりて異ならず。其の光りは遍く一百由旬を照らし、香氣も亦爾なり。葉は雲色の如

〔三一〕摩盧迦。不明。
〔三二〕拘賖耶舍華。居賖耶舍を見よ。

じて、久しく捨てし物を以て　若しは衣服・飲食・牀褥・湯藥を以て布施に用ふ。復た他人を敎へて、衆生乃至蜫蟻を殺さず。殺心を起さず、若し果ありて蟲の爲めに食せられる所を見れば、その命を護る爲めに蟲のある果を食せず。人の食する者を見れば、勸めて食せざらしむ。自から禁戒を持して復た他人を敎ふ。云何がして盜まざるや。他の所有に於いて乃至根食・果食を取らず。若しは林中に於いて、若しは空地に於いて、自から旣に取らず、亦た他人に敎ふ。是くの如きの人は自からを利し、人を利す。命終りし後は、波利耶多樹園に生まる。波利耶多樹は、第一最勝なり。此の一樹に於いて能く閻浮提の人の善・不善の相を示す。若し閻浮提の人法に隨順して行へば、其の樹の華果は則便具足す。閻浮提の人法に順じて行ふを以ての故に、其の華の光明は百由旬を照らす。三十三天は心に歡喜を懷きて圍遶りて住す。是くの如き波利耶多樹の華果の茂盛すれば、閻浮提の人の父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆舊・長宿を供養するを知る。是の故に此の樹の華果は敷榮る。夏四月の時、其の諸の天衆は此の樹を圍遶りて娛樂して樂みを受く。若し波利耶多樹の其の華半ば生ずれば則ち少しく歡喜す。閻浮提の人の少分の持戒は、此の天樹をして但半華を生ぜしむるを知る。若し一切人盡く非法を行ずれば則ち天樹の波利耶多の華は皆な墮落ち、其の色は憔悴て光明あること無し。亦た香氣を失ひて、譬へば冬天の雲霧日を障へて光明を了らず、視るとも日を曜かさざるが如し。是くの如く波利耶多・拘毘陀羅樹の光明は微少にして、香氣は損減し、相貌は憔悴せり。時に、諸の天衆は是の事を見已りて、帝釋に白して言さく『天王よ。當さに知るべし。波利耶多樹の光明は損減し、香氣は劣弱にして、一切の威德は悉く本より如からず。必らずや是れ閻浮提の人父母に孝ならず、沙門・婆羅門・耆舊・長宿を敬はざらん』と。帝釋は之を聞きて卽ち賓像を取り、諸の天衆と恭敬し、供養し、尊重し、如來の像を讚歎し、佛の功德を念ず。諸の天衆に告ぐ『此の波利耶多・拘毘陀羅樹の華葉は墮落せり。我れ今當さに往きて彼の樹下に至るべし。

【二九】波利耶多。波利質多羅（Paricitra）のこと。具には波利耶怛羅拘陀羅と云ふ。又、波利質羅、波疑質姤とも云ふ。又、忉利天上の樹の名。譯して、香遍樹、天樹王と稱す。

【三〇】拘毘陀羅（Kovidār）。又、拘鞞陀羅、俱毘陀羅に作る。樹の名なり。

復た次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の種々の鳥獸を觀ず。種々の色にて種々に莊嚴り、種々の形相、種々の音聲・種々寶の翅あり、遊戯して樂みを受く。園林中に於いて實の如くに之れを觀じて、微細の業の因緣・果報を知る。彼れ聞慧を以て諸の衆生を見るに、工畫師と爲りて雇の直ひを受くと雖も、巧僞の心無く、他の爲めに福を營み、僧房・講堂・精舍を圖畫するに明淨に彩色し、青・黃・朱・紫の種々の雜色を以つて、佛塔・精舍・門閣を圖畫す。或は、山樹・人龍・鳥獸・師子・虎・鹿・園林・城郭・浴池・戲れの處・蓮華林池・沙門・婆羅門・軍營・殿堂を作る。佛を供養する爲めの莊嚴の因緣によりて形像を圖飾す。人より雇の直を受けて、或は復た刻鏤し、或は泥・木・金・銀・銅等を以て是くの如く種々に形像を造立す。諸の工匠師は命ち終りて天に生まれ、衆の鳥身を受く。雜業を造作し持戒せざるにて、此の鳥身と作る。或は鹿の形、衆蜂の身を受けて常に快樂を受く。其の作りし果の如くに相似の果を得て、天の樂みを受くるが如し。無智にして業を造れは、思心ありと雖も、無智を以ての故に癡なる身にて樂みを受く。天の園林に於いて遊戯して樂みを受く。山林・峰嶺に畫を刻鏤する如くに、象牙・金銀は素の爲せし所の如し。印の物を印するが如く、天の園林に於いて無量の色を生ずることは本の彩色の如し。天復た此の光明林の中に於いて、遊戯し歌舞して種々の樂みを受く。此の光明天は乃至、善業を受け盡くして命終りて、還退き、業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し善業あれば、人中に生まれて常に安樂を受く。或は國王と爲り、或は大臣と爲りて、無量の人に供養せらる所と爲る。樂しく遊戯を行ひ、節會を愛し、心に常に歡喜し、顏色は端正にして、飮食は意の如くにて、常に安樂を受け、他も能く奪ふ能はず。牀褥・臥具・園林・遊觀・奴婢は充足つ。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の界報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第十地の波利耶多と名くるを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞知にて見るに、若し人淨く信

法を行ひて、戒法あること無く、七種の身口の戒を持せず、他人を誑惑して熱惱を生ぜしめ、父母に孝ならず、師長を敬はず、法に順じて行はず。是の人は命ち終りて地獄に墮せん。譬へば皮嚢の如く、中に滿たすに沙を盛りて其の口を繫がず、大力の人ありて之れを瀉かすに、速かに出ず。今の世の衆生、不善業を行ひて阿修羅に墮ちることも亦た復た是の如し。若し諸の衆生の半の持戒するありて、或は身、或は口にす。是の人、命ち終れば阿修羅の中に生まれ、或は天中に生まる。譬へば[二六]菴婆羅果樹の如くにて、大力の人ありて其の樹を搖動するに、若し果の熟せる者は搖るに隨ひて則ち墮つ。若し未熟の者は、之れを搖るも落ちず。雜業の衆生も亦た復た是の如し。或ひは天中に生まれ、或ひは地獄に墮し、或ひは阿修羅中に生まれるもの有り。若し諸の世間盡く不善を行ひ、父母に孝ならず、法に順じて行はず、師長・沙門・婆羅門を敬はず、身戒及以口戒を持せずんば、是の人、命終りて地獄に墮ち、或は阿修羅の中に墮つ。是の故に諸の阿修羅軍をして大力を增長せしめ、天力を減少せしむ。復た是くの如しと雖も、我れ今能く阿修羅軍に勝たん。餘天衆に非らず、汝當さに思惟して法行を行ふべし。若しは今世に、若しは未來世に於いて正法を守護せば、一切力中にて法力は最勝にして餘の及ぶ者無からん。汝當さに思惟して正法を憶念し、勉力・勤加して阿修羅を破るべし』と。時に、諸の天衆は、天帝釋の是くの如き教を說き給ふを聞きて、帝釋に白して言さく。『天王の教の如くに、我れ當さに奉行すべし』と。是の語を說き已りて[二七]甲冑林に向ふ。樹より出生せる不可壞の甲を以て自から莊嚴る。此の甲を著する者には、能く敵を爲すもの無し。其の光りは照曜として譬へば、日の[二八]憂陀山に出づるが如し。其の光の明曜たることも亦た復た是くの如し。樂見山に向ひて、阿修羅と陣を列きて大戰せんと欲することは、前に說きし所の如し。光明林中に住する所の諸天は互に相ひ娛樂して、五欲の樂しみを受く。心意は放逸にして、毗瑠璃林・黃金樹林・赤寶林中に於いて華果を具足す。種々の衆鳥は、妙へなる音聲を出だす。

【二六】菴婆羅果樹。菴羅を見よ。

【二七】甲の字、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二八】憂陀山(Udayana)。鄔陀衍、優陀延とも書く。日出の義なり。

觀るに衰沒の相を見る。闇慧を以て知るに、若し人、悲心にて、屠殺する者の衆生を殺さんとするを見ては、其れをして脫るるを得しむ。是の果報を以て、光明林に於いて自からの身相を見る。諸天は復た光明林中の名づけて雜林と曰ふに詣たる。光明に住する如意の樹を以て莊嚴と爲す。此の林に入り已りて、各自から思惟す。『天と阿修羅と誰れの力が增勝れ、何かなる力を以ての故に、天增勝るるを得るや。何かなる力を以ての故に阿修羅は勝つや』と。時に、天帝釋は諸の天衆に告げ給ふ。『法を修行する者は諸天の中に生まる。閻浮提の人、劫初の時に[二三]十善道を行へ、或は他人を敎へ、自から身・口を斂め、七種の戒を持して、缺かさず、漏らさず、堅固にして諂らず。是くの如き衆生は命ち終りて天に生まる。譬へば皮囊の如くにて、中を滿すに沙を盛りて其の口を繫がず、大力の人あつて之を瀉かすに、速かに出づ。劫初の時に諸天の中に生まるるも亦た復た是くの如きなり。是の故に諸天の勢力は增長して、阿修羅の衆は其の力を減少す。欒見山頂に住する諸天は能く阿修羅を遮ぎる。復た後時に於いては、人不善を行ひ、缺け、漏れ、堅からず、少善業を行ふ。閻浮提の人は命ち終りて天に生まるるに、譬へば[二四]菴羅果の熟せんとする時の如くにて、大力の人ありて其の樹を搖動するも、其の果は少しく墮つるのみ。天中に生まるるも亦た復た是くの如し。復た異時に於いて、雜垢の業を行ひて、身の戒を持せず、口戒を持せず、堅からず、淨からず、常に修習はず。是の人命ち終れば少しく天中に生まるるのみなり。譬へば[二五]毘羅の大樹の果の如し。其の果未だ熟せざるに、少力の人復た之れを搖がすと雖も、能く動かさしむる能はず、設ひ之れを動かすことを得とも、果の落ちるもの甚だ少なし。若し熟する者あれば其の果は則ち墮つ。若し未熟なれば則ち墮落ちず。是くの如く劫初の衆生は、多く天上に生まれ、後世の衆生の天に生まるるは甚だ少なきは亦た復た是の如し。其の雜垢にて禁戒を破るを以ての故なり。汝等諸天よ。放逸の行をする莫かれ。若し放逸を行へば、阿修羅を增益して諸の天衆を減損す。今の世の衆生は多く非

【二三】十善道。十惡に對す。殺生・偸盜・邪婬(身三)・妄語・兩舌・惡口・綺語(口四)・貪欲・瞋恚・愚癡(意三)を十惡と云ひ、之れに反するを十善と云ふ。

【二四】菴羅果。具には菴摩羅(Amra)果と云ふ。無垢清淨と譯す。所謂、マンゴーと稱する植物の果實なり。

【二五】毘羅。枳橘易土集に「毘羅譯曰勇」とあり。

林の四維に四如意の毘瑠璃の樹あり、善淨にして無垢なり。其の光は普く照らして一由旬に滿てり。光明は日の如くにて、五千由旬は悉く皆な之を見る。天子・天女は樹枝に在りて遊戲し、樂みを受くることは心の念ずる所に隨ひて、樹より之を得。四樹の中に光明林あり、金銀・瑠璃を蓮華池と爲して林樹を莊嚴れり。融金の聚りの如くにて、處々に皆、須陀の味あり、善淨・無垢にして淸潔・香美なり。大力自然の須陀の味有り。復た衆鳥ありて、之れを視れば愛す可く、其の音は美妙にして莊嚴を爲す。眞金を首と爲し、白銀を翅と爲し、毗瑠璃を胸とし、赤寶を嘴と爲し、蓮華色寶を以て其の目と爲す。是くの如き衆鳥を以て莊嚴と爲せり。銀葉の樹上には眞金の鳥あり、黃金の樹上には白銀の鳥あり、毗瑠璃の樹には赤蓮華の鳥、赤蓮華の樹には青寶王鳥あり。一切の衆鳥は酒を飲み果を食ふ。七寶の樹ありて、七寶色の鳥は其上にて遊戲す。復た衆の蜂ありて赤寶華の如し。作りし種々の業の受くる所の身なり。蓮華中に於いて遊戲して樂みを受く。是くの如き樹中に一切の功德の影は皆な悉く具足し、天子・天女は此の樹上に於いて遊戲して自から娛しむ。其の林は諸の天の功德を具足す。若し天と阿修羅と共に鬪ふの時、釋迦天王は諸の天衆に告ぐ。『速に疾く莊嚴れよ、阿修羅軍は樂見山頂に住する所の諸天を惱亂す』と。三十三天は是の語を聞き已りて光明林に向ふ。一切の天衆は天帝釋と共に四樹の間に入る。光明林中の毘瑠璃樹は淨よきことは明鏡の如し。自から其の相を見て鬪の勝否を知り、若しくは身分を損するかは具さに悉く之を見る。是くの如くにして樹中に自から其の身を見るに、若しは打たれ、若しは害はれ、若しは割壞れ已りて復た生まるを見る。若しは首を斷ち、腰を斷ちて卽時に逝歿ゆくを見る。此の樹中に於て皆な具さに之を見る。其の見る所の如くに諸の天子に告ぐ。『當さに橫死を避くべし。甚だ大利を爲すも、阿修羅は鬪ひて此の天子を害せん』と。帝釋は聞き已りて告げて言く。『大仙よ、汝、鬪戰すること勿かれ。必らず當さに衰害して非時に壽を夭せん』と。比丘、思惟して天樹の中を

自から穿掘ず、人を敎へて掘らしめず。若しは蝎若しは蟻・蝦蟆・黃[二〇]鼬種々の衆生ありて、此の衆生の居る處を知り、自ら穿りて壞さず、他を敎へて作さしめず。或ひは禁戒を受け、或ひは戒を受けざるも、若し惡を爲すを見れば、敎へて懺悔せしむ。云何がして盜まざるや。若しは是れ他の地、若しは陶師の處にて、若しは餘人の乃至泥土を自ら盜み取らず、人を敎へて取らしめず。他をして戒に住せしめ、他の盜む者を見れば隨喜を生ぜずして、勸めて作さざらしむ。是れを不殺・不盜と名く。是の持戒の人命ち終りし後に光明天に生まれ、心は常に歡喜し、歌舞・戲笑し、遊戲して樂みを受く。其の身の光明は常に天衆を照らし、多くの天人あり園林にて遊戲す。第一の持戒なれば此の天の處に生まれ、善業を作せば、人斯る樂報を受く。有所る園林は金網にて彌覆せられ、寶鈴の妙音・毗瑠璃の鈴は善業の成ずる所なり。遙かに天子を見て、鈴中に歌頌して是くの如きの言を說く。『善く來りしかな。天子・善を修めしの人』と。寂靜の偈を以て頌を作りて曰く。

善く寂靜の心は持戒を護る。　持戒、清涼にして今樂みを受くるなり。　善く禁戒を持して種々に行へば、後に涅槃或は樂報を得ん。[二一]戒は惡道を遮りて善處に至らん。　是の故に持戒して後に清涼なれ。　持戒の人は臨終の時に、其の心安隱にして恐怖れず。　我れに惡道の怖畏なし、淨戒を持するを以て能く救護す。　汝よ、持戒を以て善く護持し、天中に至ら[二二]令めて、放逸する莫かれ。

是くの如く天子の善業を以ての故に、鈴網の音は偈頌を演說して其の心を覺悟らしめ、放逸を離れしむ。諸天子ありて先の世に於いて持戒し來りし者は、是の法を聞き已り、少時く戒を持して放逸に入らず。若し天、戒を持して多世を經ざれば則ち放逸に入りて、自ら覺知らず。法音を聞くと雖も即ち放逸に入り、鈴網の覺悟の音を遠離して、更らに餘林に詣たる。七寶にて光明林中を莊嚴り、其の林の廣長なることは三千由旬なり。唯だ四地及び善見城を除きて餘は勝る者無し。其の

【二〇】鼬の字は、宋、元、明、三本に依る。

【二一】戒の字、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二二】令の字、宮內省圖書寮本に依る。

心に從ひて得、緣轉すれば速かに流れ注ぐ。　是くの如くに流轉して行ひ、是くの如く諸業を作りて、種々の果報を得るなり。　微細の心流行し、一念も常に住せず。　行く處は知るべからず、常に形色あること無し。　將に人は何所に至り、何等の道を行き、到り已りて何處に住せんや。　身は業の爲めに作られる所にして、心の作る所の業を見るとも、作者は見るべからず。　此の心は調伏し難く、其の形は見るべからず。　遍く諸の衆生を害ひ、目無くして速かに業を造る。　是の心の性は幻の如くにて、惡に從つては惡報を得ん。　是の心の性は幻の如くにて、行く處は甚だ知り難し。　能く將に一切人をして無量の生死の處にをもむかしむ。刀の能く割る所に非らず。　火も亦た燒く能はず、　是の心は目なしと雖も、一切人を燒害し、業の繩は甚だ堅牢にして、諸の苦惱の人を縛りて百千の生死を受けしむ。　將に去りて見るべからず。　須臾に善業を作し、須臾に不善を起す。　心は善・不善を作し、調伏すれば則ち樂みを得ん。　六根は境界を緣じ、多く貪りて厭足こと無し。　心の將に至らんとするを覺らされば、惡道にて苦惱を受けん。

是くの如く比丘は婆羅門の大善業を作すを觀ずるに其の願は狹小なり。見已りて思惟し、自から其の心を誡しむ。是の如き善業は或は天身を得、或は生死を離なる。心の爲めに使はれる所となれば、畜生中に墮す。心の願力の故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て、第九地の名づけて光明と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞知にて見るに、若し人持戒し、轉じて他人に敎へ、自からは惡を作さず、他を敎へて作さしめず。作すを見れば捨つるを勸め、自ら禁戒を護り、人を敎へては戒を護らしむ。堅固にして缺かさず、悉く淸淨ならしめて不殺・不盜なり。云何がして殺さざるや。若し地あつて多くの衆生有るを見れば、持戒の爲めの故に

王の遊戲の處に詣る。是の婆羅門を[16]三摩多と名け、此の大王を見るに威德を具足す。王に白象ありて名けて雲聚と曰ふ。寶鈴にて莊嚴り、眞珠の金網を以て瓔珞と爲す。善巧なる工匠の成就する所にて白象を莊嚴れり。種々に歌戲して遊戲の處に詣たる。端正なること第一なり。時に、三摩多婆羅門心に自から念言すらく『此の白象は第一の快樂なり。我れ當に願生すべし。天帝釋の爲めに白象王と作らん』と。布施力及び願力を以ての故に、命ち終りて天に生まれ、天帝釋の爲めに白象王と作る。比丘は觀じ已りて頌を說いて曰く。

此の業は畫師の如し。處々にて業に牽かされ、[17]心王の力甚だ大にして種々の報を造作す。勝れし因緣に轉ぜられて、處々に心に使はれ、在在の一切處にて三界の道を行ふ。一切衆生の業は、自在に心に使はれて行ふ。是の故に心を調伏すれば、能く不退の處に至らん。[18]轉々して調伏し難たく、處々に妄りに攀緣す。若し善く心を調伏せば、調伏は則ち安樂にして、若し能く心を調伏すれば則ち能く衆の過を斷たん。勇者は過惡を離れて、復た諸の苦を受けず。若しは此の世の苦惱、若しは未來世の苦、一切を調伏せずんば、心を輕んずる因緣の故に、天龍・阿修羅・地獄・鬼・[19]羅刹は心の常の導主と爲りて、王の如くに三界に行ぜしめん。心は將に天上に詣たり、復た人中に行じ、心は將に惡道に至り、心は世間に輪轉せん。心の輪轉は人を壞し、境界は癡に誑らかせらる所にして、愛は諸の衆生を漂はし、現に無邊の苦を得る。一行を常に隱覆すれども、大力も調伏し難し。害すれども見るべからず。輕動して速に流行す。若し人、智慧あれば、是くの如き心を調伏し、其の人は魔網を離れて、則ち能く彼岸に到らん。邪を憶念し諂曲なること深く、極めて輕動なれば、是の心は惡しき險岸にして、將に人をして惡道に至らしめん。是くの如く衆の惡を離なれ、諸根の使と爲らず、諸の惡法に著せずんば、不滅の處に至るを得ん。心は因緣に從ひて生じ、須る所は

【一六】三摩多（Sammata）。三末多とも作る。劫初の王の名。

【一七】心王。心の主作用を心所の伴作用に對して心王と云ふ。心王は總じて所對の境を了別し、心所は之に對して貪瞋等の情を起す。

【一八】轉の字、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【一九】羅刹（Rākṣasa）。暴惡可畏と義譯す。

此くの如き林樹は甚だ愛樂すべし。三十三天と夏四月の時、此の林中にて遊戲し樂みを受けん』と。時に、諸の天衆は帝釋に白して言さく『王の敕する所に隨ひて、我れ當に奉行すべし』と。是の語を說き已りて歡喜林に近づくに、歡喜林中の先きより住む諸天は五欲の樂みを受けて、天の勝れし幢及び白象王を見心に大歡喜し、出でて帝釋を迎ひ、禮拜し・供養し、頂上に合掌して天の伎樂を作し、歌舞し・遊戲して歡喜林に入る。時に、天帝釋は卽ち白象より下りて、諸の天衆と歡喜園に入る。一切の天衆も亦た皆な家より下れり。是くの如き象の頭・鼻端・及び象の兩脇の一切の天衆も皆な白象を捨てて歡喜林に入り、遊戲して樂みを受く。歡喜林中の先きより住む諸天及び天主と阿修羅〻伐つ。諸の天衆等は夏四月に於いて天の快樂を受く。釋迦天王は諸の天衆と共に樂みを受け自ら娛む。此の如き時間に、若しは諸の天子の善業將に盡きんとす。乃至善業を受け盡くし、命ち終り還退して、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生まるれば常に安樂を受け、種々に解了り、端正なること第一なり。衆人に愛せられ、山林・河池の愛樂すべき處の其の中に生まれ、大國土に主となり、富樂なることは自在なり。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知りて伊羅婆那の大龍象王を觀ず。何かなる業の緣を以て、大身・大神通力を成就し阿修羅と鬪ひて大名稱を得るや。何かなる業を以ての故に畜生身を受くるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、天中の壽命は七萬歲に滿てり。過去の世に[一四]毘陀論部にて[一五]不羅那と名づくる婆羅門ありて福德を修め、好く布施を貧窮・盲冥の苦惱の人に行ひ、善心を以ての故に常に施與して衆生を利益す。爾の王ありて善見と曰ふ。節會の日に於いて宮を出でて遊戲す。諸の天衆の如くに八萬四千の大白象王と與なり。金網は彌覆し、寶鈴にて莊嚴て、猶ほし如來の一切の金鈴を以て莊嚴を爲すが如し。八萬四千の婇女は圍遶を爲し、八萬四千の伎樂の音にて遊戲の處の園林の殿に向ふ。是の善見王は第一の威德にて大樂果を受く。時に、婆羅門は威德を具足して、善見

【一四】毘陀(Veda)。鞞陀、又、皮陀・韋陀、圍陀、吠陀と音譯す。婆羅門の經書の名。明又は智と譯す。

【一五】不羅那(Purāṇa)。吠陀の中の富羅那書のこと。

の行き住まるを覺知らず、猶ほし須彌山頂に住するが如し。象の頂上に於いて復た大山に化す、名づけて界莊嚴とし、種々の界を以つて莊嚴と爲す。天樹・河池・園林・蓮華にて莊嚴れる處にて遊戲し樂みを受く。是れを象王の頂の化したる大山と名づく。其の白象王は其の牙の上に於いて園林を化作し、一億の月の如く多くの衆華あり。其の地は白淨にして[一〇]須陀色の如し。多くの衆蜂ありて倶翅羅の音は其の中に充滿てり。無量の衆鳥は衆寶にて莊嚴り、孔雀、[一一]命々是くの如き無量の種々の衆鳥は牙より化生す。其の白象王の身量は廣大にして、大衆は圍遶り、大身・大力にして、行歩は平正、搖動がずして歡喜園に向ふ。其の白象王は鼻の兩孔より河流を化作して、閻浮提の恒河の水の如し。[一二]閻牟那河の水は池より流れ下り、其の水は清淨・涼冷にして、濁らず上從り下る。白象の鼻中より出る所の河流は、亦た復た是くの如し。四天下の人の所住の處に於いての林樹・藥草は亢旱き、焰熱にて穀麥を增長す。草木の葉の上に水相ありて現はる。之を名づけて露と爲す。其の象の鼻の水は空從りして下りて地に去るとも、遠き故に風の爲めに吹かれて散り、而かも氣は燥くが故に露を少なからしむ。三天下中之を名けて露と爲す。復た次に天の白象王若し霧氣を放てば墮して天中に行く。世人之を觀るに、其の色は則ち白く、外道は說いて[一三]因陀天王の行ずる所の道と爲す。復た說いて言ふことあり。白象王道の如實の白水を風持し墮ちずして、空中に在ることは猶ほし陽燄の如し。直にて遠きを以ての故に之れを見るも了らずと。其の象の頭上に大山の頂ありて、寶幢・華蓋に懸けるに寶旛を以てし、毘瑠璃を輪とし、眞金を蓋と爲す。其の光は明曜として猶ほし日光の如し。其の幢上に懸けるに長旛を以てし、其の旛中に於いて大光明を出せり。大海の中の諸の阿修羅は、是の事を見已り各相ひ謂つて言はく。『帝釋天王の勝れし旛は已に現ぜり。白象王に乘りて歡喜園に向ひ給ふ』と。時に、天帝釋は遙かに園林を見、諸の天に告げて曰く『汝、此の林を見て甚だ愛樂すべし。釋迦天王は阿修羅を破り給ひて、既に勝つことを得已りて、此の林に遊戲す。

【一〇】須陀色(Sudhā)。白色のことなり。

【一一】命々(Jīvajīvaka)。又、共命鳥、生生鳥とも稱し、一身兩頭の鳥なりと云はる。

【一二】閻牟那(Yamunā)。又、黶牟那、藍牟尼那に作る。鉢邏耶伽(Allahabad)にて恒河に合す。

【一三】因陀天王。帝釋天(Indra)卽ち因陀羅、因坻、因提、因提梨、因達羅)のことなり。インドラはもと雷雨の神なりしも佛敎當時は最高神として梵天と共に双び稱せらる。

牙の端に百の浴池あり。一一の浴池に千蓮華あり、一一の蓮華に皆な千葉ありて七寶の成ずる所なり。一一の葉の端に皆な千數の七寶の衆蜂あり、一一の葉の間に千天子あり、其の象の頂上に諸の天女ありて相ひ妨礙げず。天の伎樂を作り虚に乘りて遊び歡喜園に到る。其の象の兩脇は二園林に化す。一を喜林と名け、二を樂林と名く。其の林中に於ける河池の蓮華は、皆な悉く七寶の意樹を具足せり。諸の天子等は其の中に遊戲して五欲の樂みを受く。天子・天女は林中に充滿す。時に伊羅婆那の大白象王は譬へば第二須彌山王の如し。歡喜園に詣るに其の象の背上は化して大城と作る。平正・柔軟にして、其の城の街巷は七寶の宮殿なり。園林にて莊嚴れることは、猶ほし第二の善見大城の如し。是くの如きの化殿は七寶の成す所にして一百柱あり、以て莊嚴と爲す。殿に華池あり、帝釋天王は諸の天女と其の中に遊戲して天の伎樂を作す。憍尸迦天王は大殿に坐して歡喜園に向ふ。其の身の動ぜざることは須彌頂の如し。其の象の耳の中に復た華池を生ず。其の池の縱の廣さは十由旬に滿ち、其の第二池は十一由旬なり。一を甚深と名づけ、二を清淨と名づく。八功德水は其の中に充滿し、池中に華を生じて優鉢羅と名づく。毘瑠璃を莖とし、赤寶を華と爲し、衆蜂にて莊嚴て天香を具足せり。其の花は優鉢羅華を開敷きて、天子・天女は華の鬚の上に坐して遊戲し娛樂す。或は天子ありて水を以て遊戲し、或は天子ありて蓮華にて遊戲し、白象の行を爲し住を爲すを知らず。其の象の鼻端は化して樓殿を作し、廣さは五由旬あり、種々の衆華・曼陀羅華は悉く遍く莊嚴れり。衆蜂には妙音あり、牛頭栴檀の葉を以て樓殿を覆ふ。復た金樹あり、種々の衆華を以て其の上を覆ふ。諸の天女ありて、華鬚上に坐して衆の妙音を歌ひ、天王を讚歎す。是くの如き象鼻の化する所の[九]樓殿は、白象王の蓮華の中に於て化生せり。蓮華の廣さは一由旬にして、百千葉あり。其の葉は廣長、香氣は第一にして十由旬に滿てり。一一の葉中の天子・天女は、其の中にて遊戲し各の相ひ見ず。是くの如く遊戲しても相ひ妨礙げず。天王釋と歡喜園に向ひても皆、象

【九】樓の字は、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

て色・香・味を具す。天子之を食して乃至充足す。復た天女と遊戲し娛樂して歡喜園に入る。歡喜園に住する所の天子は、是くの如き勝妙し樂みを成就す。殿從りして下り此の地中に於て卽ち蓮華を生ず。毘瑠璃を莖とし、眞金を葉と爲し、其の莖は柔濡くして、見る者は愛樂す。色・香を具足し、足を擧げ足を下し華を蹈みて行く。是くの如く步々に天樂を成就し、其の念々に隨ひて五欲の樂みを受く。一切の諸根は、自からの境界に於いて厭足くことを知らず。所謂、眼は常に色を貪りて種々に瞻視し、愛樂して息まず。眼を悅樂ましめ、是くの如き色を見て猶ほ厭足かず。耳は妙なる聲を聞きて厭足を知らず。是くの如く鼻は香ぎ若し諸の香を齅ぎ大愛欲を生ずれば厭足を知らず。舌は美味を貪りて厭足ことを知らず。是くの如く愛觸も厭足ことを知らず。是くの如く念ずる所は皆な是れ愛念にして自身を愛樂す。林中に遊戲して欲を受けて厭くこと無し。境界を母と爲し、諸根を攢と爲し、憶念の風は吹き、自ら高く薪を爲し、欲火は熾然たり。欲に厭足無く、愛欲の心を以て歡喜園に於いて遊戲して樂みを受く。釋迦天主は雜寶の衆山に於いて阿修羅を破り、大名稱を得しことは上に說く所の如し。復た來りて歡喜林中に入り、諸天に告げて曰く『汝等天衆は當に歡悅を生ずべし。歡喜園に入りて五欲の樂みを受け、遊戲して自から娛しめよ。我れも亦た自から歡喜園に於いて遊戲して樂みを受くべし。已に魔軍の毘摩質多羅、及び惡龍の等を破れり。一切の天衆、及び諸の天女は皆な吾が遊戲の處に至りて、五欲の樂みを受く可し。滿夏の四月、五欲にて自から娛まん』と。時に、天帝釋は三十三天に向つて是の語を說き已りて、心に大歡喜す。白象王の伊羅婆那に告げて言く『汝今[八]五欲にて莊嚴れり。汝を諸の天衆幷びに諸の天女と共に遊戲し娛樂せん。歡喜園に於いて汝は當に化身すべし。諸の天衆をして汝の頂上の牙の頂きの上に乘らしめ、遊戲の華池・園林・山峰の中に向ひ、先の化す所の如くせよ』と。

爾時白象の伊羅婆那は天主の敎を聞き、卽ち大身に化す。身に百頭あり、頭に十牙あり、一一の

【八】五の字は、宋、元、明の三本及び宮內省圖書寮本に依る。

其れをして既するを得せしむ。復た他人に敎へて助くることを歡喜ばしむ。云何して盜まざるや。一切の官人は、王に敕令せられて國を持し居を理むるも、聚落の城主・若くは放牧主・若くは邊戍主の敕命せらるる所ありて牛羊を取らしむるとも、是の人戒を護りて取るを肯んぜず。是の因緣を以つて、命終りて後に歡喜天に生まる。三十三天の歡喜の園に復た聽法あつて法會を聞くを得。六齋日に法を聽き、法を受けては一心に法を聽く。是の法會の主は命ち終つて後に天中に生まる。一切の施中に法施を第一とす。此の因緣を以て命ち終りては三十三天の歡喜の園に生まる。彼の天に生まれ已りて、無量百千の天樂を成就し譬喩すべからず。當に少分を說くべし。其の林の縱の廣さは三千由旬にて、七寶の林樹を以て莊嚴と爲す。其の歡喜天は餘園に詣らず。是の故に名づけて歡喜園林と曰ふ。自らの功德の名なり。其の林は皆な是の如意の樹なり。天の念ずる所に隨つて皆な樹從り出づ。若し天念を生じて宮殿を須んと欲し、念じ已りて上らんと欲すれば即ち樹林を見る。是れ七寶の殿にて一百の柱あり、一一の殿の柱は、或は金銀・瑠璃・玻瓈・赤寶・硨磲を以てし、是くの如き等の一切の衆寶を用ひて以て殿の柱と爲せり。復た是の念を作し、柔軟き階道を得んと欲せば、此の殿堂に昇りて念ずるに隨ひて即ち階道を成就するを見る。既に宮殿に入りて復た自から思惟す。『今此の宮殿に蓮華池を生ぜん』と。念に隨ひて即ち諸の蓮華池を生じ、七寶の色の鵝鴨・鴛鴦を以て莊嚴と爲す。復た是の念を作さく『我れ此の堂中にて應さに天女の歌舞・戲笑有るべし』と。念に隨ひて即ち天女の來り赴むくこと有り、心の隨に戲笑し歌舞して供養す。復た是の念を作さく『我れ今應さに天衆の伎樂を得べし』と。其の念ずる所に隨ひて、風樹の葉を吹き、互ひに相ひ敲觸れて妙へなる音聲を出し、諸の天樂に勝されり。復た是の念を作さく『今此の宮殿にて應さに飲食を生ずべし』と。其の心に念ふに隨ひ、樹枝は割裂れ飲河を流出して色・香・味を具す。復た是の念を作さく『我れ今應さに須陀の味を得べし』と。其れを念じ已るに隨ひて即ち上味の須陀の食を生じ

【七】六齋日。齋とは梵語の逋沙他(Posadha)にて、中食を過さずと云ふことなり。每月、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六ケ日は、四天王が人の善惡を伺ふ日なり。又は惡鬼の人を伺ふ日なりとして、諸事を愼み、殊に、正午を過ぎて一切食物を絕てば齋日と云ふ。

修羅・鉢摩梯・惱亂(等の)惡龍に告げしむ。『汝等今日應さに歡喜を生ずべし。佛の正法は今已でに損減りて、魔軍は增長せり』と。是くの如くに魔使は卽ち水底に詣り、毘摩質多・阿修羅の所に至りて廣く上の事を說けり。時に、阿修羅は之れを聞き歡喜びて卽ち惱亂の惡龍王の等に告ぐ。富樂城中の惡龍は之を聞きて大いに歡喜を生じて、世間人の爲めに惱亂を作ることは上に說きし所の如し。時に、天帝釋は、毘留勒天王の是くの如き語を說くを聞き、雜殿林に入りて三十三天と共に斯の事を論ず。『護世天王は來りて我に白して言ふ。魔天は大力なり、阿修羅・毘摩質多・惱亂惡龍なり。汝應に諸天衆を集むべしと。悉く來りて此至れり。我れ當に彼の寶にて莊嚴れる山に至りて阿修羅と鬪はん』と。諸天は之を聞きて答へて言はく『是くの如くせん』と各は本宮に還へりて自から莊嚴れり。雜殿の天衆も亦た本宮に還へりて種々の音聲にて歌舞し・戲笑して雜殿林に入る。時に、天帝釋は諸の天衆と雜殿林を捨てて餘地に詣たる。此の雜殿林に住する所の天子の受くる所の樂み、乃至善業を受け盡くして命ち終りて還退き、業に隨つて流轉して地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生まれば快樂を成就して、莊嚴は端正なり。少從り終りに至るまで、常に雜色の種々の莊嚴を愛し、種々の語を好みて衆人に愛せらる。若し出家を行へば師子座に昇り、說法師と爲りて種々の語を解き、之を聞くものに足ることを知らしむ。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀づるに、彼れ聞慧を以て三十三天の第八の地處の歡喜園と名づくるを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善心・深心にて殺さず・盜まず。亦た他人を敎へて殺盜をせしめず。若し殺す者を見れば勸めて殺さざらしめ、人に作すことを敎へず、作すことを見れば喜ばず。若し犯す所あれば尋ねて過を悔ひしめ、惡知識を離る。云何して殺さざるや。鳥の殺害せらるるを見ては救ひて放捨しむ。自からは惡を作さず、設ひ作すとも卽ち悔ひて不殺戒を受け、財を以て命を贖ひ、

【六】龍(Nāga)。那伽と音譯し、長身無足なり。八部衆の一、神力を有して雲雨を變化す。

の如き報を得るは、印の物を印するが如くにて、天中の樂果は因なくして生ずるには非らず。地獄の苦報も亦た復た是くの如し。是れ我が作りて他人報を受くるには非らず。

復た次に比丘、業の果報を知りて雜殿の林を觀ず。云何がして衆生は業を造りて三十三天に生まるるや。若し諸の世間に衆生ありて、非法を行ひ、父母に孝ならず、沙門・婆羅門及び諸の長宿を敬はず、善友に近よらず、業果を信ぜず、邪見を行ふ。是くの如きの時に、魔王は歡喜びて非法を行ふなり。時に此の世間に於て四天衆有り。何等を四と爲すや。一を鬪諍魔使と名け、二を荒亂魔使と名づけ、法を行ふ人をして亂心を作すを爲さしめ、法を聽く者をして惛濁して睡眠ならしむ。三を貪癡魔と名け、諸の施主の心をして貪惜を生ぜしめ、是の如き念ひを作らしむ。『若し我れ物を以て諸の福田の沙門・婆羅門に施せば、我が妻子は當に之の如くんば何かにして衣食して自らを濟はんや』と。四には離正念魔使と名け、出家の人をして正念を離れしむ。是れを初惡と爲す。若し人、城邑・市肆に入りて諸の女人を見、酒肆にて鬪諍て互に相ひ撾打ち、夢に破戒を行ふ。是れを四種の魔使と名づく。若し閻浮提の人非法を行じて此の惡を作す時は、四種の魔使は心に歡喜を生じて、魔王に白して言さく『正法を損減し、魔軍を增長す。甚だ慶悅ぶべし』と。魔王は之を聞きて使者に問ふて言く『云何がして世間は我が法を增長して正法を減損すや』と。時に魔使は魔王に白して言さく『閻浮提の人は非法を行ひ、父母に孝ならず、師長・沙門・婆羅門を敬はず、正法を聽く者を我れ惛睡せしめ、出家の者をして風俗に入らしめ、法服を捨離せしむ。或は出家人・或は持戒を有るもの・或は梵行の人を其の夢中に於て婦女の身を作りて其の心をして亂さしめ、諸の施主をして財物を貪惜み、慳貪に心を覆ひ、妻子を戀著せしむ。出家の者をして種々の販賣することを習學せしめ、鬪諍ひて互ひに相ひ撾打たしむ。我れ是くの如き種々の方便を作りて、魔を增長し、正法を損滅さしむ』と。時に魔は之を聞きて卽ち使者を遣はして　羅睺・勇健・毘摩質多羅(等の)阿

【三】羅睺。羅睺羅阿修羅(Rāhusura)の略、四種阿修羅王の一。羅睺羅(Rāhu)は執月と譯し、此の阿修羅王は帝釋と戰ふとき、能く其の手を以て日月を執りて、其の光を障蔽する故に名く。

【四】勇健。四種阿修羅王の一。Bhandhisura(婆稚阿修羅、跋墀、跋稚跋移、末利、婆梨に作る)のこと。天と鬪ふときに勇健なる力あるより勇健と云ふ。

【五】毘摩質多羅(Vimacitra)、新譯には、吠摩質呾利と云ふ。四阿修羅王の一。淨心、綺畫、寶飾と譯す。乾闥婆の女を娶つて舍脂夫人を生み帝釋に嫁せしむ。

爲す。復た華池ありて諸の蓮華を生じ、摩羅伽多を莖と爲し、閻浮檀金を華と爲す。種々の色の蜂は妙なる音聲を出して蓮華の間に滿てり。譬へば閻浮提中の香樹の華に、衆の蜂は中に滿つるが如くにて、雜殿の華池も亦た復た是くの如し。譬へば畫師の如くにて、若し畫師の弟子閻浮提にて曾つて聞きし所の事に於て、衆の雜彩を以て種々の像を畫く、其の雜殿の林も亦た復た是くの如し。復た雜色の種々の衆鳥ありて、頭・足は雜色にして、其の胸・腹も亦た復た是くの如し。或は衆鳥ありて、金の臆・銀の翅にて、赤寶を背と爲し、目は赤寶の如し。或は衆鳥ありて白銀を臆と爲し、眞金を翅と爲し、靑毘瑠璃を以て兩目と爲し、赤寶を瞳華とし、雜寶を背と爲す。七寶の色の種々の衆鳥を以て莊嚴と爲す。雜殿の林中に復た山峰ありて、靑寶・珠玉・硨磲・毘瑠璃寶・赤寶・眞金の光明は普く照らし、林中に遍滿し、互ひに相ひ間錯り、施流し、宛轉して、此の林中に滿てり。莊嚴の奇特なることは甚だ愛樂すべし。雜殿の林中に復た雜蔓ありて互に相ひ交錯る。毘瑠璃の莖にして赤寶を鬚と爲し、以て纏蔓を爲し、果實にて莊嚴れり。白銀を莖となし、靑寶を鬚と爲して光明は圍遶て、硨磲を枝と爲し、眞金にて纒り遶る。赤寶を枝と爲し、白銀にて纒絡む。是の如く二色にて互に相ひ纒り裹む。是の雜殿林に復た三色ありて莊嚴れり。樹枝を以て幃帳と爲し、毘瑠璃の枝は眞金・赤寶を以て纒遶る。是の如く赤寶を枝と爲せば、金銀を纒と爲し、白銀を枝と爲せば硨磲・赤寶を以て纒遶と爲す。是れにて一一枝に一一の枝を纒絡む。雜殿林中に復た雜華ありて、眞金を枝と爲し一の毘瑠璃の華有り。若し銀枝なれば因陀色の華を以てし、若し金枝なれば赤寶を以て華と爲し、硨磲を枝と爲し、毘瑠璃の華は衆色の果を生ず。亦た復た是くの如くに雜心の起せし所には、諸の雜業を作す。雜因集まるが故に種々の報を得るなり。業の因緣を以て雜殿林に於ては雜の果報を受く。因果の相似るは種々の子の如くにて相似の果を得るなり。其の業力の如くに其の作る所に隨ひ、其の時節に隨ひ、心に隨ひて雜生す。是くの如き業を作して是く

【一】摩羅伽多(Marakata)。摩羅伽陀、末羅羯多と音譯す。譯して綠色寶とす。よく諸●毒を避くと云ふ。

【二】因陀色。因陀羅尼羅目多(Indranilamukta)(因陀尼羅、因陀羅尼羅とも作る)即ち帝釋天の靑珠の色のことなり。靑色なり。

卷の第二十七

觀天品第六之六

三十三天之三

復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第七地の名づけて雜殿と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。若し衆生ありて故き塔寺を見るに、或は惡國王・邪見の大臣は僧田の業を斷つ。是の如き衆生は、王禁を畏れずに僧田の物を施し、此の惡王に向ひて佛の功德を說き、善き言にて佛を嘆ふ。是の人命終れば雜殿の處に生まる。此の天に生まれ已りて、五樂の音聲にて歌舞し、戲笑し種々の樂みを受く。復た異業ありて此の天に生まれ、不殺・不盜にて屠兒の所に於ては財を以て命を贖ひ、自からは惡を作さず、他人に敎へず。若し造惡するもの有れども心に隨喜ばず。云何して盜まざるや。自から國主と爲り、或ひは大臣と爲りて稅を枉げて奪はず。亦た他人を敎へて其れをして戒に住せしむ。此の二業を以て雜殿の處に生まる。其の林の縱の廣さは三千由旬にして、種々の宮殿にて天子は遊戲す、故に雜殿と名く。諸の天子等の一一の宮殿の莊嚴は奇妙にして、金色の蓮華の香氣第一なり。毘瑠璃の蜂は妙なる音聲を出し、其の蓮華林の一切は雜生にして、一一の華池には種々の蓮華あり。或は華池の赤寶の蓮華には雜瑠璃の華あり、或は華池に諸の蓮華を生ずるものありて、金華・瑠璃の二華は雜生す。一一の蓮華各百葉あり、或は金葉・或は赤寶の葉あり。復た雜華にて毘瑠璃の葉ありて、金色の衆蜂は其の中にて遊戲す。復た華池ありて諸の蓮華を生じ、赤寶の衆蜂を以て莊嚴と爲す。復た華池ありて諸の蓮華を生じ、毘瑠璃の莖にて眞金を華と爲す。或は華池ありて諸の蓮華を生じ、眞金を莖と爲し、白銀を花と爲す。或は華池ありて諸の蓮華を生じ、硨磲を莖と爲し、白銀を華と

此の天の受くる所の五欲の樂みは、上妙の色・聲・香・味・觸等なり。乃至善業を受け盡くして、業に隨ひて流轉し地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し、人間に生まるれば第一安樂にして、病苦に遭はず。或は大洲に居りて怨敵を畏れず。或は大王と爲り、或は大臣と爲りて常に安樂を受く。餘業を以ての故なればなり。

くの如し。若し天、住することを念ずれば、林の即ち地に住することは譬へば飛鳥の空に翺翔するも住すれば則ち地に依るが如し。此の天の園林も亦た復た是くの如し。此れ倶吒天の一勢力なり。善業を以ての故に、復た勢力あり。善業を以ての故に、其の行く處に隨ひて衆の妙音の鳥は常に天と倶もなり。是れ倶吒天の二勢力なり。復た善業ありて、其の行く處に隨ひて、諸の蓮華池の衆蜂は妙音にて、鵝鴨、鴛鴦は以て莊嚴を爲す。是れ倶吒天の三勢力なり。復た善業ありて、天の華鬘を著け、空中を行くに自然なり。千葉の蓮華あり、毘瑠璃を莖とし、諸の天女等は其の華台に坐して、與に共に遊戯す。是れ倶吒天の四勢力なり。復た善業有りて、天の至る所に隨ひて、空中を行くに、天の諸の寶器に天飮は盛滿し、自然に手に在りて諸の天女と共に、次第に之を飮み、歌舞し、戯笑して、意の如に能く行く。是れ倶吒天の五勢力なり。復た業力ありて、其の念ずる所に隨ひ、一切を成就す。若し憶念ありて異方に行かんと欲すれば、能く山峰を越え、園林の華果は皆悉く具足す。空中を行き諸の天女と與に天の伎樂を作し、意の至る所に隨ふ。善法堂天、善見城天は此の天衆を見、此の高殿に昇り山谷を下觀して大歡喜を生ず。天の使者の如くに閻浮提を觀ず。善法堂天、善見城天は此の天衆を見て共に相ひ謂ひて言く『此れ倶吒天なり。念が如くに能く行きて、能く我等の處を踰ゆ。處は無礙きなり』と。是れ倶吒天の六勢力なり。釋迦天王は其の后と與に百千葉の蓮華の台上に坐し、空に乘りて遊ぶ。善業の化せし所の一一の華葉に五の天女あり、天鬘にて莊嚴りて、華葉に坐することは融金の聚りの如し。天の妓樂を作し、帝釋を瞻仰し、端正、殊妙にして天帝釋と倶吒天に詣たる。時に、彼の天衆は帝釋の來るを見て、皆大いに歡喜び、出でて帝釋を迎ふ。頭面して敬禮をし、美しき言にて讃歎し、帝釋を圍遶きて、四面に住す。或は山峰に在り、或は遊戯の處、或は山頂に在り、或ひは園林に在り、或ひは蓮華池にて帝釋と共に住す。倶吒天衆は、天帝釋と久時く遊戯し還りて本宮に歸り、釋迦天王は善法堂に還へる。

隨つて、父母所有の資財を盜まず。意を悅ばす軟語にて利益し、少く言ひ、常に香華を以て供養し、禮拜す。佛の功德を念じ、師長を恭敬して禮拜す。問訊するに言を和げ軟らかくす。善く惡知識を見るも、親近まず、其の行ひを樂まず。不善の惡人、不正行の人、世間の賤しむ所は共に同じく行はず。ともに同じく住せず。宿老に親近み、遵奉ひ、祇敬ふ。佛の禁戒を受けて智慧を具足す。眞心にて持戒して他を惱壞さず。衆人の愛する所の善言を讚嘆し、軟語にて供養す。奴婢、僮客に横に怖を加えず。飮食に足るを知り、餘食を飮まず。衆生を惱まさず、瞋恚を喜ばず。下賤の屠兒、魁膾の販賣し貿易するに與らず。賣買は質直にして、衆生を誑らかさず。酒肆に入らず。女人の爲に輕易ぜらるゝ所とならず。威儀を壞さず。[三九]庠序に進止すれば言は則ち奉行なり。他人の好惡、長短を求めず。心に恨みを懷かず、毀呰を說かず。亦た言[四〇]訟はず。他田の植えしを見ても嫉妬を生ぜず。租稅は法に依り、王者を欺かず。池田の漑灌の水を盜まず。若しは晝、若しは夜他の果を取らず。一切の衆惡を悉く捨てゝ爲さず。或ひは一一を止め、或ひは復た下止む。云何下止とするや。遍く諸業を作す、是れを下止と名づく。云何中止とするや。作し已りて懺悔し、毀呰して作らず是れを中止と名づく。云何が上止とするや。遍く業を作らず、他人に敎へずして他を勸めて捨てしむ。隨喜を生ぜず、惡人の中、下の業を捨離す。是くの如き三人は三種の果を得。謂く上・中・下なり。是くの如く善を行ひ惡を捨つる業の人、身壞れ、命終つて倶吒天に生まる。旣に天に生まれ已りて身に骨皮無し。汚垢を離れ、受樂を成就し、稱說すべからず。譬へば轉輪聖王の七寶の千子の四天下に王となりて受くる所の樂みの如きは、此の天の樂みに比れば活地獄の如し。其の天の住處は縱の廣さは三千由旬にして、七寶の天樹は河池を天中に於て莊嚴り、名づけて行林と曰ふ。其の林の金樹は、天の憶念に隨ひて悉く樹より生ず。天の至る所に隨ひて常に天と倶なることは、轉輪王の七寶の王の心念に隨ひて、常に王と倶なるが如し。此の天の園林も亦た復た是

【三九】庠序は支那古代の小學校。殷に庠と云ひ、周に序と云ふ。轉じて廣く學校の意味に用ゐる。

【四〇】訟の字は、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

り二由旬に滿てり。其の華は一切の諸の華より勝れ、妙色の光顏、天服にて莊嚴れり。功德の生ずるは天の善業なるが故なり。譬へば日出づれば衆華の開敷くが如くに、天子旣に生まるれば天女の色敷くなり。天子の所に至りて種々に遊戲して、天子を娛樂ましめ、天子を抱持く。林に詣りて遊戲し種々の伎樂にて歌舞し戲笑す。仰いで天子を瞻て、共に林中に詣る。其の林を名づけて蓮華化生と曰ふ。若し諸の天子の林に入りて戲れる時に、一一の足下に悉く蓮華を生じ、以て其の足を承く。毘瑠璃を莖とし、金網を鬚とし、眞金を葉と爲し、其の台は柔軟かくして、衆蜂にて莊嚴れり。其の足を擧ぐるに隨ひ足を下ろさんとする時に、蓮華は卽ち生じて以て其の足を承く。此の花林より摩偸林に入るに、其の林の金樹は香飮を流出す。葡萄酒より勝るところの色・香・味を具し、諸天之を飮みても醉亂あること無し。天女之を飮み復た往きて[三七]遮都羅林に詣る。其の林の三衆は譬喩すべからず。一者は鳥音、二者は蜂音、三者は天女の歌頌の音なり。彼の諸の天子の三衆は林中の、一一の遊處、一一の華池にて種々の鳥音を聞きて悅樂みて厭足ことを知らず。愛火に燒かれし所なり。乃至、善業を受け盡くして天より命ち終る。業に繫縛る所となりて地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し、人中に生まるれば、妙色、端正にして、大種姓に生まれ功德を具足す。富樂自在にして、心の隨に遊戲し、無病、安隱にして壽命長遠なり。生れて善世に値ひ、或は中國に値ひ邊地に生まれず。或は大王と爲り、或は大臣と爲り多饒の財寶ありて、大商主と爲る。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知りて三十三天の住する所の處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第六處の名づけて[三八]倶吒と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞知にて見るに、若し衆生ありて賊人を獲執すれども罰戮を加えず、苦惱せしめず。或は他の賊を捉へるに、其れを脫れることを得せしむ。潤益の心を以て、衆生を利益し、父母を供養し、病藥を奉施し、心の須る所に

【三七】遮都羅林(Catura)。

【三八】倶吒(Kūṭa)。

む。是の人は命ち終りて三十三天の鉢私他地に生まる。此の天に生まれ已り、善業を以ての故に、其の身の光明は皆悉く普く照らして猶ほし日光の如し。其の光の色相は無量の光明にて靑・黃・赤・白・紫・綠の諸の光は遍く諸天を照し十倍に增勝す。閻浮提の衆の星宿の中にて月光を第一とするが如し。此の地の天、其の身の光明も亦た復た是くの如く衆の色を具足す。餘天を之に比ぶれば、猶ほし螢光の如し。諸の天女等は此の天子を見、皆走り往きて趣むく。天子既に生まれば、莊嚴の具も亦た皆な生まるゝに隨ふ。其の頂上に於ては大靑寶[三四]玉を以て寶冠と爲す。其の光りは普く照らして一由旬に滿てり。餘の大珠寶も此の珠の光りを見ては皆滅して現はれず。猶ほし日出でては螢火も光りを失ふが如し。自然の七寶を以て華冠と爲し、其の光りは普く照らして百由旬に滿てり。一切の光明を以て莊嚴と爲す。靑・黃・赤・白・紫・綠の諸の光りは其の身の上に於て自然に有り。珠寶の瓔珞は七寶の光明にして、其の光りは普く一百由旬を照らす。身に瓔珞を服し、七寶にて成す所なり。其の光りは能く一百由旬を照らす。金剛の[三五]綖を以て[三六]帶縲と爲し胸前に垂る。著する所の腰帶は天虹色の如く、脚に種々の雜色の履屣を著け、其の光明は曜きて猶ほし電光の如し。行きても疲極れず。若し空を行くことを念ずれば、其の向ふ所に隨つて屣の力を以ての故に、能く至る所あり、終りて疲倦れず。著くる所の衣服に經緯あること無く、種々なる衆寶の光明は照曜き殊勝なること愛す可し。天子生まれ已りて卽ち思惟す。『我れ何かなる業を以てか來りて此の中に生れしや』と。適ま此の念ひを生じて自ら往世を見るに、閻浮提の善・不善の處に於て、彼こより命ち終りて此の天に來生す。若し閻浮提中に善業を修行すれば、此の中にて成熟す。我れ善業を作せり。故に來りて此に生れり。因緣を以て生まれ、因無くして生まれしに非らず。須臾の頃に於いて、諸の天女の衆は少壯して妙なる色、光明を具足せり。悉く來りて初めて生まれし天子に親近す。諸の天女等の莊嚴の具の出す所の音聲は、五樂音の如し。其の香は普く熏

[三四] 玉の字は、宋、元、明、三本及び宮内省圖書寮本に依る。

[三五] 綖とは、冕（禮帽）の上を被ふ板で黑色の布を張つたものなり。

[三六] 帶縲。帶を結んで胸より下るひものこと。

時に、諸の天子帝釋の來るを見て、皆大歡喜し、帝釋を供養す。諸の天子等は合掌して白して言さく『我れ善き命ちを得、善き果報を得て、天王に値ふことを得たり。我等を利益し給ふこと父母より過ぎたり』と。是くの如く天衆は既に供養し已る。時に、天帝釋は諸の天子に告ぐ『汝等は皆な悉く我が子の如く、兄の如く、弟の如し』と。相ひ慰勞め已りて、放逸地に入り園林中に於て遊戲して樂みを受く。河流、泉水に蓮華ありて、池中の種々の衆鳥は妙なる音聲を出し、以て莊嚴を爲せり。諸の金華を以て其の地を莊嚴る。其の地は細妙にして柔軟、平正なり。其の諸の樹林は金・毘瑠璃・玻瓈の諸樹にて其の地を莊嚴れり。河泉、流水は衆の飲食を出し、皆悉く具足す。曼陀羅華、[三一]居賒耶舍大蓮華等を以て莊嚴を爲せり。天子天女遊戲し歌舞して、山谷中に於て歡娛び樂みを受く。五樂の音、天女の歌音にて五欲の樂みを受く。善見城中の諸の天子等、善法堂中の諸の天子等は皆共に園林中に於て遊戲す。人中に於て數ば無量時を經て、遊戲し樂みを受け、還りて本宮に向ふ。其の道の種々の遊戲の處にて戲笑し樂みを受け、種々に莊嚴りて本宮に還る。善見城中に住する所の諸天は天樂を受け、乃至善業を受け盡くし天より命終り、其の本の業に隨ひて、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し善業あれば人中に生まるを得て常に安樂を受く。多聞にして知見あり、常に音樂を愛し、歌舞し、戲笑して節會を愛す。多饒なる資生ありて、疫病に遭はず、憂惱を離れたり。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘、業の果報を知り、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第五地を見る。[三二]鉢私他と名づく。衆生何かなる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞慧を以て持戒の人を見るに、貧窮にて乞ひ、財物、飯食を索むるに、大貧人を見れば、餐を分ちて惠施す。妻子の分を減じて貧病・盲冥・孤獨・困病の人に施し、善く信じ修[三三]習し、他の犯姧して官の爲に執へられ、右門從り出でて執事の魁膾の其の命を斷たんと欲し、怖畏て瞑目するを見ては救うて脫するを得せし

【三一】居賒耶舍。拘賒耶舍、俱舍耶林、俱賒林ともあり。不明なるも、枳橋易土集に、拘吒賒摩利、居吒奢摩離に就きて「大樹の名なり、金翅鳥の棲む所なりと」云ふ。

【三二】鉢私他(Vasistha)。

【三三】習の字明本に依る。

り。或は金鷄あり、毘瑠璃を足とし、赤蓮華寶を以て兩翅と爲す。天子は之れに乘りて天帝釋に隨ひて、善見大城の遊戲の處に向ふ。復た天子の孔雀鳥の七寶を身と爲すに乘るもの有り。是の孔雀鳥は閻浮提中に於て、餘の一切の衆の鳥の色より勝れり。何かに況んや、天中の善業にて莊嚴れる形相、色貌に於てをや。以て比を爲すもの無し。此の孔雀に乘りて遊戲の處に詣り、種々の樂音にて歌舞し戲笑す。善見天に詣り遊戲して樂みを受く。時に天帝釋は千輻四輪の殿に乘る。其の殿の莊嚴は七寶にて成せる所なり。何等を七と爲すや。一者は靑寶王、二者は赤蓮華寶、三者は硨磲寶四者は清淨なる毘瑠璃寶、五者は珊瑚金剛、六者は玻瓈、七者眞金なり。是くの如く七寶の雜色にて莊嚴り、駕するに千鵝を以つてせり。身は七寶色にして、種々の形相あり、音聲は美妙にして、諸の天女の歌頌の音より勝れたり。帝釋は之に乘りて五百の擁有り。金銀・毘瑠璃を以て寶幢と爲す。靑・黃・赤・白・紫色は雜成りて其の殿を莊嚴れり。帝釋は之に乘り、無量の天女の歌頌する妙音は前に在りて歌舞す。或は虛空に遊び、或は地を行くに意の隨にて自在にして障礙する所なし。五欲の樂みを受け、伎樂して自ら娛しむ。善見天の遊戲の處に向ふに、餘天は之を見て種々の華の毘瑠璃の莖を執り帝釋の所に往く。善見の天衆帝釋の來るを見て皆遊戲を捨てゝ往きて帝釋を迎ふ。帝釋告げて言く『汝等今ま應に水中にて遊戲すべし』と。善法の天衆は帝釋の敕を聞きて其の敎を頂受して、卽ち池水に入りて、蓮華の葉を取り、善見天に向うて駛速かに走れり。善見の天衆も亦た蓮華を執りて、走りて善法の天衆に向ひ、遊戲して喜笑す。時に、天帝釋は往き空中に在りて、諸の天衆の遊戲して水鬪するを觀ず。久時しく遊戲しても猶ほ厭足ず。復た蓮華を以て共に鬪戲す。或ひは金華、毘瑠璃華の種々の莖を以て共に相ひ打擲つ、久しく此處に於て、蓮華を以て相ひ打ち、以て戲笑を爲す。復た果林に詣り、諸の軟菓を取りて遙に相ひ打擲つ、果の戲鬪已り、復た酒林に往きて摩偸飲を食す。善業を以ての故に醉亂せず。時に、天帝釋殿より下りて林中に入る。

られて自在ならざるなり。樂みを受け厭足ことなければ、癡人の愛増長して、退沒こと自在ならず。煙りあれば必らず火あり。其の相法は是くの如し、是くの如き退沒く相は、必らず當さに死苦に歸るべし。

是の如く天子は是の相を見已り、放逸の心は息む。本の善根を修め、自心及び餘天子を訶責す。是くの如く說く時に、諸の天子の種々の殿に乘るもの有り、寶網は彌覆し、衆の寶鈴懸かりて、無量の莊嚴を以て自ら校飾す。見る者は愛樂し、天鬘・天衣を以て莊嚴を爲して、融金の聚りの如し。百千萬の衆、須彌頂に遍し。是の時、天子天衆の來るを見るに、或は金殿に乘り、或は地を行くものあり、或は鵝殿に乘りて天女と歌舞し戲笑するもの有りて、遊戲林に向ふに、天の蓮華樹・河泉・池流の華果は茂盛せり。種々の雜寶を以て莊嚴を爲せり。一切の園林は甚だ愛樂すべく、善見の諸天は既に園林に至りて、即ち皆な殿を下り往きて金樹に詣たる。其の樹は鮮榮にして、曜きは日光の若し。空を行く天衆は空より下りて遊戲の處に詣る。一切の天衆は皆悉く雲集し、鼓樂し、絃歌し、遊戲して樂みを受く。嫉妬有ることなく歌舞し、戲笑し、五欲にて自ら娯しみて、樂音にて莊嚴れり。諸の天女と飲食の河岸の間に行きて、瑠璃林に向ふ。其の瑠璃林は眞金の果を以て莊嚴を爲す。香・色を具足し、味は蜜酒の如し。諸の端正にして妙色なる天女と[三〇]摩偸果を飲みて久しく天樂を受く。是くの如く天衆は歌舞し、戲笑して以て快樂を受く。餘天は聞き已りて、帝釋の所に往きて合掌し頂禮して白して天王に言さく『善見城中の一切の天衆は皆園林の遊戲の處に詣れり。天王よ、當に知るべし』と。帝釋聞き已りて諸の天衆に敕す。『速疾に嚴飾せよ。我れ往きて善見の諸天の遊戲の處の善法堂上に詣たらんと欲す』と。一切の天衆は、天王の敕を聞きて種々の殿に乘る。若し金殿に乘れば、毘瑠璃の幢なり。毘瑠璃の殿は眞金を幢と爲し、七寶の雜廁を以て莊嚴と爲す。金色鳥の殿は衆の妙音を出だせり。或は馬殿あり其の行くことは速疾な

【三〇】摩偸果(Madyka)。摩偸と同じ、美飲の酒なり。

きて園林に詣るに、毘瑠璃の幢、或は赤[二八]寶の幢、或は紫金幢、或は赤蓮華寶幢、無量種色の寶幢の衆の旛は虚空に遍まねし。歡喜て遊戲す。往きて四林に詣るに、無量の伎樂、百千億の聲、種々の妙音を皆悉く具足す。聞く者は愛樂す。業の得し所の如くにて上・中・下の報をもつて歡喜びて樂みを受く。往きて大林に詣るに一一の天子は天女の衆の或ひは百、或ひは千乃至百千と歌舞し戲笑して、乾闥婆音の伎樂を具足せり。往きて大林に詣り五欲の樂みを受く。一一の天女は各天子と娛樂して樂みを受け、意の如くに縱に逸かる。往きて種々の遊戲の處に詣るに、或は空中を行き青雲氣の如くに毘瑠璃色なり。是くの如く天衆は虚空に處しるに、種々の衣を以て其の身を莊嚴り、種々に嚴飾し、美音もて愛語す。往きて大林に詣るに、或は天衆の金道を行くもの有り、無量百千の寶殿の輪輞は諸の金地を輾じ、金の塵は空に滿ち、空をして陰翳して染汙を無からしむ。若し諸の天子命ち終らんと欲する時に、塵は則ち身に著す。諸の天子あり。曾つて餘天を見るに是くの如き相あり。久しからずして退沒く大苦惱を受く。慈悲心を生じて頌を說いて曰く。

諸天此の道を行ひて、或ひは百、或ひは千にて還れり。　時節の火の爲にて境界の薪燒かる。　他の病死の相を見て、而も覺知らず。　衰相既に至り已れば、乃ち自ら苦惱を知る。[二九]愛放逸は自ら心を濁らし、常に境界を樂めば、死は隨逐して常に衆生を離れざるを覺らず。　愛樂して遊戲する人は、樂みて放逸を行ふ。　死軍は將に至らんと欲し、破壞すること毒害の如し。　是れ呪藥の力に非らず、天阿修羅に非らず、自業に縛せられる所にして、世の救ふこと能はざる所なり。　塵垢は身面を覆ふて而も自覺せず。　死は信に既に來り至らん。　久しからずして必らず終沒らん。　衆生は常に貪欲し、渴愛は厭足ことなし。　死賊は忽ち已に至らん。　樂みに著せば覺知らず。　汝に已に死相現れたり。　死の爲に牽かれ、須臾にして必らず退沒き、退りぞく時苦惱を受けん。　此の山頂の衆生は、園林に莊嚴られし處にて、業に縛せ

【二八】寶の字は宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二九】愛の字は宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

の園林の縱の廣さは二千五百由旬にて、一一の林中に一萬の河あり。皆金華を以て水上を彌覆す。兩岸の嚴飾は甚だ愛樂すべし。金銀・玻瓈靑寶玉樹を以て莊嚴と爲す。此の林中に於て多くの衆蜂あり。白銀を身と爲し、毘瑠璃寶を以て兩翅と爲し、其の音は美妙にして、笙笛・絲竹の音よりも勝れること十六倍に過ぐ。毘瑠璃樹は黃金を果と爲し、香は美しく柔軟なり。味は石蜜より勝り、其の果の香氣は一由旬に滿てり。鳥は香氣を聞きて百倍に樂みを受く。金樹の銀果の香は美しく上味なり。毘瑠璃樹は黃金を葉と爲し、雜寶色を果とす。是の如く種々の無量の林樹は莊嚴りて善見大城を圍遶れり。其の憶念に隨ひて種々の善業を皆悉く成就し種々の報を受けたり。其の種子の如くに受け、業報の如くに善見城に住し無量の樂みを受く。此の城は是くの如く衆の樂みを見らるゝ所なるが故に、善見と名づけたり。其の林は種々なる赤寶の莊嚴にて、珊瑚、硨磲の種々の鈴網園林の遊戲の處を彌覆せり。善見の諸天は住し其の中に在り。其の城の宮殿の華鬘・寶幢は無量にして、百千億の寶幢・旛蓋は微風に吹動して種々の微妙なる樂音を出す。多くの諸の天子は天女の眷屬に圍遶れて須彌山頂の善見城中に住す。善業に莊嚴られ、勝れし報を受くる者は三十六億なり。帝釋天王に識知せられ、大神通・光明の威德あり、心常に歡喜す。無量百千の天子・天女は天王の城を出で、林遊戲に詣り、無量百千の億殿に乘る。種々の幢旛は百千萬種にて以て莊嚴を爲す。其の殿は種々の色相にて莊嚴り、因陀靑寶を以て箱輿と爲し、赤華寶を以て殿輪を爲せり。寶殿に乘るもの有れば、紫磨金を地とし、毘瑠璃を道とし、硨磲を繩と爲して以て道の側を界し、寶鈴にて莊嚴れり。復た天子の衆の寶殿に乘るものあり、寶宮に乘るものありて、硨磲を底と爲し、眞珠の羅網を以て其の上を覆ふ。珊瑚を壁と爲し、白銀を柱と爲せり。復た天子の金殿に乘るもの有り、眞珠を壁と爲し、赤寶を底と爲し、白銀を柱と爲し、珊瑚にて莊嚴れり。一一の莊嚴は千の光明を出し、百千の諸殿は稱說すべからず。天衆は圍遶り、無量百千の種々に莊嚴れり。天子之に乘り往

【三七】幢旛。幢は、はたほこ。旛は、たれはたなり。

樂を受け、巨富・饒財にして智慧を修むるを樂しみ、遊戯し歌舞す、生まれし所の國土の多くの處は高原なり。餘業を以ての故なればなり。

復た次に比丘は業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第四地を見る。善見城と名づく。衆生は何かなる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生ありて持戒を修行し、溺人を救ひて水難を脱せしむ。或は將に戮れんとするを救ひ贖ひて脱せしむ。或は自身を以て、深水中に投じて彼の溺人を救ふ。若し惡人あれば、教へて、偸盜して他の教に從はざるものをして、偸盜を行はざらしむ。乃至曠野を行くに、飢渴に逼まられしとも尙ほ人の糧食・果食を盜まず。戒を尊敬し、微細なる戒に於ても心に畏懼を生じ敢へて毀犯さず。是の人命ち終りて善見城に生まる。其の城縱の廣さ十千由旬、十千の階道あり。閻浮檀金を以て其の地を爲し、十千の大殿は毘瑠璃寶、或は閻浮檀金、或は白銀因陀青寶及び七寶あり、間錯りて莊嚴れり。諸の街巷に於て、多く樓閣、寶殿の莊嚴ありて光明は晃曜けり。若し日光を以て彼の天宮に喩へなば、日中の燈の如し。其の城の四面は毘瑠璃寶を以て園林と爲し周匝を莊嚴れり。眞珠の羅網は遍く其の上を覆ふ。復金樹あり銀網にて彌覆す。復た銀樹あり金網にて彌覆す。七寶樹ありて遊戯の處と爲す。如意の樹は天の念ずる所に隨ひて、此の樹より因陀青寶を生ず。大青寶林の金色の衆鳥は妙なる音聲を出せり。金林の中には銀色の衆鳥あり、青寶の林中には赤寶の果鳥あり、赤寶の林中には雜色の衆鳥あり。是くの如き園林の衆鳥は妙音を以て莊嚴と爲す。善見大城の街巷の阡陌の一切は、皆な眞金を以て宮殿とし、白銀を柱と爲し、毘瑠璃樹を以て莊嚴と爲す。復た金殿あり毗瑠璃の柱なり。復た金殿あり金樹にて莊嚴り、雜寶の宮殿にて階道を莊嚴り、金色の衆鳥は妙なる音聲を出して周遍を莊嚴れり。善見の大城は稱說べからず。四大林ありて以て莊嚴を爲す。一を雲鬘林と名け、二を大樹林と名け、三を光明音林と名け、四を樂見林と名く。一一

復た次に比丘、業の果報を知り、三十三天の第三の地處を觀るに、彼れ聞慧を以て見るに、地處あつて名づけて山頂と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生あつて二種の戒を持す。諸の衆生の縛せられ幽閉せらるるを見、之れを解きて脱れしむ。曠路を行きて飢の爲に逼らるれども、他人の甘蔗、果菜を盗まず。勢力ありと雖も他人の漿水、飲食を奪はず。其の殺さずに衆生を放つを以ての故に、是の人命ち終りて三十三天の山頂の處に生まれ、無量の樂み、無量の河水を受く。所謂、欲流は洄澓し、悕欲を岸と爲し、歡喜の人は濤波を憶念す。此の河中に於て多くの衆鳥あり、色香・愛味あり。蛟龍ありて無量に欲に著す。曲戻して流行し、水沫を栰と爲し、嫉妬を園林とし、無量の境界を以て山谷と爲す。是くの如き愛河は、諸天を沒溺せしめ能く度す者なし。無始より輪轉して彼岸を得ず。流れ注ぎて絕えず、習ひて甚深を爲す。三道に行じ瀑流の波は注ぎて欲界・色界・無色界に遍し、生・老・病・死の憂悲・苦惱は大勢力を爲す。是くの如き愛河を諸の世間人も亦た度ること能はず。山頂の諸天愛河に常に流され、諸の天女と其の中に遊戲して五欲の樂みを受く。六園林あり。何等をか六と爲すや。一を常歡喜と名け、二を常遊戲と名け、三を白雲聚と名け、四を普樂林と名け、五を如月林と名け、六を恒河林と名く。是の如き等の林は山頂を嚴飾て、其の中に遊戲し無量の樂みを受く。復た飲河の所に向ふ。謂く〔三五〕質多羅河・手觸河・無厭足河・雜水河なり。其の河の兩岸は金銀・玻瓈を以て林樹と爲し、華果を具足し、甚だ愛樂すべし。善業を以ての故に、其の地の諸の天は種々の河〔三六〕水にて飲食し、香の潔きは河從りして流る。千萬の天衆は遊戲し、娛樂びて、服する所の天衣は經緯あることなく、身には光明を具し骨も肉あること無し。亦た津汚なく、口、意は倦むことなく常に歡喜を懷き、行步は庠序として、歌舞し戲笑す。乃至善業を受け盡くし、身・口・意の業の清涼の業盡き、第一の樂報の法定の業盡きて、天從り還退く。地獄・餓鬼・畜生に墮し、若し人中に生まれば、常に安

〔三五〕 質多羅（Citra）。善、又は雜色と譯す。
〔三六〕 水の字は宮内省圖書寮本に依る。

盜乃至小罪を行はず、亦た故に犯さず。是の人は命ち終つて第二の山峰の處に生まる。其の地は柔軟にして、須彌山峰の種々の雜業の光明にて莊嚴れり。此の地の中に於て、一切の須彌山根を觀見す。金銀・瑠璃・雜寶の莊嚴にして、無量の天鬘・衣服にて其の地を莊嚴り、妙色なること融金の聚り如し。毘瑠璃林にて山地を莊嚴り、諸の天女と其の中にて遊戲す。復た往きて飲食の河に詣る。一を天善味河と名け、二を大駛流河と名け、三を流行河と名け、四を大流河と名け、五を曲流河と名け、六を澮鬘河と名け、七を千流河と名け、八を如意河と名く。此の河流を飲みて醉亂を離る。一切の諸の飲は、河從りして流れ種々の衆味、種々の諸色あり、或は乳色あり、或は赤寶色、青寶[二三]玉色、毘瑠璃色、或は黃金色、或は雜色ありて、妙香を流出し、湛然として常に滿てり。復た天食ありて皆種々なる色・香・味を具有す。味は石蜜の如く、香は潔く白淨なり、意ふ如き味あり。天の念ずる所に隨つて種々の味あり。種々の園林は香華にて莊嚴り、種々の色鳥を以て嚴飾と爲す。諸の天女と其の中にて遊戲し、種々に伎樂し、歌舞し、戲笑して甚だ愛樂すべし。多くの諸の林あり。謂く、[二四]娑羅林・大娑羅林・如意樹林・常華香林・如意風林なり。身に觸れては悅樂び、金の枝にて莊嚴り、鈴網は彌覆し、百千の衆鳥は妙なる音聲を出だし、五欲の樂みを受く。共に相ひ娛樂み、病惱あること無し。飢渴を離れ、身に疲極無し。營作する所なく、心の念ずる所の如くに園林に遊戲す。蓮華の池中に諸の妙色を見、五欲にて娛樂む。山峰天に住するに、其の身の光明は意の如く大小にして神通自在なり。意に念ずる所に隨ひて、皆な悉く即ち得るなり。得已つて壞れず、能く奪ふ者なし。是くの如き住峰の一切の天衆は、自からの業の樂みを受け乃至、善業を受け、本の持戒せる所の不殺・不盜の善業を既に盡き、命ち終りて還退す。業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生まれなば、山谷に住して大富、饒財にして、端正なること第一なり。園林は鬱茂し、寒暑は週適す。餘業を以ての故なればなり。

【二三】玉の字、宋、元、二本及び宮內省圖書寮本に依る。

【二四】娑羅林(Sālavana)。娑羅は堅固の義、依つて堅固林とも云ふ。娑羅樹の四方二株雙生せる中間にて佛は入滅せりと。

出して、蓮華池に在り。寶樓は甚だ廣大にして、端嚴にて極めて淨妙なり。莊嚴は甚だ奇特にして、諸天の供に應き所なり。是くの如き諸の嚴飾は、天人の〔二〇〕輪廻して轉ずるところなり。幻の如く亦た泡の如く、〔二一〕乾闥婆城の五欲の愛に誑かせらるるが如く、天樂も亦た是くの如きなり。愛は諸の世間を傷めて生死海に流轉せしむ。愛毒は猛火の如くにて、諸の世間を滅壞す。欲樂に厭足ことなく、之を求めて息まざるなり。無常の火に燒かれ已りて、何にか趣く所を知らず。衆生は皆な此の愛毒の爲めに誑かせらる。愛染は諸の天を覆うて、時に遷らせらるるを覺らず。天人、阿修羅・地獄・龍・夜叉は一切自在なくして、念々に時に遷さるるなり。一切の三界中は時の網の爲めに纒れ自在なきを知らず。愛の爲めに惑せられしなり。

是くの如く天帝釋は、天の無常を見るに、生あり、滅あり。無常を見已りて、第一法を念ず。偈を以て佛を讃ふ。

〔二二〕婆伽婆に南無したてまつる。諸の衆生を利益し、愛を說き給ひて毒害の如しと。衆の爲めに廣く分別して、一切法を了知し給ふ。其の智は罣礙無く、智、所知を離れたれば則ち第三法無し。無常及び苦空なり。亦た作者あることなし。如來は實諦を見て、諸の衆生の爲めに說き給ふなり。

爾の時、帝釋は清淨心を以て佛を讃歎し已りて印の印する所の如くに還りて所止に住して、天の快樂を受く。

復た次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て第二の處を見る。名づけて山峰と曰ふ。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て、此の衆生を見るに、人に持戒を敎へ、乃至一日一夜も衆生を殺さず、亦偸盜せず、王法を犯さず、偸

【二〇】輪廻(Saṃsāra)。苦の三界を生れ代り、死に代りて限りなきこと車輪の如きが故に輪廻と云ふも、この梵語には元來車輪の意味はなし。此の意味よりすれば今一つの譯語流轉はこの原語に近し。

【二一】乾闥婆城(Gandharva-nagara)。又、犍闥婆城、健闥縛城と音譯し、義譯して尋香城、蜃氣樓と云ふ。天の樂人を乾闥婆と名く。巧に樓閣を幻作して人に視したるを、乾闥婆城と稱す。而も彼の空中に現ずる蜃氣樓も之れに類似するより、亦た稱して乾闥婆城と云ふ。以て物の幻有實無なるに譬ふ。

【二二】婆伽婆(Bhagavat)。譯して世尊と云ふ。世間に尊重せらるるの義なり。

を減損す』と。帝釋は之を聞きて三十三天及び四天王に告ぐ。速疾く莊嚴れる阿修羅王、提羅勇健鉢呵婆王、非法を惱亂する惡龍王の等の海下に住するもの或ひは來りて戰鬪す。爾の時、護世の四天王等は帝釋の教を聞き四天處に還りて樂見山に至り、器仗にて莊嚴ることは前に說く所の如し。時に天帝釋は、護世天の無量の千衆と自ら圍遶て天衣、天鬘を以て自ら莊嚴れり。諸の天女を將れて一切主山に詣るに、猶ほし衆星の滿月を圍遶り、須彌山を遶るが如し。亦た日光の衆星に處するが如く、百千金山の須彌を圍遶るが如し。金銀・毘瑠璃・青因陀珠・赤蓮華の寶あり、此寶樹を以て天帝の遊戲の處を莊嚴れり。多くの衆鳥あつて妙へなる音聲を出す。天蓮華池は【一八】伊羅婆那白龍象王の遊戲の處にして、金色の蓮華は琉璃を莖と爲し、諸の乳象と共に其の中にて遊ぶことは、前に說く所の如し。是の畜生と雖も亦天樂を受く。

時に、天帝釋は其の象の所に至り、手を以て摩捫りて之を戲弄し『我が此の白象王は善能く諸の阿修羅と鬪ひて、我れをして勝つを得せしめき』と。是の語を說き已り復た往きて一切主山に詣たる。無憂殿に至り、諸の天子、那由他の天女と共に遊戲して五欲の樂みを受く。諸の天衆と共に伎樂の音聲をし、遊戲する處は無量に莊嚴りて、天衆は報を受く。乃至善業を受け盡くし、樂報を集め盡くして、善法堂より命ち終りて還退く。或ひは地獄・餓鬼・畜生に墮し、若し善業あれば人中に生まることを得て、常に快樂を受け、聰明き智慧ありて、同じく一城に生まれ、或ひは聚落を同じくし、世間の中に於いて最も上首と爲る。或は親友・兄弟・知識の爲めに常に安樂を受く。餘業を以ての故なり。帝釋天王は【一九】三惡趣を閉ぢて、天の退沒くことを觀じ偈を說きて言はく。

此の地の諸の園林、及び諸の蓮華池、山峰は極めて端嚴なり。廣大にして珍寶多し。蓮華の諸の河池は、寶石にて莊嚴れり。林樹の種々の花に、衆鳥は皆な和集し、金樹、如意樹は、淨きこと、毘瑠璃の如く、銀寶或は珊瑚は種々に雜へて莊嚴れり。衆蜂は妙へなる音を

【一八】伊羅婆那(Erāpattra)。又、伊羅鉢龍王とも作る。佛の禁戒を毀て樹葉を損傷するを以て、命終して龍身を受けし因緣あり。

【一九】三惡趣。三惡道のこと、地獄・餓鬼・畜生なり。

六入滅し、六入滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死、憂悲の苦惱は滅す。是くの如くんば大苦の聚は滅す。是くの如く天中の生死は迴旋なり。是くの如く見已りて厭離の心を生ず。煩惱盡くるが故に、常に破壞することなく。不生・不老・無死・無盡なり。是を涅槃と名づく、諸の天子よ、若し能く是くの如くんば則ち生死を脫れん。此の生死の處は此の法あることなし。所謂無生、常住にして、破壞すべからず、無盡、無滅は、生死中に於ては則ち此の法無し。生死中に於ては唯だ退沒する生滅の法有るのみなり』と。

時に、諸の天子は帝釋の是の法を說き給ふを聞き、時に過去世の佛の正法中に於いて修行し來りたる者は、更らに放逸ならずして佛・法・僧を信じ、一心清淨にして涅槃の因を種え、若し天人あつて過去世の佛の正法中に於いて心を修めざる者は、放逸にして亂心し、愛の爲めに誑らかせられ五欲の樂みを受く。愛に誑らかせられしを以ての故に、無量の生死の苦惱を受く。時に、天帝釋は是の法を說く、時に、護世の四天王は是くの如く思惟す。『釋迦天王は諸の天衆と共に在りて何處に住し給ふや』と。是の念を作す時、卽ち天王の天宮に坐し天衆に圍遶かれ、威德の光明ありて、天の快樂を受くることを見る。時に、四天王は卽ち善法堂に詣りて帝釋の所に至る。頭面に禮を作し一面に於いて坐す。坐し已り須臾にして座從り起ちて、帝釋のみ前に於いて白して言さく『天王よ。閻浮提の人は〔一七〕十善道を行ひ、法に順じて行ひ、父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆舊長宿に恭敬す。天王よ。願くは歡喜を加ひ給へ』と。時に、天帝釋は護世に告げて言はく『我も亦隨喜べり。護世天王よ。世間を利益して善法を行はしめよ。我れは歡喜して汝の善業を得るを聞かん。是くの如く閻浮提の人は法に隨順して行へり』と。護世天王は帝釋に向きて說く『若しは、閻浮提の人は法に順じて行はず。父母に孝ならず、沙門、婆羅門、耆舊長宿を敬せず、魔衆を增長し、正法

意の六官を云ふ。

【一〇】觸(Sparśa)。感覺、又は知覺のこと。

【一一】受(Vedanā)。苦樂を知覺識別する感情のこと。

【一二】愛(Tṛṣṇā)。欲情なり。

【一三】取(Upādāna)。盛に諸境に於て欲する所を追求する心。

【一四】有(Bhava)。愛・取の煩惱に由つて種々の業を造り、當來の生をうく。三界の生のこと。

【一五】生(Jāti)。現在の業に由つて受くる未來の出生なり。

【一六】老死(Jarāmaraṇa)。現實の老・病・愁・憂・悲・苦・惱を含むものなり。

【一七】十善道(Daśa-kuśala-mūli)。欲界の樂果を感ずるに由り善業と云ふ。卽ち不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見是れなり。

巻の第二十六

觀天品第六之五

三十三天之二

時に、天帝釋は諸天に告げて曰はく『善業を以ての故に、此の天中に生まれ、業盡きては則ち退く。業の果の因緣にて此の天に生まる。我れ此の天に於て必らず退沒くこと有らん。當に勉力して以て安隱を求むべし』と。時に、諸の天衆は、天帝釋の是の語を說くを聞き已りて、帝釋に白して言さく『是くの如し。天王よ。我等は此の善業の樂處に於て、敢て復た放逸の行を作らず。白して天王に言さく。何かなる因緣を以て我れをして不退ならしむるや』と。爾の時、帝釋は諸天に告げて曰はく『八方、上下の生まる所の處は[一]有爲に非らざるは無し。無常にして破壞するなり。貪著を生じて、常に保つ可しと謂ふこと勿れ。不淨なる[二]煩惱は後に大苦を致す。樂みを生ずる法に非らず、智の因緣に非らず、正行を爲すに非らず。是くの如きを憶念すれば、後に則ち大苦なり。諸の天子よ。汝等は已に曾て無量世の中にて此の天上に生まれ、命ち盡きては還退き、地獄・餓鬼・畜生に墮せり。復た善業を以て、此の天中に生れ、自からの業果を受け、天中の樂みを受く。業幻に誑らかせられて、復た地獄・餓鬼・畜生に墮す。是の故に天子よ、應に[三]放逸をすべからず。我が說く所は、是れ[四]恒河沙等の諸佛の法なり。此の法を聞く者は、生死中に於いて當に解脫を得べし。所謂、[五]無明は[六]行を緣じ、行は[七]識を緣じ、識は[八]名色を緣じ、名色は[九]六入を緣じ、六入は[一〇]觸を緣じ、觸は[一一]受を緣じ、受は[一二]愛を緣じ、愛は[一三]取を緣じ、取は[一四]有を緣じ、有は[一五]生を緣じ、生は[一六]老死、憂悲の苦惱を緣ず。是くの如くんば、唯だ大苦の聚集あるのみなり。無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち

【一】有爲(Saṃskṛta)。有爲は無爲(Asaṃskṛta)に對す。生滅變化する法を云ふ。而も其の生滅變化は因果の法則に依る。故に有爲法は同時に因果法の束縛を離るる能はず。

【二】煩惱(Kleśa)。貪・瞋・痴等の有らゆる心情は、心を煩はし身を惱ますに由つて名く。

【三】放逸。精進の反對にて善に進まざるを云ふ。

【四】恒河沙(Gaṅgānadīvālukā)。ガンヂス河の沙の多數に依りて、無數を表はす譬喩なり。

【五】無明(Avijjā, Avidyā)。以下老死まで所謂十二因緣Dvādaśāṅga-pratītyasamutpāda)を明せり。無明は癡とも云ひ、過去世の無始よりの煩惱にして、卽ち盲目的に生きんとする根本欲望、渇愛のことなり。

【六】行(Saṃskāra)。身・口・意の三業、無明に依つて作りし善惡の行業なり。

【七】識(Vijñāna)とは、心、精神なり。

【八】名色(Nāma-rūpa)。有情の身心を組成する五蘊のこと。

【九】六入(Ṣaḍāyatana)。六處とも云ひ、眼・耳・鼻・舌・身・

歡喜ぶ。善法堂天は種々に莊嚴り、諸の天女と共に帝釋を圍遶きて、衆の伎樂を作す。善法堂に詣るに、一切は歡喜し歌舞して戯笑す。時に、善法堂に住する所の諸天は、帝釋に隨ひて行き帝釋を供養す。種々の音聲あり、天の伎樂を鼓し、種々に歌舞して美なる妙音を出せり。遍く諸の天衆の住を異にせる諸天此の樂音を聞きて、皆な來りて善法堂上に詣る。皆、天王の爲めに稽首して禮を作し、右に遶りて住す。無量百千は善法堂に詣り、善く歌舞を知りて種々に莊嚴れり。善業を以ての故に生れて其の中に在り、戒に善く護られて斯の大果を受く。一切の天衆は樂報を成就せり。其の善法堂は縱の廣さは五百由旬にして、其の色は鮮妙にて融金聚の如し。毗瑠璃樹を以て莊嚴と爲し、種々なる寶の花は周匝を嚴飾れり。其の花の香氣は五由旬に滿ち、常に新に出づるが若し。心をして愛樂せしめて、未だ曾つて厭足かず。是くの如く天衆は帝釋に給侍し、九十九那由他の天女は天の帝釋に隨ひて歡喜殿に入る。金毗瑠璃・硨磲寶の柱を以て莊嚴と爲し、其の牀は柔軟にして、敷くに天衣を以てせり。釋迦天王は悉く座に就かしむ。諸天は敎を受けて卽ち皆坐に就けり。

苦と爲す。能く天人は將に大怖の處に至らんとす。第二天王は斯の大苦を受く。釋迦天王は第一の勝れたる人にてまします。此の事を見已つて、大厭離を生じて自ら其の身を觀じ[46]三惡道を閉づ。天中從り死して人中に生まる。人中にて命ち終り、還りて天上に生まる。若し人中に生まれば、安樂國の城邑・聚落に生まれ、大姓家の正法を行ふ處に生まる。邪見・憍慢・諂曲を離る。復た自らを見ること有れば、人中に於いて生まれ、國の王子・大臣の子と爲り、正見の家に生まれて、大富自在なり。人中にて命ち終れば、當に何處に生まるべきや。卽ち自ら身を見るに還りて天中に生まれて大神通・第一の光明を具す。餘の天衆と共に雜食を食みて、心に愧恥を生ず。業薄きを以ての故に作す所の業に隨ひて、業の如くに食を得。後に生る處に於て勝れし食を見ず。愧心して思惟すらく、『我れ當に幾世是の如き報を受くべきや』と。善業を以ての故に、殿の壁中に於いて自ら其の身を見るに、天中に七生し、人中に七生して去來すること七返にして、第八生は無し。天中に非らず、人中に非らず、地獄の中に非らず、餓鬼の中に非らず、畜生の中に非らず。帝釋は心に念ひらく。『云何して我が身に復た生まる處無きや。我何處に生まるやは見るべからず。心に驚怪を生ぜり。何なる故なればこそ第八生の處あること無きや』と。久しく思惟し已りて、卽ち自ら念知す。『先に世尊は是くの如き言を說き給ふを聞きたりき。須陀洹の人は、七生の後に[47]無餘涅槃に入らんと。我れ必らず是くの如からん』と。淸淨心を以て世尊を敬禮し、歡喜心を發して其の金座に坐す。閻浮檀金を以て牀座と爲し、衆寶にて莊嚴れり。復た壁中に於いて、諸の先の世にて退沒ける天王を見る。復た念じて、善法堂上に入りて諸の天衆を見、諸天を利益す。時に、天帝釋は其の座從り起ち、往きて雜林に詣る。諸の天子・天女の眷屬と共に、遊戲し自から娛しみて、五欲の樂みを受く。種々の衆鳥は林樹を莊嚴り、及以蓮華を以て嚴飾と爲せり。諸天は見已り、諸の伎樂・乾闥婆音を作し、帝釋の所に至りて皆な爲めに禮を作す。帝釋を圍遶ける天子・天女は、歌舞し遊戲して種々に

【四六】三惡道。地獄・餓鬼・畜生を云ふ。

【四七】無餘涅槃(Nirupadhi-śeṣa-nirvāṇa)。又、無餘依涅槃と云ふ。依は依る所の身なり。卽ち生死の果體の滅盡せるを謂ふ。

天女は遊戲して樂みを受く。復た園林に至るに、諸の天女等ありて、其の地は柔軟にして衆華にて莊嚴れり。其の林は廣博にして、種々の金鳥は衆の妙へなる音を出せり。衆蜂は如意の樹を圍遶れり。釋迦天王は普眼にて觀ずる所にして、天衆は圍遶き、遊戲して樂みを受く。其の身の威德は、日月於り勝ぐれたり。金樹林中の毗瑠璃殿は、衆寶の柱を以て莊嚴と爲す。諸の蓮華池は靑寶の莊嚴なり。時に、天帝釋は是の如き念を作さく『我れ寶殿に入りて、遊戲して樂みを受けん』と。諸天も亦た念ず『天王は諸の眷屬と入らんと欲す。天女に圍遶れ、歡喜びて樂みを受けん』と。爾の時、帝釋は天の念ずる所を知りて諸の天子に告ぐ『汝等各各園林にて遊戲せよ』と。時に、諸の天子、天王の敎を聞き各華池に入りて、其の天女と遊戲して自ら娛しむ。天王は殿に入りて、淸淨なる毗瑠璃牀に坐せり。善業を以ての故に其の殿は淸淨にして猶ほし明鏡の如し。此の淨き壁に於て悉く古昔の諸の天王等の退沒く相・及以名字を見る。其の名を[四五]鉢浮多天王・自在天王・無憂天王・正慧天王・一切樂天王・善住天王・普明天王・一切愛天王・千見天王・威德天王・持德天王・靑色天王・不退天王・如幻天王・齊戒天王・福德天王・諸遊戲天王・梯維天王・憍尸迦天王と曰ふなり。善業を以ての故に、是くの如き等の三十三天王を見る。是くの如き天王は善業盡くるが故に、地獄・餓鬼・畜生に墮し、生まれる處に隨ひて大苦惱を受く。若し地獄に入れば、壁上に其の大苦惱を受くるを見る。若し餓鬼に墮せば其の壁上に大苦惱を受くるを見る。飢渴に身を燒かれ、苦惱に羸痩て筋骨は相ひ連らなる。若し畜生に墮せば、其の壁上に互に相ひ殘害して大苦惱を受くるを見る。若し人中に生まれば、作業を追求して種々の苦しみを受く。是くの如くに諸の生死を見るに、樂しむ可き處は無く、生死の中に於ては諸の過患多く、堅きことなく無常にして、變易し破壞す。是くの如く天王は皆な悉く退沒く。自からの業の果を以て、地獄・餓鬼・畜生に生まるなり。云何して是くの如き大樂を捨てて斯の苦惱を受くるや。云何して忍ぶ可きや。奇なる哉、生死は甚だ大

【四五】鉢浮多(Prabhūta)。天王の名なり。

ば必らず離ることあり、未だ曾て免かれし者あらず。　樂は苦の爲めに覆はれ、無量に諸の誑惑をす。　衆生は癡に誑らかせられ、愛欲に遊戯す。　一切の癡愛の人は、未だ曾て厭足ことあらず、境界には滿足し難し。　火の乾きたる薪に益すが如く、世間の愛に誑らかせられなば、滿し難きことは亦た是くの如し。　死地に近づくと雖も、猶ほ厭離を生ぜず。　愛境の爲めに誑らかせられて、善の資糧を求めず。　天より退くときに自在ならざるは愛の爲めに誑惑せられしなり。　我れ今汝を敎呵せん。　汝は欲の爲めに迷はされしなり。　當さに自ら利益を作すべし。　法を第一の道と爲す。　若し法を行ずるものあれば、樂みに從ひて樂報を得ん。　能く是くの如く行ずる者は、寂滅なる涅槃を得ん。　是の故に應に福を修めて以て涅槃の樂みを求むべし。　若し常に福を修むるもの有れば、無盡の處に至らん。　天帝釋の說き給ふを聞き、寂靜にして心調柔なり。　是の時、帝釋子は調伏して父敎に順へ給ふ。

時に、天帝釋は諸子を敎呵して、正道に順じ善業を修行せしめ、惡道の門を閉づ。　雜林に詣り遊戯して樂みを受くるは、諸善の生ずる所なり。　帝釋天王に五百の殿あり、種々なる諸寶・玻瓈・珊瑚・金銀・天青寶の王・天の大青寶の種々なる諸寶あり。　釋迦天王は種々の林を見るに、諸の蓮華の葉は日の初めて出づるが如くにて、以て莊嚴を爲せり。　帝釋見已りて頌を說いて曰く。

人中にて福德を造り、人中にて無量種に種々の福德を作せば、種々に皆な成就す。　衆の善業を作さずんば、心怨に誑らかせられし爲めに、退ぞく時に自在ならず。　一切の諸の宮殿は、諸の業の莊嚴る所にして、善業の增長するを以て、天人の報を成就す。

爾の時、釋迦天王此の偈を說き已り、復た餘殿に詣るに、其の殿に無量の柔軟なる寶にて莊嚴れる座を敷置し、以て嚴飾と爲す。　善業の化せる所なり。　時に憍尸迦、此の宮殿を見、此の處にて樂みを受く。　復た銀殿に至るに、無量の光明・無量の衆寶・無量の衆華にて其の殿を嚴飾せり。　無量の

は前の所說の如く、諸の天女は華池を圍遶りて、歌舞し、戲笑し、娛樂して樂みを受く。

復た天女と更らに異林に至るに、此の林中に河泉・流水あり。其の河中に於いて種々の水あり。所謂流乳・及以流飲・甜美なる衆水なり。天子之を飮む。多く衆蜂あり、衆鳥は百數なり。金銀・珊瑚・雜色の寶石集りて河中に在り。天子・天女此の林中に於いて遊戲して自ら娛しむ。多時を經て五欲の樂みを受く。復た往きて華樹の林中に詣るに、其の林の衆の華は悉く萎變まず、香氣は普く熏じて十由旬に滿つ。所謂、月光明華・月色華・白色華は清涼にして熱なく星色の華の如し。復た果林に詣るに、其の林に果ありて、所謂、[四三]蜜摶樹の果・辛味樹の果・柔濡樹の果・香髮樹の果にて、香を聞けば卽ち飽く、[四四]六味の樹の果・意の如き味の果・厭足なき果あり、是の如き無比林の中に此の果を具足し、善業の生ずる所にして、此の林中に於て遊戲して樂みを受け、飯食し餐飮す。復た往きて鳥舞の林に詣たる。其の林の衆鳥遊戲し歌舞して、妙へなる音聲を出す。天子は之を聞きて卽ち快樂を受く。復た雜林に詣たるに、其の林の異色の一切の華果は前に說きし所の如し。河池の衆の鳥も亦た復た是くの如し。故に雜林と名づく。此の林中に於いて五欲にて自ら娛しむ。乾闥婆音にて久しく快樂を受く。釋迦天王は是く思惟を作さく『我が諸子等は何處にてか放逸の樂みを受け、退沒を覺らざるや』と。時に諸の天子は、天帝釋の心の所念を知りて帝釋の所に至る。諸の天女等も各本宮に還りて遊戲して樂みを受く。爾の時、帝釋は諸の天子を見て頌を說きて曰はく。

諸の境界を悕望めば、愛心を厭足し難し。　愛を離れば則ち足るを知り、此の人は憂惱無し。

若し人、欲境を愛せば則ち安樂を得ざらん。　境界は毒害の如くにして、後世に苦惱を受けん。　若しは初、若しは中・後、若しは現在・未來に樂を求むとも得べからずして、後は則ち苦惱を受けん。　一切の諸の世間は、生死を增長し、流轉して暫らくも停まらず。　和合すれ

【四三】蜜摶樹。樹の名なり。

【四四】六味。苦・酸・甘・辛・鹹・淡味の六を云ふ。

我れ今こそ如來を信じたてまつるなり。汝は當に法を修行すべし。我れ佛の教法に於いて、敢て違失あることなし。若し如來の語に違ひば、貪欲・愚癡の人にして、衆苦を脫することを得ず、常に諸の衰惱を受けん。

時に、天帝釋は是の語を說き已りて善法堂に入る。爾の時、帝釋[四一]及び諸の天子等は大歡喜を生じて、共に本宮に詣るに金寶にて莊嚴り。歌頌して娛樂み其の所止に還り鼓を撃ちて相ひ命ず。『園林に詣りて遊戲して樂みを受けんと欲す』と。爾の時七萬の天子は名寶殿に乘り、天鳥に乘るものありて諸の天女と空中を遊行す。天衆は圍遶りて、或は蓮華池の間に遊ぶものあり、諸の天樂を奏し歌舞し戲笑して無比林に詣る。時に、帝釋子は天鬘にて莊嚴り、旃檀香を雨ふらす。其の明さは晃耀きて猶ほし日光の如し。或ひは光明ありて月の盛滿せる如き、星宿の如きありて、其の自らの業に隨ひて無比林に向ふ。各々愛戀して其の心間なし。彼の林中に入つて天の快樂を受く。其の林は端嚴にして喩說すべからず。彼の林に入る時香氣比なく、[四二]牛頭栴檀香も十六分の中にて其の一にも及ばず。此の香を聞き已りて希有の心を生ず。復た飮林に入るに、樂みを求むる爲めの故に次第に林に入る。善業を以ての故に、毗瑠璃樹・金樹・銀樹・玻瓈迦樹に各百數の種々の雜色ありて猶ほし雜綵の如し。其の樹は雜色にて莊嚴り奇妙なり。亦た復た是くの如き無量の色相を、天子之を見るに淨き明鏡の如く、無量百千を四顧して觀視し、大歡喜を生ず。天女は圍繞き衆の樂音を聞き、心に甚だ歡喜す。復た異處に於いて遊戲して自ら娛しむ。其の林の衆鳥は、眞金を翅と爲し、毗瑠璃を胸と爲し、珊瑚を足と爲し、白銀を背と爲し、赤眞珠寶を以て其の目と爲して衆の妙音を出す。復た天子あつて斯の妙音を聞き各の相ひ謂ひて言く『諦かに聽け、諦かに聽け、衆鳥の音は無量の音曲にして天女の音と分別すべからず』と。鳥の聲を聞き已りて、復た異林に詣り遊戲して樂みを受く。諸の池中を見るに、千葉の蓮華の光明は日の如し。彼の池の間に至るに種々の莊嚴

【四一】及字、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【四二】牛頭栴檀。栴檀は香樹の名にて、牛頭山より出せば、牛頭栴檀と云ふ。

て名づけて清涼と曰ふ。金色の蓮華は毗瑠璃の華にして、種々に和集し、帝釋を圍遶く。天の善法堂にて天帝釋と共に娛樂し樂みを受く。天女の衆と久時く蓮華池の邊に在りて、衆の伎樂を作す。善法殿の一切の天衆と共に復た一切樂林に入る。其の林は皆な悉く毗瑠璃の樹にて、金果を具足し、美味は充滿して〔三六〕波那娑果の如し。色・香・味を具す、諸天は果を取り開いて之を飲むに、其の味は人中の上味なる〔三七〕摩偸の酒に勝れり。諸天は之を飲みても醉亂あること無し。天に三種の放逸ありて樂みを受く。一者は天女、二者は果を食す、三者は五欲なり。是れを三種と爲し放逸の樂みを受く。〔三八〕釋迦天主の食する所の天飯の〔三九〕蘇陀の味の如きは自らの業の成就なり。一切の天衆は恭敬して一一の方面を圍遶り、毗瑠璃林に於て遊戲して樂みを受く。種々の衆鳥及び衆蜂を鈴網を以て彌覆す。既に遊戲し已り還りて天衆と善法堂に入るに、第三林あり名づけて無比と曰ふ。釋迦天王に五百の子あり、天女は圍遶き其の中にて遊戲す。其の園は廣博にして、受くる所の樂は次いで帝釋の如し。常に法に順じて行ひ、〔四〇〕正見にして邪なし。正見を以ての故に鬪戰の時に於て阿修羅に勝つ。若し人、父母を供養し沙門・婆羅門を恭敬し隨順し諍ひ無ければ、彼れ是の念を作さく『我れ今當に諸の天女を將れて無比林に詣らんとす』と。一一の天子には一那由他の天女あり以て眷屬と爲し、妙色を具足して皆な共に一心に遊戲して樂みを受く。時に諸の天子帝釋の所に詣りて天王に白して言さく『我れ今往きて無比林に至りて遊戲し、娛樂せんと欲す。願くば我等と彼の林中に至らん』と。時に、天帝釋は天子に告げて言はく『吾れ已に遊戲せり。今法に順じ以て自ら利益せんと欲す。樂は欲に從ひて生じ滿足すべからず。我れ今樂みを捨てて放逸の過を畏る。放逸の過は毒なり。是の故に捨離す』と。時に、天帝釋は偈を說きて言く。

不放逸は不死なり。　放逸は是れ死處なり。　不放逸は不死なり。　放逸は常に生死なり。
不放逸は不死なり。　放逸は是れ死句なり。　我れ不放逸を以て今天中に勝ることを得たり。

【三六】波那娑(Panasa)。半橠娑、半娜娑と音譯す。果の名なり。形は冬瓜の如くにて、其の味は甚だ甘し。
【三七】摩偸(Madya)。酒のこと。美飲と譯す。
【三八】釋迦天主。(二八)を見よ。帝釋なり。
【三九】蘇陀。須陀を見よ。
【四〇】正見(Samyagdṛṣṭi, Sammādiṭṭhi)。八正道の一にして、諸の邪倒を離れたる正しき認識なり。

し人業を作す所あれば、業に隨ひて果報を得。　其の人の時處の業は、此の身中に受け、天の光明輪の若く、遊戲して種々に樂しむ。　斯の人は善果を得、淸淨なる勝れし業の故なり。

若し丈夫業を作し、或は善、或は不善なれば、果報を受くる時に或は苦み、或ひは樂みを受く。　此の種々の樂報にて、種々の天に遊戲するは、此れ我が因緣に非らず、彼の前の業に由つて得るなり。

時に、諸の天衆は、天帝釋の此の偈を說くを聞き已り皆な隨喜を生じ、合掌し頂受す。一切樂林に向ひ、共に遊戲せんと欲す。諸の天女等は、或は百或は千手にて蓮華を執り種々に莊嚴れり。一一の天女の形貌、色相は悉く差別無し。歌音も亦た爾く善業の化する所なり。帝釋を瞻仰して舞戲し行きて遊戲林に向ふ。其の林の寶樹は白銀を葉と爲し、白銀を地と爲す。銀色の衆鳥は其の中に充滿ち種々の音を出せり。帝釋を首めと爲し諸の天衆と次第に入る。種々の寶光は若しは身、若しは地に光明旋轉して虛空中に遍し。帝釋は見已り心大いに歡喜す。天女の歌音は宮商・齊等にして天樂の音聲なり。八萬四千の行殿には駕するに龍象を以てす。鈴網にて莊嚴り衆の妙音を出す。無量の天子、九十九億の天女帝釋を讚歎して六欲の樂みを受く。

時に天帝釋は諸の天女と復た往きて、一切樂林に詣る。大龍殿に乘ることは亦た前に說きしが如し。天主釋迦及び餘の天衆は次に金林に入る。金の葉、金の果は五丈夫の量あり。其の味は甜美にして、衆の香を具足す。之を食めば欲を增し、龍象之を食めば醉ひて、欲を行ふ。衆の樂音を聞き舞戲して自ら娛のしむ。諸天之を見て希有の心を生じ、舞戲して愛す可し。食み已りて舞戲す。種々の鳥音あり、此の林に於ては銀色の衆鳥は金林に住み第一に端嚴なり。

時に、天帝釋は后の舍脂及び諸天衆・天子・天女と遊戲して樂みを受く。餘の天子等は各天女と歌舞し戲笑して互に相ひ娛樂む。善業を以ての故に嫉妬を生ぜず。復た金林に往くに、林中に池あり

ずれば顚は則ち開敷し香汁を流出して第一に勝れり。天は此の龍象に乘りて帝釋を瞻仰し、前後を圍遶て遊戲の處に詣る。八萬四千の天女は種々に莊嚴帝釋を瞻仰し、或は歌ひ、或は舞ひ、或は天樂を奏し、種々に遊戲して遊戲の處に詣る。八萬四千の天女は、衆の伎樂を作し遊戲し、歌舞して帝釋を娛樂しめ、種々に莊嚴て帝釋を瞻仰す。天后の[三五]舍脂は千輻輪の七寶の殿に乘り、眞金・毗瑠璃・硨磲・碼碯・天青珠寶・大青珠寶を以て莊嚴と爲し、百千の鵝に駕す。閻浮檀金を身と爲し、珊瑚を足と爲し、赤寶を目と爲し、赤蓮華寶を以て其の身と爲し、珊瑚を嘴と爲し、眞珠を翅と爲す。以て其の殿に駕して、帝釋の念ずるに隨つて至る所あれば、帝釋上に坐して種々の寶を以て其の身を莊嚴れり。威德の光明は百の日光の同時に並び照らすより勝れり。后舍脂と遊戲の處に詣るに餘の一切の天女の莊嚴より勝り、一百倍に足れり。天帝釋と共に座を分ちて坐し遊戲の處に詣る。是くの如く諸天は色・聲・香・味・觸の樂みを受け、三十三天と一切樂林に向ふ。一切の天衆は、帝釋及び舍脂を圍遶きて前に說きし所の如くに無量百千種の樂みを受く。龍象の殿を大臣侍衞し、歌樂の音聲にて帝釋を娛樂せしめ一切樂林に向ひ、遊戲して樂みを受け、彼の林に至らんと欲す。先きより住みし天女は天の樂音を聞きて手に蓮華を執り、衆の伎樂を作し出でて帝釋を迎ふ。帝釋は之を見て、諸の天衆に告げて曰はく『此の諸の天女は一切林中にて種々の衆寶を以て莊嚴と爲し種々の音聲あり。我れ今之と林中にて遊戲せん』と。時に、諸の天衆は、帝釋の說き給ふを聞きて白して言さく『天王よ。此の諸の天女は王の給侍なり。常に王に歸し、王を以て主と爲さん』と。帝釋告げて言はく『此の天女等は我が給使に非らず。我れに歸せるに非らず、我が業力に非らず。自らの業力を以て、自らの業にて身を受け、其の自らの業に隨ひ上・中・下あり。是の故に天女に上・中・下あり。是れ我が力に非らず』と。爾の時、帝釋は頌を說きて曰はく。

　下業にては下報を得ん。　衆生道を成就し、中業は中報を得ん。　上業は丈夫の身なり。若

【三五】舍脂(Śaci)。又、舍支。設施に作る。可愛の義、妍の義。帝釋夫人の名なり。

て【三四】八功德水あり、其の中にて遊戲す。既に遊戲し已れば、欲を增すが爲の故に自らの欲は滿し難し。欲に貪著し燒かれて厭足ことを知らず。復た往きて鏡樹の林に詣り、此の林中に於いて自ら其の身を見るに種々の莊嚴、功德を具足せり。種々の鏡中に種々の色を見十倍に放逸す。何を以ての故なれば、女人の性は三種の放逸あればなり。何等をか三と爲すや。一者は自ら身色を恃みて放逸を生ず。二者は自ら丈夫を恃みて放逸を生ず。三者は憍慢にして放逸を生じ、自らの身色を見て餘の女人を輕んず。復た此の地を捨てて更らに一林に詣る。一切時と名く。其の林の一日に具に六時あつて常に斷絕せざることは、猶ほし輪轉の如し。六種の時を以て莊嚴と爲し、林中の衆鳥は無量の雜色にして、其の林中の時分に隨つて相ひ似たり。共に林中に遊びて嫉妬を離れ心に悅樂を懷く。此の林を見已りて、心の念ずる所に隨つて六時林に入り、時に隨ひて遊戲し悅樂を受く。種々の時鳥は自ら集つて遊戲し、諸の天女と相ひ娛樂し、此の林中にて五欲の樂みを受け餘林を念ぜず。時に、天帝釋既に此の林に至る。天女は歡喜し、歌舞・戲笑して帝釋を供養す。是くの如くに帝釋の一林中に種々の功德を皆な悉く具足す。

復た次に比丘、天帝釋の第二の園林を觀ず。幾種の林ありて、名字は何等となすや。彼れ聞慧を以て帝釋林の一切遊戲と名くるを見る。何かなる功德ありや。彼れ聞知にて見るに、其の林の自體を一切林と名づく。此の林中に於いて多くの天子あり、諸の天女と共に遊戲して樂みを受く。百千の天女は念ふに隨ひて遊戲し、遊戲の處に於いて八万四千の行殿あり。毗瑠璃寶を以て其の輪と爲し、閻浮檀金を以て鈴網と爲す。白銀の羅網を以て其の上を覆ひ、七寶にて莊嚴れり。第一天子は或は馬に乘るものあり、或は鵝に乘るものあり、或ひは空に乘るものあり、或ひは地を行くものあり、或は伎樂をするものあり、或は歌音を作るものありて、帝釋を圍遶て遊戲の處に向ふ。八萬四千の龍象は金網にて身を覆ひ、寶鈴にて莊嚴て、柔軟なる繒褥を以て象上を覆ふ。若し象、欲を念

【三四】八功德水。極樂の池中及び須彌山と七金山との內海には皆八功德水を滿す。俱舍論十一に依れば、一甘、二冷、三輭、四輕、五清淨、六不臭、七飲む時喉を損せず、八飲已りて腹傷す。の八功德を擧ぐ。

は皆な金毗瑠璃・青摩尼寶を以て成就する所にして、金剛にて廁は塡てり。百千の天宮は猶ほし紅色の如く端嚴にして殊特なり。師子座〔三三〕の敷具は柔軟なり。殿に千の牀ありて毗瑠璃寶を以て莊嚴と爲せり。釋迦天王は阿修羅軍を攻めて既に勝つことを得已れり。一切天衆は皆な歡喜を懷きて帝釋を讚歎す。諸の天女と共に此の殿に昇りて遊戲し、歌舞して共に相ひ娛樂す。其の本の業に隨つて各々自ら上・中・下の樂しみを受く。既に遊戲し已りて復た山中に入り遊戲して樂みを受け、一心に欲を念ず。何を以ての故となれば、女人は多欲にして天欲勝りしが故に、天欲は熾然たり。復た一河に詣る、其の河中に於て上味の飲食は河に隨つて流れ、種々なる色香の上味の飲は其の中に充滿せり。若し飲む者あれば醉亂を離る。飲を觀喜と名け、天女は之を飲みて心は大いに歡悅ぶなり。

復た美飲ありて名づけて能觀と曰ふ。既に飲を得已れば能く遍く一切の天中の所有る園林、無量の山障を觀じて、一切を皆な見る。復た天飲ありて名づけて衆味と曰ふ。其の飲甚だ多く、之を飲めば色力百倍に增長す。天女飲み已りて復た食地に入る。其の自ら上・中・下の業を作りしを以て是くの如きの報を得る。種々の色・香・美味を具足せり。既に飲食し已りて復た往きて音樂の地に詣り山中に遊戲す。毗瑠璃寶を以て樂器と爲し、眞金を絃と爲し、衆寶の鼓音あり、碼碯・雜寶を以て簫笛と爲す。諸天の女衆に無量の音聲あり。是くの如き無量、無數の音樂は乾闥婆音なり。諸天の女衆は遍く身の莊嚴、身の諸の樂具あり遊戲して樂みを受け、以て自ら娛樂む。歌樂の音聲は、宮商・和雅・音曲の齊等を皆な悉く具足し、欲樂を增さんが爲めに既に歌音を作れり。復た往きて鈴音の地に詣るに、其の地の鈴網は微風に吹動き無量百千の妙なる音を出だせり。之を聞きて歡喜し、歌舞し、戲笑し、種々の妙寶にて其の身を莊嚴れり。復た往き衆鳥にて莊嚴れる蓮華の池に詣る。其の池の衆鳥は金銀・雜寶を以つて莊嚴と爲せり。天女は中に入り遊戲して樂みを受く。各々は金の華を取り共に遊戲し、華を以つて相ひ散じ、心に嫉妬なく種々に遊戲す。其の聲は美妙にし

【三三】師子座(Siṁhāsana)。獅子脚の飾りある高座。

くの如き種々の衆蜂は其の中にて遊戯す。是くの如く善業は種々の果報を成就す。

復た次に比丘善法堂を觀ず。彼れ聞慧を以て善法林の釋迦天王は幾種の園林あるやを觀ず。彼れ聞慧を以て善法堂の所有る園林を見るに一一の善法の諸天を觀察す。帝釋天王は諸の天女と何等の林に在りて遊戯して樂みを受け、五欲にて自ら娯しむや。彼れ見るに、林あつて、天女遊戯と名づけ、天樹は華果を皆な悉く具足し、衆鳥は充滿せり。樹を如意と名づけ、天の念ずる所に隨つて悉く林從り生ず。若し諸の天衆林中に遊戯せば、勝れたる華は開敷く。天女の林に入りて若し其の樹に近づけば、華は卽ち下に垂れ諸の天女に授く。時に、諸の天女は既に華を取り已れば枝條は還りて擧ぐ。是くの如く衆華の色香、相貌は、各々差別して其の念ずるに隨つて生ず。故に意樹と名づく。若し音樂を念ずれば、亦た復た是くの如く種々の音を聞く。心の念ずる所に隨ひて、善業の風は諸の樹の葉を吹き互に相ひ敲觸す。其の聲は美妙にして天の樂音の如し。故に意樹と名づく。復た無量に憶念する樹あり、諸の天女の心に念ずる所に隨ひて、莊嚴の具・天衣・天華は念に隨つて皆な得。故に意樹と名く。復た意樹あり、毗瑠璃色にて眞金の莖葉は白銀を枝と爲し、毗瑠璃の葉は珊瑚を枝と爲し、或は七寶の葉は美味を流出す。復た意樹あり、若し諸の天女の帝釋を見んと欲すれば、善業を以ての故に、卽ち此の林に於て化の帝釋を見、之れと娯樂む。此の林の功德にて化の帝釋を見るなり。是くの如き林中の九十九那由他の天女は一一の天女を各々已れと共に相ひ娯樂すと見、餘女を見ず。天主と會ひ諸の天女に隨ふ。心に莊嚴を念じ、帝釋身を見ば卽ち念ずる所に隨ふ。故に意樹と名づく。是くの如く林中の無量の欲樂にて、此の林中に於て次第に遊戯して喜樂山に至る。其の山の莊嚴は七寶にて成る所にして、金剛身を以て巖崿を莊嚴り、眞金の樹枝は周遍を彌覆して猶ほし宮殿の如し。金・銀・靑珠を以て麞鹿と爲して其の山を莊嚴れり。多くの衆鳥あつて妙へなる音聲を出す。其の山に殿あり名けて勝上と曰ふ。殿に千の柱あり、其の柱

瑠璃を莖と爲し、金剛を鬚と爲せり。復た蓮華ありて金剛を莖と爲し、雜色を葉と爲し、一一の華の葉は、赤、寶花の如く、毗瑠璃の如く、硨磲の如きものあり、金色の如きあり、是の如き等の雜色の蓮の葉あり。或は百葉あり、二百葉乃至千葉ありて、種々の色の花は各々差別し以て釋迦天王の善法殿堂の莊嚴と爲る。其の蓮華の中に多くの衆鳥あり、常欲の鳥・一切行鳥・常音聲鳥なり。若し天帝釋諸の天女と蓮華池に入り娛樂し遊戲すれば、鳥も亦遊戲す。天音樂を奏すれば、鳥も亦た發聲す。復た衆鳥ありて欲放逸と名く。若し天帝釋華池に遊べば、鳥も亦た遊戲して戲女の身の如し。復た衆鳥ありて名けて遊行と曰ふ。華池の岸に於て、口に華鬚を銜みて遍く池の側に於て、舞弄し遊戲して妙へなる音聲を出せり。釋迦天王に是の如き等の勝蓮華池有り。

復た次に比丘、天帝釋の善業の化せし所を觀ず。彼れ華池を見るに、眞金を魚と爲し、或ひは白銀の魚、毗瑠璃の魚は赤蓮華寶を以て其の翼と爲し、硨磲を目と爲す。若し瞋恚る時は赤蓮華の如くにて種々の雜寶を以て鱗甲と爲す。或は七寶の翅にて蓮華池に於て遊戲し、樂みを受く。

復た次に比丘、復た帝釋の蓮華林池を觀るに、彼れ聞慧を以て蓮華池を觀ず。何を以て地と爲すや。彼れ聞慧を以て天帝釋を見るに、眞珠を沙と爲し以て其の地を覆ふ。或は銀沙を以て、或は金沙を以て、或は毗瑠璃を以て其の沙と爲す。是くの如く種々の雜色の莊嚴を悉く分別し帝釋天王の善業の化する所を見る。

復た次に比丘是くの如く分別して地分を觀察す。彼れ聞慧を以て彼の波頭摩華の林を見るに、周匝は皆な眞金を以て欄楯とし、或は毗瑠璃を以て欄楯と爲し、或は白銀を以て欄楯を爲す。眞金の羅網を以て其の上を覆ひ、種々の衆鳥は妙へなる音聲を出して池邊に遊戲す。復た次に比丘は業の果報を知りて善法堂の蓮華池の中を觀ずるに、其の蓮華池の衆の蜂は雜色にして衆の妙音を出す。金色の華の中の白銀色の蜂は金剛を翅と爲し、其の身柔軟なり。白銀の蓮華は金色を蜂と爲す。是

頂上に住して忉利天、卽ち三十三天の主なり。略して釋天とも帝釋とも稱す。

【二九】憍尸迦(Kausika)。又憍支迦。帝釋の姓なり。

【三〇】那由他(Nayuta)。大なる數名にして約一億に當ると云ふ。

【三一】因陀羅寶。具さには因陀羅尼羅目多(Indranilamu-kta)、又、因陀羅尼羅とも云ひ、帝釋の青珠なり。

【三二】難陀(Nanda)。歡喜と譯す。

て善法堂に生まるるやを觀ず。若し人七種の戒を持し、戒を缺かさず、戒を穿たず、戒を隙せずして、堅固に持戒し、譏嫌すべからず。布施して心を修め、福田の中に於ては時に稱うて施す。若しは[二三]阿羅漢、若しは看病人、若しは父母若しは[二四]阿那含、若しは[二五]斯陀含、若しは[二六]須陀洹、若しは[二七]滅定より起ち、若しは道行人に施す。慈悲心を行じて歡喜びて捨與す。怖畏る者に於て其の壽命を施す。是の人命ち終つて善法殿に生まれ、[二八]釋迦提婆と作る。姓は[二九]憍尸迦にて能天主と名く。九十九[三〇]那由他の天女あり以て眷屬と爲す。恭敬し圍遶りて、帝釋を供養す。一女人の丈夫に供給する如くに、諸の天女等は心に嫉妬なく天后に供養す。同じく帝釋を奉じても亦た妬心無し。其の善法殿の廣さは九百由旬にして、毗瑠璃珠を以て欄楯と爲し、珊瑚を柱と爲し、玻瓈・硨磲・碼碯にて莊嚴り、閻浮檀金を殿の壁と爲し、融金色の如し。其の牀は皆な金剛摩尼・赤蓮華珠・青珠玉寶を以て莊嚴と爲す。其の諸の蓮華は金剛を鬚と爲し、眞金を莖と爲し、清淨なる華池を以て莊嚴と爲す。復た衆の鳥あり、毗瑠璃の翅は赤蓮華珠を以て其の身と爲し、青因陀寶を以て其の嘴と爲し池中に遍滿し。其の池の四岸は青摩尼華にて、摩尼を地に布けり。復た衆の鳥あり、青因陀寶を以て其の足と爲し、硨磲を嘴と爲し、珊瑚を眼と爲して地中に充滿せり。其の池に復た衆の鳥ありて其の身を具足して、皆な閻浮檀金の如し。珊瑚を翅と爲し、[三一]因陀羅寶を以て其の眼と爲す。復た浴池ありて衆の蜂にて莊嚴りて、其の蜂の色相は毗瑠璃の如くにて浴池を莊嚴れり。其の善法堂に、十大華池あり。何等をか十と爲すや。一を[三二]難陀蓮華池と名け、二を摩訶難陀蓮華池と名け、三を歡喜蓮華池と名け、四を大歡喜蓮華池と名け、五を遊戲蓮華池と名け、六を正憶念蓮華池と名け、七を一切義蓮華池と名け、八を正分別蓮華池と名け、九を如意樹蓮華池と名け、十を因陀羅に覆はれし處の自在の大光明蓮華池と名く。是れを十種の大蓮華池と爲す。用を以て天の善法堂を莊嚴れり。復た其の餘の蓮華林池あり、其の華は清淨にして白銀を莖と爲し、眞金を鬚と爲し、

【二三】阿羅漢(Arhān)。應供と譯す。一切世間の供養に應ずるに堪ふべき聖果を云ふ。聲聞位の最高。

【二四】阿那含(Anāgāmin)。譯して不還、不來とす。欲界の煩惱を斷じ盡くしてたる聖者の名。此の聖者は未來に色界、無色界に生ずべし。欲界には再び生じ來らざれば不還と云ふ。聲聞位の第三位。

【二五】斯陀含(Sakṛdāgāmin)。一來と譯す。猶、殘餘の煩惱のために、人間と欲天とに一度來たつて生を受くるに由る。聲聞聖位の第二の地位。

【二六】須陀洹(Srotāpanna)。預流と譯す。小乘聲聞位中、聖者の流に入る最初の地位を名く。三界の見惑を斷じたる聲聞なり。

【二七】滅定。滅盡定(Nirodha-samāpatti)の略。又滅受想定と名く。二無心定の一。六識の心、心所を滅盡して起らしめざる禪定なり。不還果以上の聖者假に涅槃に入る想を爲して此定に入る。極めて長きは七日なり。

【二八】釋迦提婆。具には釋迦提婆因提(Śakra-devānām-indra)、又は釋提桓因とも云ふ。因(indra)は帝なり。諸天の帝たる釋、卽ち帝釋天なり。能天帝と譯し、須彌山の

復た六種の因緣ありて禁戒を持す。一者は他に便るを求めることを畏る。二者は罰戮を畏る。三者は怖畏、四者は因緣、五者は不觀、六者は自性なり。復た七種の戒あり、身に三戒、口に四戒あるを謂ふ。比丘是くの如き無量の持戒を觀じ、衆生は惡道を畏る。持戒のみ能く度す。是くの如き持戒は略して二種と說く。一者は世間二者は出世間なり。

是くの如く比丘四天王天を觀じ已りて三十三天の住する所の地を觀じ、及び業行を觀ず。何かなる業を以ての故に三十三天に生まるるや。彼れ聞慧を以て三十三天の住する所の地を見る。何等を三十三とするや。一者は名けて住善法堂天と曰ふ。二者を住峯天と名け。三者を住山頂天と名け。四者を善見城天と名け。五者を鉢私地天と名け。六者を住倶吒[19]天と名け。[倶吒とは山の名なり]七者を雜殿天と名け。八者を住歡喜園天と名け。九者を光明天と名く。十者を波利耶多樹園天と名づけ。十一者を險岸天と名け。十二者を住雜險岸天と名け。十三者を住摩尼藏天と名け。十四者を旋行地天と名け。十五者を金殿天と名け。十六者を鬘影處天と名け。十七者を住柔軟地天と名け。十八者を雜莊嚴天と名け。十九者を如意地天と名づけ。二十者を微細行天と名け。二十一者を歌音喜樂天と名け。二十二者を威德輪天と名づけ。二十三者を月行天と名け。二十四者を[20]閻摩娑羅天と名け。二十五者を速行天と名け。二十六者を影照天と名け。二十七者を知慧行天と名け。二十八者を衆分天と名け。二十九者を住輪天と名け。三十者を上行天と名け。三十一者を威德顏天と名け。三十二者を威德燄輪天と名け。三十三者を清淨天と名く。是くの如きは[21]三十三天なり。比丘、微細の業の果報を觀るに持戒して善業あり。何等の業を集めて善道に生まるるや。善業の因緣にて善の果報を得て樂報の處に生まる。彼れ聞慧を以て、佛の說法、外道に非らざる法を聞く。彼れ諸天の生るる所の處を見、遊戲して受樂ことは稱說すべからず。帝釋天王の擁護する所の善法堂に住す。外道說きて常住不滅と爲す。初めに善法を觀じ、次に[22]分別して善く何かなる戒を修し

【一九】倶吒(Kūṭa)。山の名なり。

【二〇】閻摩娑羅天。不明。

【二一】三十三天。忉利天に同じ。帝釋天を中央にして四方に各八天なれば名く。

【二二】分別。事理を思量し識別する心の作用を分別と云ふ。分別せらるる者、卽ち分別の對象を所分別と云ふ。

愛とは財利の爲めの故に、禁戒を受く。不愛とは疾病の故に、禁戒を受け、自性とは自らの性は淨行にして、此の功德は勝れり。復た三種の戒あり、一者は禪行戒、二者は無禪戒、三者は離惡戒なり。禪行戒とは〔一五〕世間禪を修め乃至城邑・聚落に入りて禪を修す。非禪戒とは禪行戒を離る。離惡戒とは衆の惡に遭ふを恐れて之を捨てゝ爲さず、人の酒に醉ひ不善の業を行ふ如く、智人は之を見て酒を斷ち飮まず。復た三種の戒あり、一者は諂曲戒、二者は不諂曲戒、三者は性善戒なり。諂曲戒とは垢染にして不淨なるも、少の果報を得。不諂曲戒とは大果報を得。性善戒とは、若し心增上せば大果を得、若し心劣弱なれば其の果は則ち小なり。復た三種あり、一者は因緣持、二者は非因緣持、三者は法不應作なり。因緣持とは因緣あるが故に、禁戒を護持するなり。非因緣とは緣なくして持戒するなり。不應作とは大姓に生まれて、作すべからざる所にして種姓を護る故なり。復た次に緣に從つて持戒すとは佛を得んとするが爲めの故に、〔一六〕思勝りしを以ての故に、其の果は則ち大なり。緣なくして持戒するとは、其の果則ち小にして果を識らざるが故なり。不應作とは、世の名を求むるが故に其の果も亦た小にして人中に生まる。復た三種あり、一者は師を畏る、二は師を畏るに非らず、三者は惡道を畏るなり。師を畏るの持戒は下の持戒に名づく。師を畏るに非らざる持戒とは、中の持戒に名づく。若し惡道を畏れば上の持戒と名づく。復た三種あり、一者は自ら戒を持して人に敎へず、二者は自ら行つて人に敎ふ、三者は他に於て〔一七〕捨を行ふなり。復た三種あり、一者は缺戒、二者は不缺戒、三者は一切缺戒なり。缺戒とは初め善く持戒して後は則ち戒を破るなり。是れを缺戒と名く。不缺戒とは初・中・後の時も常に善く戒を持す、是れを不缺戒と名く。一切缺戒とは諸の外道に會ふて〔一八〕齋戒を受け邪見にして殺生す。是れを一切缺戒と名く。

復た次に比丘は四種の戒を觀ず。何等をか四と爲すや。口に四の過を離る。一者は妄語、二者は兩舌、三者は惡口、四者は綺語なり。復た五種の戒有りて五境界を止む。是れを名けて五と爲す。

〔一四〕出世間戒。沙彌の十戒、比丘の具足戒を云ふ。

〔一五〕世間禪。三種禪定の一。色界、無色界の禪定を云ふ。

〔一六〕思(Cint)。心をして造作せしむる作用に名く。心所法の名なり。倶舍七十五法中十大地法の一なり。

〔一七〕捨。內心平等にして執着なきを捨と名く。善の心所の一なり。

〔一八〕齋戒。心の不淨を淸むるを齋と云ひ、身の過非を禁ずるを戒と云ふ。

の因を爲し、上・中・下の戒にて六欲天に生まる。心勝れ、業業勝れて[一〇]六天に生まる。心勝れしを以ての故に、生るる處も亦た勝れり。

復た次に比丘、戒の幾種なるかを觀ず。彼れ世間を見るに二種の戒あり。一者は自生、二者は從他なり。自生とは自性にて能く持し、從他とは和合して生ず。復た二種の戒あり、一者は在家、二者は出家なり。在家の戒とは所謂[一一]五戒にして、出家の戒とは[一二]解脫戒を持す。復た二種の戒あり、一行戒と非一行戒とを謂ふ。一行とは所謂一戒にして、非一行とは或ひは二戒を受け、或ひは三戒を持するなり。復た二種あり、一者は久時、二者は不久時なり。久時とは形を盡くして戒を護り、不久時とは心の所要に隨ひ、力に隨つて持戒するなり。復た二種あり、一者は有垢、二者は無垢なり。有垢の戒とは天中に生まれ、無垢の戒とは涅槃に至る。復た二種の戒あり、一者は[一三]世間戒、二者は[一四]出世間戒なり。世間戒とは則ち流動あり、出世間戒とは則ち流動無きなり。復た二種の戒あり、一者は自護、二者は護他なり。自持戒とは名づけて自ら護るを曰ひ、他護とは他をして世間の染戒に住せしむ。復た二種あり、一者は止、二者は作なり。作とは諸行を成就して生死を轉ずるなり、止とは因を知り、緣を知りて進學せず。復た二種あり、一者は智攝、二者は施攝なり。布施攝の戒は大富樂を得、智の所攝の戒は涅槃に至るを得。復た二種あり、一者は內行、二者は外行なり。外行とは身を淨むるに依り、內行とは心・口・意を淨むなり。復た二種あり、一者は修習にして二者は不習なり。修習とは已に無量世より來た修習するなり、不習とは一世に戒を持するなり。是くの如く比丘、是くの如き等の無量の二戒を觀ず。

復た次に比丘、微細の戒に幾種の戒あるやを觀ず。比丘戒を觀ずるに復た三種あり。一者は少分の戒、二者は多分の戒、三者は盡受戒なり。少分の戒とは一戒を持し、多分の戒とは或は二三を持し、盡受戒とは一切の戒を持するなり。復た三種あり、一者は愛、二者は不愛、三者は自性愛なり。

云はれ、外院は普通の天衆の欲樂處なり。

【六】化樂天（Nirmāṇarati-ya）。又、樂變化天と云ふ。欲界の第五天なり。自己の神通を以て、自由に五欲の樂境を變化出生して娛樂するに由つて名く。

【七】他化自在天（Paranirmita-vaśa-vartina）。略して他化天と云ふ。欲界の第六。最上の天なり。斯の天は他の下天の變化せる樂處を取つて、自己の娛樂に供するに由つて名く。斯の天は色界の大自在天と共に、謂はゆる天魔として正法に害を爲す者とせらる。

【八】四天處。四天王天のこと。（三）を見よ。

【九】魔波旬（Māra pāpīyā）。魔は魔羅の略、天魔の總名なり。波旬は魔王の別名なり。

【一〇】六天。六欲天のこと。

【一一】五戒。在家修道者の守るべき道德的德目。不殺戒・不偸盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飮酒戒を云ふ。

【一二】解脫戒。別解脫戒の略なり。三種戒の一にして、受戒の作法に依て五戒乃至具足戒を受けて身口の惡業を別々に解脫する戒法なり。別解脫律儀とも云ふ。

【一三】世間戒、優婆塞、優婆夷の五戒八戒なり。

巻の第二十五

観天品第六之四

三十三天初

復次に比丘、持戒を観ずるに、若し持戒の智慧を離れしもの有れば、天に生まるることを得ず。彼れ聞慧を以て見るに、持戒者は天中に生まれ、天の快楽を受く。智あるを以ての故なり。命ち終りて退く時に悪道に堕せず。何等の戒を以て、幾種の戒ありて天中に生まるるや。何なる相にて生まるるや。七種の戒を見る。天中に化生するに上・中・下有り、[一]不殺生戒は　[二]四天王の處に生まれ、不殺・不盗は　[三]三十三天に生まれ、不殺・不盗・不行邪婬は　[四]夜摩天に生まれ、不殺・不盗・不邪婬・不妄語・不兩舌・悪口・綺語は　[五]兜率陀天に生まれ、世間の戒を受け、佛戒を信奉して不殺・不盗・不邪婬・不妄語・兩舌・悪口・綺語なれば　[六]化楽天・[七]他化自在天に生まるることは亦た是くの如し。比丘、是くの如くに戒業を観ずるに、諸の衆生を繋ぎて天中に上生す。云何に持戒し何處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに不殺戒を受けて　[八]四天處に生まれ、身量・色力・富・命は第一なり。若し不殺・不盗戒を受くれば三十三天に生まれ、身量・色力・富・命は轉た勝れり。若し不殺・不盗・不婬を受けて親近して修習すれば、夜摩天に生まれ身量・色力・富・命は轉た勝れり。信智勝りしが故に、兜率陀天に生まれ身量・色力・富・命は轉た勝れり。不殺・不盗・不邪婬・不妄語・兩舌・悪口・綺語なれば化楽天に生まれ身量・色力・受楽・富・命は轉た前より勝れり。不殺・不盗・不邪婬・不妄語・兩舌・悪口・綺語を受持せば他化自在天の中に生まれて身量・色力・壽命・富楽は餘天より勝れり、[九]魔波旬に自在に使はるる所に非らず、亦た魔を使はず。

復た次に比丘、業の果報を知り微細の因を観じて天上に生まる。彼れ思心にて見るに、勝れし戒

【一】不殺生戒。在家・出家小乘・大乘の一切の戒中にあり、有情の生命を殺害するを制するなり。

【二】四天王(Caturmahārāja-kāyikās)。欲界六天の第一。帝釋天の外將として、須彌山の半腹に在つて各一洲を守護す。由つて護世天とも稱す。卽ち東方は持國天(Dhritarāṣtra)、南方は增長天(Virūḍhaka)、西方は廣目天(Virūpākṣa)、北方は多聞天(Vaiśravaṇa)なり。

【三】三十三天(Trāyastriṃśās)。忉利天を譯して三十三天と云ふ。欲界六天の第二にして、須彌山頂の頂上にあり。帝釋を以て天主とす。帝釋天を中心として四方と各八天あれば三十三天と名く。

【四】夜摩天(Yāma)。具さには須夜摩天(Suyāma-deva)と云ふ。欲界の第三天にして、又、焔天と云ひ、時分と譯す。能く時分を知つて五欲の樂を受くるに由る。

【五】兜率陀天(Tuṣita devā)。略して兜率と云ふ。欲界の第四天にして夜摩天の上に在り。知足、喜足と譯す。五欲の樂を滿足に受けて樂むに由る。內、外二院に分れて、內院は後身の菩薩の淨土にして、現に彌勒菩薩の修行處と

中の某村、某邑・某城・某國・某種姓中の某善男子の名字の某甲、信を以て出家し、鬚髮を剃除り、法服を被り魔と共に戰ひて諸有を出でんと欲す』と。是の如くに無量光天聞き已りて、歡喜び餘天に告げて曰く『閻浮提の人、正法を順行す。我れ今隨喜ぶ』と。此の人、發心して生死を出でんと欲し、魔と共に戰ひ、持戒し正行し、魔と戰ひて魔軍を滅損せんと欲し、如來の說き給へし所の正法を增長す。

於て二の護世天あり。一を〔二九〕提頭賴吒と名け、二を〔三〇〕毗沙門と名く。此の諸の天衆は二大天王と四天下に遊びて、種々の摩尼を以て宮殿と爲す。青・黄・赤・白なることは前に說きし所の如し。行天の衆と空中に遊戯して五欲の樂みを受け、意の如に自ら娯しむ。乃至善業を受け盡くして、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人と爲るを得んには常に樂しみて一切の國土に遊ぶ。設へ因緣無しとも諸國に遊び、或は安樂を受け、或は苦惱を受く。餘にて習へしを以ての故に餘の戒力の故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り四大天王を觀ずるに更らに餘地無し。是の如き念を作さく『四天王天は無量無邊なり』と。是の如く盡く觀じ須彌山の四面に於て樂しみを受く。右に遶ぐりて遊行するは日月の遊行にして、須彌山を遶ぐりて何なる方に在るやに隨ひて、須彌山王に則ち影現有り人說いて夜と爲す。閻浮提の北の名けて風輪と曰ふは、北方星を持し、輪轉して沒せず。風輪は持するが故に、諸の〔三一〕外道等此の辰星を見て北斗七星は常に現はれて沒せずと。便ち此の星の能く一切の世間・國土を持するを謂ふなり。如實の知ならず。風力の持する所を知らざるなり。是の如く外道は少分の知あるのみなり。比丘如實に四天王天を觀じ、生死を厭離し、天を退く苦しみを見る。觀じ已りて生死の無常なることを厭離す。一切は破壞し、一切は變動し、一切は別離し、一切は業藏にして、諸業は流轉す。是の如く比丘は聞知を以て見る。復次に行者は、法を內觀し、法に順じて修行す。一切の愚癡なる凡夫は欲樂に貪著して、愛の爲めに縛らる。天に生ることを求むるが爲めに梵行を修さめ、天樂を受けんと欲す。是の如く比丘は深く厭離を生じて、樂まず、著せず、修めず、味はずして、諸の樂しみを觀じ已はれり。聞の智慧を以て彼比丘を見るに、能く魔と諍ひて生死海を度せんと欲して第十七地を得。地神、夜叉は聞き已り歡喜して虛空神に告げ、空行夜叉は聞き已りて歡喜し、四天王に告ぐ。前に說きし所の如くに次第に、乃至無量光天（に告ぐ）。『閻浮提

【二九】提頭賴吒（Dhṛtarāṣṭra）。提多羅吒とも作る。即ち持國天なり。四天王の一、須彌の半、第四層の東。東方天主にして東洲を守護する故、東方天とも云ふ。

【三〇】毗沙門（Vaiśravaṇa）。四天王天の名。多聞と譯す。四天王中毘沙門天の王なり。北方の主神にして、もと金毘羅（Kubera）として暗黑の屬性なりしが次第に光明神と化し、佛教中には護法の天神と、施福の神性とを兼ぬ。

【三一】外道。佛教外、眞理外に立つる道、又、其の道を奉ずる者。印度に當時九十六種の外道ありきと云はる。

或は曠野の險處に於て、人に正道を敎へ、或は疑怖の處にて他をして安隱ならしめ、衆生を利益し、善く三業を行ひて身・口・意を淨む。是の人命終りて正行天に生まれ、彼の天に生まれ已らんには、其の身の光明猶ほし滿月の如く、其の光りは明曜なり。六根に常に五欲の樂みを受け、常に自ら娛樂む。無量の天女を以て供養を爲し、身に天衣を服し及び天鬘を著て、常に遊戲を園林華池にて行ふ。玻瓈林に入るに、其の林は皆悉く是れ玻瓈樹にして普く光明を出て以て嚴飾と爲し、華果を具足す。其の葉の光澤は猶ほし、雲母の如く、果は明鏡の如く、其の相た方正なり。是の時、天子　毗留博叉の林に入りて、百千身を見るに皆な悉く端正にして、塗香・末香・華鬘にて莊嚴れり。百倍に踊躍して謂らく『餘の天衆は悉く已れに如かず』と。時に、毗留博叉、彼の林中に入りて、諸の、世間を觀ず。林の勢力を以て毗留博叉は此の林中に於て、空行の夜叉・地行の夜叉及び閻浮提の法・非法の相を見、增長果を見る。玻瓈樹に於て人の法を行ふを見れば、心は則ち歡喜ぶ。非法を行ふを見れば心則ち悅ばず。毗留博叉は法・非法を見て帝釋に向ひて說く。夜叉の所に於て、閻浮提人の若しは善・不善を知る。時に彼の天子は此の林中に於て、五欲の樂みを受く。乃至善業を受け盡くし地獄・餓鬼・畜生に墮す。若し人中に生まるれば法城內に於て、正見の大長者の家に生まれ、大富・饒財なり。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り三箜篌天を觀じ已りて四大天王天を觀ず。名けて行天と曰ふ。須彌山王を遶りて宮殿に住す。外道の說に言ふ。曜及び星は粗略して說けば三十六億の衆生を宿すと。何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに七種の戒を持す。身戒・口戒にして、身に三種の戒・口に四種の戒なり。彼處に生まれて增上果を得、衆生は善・不善の業の因緣を作すを以ての故に、善惡の相を日月星宿に現ず。名けて行天と曰ふ。須彌山を遶ぐり虛空にて風を持すを名けて風輪と曰ふ。增上緣を爲し、轉じて日月星宿を持す。須彌山王を遶りて、彼の天中に

【二八】毗留博叉(Virūpākṣa)。廣目天のこと。四天王を見よ。

善道に至らん。智慧の善業の故なり。是の故に常に戒を持し、智慧の財を布施し、常に破戒を離るることは刀火の毒を避くるが如く、是の如く善く戒を護れば、將に人善道に至らん。

若し、持戒を離れなば則ち安樂の處無けん。

是くの如く命命鳥は偈にて天子を讃じて、心をして喜悦せしむ。天子聞き已り、心に歡喜を生じて即ち其の父と共に林中に入る。其の林は皆な如意の樹を以て莊嚴と爲し、猶ほし日光の如く莊嚴は奇特にして、無量百千の樹林は和合し、流泉・浴池にて其の林を莊嚴れり。毘瑠璃樹は眞金にて莊嚴り無量の愛樂あり。初めて生まれし天子は此の林樹を見て大歡喜を生ず。彼の林中に遊び諸の天女を見て繫屬せらるるところ無し。時に、諸の天女は此の天子の獨り林中に遊ぶを見るに、容貌端嚴にして未だ有らず。天女は皆な疾く走り、此の天子の所に詣り、戲笑し、舞歌して天の伎樂を作す。時に、彼の天子既に父母を捨てゝ欲心に覆はれ、天女の衆に詣りて、共に相ひ娛樂し、歡喜すること比なし。天衆伎樂にて受樂を成就す。金銀・毘瑠璃・硨磲・碼碯の寶の山峰中に於ける園林・浴池は、眞珠を沙と爲し以て其の地に布けり。天の蓮華池は種々の衆鳥を以て莊嚴と爲し、諸の天女と處々に遊行し、遊戲して樂を受く。一一の山中、一一の河中、一一の流水にて諸の天女と遊戲して樂を受く、是の如き希有の事を觀察し已りて、天女の衆と共に歡娛て樂を受く。乃至、善業を受け盡して天從り命終る。業に隨ひて流轉し、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれんには、或は國王と作り、或は大臣と爲り、一切の人の愛念する所と爲り、顏貌端正ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り三十三天の住する所の地を觀ず。彼れ聞慧を以て三十三天を見るに、第十地あり、名けて正行と曰ふ。衆生何なる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞知にて見るに、若し衆生ありて善業を行ひ、人の亡破せられ、他の爲めに抄掠るるを見て、救うて脫するを得しむ。

【三七】命命鳥。命々鳥(Jivañji-vaka)なり。又、共命鳥、生生鳥とも稱し、一身兩頭の鳥なりと云はる。

子は生れ已つて父母の想を生ず。父母の子を愛するは亦閻浮提の人の如し。是の如く天中にて坐從り化生し、之を愛すること彌甚だし。天子に語りて言さく『汝善き果報にて我從り化生せり。我れ汝と樂まん。我れ今將に汝と一切の諸の園林中の諸の蓮華池に遊戲し、及び山頂に遊ばんとす。金網に覆はれし、泉流、浴池あり、樹の枝は彌覆し、蓮華池中は金色の蓮華、衆蜂にて莊嚴り、淸淨なる流水及び諸の飲河の種々の美味は意の恣なり。汝と共に遊戲して樂しみを受けん』と。天子白して言さく『我れ今此こに生まれ、善き果報を得、生まれて父母に値ふ。我れ今供養せん』と。時に、天の父母は卽ち將に天子と兩閻浮檀林に詣らんとして、諸の天女と彼林中に至りて閻浮檀樹を見るに、華果は鬱茂し、其の香は普く熏じて五由旬に滿てり。華を以て遍く散じ、種々の妙色は靑・赤・黃・紫にして、種々の形色は長・短・方・圓なり。此の衆の華を以て其の身を莊嚴り、天の髮旋の如し。時に、天の父母は其子に語りて言はく『此の兩閻浮檀林は歡喜びて華敷き、若し風樹を動かさば、其の華は遍く一切の天衆に散らん。汝、今、此の林に於て遊戲すべし。天女の衆と自ら娛樂し相ひ隨ひて遊戲せよ』と。是語を說き已りて諸の天衆と共に彼の林に入り、衆の天鳥を見る。名けて命喚と曰ふ。卽ち偈頌を以て天子を讃へて曰はく。

　善くも汝賢士よ、來りたれ。善業を作せしに從つて生まれしなり。七種の戒を護持して、今や是くの如きの果を得たり。持戒の果安樂にして、天中に果報を受く。持戒は船筏の如くにて、能く生死の津を度す。若し人、戒水の淨きをもつて、勇健心に澡浴すれば、閻浮檀金の華にて天中に自ら澡ぎ潔めん。持戒を種子と爲す。種々の戒行を修むれば、天中に於て遊戲せん。汝、今樂を成就せしなれ。若し人、心を調伏して常に戒を以て莊嚴れば、彼の人天處を得て無量の快樂を受けん。若し人、善業を作せば、樂に從つて樂處に生まれ、天宮にて遊戲せん。持戒にて增長するが故なり。[二六]尸羅の階に乘りて智慧を增長せんには、此の人

【二六】尸羅(Sīla)。淸凉と譯す。戒の義なり。戒は能く惡業の熱惱を消息せしむるに由りて名く。

し、諸の天女と美味を飲みて五欲の樂しみを受く。或は山峰の毘瑠璃地に行くに、其の地は平正なり、或は山王に遊ぶに、河泉、流水は清淨、無垢にして清涼なり。快樂して諸の天女と其の中にて遊戲す。或は渡濟にて遊ぶに、眞珠を沙と爲し以て其の地に布き、清淨なる水中にて自ら遊戲す。或は樓閣有りて七寶にて莊嚴り、高峻にして廣大なり。或は伎樂有りて諸の天女と遊戲して樂しみを受く。或は意樹有りて寶鈴・妙聲を以て莊嚴と爲す。或は林中に〔二四〕六時を具足することありて、諸の親友及び天女の衆と常に快樂を受く。或は七寶ありて以て其の地と爲す。此の山に上り已りて、餘の天衆を觀ずるに、是の如くにて、種々の譬喩すべからざる自らの業に化されて、天の快樂を受く。是の如く諸天の愛樂は放逸にして厭足ことを知らず。眼に無量の種々の妙色を愛して厭足ことを知らず。耳・鼻・舌・身・意の聲・香・味・觸・及び法を貪ることも亦復是の如し。是の如く六根は六境を染愛して厭足ことを知らず。境界を得るに隨ひ、愛心は轉た増して火の薪に益すが如く、境界を得るに隨つて無量に增長す。愛は諸天を覆ふて眞の樂しみを識らざらしむ。是の如き等の無量の天樂を受け、乃至善業を受け盡くし、天從り命終る。若し善業無ければ、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人間に生まれんには同じき一衆に集まり、或は大海に入り商賈して財を求め、或は一城を同じくし、或は山中の同一村落に有り、或は一業を同じくし、或は復親友たり、或は一王を同じくし大富にして自在ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて、三十三天の第九の住處の名けて化生と曰ふを觀ず。衆生何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、大悲心を起して、衆生の饑饉に逼まられて深水に投沒し、自ら身を喪はんと欲するもの有るを見て、此の溺人を救ひて、之を愛すること子の若くに悲心みて救護す。是の人、命終らんには天上に生まれん。此の天子に隨つて天女に近づき跏趺して坐し、其の懐中より忽然として〔二五〕化生す。時に、天の父母は卽ち子の想を生ず。天

【二四】六時。晝三時、夜三時合せて六時なり、晝の三時は晨朝・日中・日沒なり。夜の三時は初夜・中夜・後夜なり。

【二五】化生。四生の一。依托する所なくして生ずるものなり。諸天、諸地獄及び劫初の人の如きは化生なり。

て善業を作し、人、業を成就することを作せば、是業報を以ての故に此の天中に生ることを得ん。若し自身を愛すること有つて樂果を受けんと欲せば、大福德の因を作せ。天世間に生まることを得ん。若しは、諸天の中に於て上・中・下の樂を受けん。是の如き三種の樂は福德の因緣の故なり。若し人、諸業を作せば業に隨つて增減有り、是の如き諸の業に隨つて天中にて樂報を受けん。

時に、毘留勒天王諸の天衆を觀じ是の偈を說き已りて、諸の天衆と山峰の園林の浴池・華果の處に遊戲す。種々の衆鳥は妙へなる音聲を出し、多くの諸の天衆は目に山谷を視て、心に愛樂を生じ六欲の樂を受け、六境に於て放逸の遊戲を貪り、五樂の音聲を蓮華池の遊戲の處に於てす。或は飲河に遊び、毘瑠璃林は泉池を莊嚴て、皆共に遊戲す。乃至善業を受け盡くし天從り命終らんには、業に隨つて報を受け、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれなば、智慧・辯才ありて世の導師と爲り、人に信受せられん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り三箜篌天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第八地の處の名けて共遊と曰ふを見る。衆生何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、信心し修行し、持戒し布施し、法會にては法を聽き、經の營みを佐助し、隨喜の深心、善心を勸助するに淨信心を以てす。是の如くに此の人の福德を思惟し、我れも亦是の如く當に福を修すべきを念ず。是人命終つて共遊天に生まる。施すことを隨喜するが故なり。無量の境界は心に愛樂を生じ、其の園林の中には種々の音聲あり、遊戲して樂しみを受く。其の池の四岸は毗瑠璃珠を以て欄楯と爲し、金の華は遍く覆ひ、種々の衆鳥は妙へなる音聲を出し、諸の天女と共に遊戲す。其の園林の中は倶翅羅鳥、孔雀にて莊嚴り、諸の天女と遊戲して樂しみを受く。其の諸の蓮華は瑠璃を莖と爲し、黃金を葉と爲し、金剛を臺と爲して其の中にて遊戲す。美林中に於て衆果具足

なる形色にて、天の諸の歌音を聞く者は悦樂みて林中に遍滿す。其の林に多く天の諸の藥草ありて鳳鳥・泉池・華果を具足し、此の戯れの處に於て五欲の樂を受く。復天女の眷屬と圍遶して須彌山の辯才峰の間に詣り、彼の山中に於て衆の蓮華池・園林を具足す。其の山峰の中の[一九]毘樓勒天王の所住の處は無量の天女の共に圍遶く所なり。諸の衆生の作す所の事業を觀ずるに、法と非法とを以てせり。幾許の衆生法の行を行ずるや。幾許の衆生非法を行ずるや。何なる業を作すが故に世間を利益するや。何かなる業を作すが故に世間を益せざるや。何を以て彼の正法をして增長せしめ非法を減少せしむるや。云何して魔軍の衆を減少せしめ、勇健阿修羅、[二〇]龍の等の惱亂するを、皆悉く損滅せしむるや。是の如く護世天王は辯才山に於て、峰を去ること遠からず。日の行く所の道にて、毘留勒天王は其の光明を觀じて『何なる法を修行し此の光明ありて世間を照らすや』を思惟して日の道を行く光明を觀ず。若し世間の人、法に順じて修行し正法を擁護すれば、法の如く日光は增長して清淨なり。時節は隨順し、光明は照曜き、五穀は成熟し、人に疾病なし。若し非法を行へば則ち日に光明無く、五穀登らず、人民は疾病す。是の如く皆法・非法の力に由つて[二一]增上果を得るなり。日の光明は因緣なきに非らず。光明は等しきものなし。須彌の側にて行ずる故に大明と名く。毘留勒天王は日を見已りしに因つて諸の世間を觀ず。彼の諸の天衆は歡喜びて樂しみを受け、此の大明の山峰間に行ずる光明の威德を見て百倍に歡喜ぶ。毘留勒天王世間を觀じ已り、天の光明の威德の增勝なるを見て、心に歡喜を生じ、頌を說きて曰く。

三種の善業を作すに、三種の三因あり、三時・三地處・三功德・三果なり。盜まずして常に施を行ひ、正法を行ひ、實に[二二]忍に善く相應せば、一切の天中の[二三]王となり、天の莊嚴を具足し、天鬘にて自ら身を嚴らん。是の如き天中の樂しみは皆善業の因に由るなり。若し放逸の衆生にして善業を行はずんば、是の如き愚癡の人天中に生まるることを得ざらん。人中に

[一九] 毗樓勒（Virūḍhaka）。又、毘樓勒迦、毘留勒叉と作る。四天王天の一、增長天のこと。

[二〇] 龍（Nāga）。蛇屬の長として、神力を有して雲雨を變化すとせらる。

[二一] 增上果。五果の一。增上緣に依て生ぜしもの。眼識の眼根に於ける如く、眼識は增上果なり。

[二二] 忍（Kṣānti）。忍耐なり。違逆の境に忍耐して瞋心を起さず、又、安忍なり。道理に安住して心を動かさざるなり。

[二三] 王の字、宋、元、明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

曰く。

苦樂の法初めて起れば則ち久しき苦樂を忘るなり。譬へば初めの日の朝の如く、即ち先の日は有ること無し。云何して天世間は現在に天樂を受け、當に退沒くべきを知らざるや。一切皆盡に歸す。蜜の棘の林に在るが如く、亦雜毒の飯の如し。諸の樂しみも亦是の如きとも退沒く苦みを覺らず。天中の上妙の欲、之を受けて厭足こと無し。天中の諸の愛は力にて、大樂して自ら心を覆ふ。愛の火は衆生を燒き、樂しみを求むとも得べからざらん。若し愛欲を離ることを得ば、一心に行ずるを樂しみと爲さん。一六無我にして欲を離れし人は能く涅槃の城に至らん。是の人は初、後も淨くして、樂みに從つて樂處を得ん。若し人、愛の一七結を斷ち、心をして遺餘無からしめ、善く心意を攝め、一切法を愛せず、應に作すべきと、作さざるべきとを知れば、彼人常に樂しみを得ん。若し能く愛河を斷たんには、生死の流れを脫することを得ん。勇健なる者は能く度りて、必らず涅槃の城に至らん。愛すれば則ち樂み無けん。一八三毒和合するが故なり。若し能く欲を解脫すれば、是れを淸淨樂と名く。

是の如く比丘、放逸の行の天の愛火を增長するを觀じて、悲愍の心を生ず。是の時、彼天は諸の天女と香煙林の遊戲の處に詣る。天女は圍遶て種々の音聲にて歌舞し、戲笑して娛樂し、受樂む。或は虛空を行くに鳥の飛翔するが如し。天女は圍遶りて、鵝殿に乘るものあり、鵝鳥に乘るものあり、地を行くものあり。多くの天女ありて歌讚し音頌して、身皆安樂にして疲倦あること無し。香煙林に詣り彼の林中を見るに、先住の諸天は大いに歡喜を生じて和合し共に集まり、戲笑の音聲は第一の歡悅なり。香煙林に於て無量の音聲其の中に充滿し、簫・笛・箜篌の種々の鼓樂にて天女莊嚴て、衣、瓔珞を具し衆の妙聲、歌笑の音を出す。諸河の流水種々の音を出し、衆寶の色鳥は種々

【一六】無我(Anātman)。又、非我と云ふ。我とは常一主宰の義なり。人身は五蘊の假和合にて常一の我の體あることなく法は總て因緣にて生ず。無我は即ち人我、法我なし。無我は佛敎の究竟の眞理なり。

【一七】結(Samyojana)。結集、繫縛の義なり。法・非法共に其所に一つの結集を認めて執着せば、繫縛せらるるを謂ふ。

【一八】三毒。貪・瞋・癡の三煩惱は衆生を毒害する根本なるに由つて名く。

こと無し。是の如く女人味を欲し、欲を念ひ欲に依止し、自性は欲を念じて、常に天子を念ふて心に捨離することなし。若し天子を見れば諸の天女は娛樂して樂しみを受け、百倍に惽醉す。是の如く樂しみを受け、乃至善業を受け盡くして天從り命終り、業に隨つて流轉して地獄・餓鬼・畜生に墮つ。若し人中に生まれんには還りて眷屬と同じく一國に生まれ、同業にて福を修めん。餘業を以ての故に、皆悉く巨富にして、皆善業を行ひ、一切皆な共同して一の業を受け、處を同うして生を受け差別あること無し。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り箜篌天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第七地の處の樂遊戲と名くるを見る。若し人、戒を持して諸の衆生を化して、心をして淨信ならしめ、勸めて歡喜ばしむ。或は布施することを敎へ、或は持戒を敎へて、福田の功德を具する處を信ぜしむ。是の人命終らんに樂遊戲天に生まれ、身に光明を具せん。卽ち自ら思惟すらく『我れ何なる業にて此處に來り生まれしや』と。卽ち自ら念じて知らく『我れ前世に於て、人中の時に於て布施せり。此の人我が知識と爲り、同じく福德を爲せり。是の因緣を以て此の天中に生まれり。憶念すること是の如くにて、沙門の知識の敎化力の故に、我れをして布施して淸淨心を發さしむ。是の故に、今遊戲天に生る』と。卽ち時に迴顧して諸の天女を見るに、蓮華林の如く、衆妙の色相を具足して莊嚴れり。之を見て心著して復本の毫微の善をも念ぜず。放逸地に生まれて五欲に愛著し、天の觸樂を受け、諸の天女の無量の妙色を見て、心に戀著を生ず。無始より流轉せるは欲火の然らしむる所にして、猶ほし猛火の枯林を焚燒くが如し。欲火の然らしむる所は亦復是の如し。諸の天女の衆は諸の天子に向ひ、口より香氣を出し、其の住處に遍し。手に蓮華を執り、無量に莊嚴りて天子の所に詣り、天子と天女は無量に欲樂し、共に相娛樂みて、五欲の樂みを受く。比丘是の如く放逸を觀じ已りて生死を厭離し、生死の苦しみの大怖畏の處に於て、怯弱心を生じ、頌を說きて

し皆共に一心に和合して樂を受けん。遊戲し、行食し、皆愛樂を共にし、境界に悅樂み、五樂の音聲にて戲笑し歌舞して歡娛て受樂む。諸の天女の衆は種々に莊嚴り、種々の珍寶にて山地を莊嚴り、其の中にて遊戲し、自らの業の果を受く。毘瑠璃珠を以て欄楯と爲し、種々の衆寶・鵝鴨・鴛鴦にて其の河を莊嚴り、種々の寶樹は河岸を莊嚴る。諸の天女は衆は圍遶て遊戲し、眞珠の河に詣り、其の河中に於て無量の流水を飲む。清淨にして香の潔き白眞珠の沙を以て其の底に布き、眞金を泥と爲す。多くの金魚あり、無量の寶珠にて魚身を莊嚴れり。其河の兩岸、黃金を樹と爲し、毘瑠璃寶を以て其葉と爲す。毘瑠璃樹は黃金を葉と爲し、一切の華果は妙へなる色を具足す。華果は常に敷き、衆の鳥は遊戲して常に悅樂を懷き、其音聲を聞けば皆な愛樂を生ず。若し目を以て視、之を見ば心悅び、彼の諸の天子常に歡喜を懷く。復往きて本の所住處に詣るに、(一五)婆求水中にあり。寶樹の枝葉は屋の如く、殿の如し。其の地柔軟にして足の上下に隨ひ、天の青寶の如くに往返して遊戲す。衆の蓮華林を以て莊嚴と爲し、平正にして廣博なり。種々の衆鳥は妙寶にて莊嚴れり。或は金地有りて毘瑠璃樹の枝は羅網の如く、以て宮宅を爲して、多くの衆華の香あり。衆蜂は圍遶て、以て莊嚴を爲せり。天子、天女は其の中に充滿して天の樂報を受く。復泉水・園林・浴地に往くに、其の林の衆の鳥は水中にて遊戲し、其身は金色にて其の中に充滿し、妙へなる音聲を出せり。河泉、流水は清淨、香潔にして、往きて金山に注ぎて種々の音を出せり。諸の天女等は其の河の側に於て手に金華を執りて天子を圍遶き娛樂て受樂む。華を以て相撲ちて以て喜樂を爲す。多時を經て復諸天と欲林に詣る。彼の林中に於て、是の如く一切放逸して心を覆へり。其の林の衆の鳥は果味を恣いままにし、衆蜂の色貌は毘瑠璃の如くにして、華味を恣にす。俱翅羅鳥は心に常に醉ひ逸かれて猶ほし春時の如く、河岸の衆鳥は美飲に醉ふ。是の如く天子は五欲を意の恣にし、諸の天女の衆は諸の天子を見て欲心を充滿す。是の如く女人には、餘の樂しみの欲樂より勝るもの有る

【一五】婆求(Baka)。白色の鳥なり。

に逸かれて遊戲す。其の銀林の中の一切の嚴飾は皆白色にして、白寶蓮華、白寶衆鳥なり。是の白身の天は、此の林中に入るに猶ほし乳中にて月色の像を見るが如し、久しく此の林に住し遊戲して樂しみを受く。天衆の戲樂は譬喩すべからず。此の林を捨て已りて衆雜林に詣る。其の林は種々なる諸の樹にて莊嚴り、或は金樹あり、或は銀樹、或は瑠璃樹有りて、種種の色の葉を以て莊嚴と爲す。此の天身の色も亦復是の如く種々の色を生ず。此の林中に於て諸の天女と多時に遊戲し、復此の林を捨てて金山峰に詣るに名けて普遍と曰ふ。其の金山峰は七寶にて莊嚴り、彼の山頂に乘りて悉く須彌山王の眷屬を見る。六萬の金山ありて須彌山王は其の中に住す。復た普眼山に至り、彼の山に上り已りて久時く遊戲す。多くの諸の流水、河地ありて莊嚴り、周遍の園林には多く衆鳥有りて、妙へなる音聲を出す。白き身の天等、普眼山に於て久しく天の樂みを受け、諸の天女と遊戲して樂しみを受く。彼の山を捨て已りて復往きて大闍山頂に上る。復異天有り、來りて此の山に在り、共に集りて遊戲す。時に、白身の天は諸の天衆と遊戲して樂しみを受け、天の伎樂の音は甚だ愛樂す可し。樂しみを受け盡くす時は、燈の油の盡くるが如く、其の光りの則ち滅するは猶ほし日の沒するが如くにて、其の明も亦滅す。天も亦是の如く業盡きて還退く。其の本の業に隨つて地獄・餓鬼・畜生に生まれ、若し人中に生まれんには其身は鮮白にて藕絲の色の如く、北天、漢國土等に生まれん。皆悉く好色、鮮澤を具足し、第一の樂しみを受け、人民を統領す。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の界報を知り箜篌天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第六の地處の共遊戲と名くるを見る。衆生何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、信心して戒を持し、同く法義の爲めに和合し、共に會して戒を持し布施す。是の因緣を以て、此の諸の人等此より命終りて共遊戲天に生まれん。彼の天に生まれ已らんには、福德を成就

愛欲を行ふ。彼の林中に於て、[二]五樂の音聲にて歌舞し戲笑して以て自ら娛樂み、放逸の火を爲して境界の薪を燒く。一一の住處、一一の園林、一一の山峰、一一の宮殿、一一の華池ありて、諸の天女と共中にて遊戲し、五欲の樂しみを受く。此の天中に於て天の快樂を受け。乃至善業を受け盡くし、天從り命終り、業に隨ひて流轉す。若し餘善あれば地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、生れて從り終に至るまで病苦に遭はず、惱亂あること無く、人に愛敬せられ、好き國土に生まれて飢渴を離れ、色貌は端正ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて箜篌天を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第五の住處の名けて白身と曰ふを見る。衆生何なる業にて彼處に生まるるや。若し衆生有りて福田を識り、淨信心を以て、佛塔の風雨に壞されし所有るを見、若しは僧房舍を、福德心を以て塗飾り、治補し、正信心を以て業の果報を知り、作し已りて隨喜ぶ。復他人を敎へて故き塔を治せしむ。是の人命終らんには白身天に生まれん。彼の天に生まる者は白色の衣を服し、[三]珂の如く、雪の如く、[四]拘牟頭華の如く、十六分の中にて其の一にも及ばず。住する所の宮殿も亦復是の如く、一切白光にして、其の身も鮮白にて諸林に遊戲す。珊瑚樹林は衆の妙香を出し、種々の樂音にて歌舞し戲笑して天の快樂を受く。珊瑚林に入るに其の林に多くの衆鳥の音聲ありて、光明の莊嚴にて大勢力有り。光明は赤色にて諸の色の上なり。本の身は鮮白なるも、樹は赤光なるを以て身皆赤色なり。互相に瞻視して各の是の言を作さく『我等の本の色皆な悉く現れずして、更に異色を生ず。此の樹の色は赤なり。餘林に至る可し』と。卽ち天女と毘瑠璃林に入るに其の林の青色は、閻浮提にて仰ぎ虛空を觀るが如くにて、諸天の身をして皆な白色を失せしむ。其の樹の青き光悉く天身を覆ひ、所有る衆の鳥及び諸の蓮華は悉く亦青色なり。時に諸の天子諸の天女と自ら圍遶りて、天の伎樂を作し、遊戲し歌舞して、久しく天樂を受け、五欲にて自ら娛しむ。久き時を經て、復銀林に詣り縱

【二】五樂。五欲の快樂なり。五欲とは色・聲・香・味・觸の五境なり。

【三】珂。寶石の一種。白色の瑪瑙。

【四】拘牟頭華。拘物頭華に同じ。赤蓮華。

の天女の衆を熏ず。天の念ずる所に隨つて、摩利林に於て既に遊戲し已り、五華林に向ひて互に相娛樂む。其の林の衆鳥を名けて宿命と曰ふ。諸の天衆を見て頌を說きて曰く。

福德を愛樂す可し。　能く勝れし果報を得ん。　是の故に應に福を修むべし、福の船筏に及ぶもの無し。　福德藏は盡きることなく、福德の親は無上なり。　福德は明なる燈の如く、亦慈なる父母の如し。　德を[10]修めなば天中に至り、福は能く善道に至らん。　人能く福を修むるが故に天上にて福樂を受けん。　若し人、勝福を修めなば、常に樂處に生まるることを得ん。　是の故に應に福を修むべし、福德の樂しみに及ぶもの無し。　[11]三世を利益し、愛敬及び財物あり。　常に此の二因を觀ぜよ、是れを福德の樂しと名く。　福德は恒に身に隨ひ、影の如く常に離ること無し。　福を第一なる樂と爲す、　福なければ樂報無し。　若し天の福德盡きなば、退き已り、業に隨ひて世間の善惡の果を生ぜん。　是の故に應に福を修むべし。　我れ天世間に於て、今や畜生身を受けたり。　福の因緣無きが故なり。　自らの業に欺むかれ、若しは福の調伏無く、常に惡道を行へば、其の人安樂無く、沙の油を出さざるが如からん。　愚人は心の爲めに欺かれ、福德を遠離す。　其の人樂しみを得ずして、衆の苦みを常に斷たず。　是の人數々の生を數々に還りて退沒く、天にて放逸を行ふを以てなり。　彼の天の樂しみは無常にして、業網は衆生を繫ぐ。　癡愛に誑らかされ、無始よりの生死の來た流轉して水輪の如し。　諸天退沒く時、具さに大苦惱を受け、地獄の衆の苦毒も以て比を爲すことを得ず。　天の樂しみは必らず退くこと有り、如何がして覺悟ざらんや。　死滅を見ざるが故に、世間の樂しみに貪著す。　諸の世間は生滅し、數を以ては知る可からず。　而も人は能く厭ふこと莫く、愛に欺むかる所と爲る。

時に、諸の天衆鳥の說法を聞きて、心に少しく憶念す。還りて復放逸なり。心の爲めに使はれ、

【一〇】修の字、宋、元、明三本、及び宮內省圖書寮本に依る。
【一一】三の字、宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。三世とは、過去、現在、未來を云ふ。

ること百倍ならしむ。無量林中に遊戲して樂しみを受け、未だ曾つて斷絕せず。念ずるに隨つて第一の勝れし樂みを成就し、清淨なること比なし。無量の天女は自ら圍遶て林中に遊戲し、或は山峰に遊び、空に乘りて金毘瑠璃山頂に趣く。衆の蓮華池には鵝鴨、鴛鴦あり、其の水清淨にして毘瑠璃の如く、香水は湛然として其の中に充滿り。遊戲の處に於て衆の香・流水・諸林の香氣は皆悉く普く熏ず。無量の金樹・毘瑠璃樹は彼の山を圍遶り、其地は柔軟にて、足を擧げ足を下して之を蹈むに隨ひて平かなり。此の地中に於て諸の天女と其の中に遊戲し、皆な共に娛樂しみて、目に愛色を視る。無量百千の種々の妙色、無量百千の愛す可き妙聲、無量百千の種々の妙香にて、是の如く諸根に無量の樂しみを受く。乃至善業を受け盡くして此れ從り命終る。若し餘善あれば地獄、餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、常に安樂を得て、王に愛重せられ、衆人に念はれん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り箜篌天を觀ずるに彼れ聞慧を以て箜篌天の第四地の處の名けて探水と曰ふを見る。衆生何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善業を修行し、信心し、悲心ありて潤益の心にて、病困者、其の命臨終にて咽喉の中は惚々として聲を出し餘命未だに盡きざるを見て、其れに漿飲を施し、或は其れに財を施し、以て彼命を續かしむ。是の人此の善業の因緣を以て、命終らんには、三箜篌天の探水の地に生まれ、天の快樂を受けん。光明の威德は帝釋王の如く、諸の天女の衆は周匝を圍遶き、常に快樂を受け、自らの業報を受く。無量時を過ぎて無量林、無量の河流を見、諸の天女の衆は相ひ隨つて林に入る。林を摩利と名け、無量の河水は蓮華の浴池を以て莊嚴と爲す。天の諸の音樂は、妙へなる音聲を出し、多くの天女あり、歡喜びて娛樂む。其の林中に於て多くの華果あり、乾闥婆音、衆鳥の音あり、其の林の寶樹は、曼陀羅林・俱舍耶林・不破壞林・常歡喜林・正歡喜林・如意香林にて是の如き華の香普く一切の諸

【八】曼陀羅（Mandārava）。又漫陀羅と音譯す。花の名なり。意譯して圓華、白團華、適意華、悅意華とす。
【九】俱舍耶林。俱舍林、居賒耶舍、俱賒林ともあり、不明。

復次に比丘、業の果報を知りて三箜篌天の住する所の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第三の地處の名けて喜樂と曰ふを見る。衆生何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善行を修行し、淨信心を以て人に美飲を施し、或は行く人に清淨なる美水を施して其れをして安樂にせしむ。或は泉井を覆ひ、恐しき諸の蛇・毒蜘蛛・蟲蟻の井中に墮ちて、行く人之を飲みて苦惱を致す。是の因緣を以て泉井を覆蓋す。恩分を求めずして福德を爲すが故なり。彼の人命終らんには三箜篌天の喜樂地中に生まれん。彼の天に生まれ已らんには其の身の光明は第二日の如からん。善業を以ての故に遍く身に莊嚴りて、山谷・泉池・流水に遊戲し、諸の天女と心を同ふして共に遊び、端正の少年にして苦老ある事なし。無量の色・聲・香・味・愛觸にて五欲の樂しみを受く。其の地の山林に多くの七寶あり、以て林樹を爲し、萎林等無く、其の林の衆華は未だ曾て萎變せず。香氣常に熏り、金影の樹林の金枝は彌覆し、毘瑠璃峰を以て莊嚴を爲す。孔雀の衆鳥、[七]倶翅羅鳥は七寶の羽翼にて、美妙なる音を出す。自ら身相を觀ずるに心に悅樂を生じ、所謂雜色の羽翼は天の念ずる所に隨つて美妙なる音を出し、其の聲を聞き已りて各々皆な希有なる心を發す。此の鳥は能く我が心の念ずる所を知りて意に隨つて聲を出す。其の音は美妙にして鳥の口中於り甘露の飲を出し、相續して斷たず。衆の鳥は之を飲みて十倍に縱に逸かれ、心に歡喜を生じ、口に百種の功德の音を出す。其の音は莊嚴にて功德は勝妙なり。種々の鳥の歌の衆の妙音を聞けば、愛欲の心は百倍に放逸して、心に歡樂を生ず。復衆鳥ありて唬遊戲と名け、鈴の網の内に於て衆の妙音を出す。其の音は清妙にして鈴の音と合して分別す可からず。和合して聲を出し、兩倍して轉た妙へなり。復衆鳥あり名けて岸行と曰ふ。河岸の金蓮華の中に住して、香飲を流出す。復衆鳥あり名けて影遊と曰ふ。其の行く處の地に隨つて則ち同色なり。復衆鳥あり名けて輪鳥と曰ふ。若し此の輪鳥の遊行して近づく所は、諸の天女をして端正、殊妙ならしめ、先より過ぐ

【七】倶翅羅(Kokila)。好眼と譯す。

是の如く比丘、欲火の天人を焚燒するを觀じて、心に悲愍を生ず。其の過を見るが故に天樂を樂しまず。是の如く乾陀羅天にて種々の樂しみを受け、乃至善業を受け盡くして天從り命ち終る。餘善の業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、多くの田封ありて、大富饒財ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知りて箜篌天の住する所の境界を觀ずるに、彼れ聞慧を以て箜篌天の第二地の處の名けて應聲と曰ふを觀る。衆生何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、衆生ありて正しく善業を行ひ、邪見の人の爲めに、一偈の法を說きて、其の心をして淨め、清涼ならしめ佛を信ぜしむ。是人命終らんに應聲天に生まれ五欲の樂しみを受けん。天河の蓮華池中に遊戲し、金毘瑠璃・玻瓈山峰の乾闥婆音の諸の天女の衆は、種々に莊嚴り、歌舞し、戲笑し、端正にして比ものなし。天子を圍遶て喜樂を增長す。山峰に遊戲して種々の樂しみを受け、天鬘・末香にて其の身を莊嚴り、無量の境界を以て自ら娛樂む。又山峪に遊び、金山の園林に遊戲して樂しみを受く。諸の金山あり、所謂[五]贍婆帝山、無影の山、一切樂山、心意化山なり。是の如き等の山は衆寶にて莊嚴り、金の園林にて莊嚴れり。諸の天衆等は歡喜し歌頌して、山峰に遊び[六]及び衆水の蓮華池に至る。其の水は清淨にして涼美、淨潔を以て莊嚴と爲す。衆の鳥は縱に逸かれ妙へなる音聲を出す。其の山の住處は甚だ愛樂す可く、自らの業報を受け遊戲して樂しみを受く。天女は圍遶き、種々の衆鳥は衆の妙へなる音、衆の蜂は欲音を出し天子の住する所の林殿にて遊戲し、衆の天女と與に第一樂を受く。是の如き地天の受くる所の樂み、乃至善業を受け盡くし、天從り還退き業に隨つて流轉す。諸の生死を受けて或は地獄・餓鬼・畜生に生まれ、若し餘業あれば人身を受くることを得、大姓に生まる。豪富なること第一にして人に敬重せられ、身・口・意善く、眷屬堅固にして、奴婢・僮客を皆な悉く具足す。餘業を以ての故なればなり。

【五】贍婆帝山。不明。

【六】及の字は宋、元、明三本に依る。

色にして七寶にて莊嚴り、和雅音を出して甚だ愛樂すべし。諸の天女は衆の妙へなる歌音を出し、衆の鳥の聲を聞きて百倍に欲を増し、餘音を樂しまず。聞き已りて歡喜して無量の樂しみを受く。七音を具足し、柔軟相應せり。河中の衆の鳥と天女は歌戲して天の甘露を飲み、醉亂あること無し。諸の天女と歡娛して樂しみを受け、衆寶山・金毘瑠璃・玻瓈の山峰に於ては、園林・河池・流泉・蓮華衆鳥にて嚴飾れり。復天女と青色毘瑠璃地に遊び、種々なる衆の華は遍く其の地を覆ひ、此の地の中に於て遊戲して樂しみを受く。善業を以ての故に天の樂を成就す。是の如く比丘聞智慧を以て天樂を觀じ已り、頌を說きて曰く。

　五根は常に樂みを受け、欲境に誑惑かさる。　欲火は未だ曾て須臾の間も厭足こと有らず。

一一の諸の境界に處々に天女を見て、　一切の勝れたる境界に欲火炎えて熾然たり。　若しは合し、若しは離散し、或は說き或は憶念し、天女の因緣を以て火起こり天人を燒く。　火法は和合してあり。合せずんば則ち生ぜず。　若しは合し、若しは合せずして欲火は常に熾然たり。　因緣合せざるが故に、火遠ければ則ち燒かざれども、欲火は遠近なくして常に衆生を燒き害ふ。　意想の薪の力を以て邪なる憶念に使はれ、愛の油を欲火に投じて愚癡の人を焚燒く。　若し火を以て身を燒くに、燒き已りて須臾に滅し、名色【四】は離散し已る。欲火は猶ほ滅せずして、欲火の衆生を燒くことは、火の人を燒くよりも過ぎたり。　欲火の害甚しと雖も、而も、人は厭を生ぜずして、五根の因緣起りて五境界を緣ず。　愛風に吹かれ、欲火は衆生を燒き、憶念の燧に從つて生じ、境界に由つて增長す。　可見法に非ずと雖も人を燒くことは熾火に過ぎたり。　欲火も亦是の如く、過を增長して熾然たり。　是の如く欲に盲せられ、欲樂に貪著すれば、火則ち光明あれども欲火の闇に覆はる。　是欲は怨毒の如し、智人は應に捨離すべし。

【四】名色(Nāmarūpa)とは、有情の身心を組成する五蘊のこと。

巻の第二十四

觀天品第六之三

四王天之三

復次に比丘、四天王の三地の住處を觀じ、一一の業の果を具さに觀察し已りて、第四處を觀ず。彼れ聞慧を以て三箜篌天[1]を觀ずるに十種の地有り。何等をか十と爲すや。一を乾陀羅と名け、二を應聲と名け、三を喜樂と名け、四を探水と名け、五を白身と名け、六を共娛樂と名け、七を喜樂と名け、八を共行と名け、九を化生と名け、十を集行と名く。是れを三箜篌天の十地の住處と爲す。比丘、是の如くに分別して彼の業の果報を觀察す。何なる業を以ての故に此の天處に生まるるや。卽ち聞慧を以て箜篌天を見るに、善業を修行して彼の天中に生まれて相似の果を得。第一の地處を乾陀羅と名く。衆生何なる業にて此の天に生まるるや。若し衆生あつて信心し身を修め、園林地、或は甘蔗田、或は菴羅林[2]、美果の林を以て衆僧に施與して僧に受用せしむ。此の人命終らんには乾陀羅天に生まれ無量の樂みを受け、天の旃檀・牛頭旃檀[3]を以て其の身に塗らん。無量の天女は圍遶て娛樂み、種々に莊嚴り、種々の色貌にて善く歌舞、戲笑の法を知り、園林に遊戲し及び諸の華池にて遊戲して樂しみを受く。身に天衣を服し、華鬘にて自ら嚴り、心にて相ひ愛樂す。其の華の香氣は百由旬に熏り、天の諸の玉女は此の香氣を聞きて皆な大いに歡喜し百倍に縱に逸かる。天子を瞻仰して欲情は厭くこと無く、無量種の法にて百倍に恭敬す。是の如く天子の心意は恣に逸かれて、欲樂し自ら娛む。諸の河流あり。一を寶流河と名け、二を波流河と名け、三を金流河と名け、四を酒流河と名け、五を美流河と名け、六を流沫笑河と名く。是の如き諸の河の鵝鴨・鴛鴦は衆の妙へなる音を出し、河の兩岸に於て多くの園林あり、其の林は鬱暎とし、衆の鳥は雜

【一】箜篌。樂器の名なり。所謂箜琴のこと。二種ありて竪箜篌と臥箜篌なり。竪は其の體曲りて、長く、弦數は普通二十三條なり。竪に抱きて兩手にてかきならす。又臥箜篌は弦七條ありて、撥を以て彈ず。今樂器よりとりて天の名とす。

【二】菴羅(Āmra)。菴摩羅、菴沒羅と音譯す。果の名なり。新譯には阿末羅、阿摩洛迦、菴摩洛迦などとし、舊譯には菴摩羅、菴摩勒とす。意譯して、無垢清淨とす。林檎の如しと云ふ。漢字の使用混亂して、Āmra はマンゴーにして菴羅、菴沒羅に相當し、Amra は天菓と譯し、Amala は無垢と譯す。漢名は之を混用して分明ならず。

【三】牛頭旃檀。旃檀を見よ。

終りて常遊戲天に生まれて、常に快樂を受く。其の地は皆な金毘瑠璃・珊瑚・因陀靑摩尼寶を以て莊嚴と爲す。遊戲して樂しみを受け、無量の音聲は甚だ愛樂す可く、具さに說く可からず。飮食・衣服・華香の具は念ふに隨つて卽ち得。無量に遊戲し、所謂見林遊戲・悅樂遊戲・鳥音遊戲・音聲遊戲・恣意遊戲・善香遊戲・觸衣遊戲なり。種々の香熏は種々に和合し、遊戲の樂しみを虛空に於いて行ひ、諸の親友を見ては心も亦悅樂む。衆寶山に行きて亦悅樂を受く。是の如き無量の樂しみを成就し、五樂の音聲は自らの業の成就するところなり。乃至善業を受け盡くして、天從り命終る。餘の善業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、常に種々の遊戲の處にありて、種々なる繒綵たる衣服を著し、種々の語、種々の遊戲を愛せん、餘業を以ての故なればなり。

衆生信心し、悲心有りて、諸の衆生の臨終の渇病にて[六〇]閻羅使を見大なる怖畏を生ずるを見て、[六一]石蜜漿を以て、若くは冷水を以て、此の病人に施す。是の因縁を以て是の人命終りては清涼天に生まれ天の快樂を受けん。其地は流水・河池・戲樂の處を具足して、彼の天中に於て種々の樂しみを受く。目視れば則ち足り、香氣は意の恣にして、身は細軟に觸れ、聲味も亦爾なり。其の心は清涼にして醉の過を離れ、其の飮には五種の功德を具足せり。天旣に飮み已りて十の功德を增す。空を行きて墮ちず、空に乘りては礙りなく平地に遊ぶが如く其の力を勞せず。歌舞し、戲笑して心常に悅樂む。天の功德・百功德の樂しみを受け、耳に音聲を聞きて障礙する所なし。是の如く天中に第一の樂しみを受け、是の如き天樂は意の隨にして、境界の樂しみを受く。八の林樹ありて七寶の成す所なり。一を四歡喜と名け、二を遊戲行と名け、三を意清涼と名け、四を風樂林と名け、五を音樂聲と名け、六を蘘音と名け、七を華林と名け、八を如意林と名く。此の林中に於て遊戲して樂しみを受け、眼には妙へなる色を視、耳には愛らしき聲を聞き、鼻には妙へなる香を聞き、舌には上味を得。是の如くに垢を離れ、其の心は清涼にして、五根の境界にて皆な悉く樂しみを受く。是の如き等の六欲に燒かるる爲めに、日夜六欲の火を增長し、縱に逸かれ熾然として覺知らず。放逸地に生まれ放逸にして心を壞す。乃至善業を受け盡くして天從り命終る。餘の善業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くるを得んに、常に飢渴を離れ疲倦あることなけん。飢の怖れに値はず、第一の樂みを受け、一切の世間の人に愛念せられ、爲めに敷具を設けられ、身に醫藥を供へらる。餘業を以ての故なればなり。

　復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の住する所の地を觀ずるに彼れ聞慧を以て、常恣意天の第十地の處の常遊戲と名くるを觀ず。衆生何かなる業にて彼處に生まるるや。卽ち聞慧を以て見るに、衆生ありて修禪者に厭離を生ぜしめんが爲めの故に、房舍を圖畫し、死屍觀を作さしむ。是の人命

【六〇】閻羅使。琰摩羅（Yama-rāja）の使者なり。極惡の人には琰魔王より鬼卒を遣して之を引き取らしむ。

【六一】石蜜漿。石蜜を氷に和せしものなり。石蜜とは氷砂糖なり。本經第三に其の製法を述ぶ。

音聲は愛す可く、五樂の音聲にて天の快樂を受く。金毘瑠璃を以て其の地と爲し、多くの諸の池あり、眞珠を沙と爲して以て其の底に布けり。一一の池中の八功德水は自らの業の生ずる所にして、須彌留山は金、毘瑠璃・玻瓈迦[五八]を以て其の石と爲し、寶山を莊嚴れり。天の玉女と遊戲して樂しみを受け、自らの業の果を受け、乃至善業を受け盡くして天從り命終る。若し餘の善あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得なば、常に富樂を受け、岷茶山[五九]に近く大王の封を受けん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の所住の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て常恣意天の第八地處の名けて欲境と曰ふを見る。衆生は何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、持戒の人、若しは邪見の病人に於て、その安んずる所の飲食・湯藥を施して病苦を離れしむ。是の人は命終りては欲境天に生まれ天の快樂を受け、怖畏る所なく、同地の諸天は悉く皆な供養せん。業勝れしを以ての故に樂報も亦勝る。譬へば燈大なれば光明も亦大なるが如く、是の如く天上には天勝れし樂みを受く。善業の力を以て彼處に生まる。毘瑠璃寶・摩尼金光の須彌山峰に遊戲して樂しみを受け、無量に遊觀す。其の地を莊嚴れる園林・浴池・河泉・流水は七寶にて莊嚴りて、種々の光明あり。多くの諸の天女は恭敬し圍遶て、五欲の樂を受く。意の如くに遊戲して諸の欲樂を受け、彼に於て樂を受け、乃至善業を受け盡くさんに天より命終らん。若し餘業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得ば、第一に端正にして怖畏る所なく、大富・多財にして、王に敬重せられ、衆人は供養し、壽命は延長にして、好き國土に生まれ、生まれて正法に値ひ、惡世に生れざらん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の所住の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て常恣意天の第九地處の名けて清涼池と曰ふを見る。衆生何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、

【五八】玻瓈迦。頗梨、頗黎と同じ。水精のこと、紫、白、紅、碧の四色あり。Sphaṭika の ka を殘して漢梵合糅譯したのであらう。

【五九】岷茶山。Vindhya であらう。卽ち中印度とデッカン高原を堺する小連山である。この山に近く封をうけるとは山に接する平野に好封を受けるの意味であらう。

復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の住する處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て常恣意天の第六の地處の名けて山頂と曰ふを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、善を以て意を修め、寒熱を遮る爲めに義屋を造作して人に受用せしむ。是の人命終りては山頂の處に生まれて天の快樂を受けん。五欲を自ら娛みて種々に成就す。七の園林有つて、一を[54]曼陀羅戲林と名け、二を雲林と名け、三を息樂林と名け、四を遊戲林と名け、五を吼林と名け、六を幻林と名け、七を[55]尼迦羅林と名く。此の林中に於て、衆の天女と相隨ひて、戲笑し、歌舞し、縱に逸かる。天の伎樂を作して、意に隨ひて遊觀し第一の樂しみを受く。一一の華林の其の中に於て遊戲し、衆の寶藏を以て其の山を莊嚴り、一一の山峯は金色の光を出し其の中にて遊戲し、諸の病惱を離る。衆の善業を以て彼處に生まるゝことを得て天の快樂を受く。河水・流泉・蓮華の浴池にて相娛樂む。乃至善業を受け盡くし天從り命終る。若し餘の善あれば地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、大王の師と爲り、衆人に愛せられん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の所住の地を觀ずるに、彼れ聞慧を以て常恣意天の第七地の處の名けて[56]摩偸[魏に美地と言ふ]と曰ふを見る。衆生は何なる業にて彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て、此の衆生を見るに善業を修行し、禁戒を受持し、衆生を利益す。柔軟にて悲心あり、質直にして諂らず、他人をも惱まさず。食を以て、道を行く沙門・婆羅門・貧窮・病苦・孤獨なる人に布施し、或は一日・二日・乃至多日常に供へて息まず。是の人、命終りて美天に生まれて天の快樂を受く。園林の鈴網は、妙へなる音聲を出し、諸の天女の衆は周匝を圍遶りて、無量の天欲に歡娛して樂しみを受く。諸の童子多くして、天の須陀味の甘美は意の恣なり。曼陀羅華を以て天鬘を爲し、華林にて遊戲す。金・毘瑠璃・玻瓈の山峰に多くの衆蜂有り、華池に遊びて美しき妙音を出す。衆の玉女と園林にて遊戲し、其の林は百千の日光より勝れり。曼陀羅林、[57]倶睒林の中の金色の衆の鳥の

【五四】曼陀羅(Mandārava)。又漫陀羅と音譯す。花の名なり。圓華、白圓華、適意華、悅意華と音譯す。

【五五】尼迦羅(Nigkara)。不黒、不時と譯す。樹の名なり。

【五六】摩偸(Mathurā)。摩偸羅、摩度、摩突羅、秣菟羅と音譯す。國の名。譯して、孔雀、密善と云ふ。

【五七】倶睒林。倶舍耶林ともあり。不明。Koseya なれば絹なり。

慧を以て此の衆生を知るに、信心し、悲心して種々の食を以て、持戒・不持戒の人に施與す。是の人は命終りて質多羅天に生まれて、種々の業を以て種々の樂しみを得。種々の敷具にて種々の樂しみを受け、種々なる諸の園林中に遊戲し、諸の天女と娛樂して樂しみを受く。種々の山林・嵠峪・峰嶺、其の中に遊戲し、衆の華池泉・優鉢羅華【五二】・鉢頭摩華【五三】の種々の華果の遊觀の處に、種々の衣服にて其身を莊嚴れり。種々の言說は巧言・辯辭にして、愛語にて戲笑す。論議の言は、種々の因を作して種々の林中にて種々の樂しみを受く。是の如く比丘觀じ已りて、歡喜び頌を說きて曰はく。

諸の業の作す所は、巧なる畫師に過ぎ、業の畫師は天中にて種々の樂報を作る。種々なる衆の彩色にて現はしては、觀れば則ち數ふ可し。心の業の衆の彩にて布きては、其數は知る可からず。壁を毀てば畫は則ち亡くなりて、二は俱に同時に滅す。身の喪滅する時の若くには、業の畫は失ふべからず。譬へば、一畫師の衆の文飾を造作するが如くに、一心も亦是の如く種々の業を造作す。五彩の光色を現ずれば、之を見ては愛樂を生ず。五根の畫も亦爾く、業の如くに生死あり。世の巧なる畫師の如きは、現前すれば則ち見る可し、心の畫師は微細にして一切は見る能はず。好醜の形を圖畫して、壁に衆の像をして現ぜしむ。

心の業も亦是の如くに能く善惡の報を作す。是の心は晝夜に於て思念して住せず、是の如くに業は心に隨ひ展轉して常に離れず。風塵・煙雲の熱にて畫色は則ち毀滅す、善・不善を捨つるの時は諸の業は爾及ち失す。

是の如くに比丘、心の畫師の自在に業を造るを觀ずるに、實の如くに業を觀じ生死を厭離して、此の天にて種々の愛業を受く。乃至業盡きて、天從り命終る。若し餘の善あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くるを得なば大富・多財にして常に正法を行ひ、大なる船舫に乘りて以て財寶を求めん。餘業を以ての故なればなり。

【五二】優鉢羅華(Utpala)。青色の蓮華。
【五三】鉢頭摩華(Padma)。波頭摩華とも書く。赤色の蓮華なり。

人は天中に生まれん。諸の衆生を慈愍み、心に利益することを念じ諸の惡業に染らずんば、彼の人は天宮に生まれん。晝夜に禁戒を持し、智慧にて常に護持すれば、彼の人は天宮に生れて常に快樂を受くることを得ん。若しは人、思惟を念じて、持戒の馬に乘り、諸天の宮殿の無量に戲樂する處に到り、若しは天宮にて遊戲して天の快樂の報を受くるは、皆淨戒を持つに由ることは、如來の說き給へし所なり。若しは人寶にて嚴飾る、天花極めて精妙にして、天中に遊戲するは、皆な善業に由る故なり。優鉢華に遊戲して園林にて莊嚴り、天の中に遊戲するは、皆善業に由るが故なり。若しは虛空界に住して、天寶にて莊嚴り、清淨なる光明の天なるは、皆な持戒に由りて得るなり。金寶にて莊飾し處は妙華の香り周遍して、山峰に遊戲するは、皆な持戒に由つて得るなり。人の已が室に入りても其の心に怖畏無きが如く、持戒も亦是の如く能く天中に至らん。[五〇]雞多花の香にも非らず、[五一]摩盧占の蔔にも非らず、能く天中の香に勝るは、持戒の香の最勝なるなり。若人、持戒を護らんには此の人は則ち勝れりと爲す。若し人戒を捨離すれば是を死人と爲す。此の功德を知り已りて、若し自身を愛することを爲し、善く禁戒を護持し、戒を心にて犯すことを遠離し、持戒して常に調伏して、忍辱の人を見るを樂しみなば、人の階道に乘るが如くに天の快樂の處に到らん。

是の如く比丘天の受くる所の自らの業の果報を觀ず。業の果を觀じ已つて、生死の中に於て欲心を厭離して、彼の彩地天に遊戲して樂しみを受く。乃至善業を受け盡くして天從り命終る。餘の善業あれば地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くるを得んには、一切人に愛敬せらるゝ所と爲り、大富饒財にして、南天の惱亂無き處に生まれん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、常恣意天の第五の住處を觀ず。彼れ聞慧を以て常恣意天の第五の地處の質多羅「魏にて雜地と言ふ」と名くるを見る。衆生は何なる業にて彼處に生まるゝや。卽ち聞

【五〇】雞多花(Ketaka)。木の名、學名を Pandanus odoratissimus と云ふ。

【五一】摩盧占。[illegible]枳橘易土集に摩樓迦、摩婁伽を「藤類なり、蔓生じて樹に纏繞して死に至らしむものなり」とあり。

復次に比丘、業の果報を知り、常恣意天の第四の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て常恣意天の第四の住處の名けて彩地と曰ふを見る。衆生何なる業にて彼處に生まるゝや。卽ち聞慧を以て此の衆生を見るに、心に淨信ありて、比丘僧の爲めに[四五]袈裟を染治するに、若しは[四六]畢鉢羅、若しは赤、若しは黃、若しは紫、若しは紺、若しは[四七]栴檀、若しは靑、若しは綠、若しは黑、若しは碧、此の衆の色を以て出家人の爲めに法服を染治す。是の人命終りて、彩地天に生まれなば天の快樂を受けん。衆綵の衣䙓を以て莊嚴と爲し、其の身常に種々の光明を出し以て其の地を照らす。一切皆な赤きことは、赤き寶華の出す所の光明の如く、其の地の光明も亦復是の如し。及び餘の種々の靑・黃・雜寶は其の地を莊嚴り、一切の彩色の衣服にて莊嚴ることは亦復是の如くに其の身を莊嚴り、林中に遊戲して常に快樂を受く。以て比を爲すこと無き無量の殊勝の功德を具足して種々の樂しみを受け、善業の得る所の種々の園林・宮殿・樓觀あつて、衆の天女と衆寶にて莊嚴り園觀にて遊戲す。彩地に至るに隨ひて皆ともに同色となり、一一の林樹、一一の山峰、一一の華池、一一の河水、一一の流泉に遊戲して樂しみを受く。種々の伎樂にて歌舞し戲笑して、衆の天女と共に相ひ愛戀す。六欲にて自ら娛み、須陀味を食し、天の甘露を飮みても醉亂あること無し。天衆は圍遶りて斯の悅樂を受く。比丘は觀じ已りて偈を說きて曰く、

　善業は高勝爲り、高きことは須彌山に勝る。　善業は能く人をして[四八]阿迦尼吒天に將れしむ。　種々に禁戒を持し、無量の種を護り、　善業の果報を以て天中に快樂を受く。　戒の光は淨よき莊嚴にして、持戒は淸淨なる水なり。　修行の人を澡浴して、　天に生まれ、快樂を受けしむ。　戒を施し、自ら調伏し、諸の衆生を利益し、智[四九]精進し慈心なれば、彼の人は天中に生まれん。　正行にして衆の過を離れ、戒寶にて自らを莊嚴り、心に衆生を悲めば、彼の人は天中に生れん。　質直なる者は金の如く、之を錬りては塵垢を離れ、修行して正業を樂めば彼の

【四五】 袈裟(Kaṣāya)。濁染などと譯す。靑、黃、赤、白、黑の五正色を避けて健陀(Kaṇṭaka)色(卽ち木蘭色、又は香染)を用ふるに由る。

【四六】 畢鉢羅(Pippala)。必鉢羅、庳鉢羅と音譯す。卽ち菩提樹なり。佛が此の樹下に て正覺を證れるに因つて菩提樹と云ふ。莖幹は黃白、枝葉は靑翠にて冬夏凋まず。

【四七】 栴檀。具さには栴檀娜(Candana)と名く。香木の名にして、譯して與樂と云ふ。南印度摩羅耶山より出づ、其の山の形、牛頭に似たれば、牛頭栴檀と名く。赤、白、紫等の色あり。

【四八】 阿迦尼吒(Akaniṣṭha)。舊譯には、阿迦貳吒、阿迦尼沙託。新譯には阿迦尼瑟吒、阿迦尼瑟搋と云ふ。譯して色究竟とす。此の天は色界十八天の最上天にして、形體を有する天處の究竟なれば、又質礙究竟と云ふ。故に色究竟天とも、有頂天とも名く。

【四九】 精の字は、宋、元、明の三本及宮內省圖書寮本に依る。

の[四三]優鉢羅色と名くるを見る。衆生は何なる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、法に順じて修行し持戒し、淨信にして、佛・法・僧を供養せんと欲する爲めの故に、優鉢華池を造りて三寶に供養す。是の人、命終らんには優鉢羅色天に生まれて、天の快樂を受けん。華池に遊戯し、歡喜して娛樂み、歌舞し戯笑して無量の樂しみを受けん。一一の園林は、瑠璃・珊瑚・眞金にて莊嚴り、其の地は柔濡し。無量の天女其の中にて遊戯して天の快樂を受け、念に隨ひて成就し、無量の山谷にて娛樂み喜樂ぶ。樂しみの因を以ての故に樂しみの果報を受け、五根の對する所は皆な悉く快樂す。身は瑠璃の如くに優鉢羅色にして、諸の華池の優鉢羅の間に遊ぶ。その華の香氣は百由旬に滿ちて、一切の華に勝り、王の如く最勝なり。因を以て果を得ることは如來の說き給ふ所なり。天上に生まれ已りて、彼の華の池を愛し其の中に遊戯して無量の樂しみを受け、六根の對する所、心常に愛樂す。乃至善業を受け盡くして天從り命終る。若し餘業有れば地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得んには、大國土に生まれて多饒の華果あり、天の樂しみを具足し、巨富・饒財ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、彼れ聞慧を以て、常恣意天の第三の住處の[四四]分陀利と名づくるを見る。衆生、何なる業にて彼處に生まるゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、身・口・意を淨め佛・法・僧の爲めに蓮華池を造りて三寶を供養す。是の人命終りては分陀利天に生まれ、善業を成就して天の快樂を受けん。種々の衆寶は其の身を莊嚴り、光明は晃曜き、諸天に愛せられ、華鬘にて莊嚴れり。多くの諸の天女は以て圍遶を爲し、金剛・靑摩尼寶・硨磲の衆寶にて莊嚴り、娛樂して自在に樂みを受く。乃至善業を受盡くして天從り命終る。若し餘業有れば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得なば、生まるゝ所の國土には、多くの陂澤あり、大富・饒財にして第一の樂しみを受け、父母・兄弟・妻子・眷屬に愛念せられん。餘業を以ての故なればなり。

【四三】優鉢羅(Utpala)。又烏鉢羅、漚鉢羅、優鉢剌と音譯す。花の名にして、譯して靑蓮華、黛華、紅蓮華と云ふ。今は靑蓮華のこと。

【四四】分陀利(Puṇḍarīka)。又、芬陀利、分陀利迦、分荼利華、布荼利迦に音譯す。正しく開きたる白色の蓮華なり。インドの蓮に靑黃赤白の四種あり。又未敷、開、落の三時に隨つて名を異にす。分陀利とは白蓮華の正しく開らきたるなり。又此華の最も大なるは花瓣數百もあれば、百葉華と云ふ。又此の華は多く阿耨達池に出でて人間にあることなければ、人中の好華、希有華等と云ふ。

るを見ては、其の人は擁護りて斫伐らざらしむ。此の諸の鬼神は人を惱害せずして樹に依つて樂しみを受け、樹無ければ苦しむ。此の人を以ての故に鬼神は樂しみを得るなり。是の人命終りては歡喜岸天に生まれて天の快樂を受けん。池を清涼と名け、鵝鴨・鴛鴦は身皆な金色を以て莊嚴と爲し、衆の妙音を出せり。七寶の蓮華を以て嚴飾と爲し、金色の林樹を名けて、金林と曰ふ。其の蓮華の池は周匝を圍遶て、金寶の林樹は池中に影を現はし、無量種の色あり、其の池は妙好にして帝[四三]釋の池の如し。若天帝釋上從り下りて阿修羅を伐んと欲し、其の蓮華の、日の初めて出づるが如き、是の如き蓮華の無量百千にて以て莊嚴を爲すを見る。帝釋見已りて諸天に告げて曰はく『此の清涼池は、清淨にして莊嚴なること甚だ奇妙爲り。是の如き等の功德の華池に於て心常に愛樂す』と。喜岸の天子、諸の天子と娛樂し、受樂ことは、譬喩す可からず。自在に遊戲し、天女は圍遶て第一の樂しみを受く。食を自在に華池の岸に於て行ひ、又異處に行くとも、身には疲極こと無し。心常に悅樂の第一なるを具足す。歌舞し戲笑して、音は常に絕たず。天女は圍遶き、身心の樂しみを念ひて清淨・無垢なれば、增長して成就す。五欲の樂しみを受けて、心厭足こと無し。何を以ての故なれば、愛心は火の如く、足るを知らざるが故なり。是の如く天子種々の山河・宮殿にて遊戲し、池水の蓮華は七寶の莊嚴にして、遊觀の處に種々の音を聞き、衆の天女と諸林に遊戲し歡娛して受樂す。須彌山峰の毘瑠璃寶・白銀・珊瑚・黃金色の光明は、照曜として自在に遊行り光明は日の如くにて愛す可し。月の如く、或は光色ありて譬喩す可からず。善業を以ての故に此の妙へなる身を得て善業の果を受く。是の天は遊戲して五欲の樂しみを受け、乃至善業を受け盡くして、天從り命終る。若餘善あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くるを得ば、端嚴なること殊妙にして、豐樂・安隱・巨富・多財にして第一の樂しみを受けん。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り常恣意天の第二の地處を觀ず。彼れ聞慧を以て常恣意の第二の地處

【四三】帝釋（Śakradevā-nām Indra）、卽ち釋迦提桓因陀羅にして、略して釋提桓因と云ひ、新譯には釋迦提婆因陀羅と云ふ。能天帝と譯す。而して、釋迦種の天帝の義を約轉して帝釋と稱するなり。尙、此の天は吠陀經の因陀羅神にして、アールヤ民族の主護神なりしが、佛敎の擁護者として常に佛典に現る。

無始より流轉して、厭足ことを知らず。園林に遊戲し、衆の花鬘を以て自ら其の身を嚴る。塗香・末香・種々の樹あつて、光明を具足す。河池・流泉を以て莊嚴を爲し、心欲樂に著して退沒くことを覺らず。是の如き欲境に、愛心誑らかさられて、五欲の樂しみを受け、乃至、業盡きて、天より還退く。若善業有れば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得ば、淸涼國に生まれ、荒壞・刀兵・饑饉に値はずして、一切の人に供養せらる所と爲らん。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第十の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留足天の第十地の處を見る。名けて均頭と曰ふ。何等の業を以て、彼處に生まるゝや。若し人、持戒して、信心淸淨にして、衆生有つて罪を王に得しを見れば、髮を被り鬣を受けて、脫るゝことを得せしむ。是の人命終り均頭天に生まれて、五欲の樂しみを受く。三方の天王の受くる所の欲樂を此の天も所受て具足し滅ずること無し。三天の樂しみを具して、欲樂・欲明・欲樂と相續し、三天の樂しみは念ふに隨ひて皆な得、乃至天女の五欲の音樂ありて、樂の具を受く。乃至善業を受け盡くして天從り還退く。餘の善業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得ば、常に怖畏・憂苦・惱亂を離れて、無病・安隱なり。端正・妙色にして、人に愛念せられ、大富・饒財にして[三八]劫の增減に隨ひて、壽命は長遠なり。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り迦留吒足天の十種の地を觀じ已りて、四天王天の第三の住處の常恣意と名くるを觀ず。幾くの住地ありや。彼れ聞慧を以て恣意天を觀ずるに十種の地有り。何等をか十と爲すや。一を歡喜岸と名け、二を優鉢色と名け、三を分陀利と名け、四を衆彩と名け、五を質[三九]多羅と名け、六を山頂と名け、七を摩偸と名け、八を欲境と名け、九を淸涼池と名け、十を常遊戲と名く。是を常恣意天の十地の住處と名く。何等の業を以て彼處に生まるゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、淨心にて持戒し、邪見を離れ、人の鬼神の大樹、夜叉[四〇]・羅刹[四一]の依止する所を斫伐

【三八】劫。梵語劫簸(Kalpa)の略。譯して分別時節とす。通常の年月日時を以て算し能はざる遠大の時節を分別する稱なり。故に又大時と譯す。

【三九】質多羅(Citra)天の名なり。譯して雜色と云ふ。

【四〇】夜叉(Yakṣa)。能噉鬼、捷鬼と譯し、地にある者、空中にあるもの、天趣に屬するものの區別あり。

【四一】羅刹(Rakṣasa)。羅刹斯と書き、暴惡、可畏の義にして、人の血肉を食ひ飛空、地行自在なる惡鬼の總名とせらる。

は常に現前す。　是の如く諸法は一切皆生滅するものと知りて、放逸の心を行ふこと莫れ。放逸は毒の害より過ぐ。　謹愼みて、不放逸なれば、是處を甘露と名づく。　若放逸を行ふ者は、是を名けて[三四]死句と爲す。　若不放逸なれば、常に不死處を得ん。　若放逸を行へば、常に死路に趣かん。　若し人、放逸を行へば、毒の如く亦火の如し。　放逸を行ふ衆生は、命終りては苦しみの處に至らん。　若し人、放逸ならずんば至る所に敬禮を應けて、能く寂滅の處に至りて永く諸の放逸を離れん。　一切の樂しみも皆な盡きん。　愚者は覺知らずして、臨終の時に至りて、一切を皆な忘失るゝなり。　若人、自ら身を愛せば、應に善業を修行し、法の樂しみを修行すべし。　佛の說き給ふ所の如く、一切は皆無常にして後には則ち大苦を致さん。　佛は[三五]實諦に因り給ふが故に、諸の衆生の爲めに說き給ふ。

時に天、鳥の是の偈を說くを聞き已りて、心に自ら思惟し、其の心は醒め了れり。[三六]宿命の果を念じて少しく放逸を離る。　知足の光明は、其の心意を持して、五欲を貪らじ、放逸を行はず。　久しからずして心動きて、復た五欲に著し、五欲の樂しみを受け、乃至、善業を受け盡くして、天從り還退く。　若し惡業無ければ、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。　人身を受くることを得ば、王の難に遭ずして、常に快樂を受け、衆の惡に値ざらん。　餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り迦留足天の第九の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留足天第九の地處の香樂と曰ふを見る。　衆生何等の業にて、彼處に生まるゝや。　彼れ聞知にて見るに、若人持戒して[三七]三寶を信じ、佛・法・僧中の大福田の處に、衆の末香・塗香を施し、淨心にて供養し、法の如くに物を得て、以て布施に用ひ、作し已りて思惟し隨喜を生ずれば、是の人は命終りては、香樂天に生まれて天の快樂を受け、身は光明を出し、天の五樂音にて、心は常に歡喜し、多くの時を經とも、五欲の樂しみを受けて長遠なるを覺えざらん。　諸の根は、樂しみに耽り、躁動して貪著す。

【三四】死句。事物の義理を詮はすを句となす。死句とは即ち死すべきことを詮はせし文章と云ふ程の意なり。

【三五】實諦。假諦に對して眞諦を云ひ、理諦に對して實諦と云ふ。聖者の所見の眞理の眞實は滅諦なるを云ふ。

【三六】宿命。宿世の生命なり。

【三七】三寶(Tri-ratna)。即ち佛(Buddha)・法(Dharma)・僧(Sangha)をいふ。此等の三は一切世間の尊重すべきものなれば之れを三寶といふ。

常に自ら歡喜す。悅樂むことは百倍も餘天に勝る。業勝るを以ての故なり。無量の天女は歌舞し戲笑して以て娛樂を爲す。山谷に遊戲するに、金・毘瑠璃は柔軟にして觸れて樂しみ、河池・流泉ありて、園林の中に於て、天の快樂を受く。受くる所の樂しみの百千萬分は、轉輪王の樂しみにても其の一にも及ばざるなり。何を以ての故なれば、諸の天衆と同じ業により生ぜし故なり。身には骨も肉もなく亦た垢汗も無し。須彌山の側に於て、衆寶・蓮華・天鬘・天衣にて其の身を莊嚴れり。若し金峰に上りなば、身は則ち金色となり、瑠璃峰に昇りなば身は瑠璃色にて池水に入りし如く、身皆同じき色なり。瑠璃峰に上りなば其の身の光色は第二日の如し。瑠璃の力の故なり。若し銀峰に昇りなば身の色は雪の如く、[三]拘物頭華の如し。一切の身分は端正なる莊嚴にして、天女は圍遶て衆の伎樂を作し、園林に遊戲して天の快樂を受く。是の如く遊戲して、遙かに園林の衆樹を具足せるを見るに、天戲林と名く。閻浮檀金殿に乘りて天戲林に入るに、其の林は柔軟にして、衆の鳥の音聲は和合して美妙なり。天子入り已るに、鳥を天音と名け、天と同じ業により生ぜしものにして天業は善なる故がなり。卽ち頌を說いて曰く。

若し人ありて能く善業を愛樂することを作さば、彼の人の業の果報は、極めて端嚴に成就して、既に天の樂みを受くるを得ん。　若し、放逸を行はずんば、樂みに從つて樂處に至りて後に必らず涅槃に至らん。　一切の樂しみは無常にして、要は必らず終には盡くることに歸せん。此の天の樂みを受け以て自ら娛樂を爲すこと莫れ。　此の天の樂は無常にして、壽盡きなば必らず退沒かん。　既に此の法を知り已りて、當に涅槃の道を求むべし。　一切の法は皆な盡き、高き者も亦當に墮つべし。　和合すれば必らず離るゝこと有り、命有れば皆な死に歸するなり。　三界の諸の衆生は、現在及び未來に、生る者も必らず死あらん。　法には常なる者あること無く、譬へば日の出沒するを一切の人は皆な見るが如く、一切の生も亦然くして死法

【三】拘物頭(Kumuda)。又、拘勿頭、倶勿頭、句文羅、拘物陀、拘牟陀、拘牟頭、拘貿頭、拘某頭、拘牟那、屈摩羅、究牟羅、拘物度、拘勿投と音譯す。花の名なり。譯して地喜花、赤蓮華、白蓮華、青蓮華、黃蓮華とす。今は白色の蓮華を指せり。故に雪と云ふ。

寂滅の處に至るを得ん。愛欲を遠離するが故なり。若人、愛網を脱れて、欲瞋を遠離せば、智人となりて煩惱を度し、永く諸の憂患を離れん。若布施・持戒して、心に常に天を念ずなば、斯の人は淨戒を汚さん。猶ほし雜毒の水の如し。愛は諸の衆生を誑かし、億千劫を過ぐるとも、愚者は捨つる能はざらん。貪に使はるゝが爲めに、衆生は愛に誑かされて、猶ほ愛に依止す。人の重擔を負ふて、熱き鹹水を飲むが如くに、飲み已り寧いで復渴きて、須臾に暫くも息むこと無し。愚人は善を思はず、唐に勞れて自ら焦苦す。是の故に應さに愛を離るべし。愛心は調伏し難く、愛は諸の衆生をして生死を脱るゝを得せしめず。無上第一の樂は、禪樂・遊觀の處なり。是の樂しみを最勝と爲さんには、能く涅槃の城を覩ん。勝樂の因を成就せんには、則ち天の樂報を受けん。愛網に縛られなば、還りて地獄の苦みを受けん。愛は初、後の善には非らずして、常に衆の苦惱を受けん。愛は衆の惡の本と爲り、正法は導師の說なり。

是の如くに比丘天世間を觀じ、欲河の洄復る所に漂沒され、退沒きて死苦するを具に觀察し已り、心に厭離を生ず。是の如くに普觀天の住する所の地にて天の快樂を受け、乃至、善業を受け盡くして、天從り還退く。地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、若し人中に生まれなば、大富・饒財にして、妻子・奴婢・僮僕・賈客・眷屬は和合せん。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第八の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留足天の第八地の處の常歡喜と名くるを見る。何なる業を以ての故に、彼處に生まるゝや。卽ち聞慧を以て、此の衆生を知るに、淨信心を以て、法を犯す者を見るに應に死の苦しみを受け、繫がれて牢獄に在り。財を以て命を贖ひて、其れをして脫するを得せしむ。財利の爲めに衆生を益せんと爲すにあらず、慈悲心の故にして、報恩を求めざるなり。是の人、命終りては天上に生まることを得て、

【二九】寂滅とは、梵名涅槃(Nirvāṇa)の譯語なり。其の體寂靜にして一切の相を離るれば寂滅と云ふ。
【三〇】煩惱(Kleśa)。汚れの義、貪・瞋・癡等のあらゆる汚れたる心情は、心を煩はし身を惱ますに由つて名く。
【三一】布施(Dāna)、檀那と音譯す。福利を人に普く施す義なり。普通、法を說いて他を度する法施と、財を捨て貧を救ふ財施の二つを云ふ。
【三二】須臾(Muhūrta)。牟呼栗多、又はKṣaṇa(刹那)のこと。彈指の頃と譯し、暫時の間を云ふなり。

の世に値はずして、人に愛せられん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第七の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て迦留足天の第七の地處の名けて普觀と曰ふを見る。何等の業を以て彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て知るに、持戒の人善業を修行し、善を以て心に熏じて、破戒の病人に於て、恩惠を求めず。悲心にて安きを施して疲厭がらずに、病人を供養す。是の人命終らんには、普觀天に生まれ五欲の樂みを受けん。天鬘にて莊嚴り、心意悅樂み、一一の遊觀は、意の如く遊行す。諸の天と[二七]共に自ら圍遶し、威德は明曜きて猶ほし日光の如く、一切の天衆は恭敬し、尊重す。須彌寶山の中に遊び、衆の天衣を著し、衆の寶にて莊嚴れり。念に隨ひて遊戲し、林中に行き、衆の蓮華地・山峪・河泉にて自らの業の報を受く。是の如く、天の園林の中にて遊戲し、眞金の[二八]欄楯には多くの衆鳥ありて以て嚴飾と爲す。風は鈴網を吹き、衆の妙音を出す。其の林を名けて、普現莊嚴と曰ふ。威德の光明は、百千の日に勝る。須彌留山に七の山峰ありて此の林を圍遶す。何等を七と爲すや。一を高山と名け、二を合山と名け、三を雨落と名け、四を龍聲と名け、五を愛光と名け、六を雨寶と名け、七を星鬘と名けて、彼の林を圍遶る。衆の寶鈴を以て、衆樹を莊嚴り、諸の天女等は、天鬘にて莊嚴て林の中にて遊戲し、身は百千の光にて晃曜として明照す。天子見已りて、五欲にて縱に逸かれ金蓮華を以て共に相娛樂み、歌舞し、戲笑す。妙音・愛色・香・味・觸・法に厭足ことを知らず。是の如き、三十六火に圍遶れし所は、火の燒然するが如くに皆な厭足こと無し。比丘見已りて頌を說きて曰く。

愛火の圍遶る所は、天世間に於て遍し。　欲に燒かれなば、自在ならずして、欲と癡の爲めに使はれん。　火の乾きし薪にて益すが如くに、增長して火は熾然たり。　是の如く樂しみを受くる者には、愛火は轉た增長す。　薪の火は熾然たりと雖も、人皆な能く捨離すれども、愛火は世間を燒き、纒綿て捨つべからず。　若し人愛河を渡らんとせば、惡蟲の畏れを思覺りて、

【二七】共の字、宮內省圖書寮本に依る。

【二八】欄楯。手摺の横木を欄と云ひ、竪木を楯と云ふ。普通之を樓閣の外部にあるてすりのやうに考へるが、さうではなく、印度に於いては道の兩側に屛風の如く飾るものにて竪横に木を組みその間に芭蕉や椰子等の葉をかけて莊飾とする。今はそれを誇大し眞金の欄楯としたのであらう。之に玉を鏤めた羅網をかけると云はれてゐる。これは樹葉をもつと高貴にしたわけである。之によりてこそ「阿彌陀經」等に表はるゝ極樂の莊嚴の最初にいづる七重欄楯、七重羅網が會得せられると思ふ。是は譯者がセイロン滯在中に見聞した所からの說である。

地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くるを得んには、海を行に善く大導師と爲り、善く風路を知らん。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第六の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留天の第六地の處の散華歡喜と名くるを見る。何等の業を以て彼の天に生まるるや。彼れ聞慧を以て見るに、持戒の人は心に淨信有り、身・口・意を正しくし、僧の戒を說く時は、諸の澡瓶を施し、或は道路を行くに、或は曠野に於て淨水を盛滿して人に澡瓶を施す。是の人、命終りては散花歡喜天に生まれ、種々の音樂、遊戲の音聲あり、衆の天女と、衆寶の毘瑠璃の須彌山の側にて遊戲せん。香風に熏ぜられ、種々の香鬘を其の身の瓔珞とし、流泉・浴池を以て莊嚴と爲す。天子・天女は互に相娛樂し、無量の樂しみを受く。無量の時に於て流泉林に入り、彼の林中に於て天の快樂を受く。毘瑠璃の樹は眞金を葉と爲し、眞金を樹と爲し、毘瑠璃の葉なり。此の林中に入りて常に喜悅を懷き、身は光明を出し、天の甘露を飲むは、善業の因緣なり。閻浮提の中の上味の蜜酒も、天の飲む所に比べなば、苦なること [二四]葶藶 の如し。色味を具足し、其の香は普く熏じて一由旬に滿てり。一切の衆の鳥は眞金色にして、衆の香水を飲み、心に悅樂を懷き、妙なる音聲を出せり。林中に遍滿く、多くの衆蜂有りて其の中に遊戲す。一切の香・味は樹從り流出す、或は金色あり、瑠璃色あり、硨磲色・赤 眞珠色あり、綠色の如き有りて、樹從り流出して以て香河を爲し、歡喜の流と名く。廣さ二由旬にて、天子・天女は兩岸にて遊戲し、歡娛して樂みを受く。天子・天女は飲み已りて、喜悅して歌舞し、戲笑す。金色の蓮華は瑠璃を莖と爲し、遊戲し歌頌し、衆寶殿に乘る。大池中の [二五]八功德水に入りて遊戲し樂しみを受け、互に相澆漬ぐ。其池の名を、[二六]阿栖之迦と曰ふ。清淨に嚴飾り、殊妙て比なし。是の如く天衆は天の快樂を受く。乃至、善業を受け盡くして、天從り命終りても三惡に墮ちずして、人身を受けるを得んには、豐樂の國に生まれ常に飢渴無く、大富の家に生まれ饑

【二四】 葶藶。其の實も葉も芥に似たる一種の草なり。はまがらし、いなづななり。

【二五】 八功德水。八の功德とは、一に澄淨、二に淸冷、三に甘美、四には輕輭、五には潤澤、六には安和、七には除諸患、八には長養身體なり。但し倶舍論の說には少異あり。今は稱讚淨土經によれり。

【二六】 阿栖之迦。不明。

業力既に盡き、天從り還退く。造る所の業に上・中・下ありて報を受け既に盡き、業盡きては還退く。是の如き衆生の業行は、業に隨ひて流轉し、因無くして生ずるには非らず。彼比丘、業を觀察し已りて頌を說きて曰く。

日に因つて時を知り、時に因つて草木生ずるが如く、業の因緣に隨ひて生ず。是れ因無くして生ずるに非らず。無量千の生死は、業の鎖りの繫なぐ所にして、三種の愛は堅牢にて諸の衆生を繫縛す。蜜の毒藥に和して、是の應に食するにふさはしからざる所のものの如く、天の樂しみも亦た是の如し。退沒く時に大に苦しみ、業盡くるときは憂怖を懷き、諸の天女を捨離せん。退く時の大苦惱は、譬喩するを得べからず。善業の盡きんと欲する時は、燈燄の滅せんと欲するときの如く、何こにか趣く所を知らずして、心に大苦惱を生ぜん。愛毒の燒く所は、憂悲して自ら心を壞し、語の聲・身の相動き、怖畏れて天身を失はん。是くの如き衆の樂味、愛欲は最大の誑となり、捨離せざるを以ての故に、大苦惱を增長す。天上より退かんと欲する時、心に大苦惱を生じ、地獄の衆の苦毒も、十六にして一にも及ざらん。一切の諸の燄の輪は、愛力の作る所にして、愛の鎖りは衆生を縛りて、諸の險しき惡道に至る。諸天の退く時の苦みは、人中にて命を捨つるの苦みなり。生死を觀ずれば火の如くに、見已りては、諸の欲を離れん。若人、放逸を行へば、彼の人は[二二]解脫すること無けん。放逸は癡の惑す所にて、涅槃を去ること、甚だ遠し。應に放逸を離るべし。放逸は大なる怨と爲り、天中にて放逸するが故に、退きて地獄の中に墮つ。[二三]三界は輪轉の如く、業繫の輪は斷つことなし。是の故に愛欲を捨て、欲を離れて、涅槃を得よ。

是の如く比丘は天より退くことを觀じ已りて、欲心を厭離し、風行天の無常の樂を觀ず。業の因緣の生は、無常なることを離れず。乃至、善業を受け盡くして、天より還退く。餘の善業有れば、

〔二二〕解脫(Vimukti)。涅槃と同じく佛教の理想を示す語にして、三界を輪廻する苦の繫縛を脫し得たる當體を言ふ。
〔二三〕三界。欲界と色界と無色界となり。

なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第五の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留足天を見るも第五の地處ありて、名けて風行と曰ふ。何なる業を以ての故に、彼處に生まるるや。即ち聞慧を以て、彼の衆生を知るに、信心し持戒して、比丘僧を見ては扇を以て布施し、清涼を得せしむることは、[一八]憂尸羅(冷藥の草名)の如くにして、諸の比丘をして經法を讀誦せしむ。是人は壽終りては、風行天に生まれて、天の快樂を受けん。善業を以ての故に、香風は來りて吹き、悅樂むことは比なし。四天の香風は、皆な來りて之に熏ず。百千倍の香は涼冷にして愛す可く、或は一倍乃至五倍に勝る。四天王天の香氣は二倍、三十三天の香氣は三倍、[一九]夜摩天上の香氣は四倍、兜率陀天の香氣は五倍、化樂天、他化自在天の香氣は六倍なり。業勝さるるを以ての故に、天衆も亦た勝る。善業を觀じ已りて、其の風行天の林中にて遊戲し、諸の香、觸を受く。[二〇]六天の香風は皆此の天に入りて同一の風力なり。何を以ての故なれば、一の風の功德にて、宣說す可からず。天の念ふ所に隨ひて、風從り皆な得。音樂を聞かんと欲せば、風は山峪を吹き、天女の歌音も及ぶ能はざる所なり。若香を念ぜんと欲すれば、乃至、他化自在の天衆の華香、和合して稱說く可からざれども、來りて此の天に熏ず。若涼冷を念ずれば、心の欲する所に隨ふ。若異方に遊びて、衆の寶を見んと欲すれば、須彌山峰、或は金峰・[二一]閻浮檀金、或は玻瓈峰に遊ぶ。園林の中に、種々の華果・流泉・河池ありて、衆鳥・香華を以て莊嚴と爲せり。種々の天女の所住の處は、無量の香觸れて、妙なる音聲を出す。天子は風に乘りて諸の園林に至り、山峪にて遊戲することは、前に說きし所の如し。是の如きの香風は、此の天子をして之に乘りて去來せしめ、五欲の樂しみを受け、共に相娛樂し遊戲して、樂しみを受けしむ。嫉妬を生ぜず、諍ふ心有ること無く、皆な相愛樂む。自らの染業を以て、上・中・下の業あり、印の物を印するが如く相似の報を得。妙なる香風を得て、嫉妬有ること無し。

【一八】憂尸羅(Uśira)。烏施羅とも音譯す。草の名にして、玄應音義二十五には「求草の名なり。形は此の土の細辛の如く、其の體は極めて冷し」とあり。

【一九】夜摩天。第二十二卷(一〇)の六欲天を見よ。

【二〇】六天。六欲天のこと。第二十二卷の(一〇)の六欲天を見よ。

【二一】閻浮檀金(Jambunada-suvarna)。閻浮樹林を流るゝ河に產する金。

聲と名くるを見る。衆生は何かなる業にて彼處に生まるるや。卽ち聞慧を以て知るに、持戒の人、如來の無量心なる者を奉施して、[11]寶蓋を供養す。是の人、命終りて妙聲天に生まれなば、天の快樂を受けん。眞金の毘瑠璃山に行き、諸の天女と天鬘にて莊嚴り、七寶の山に遊びて、[12]揵闥婆林に入る。[13]塗香・[14]末香・種々の樹林・種々の泉流・河池・蓮華ありて、其の林の光明は青・黃・紫色なり。彼の林の中に入るに、香風は微動し、葉は歌音を出す。[15]阿修羅、揵闥婆の所有る歌音は、十六分中の其の一にも及ばず。微風は吹動て互に相ひ振觸て、妙なる音聲を出す。五樂の音にて娛樂して樂みを受く。既に樂の音を聞きて十倍に放逸し、音聲を愛樂て、染著し自ら誑さる。香・味・觸等も亦復是の如きなり。乃至善業を受け盡くして、天上從り退く。若餘善あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして人身を受くることを得ん。多く音樂を愛し、大富・多財にして、舍宅は安隱、五穀豐足にして、眷屬・妻子の壽命延長し、王には敬愛せらる。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知りて、迦留足天の第四の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、迦留天の第四の地處の名づけて香樂と曰ふを見る。衆生、何なる業にて、彼處に生まるるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、香を佛塔に塗り。信心し持戒す。是人命終はらんには、香樂天に生まれ、天の快樂を受くること、譬喩もす可からざらん。天の[16]修陀の味を以て、飲食と爲し、身心に惱み無し。五樂の音聲あり、天鬘にて莊嚴り、戲笑し、歌舞す。天女の衆と常に相娛樂し、山の水の湧くが如くに、山峰にて遊戲す。天の青珠の寶、珊瑚・玫瑰・硨磲・碼碯あり、金の山峰の中には、種々の流水・河泉・花池ありて、[17]倶翅鳥林(等)の、種々の林を見る。其の中にて遊戲し、流水・河池は其の味美妙にして、閻浮提の一切の美味に勝れり。善業の生ずる所、此の上味を食し、是の天の樂しみを受く。乃至、善業を受け盡くしては、天從り還退かん。餘の善業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。人身を受くることを得なば、大富の家に生まれ、多饒の財物ありて、五穀は豐足せん。餘業を以ての故

【一一】寶蓋。寶玉を以て飾れる天蓋にて、佛菩薩及び講師讀師の高座の上に懸くるなり。

【一二】揵闥婆。乾闥婆を見よ。

【一三】塗香。六種供具の一。香を手に塗り以て佛に供養するなり。

【一四】末香。沈檀を擣て粉末とせるもの、以て塔像に撒布す。

【一五】阿修羅(Asura)。無酒又は正しくは阿素洛と云ふ。非天の義なり。其の生活に酒なく、又、果報勝れて天に似たれども天に非るに由る。男子は容貌醜陋にして性獰猛、常に戰鬪を好むと云はる。

【一六】修陀。須陀を見よ。

【一七】倶翅鳥。倶枳羅を見よ。

戒は階陛と爲り、衆の樂を得る因緣なり。若し人、破戒すれば、安樂の處あること無けん。持戒は清淨なる水にして、湛然として常に充滿し、此れを以て自ら澡沐して、天宮にて快樂を受く。若しは天鬘にて莊嚴り、和合して快樂を受け、天宮にて遊戲するは、皆な善因に由つて得るところなり。天女に圍遶かれ、日月の光明の如く天中にて快樂を受くるは、皆善因に由つて生ず。心の念ふところに隨ひて皆得、得ること已に終りでも失ふこと無く、善法常に增長するは、皆な善因に由つて得るところなり。無量の快樂を受けて、一切は常に增長す。若し人、持戒せんには、則ち是の如きの樂しみを得ん。若し人、常に善を行へば、王の爲めに敬重せられ、善く勝れし莊嚴を爲さん。是の故に應に戒を行ふべし。善行は常に調伏し、諸の群生を矜愍みて、常に慈の布施を[八]行へば、能く天世間に至らん。衆生を殺害せずして、一切の衆を愍哀み、常に正業を修行せば、是の人は天宮に生まれん。他の財物を盜まずして、心常に布施を念じ、[九]諸根は寂滅の[一〇]慧ならんには、是の人天中に至らん。他に婦女を犯さずして、常に樂しみて正道を行ひ、寂滅の涅槃を求めなば、彼人は天中に生まれん。飲酒して醉亂せざれ、醉ふ者は人に輕んぜられん。智人能く酒を離れなば、彼人天中に生まれん。持戒して善く修行し、衆の惡業を捨離せんには、能く無量の樂しみを生じて、一切の衆を安慰せしめん。

是の如く比丘、無量の樂しみを觀じて、善業を讃じ已んぬ。勝蜂歡喜の無量の衆の蜂は、衆の妙なる音を出し、乃至善業を受け盡して、天從り還退く。若し善業有れば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず。若し人中に生まれなば、第一に端正・巧言・辯辭にして、常に安樂を受け、衆の惱みあること無く、壽命は長遠ならん。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第三の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、第三地の妙

【八】行の字、宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【九】諸根。眼・耳・鼻・舌・身の五根、又は意を加ふる六根なり。根とは、强き作用を起す機關をいふ。

【一〇】慧。事理を分別し、決定して疑念を斷ずる作用なり。又、事理に通達する作用なり。又、智と慧は通名なるも、二者相對すれば有爲の事相に達するを智とし、無爲の空理に達するを慧とす。

色・香・味・觸も亦復是の如し。無量種に無量の愛樂を受け、乃至善業を受け盡くして、天中より退く。若し餘業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、人身を受くるを得、長者の家に生まれて、多饒の財物あり。餘善の因緣を以て乃し涅槃に至りて、其の福は盡きず。

復次に比丘、業の果報を知り、迦留足天の第二の住處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、第二地の勝蜂喜と名くるを見る、衆生何なる業にて、彼處に生まるるや。若し人知慧あり、持戒を信ずることあり、慈悲心ありて、衆生を利益し、華香、伎樂を佛塔に供養すれば、是の人命終りては、迦留足天の勝蜂の處に生まれん。種々の音樂ありて、歌舞し、戲笑し、遊戲して樂みを受く。自からの業の果を受けて、華香は意の恣なり。天女の歌を聞きて卽ち快樂を受け、無量の天女の歌頌は妙へなる音にして、風は衆華を吹きて香氣は殊異なり。諸の天女と、衆寶の須彌山の峰にて遊戲し、耳に音聲を聞きて、天の快樂を受く。是の如き善業の果報を、比丘は觀じ已つて、善業を讚ぜんが爲め、卽ち伽他を以て頌を說きて曰く、

戒の善は、階道の如くにして、業力は天の中に生まれしむ。　若し人、此の道に乘らんには、天の樂しき處に至るを得ん。　四種の口業の戒、身には三種の淨業ありて、　智人七業に乘りて、能く天の中に至る。　戒を持するは、第一の樂しみにして、財物も及ばざる所ろなり。　財富は敗失す可くとも、持戒は常に牢固し。　人、戒を以て莊嚴とせば、戒の香は常に端正にして、佛は淨善の業と說き給へて、第一の天處に生まれん。　若し人、善業を行ひ、能く天中にて行はんには、遊戲の處に至るが如く、第一の快樂を受けん。　身は大光明を出し、晃晃きて天宮を照らし、諸の園觀に遊戲するは、自らの業の得し所なり。　心常に歡喜を懷き、樂しみを受け常に安悅にして、天の宮殿に遊戲するは、戒を持つ因緣の故なり。　若し人、善く戒を持てば、無量の種を護持して、天の果報を成就げん。　是の故に應に戒を修べし。　持

【七】觸(Sparśa)。外物との接觸を云ふ。之れによりて外物を識別するなり。

巻の第二十三

観天品第六之二

四王天之二

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の十種の地を觀じ已りて、[一]迦留波陀天（此れを象迹天と言ふ）の住する所の地に、幾種の地有りや、自ら善業を作して、樂しみの果報を受くるやを觀ずるに、彼れ聞慧を以て迦留天を見るに、十種の地有り。何等をか十と爲すや。一を行蓮華と名け、二を勝蜂と名け、三を妙聲と名け、四を香樂と名け、五を風行と名け、六を鬘喜と名け、七を普觀と名け、八を常歡喜と名け、九を愛香と名け、十を均頭と名く。是れを[二]迦留足天の十種の住處と爲す。各各業を異にして、天の中に生まる。彼れ聞慧を以て、此の衆生を見るに、持戒の善き業を以て其の心に熏じ、佛、[三]法・僧に歸して[四]南無佛を稱へ、三に自ら歸命す。此の善業を以て畢りには涅槃に至るなり。其善盡きず、是人命終りては、迦留足天に生まれ、蓮華地に行きて、五欲の樂しみを受け、欲味に愛著し、目視て眴せもせずして、身は日の光の如し。彼の地を愛樂み、一切の蓮華は白象の色の如くにして、其地を莊嚴れり。華は常に開敷きて、一一の蓮華の香氣は、普く一百由旬に熏じて、餘の一切の衆の華の香より勝れたり。種々の色の蜂は、[五]毘瑠璃の色にして、種々なる音を出し、人中の種々の伎樂の音聲は、百千分の中にて、其の一にも及ばず。何を以ての故に、天欲・天音は人の聞く能はざればなり。所以何んとなれば、人の[六]境界に非ざるが故なり。轉輪王及び欲を離れし人を除く。轉輪聖王の諸の根力大にして、能く天の欲を受け、欲を離れしの人の眼等の諸の根は、憂喜を離るるが故なり。是の故に能く畜生の蜂の音を聞くことも、猶尙、是の如し。何に況んや、天女の愛欲の歌音に於てをや。譬喩ふ可からず。天女の聲の甚だ愛樂す可きが如くに、

【一】迦留波陀(Karipada)。天の名。象跡天は其の譯なり。

【二】迦留足天。迦留波陀天のこと。(一)を見よ。

【三】法(Dharma)。一切の有形、無形、有體、無體、事物道理を問はず、凡べて主觀的、又は客觀的に存在する者を指して云ふ。

【四】南無佛(Namo buddhāya)。佛に歸命するなり。南無(Namah, Namo)は歸命、敬禮、歸禮、救我、度我と譯し、總じて衆生の佛に向って至心に歸依信順する語なり。

【五】毘瑠璃。二十二卷の(三五)を見よ。青色寶。

【六】境界(Viṣaya)。自家勢力の及ぶ境土、又は我の得たる果報の界域を境界と云ふ。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の住する所の處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、鬘持天の第十地の處の名づけて林戲と曰ふを觀ず。何等の業を以て、彼處に生るるや。彼れ見聞して知るに、若し人戒を持して、信心清淨にして、僧[一〇五]の福田を知り、衣を施んとするが爲めの故に、一果の直を施し、衣を作る價と爲さんとす。心は常に愛樂て、隨喜を生ず。是の人命終つて、林戲天に生まれ、彼の天に生まれ已つて、天の園林に於いて、自在に遊戲することは、意の至る所に隨ふなり。若し水上を行けば、陸地に遊ぶが如く、若し空を行けば亦た畏る所無し。天の衣鬘を服して、第一の樂みを受く。上の諸の地の如く、遊行することは礙へること無く。池流・泉水は妙へなる香氣を出し、多衆の天女の威德の光明は第二日の如く、天の快樂を受く。業の因緣を以て、樂の果報を得る。自ら作して他人報を受くると爲すに非らず、衆生は業を作して、自ら果報を受く。若し善業を造らば、天人の中に生まれ、若し不善を作さば、地獄・餓鬼・畜生に墮せん。善に乘つて上生て、意の恣に樂みを受け、乃至、善業は盡きず。業盡きては還へりて退ぞき、餘の善業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮せず。若し人中に生まれんには、生まれる所の國土は、多くの林樹有りて、神德は自在にして、破壞す可からず。餘業を以ての故なればなり。

【一〇一】迦尸國（Kāśi）。國の名。迦尸は本と竹の名、此國は此竹を出せば名く。今のベナレスの地方を云ふ。憍薩羅國の北隣なり。

【一〇二】憍薩羅國（Kosala）。又拘薩羅とも書き舍衞國の本名なり。

【一〇三】刹利（Kṣatriya）。印度の四姓の一。婆羅門族と共に、一般民衆の上に位する王士族なり。

【一〇四】曼陀羅（Mandhāra）。は天の五樹の一で、目出度き木なり。

【一〇五】僧（Saṃgha）。僧伽の略稱にして、和合又は衆と譯し、菩提に向つて目的行動を共にせる者の、三人又は四人以上の衆合を云ふ。

ることを充滿せり、心に憶念せらる所にて、意悅びて喜樂む。五欲の功德に心は甚しく愛樂びて、第一の樂を受く。愛境地に於いて、等しきものなき樂を受け、乃至善業を受け盡くし、此の世、他の世の業は盡きて還退く。若し餘業あれば、地獄・餓鬼・畜生に墮せずして、人中の大富なる國土に生まることを得。所謂、[一〇一]迦尸國・[一〇二]憍薩羅國にて、或ひは[一〇三]剎利の大姓、婆羅門の大姓に生まる。餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、天世間を觀ずるに、何なる業を以ての故に、堅持の地の意躁動天に生まるるや。彼れ、聞慧を以て、此の衆生を見るに、淨き信心を以て、衆僧を供養し、如來の塔を掃ひたてまつり、淸淨の信心にして、上福田を知るなり。是の人命終りて、善道の意躁動天に生まる。彼の天に生まる者は、身に骨肉なく、亦た汗垢なし。香氣はよく一百由旬に熏じ。其身の潔淨きことは猶ほし明鏡の如く、悉く一切の諸天の色像を見る。是の如く善業の果報を成就す。彼の天の住處に、四園林あり。何等をか四と爲すや。一を無垢林と名け、二を明了林と名け、三を善香林と名け、四を[一〇四]曼陀羅林と名く。彼の林中に於て、蓮華池あり、池に蓮華を生じ、珊瑚を莖と爲し、眞金を鬚と爲し、鵝鴨・鴛鴦は、衆の妙音を出し、種々の色、香あり。上妙の華は、塵垢あること無く、亦た萎落することも無し。水に衣濁なく、香乳は林中に充滿てり。衆の鳥は常に共に、蓮華池に於いて遊戲す。其の一一の樹は衆の華を常に敷き、猶ほし新に出でしが若く、萎落あること無く、甚だ愛樂す可きなり。六時に變ること無く、善業の人は、彼の林中にて諸の天女と遊ぶ。衆の寶は身を嚴り、歡娛て樂を受け、六欲の境に於て、心意は染著して、須臾の頃も厭離く心なし。愛の綱に縛せらること、魚の網に在るが如し。愛善の業を受け、乃至盡きず。業盡きては還りて退ぞく。餘の善業あれば、地獄・畜生・餓鬼に墮せずして、人身を受くるを得。大導師と作り大富、饒財にして、王に敬愛せらる。餘業を以ての故なればなり。

等覺と義譯す。(八四)を參照せよ。

【九六】 賒摩他(Samatha)。又奢摩他・舍摩他・奢摩陀・舍摩陀に作る。禪定の七名の一。止、寂靜、能滅等と譯す。心を攝して緣に住し、散亂を離るるなり。

【九七】 不易の字、宋、元、明三本に依る。

【九八】 四聖諦(Catvāri-ārya-satyāni)。四眞諦とも云ひ、四諦のことなり。苦・集・滅・道なり。苦諦(Duhkha-ārya-satya)は三界六趣の苦報なり。是れ迷の果なり。集諦(Samudaya-)は貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業なり。此二は能く三界六趣の苦報を集起すれば集諦と名く。滅諦(Nirodha-)は涅槃なり。涅槃は惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂滅なれば滅と名く。道諦(Mārga-)は八正道なり。是れ能く涅槃に通ずれば道と名く。是れ悟の因なり。始の二は流轉の因果にして、後の二は還滅の因果なり。而して此の四諦は聖者の見る所諦理なれば聖諦と云ふ。

【九九】 見諦。眞理を證悟するなり。聲聞の預流果已上菩薩の初地以上の聖者なり。

【一〇〇】 戲の字、元、明本に依る。

道の中にては、燒煮・拷掠の種々の衆苦あり是の如く五道之中の五の怖畏を觀察し已つて、來りて佛の所に向ふ。遙かに世尊を見たてまつるに、端嚴、澄淨にして、諸根は寂靜なり。意は善く寂滅にして、無上に調伏し、九六賖摩他定にして、人中の龍、調御丈夫にして、威德の光炎は、融金の聚の如く、日光に過踰え、傾動す可からざることは、須彌山の如く、甚深なることは、海の如く、樹下に端坐しますこと、眞金山の如し。是れ天中の天にておはしませり。天子は見已つて、清淨心を發せり。世尊の所に至りて、頭面にて足に禮し、一面に在つて住す。佛に白て言さく『世尊は頗に、常の處あつて、不動・不壞・不變九七・不易にてましますや』と。爾の時、世尊は、即ち天子の爲めに、九八四聖諦を說き給ふ。天子は聞き已りて、天宮に還歸り、天宮に到り已つて、五欲の樂を受け、乃至善業を受け盡くして、天より退き已り、業に隨つて流轉す。若し人中に生まるれば、未だ九九見諦ならずと雖も、常に知識の親族・眷屬に値ひ、兄弟を具足して、大富にして饒財なり。餘業を以ての故なり。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の住する所の處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、鬘持天の第八地の處、愛境界と名づくるを見る。此等の衆生は何なる業を以ての故に、彼處に生まるや。即ち聞慧を以て、衆生の說法會を作すもの有るを見る。是の人、命終つて天宮に上昇りて、愛境天に生まる。欲愛天を過ぎり、愛境界に至る。彼の天に生まれ已つて、善業の報を受く。其の諸の宮殿は皆な眞金色にして、七寶の莊嚴・眞金の欄楯あり。多くの衆の鳥有りて、心の愛樂する鳥、一切普の鳥、河に遊戲する鳥、金色の鳥、是の如き等の鳥は、其の數衆多にして、河池・流水・園林にて遊一〇〇戲す。百河を具足し、百千種の鳥は或は四欲を受け、或は五欲ありて、以て自から娛樂む。目には妙へなる色を覩て、皆な愛樂を生じ、耳には妙へなる音を聞きて、心に愛して悅樂ぶ。鼻には妙香を聞きて、內心に愛悅む。舌には美味を得て、愛心は增悅す、身には細軟を觸れて愛悅む

の供養に應ずべき意。正遍知とは正しく遍ねく知る意。

【八五】 出世間。世間の稱に對す。一切の生死の法を世間とし、涅槃の法を出世間とす。今如來は生死の法を出で給ふより出世間と云ふ。

【八六】 明行足(Vidyācarana-sampanna)。三明の行の具足せる意。

【八七】 善逝(Sugata)。善く涅槃に入れる意。

【八八】 世間解(Lakavit)。世間の一切を了解する意なり。

【八九】 無上士(Anuttara)。一切衆生中、無上の大人なる意。

【九〇】 調御丈夫(puruṣa-damyasāratti)。丈夫を方便調御する意。

【九一】 天人師(Sāstā-devamanuṣyānām)。舍多提婆魔㝹舍喃と音譯し、人間天上の導者の意。

【九二】 佛(Buddha)。覺者の意。

【九三】 世尊(Lokanātha)。十號を具足して世に尊重せらる意。

【九四】 阿羅訶(Arhat)。應供と譯す。衆生の供養を受くべき義。佛の十號の一。

【九五】 三藐三佛陀(Samyak-sam-buddha)。又、三耶三佛・三耶三佛檀と音譯す。佛の十號の第三。正偏知・等正覺・正

已つて、悉く天の樂みを忘れ、千の生を隔てしが如し。林にて觀ずるを厭ひ捨てて、更らに餘處に向ふ。復天の樂みを貪り、五欲を自ら娛しみ、色・聲・香・味・觸、種々の華池、衆鳥の妙音あつて其の中にて遊戲し、衆の天女と遊戲して樂みを受く。是の如く愛水に漂沒されて、復鏡林に至り、惡業の因緣にて、畜生の身の互に相ひ殘害することを見る。自ら其の身に畜生身を受くるを見て、種々の苦を受け、心に甚しく厭惡して、餘の天所に向ふことは、前に具さに說きしが如く、厭ひ捨てゝ去る。還つて貪愛に著し、五欲の樂みを受け、生死に往返す。復鏡林に於て、人身の時を見るに、業の集まりし所に隨つて、知識・親友・兄弟を破壞す。還りて欲樂に著し、愛色・聲・香・味觸等を受く。是の如く放逸して、天の欲樂を受け、又た鏡林に入つて、復自身の命終りて退沒きて餘道に生れるを見る。或は自身の地獄・餓鬼・畜生に墮ちて、復厭離を生ずるを見る。『此處は無常にして我は必ず退沒かん。諸の天女を離れ、諸行は無常にして、離別は久しからず、一切は動壞せん』と。是の念を作し已る。時に[八〇]護世天は告げて言く『天子よ、歡喜して愛す可し。閻浮提の人、法に順じて修行し、父母に孝養し、[八一]沙門、[八二]婆羅門に供養し、天衆を增長し、魔軍を減損す。[八三]如來・[八四]正覺・[八五]出世間・[八六]明行足・[八七]善逝・[八八]世間解・[八九]無上士・[九〇]調御大丈・[九一]天人師・[九二]佛・[九三]世尊は正法を演說し給ひ、初善・中善・後善・妙義善を語りまします。無垢・無滅の淸淨なる白法は、安隱にして寂靜なり。所謂此の色は此れ色の集なり。此の色は滅せん。此の色の滅するは證なり。鏡林の中に於いて、自ら業を見已らん』と。是の如く說くを聞き、護世に問ふて言く『如來世尊、[九四]阿羅訶・[九五]三藐三佛陀・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊は今、何處に在ますや』と。護世、告げて言く『閻浮提に在して、一切衆生の爲めに、正法を宣說し給ふなり』と。是の時、天子は護世の說くを聞きて、退沒く苦みを畏それて、閻浮提に下る。人道の中に於ては、死して大苦を爲し、畜生の中に於ては、相ひ殘害ひて苦しみ、餓鬼道の中にては、飢渴して大いに苦しみ、地獄

名く。

【七九】恒河(Gaṅgā)。四大河の一。北方ヒマラヤ連山の高みと南方デッカン高原とをつなぐ平地を貫流して北西より南東に流れて海に注ぐ。

【八〇】護世天(Lokapāla)。四天王のことにして、四天王は世界を守護する神なれば護世天と稱す。須彌山の半腹に居る。多聞天(Vaiśravaṇa)・持國(Dhṛtarāṣṭra)・增長(Virūḍhaka)・廣目(Virūpākṣa)の四天なり。

【八一】沙門(Śramaṇa)。勤息と譯す。善法を勤修して、惡法を止息すればなり。

【八二】婆羅門(Brāhmaṇa)。淨行と譯す。印度四姓の最高位にあるもの、或は他姓姓にても、淨行を勤修して嘉納せられたるものにいふ智慧のこと。

【八三】如來(Tathāgata)。如より來生する意。この以下は佛の十號なり。(五六)を見よ。

【八四】正覺。梵語、三菩提(Sambodhi)。正覺と譯す。如來の實智を正覺と名く。一切諸法を證語する眞正の覺智なり。故に成佛するを正覺を成ずと云ふ。佛の十號中普通、正覺と次の出世間を應供(Arhat)と正遍知(Sam-yaksam-buddha)とす。應供とは人天

しは功德なく、若くは孕產せずんば、莊嚴とは名づけざるなり。天の所住の處も亦復是の如く、河の莊嚴無ければ、淨妙なりとは名けず。種々なる美味、色香を具足す。是の故に、此の河を第一莊嚴と爲す。一切の世間の愛染の味の中にて水を第一と爲し、園林を莊嚴り、寶船を乘せ、人天を莊嚴り、常に受用せられ、利益する所ろ多し。是の如き功德を具足する水を、衆生は受用し、此の水中に於いて遊戲して樂みを受く。水に從つて戲れ已はりて、鏡水林に詣り天の快樂を受く。鏡林中に入つて、自から其の身を照すに、樹は淨かにして垢なく、猶ほし明鏡の如く、自から其の善惡の業の相たるを觀見る。若し善業あれば、自ら其の身の善き處に生まれるを見、若し惡業あれば、將に苦の報を受けんとして自ら其の身を見る。先に造るところの業の相、[七三]三惡處に墮ち、[七四]五道の生死の受くる所の苦樂は皆な悉く明かに見る。若し不善の業なれば、[七五]活地獄・[七六]黑繩地獄・[七七]叫喚・[七八]大叫喚等の大地獄の中に墮ちて、種々の苦を受くるを見る。前に說きし所の如く、皆な悉く具に見るに天も上樂の稱說べからざるが如く、地獄の罪報も亦復是の如く稱說べからず。鏡樹の中に於いて、自ら相を見已つて、悉く天の樂みを忘るゝこと、猶ほし隔世の如し。無量の苦を見て、復樂みを覺えざること、一兩の鹽を[七九]恒河の中に投ずるに、其の味の知ること莫きが如し。是くの如き心の苦は、大恒河の如く、其の樂みの微少なることは彼の鹽の味の如し。歌頌・伎樂の音聲、園林の遊觀、衆鳥の哀鳴ありと雖も、都て心を樂しませること無し。是の事を見已つて、捨てゝ異處に至り、心は還りて天の諸の五欲に耽著る。復た異樹に於いて、自ら其の身を見るに、種々の餓鬼道の中に墮ち、種々の苦惱、飢渴は身を燒く。是の相を見已つて、大いに怖畏を生じ、餘天に告げて曰く。『大仙よ、我れ鏡樹に於いて、大怖の相を見たり。汝は見ると爲すや、不や。』と時に天、答て言く『我れ見ざるなり。若し惡業あれば餓鬼の相を見る。若し善業あれば、惡相を見ず』と。大仙、天子に之を問ふて言く『汝は何なる相をか見るや』と。天子答へて曰く『餓鬼の相を見て、諸の苦惱を受く』と。旣に餓鬼の苦惱を受くるを見

羅・拘翅羅・拘枳羅・俱翅羅・迦翅羅・瞿師羅・鳩鳴羅・瞿枳羅・具史羅と音譯す。鳥の名にて譯して好眼鳥・好聲鳥・美音鳥・鵯鴟とす。

【七三】三惡處。三惡道のこと。地獄・餓鬼・畜生にして、惡業に依つて行くべき處なり。卽ち上品の十惡業にて地獄に趣き、中品の十惡業にて餓鬼に趣き、下品の十惡業を成ぜしものは畜生に趣くなり。

【七四】五道。有情の往來する所なれば道と云ふ。五處あり。一に地獄道、二に餓鬼道、三に畜生道、四に人道、五に天道。五趣に同じ。

【七五】活地獄。等活地獄のこと。贍部州の地下五百踰繕にありて、有情種々の苦みに遇ふとも、暫く凉風に吹かれては蘇生することは本の如し。前と等しく活るが故に等活と名く。八大地獄の第一なり。

【七六】黑繩地獄。八大地獄の第二。先づ黑繩を以て支體を秤量して後に斬鋸する故に黑繩と名く。

【七七】叫喚地獄。八大地獄の第四。衆苦に逼まられて奇異に悲號して怨叫の聲を發すれば叫喚と名く。

【七八】大叫喚地獄。八大地獄の第五。劇苦に逼られて更らに大哭聲を發すれば大叫喚と

り。

諸の樂は必らず盡き、常者あることなし。常に樂しみを得んと欲せば、應に愛欲を捨つべし。諸天の退く時は、天の樂しき處をば離れ、恩愛するものと別離するは、地獄の苦しみに過ぐ。

比丘は是れを思惟し已りて、復世間の諸の樂を觀ずるに、悉く自在なること無し。無常にして退沒き、愛の爲めに誑かせられて、退沒することを知らず。是の觀を作し已りて、天の欲を厭捨す。是の如き天中にて受くる所の樂、乃至善業は盡きず。業盡き、還りて退りぞくに、業に隨つて生を受く。或ひは地獄・餓鬼・畜生に墮し、若し人中に生まるれば、第一の樂を受け、常に怖畏なし。一切人の愛樂する所と爲る。王者は信用し、乃至命ち盡くるときに、惱亂有ること無く、餘業を以ての故に、未來に於いて涅槃に至るを得ん。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の第七地の處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、此の衆生を見るに、善業を修行し、他の親友も互に相ひ破壞し、心に怨結を懷くを見て、能く利益を爲し、諍訟を和合す。是の善業を以て、此の人命ち終つて、善道に上昇りて、欲愛天に生まる。彼の天に生まれ已りて、心の念ふ所に隨ふなり。念ふに隨つて卽ち種々の戲樂、種々の衣服、種々の莊嚴、天冠、瓔珞を得て、天の樂具を受く。一一は、種々の歌頌、伎樂の音聲を[六八]出生し。所謂、[六九]單荼の樂音、天女の歌音ありて、衆寶殿に乘りて常に歡悅を懷けり。種々の園林、山㟁、峪𡸴、河池、流泉ありて、蓮華は鬱茂し、天女は圍遶けり。金色の蓮華は香風に搖動きて妙へなる香氣を出す。所謂毘瑠璃林、[七〇]多羅林、[七一]珍頭迦林[魏に柿果と言ふ]、鳥樂林、蓮華林、衆樂音林、[七二]倶枳羅林は善業の生ずる所にして、其の中にて遊戲す。天河は清淨にして、摩尼にて莊嚴れる蓮華の浴池に、林樹は映飾り、河水の中にて、妙へなる音聲を出す。是の如きの音は、多くの衆の鳥あつて、其の鳴の哀雅なるによる。此の河池を以て、其の地を莊嚴れり。譬へば女人の如くにて衆の色を具足せり。若

【六七】各の字。宋、元、明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【六八】生の字。明本に依る。

【六九】單荼の樂音。不詳。

【七〇】多羅(Tala)。樹の名、譯して、岸樹・高竦樹と云ふ。其の高さ七八十尺あり、果は熟すれば赤く、大石榴の如しと。東印度に多く產す。

【七一】珍頭迦(Tinduka)。鎭頭迦とも書く、譯して柿と云ふ。

【七二】倶枳羅(Kokila)。又鳩那羅・鳩夷羅・拘耆那羅・拘耆

ありて、無量の天女に圍遶るゝところとなる。種々の伎樂にて歌舞し、戲笑す。多衆の天女、黄金の[六二]欄楯、寶鈴ありて莊嚴り、眞珠の[六三]羅網を以て牕牖を覆ふ、無量の寶珠を以て莊飾と爲し、無量の天女は其の間にて遊戲す。諸の天女の衆は皆愛樂を生じ、天子を瞻仰し、之を視て厭くことなし。種々の莊嚴は其の身の[六四]瓔珞たり。其の身の香は潔よくして、怡悅しく笑を含み、常に歡喜を懷き、天子を圍遶く。是の如く天女は此の妙へなる色を見て、心極めて愛樂む。耳に衆の聲を聞きて、皆悉く悅樂ぶ。所謂、金色の衆の鳥は珊瑚を嘴と爲し、山谷の中にて遊戲し、翺翔して、美しき妙音を出し、喩稱ふべからず。或は山中に在りて、衆の妙音を出し、或は谷の中に在り、或は華の中に在り、或は水中に在り、或は空中に在り、或は平地に在り、或は階道に在り、或は山の窟に在りて、美しき妙音を出す。是の如く天の耳に、常に妙なる音を聞き、常に妙なる香を聞き、所謂善妙なる香の風、無量の衆華にて比無く快樂す。天女の口中よりは妙なる香氣を出し、及び餘の種々なる愛す可き妙なる香あり、之を聞きて意を悅ばす。舌には無量の[六五]須陀の美味を得て、轉輪聖王の食する所の上味の百千倍の中にて、其の一にも及ばざるなり。身に衣服する所も、經緯の縫縷の文あることなく、細滑く柔軟にして愛樂の心を生ず。無量種の衣、之を著けて悅樂ぶ。若し憶念を生ずれば、意に隨つて卽ち得。清淨にして愛す可く、他も奪ふこと能はず。是の如く無量の六欲の境界にて、無量に快樂し、無量の蓮華の林の中にて遊戲す。無量の林樹、[六六]金摩尼林の種々の衆鳥は、其の音美妙にして、各々共に摩尼殿に於て遊戲す。是の如く河池の蓮華、流泉、浴池にて遊戲す。是の如き種々なる欲樂の果報を、彼の比丘は聞智慧を以て、是れを觀察し已りて、頌を說きて曰く。

六根に愛著すれば、境界に燒かれん。　愛の火の天を燒くことは、林を焚くより過ぐ。　樂を得て、愛樂すれば、樂しみの爲めに誑らかされて、退沒ことを念はず。　愛に欺誑かられしな

と音譯し、義譯して香神・嗅香・香陰・尋香と云ふ。天の名なり。樂神の名、行樂人の稱、又八部衆の一。酒肉を食はず、唯だ香を求めて陰身を資け、又其の陰身より香を出だせば、香神乃至尋行と云ひ、緊那羅と共に、帝釋に奉侍して伎樂を奏するを司る。緊那羅は法樂、乾闥婆は修樂なり。

【五九】受の字。宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【六〇】受の字。宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。以下同じ。

【六一】無畏施。三施の一にして、無畏を人に施すなり。持戒の人は殺害の心なし、一切衆生の畏れなきことは之れに過ぐるものなし。故に無畏施と名く。

【六二】欄楯。手摺の横木を欄と云ひ、竪木を楯と云ふ。

【六三】羅網。寶珠を連綴して網となし以て莊嚴の具となすもの。帝釋殿前の羅網を帝網と云ふ。

【六四】瓔珞（Keyūra）。枳由羅と作る。腕の上部につける輪にて玉を編みて作る。

【六五】須陀（Sudhā）。首陀・蘇陀・修陀と音譯す。天の飲食にして、甘露味なり。

【六六】摩尼（Maṇi）。珠又は寶と譯す。寶の總名なり。

を以て戲れ、或は林中に遊戲す。蜂の音にて遊戲し、互に相瞻視し、天女は園遶て遊戲し、喜笑し、共に相愛樂し、皆悉く嫉妬の苦有ること無し。其の地は勝れし樂しみありて、妙へなる香の華池を以て圍遶を爲す。所謂善香の蓮華池、不萎の蓮華池、雜[五七]優鉢羅の蓮華池、常に蓮華饒き池、是の如き無量の蓮華池は、其の地を莊嚴り、種々に快樂し、林中に遊戲して以て相娛樂む。其の林の金樹には多くの衆蜂有りて林中に遊戲す。種々の衆香・衆鳥は哀鳴し、甚だ愛樂す可く、人中の五音は十六分中の其の一にも及ばず。是の如く天子には妙色は目に盈ち、乾闥婆[五八]の音を以て其の耳を悅し、種々の香風にて鼻を悅樂する。是の如き五欲の境界には、無量の衆色ありて甚だ愛樂す可く、作すに從つて生ずるに非らず、他も奪ふ能はず、他に從つて求めず、自ら樂を成就し、天の諸の上味、妙へなる色・味・觸は、意念に隨つて生ず。自らの業に從りて起りし是の如きの一一の林樹、一一の華池、一一の園苑は、無量の天女の眷屬に圍遶れ、種々の欲樂ありて、樂しみを[五九]受けて喜悅び、善業の果を受く。多くの衆の金樹は光明を流出し、金色の衆鳥は妙へなる音聲を出し、之を聞きて意を悅ばすこと是の如く無量にして、譬へて說く可からず。是の如く無量に悅樂を成就して、乃至業を[六〇]受け盡くさんには、天中より退き、或は地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。若し善業あれば人中に生まれ、或は城邑に主となり、或は聚落に主となり、大富、自在にして、心に慳悋なし。無量の給使を以て圍遶を爲し、第一の樂みを受く。福田に於て、善業を種しを以ての故にして、乃し涅槃に至るなり。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天を觀ずるに、彼れ聞慧を以て鬘持天の第六の地處の名けて行道と曰ふを見る。何等の業を以て、彼處に生るゝや。彼れ聞慧を以て持戒の人を知るに、大火起りて衆生を焚燒くを見て、水を以て火を滅し、諸の生命を救ふ。是の人、命終りて善道に上昇りて、鬘持天に生まる。[六一]無畏施の因緣の力を以ての故に、愛らしき色・妙へなる聲あり、衆の香・味・觸

第三なり。

【五三】 兜羅綿(Tūla)。又、妬羅・堵羅・蠧羅と音譯す。譯して楊華・絮・野蠶繭・綿とす。兜羅綿・申羅毦と熟して用ふ。

【五四】 浴池、身を洗浴するに設くる池なり。印度は熱國なるを以て、處々に之を設け、澡浴の用に供せり。

【五五】 乾陀羅(Gandhāra)。健馱邏・犍陀囉・乾陀・乾陀衞・乾陀越と音譯す。持地・香行・香遍・香淨・香潔と譯す。今は山の名なるも、地の名・樹の名・色の名あり。地名としては、印度、カシュミールの西北、パンヂヤツプの北に在りし國の名。古く大乘の行はれたる形跡ありて、古來、印度とギリシヤとの交通の衝にあたり、西曆紀元前後の製作にかかる精好なる佛敎美術品の發見せらるるものあり。

【五六】 如來(Tathāgata)。「かくの如く來る」と「かくの如く去る」の二義あり、眞如に乘じて因より果に來たつて正覺を成じ、又眞如に乘じて三界に來生して化を爲すに由つて名く。佛の十號の一なり。

【五七】 優鉢羅(Utpala)。靑蓮華と譯す。

【五八】 乾闥婆(Gandharva)。又犍達婆・犍達縛・健闥婆・乾沓和・乾沓婆・彥達縛・犍陀羅

す可く、色・聲・香・味・觸等を情の恣に悅樂みて、身に病の惱み無く、飢渴あること無し。常に五欲を恣にして未だ曾て厭足ず。多く愛欲を起して心に充滿さず。若し天、憶念すれば、念ずるに隨つて皆な得。念ずるに隨つて得る所のものは、他のよく破する能はざるところにして、自在なること無礙なり。心は常に歡喜して、念ずるに隨つて能く至り、身を化するに、心に隨ひて大小は意に任せ、廣大、輭軟なり。一眴目の頃に能く行きて、百千由旬に至りて少しも疲極ること無く、風の空を行くが如く、障礙する所無し。天も亦是の如く疲極るゝこと無し。天身の威德は、心に從ひて生じ、輕淨にして無垢なり。一切の行く處は、意光色の如し。天子・天女は歡喜して園林の中にて遊戲す。天子・天女は五欲を自ら娛しみ、意悅しく樂しみを受け、各々相隨ひて共に相娛樂す。諸地の住處、[五五]乾陀羅山の園林の中に於て縱に逸かれ遊戲し、欲樂に耽著して退沒きて無常の苦を念はず。放逸にして自ら恣にし、癡愛に誑され、遊戲し、放逸にして乃至樂を愛せんには、天に生るる因集りし業盡き、還りて地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。若し善業あれば人中に生まれて、或は城主を守り、或は國土を護りて、多饒の人衆の常に歡喜する處にして、病なくして端正なり、餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の第五の地處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、鬘持天に地ありて一切喜と名くるを見る。衆生何なる業によりて彼處に生るゝや。彼れ聞慧を以て持戒の人を見るに、心に正信有つて、華を以て諸佛・[五六]如來を供養し、自らの力にて財を致し、華を買ひて供養す。是の人、命終りて善道に生れ、一切歡喜行天に生る。彼の天に生れ已りて、四種の樂しみを受く。何等をか四と爲すや。一者は無怨、二者は念ずるに隨つて能く行く、三者は餘天も其の威德に勝る能はず、四者は天女は餘天を念ぜず。五種の伎樂にて歌舞し、互に相娛樂し、種々に遊戲す。或は水を以て戲れ、花池に遊戲し、或は華を以て戲むれ、或は果を以て戲れ、或に香を以て戲れ、或は鳥

句を有てる讚稱の意の文體を云ふ。既說本文の意に應じて、重ねて其の意を述ぶる者を云ふ。

【四六】彼の字は、宮內省圖書寮本に依る。

【四七】欲（Rajas）。刺者に作る。希求の義にして、塵境を希求するなり。

【四八】癡（Moha）。慕何と音譯す。無明痴とも云ふ。心性闇昧にして事理に迷ふこと。一切の煩惱は之に由つて起るなり。三毒の一なり。

【四九】佛（Buddha）。佛陀又は浮圖の略稱なり。覺者の義一切の事物の眞理を自ら覺知し、他に覺らせ、此の自他の覺行の窮滿せるに由つてこの名あり。

【五〇】善逝（Sugata）。諸佛の十號の第五にして、如實に涅槃の彼岸に去つて、復び生死海に還退せざる謂なり。

【五一】福田。田は生長を以て義となす、應さに供養すべき者に供養すれば、能く諸の福報を受く。猶ほし農夫の田畝に播種して秋收の利ある如し、故に福田と名く。

※原本辦の字に作る。今宋、元、明三本及び宮本に依れり。

【五二】生酥、生乳より取りしものを酪と稱し、酪より取りしものを生酥と云ふ。五味の

りて、常に應に淨戒を修むべし。戒は能く救護を爲し、これと等しき者有ること無けん。

是の如く比丘は、持戒の實の功德を思惟し已り、常に持戒を讃へ、破戒を毀呰る。彼の天處にて五欲の樂しみを受くるが如く、持戒の業盡きては、退きて人中に生まれんに、神德比ひ無く、第一端正にして、生れし所の國土には多くの樹林有り、餘業を以ての故なればなり。

復次に比丘、業の果報を知り、鬘持天の住する所の處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、鬘持天に第四處あつて、天の快樂を受くることを知る。名けて白功德行と曰ふなり。何等の業を以て、此の處に生るゝや。若し人、少智なれども佛の行を見るの時、著くる所の鬘を以て、佛の上に散じ、或は華鬘を以て佛塔を供養し、善心を以て[五一]福田の功德を思ふ。功德を思ふ故に、是の人、命終りて、善道の白功德天に生る。彼の天に生れ已りて、功德の*辯鬘にて其の身を莊嚴る。毘瑠璃寶を以て其の地と爲し、七寶にて莊嚴れり。多くの衆鳥あり、身は七寶の色にて、妙なる音聲を出す。光明は普く照し、百の功德の光りにて莊嚴りて妙好なり。衆樹・叢林は無量に嚴飾り。善宿樹、兩崖の生樹、香熏の樹等を以て莊嚴と爲す。心に念ずる所に隨つて、香氣は廣く、狹く、諸の由旬を滿たし、華果は常に茂げり、及び餘の莊嚴は其の地を莊嚴れり。諸天の妓女は、頌を歌ひ、舞戲して歡娛し樂しみを受く。一一の方面の遊戲の處にて娛樂し、悅樂し、笑舞し、喜戲し、圍遶て恭敬す。受くる所の快樂は稱說べからず。其の地は柔輭にして猶ほし[五二]生酥の若く、天人の行く時は足の上下するに隨ひ、[五三]兜羅綿の如し。一一の住處は足の躡むに隨つて平らかなることは亦前に說くが如し。一一の寶樹は妙なる色の光を出し、其の光は日の如くにして、光明を悅樂む。妙なる色の金樹の華・葉は常に鮮にして、萎落あること無し。善業の生ずる所にして、喩へて說く可からず。戒力は自在にして、善業の得る所は印の、物を印するが如し。是の如く天子は園林、蓮華の[五四]浴池にて遊戲す。自らの業の報を受くるに上・中・下有りて、天の戲樂を受く。自らの業の身相は、光明ありて愛

ば欲と名く。又、是れは眞理を汚すものなれば塵と名く。

【四〇】　涅槃(Nirvāṇa)。舊譯には滅・滅度・寂滅・無爲・解脫と云ひ、新譯には般涅槃(Parinirvāṇ)卽ち圓寂と云ふ。何れも生死界の因果を滅却して、空寂安穩なる義なり。但し、大・小乘に依つて其の內容を異にす。

【四一】　五根。眼・耳・鼻・舌・身根を云ふ。根(Indriya)は能生・增長の義にして、草木の根の增長の力を有して、能く幹枝を生ずるが如し。强き力ありて能く眼識を生ずる故に眼根と名く。

【四二】　華鬘(Kusumamālā)。印度の風俗に、男女共に花を多く結び貫きて、首、又は身を飾る物。又佛前を莊嚴する具にも用ふ。

【四三】　七寶。經論に依つて少異あるも左の如し。金(Suvarṇa)・銀(Rūpya)・瑠璃(Vaiḍūrya)・玻璃(水精)(Sphaṭika)・硨磲(Musāra-galva)・赤眞珠(Rohita-mukta)・碼碯(Aśmagarbha)。

【四四】　伽他(Gāthā)。伽陀と作り、諷頌又は孤起頌と譯す。長行を用ひず、偈頌のみの經典なり。

【四五】　頌(Geya)。且には應頌又は重頌と譯す。一定の字

持して、是の如く戒を修むる者は、現に樂しみ、涅槃を得て、永く不死の處を得ん。　無始より生死の來た、欲[四七]癡[四八]等の怖畏に、戒を大光明と爲す。　是の故に常に應に戒を讃歎すべし。　戒は清淨池の如く、王、賊及び水火も、戒の財を劫ること能はざらん。　是の故に常に戒を修め、破戒を遠離すべし。　若し人、持戒を樂めば、則ち涅槃に至るを得ん。　是持戒の人を貴しと爲す、應に持戒に親しみ近づくべし。　戒は日月光の如く、破戒は鄙穢なる可し。　無垢は曠野を離れ、憂を離れ、熱惱なし。　戒は佛[四九]の讃へたまへる所爲り、能く涅槃の城に至らん。　若し人、具足して滿つれば、淨戒は常に增長かん。　是の人を戒は守護して、臨終に怖畏なけん。　戒は初めと後との善と爲り、一切の樂行を轉ず。　持戒の者を貴しと爲し、破戒は畜生の如し。　若人、破戒なれば、畜生道を行じ、作すと作さざるとを識らず。　是の故に常に戒を修むべし。　若し人、禁戒を持せば、戒衣の覆ふ所と爲らん。　若し戒を持せざるもの有れば、裸形にして畜生の如からん。　持戒の者の天に之は、遊戯の處に至るが如し。　親しき人を憶念する如く、持戒すれば此に來り至らん。　淨戒にして正行を持せば、善業皆和合せん。　此の人、善業を修めなば、則ち天中に生まれん。　若し人、樂を求めんと欲しなば、常に應に淨戒を持すべし。　是の人、能く成就し、增長して、戒を充滿せん。　現在、及び未來にをいて、戒を第一の伴と爲す。　功德は常に隨逐ふ、是の故に應に戒を修むべし。　曠野の飢渴の怖れも、戒は能く救護を爲す。　持戒の行を勝れりと爲す、隨つて未來世に至らん。　若し持戒の人有りて、戒の果を知ること是の如くんば、彼れ則ち利刀を以て自ら其の身の首を斷つとも、衆の樂みは皆和集せんことは喩を以て說く可からず。　持戒の果の淸淨なることは、善逝[五〇]も是の如く說き給へるなり。　初善及び中善、後善も亦是の如し。　戒の果は甚だ廣大にして、樂しみに從つて樂しみの報を得ん。　此の功德を知り已

本及び宮内省圖書寮本に依る。

【三一】聞慧。三慧の一。教法を聞くに由つて生ずる慧解を云ふ。

【三二】拍の字。宋、元、明三本に依る。寸時のことなり。

【三三】三歸。佛・法・僧に歸命すること。

【三四】轉輪王（cakravartirāja）。又、轉輪聖王、轉輪聖帝、輪王とも云ふ。身に三十二相を具し、卽位のときに天より金・銀・銅・鐵等、種々の輪寶を感得し、其れを轉じて四方を降伏すと云はれ、人間世界の理想的聖帝とせらる。

【三五】毘琉璃（Vaidurya）。吠琉璃・瑠璃とも云ふ。青色の寶石にして佛典中の七寶の一なり。

【三六】金剛（Vajra）。今の金剛石に當り、佛典中にては、堅利・至寶・戰具中の最勝の三義に用ひらる。

【三七】天尼羅珠。尼羅（nila）は青色なり。天の青色の寶珠なり。

【三八】車渠（Musāragalva）。牟娑洛、牟娑洛揭婆牟娑羅と音譯し、馬腦又は車渠と云ふ、紺色の寶と云ひ、紫色寶と云ふ。

【三九】五欲。色聲香味觸の五境を云ふ。卽ち眼等の五根の感官に對するものにして、是れは人の欲心を起すものなれ

を以て、安隱の行を得。是の人、命終り、天上に生れては、果命天に生まれん。彼の天に生れ已りては、無量の天女の色の妙なること無比なり。眷屬を具足し、天の快樂を受け、園林の華果は、眞金を樹と爲し、珊瑚を枝と爲す、諸の寶は交絡り、衆の寶鈴は懸りて、妙なる音聲を出せり。林中に遊戲して、五欲の樂を受く。六種の林有り。何等をか六となすや。一を一切義林と名け、二を四園林と名け、三を柔軟林と名け、四を遍樂林と名け、五を蜂樂林と名け、六を金影林と名く。此の園林の中に、常に天女有つて、遊戲して樂を受く。蓮華の浴池を以て莊嚴を爲し、林中にて遊戲せり。流泉・浴池は、妙なる音聲を出し、樹は光曜を出せり。衆の鳥は哀鳴し、飲食は豐足せり。[四三]七寶をもつて、莊嚴れる種々の山峯ありて、遊戲して、樂しみを受く。其の須彌山に、五の山峯あり、何等をか五と爲すや、一を光明莊嚴と名け、二を閻浮と名け、三を白水と名け、四を笑莊嚴と名け、五を常遊戲と名く。此の諸の天衆の遊戲することは此の如くにて、衆山峯の間に、善業の報を受く。無量百千の諸の天女衆を以て圍遶を爲し、共に相ひ娛樂む。[四四]伽他の[四五]頌に曰はく。

少因を以てして天に生れんに、一切の樂みを受くるを得ん。是の故に、應に惡を捨て、常に善業を行ひ、思心に布施を行じ、及び淨戒を護持すべし。戒は能く、天上に生まれ、五欲の功德を受け(しめ)ん。父母の利益、兄弟及び親友に非らざるも、善く淨戒を護持すれば、樂に從つて樂處を得ん。戒を持するは二世の利にして、或は道を持すること最勝ならんも、持戒の人を上と爲す。樂に從つて、樂處を得ん。持戒して正行を施すは、是れを淨行の人と名く。此れ自らの業深きを以て、[四六]彼の人は天處に生まるるなり。戒は無盡藏と爲し、戒の樂みは無上爲り。丈夫勝れし戒を持すれば、常に安樂を受けん。持戒して智慧ある人は、常に三種の樂しみを得ん。讃嘆と及び財利と、後に天上に生まるるなり。若人能く戒を

踰繕那とあり。里程を計る稱にして、或は三十里と云ふ。唐土の里法にては六町を一里とす。)他說には四哩・五哩・九哩又は十八哩とも云はる。

【三三】處(Āyatana)。根と境、卽ち己身と外界とは心の作用の生ずる處なれば處と云ふ。

【三四】龕は塔の下の室を云ふ。

【三五】閻浮提(Jambudvipa)、又は贍部洲とも云ふ。須彌山の南方に當れる大洲にして、卽ち吾人の住む地球の事なり。此の洲に廣大なる閻浮樹あるに由つて名くと云ふ。

【三六】瞿陀尼(Godāniya)。舊譯には瞿耶尼・瞿伽尼。新譯には瞿陀尼・瞿陀尼耶。須彌山の西方に在る大洲の名。義譯して牛貨と云ふ。此の洲は牛を以て物を買ふことは我々が錢を用ふるが如しと。

【三七】弗婆提(Pūrvavideha)。新譯には毘提訶(Videha)と云ふ。須彌山の東にある大洲の名なり。

【三八】住の字は明本に依る。

【三九】欝單越(Uttaravatti)。卽ち欝多羅究留(Uttarakuru)にして、又は北拘盧洲と云ひ、須彌山の北方に在る大洲の名なり。

【三〇】彼の字。宋、元、明三

ての故に、彼處に生るゝや。即ち聞慧を以て此の衆生を見るに、河の津濟に於て、橋、船を造立し、或は善心を以て、船を以て持戒の人を渡す。持戒の人を以ての故に、兼ねて餘人を渡す、衆の惡を作さず。是の人、命終りては、善道に生まれ、峻崖處に住せん。善業の故に、彼の天に生まれ已りて種々の樂しみを受け、多衆の華池は圍遶りを莊嚴り、清淨、涼冷くして、香、色は妙好にして、泥濁有ること無く、常に戯笑有つて、歌舞して遊戯せり。多衆の天女を以て圍遶を爲し、衆の寶にして、身を嚴り諸の天女と園林にて遊戯し、衆寶の浴地にて娛樂して樂しみを受く。六の浴地有り、何等をか六と爲すや。一を流樂と名け、二を樂見と名け、三を一切喜と名け、四を雲鬘と名け、五を池鬘と名け、六を如意と名く。復四林有り、之を見るに愛す可く、妙れたる香風を出し、衆の華にて莊嚴れり。何等をか四と爲すや。一を香風林と名け、二を雜林と名け、三を蜂遊戯と名け、四を悅樂と名けり。天の諸の玉女は彼の林中に於て、五欲の樂を受くるに、心に念ふ所に隨ふ。園林に遊戯し、行ずる所は礙ること無く、遮止る所無し。衆の妙なる寶を以て、其の身を莊嚴り、樂を受けて增長することは山澮の水の如く、五欲にて自ら娛しみ、[四一]五根の愛河の波に蕩け縱に逸れ、諸の林樹・浴地・種々の衆寶にて莊嚴れる金山に於て遊戯し、諸の天女と山峯にて遊戯す。多衆の天女は[四二]華鬘にて自ら嚴り、端正無比なり。種々の美味之を食して充滿せり。斯かる樂報を受けて、心意悅樂むことは稱說く可からず。善業の因緣、乃し至り、業盡く。此れに從つて、命終り人中に生れては賢直にして巨富あり、王の典藏と爲ん。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知り、鬘持天の所住む處を觀ずるに、彼れ聞慧を以て、鬘持天の第三の住處を見る。名けて果命と曰ふ。何なる善業を以て、此の天中に生まるるや。即ち聞慧を以て知るに、此の衆生飢饉の世に於て、淨戒を守持り、身・口・意を淨め、利を爲し、諸の衆生を安樂にせしめんが故に、果樹を種植ゑ、行く者をして之を食せしめて、安樂を充滿せしめたり。是の因緣

なり。

【一六】 印。決定の表示標識を云ふ。

【一七】 因緣(Nidāna)。尼陀那と記す。一物の生ずるに親しく強く力を與ふる者を因とし疎く弱く力を添ふる者を緣とす。此の因と緣と和合して物を生ず。佛教教理は此の因緣を中心とするを以て頗る複雜なる意味を有す。

【一八】 無記。三性の一。事物の性體の善とも惡とも記すべからざるもの。又善果を感ずとも、惡果を感ずとも記すべからざるものを云ふ。

【一九】 衆生(Sattva)。新譯に有情と云ふ。衆多の者と共に生ずるに由り、衆多の法の假に和合して生ずるに由り、又衆多の生死を經るに由るなど種々の義ありて衆生

【二〇】 人世間。變遷・破壞するを世と云ひ、間は中の義なれば世間とは世の中に在る事物を指す。又、間を隔の義として、世の事物の個々に間隔して限界あるに由り、世界を指す。人世間とは人間界のことなり。

【二一】 彼の字。宋、元、明三本及び宮内省圖書寮本に依る。

【二二】 由旬(Yojana)。俞旬・揄旬・由延・踰闍那。新譯には

は、彼の人、命終つて、須彌埵の白摩尼天に生まる。其の淨き心を以て[三三]三歸を受くるが故に、威德を身に獲て、光明にて莊嚴れり。樂を受くること自在にして、受くる所の快樂の十六分中にて、[三四]轉輪王の樂は、其の一にも及ばざるなり。其の地に、河有りて、名けて欲流と曰ふ。眞珠を沙と爲し、以て其の底に布く。何なる力を以ての故となれば、峻崖の二天の心に憶念する所なればなり。河よりして種々の美しき飲を出す。復た珠の河有り、名けて眞珠と曰ふ。珊瑚の寶の流れあり。天衆、玉女、種々の衆寶は河に從つて流る。所謂、[三五]毘琉璃・[三六]碎金剛珠・[三七]天尼羅珠・天大青珠・天[三八]車渠寶・及び餘の種々の衆寶にて莊嚴りて、念ずるに隨つて卽ち得るなり。復香河有りて、名けて、香水と曰ふ。鵝鴨、鴛鴦を以て莊嚴と爲す。其の河の兩岸には多く金の樹有りて、以て園林を爲せり。種々なる衆の鳥あり。天の香氣を聞きて、欲心を發して喜ぶ。欲樂を受け已りて、百倍に悅樂す。及び餘の[三九]五欲にて、共に相娛樂す。多くの衆の樹有りて、赤き枝には青き葉、青き枝には赤き葉あり。復衆の樹有り、其の葉は雜色にて、青・黃・綠色の雜色なり。衆の蜂を以て、莊嚴と爲し、心は常に悅樂みて、妙なる音聲を出せり。善業の報を受け、遊戲して樂しみを受く。種々の衆寶は山峯を莊嚴り、或は平かなる頂きにて嚴り、五の山峯あり。何等をか五と爲すや。一を雜種と名け、二を種々流泉と名け、三を衆鳥音と名け、四を香熏と名け、五を常果と名く。是の如き等の山は、七寶にて莊嚴る所なり。此の諸の地の天、遊戲して喜樂み意の恣に自ら娛しむ。天衆、玉女を以て園遶を爲して、歌舞し戲笑す。五欲は情の恣にして、心意は悅樂めり。三歸の功德にて、乃至、報を盡くして、未來世に於ては、[四〇]涅槃に至ることを得ん。若し人中に生まるれば財物を具足して常に歡喜を得、第一の樂を受け、好んで伎樂を習ひ、財物は具足せん。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、天世間を觀じ、鬘持天の第二の住處を見るに、名けて峻崖と曰ふ。何なる業を以

れば名く。五に樂變化天。五欲の境に於いて自ら變化して樂む故に名く。六に他化自在天。他をして自在に五欲の境を變化せしむれば名く。此の中四王天は須彌山の半腹にあり。忉利天は須彌山の頂上に在ればこれを地居天と名づけ、兜率天已上は空中に住在すれば空居天と名く。

【二】命（Jīvita）。壽なり。過去の業に由つて、非色非心なる一實體あつて、一生の間心身を活動せしむと考ふる者。

【三】色（Rūpa）。顯色（Varṇa rūpa）と形色（Saṃsthāna rūpa）との二義あるが、要するに物質はいろと形とを其の本質的特徵とするが故に、廣く物質一般を指して色と云ふ。

【三】須彌山（Sumeru）。蘇迷盧とも書く。此の山は金・銀・瑠璃・頗梨の四色を以て各四方の色とするに依つて妙と云ひ、又世界の最高峯なるに由り高と云ひ、譯して妙高山とす。此の山を中心として、四方に謂はゆる四大洲あり。又山頂は忉利天、山腹は四王天の住處にして、以下人間等の五趣の住む處となす。是れ印度古來の地球の世界觀なり。

【四】鬘持天。持鬘天とも云ふ。華鬘を持する天衆なり。

【五】埵。かたいつち。堅土

つて樂を受く。無量種の色ありて、娛樂し受樂み、老苦有ること無し。諸の業網の一六印之を印し、一七因緣に從つて生じ、因無くして生ずるには非ざるなり。亦斷滅すること非く、作者有るにも非ず。是の故に丈夫は常に當に自ら勉めて諸の善業を修むべし。若し自身を愛せば無始よりこのかた流轉し、善・不善・一八無記の業の網は諸の一九衆生を縛り、生死に流轉し、猶ほし水の輪の如く、地獄・餓鬼・畜生に流轉す。二〇人世間に於て二一彼の衆を觀ずる如く、若し善業を行へば天中に生まる。須彌山に依つて六萬山有りて須彌山を遶る。種々の衆寶の焰光は明曜として諸の山峯を照す。蓮華の浴地、流泉は清淨にして其の山を莊嚴れり。山の高さは八萬四千二二由旬にして四寶の成ずる所なり。善業の諸天は共に圍遶りて無量なる光焰を以て照明を爲して甚だ愛樂す可し。

是の如く比丘、初天に於て鬘持天の衆を觀ず。其の鬘持天に十住二三處有り。何等を十と爲すや。一を白摩尼と名け、二を峻崖と名け、三を果命と名け、四を白功德行と名け、五を常歡喜と名け、六を行道と名け、七を愛欲と名け、八を愛境と名け、九を意動と名け、十を遊戲林と名く。是れを十處と爲し、各々住を異にするなり。須彌二四龕は二五閻浮提に向ひ、二つの天の住有り、一を白摩尼と名け、二を峻崖と名く。閻浮提に向くは意の至る所に隨ふ。二六瞿陀尼に向つて二つの天の住有り、一を果命と名け、二を白功德行と名く。二七弗婆提に向つて二つの天の二八住有り、一を常歡喜と名け、二を行道と名く。二九鬱單越に向つて四つの天の住有り、一を愛欲と名け、二を愛境界と名け、三を意動と名け、四を遊戲林と名く。是の諸天等の一一の住處、廣さは千由旬にして大海上に住す。彼の天の壽命は閻浮提中の五十歲を一日一夜とし、是の如き壽命五百歲に滿つ。亦中天も有るなり。

三〇復次に、比丘、業の果報を知り、彼地の天を觀じ、遊戲して樂を受く、何等の業を作して、彼の地に生まるや。彼れ三一聞慧を以て須彌山の側に住する所の諸天を觀ずるに、若し人、善を修むるに、清淨心を以てし、佛に歸し、法に歸し、比丘僧に歸するに、十三二拍手の頃、餘心を生ぜずん

自然・清淨・自在・最勝の義にして、音譯して提婆・素羅とす。人間以上の勝妙なる果報を受くる所にして、其の一分は須彌山の中に在り、其の一分は遠く蒼空に在り、總じて之を天趣と名づけて六趣の一とす。又其の住處に拘らず一切の鬼神を指して天と名く。鬼子母神を鬼子母天と云ふ如し。又一切の好妙のものを天と名く。人中の好華を天華と言ふが如し。

【八】生滅。因緣の和合に依つて、未有の法の有となるを生と云ひ、因緣の離散に依つて已にありし法の無となるを滅と云ふ。生あるもの必らず滅あり、有爲法是れなり。滅あるもの必らずしも生あらず無爲法是れなり。

【九】戒(Sila)。尸羅。身心の過を防禁することなり。

【一〇】六欲天。欲界に六重の天あり、是れを六欲天と云ふ。一に四王天。持國・廣目・增長・多聞の四天あれば四王天と名く。二に忉利天。三十三天と譯す。帝釋天を中央とし四方に各八天あれば天數に從つて三十三天と名づく。三に夜摩天。時分と譯す。彼の天中時々に快哉を唱ふれば名く。四に兜率天。喜足と譯す。五欲の樂に於いて喜足の心を生ず

正法念處經

元魏婆羅門瞿曇般若流支譯

卷の第二十二

觀天品第六之一

四王天初[1]

復次に、比丘[2]、業[3]の果報を知り已りて、地獄[4]・餓鬼[5]・畜生[6]の不善の業報を觀ずるに、實の如く細かに觀察し已れり。

次第に當に善業の果報を觀ずべし。所以は何となれば、一切衆生は樂果を樂しみ、苦報を厭捨すればなり。諸の樂しみ集まるが故に、之を名けて天[7]と爲す。

復微細に業を觀ずるに衆の善業を集め、生滅[8]の身を受け、愛の果報を得たり。七種の戒[9]を以て天中に生まる。何等をか七と爲すや。口業に四種、身業に三有り。其れに親近き、多く修習するを以ての故に六欲天[10]に生まる。六欲天の中には上・中・下の道有りて、命[11]も亦是の如く中有り、下有り、食も亦是の如く中有り下有り、色[12]も亦是の如く中有り下有り、力も亦是の如く上・中・下有り、樂報も亦爾かく中有り下有り。

六欲天の中、初の二天は須彌山[13]に依り、四天は空に依りて、猶ほ雲の聚りの如し。彼の初天の衆は四天王天に屬す。初めの鬘持天[14]は須彌山の四埵[15]を遶つて住す。是の鬘持天に十の住處有り。一一の面に於て業を異にし、名を異にす。是の如き無量の業によりて鬘持天に生まる。業に依

【一】宋、元、明三本には四天王初の四字無し。

【二】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す。如來に法を乞ひ、俗人に食を乞ふ謂なり。男子出家して二百五十の具足戒を受けたる者の稱なり。

【三】業(Karma)。羯磨とも譯す。身口意の善惡及び非善惡の行動を謂ふ。其の善性、惡性のものは必らず苦樂の果を感ずるより之れを業因と云ふ。其の過去に在るを宿業と云ひ、現在なるを現業と云ふ。

【四】地獄(Naraka)(Niraya)。那落迦、泥犂など書き、不樂・可厭・苦具・苦器・無有など譯す。地獄は地下に在る牢獄なりとの意で義譯なり。

【五】餓鬼(Preta)。薜荔哆。常に飢渇の苦を受くる一種の鬼なり。此の鬼類の中には、藥叉羅刹の大威德を有するもあれば新譯には鬼と云て餓と云はず。然るに舊譯の經論に多く餓鬼と云ふは鬼類の中餓鬼最も多きが故なり。

【六】畜生(Tiryagyoni)。底栗車。新譯には傍生とす。畜養する生類の故に畜生と名づく。一切の世人は或ひは噉食の爲めに、或は驅使の爲に此の生を畜養す。傍生とは傍行する生類なるを云ふ。

【七】天(Deva Sura)。光明・

を一切虚空の中に遍滿して坐禪して住し給ふと見る」(第三十六卷の終)と說くが如き殆んど大乘の法身佛に近いものである。(尙ほ第三十一卷第三偈參照)。

一、天上界の特色は云ふまでもなく、歡樂である。それは貪欲の所產であり、放逸の相(第三十一卷の初偈參照)であるが天の榮華と久しからず、やがては輪廻の暗に入らねばならぬ。否な光り輝く天界そのものにいつも暗黑が孕まれてゐる。第三十一卷の中程に六道輪廻の相を描き、五衰の悲みをあげ、酒と放逸と女の不信をとき、第三十二卷の終りには天界退沒の惡相を深刻に描いてゐる。

卽ち本經のテーマとする所は存在に卽する愛欲相を描いて、それに內容として盛らるる變異と苦惱相を描き出すことである。一言にして云へば、苦樂と迷悟の交錯相の描寫である。第三十三卷より第三十四卷に亘りて法數二十をあげ、一々ねばりのある濕ひのある筆で、之を說示してゐるのも一つの特色とすべきであらう。

昭和六年正月上旬

譯者　山邊習學識

正法念處經國譯に際して（略解題）

一、解題を造る便利上、「正法念處經」七十卷を四冊に纏めた中、第二、第三、第四、第一の順序にて刊行することにした。第一冊は一卷より二十一卷までを含み、地獄、餓鬼、畜生の三道を描き、天帝釋と阿修羅との戰闘記事に終りを告げてゐるが、本經の特色を最も發揮してゐる部分である。第二冊は即ち本書で、第二十二卷から第三十九卷を含み四王天（第二十卷より第二十四卷）と三十三天（第二十五卷より第三十五卷）と夜摩天（第三十六卷より第三十九卷）を廣說し、第三冊は第四十卷より第五十卷を含み、續いて夜摩天を廣說し、第四冊は第五十六卷より終り第七十卷までにて夜摩天に加へて身念處を詳述してゐる。

一、本經の思想的立場は全く小乘教であるが、その文體が豐麗と雄渾を極めてゐるので、その表現の生彩潑剌なる、描寫の深刻なる、全體的に、その表現樣式に於いて小乘の「華嚴經」と云つても差支へはないであらう。之が爲めに針の袋を脫する如く、時には小乘の殼を破つて大乘の壘を摩せんとするの觀がある。

今少しく本卷に表はれたる注意すべき數項をあぐれば、第二十八卷の終りに近い處に飢に迫られてゐる惡獸が、その子を啖まんとするのを見て、持戒の人は「自ら其身を捨て、この惡獸に與ふ」といふは、あの有名なる「金光明經」第二十六、捨身品の餓虎に身を與へた王子の菩薩行その儘であり、第三十六卷の長偈の終りの文「益と不益と異らず、縛と脫と亦是なり。放逸と不放逸と、功德と過と平等なり。彼の癡心に由るが故に、天をして知る所なからしむ」の如き「法第一」の內容を說いたものであり、識らず〳〵般若の思想を盛つてゐる。佛身に就いても、「今この林を觀るに、迦迦村陀如來の無等の色身を見るが如し。一切智慧大悲如來の住處なり。」（第三十卷の初の長偈の次の文）といひ、又は「或は如來を一切の禪處に見、或は如來

目次

（本丁）　（通頁）

經集部 九

山邊習學譯

39

國譯一切經

大東出版社藏版